

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

鳥取県鳥取市

本高弓ノ木遺跡(5区) I

第1分冊【遺構調査(本文)編】

2013

鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

鳥取県鳥取市

本高弓ノ木遺跡(5区) I

第1分冊【遺構調査(本文)編】

2013

鳥取県教育委員会



1 調査地遠景（北から）



2 発掘調査着手前の調査地（北から）

巻頭図版 2



1 5区 俯瞰 (南から)



2 第 3-1-2a 層下面 2 溝北半の全景 (南から)



1 第3-1-2a層下面 2溝と4落ち込み（南から）



2 第3-1-2a層下面 2溝 木製構造物1（南西から）

巻頭図版 4



1 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ2～4木製構造物（南西から）



2 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ4板敷遺構と台形枠（南西から）



1 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ4板敷遺構下部の被覆材（南西から）



2 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ4板敷遺構下部被覆材（南西から）

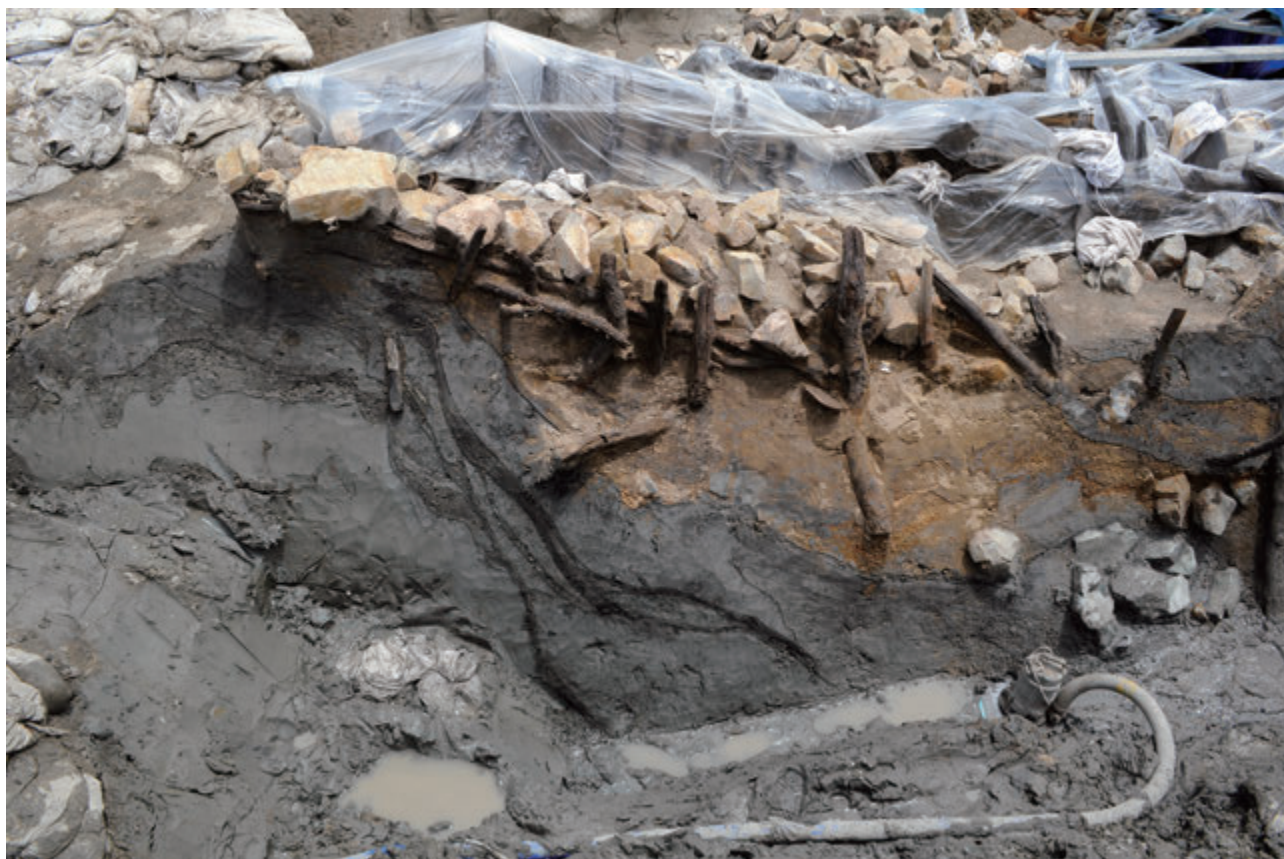
巻頭図版 6



1 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ6構築単位G前面の被覆材（南から）



2 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ6北側土嚢積断面（南東から）



1 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ7構築単位H北端（西から）



2 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ7南側土嚢積最下部 土嚢F（南東から）



1 第 3-1-2a 層下面 4 落ち込み土囊 F 結び目 (拡大)



2 第 3-1-2a 層下面 2 溝・4 落ち込みから出土した土器



1 第3-1-3a層下面 調査区北半 700盛土と溝群



2 第3-1-3a層下面 700盛土と701溝 (南西から)



1 第4a層下面710溝内に集積された木材の出土状況（西から）



2 第4a層下面710溝内949構造物に伴う杭列1（南から）

序

国土交通省が整備を進めている山陰自動車道は、鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする延長約 380km の高規格道路です。現在、鳥取県東部では、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長 19.3km の区間で、一般国道 9 号（鳥取西道路）改築工事が行われています。

さて、その一環として、鳥取県教育委員会では、この工事計画地内に所在する遺跡の発掘調査を平成 20 年度から実施しており、平成 21 年度からは財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査、出土遺物等の整理作業、報告書の作成を委託しています。

このうち平成 21・22 年度に発掘調査を実施した本高弓ノ木遺跡では、膨大な遺物が出土し、古墳時代前期の水利施設や、弥生時代成立期の人々が木材の集積等に利用した河川跡がみつかりました。本書はその調査の記録と成果をまとめたものです。ここに記録された調査成果が今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

さらに、発掘調査および本書の作成に当たっては、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、地元関係者の方々から一方ならぬ御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

鳥取県教育委員会

教育長 横 濱 純 一

例 言

- 1 一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ『本高弓ノ木遺跡（5区）Ⅰ』（第1～3分冊）は、一般国道9号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成21年度と22年度に実施した本高弓ノ木遺跡5区の発掘調査報告書である。第1分冊（第Ⅰ～Ⅳ章を収録）が遺構調査（本文）編、第2分冊が遺構調査（図版）編、第3分冊（第Ⅴ～Ⅷ章を収録）が遺物（土器・石器・鉄器）・分析編である。遺物のうち、木製品については、『本高弓ノ木遺跡（5区）Ⅱ 遺物（木製品）編』として別途、報告を行う。
- 2 本高遺跡は鳥取市本高97、109、110-2、112-2、113-2、218-1、218-2、219-1～3、220-1・2、221-1・2、222-1～5、224-1・2、225-1～3に所在する。5区の調査面積は7,350㎡で、発掘調査の期間は平成21年度が平成21年5月1日～平成22年3月5日、平成22年度が平成22年4月26日～平成23年2月24日である。
- 3 出土品などの注記に使用した略号は「本ユミ09」「本ユミ10」である。
- 4 発掘調査の監理は財団法人鳥取県教育文化財団に委託し、同財団調査室美和調査事務所調査第1担当の濱田竜彦、岸本浩忠、中尾智行、下江健太、山梨千晶が発掘調査を監理した。
- 5 発掘調査に際し、国際文化財株式会社の支援を受けた。平成21年度の現場代理人は竹内眞哉、飯田英樹、支援調査員は片山博道、鈴木恵介、石松直、栗木寧、日柴喜勝重、大山裕喜、平成22年度の現場代理人は飯田秀樹、支援調査員は安村健、脇本博康、江藤敦、青島邦夫である。
- 6 遺跡での掘削作業、記録作成は、財団法人鳥取県教育文化財団の指示のもと国際文化財株式会社が行った。
- 7 出土遺物の整理作業は、財団法人鳥取県教育文化財団の文化財主事と整理作業員が行った。
- 8 本書は、一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ『本高弓ノ木遺跡（5区）Ⅰ』の第1分冊【遺構調査（本文）編】である。
- 9 第1・2分冊の編集は下江健太が担当し、濱田竜彦が編集作業を補佐した。第3分冊の編集は濱田が担当した。
- 10 第Ⅰ～Ⅲ章の執筆は濱田、第Ⅳ章は下江、中尾智行、山梨千晶が行った。
- 11 花粉分析、種実同定などを株式会社古環境研究所、層相解析（X線写真撮影観察）、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社、1区と2区の試料を対象とした放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 12 樹種同定について鳥取大学地域学部准教授の中原計氏に御指導、御協力をいただいた。
- 13 本調査に係る記録類や出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 14 現地調査、報告書の作成にあたって、下記の方々、機関から、様々な御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます。

李素妍（鳥取大学）、小野映介（新潟大学）、工楽善通（さやま池博物館）、小山田宏一（さやま池博物館）、佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）、坂本稔（国立歴史民俗学博物館）、設楽博巳（東京大学）、高田健一（鳥取大学）、辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社）、中塚武（名古屋大学）、中沢道彦、中原計（鳥取大学）、中村豊（徳島大学）、西村歩（公益財団法人大阪府文化財センター）、

久田正弘（財団法人石川県埋蔵文化財センター）、藤尾慎一郎（国立歴史民俗学博物館）、深川博美（鳥取県立博物館）、三ツ井誠一郎（日本原子力研究開発機構）、宮ノ下明大（農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所）、吉川英樹（日本原子力研究開発機構）、鳥取市教育委員会、鳥取大学地域学部、財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター、公益財団法人大阪府文化財センター、鳥取県産業技術センター、鳥取県立博物館、県立むきばんだ公園事務所

凡 例

- 1 本遺跡及び本書では国土座標第Ⅴ系に基づき地区割りを設定した。
平面図の方位は座標北を示し、図中にX・Y座標軸をm単位で表記した。
- 2 標高は海拔標高で示した。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000、1/200,000 地形図）、鳥取市作成の都市計画図（1/5,000）を縮小、加筆したものである。
- 4 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相・明度・彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面は湿った状態を保つように留意し、色相・明度・彩度を判断するようにした。また、堆積中に混入物が含まれる場合、粒径を基準に、2mm以上を礫、2mm未満を砂と記し、礫の大きさについては、地層観察用畦の観察面に視認できる最大の礫の径を記した。
- 6 遺構平面図の縮尺は統一していない。
- 7 本書の報告において、出土した木製品の番号に付してある「本弓Ⅱ」は、木製品を別途報告する『本高弓ノ木遺跡（5区）Ⅱ 遺物（木製品）編』の略称である。
- 8 遺構に伴う土器の時期は、以下の文献を参考にしながら、検討を行った。
田辺昭三編 1981『須恵器大成』角川書店
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社
谷口恭子 2000「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究』XXⅡ、庄内式土器研究会
中村豊 2008「西日本磨研土器（滋賀里1～3式）」『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
濱田竜彦 2008「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』第60巻第3号、(財)古代学協会
濱田竜彦 2012「出雲原山式再考—山陰地方の初期遠賀川式土器—」『兔原Ⅱ—森岡秀人さん還暦記念論集—』兔原刊行会
松井潔 1997「東の土器、南の土器—山陰地方における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態」『古代吉備』第19集、古代吉備研究会
松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社
宮崎泰士・藤永正明編 2006『年代のものさし—陶器の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館
森岡秀人・西村歩編 2006『古式土器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
家根祥多 1994「篠原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討—」『縄文晩期前葉—中葉の広域編年』平成4年度科学研究費補助（総合A）研究成果報告書（課題番号 04301049）

目 次

第1分冊【発掘調査・遺構（本文）編】

巻頭図版

序

例言・凡例

目次

第I章 発掘調査の経緯	濱田竜彦	1
第1節 発掘調査にいたる経緯		1
第1項 原因		1
第2項 経緯		1
第2節 発掘調査の経過		2
第1項 平成21年度の発掘調査		2
第2項 平成22年度の発掘調査		5
第3節 調査体制		7
第II章 本高弓ノ木遺跡の位置と環境	濱田	11
第1節 本高弓ノ木遺跡の位置と地理的環境		11
第1項 遺跡の位置		11
第2項 本高弓ノ木遺跡周辺の地形・地質		12
第2節 有富川周辺の遺跡と歴史的環境		12
第III章 発掘調査の方法	濱田	17
第1節 試掘調査の成果と本調査の方針		17
第1項 試掘調査成果の概要		17
第2項 本調査の方針		17
第2節 調査地の地区割りとグリッド名		18
第1項 調査地の地区割り		18
第2項 調査区とグリッド名		20
第3節 調査と記録の対象		20
第1項 記録の対象		20
第2項 遺構名と番号		20
第3項 遺物の取り上げと遺物カードの記載		20
第4節 調査と記録作成の方法		21
第1項 掘削		21
第2項 土層区分と土層名		21
第3項 遺構面		22
第4項 図面による記録		22
第5項 写真による記録		22

第5節 出土遺物の整理	23
第IV章 調査成果	25
第1節 調査区と基本土層断面	25
(1) 調査区の地形	25
(2) 調査区の形と地区割り	25
(3) 基本土層断面	25
第2節 基本層序	27
第3節 第1a層・第2a層・第2b層下面の遺構	39
第4節 第3-1-1a層下面の遺構	40
第1項 土坑群	40
第2項 土坑	61
第3項 構造物	65
(1) 664 構造物	65
(2) 2溝上部木製構造物	65
第5節 第3-1-2a層下面の遺構	66
第1項 水利施設	66
(1) 2溝	66
(2) 4落ち込み	80
第2項 土坑	147
第6節 第3-1-3a層下面の遺構	150
第1項 溝	150
(1) 5溝	150
(2) 大型溝群	156
(3) その他の溝	172
第2項 土坑など	176
第3項 掘立柱建物	200
第4項 盛土遺構	204
(1) 700 盛土	204
(2) 701 溝	209
(3) 700 盛土下面検出遺構	209
第7節 第3-2a層下面の遺構	235
第1項 溝	235
(1) 420 溝	235
(2) 調査区の北側で検出した溝および杭列	236
(3) その他の溝	252
第2項 土坑など	256
第3項 建物跡	273
第8節 第4a層下面の遺構	277

第1項 溝	277
(1) 710 溝	277
(2) 710 溝内の構造物	295
(3) 710 溝で検出した溝	299
(4) その他の溝	306
第2項 土坑など	311
第3項 その他	313

挿図一覧

第 I -1 図 鳥取西道路の路線図と調査地の関係	1	第IV-4-9 図 土坑群 G 群平・断面	54
第 I -2 図 調査地の位置	3	第IV-4-10 図 土坑群 H 群平・断面	55
第 I -3 図 現地説明会などの様子	9	第IV-4-11 図 土坑群 I 群平・断面	56
第 I -4 図 広報誌と現地説明会資料	10	第IV-4-12 図 土坑群 J 群平・断面	57
第 II -1 図 鳥取県と遺跡の所在地	11	第IV-4-13 図 土坑群 K・M 群平・断面	58
第 II -2 図 本高弓ノ木遺跡周辺の遺跡	13	第IV-4-14 図 土坑群 L 群平・断面	59
第 III -1 図 地区割り模式図 (鳥取県)	18	第IV-4-15 図 140 土坑平・断面	61
第 III -2 図 調査地の地区割り (第 I・II・III・IV 区画)	19	第IV-4-16 図 664 構造物平・立面	62
第 III -3 図 a 層下面検出遺構面の概念図	22	第IV-4-17 図 2 溝上部木製構造物平面	63・64
第 IV -1 図 5 区調査区グリッド配置	26	第IV-5-1 図 第 3-1-2a 層下面全体	67・68
第 IV -2-1 図 5 区土層断面模式図	28	第IV-5-2 図 2 溝・4 落ち込み平面	70
第 IV -2-2 図 X=-57,530 ライン土層断面	29	第IV-5-3 図 2 溝土層断面	71・72
第 IV -2-3 図 X=-57,480 ライン土層断面	30	第IV-5-4 図 2 溝内ワラ束状繊維塊出土状況	73
第 IV -2-4 図 X=-57,430 ライン土層断面	31・32	第IV-5-5 図 2 溝内木製構造物 1～3 ピット群平面	74
第 IV -2-5 図 X=-57,380 ライン土層断面	33・34	第IV-5-6 図 2 溝内木製構造物 1・3 ピット群平面	75・76
第 IV -2-6 図 Y=-12,300 ライン土層断面	35・36	第IV-5-7 図 2 溝内木製構造物 2 平面	77
第 IV -2-7 図 Y=-12,320 ライン土層断面	37・38	第IV-5-8 図 2 溝中層砂層内木製構造物平・立面	79
第 IV -3-1 図 第 1a・2a・2b 層下面全体	41・42	第IV-5-9 図 4 落ち込み完掘状況	81
第 IV -3-2 図 1 溝平面	43	第IV-5-10 図 土層断面取得位置	82
第 IV -3-3 図 1 溝土層断面	44	第IV-5-11 図 4 落ち込み東西土層断面 (X=-57,551 ライン)	85・86
第 IV -4-1 図 第 3-1-1a 層下面全体	45・46	第IV-5-12 図 4 落ち込み木製構造物ステージ 1～12 土層断面	87・88
第 IV -4-2 図 6・99 溝 土坑群全体	47	第IV-5-13 図 木製構造物 構造物模式図	89
第 IV -4-3 図 土坑群 A 群平・断面	49	第IV-5-14 図 ステージ 1 平面	91
第 IV -4-4 図 土坑群 B 群平・断面	50	第IV-5-15 図 ステージ 2 平面	92
第 IV -4-5 図 土坑群 C 群平・断面	51		
第 IV -4-6 図 土坑群 D 群平・断面	52		
第 IV -4-7 図 土坑群 E 群平・断面	53		
第 IV -4-8 図 土坑群 F 群平・断面	54		

第IV-5-16 図	ステージ2 杭設置角度	93	第IV-5-52 図	2 溝盛土遺構 1・2 間 杭列遺物 出土状況	131
第IV-5-17 図	ステージ2 支持工位置	93	第IV-5-53 図	突堤状遺構と木製構造物	132
第IV-5-18 図	支持工 1・3 平・立面	94	第IV-5-54 図	2 溝南北土層断面 (Y=-12,343 ラ イン)	133・134
第IV-5-19 図	ステージ3 平面	96	第IV-5-55 図	2 溝東西・盛土遺構土層断面 (X= -57,540 ライン)	135
第IV-5-20 図	突堤状遺構	97	第IV-5-56 図	2 溝東西・盛土 1・杭列土層断面 (X=-57,536 ライン)	136
第IV-5-21 図	ステージ3 杭設置角度	98	第IV-5-57 図	盛土遺構 1-1・1-2 と木製構造物	137
第IV-5-22 図	ステージ3 構築単位模式図	98	第IV-5-58 図	盛土遺構 1-3・1-4 と木製構造物	138
第IV-5-23 図	ステージ3 木製構造物 二股木位 置平面	99	第IV-5-59 図	盛土遺構 1-5 と木製構造物	139
第IV-5-24 図	ステージ4 平面	101	第IV-5-60 図	盛土遺構 2 土層断面	140
第IV-5-25 図	北側石積み・南側石積み平・断面	102	第IV-5-61 図	台形枠出土状況	145
第IV-5-26 図	ステージ4 板敷遺構平・断面	104	第IV-5-62 図	746・779 土坑平・断面	148
第IV-5-27 図	ステージ4 構築過程①-②	105	第IV-5-63 図	953 土坑平・断面	149
第IV-5-28 図	ステージ4 構築過程③-④	105	第IV-6-1 図	第 3-1-3a 層下面全体	151・152
第IV-5-29 図	ステージ4 構築過程⑤-⑥	106	第IV-6-2 図	調査地南側全体	153・154
第IV-5-30 図	板敷遺構平面	107	第IV-6-3 図	5 溝平面	155
第IV-5-31 図	ステージ5 杭設置角度	108	第IV-6-4 図	5 溝土層断面	156
第IV-5-32 図	ステージ5 平面	109	第IV-6-5 図	5 溝土器溜まり遺物出土状況	157
第IV-5-33 図	構築単位 C・D 境界付近平・立面	110	第IV-6-6 図	大型溝群平面	158
第IV-5-34 図	ステージ6 杭設置角度	111	第IV-6-7 図	大型溝群土層断面 (1)	159・160
第IV-5-35 図	ステージ6 平面	112	第IV-6-8 図	大型溝群土層断面 (2)	161・162
第IV-5-36 図	盛土遺構 1 土層断面	114	第IV-6-9 図	大型溝群土層断面 (3)	163
第IV-5-37 図	構築単位 G 前面の被覆材と編組 製品	115	第IV-6-10 図	601 溝平面	164
第IV-5-38 図	ステージ7 杭設置角度	116	第IV-6-11 図	635 溝平面	165
第IV-5-39 図	ステージ7 平面	117	第IV-6-12 図	601・635・707・708 溝土層断面	166
第IV-5-40 図	ステージ7 南方の盛土	118	第IV-6-13 図	708 溝平面	167
第IV-5-41 図	南側土嚢積平・立面	119	第IV-6-14 図	776 溝平面	168
第IV-5-42 図	南側土嚢積 土嚢 A～F 平面	121	第IV-6-15 図	776 溝内木製構造物平面	169
第IV-5-43 図	ステージ8 杭設置角度	122	第IV-6-16 図	600 溝平面	170
第IV-5-44 図	ステージ8 平面	123	第IV-6-17 図	600 溝断面	171
第IV-5-45 図	ステージ9 平面	124	第IV-6-18 図	51 土坑・52 溝平・断面	172
第IV-5-46 図	ステージ9 杭設置角度	125	第IV-6-19 図	115 溝平・断面	173
第IV-5-47 図	ステージ10 平面	126	第IV-6-20 図	125 溝平・断面	173
第IV-5-48 図	ステージ11 平面	127	第IV-6-21 図	663 溝平・断面	174
第IV-5-49 図	ステージ12 平面	128	第IV-6-22 図	727 溝平・断面	175
第IV-5-50 図	ステージ12 杭設置角度	129			
第IV-5-51 図	2 溝盛土遺構平面	131			

第IV-6-23 図	43・48 土坑平・断面	176			211
第IV-6-24 図	45・46 土坑平・断面	177	第IV-6-57 図	700 盛土盛土1層下面検出状況	212
第IV-6-25 図	47・60 土坑平・断面	178			
第IV-6-26 図	61 土坑平・断面	179	第IV-6-58 図	700 盛土拡張部平面	213
第IV-6-27 図	63・64 土坑平・断面	180	第IV-6-59 図	700 盛土拡張部断面	214
第IV-6-28 図	71 土坑平・断面	181	第IV-6-60 図	699・702 土坑 705 ピット平・断面	215
第IV-6-29 図	100 土坑平・断面	182	第IV-6-61 図	709 土坑 706 ピット平・断面	216
第IV-6-30 図	101 土坑平・断面	183			
第IV-6-31 図	112 土坑平・断面	184	第IV-6-62 図	766 土坑平・断面	217
第IV-6-32 図	123 土坑平・断面	184	第IV-6-63 図	821・866 土坑平・断面	218
第IV-6-33 図	144・145・147・148 土坑平・断面	185	第IV-6-64 図	868 土坑平・断面	219
第IV-6-34 図	191 土坑平・断面	186	第IV-6-65 図	889 溝平・断面	220
第IV-6-35 図	328・329 土坑平・断面	187	第IV-6-66 図	700 盛土盛土2層下面検出状況	221
第IV-6-36 図	330 土坑平・断面	188	第IV-6-67 図	713 土坑平・断面	222
第IV-6-37 図	354 土坑平・断面	189・190	第IV-6-68 図	700 盛土盛土3層下面遺構検出状況	224
第IV-6-38 図	416 土坑平・断面	191	第IV-6-69 図	725・751～753 ピット平・断面	225
第IV-6-39 図	421 土坑平・断面	192	第IV-6-70 図	754～757 ピット平・断面	226
第IV-6-40 図	632・721 土坑 718・731 ピット平・断面	193	第IV-6-71 図	758 ピット 759 土坑平・断面	227
第IV-6-41 図	736・741・747 土坑 750 ピット平・断面	194	第IV-6-72 図	761 土坑 762・763 ピット平・断面	228
第IV-6-42 図	771 土坑 772 ピット平・断面	195	第IV-6-73 図	767 溝 869 土坑 764・765 ピット平・断面	229
第IV-6-43 図	787・790 土坑 778 ピット平・断面	196	第IV-6-74 図	896 溝平・断面	230
第IV-6-44 図	801 土坑 795 ピット平・断面	197	第IV-6-75 図	917 溝平・断面	231
第IV-6-45 図	931・933 ピット平・断面	198	第IV-7-1 図	第3-2a層下面全体	237・238
第IV-6-46 図	掘立柱建物1平面	200	第IV-7-2 図	第3-2a層下面北側全体	239・240
第IV-6-47 図	掘立柱建物1断面	201	第IV-7-3 図	420 溝平面	241
第IV-6-48 図	掘立柱建物1断面2	202	第IV-7-4 図	420 溝土層断面	242
第IV-6-49 図	掘立柱建物2平・断面	203	第IV-7-5 図	420 溝断面	243
第IV-6-50 図	700 盛土検出状況	205	第IV-7-6 図	5区北側溝群平面	244
第IV-6-51 図	700 盛土北側石列平・立面	206	第IV-7-7 図	760 溝平面	245
第IV-6-52 図	700 盛土北側石列土層断面	206	第IV-7-8 図	760 溝断面	246
第IV-6-53 図	700 盛土 701 溝土層断面	207・208	第IV-7-9 図	760 溝断面(2)	247
第IV-6-54 図	700 盛土南側石列平・立面	209	第IV-7-10 図	665・691・895・905 溝平・断面	248
第IV-6-55 図	701 溝土器溜まり平面	210	第IV-7-11 図	880・910 溝平・断面	249
第IV-6-56 図	701 溝土器溜まり平面(拡大)				

第IV-7-12 図	942 溝平・断面	250	第IV-8-8 図	710 溝上層出土木材 1 群	290
第IV-7-13 図	942 溝遺物出土状況	251	第IV-8-9 図	710 溝上層出土木材 2 群	291・292
第IV-7-14 図	952 溝平・断面	252	第IV-8-10 図	710 溝出土木材加工法内訳	293
第IV-7-15 図	952 溝杭列立面図	253	第IV-8-11 図	710 溝出土木材法量分布	293
第IV-7-16 図	杭列・溝状遺構土層断面	253	第IV-8-12 図	710 溝上層出土木材 3 群	294
第IV-7-17 図	163・418・780 溝平・断面	254	第IV-8-13 図	710 溝内木製構造物検出状況	295
第IV-7-18 図	786・900 溝平・断面	255	第IV-8-14 図	710 溝内木製構造物 1～3 平・立面	296
第IV-7-19 図	170・174 土坑平・断面	257	第IV-8-15 図	710 溝内木製構造物 4 平・立面	297
第IV-7-20 図	180・182・184・188・190 土坑平・断面	258	第IV-8-16 図	949 木製構造物平面	300
第IV-7-21 図	410・417・696 土坑平・断面	259	第IV-8-17 図	949 木製構造物第 1 段階平面	301
第IV-7-22 図	800 土坑平・断面	260	第IV-8-18 図	949 木製構造物第 2 段階平面	302
第IV-7-23 図	813 土坑平・断面	261	第IV-8-19 図	949 木製構造物第 3 段階平面	302
第IV-7-24 図	818 土坑平・断面	262	第IV-8-20 図	949 木製構造物土層断面	303
第IV-7-25 図	843 土坑 839・861 ピット平・断面	263	第IV-8-21 図	949 木製構造物杭列 1 平・立面	303
第IV-7-26 図	851 土坑平・断面	264	第IV-8-22 図	949 木製構造物杭列 2～5 平・立面	304
第IV-7-27 図	860 土坑平・断面	265	第IV-8-23 図	949 木製構造物杭列 6～10 平・立面	305
第IV-7-28 図	871・879 土坑 862 ピット平・断面	266	第IV-8-24 図	939 溝土層断面	306
第IV-7-29 図	870 土坑平・断面	267	第IV-8-25 図	934 溝平・断面	306
第IV-7-30 図	876・878 土坑平・断面	268	第IV-8-26 図	946 溝平面	307
第IV-7-31 図	884 土坑 882・883 ピット平・断面	269	第IV-8-27 図	946 溝土層断面	308
第IV-7-32 図	886・888 土坑平・断面	270	第IV-8-28 図	947 溝平・断面	309
第IV-7-33 図	916 土坑平・断面	271	第IV-8-29 図	948 溝平・断面	310
第IV-7-34 図	918・919 土坑 927 ピット平・断面	272	第IV-8-30 図	423・425 土杭平・断面	311
第IV-7-35 図	竪穴住居 1 柱穴平・断面	273	第IV-8-31 図	426・427 土杭平・断面	312
第IV-7-36 図	竪穴住居 1 平・断面	274	第IV-8-32 図	433 土器集積 435 土杭平・断面	313
第IV-8-1 図	第 4a 層下面全体	279・280	第IV-8-33 図	437・438 土杭平・断面	314
第IV-8-2 図	710 溝完掘	281	第IV-8-34 図	930 土杭平・断面	315
第IV-8-3 図	710 溝土層断面 (A-A')	283・284	第IV-8-35 図	935・943・944 ピット平・断面	316
第IV-8-4 図	710 溝土層断面 (B-B' C-C')	285・286	第IV-8-36 図	936・940 土杭平・断面	317
第IV-8-5 図	710 溝木材検出状況	287			
第IV-8-6 図	710 溝上層出土木材検出状況	288			
第IV-8-7 図	710 溝中層出土木材検出状況	289			

表一覧

第Ⅳ-4-1表	土坑群埋土一覧	・ ・ ・ ・ ・ 59	(2) ・ ・ ・ ・ ・ 233
第Ⅳ-4-2表	土坑群埋土一覧(2)	・ ・ ・ ・ ・ 60	第Ⅳ-6-3表 第3-1-3a層下面その他の遺構一覧
第Ⅳ-4-3表	土坑群埋土一覧(3)	・ ・ ・ ・ ・ 61	(3) ・ ・ ・ ・ ・ 234
第Ⅳ-5-1表	2溝内ピット群一覧	・ ・ ・ ・ ・ 78	第Ⅳ-7-1表 第3-2a層下面その他の遺構一覧
第Ⅳ-5-2表	杭設置角度	・ ・ ・ ・ ・ 142	・ ・ ・ ・ ・ 275
第Ⅳ-5-3表	土囊出土遺跡一覧	・ ・ ・ ・ ・ 144	第Ⅳ-7-2表 第3-2a層下面その他の遺構一覧
第Ⅳ-6-1表	第3-1-3a層下面その他の遺構一覧	・ ・ ・ ・ ・ 232	(2) ・ ・ ・ ・ ・ 276
第Ⅳ-6-2表	第3-1-3a層下面その他の遺構一覧		第Ⅳ-8-1表 710溝出土木材数量
			・ ・ ・ ・ ・ 293

巻頭図版一覧

巻頭図版 1-1	調査地遠景(北から)	(南から)
巻頭図版 1-2	発掘調査着手前の調査地(北から)	巻頭図版 6-2 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ6北側土囊積断面(南東から)
巻頭図版 2-1	5区俯瞰(南から)	巻頭図版 7-1 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ7構築単位H北端(西から)
巻頭図版 2-2	第3-1-2a層下面 2溝北半の全景(南から)	巻頭図版 7-2 第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ7南側土囊積最下部土囊F(南東から)
巻頭図版 3-1	第3-1-2a層下面 2溝と4落ち込み(南から)	巻頭図版 8-1 第3-1-2a層下面 4落ち込み土囊F結び目(拡大)
巻頭図版 3-2	第3-1-2a層下面 2溝木製構造物1(南西から)	巻頭図版 8-2 第3-1-2a層下面 2溝・4落ち込みから出土した土器
巻頭図版 4-1	第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ2~4木製構造物(南西から)	巻頭図版 9-1 第3-1-3a層下面 調査区北半700盛土と溝群
巻頭図版 4-2	第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ4板敷遺構と台形枠(南西から)	巻頭図版 9-2 第3-1-3a層下面 700盛土と701溝(南西から)
巻頭図版 5-1	第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ4板敷遺構下部の被覆材(南西から)	巻頭図版 10-1 第4a層下面 710溝内に集積された木材の出土状況(西から)
巻頭図版 5-2	第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ4板敷遺構下部被覆材(南西から)	巻頭図版 10-2 第4a層下面 710溝内949構造物に伴う杭列1(南から)
巻頭図版 6-1	第3-1-2a層下面 4落ち込みステージ6構築単位G前面の被覆材	

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査にいたる経緯

第 1 項 原因

本高弓ノ木遺跡は千代川の支流、有富川の西方にある丘陵裾部に所在する〔第 I-1・I-2 図〕。発掘調査の原因となったのは、国土交通省（以下、国交省）が鳥取市本高から鳥取市青谷町青谷間に計画した一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築工事である〔第 I-1 図〕。現在、鳥取県内では鳥取自動車道や山陰自動車道等の高規格自動車専用道路の整備が推進されており、このうち、一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築は山陰自動車道の一部をなす。

第 2 項 経緯

鳥取西道路の計画地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く存在している。そのため、道路の建設に先立って、計画地内に所在する遺跡の取扱いに関する協議が国交省、鳥取県教育委員会（以下、県教委）、鳥取市教育委員会（以下、市教委）によって行われた。その結果、埋蔵文化財包蔵地の有無、内容、範囲などの概要を確認するために県教委と市教委が計画地内を踏査し、平成 17 年度からは、市教委が遺跡の内容を把握するために試掘調査を実施することになった。

本高弓ノ木遺跡は、平成 20（2008）年 9 月 24 から 10 月 1 日にかけて鳥取市本高字弓ノ木、飛井田ノ一、毛勝地内で行われた試掘調査によって、新たに確認された埋蔵文化財包蔵地である^{註1}。当



第 I-1 図 鳥取西道路の路線図と調査地の関係

該地には、橋脚および盛土による道路の建設が計画されており、国交省、県教委及び市教委による協議と、文化財保護法第 94 条に関わる手続きを経て、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受けた鳥取県教育委員会が発掘調査を実施することが決まり、平成 20 年度から本調査が開始された。

なお、本高弓ノ木遺跡のうち、橋脚が建設される 1 区、2 区、そして、トレンチャーによって工事が行われる 3 区は平成 20 年度に鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した^{註2}。一方、本書で報告を行う 4 区と 5 区は、県教委が財団法人鳥取県教育文化財団（以下、県教育文化財団）に発掘調査を再委託し、県教育文化財団調査室美和調査事務所第 1 担当の監理のもと、国際文化財株式会社西日本支店（以下、国際文化財）の調査支援を受けて発掘調査を実施した〔第 I-2 図〕。

ただし、再委託当初は、4 区と 5 区を併せて全面調査する計画であったが、平成 21 年度に実施した 5 区の調査成果で、当初の道路設計に対し大幅な見直しを検討することが必要になった。その結果、4 区の道路の建設工法が盛土から橋脚に変更され、4 区については、橋脚が建設される 4 地点についてのみ発掘調査を行うこととなった。橋脚の建設に伴う発掘調査地点は、北側から 4-1 区、4-2 区、4-3 区、4-4 区である。

そして、当初は 1 年の計画であった 4 区と 5 区の発掘調査期間についても見直しを行い、平成 21 年 5 月 1 日～平成 22 年 3 月 5 日、平成 22 年 4 月 26 日～平成 23 年 2 月 24 日の 2 カ年に亘って対象となる範囲を発掘調査し、膨大な出土品を県教育文化財団調査室美和調査事務所に持ち帰り、整理作業および発掘調査報告書の作成を行った。なお、整理作業および発掘調査報告書の作成は県教育文化財団が直営で行った。

第 2 節 発掘調査の経過

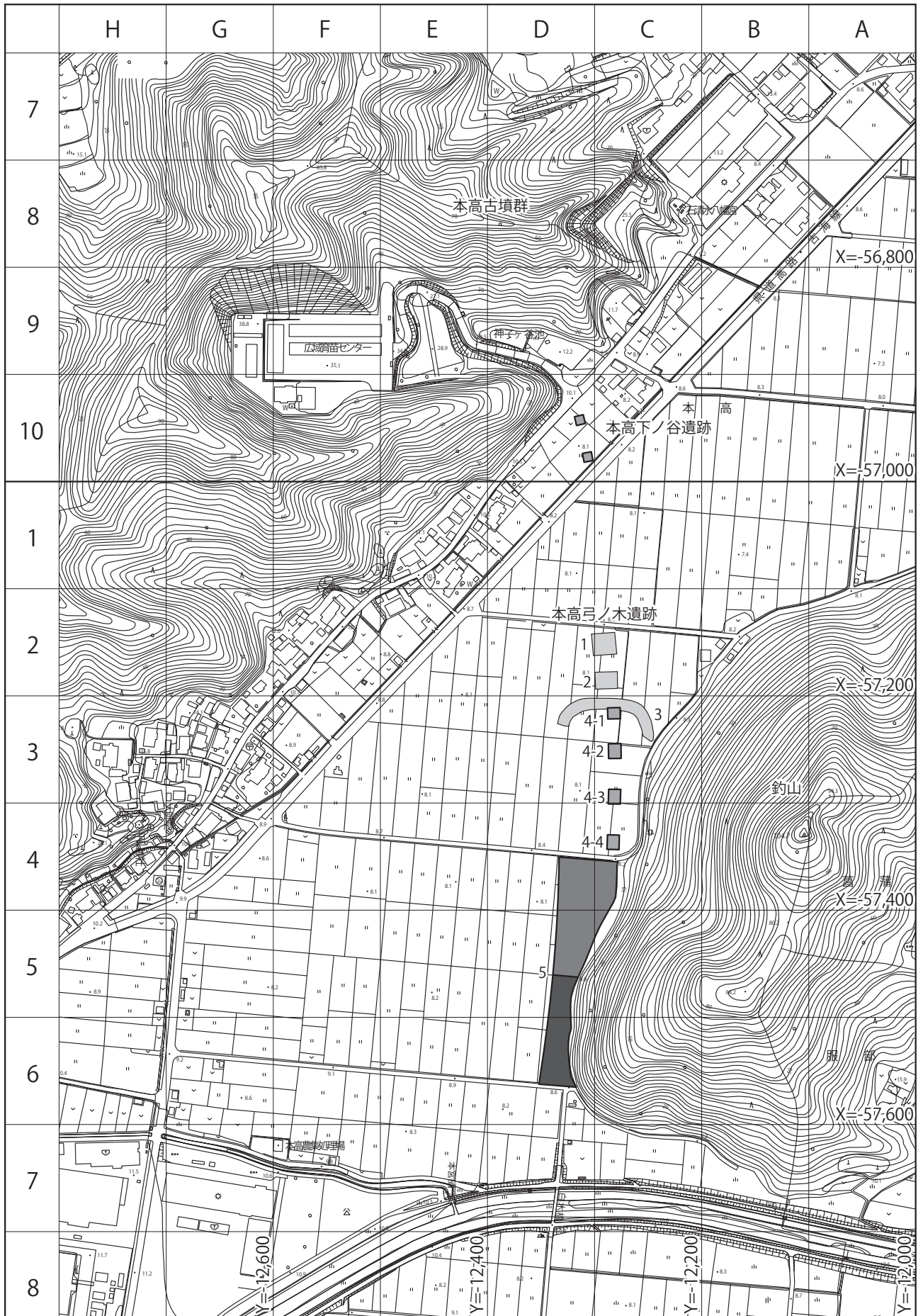
第 1 項 平成 21 年度の発掘調査

調査の再委託 本高弓ノ木遺跡 4 区、5 区、本高下ノ谷遺跡の発掘調査を実施するため、平成 21 年 4 月 1 日に県教委と県教育文化財団との間で「一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財調査（本高地区）」の委託契約を締結した。調査面積は本高弓ノ木遺跡が 4 区と 5 区を合わせて 18,720㎡、調査対象は包含層 1 層と遺構面 1 面（部分的に 2 面）という設計であった。

調査着手 5 月 1 日に県教育文化財団と、国際文化財の間で本高弓ノ木遺跡 4・5 区と本高下ノ谷遺跡 1・2 区における発掘調査支援業務に関する委託契約が締結され、5 月 26 日から本高弓ノ木遺跡 5 区を調査するための事前準備を始めた。支援内容は、契約日から 11 月 30 日までの現地調査と、その後の記録類の整理、編集である。

表土の掘削 調査前の調査地は水田として利用されており、圃場整備により古い地形は失われていた。そこで、調査前の地形測量を省略して、機械による表土の掘削を行うこととした。表土掘削の開始は 5 月 26 日、終了は 6 月 17 日である。

第 1a 層、第 2a 層の掘削 表土掘削と併行して、6 月 9 日から人力による包含層の掘削を本格的に開始し、近世～中世の遺物を含む第 1a 層を掘り下げ後、古代～縄文時代晩期の遺物を含む第 2a 層の掘り下げを進めた。なお、第 1a 層の下面にも 1 溝などの遺構が確認された。しかし、第 1a 層の下面



第 I-2 図 調査地の位置

は当初の再委託契約での調査設計で調査の対象とはなっておらず、ここから掘り込まれている遺構については次の第 2a 層の下面で検出を行い、調査することとした。

第 2a 層下面の調査 第 2a 層がさほど厚くなかったことから、第 1a 層下面で掘り込みが確認された 1 溝も、概ね全体像を損ねることなく記録することができた。また、第 2a 層下面では、古代のものと考えられる畦畔の痕跡などを検出し、記録に留めた。なお、調査工程の都合から、第 2a 層下面の全景写真は調査区を 2 分して行い、8 月 12 日に南半、9 月 14 日に北半を撮影した。

調査内容の見直し 人力による掘削の開始に合わせ、グリッドラインにそって、サブトレンチを設け、下層の確認を行った。その結果、当初調査の対象となっていた第 2a 層とその下層に、古墳時代や弥生時代の土器を包含する第 3a 層が存在することが確認され、5 区には 2 面以上の遺構面が存在していることが明らかとなった。また、7 月末には、第 3a 層の下にも縄文時代晩期の土器を包含する第 4a 層が存在しており、3 面以上の遺構面が調査の対象となることが判明した。このため、県教育文化財団調査室から県教委文化財課に協議がなされ、今後の調査の方法と調査期間に係る設計の見直しを前提とした検討が始まった。

第 3a 層下面の調査 9 月になり、第 2a 層下面の遺構の基盤となっていた第 3a 層を掘り下げ、その下面で遺構の検出を行い、古墳時代前期の遺物を伴う 2 溝や 4 落ち込みなどの調査を進めた。とりわけ、4 落ち込みには、大量の木材が組み合わされた構造物が幾重にも埋没していたため、記録の作成と遺物の取り上げに時間を要した。また、第 3a 層下面の遺構の全容が明らかになった 11 月 17 日に、ラジコンヘリコプターによる航空撮影を実施した。その後、調査区北半で古墳時代後期の土器を伴う 6 溝や 99 溝の調査と、4 落ち込みの木製構造物の記録と解体作業を継続した。また、11 月以降は、調査区南半で検出した弥生時代後期の土坑群や弥生時代中期の溝などの調査を進め、12 月 19 日に足場を組み、それらの完掘写真を撮影した。

変更協議と変更契約 第 3a 層下面の調査に先立ち、8 月から県教育文化財団と県教委文化財課との間で数度の現地協議が行われ、協議結果に基づく県教委文化財課の指示により、県教育文化財団から国際文化財に対して、設計の変更を前提とした調査期間の延長に関する指示書が手交され、承諾された。そして、10 月 26 日付けで、県教育文化財団から実施計画の変更に関する協議書が県教委文化財課に提出され、県教委文化財課と国交省との協議を経た結果、11 月 19 日付けで県教育文化財団からの協議事項が承諾され、県教委と県教育文化財団との間で変更契約を締結、翌 20 日に県教育文化財団と国際文化財が調査支援に係る変更契約を締結した。

ここでの主な変更点は、平成 21 年度における 4 区の調査の取りやめと、調査内容の見直しである。その結果、本高弓ノ木遺跡の調査平面積は 5 区の 7,350㎡となり、調査内容は包含層 4 層、遺構面 3 面となった。なお、第 3 面については、調査期間中に完掘が困難と考えられたことから、北半の調査は平成 22 年度に先送りすることになり、12 月 25 日にまで現地調査を延長することになった。なお、21 年度の調査が取りやめとなった 4 区については、2 カ所にトレンチを設け、内容確認を行い、5 区と同様に複数の包含層と遺構面が存在することを確認した。

現地説明会 第 3a 層下面で検出した古墳時代前期や弥生時代後期の遺構、遺物を対象とした現地説明会を 10 月 31 日に開催した。4 落ち込みから発見された古墳時代前期の木製構造物は注目を集め、当日は地元を中心に 400 人程の見学者があった〔第 I-3 図右上〕。

調査期間の延長 4 落ち込み内には複数の構造物が重層しており、記録をとりながら、構造物を解

体し、木製品などを取り上げていくのに相当な時間を要し、その作業は12月になっても続いた。ところが、この年の12月は天候が不順で調査の進捗が思わしくなく、12月25日までに調査を終了する見込みが立たないことから、再度、県教育文化財団と県教委文化財課の間で協議を行い、国交省の了承を得て、今年度の現地調査を平成22年1月31日まで延長することとし、1月27日に国際文化財と第2回の変更契約を締結した。

第4a層の調査と木製構造物の養生 4落ち込み内の木製構造物は、もともと設計に含まれていない新発見の遺構だったことから、県教委文化財課の指示により調査を翌年度に持ち越すこととなり、1月に調査を中断し、遺構を保護するための養生を行った。そこで、1月以降は第4a層の調査を進めることとなったが、1月前半は降雪のためにほとんど作業ができず、変更した設計の範囲内で調査を2月以降も継続した。最終的に5区の南半で4a層の完掘写真を撮影したのは2月20日であった。4落ち込みにおける木製構造物の調査に併行して、5区南半で4a層の掘削を行った。

編集図などの作成 1月以降、現地の調査に併行して、国際文化財の現地事務所で、調査中に取得した記録類の整理を行い、現地で作成した図面類の編集を進め、3月5日に本年度の調査支援業務を終了した。また、3月末まで県教育文化財団調査室美和調査事務所で出土遺物の整理作業等を行った。

情報発信 調査期間中、随時、県教育文化財団調査室のホームページ^{註3}や同美和調査事務所の広報誌〔第I-4図上段〕に調査成果の発表を行った。

整理作業 出土した遺物は、調査を支援した国際文化財で台帳を整理し、随時、県教育文化財団調査室美和調査事務所に移管した。事務所に移管された遺物は水洗、注記、接合、復元を行い、実測図などを作成した。

第2項 平成22年度の発掘調査

調査の再委託 平成22年2月をもって調査を中断していた本高弓ノ木遺跡5区の発掘調査を継続するため、県教委と県教育文化財団との間で平成22年4月23日に「一般国道9号（鳥取西道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財調査（本高地区）」の委託契約を締結した。調査面積は5区北半の4,880㎡と南半の4落ち込み部分の256㎡、5区北半の調査対象は包含層3層と遺構面3面であった。また、4区は、前述のとおり工法が大幅に変更され、橋脚が建設されることとなった。そのため、国交省の道路本体の設計変更を待って、7月7日に県教委と県教育文化財団との間で変更契約を締結し、4区の調査を追加した。4区に計画された橋脚は4カ所、調査平面積は474㎡であった。

調査着手 4月26日に県教育文化財団と国際文化財の間で本高弓ノ木遺跡5区における発掘調査支援業務に関する委託契約が締結され、5月6日から本高弓ノ木遺跡5区の調査を再開した。支援内容は、調査の期間が契約日から12月24日までの現地調査と、その後の記録類の整理、編集である。

5区南半 4落ち込み 養生を解き、5月8日から木製構造物の検出と記録作成を開始した。途中、埋没の段階別に写真撮影等を行いながら、8月23日に全ての構造物を取り外し、4落ち込みの完掘写真を撮影した。そして下層確認を目的とした断ち割り調査を行い、25日に調査を終了した。

5区北半 第3-1-2a層下面 5区南半の調査は5月20日から再開した。5区南半で第3a層、第4a層として認識していた堆積の間に、北半では別の堆積が複数確認された。そこで、弥生時代中期までの土器を包含する堆積を第3a層の範疇で捉えることとし、第3a層を第3-1-1a層、第3-1-2a層、第3-1-3a層、第3-2a層、第3-3a層に細別した。このうち平成21年度に第3-1-1a層下面までの調査が終

了しており、22年度は第3-1-2a層下面の調査から再開する計画であったが、一部に第3-1-1a層下面の遺構が残存していたため、その補足調査と併行しながら、第3-1-2a層下面の調査を進めた。主な調査対象は4落ち込みから派生する2溝で、7月29日に完掘写真を撮影し、第3-1-2a層の調査を終了した。

5区北半 第3-1-3a層下面 7月30日から調査をはじめた。弥生時代中期末～終末期にいたる複数の溝が見つかり、切り合い関係を確認しながら掘削と記録作業を行った。また、調査区北部で四隅突出型をした盛土遺構が見つかり、墳丘墓の可能性を視野に入れながら慎重に調査を進めた。10月8日にラジコンヘリコプターによる航空写真を撮影し、その後、補足調査を行って、22日に調査を終了した。

4区 5区北半の調査に併行して、9月2日から4区の調査を開始した。調査地点は4カ所あり、北から4-1区、4-2区、4-3区、4-4区とした。9月3日から表土を掘削し、その後、第2a層、第3-1-1a層、第3-1-2a層、第3-2a層、第4a層、第5a層の下面で遺構検出等を行い、記録を作成し、12月21日に4区の調査を終了した。

5区北半 第3-2a層下面 10月27日から調査をはじめた。弥生時代中期中葉～後葉の土坑、ピット、溝などが複数見つかった。12月4日に完掘状況を撮影し、調査を終了した。

現地説明会 第3-2a層下面の調査を開始した直後、11月3日に第3-1-3a層下面の遺構を対象とした現地説明会を開催した。地元の方々を中心に、100名程の見学者が遺跡を訪れた〔第I-3図左下〕。

5区北半 第4a層下面 第3-3a層は遺物が少量しか包含されておらず、下面に遺構も確認できないことから、12月4日以降、第4a層の掘削を進め、第4a層下面にあらわれた710溝の調査をはじめた。710溝からは縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉の土器とともに大量の木材が出土した。木材の多くは、枝や根を失っており、伐採され、溝内に持ち込まれ集積されたものと推測された。12月24日に集積された木材の全景を写真に撮影し、出土した木材の観察と記録を行った。

一般公開 710溝における木材の集積状況を12月24日の午後に記者発表し、25日に一般公開した。寒く不順な天候の中、県内外から70人程の見学者があった〔第I-3図右下〕。

調査期間の延長 12月24日に調査を終了する計画で作業を進めてきたが、710溝から出土する木材の量が多く、すぐに調査の終了に見込みがたたない状況となっていた。そこで、県教委文化財課が国交省と協議を行い、調査期間を延長して、1月以降も作業を継続することとなった。積雪も多くあり、作業は難航したが、2月19日には710溝内にあった全ての木材を取り上げ、ラジコンヘリコプターによる航空写真を撮影した。続けて、測量などを行い、2月23日に調査区北側に足場を組んで、710溝の全景写真を撮影し、翌24日に全ての調査を終了した。

編集図等の作成 現地の調査に併行して、国際文化財の現地事務所で、調査中に取得した記録類の整理を行い、現地で作成した図面類の編集を進め、3月25日に本年度の調査支援業務を終了した。また、3月末まで県教育文化財団調査室美和調査事務所で出土遺物の整理作業等を行った。

情報発信 調査期間中、随時、鳥取県教育文化財団調査室のホームページ^{註3}や同美和調査事務所の広報誌〔第I-4図下段〕に調査成果の発表を行った。

整理作業 出土した遺物は、調査を支援した国際文化財で台帳を整理し、随時、県教育文化財団調査室美和調査事務所に移管した。事務所に移管された遺物は水洗、注記、接合、復元を行い、実測図等を作成した。

註

- 1 鳥取市教育委員会（加川崇、前田均、谷口恭子）編 2010 『平成 21（2009）年度 鳥取市内遺跡発掘調査報告書』
- 2 鳥取県埋蔵文化財センター（北浩明、岩垣命）編 2011 『本高弓ノ木遺跡（1～3区）』鳥取県埋蔵文化財文化財報告書 38
- 3 鳥取県教育文化財団調査ホームページ <http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasisu%20new.htm>

第 3 節 調査体制

平成 21 年度

鳥取県教育委員会

教育長 中永廣樹

鳥取県教育委員会事務局 文化財課 課長 植田司郎
 課長補佐 植木敏郎 副主幹 寺垣仁志
 歴史遺産室長 中原 斉
 文化財係長 北浦弘人 文化財主事 高尾浩司

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田博充

事務局 事務局長 中村金一 事務職員 岡田美津子
 調査室 室長 松井 潔（県教委から派遣）
 次長 石本富正 事務職員 福田早由里

美和調査事務所 所長 松井 潔（室長兼務）
 調査第 1 担当 副主幹 濱田竜彦（県教委から派遣）
 文化財主事 岸本浩忠 下江健太（県教委から派遣）
 中尾智行（財団法人大阪府文化財センターから派遣）

発掘調査支援業者 国際文化財株式会社西日本支店

現場管理人 竹内眞哉 飯田英樹
 支援調査員 青島邦夫 石松直 大山祐喜 片山博道 栗木寧 鈴木恵介 日柴喜勝重
 調査補助員 岡田竜彦 沖野実 長内礼二 鈴木健一 中井裕章 中野一徹 樋田泰之
 宮崎育慈 亀井好美

平成 22 年度

鳥取県教育委員会

教育長 横濱 純一

鳥取県教育委員会事務局 文化財課 課長 植田司郎
 課長補佐 田貝 隆 副主幹 福市 信
 歴史遺産室長 中原 斉 文化財主事 大野哲二
 文化財係長 北浦弘人

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上善弘

第 I 章 発掘調査の経緯

事務局 事務局長 漆原貞夫 事務職員 岡田美津子
調査室 室長 松井 潔 (県教委から派遣)
次長 石本富正 事務職員 福田早由里
美和調査事務所 所長 松井 潔 (室長兼務)
調査第 1 担当 副主幹 濱田竜彦 (県教委から派遣)
文化財主事 下江健太 山梨千晶 (県教委から派遣)
中尾智行 (財団法人大阪府文化財センターから派遣)
発掘調査支援業者 国際文化財株式会社西日本支店
現場代理人 飯田秀樹
支援調査員 安村健 脇本博康 野上伸
調査補助員 櫻井毅 鳥越巨道

平成 23 年度

鳥取県教育委員会

教育長 横濱 純一

鳥取県教育委員会事務局 文化財課 課長 上山憲二
課長補佐 田貝 隆 副主幹 福市 信
歴史遺産室長 中原 斉
文化財係長 北浦弘人 文化財主事 大野哲二

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上善弘

事務局 事務局長 漆原貞夫 事務職員 岡田美津子
調査室 室長 松井 潔 (県教委から派遣)
次長 石本富正 事務職員 福田早由里
美和調査事務所 所長 松井 潔 (室長兼務) 事務職員 植木智子
調査第 1 担当 副主幹 濱田竜彦 (県教委から派遣)
文化財主事 下江健太 山梨千晶 (県教委から派遣)
中尾智行 (財団法人大阪府文化財センターから派遣)

発掘調査支援業者 国際文化財株式会社西日本支店

現場代理人 飯田秀樹
支援調査員 安村健 脇本博康
調査補助員 沖野実 西野順二 山本哲也 櫻井毅

平成 24 年度

鳥取県教育委員会

教育長 横濱 純一

鳥取県教育委員会事務局 文化財課 課長 上山憲二
課長補佐 土山和俊 副主幹 福市 信
歴史遺産室長 北浦弘人 文化財主事 大野哲二

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上善弘

事務局 事務局長 漆原貞夫（2012年12月まで）

石本富正（2012年1月から） 事務職員 岡田美津子

調査室 室長 松井 潔（県教委から派遣）

次長 石本富正（2012年5月まで）

中川眞一（2012年6月から） 事務職員 福田早由里

美和調査事務所 所長 松井 潔（室長兼務） 事務職員 植木智子

副主幹 濱田竜彦（県教委から派遣）

調査第2担当 文化財主事 下江健太 奥原このみ（県教委から派遣）

調査協力

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所

鳥取市教育委員会、財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター、鳥取県埋蔵文化財センター



平成 21 年 11 月 19 日 東郷小学校発掘体験



平成 21 年 10 月 31 日 現地説明会



平成 22 年 11 月 3 日 現地説明会



平成 22 年 12 月 25 日 現地公開

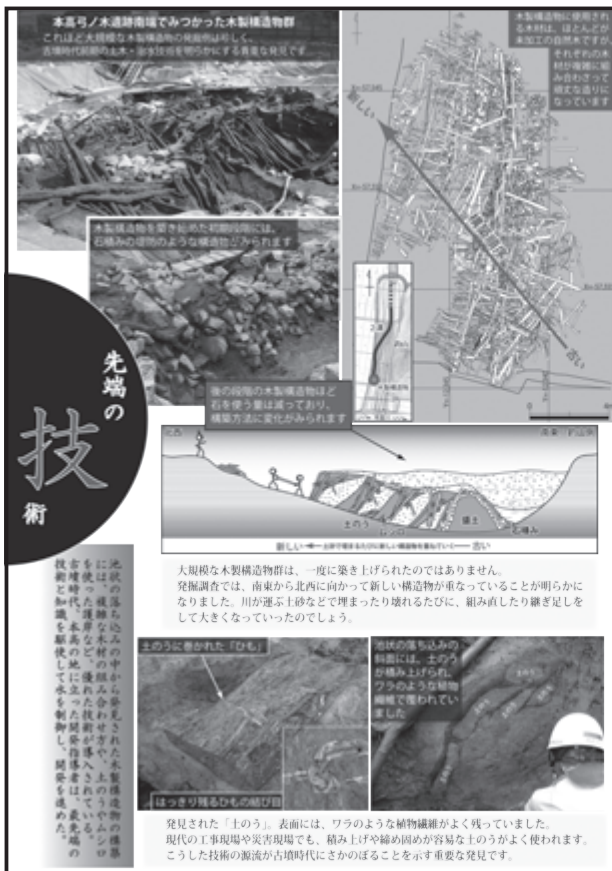
第 I -3 図 現地説明会などの様子



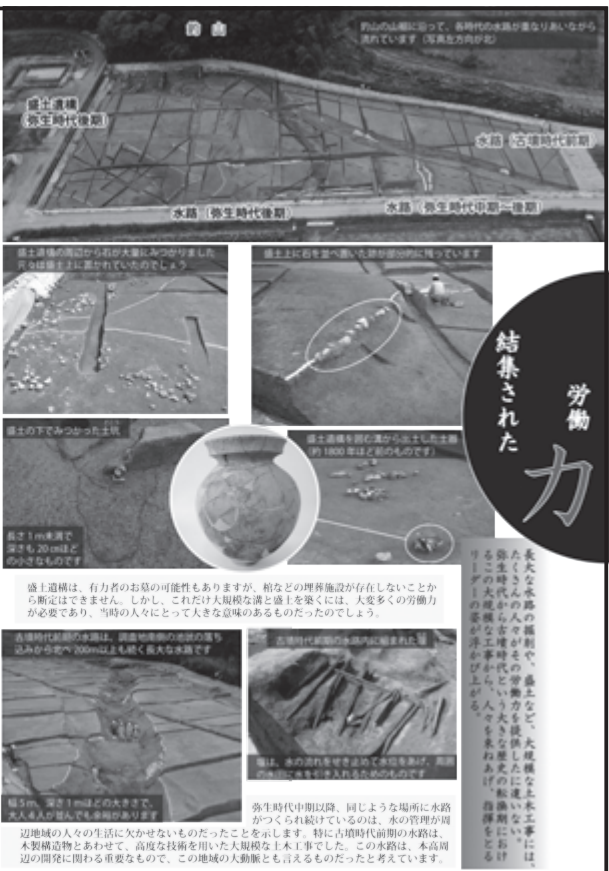
平成 21 年 12 月『発掘通信 鳥取西道路を掘る』第 8 号



平成 22 年 12 月『発掘通信 鳥取西道路を掘る』第 14 号



平成 22 年 11 月 3 日 現地説明会資料



第 I-4 図 広報誌と現地説明会資料

第Ⅱ章 本高弓ノ木遺跡の位置と環境

第1節 本高弓ノ木遺跡の位置と地理的環境

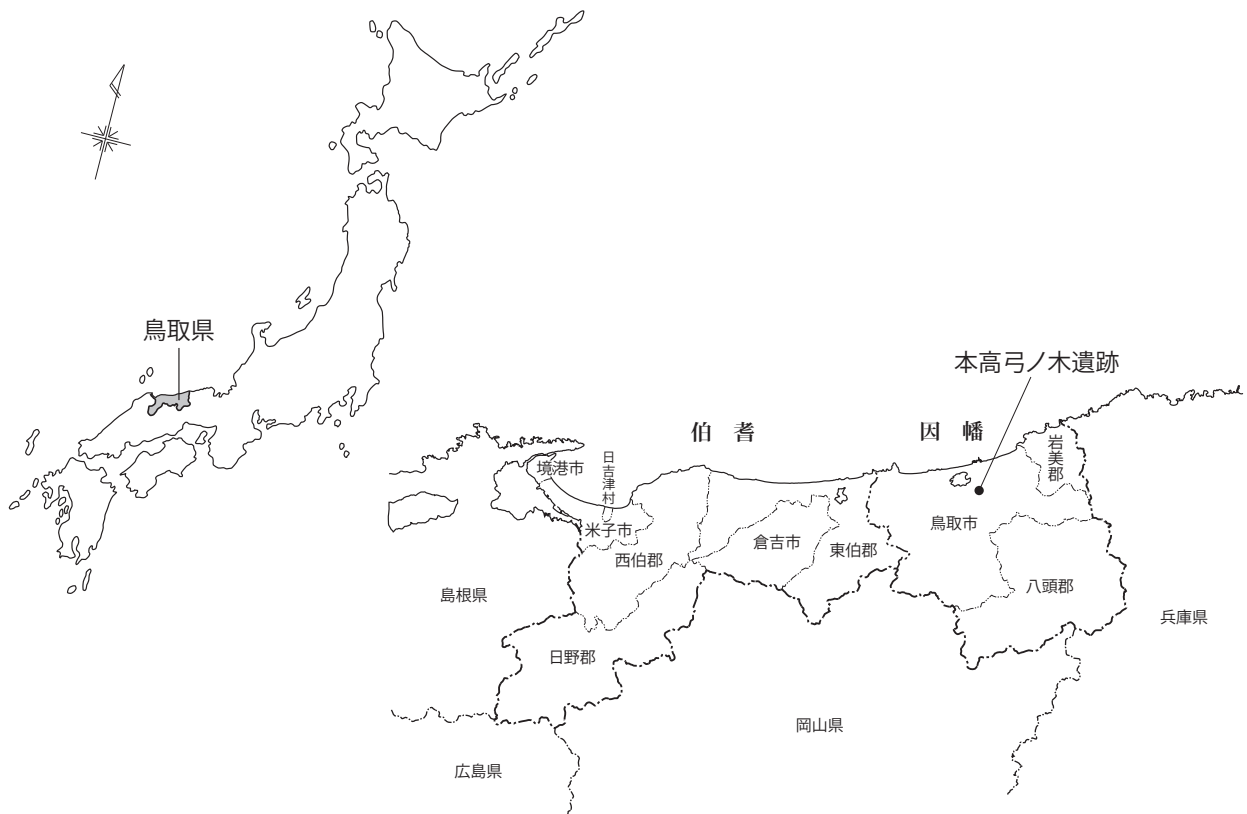
第1項 遺跡の位置

所在地 鳥取県鳥取市本高字弓ノ木、飛井田ノ一、毛勝に所在する。釣山と呼ばれる独立丘陵の縁辺にあり、調査地はもともと畑地や水田に利用されていた。遺跡の北側には、平成21年度に県教育文化財団に調査を委託した本高下ノ谷遺跡、本高古墳群がある〔第Ⅱ-2図〕。鳥取市遺跡分布地図（鳥取県教育委員会作成）に登録されている遺跡番号は3-0388である。

鳥取県 中国地方の北東部にあり、日本海に面し、東西に細長い形状をしている。東西約120km、南北約20～50km、面積3,507平方km、4市14町1村の自治体がある。人口は約59万人、県庁所在地は鳥取市である。近世までは、県東部が因幡国、中西部が伯耆国と呼ばれていた〔第Ⅱ-1図〕。

鳥取市 人口約20万人の地方都市である。平成16（2004）年11月に、鳥取市と、国府町、福部村、河原町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町が合併して新たな市となり、平成17（2005）年に特例市へ移行した。市域は765.66平方km、南側に岡山県、東側に兵庫県との県境がある〔第Ⅱ-1図〕。古代には国府町に因幡国庁が置かれ、近世には因伯二国を統治した鳥取池田家による藩政の中心地として栄えた。

本高 鳥取市内を北流する千代川の左岸にあり、その支流の有富川流域に所在している。古くは、



第Ⅱ-1図 鳥取県と遺跡の所在地

因幡国高草郡に含まれる。千代川支流の野坂川と有富川の間に介在している山地の南東側山裾部に集落が細長く展開しており、その西方に広がる有富川の左岸が水田地帯となっている。当地は鳥取市域から鹿野方面に至る交通の要地であった。近世には鳥取と鹿野を結ぶ鹿野街道が通過していた。

第2項 本高弓ノ木遺跡周辺の地形・地質〔第Ⅱ-2図〕

千代川と鳥取平野 鳥取県は中国地方の脊梁山地から日本海にいたる北側斜面にあり、県東部には開析の進んだ海拔1,200 m以下の山地が発達している。千代川は鳥取県八頭郡智頭町に所在する沖ノ山(1,319.0 m)に源を発する一級河川で、袋川や野坂川等の支流と合流しながら日本海に注ぐ。下流域には第四紀沖積世に浸食谷が埋め立てられて鳥取平野が形成されている。

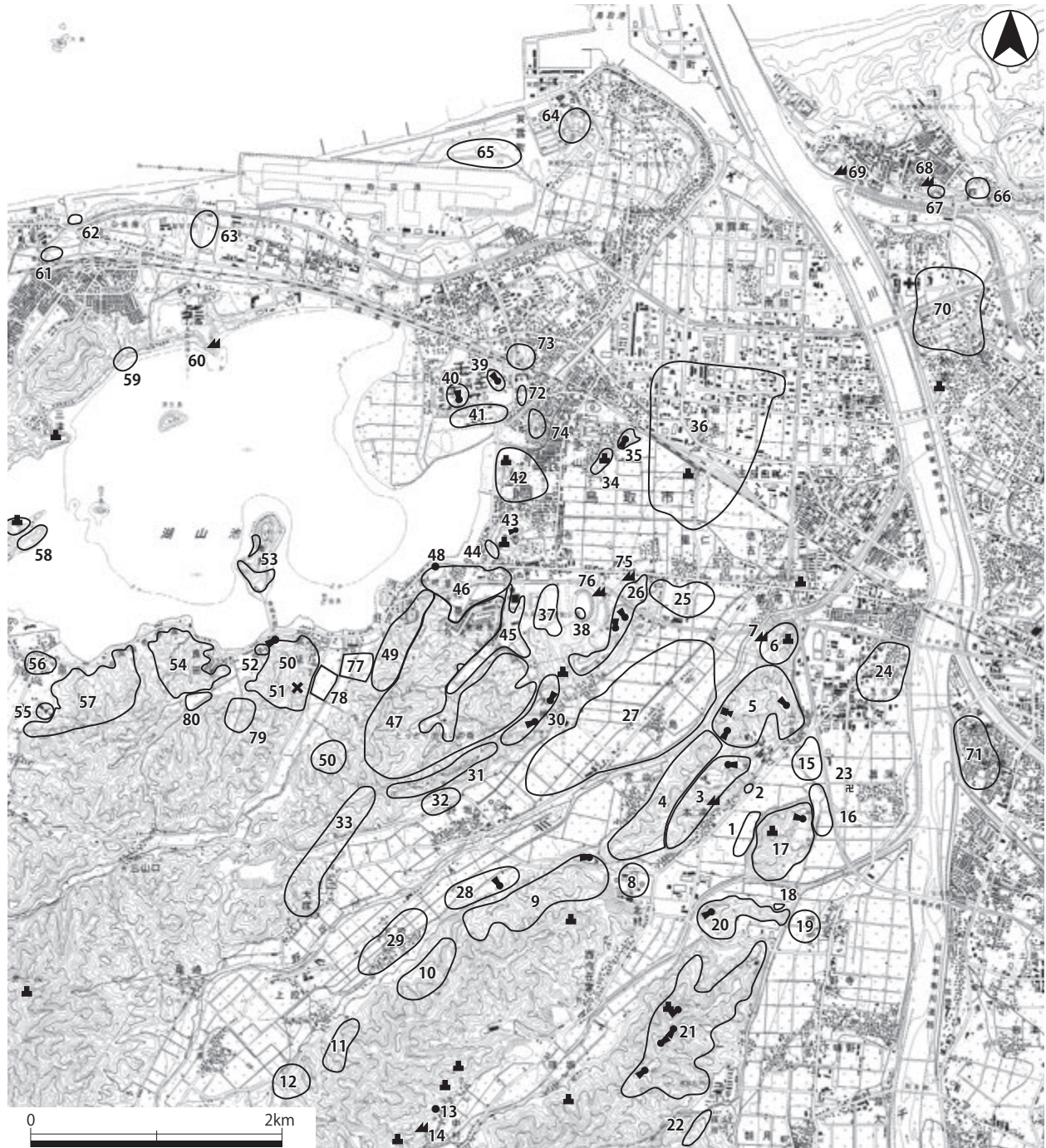
千代川の東岸には急峻な山並みが連なり、扇ノ山から国府町の山地を経て久松山、摩尼山等の低い山並みが海岸付近にまで続く。一方、西岸には、野坂川や有富川の流域に、標高400 m付近を境に緩やかな傾斜を描く準平原状の山地が広がり、両河川の浸食により、谷底平野と同一方向に延びる細長い丘陵が交互に連続している。また、千代川の河口周辺には鳥取砂丘が発達しており、西岸に形成された砂丘の後背部には湖山池と呼ばれる潟湖が生じている。

有富川 鳥取市南西部にある岩坪付近の標高500 mほどの山地に源を発し、北東に流下し、本高を経て、菖蒲付近で千代川に合流する。流路延長は約12kmである。表流水は不安定で渇水期には伏流水となる。嶋付近では宮谷古墳群が所在する東岸の丘陵沿いを流れる。明治期までは舟運にも利用されていた。また、昭和時代の初期までは、しばしば洪水を起こしていたが、現在は河川改修により治水が進展している。

本高弓ノ木遺跡 千代川に南西側から合流する有富川北岸の谷底平野に立地しており、千代川河口から直線で約6kmの地点にある〔第Ⅱ-2図1〕。遺跡の西側に平野が広がり、現在は広範囲に水田が営まれている。圃場整備により谷底平野に形成されていた本来の細かな微地形は失われている。遺跡は、開析谷上流域に広がる扇状地性低地の末端または谷底低地部分に位置する。空中から撮影されたカラー写真では地表が暗色のテクスチャーを示しており、相対的に排水不良で、泥質堆積物が堆積している場所にあると推測される。

第2節 有富川周辺の遺跡と歴史的環境〔第Ⅱ-2図〕

旧石器・縄文時代 千代川の西岸地域には、特に湖山池の南東岸に桂見遺跡(46)や布勢第1・2遺跡(37・38)といった山陰地方を代表する低湿地遺跡が周知されている。この一帯における人の営みは、少なくとも縄文時代前期にさかのぼり、その後は縄文時代が終焉に至るまで断続的な活動の痕跡が認められる。一方、本高下ノ谷遺跡(2)周辺では、後期後葉頃にさかのぼる活動の痕跡が見いだされている。本高弓ノ木遺跡の北東500 mほどのところにある山ヶ鼻遺跡(15)では、元住吉山式～滋賀里Ⅲ a式に至る土器が出土している。また、本高弓ノ木遺跡には、滋賀里Ⅲ a式に後出する篠原式を伴う晩期中葉の遺構がある。有富川の西側に後・晩期の生活痕跡が点在していることがうかがわれる。また、山ヶ鼻遺跡から北東約500 mに所在する古海遺跡(24)からは晩期終末の突帯文土器が出土している。古海遺跡の突帯文土器は、遠賀川式土器を伴わない単純資料で、口縁部に一条の突帯がめぐる砲弾型の深鉢を基本器種とする古海式の標識となっている。



- | | | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|------------|------------|
| 1 本高弓ノ木遺跡 | 16 菖蒲遺跡 | 31 野坂古墳群 | 43 布勢1号墳 | 58 岩本第1遺跡 | 71 古市遺跡 |
| 2 本高下ノ谷遺跡 | 17 釣山古墳群 | 32 野坂遺跡 | 44 帆城遺跡 | 59 中ノ茶屋古墳群 | 72 湖山第1遺跡 |
| 3 本高古墳群 | 18 本高円ノ前遺跡 | 33 大塚古墳群 | 45 東桂見遺跡 | 中ノ茶屋遺跡 | 73 湖山第3遺跡 |
| 4 宮谷古墳群 | 19 服部遺跡 | 34 足山古墳群 | 46 桂見遺跡 | 60 三津所在横穴 | 74 湖山古墳群 |
| 5 古海古墳群 | 20 服部古墳群 | 35 石場山古墳群 | 47 桂見古墳群 | 61 末恒遺跡 | 75 里仁第1横穴 |
| 6 徳尾古墳群 | 21 下味野古墳群 | 36 岩吉遺跡 | 48 西桂見墳丘墓 | 62 溝川遺跡 | 76 里仁第2横穴 |
| 7 松ヶ谷横穴群 | 22 篠田古墳群 | 37 布勢第1遺跡 | 49 倉見古墳群 | 63 長者石遺跡 | 77 高住井手添遺跡 |
| 8 北村恵儀谷遺跡 | 23 菖蒲廃寺 | 38 布勢第2遺跡 | 50 高住古墳群 | 64 賀露第1遺跡 | 高住牛輪谷遺跡 |
| 9 小森山古墳群 | 24 古海遺跡 | 39 大熊段古墳群 | 51 高住銅鐸出土地 | 65 賀露第2遺跡 | 78 高住平田遺跡 |
| 10 下段古墳群 | 25 里仁遺跡 | 大熊段遺跡 | 52 塞ノ谷遺跡 | 66 浜坂遺跡 | 79 良田平田遺跡 |
| 11 上段古墳群 | 26 里仁古墳群 | 40 三浦古墳群 | 53 青島遺跡 | 浜坂1号墳 | 80 良田中道遺跡 |
| 12 上原古墳群 | 27 大楠遺跡 | 三浦遺跡 | 54 良田古墳群 | 67 栃木山遺跡 | |
| 13 中村須恵器窯跡群 | 28 小森山遺跡 | 41 湖山第2遺跡 | 55 松原谷田遺跡 | 68 浜坂横穴群 | |
| 14 中村横穴群 | 29 下段遺跡 | 42 天神山遺跡 | 56 松原所在遺跡 | 69 荒神山横穴群 | |
| 15 山ヶ鼻遺跡 | 30 梶間古墳群 | 天神山城 | 57 松原古墳群 | 70 秋里遺跡 | |

第II-2図 本高弓ノ木遺跡周辺の遺跡

弥生時代 本高弓ノ木遺跡では、古海式の特徴を有す大量の突帯文土器とともに、弥生時代前期の中でも古相の特徴をもった遠賀川式土器や、木製の農具類が出土している。有富川の西岸では、鳥取平野でも比較的早い時期に水稻耕作が開始されていると考えられる。山ヶ鼻遺跡では中期から後期に至る土器を伴う水路跡などが検出されており、弥生時代を通じて、この一帯における沖積地の利用が継続している。後期になると、墳丘墓の築造に表象される有力者の台頭が認められる。本高から北東に約3km離れた湖山池南東岸の丘陵地帯では山陰地方を代表する規模の大型墳丘墓が造営されている。本高に近い場所では、後に本高古墳群（3）や古海古墳群（5）が造営される丘陵の先端にある徳尾古墳群（6）で、1辺が10mほどの方形墳丘墓が発見されている。

古墳時代 有富川周辺の丘陵には各所に古墳が分布している。このうち、本高弓ノ木遺跡と深い関係にあるとみられるのが、本高下ノ谷遺跡の背後に所在する本高古墳群である。本高古墳群は本高弓ノ木遺跡を見下ろす環境にあり、平成21年度の発掘調査によって、調査前には直径20m級の円墳と考えられていた本高14号墳が、全長63.7mをはかる前方後円墳であることが確認された。副次的な埋葬施設には4世紀中葉のものと思われる土器が副葬されており、山陰地方に築造された最初期の前方後円墳と考えられている。

一方、本高古墳群の直下に位置する本高下ノ谷遺跡では、同じく古墳時代前期当該期の土器や木製品が出土している。また、鳥取県埋蔵文化財センターが実施した本高弓ノ木遺跡3区の調査では、前期から中期に営まれていた水田関連施設が報告されているし、5区の調査では、本高14号墳と同時期に建設され、機能していた大規模な水利施設も見つかった。この施設は、この一帯を利用するための幹線水路だった可能性が高く、この地一帯を勢力下においたとみられる本高14号墳の造営主体との関わりがうかがわれる。

その後、本高古墳群では中期中葉にいたるまで古墳が築造されている。同一丘陵上では、古海古墳群においても有富川流域を見通す立地にも古墳の造営が続く。しかし、本高14号墳に匹敵する規模の大型古墳の存在ははっきりとしない。一方、野坂川の流域には大型の前方後円墳などが散見されることから、中期以降、千代川左岸地域で首長権力に移動があったのかもしれない。なお、後期には全長約26mの前方後円墳である釣山2号墳、終末期には、切石でつくられた石棺式石室をもつ山ヶ鼻古墳（古海13号墳）が発見されている。

古代以降 古代では、菖蒲に白鳳時代創建とみられる菖蒲廃寺跡（23）が周知されている。また、菖蒲遺跡（16）では、奈良時代の建物跡などがみつまっている。この地域は高草郡に属し、高庭庄として東大寺による荘園開発が行われていたことが、『東大寺東南院文書』の「東大寺因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」にみえる。本高の付近には古代山陰道の存在が推定されており、古代において、この一帯は、千代川左岸の中でも最重要地域の一つであった可能性が高い。菖蒲遺跡や山ヶ鼻遺跡では、鎌倉時代の遺構や遺物も確認されており、この一帯で水田を耕し、村落を営む人々が引き続き存在していたことがうかがわれる。

主要参考文献

- 財団法人鳥取県教育文化財団（中原斉）編 1985『里仁古墳群〈32・33・34・35号墳の調査〉』
- 財団法人鳥取市教育福祉振興会（西浦日出夫・小谷修一）編 1993『古海古墳群 菖蒲遺跡』
- 財団法人鳥取市教育福祉振興会（谷口恭子・藤本隆之・神谷伊鈴）編 1996『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』

- 財団法人鳥取市文化財団（藤本隆之）編 2006 『野坂遺跡』
- 財団法人鳥取市文化財団（谷口恭子）編 2009 『徳尾墳墓群』
- 鳥取県企画室 1966 『鳥取県地質図説明書』
- 鳥取県教育委員会（亀井熙人・田中弘道・久保穰二郎）編 1985 『徳尾遺跡群発掘調査報告書』
- 鳥取県教育委員会（大川泰広・岡戸哲紀）編 2010 『本高古墳群』
- 鳥取県教育委員会（北浩明・岩垣命）編 2011 『本高弓ノ木遺跡（1～3区）』
- 鳥取県埋蔵文化財センター編 1986 『鳥取県の古墳』 鳥取県埋蔵文化財シリーズ 1
- 鳥取市教育委員会編 2011 『平成 22（2010）年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
- 鳥取市教育委員会（杉谷愛象）編 1978 『大桒遺跡Ⅰ』
- 野田久男・清水真一 1983 『日本の古代遺跡 9 鳥取』、保育社

第Ⅲ章 発掘調査の方法

第1節 試掘調査の成果と本調査の方針

第1項 試掘調査成果の概要

本高弓ノ木遺跡4区と5区の発掘調査に係る当初設計は、鳥取市教育委員会によって平成20(2009)年度に実施された試掘調査の成果に基づく。試掘調査の際には、4区に7カ所(Tr-1～7)、5区に2カ所(Tr-8・9)にトレンチが設けられ、包含層および遺構面の有無が確認された。

4区の各トレンチでは中世、古墳時代、弥生時代の遺物を包含する堆積が確認され、Tr-1～5・7では溝などの遺構が検出されている。また、最も5区に近い場所に位置するTr-6では、標高7.1m付近に堆積した粘土層から弥生時代開始期の土器が多数出土しており、この付近に当該期の遺物包含層の広がりが見込まれた。一方、5区の各トレンチでも中世や古墳時代の遺物を包含する堆積が確認されている。Tr-9からは、古墳時代前期の土師器や弥生時代後期の土器が多量に出土しており、当該期の遺構が調査区内に存在する可能性がうかがわれた。また、Tr-8では溝や土坑が検出されている。こうした成果をもとに、4区と5区については、包含層1層と遺構面1面(部分的に2面)の調査が必要であるという判断がなされた。

また、本調査の対象とならなかった5区の南側にも3カ所にトレンチ(Tr-10・11・12)が設けられていた。各トレンチからは、古代や古墳時代の遺物が出土していたが、遺物量が少ないこと、遺構が確認できなかったことから、この近辺に遺跡が広がる可能性は低く、調査の必要性がないという判断が下された。

第2項 本調査の方針

調査区毎に調査の方法が異なる場合もあるので、詳細については、第Ⅳ章にて記述を行うが、ここでは調査全体にかかわる調査の目標と方針について概観しておく。

試掘調査の成果および立地から、本高弓ノ木遺跡の性格は、大部分が水田や畠などの生産に関連するものと想定された。また、5区の南側には弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた集落の居住域の一部が含まれている可能性が考えられた。そこで、発掘調査は、居住域の存在がうかがわれる5区の南側から取りかかり、順次、北側に向かい、5区の調査終了後に4区の調査を行うこととした。

一方、遺跡の立地を勘案すると、試掘調査のさいに基盤層と判断されている堆積が、基盤層ではない可能性があると思われた。そこで、5区の表土を掘削するさい、機械を使用して、一部を深く掘り下げ、下層の確認を行ったところ、基盤層と判断されていた堆積層の下にも炭化物や植物遺体を含む堆積層があることが明らかになった。こうした状況をふまえ、人力掘削を始める際に、調査区に設定したグリッドライン沿いにサブトレンチを設け、遺跡内の堆積を再観察し、調査方針を検討することにした。

その結果、当初設計において、遺物包含層と評価されていた堆積層は、水田の耕作土層で、その下

面に遺構が存在していることを確認した。また、その下層にも人為的に攪拌された可能性が高い堆積が確認できる場所もあり、下層も発掘調査の対象となる可能性が高まってきた。そこで、当初設計において調査の対象とされていた堆積と遺構面の調査を進める過程で、さらに下層の状況を詳細に把握しながら、県教委文化財課と県教育文化財団の間で調査にかかる設計の見直しすることとなった。

したがって、調査開始前に、明確な調査目標を設定し、その目標を達成するための調査方針を決定することはできなかったが、この調査では、環境の変化と人との関わりに着目し、遺跡の成り立ちを体系的に捉えることに力点をおきながら、調査を進めることとした。

第2節 調査地の地区割りとグリッド名

第1項 調査地の地区割り〔第Ⅲ-1・2図〕

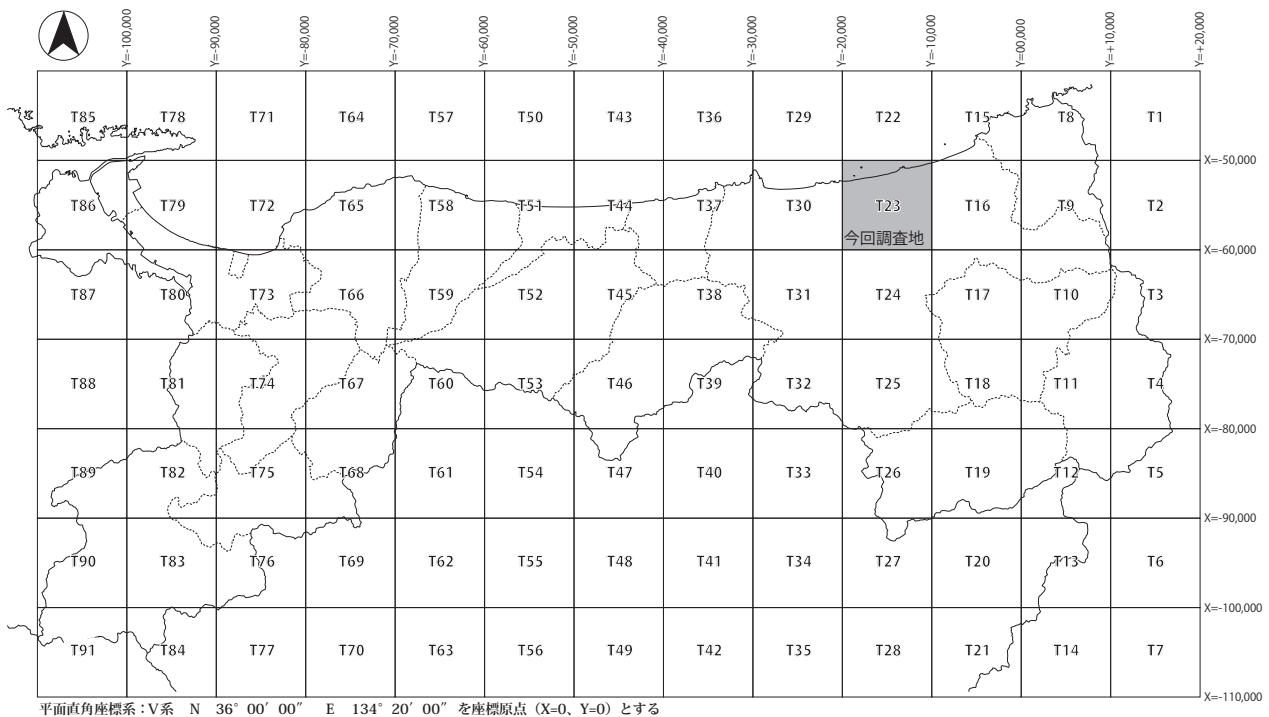
県教育文化財団に再委託された鳥取西道路関連の発掘調査では、遺跡や遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用するグリッドに、平面直角座標系の第Ⅴ系（世界測地系）を使用している。さらに、県内を対象に発掘調査の地区割りを標準化する試みとして〔第Ⅲ-1図〕、県域に「第Ⅰ区画」「第Ⅱ区画」「第Ⅲ区画」「第Ⅳ区画」を設定し、調査地にグリッドを割り付けを行った〔第Ⅲ-2図〕。

第Ⅰ区画

鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000 m × 10,000 mで、1～91の区画を設け、北東隅からT1～T91の記号を付した。

第Ⅱ区画

91分割した第Ⅰ区画の1区画内を100等分した区画である。1,000 m × 1,000 mを第Ⅱ区画の1区



第Ⅲ-1図 地区割り模式図（鳥取県）

画とし、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。

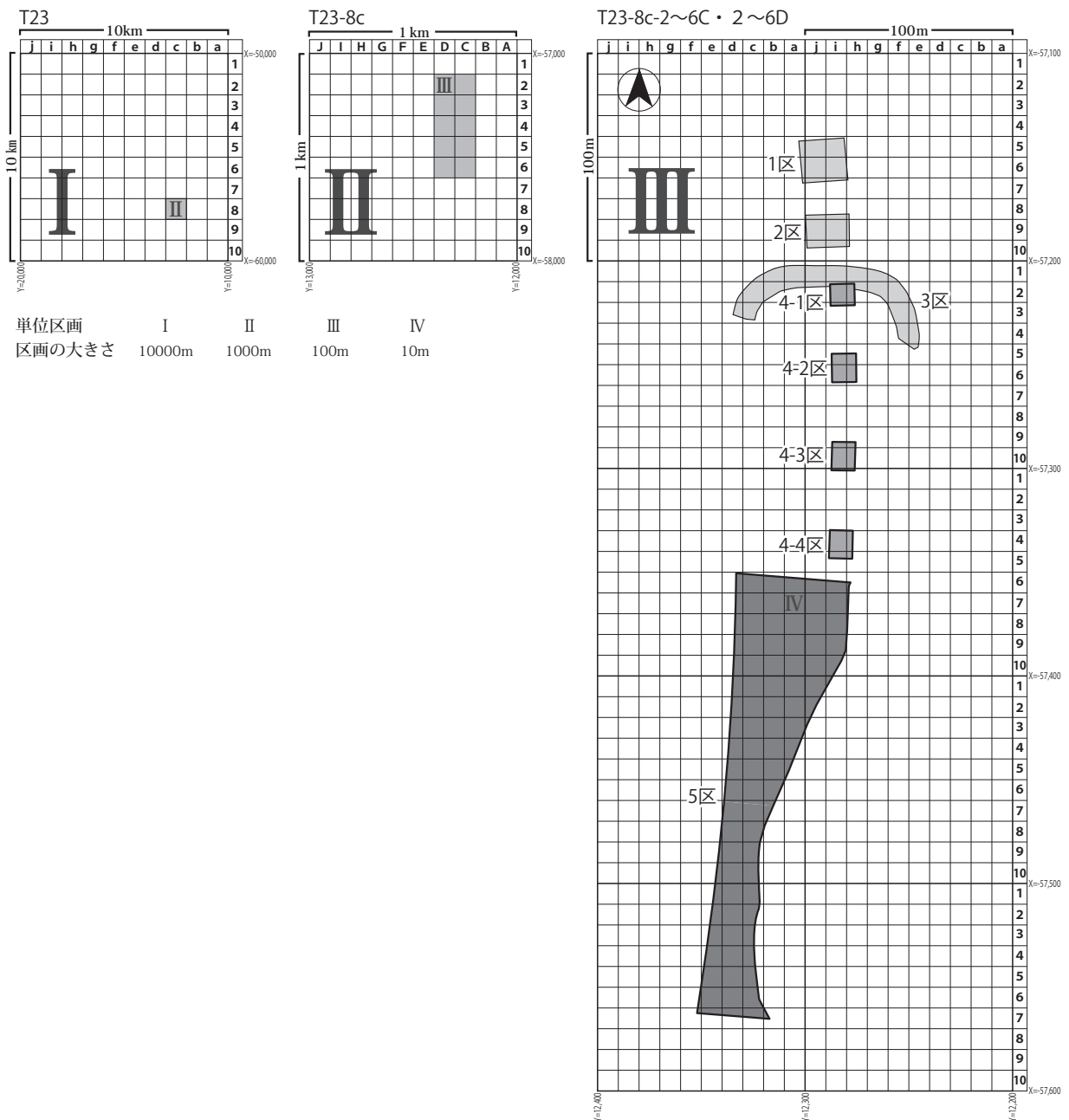
第Ⅲ区画

第Ⅱ区画を100等分した区画である。100m×100mを第Ⅲ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にA～Jを付し、各区画を1A～10Jと呼称した。

第Ⅳ区画

第Ⅲ区画を100等分した区画である。10m×10mを第Ⅳ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。この10m×10mの区画が遺構の位置表示や遺物取り上げ時に使用する基本グリッドとなる。

ところで、第Ⅴ系を用いた地区割りは多くの発掘調査で一般的に行われており、特別な方法ではない。しかし、調査年次、遺跡名称、調査組織、場合によっては調査担当者が異なると、地形や内容が



第Ⅲ-2図 調査地の地区割り（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区画）

連続する1つの遺跡、または連続する調査区であっても、調査のたびにグリッドの名称が任意に設けられていることがある。その場合、一連の遺跡なのにグリッド名が連続しなかったり、同一名称のグリッドが重複することもある。このようなグリッドの設定は、遺跡の記録を作成し、それを評価するうえで望ましいこととはいえない。

県内全域の発掘調査に共通使用できる地区割りの使用は、こうした問題を解消するための方法の1つである。共通の基準で設定されたグリッドは、複数の遺跡を包括した遺跡群の評価、さらには記録保存された埋蔵文化財情報の整理、活用にも有意であろう。

第2項 調査区とグリッド名〔第Ⅲ-2図〕

本高弓ノ木遺跡4区と5区は、いずれも第Ⅰ区画「T23」〔第Ⅲ-1図〕、第Ⅱ区画「8c」内に所在している。しかし、第Ⅲ区画は複数の区画にまたがっており、4-1区と4-2区が「3C」、4-3区が「3C・4C」、4-4区が「4C」、5区が「4C・5C」「4D・5D・6D」である。そして、第Ⅲ区画内を10m四方に分割した第Ⅳ区画が、包含層の掘削や、包含層出土遺物を取り上げるさいの作業の基礎単位となる。

なお、グリッド名は、第Ⅰ～Ⅳ区画までの名称を「-」でつなぎ、「T23-8c-第Ⅲ区画-第Ⅳ区画」と表現する。ただし、本高弓ノ木遺跡の4-1～5区、5区は全てが「T23-8c」内にあるので、本文中では、第Ⅰ・Ⅱ区画を表す「T23-8c」を省略し、第Ⅲ区画と第Ⅳ区画のみをグリッド名として記す。

第3節 調査と記録の対象

第1項 記録の対象

本調査では主に古代以前の堆積や遺構面を調査の対象とし、中世以降の堆積や遺構については、必要に応じて記録を作成することにした。その理由は、調査地が中世以降は水田や畠として利用されており、耕作による連続的な攪乱により、各時代の遺構が遺存状況が悪く、平面的には遺構の検出、記録が困難なことによる。したがって、中世以降の耕作土については、人力による掘削のさいに遺物の取り上げのみを行い、主要な遺構については、次の古代の遺構面において記録を行った。

第2項 遺構名と番号

調査中に検出された遺構に通し番号を付し、機能が特定（または推測）できる遺構には、番号の後に遺構の性格や機能を表す名称を記した（例えば、1土坑、2柱穴など）。また、竪穴住居や掘立柱建物のように複数の遺構（例えば、数基の柱穴など）によって構成されるものを本調査では集合遺構と認定し、それぞれの性格や機能等を表す呼称と番号を与えることにした（竪穴住居1、掘立柱建物2など）。

第3項 遺物の取り上げと遺物カードの記載

遺物の取り上げには、鳥取県教育文化財団調査室が用意した遺物カードを使用した。取上番号は通し番号とし、遺物カードに記載された項目に基づいて遺物取上台帳を作成し、出土した遺物を取り上げ、管理した。遺物カードの記載項目・内容は以下のとおりである。

- 遺跡名** 「本高弓ノ木遺跡 09」「本高弓ノ木遺跡 10」と記載。「09」「10」はそれぞれ 2009 年度、2010 年度に調査を実施したことを示す。
- 地区名** 遺物の取り上げは、10 m × 10 m のグリッドを基本とし、第 I ～ IV 区画で構成されるグリッド名を記載した（第Ⅲ章第 2 節参照）。
- 層位名** 遺物が帰属する包含層や遺構内に堆積した層位の番号ないし名称を記載した。
- 遺構名** 遺物が帰属する遺構の名称を記載した。
- 取上 No** 取り上げ順に通し番号を記載した。
- 出土年月日** 検出日ではなく、取り上げ日を記載した。
- 図面** 遺物の出土状況が記録された図面の有無と図面のスケールを記載した。
- 備考** 特記事項を記載した。
- 時代・時期** 取り上げた遺物の帰属時期を記載するが、この度の調査では記載を省略した。
- 種別** 土器や鉄器など素材によって大別される遺物の種別を記載。
- その他** 上記の記載項目とは別に、取上時に座標値が記録されたものについては、遺物カードのメモ欄に座標値を記載した。

第 4 節 調査と記録作成の方法

第 1 項 掘削

掘削はスコップや移植ゴテを用いた人力掘削を原則とした。ただし、表土や近現代の耕作土に限って、バックホウによる掘削を行い、人力による掘削は、近世以前の耕作土や氾濫堆積物などを対象とし、層界に留意しながら、層位的な発掘をこころがけた。そのため、調査の過程では土層観察用の断面をグリッドラインに沿って残すようにし、必要に応じて調査区を横断するサブトレンチを設け、土層の観察を行いながら、掘削の単位や深度を検討し、平面的な調査の対象となる遺構面を確認していった。

第 2 項 土層区分と土層名

本調査では、主にグリッドラインに沿って土層観察用畦を設け、サブトレンチを掘削しながら土層の断面観察を行い、上層から順番にアラビア数字を付すことにした。そのさい、一連の土層に含まれる遺物の時期差や、堆積環境の変化に着目しながら、調査区内の堆積を大別し、アラビア数字を付すことをこころがけた。

さらに分層時に、人為による攪乱の有無に注意を払うこととした。そして、耕作土や造成土など人為的な攪乱の痕跡が明瞭に観察できる土層を「a 層」、河川の氾濫などに起因する自然堆積層を「b 層」、過去の地表面に形成された古土壌層で、人為による攪乱が明瞭に観察されないものを「a' 層」とした（a' 層には、a 層と b 層の区別が肉眼では判別できなかったものを含む）。そして、アラビア数字と、「a」「b」「a'」の組み合わせを、土層名とした。

なお、a 層の直下にある b 層または a' 層、a' 層の直下にある b 層は、下層が上層の母材となっている場合がある。こうした理解が可能な堆積については、アラビア数字を分けず、同一のアラビア数

字に a、b、a' を組み合わせている。

土層断面図などの記載には、土層名の後に、色調と層相を記し、混入物などについては土層名の後に加えた括弧に内容を記した。また、調査地が広範囲におよぶことから、分層時には可能な限り複数の監理者で検討を行い、情報の共有をはかるとともに、a、b、a' 層の区別に齟齬が生じないように注意を払った。ただし、括弧書きした混入物などの記載については、観察視点の共有をはかるように心がけたが、記載内容について細部の統一をはかっていない。

第3項 遺構面

遺構の検出は層界で行った。本高弓ノ木遺跡では、自然堆積層、すなわち b 層の直下で確認できる遺構面は調査区全体に確認できなかった。したがって、本調査で記録の対象とした遺構面は、原則、人為などによって攪乱された土壌層の除去面である。そこで、本調査では、各遺構面を、「第○a層下面」と呼称することにした。

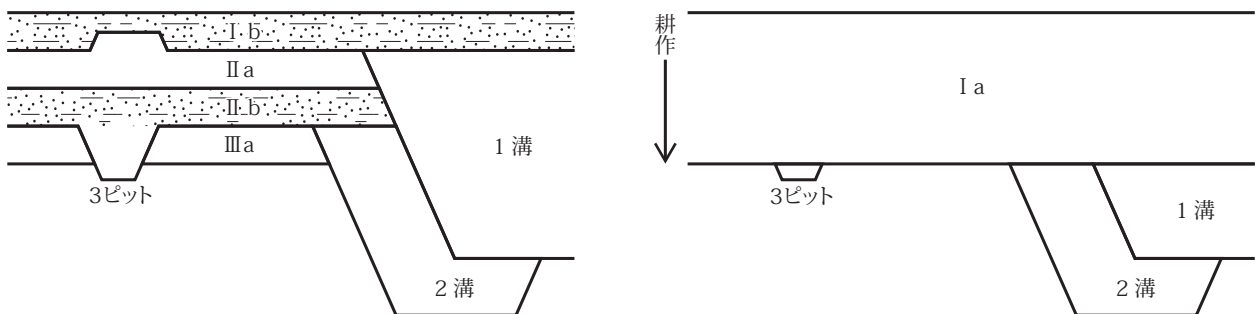
なお、本調査で a 層とした土層の多くは、耕作などの行為により、ある時期の地表面から一定の深度が攪乱されることで形成されたものである。そのため、b 層の下面が、ある一時期の地表面を覆っているのに対し、a 層下面は、ある一時期の地表面ではない。したがって、a 層形成時に累積する複数の旧地表面に攪乱がおよんでいれば、a 層下面で検出した遺構面には、土器数型式分の時期幅をもつ遺構が混在する可能性がある〔第Ⅲ-3 図右〕。

第4項 図面による記録

本調査では、現地で作成した「素図」の情報を、遺構面、遺構単位に整理、統合して「編集図」を作成した。なお、素図とは、測量、作図の方法を問わず、発掘調査に伴い遺跡で作成した遺構、土層断面、遺物を記録した図面類である。素図のうち、平面図はトータルステーションによる電子測量により、土層断面図の作成には、手測りと写真測量を併用した。一方、編集図とは、調査中に作成された素図の中で関連をもつ情報を整理し、デジタルデータに統合、編集したものを意味する。編集図の作成には adobe イラストレーター CS4 を使用した。

第5項 写真による記録

使用機材・媒体 写真の撮影は主に中型（6×7判）一眼レフカメラで行い、小型（35mm判）一眼レフカメラ、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ APS-C 以上、有効画素数 1220 万画素以上）



第Ⅲ-3 図 a 層下面検出遺構面の概念図

を併用し、中判と小型一眼レフカメラには、6×7リバーサルフィルム（富士フィルム社 プロビア 100F）、同黑白フィルム（富士フィルム社 ネオパン 100ACROS）、35mm リバーサルフィルム（富士フィルム社 プロビア 100F）、同黑白フィルム（富士フィルム社 ネオパン 100ACROS）の使用を基本とした。また、デジタル一眼レフカメラによる撮影はRAW・JPEG形式で画像データを取得し、保存した。なお、記録対象の内容によっては、中型一眼レフカメラでの撮影を省略したことがある。なお、メモ的な写真の撮影は全てデジタル一眼レフカメラによる。必要に応じて、大型一眼レフカメラによる撮影も行った。

写真の管理 撮影した写真は、原則として、撮影日順に番号を付して、写真台帳に登録した。撮影した内容（タイトル）はデジタル一眼レフカメラに写し込み、中型と小型一眼レフカメラによって撮影したフィルムの検索用資料とした。写真台帳は、全ての写真を網羅するデジタル画像を基に作成し、中型と小型一眼レフカメラで撮影したフィルムを整理、管理できるようにした。

写真撮影 調査中、土層、遺構内の堆積、遺構の検出と完掘状況、遺物の出土状況等を記録するために写真撮影を行った。写真撮影は、撮影対象、範囲、アングル、使用機材等に関する発掘調査監理者の指示をもとに支援調査員が行った。

第5節 出土遺物の整理

土器 調査終了後に洗浄、接合、復原、実測を行った。器種、形状が判明ないし復元できる個体を実測の対象とした。

木製品 調査終了後に洗浄、注記、接合、復原、実測を行った。器種や用途、または、特徴的な加工が施されているものを実測の対象とした。また、素材の樹種同定を目的としたサンプリングを行い、鳥取大学地域学部の中原計氏に樹種同定を依頼した。

写真撮影 土器や木製品を対象に、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ フルサイズ）で撮影を行った。

保管 図面、写真の記録類、出土遺物はすべて台帳に登録して収納作業を行なった。

第IV章 調査成果

第1節 調査区と基本土層断面

(1) 調査区の地形

発掘調査の対象となった4・5区は、標高点104mの独立丘陵・釣山の西側にあり、5区は調査区東側が山裾と接している。遺跡が所在する現在の標高は、調査地最北端に設けられた4-1区北端で標高8.12m、4-4区南端で8.35m、5区北西端で8.49m、最も南側端となる5区南端で8.75mである。見かけ上は平坦な地形となっているが、北から南側にかけて少しずつ地形が高くなっている。また、調査区周辺については、5区の南西から西側の標高が僅かに高く、有富川から釣山西側の山裾よりも、若干、低い地形が生じていることがわかる。5区の発掘調査では、縄文時代晩期以前に5区の西側から釣山の裾に向かって流入する谷地形（710溝ほか）がみつかり、そのことが、現在の地表面にも微妙な高低差として認識できるものと考えられる。

(2) 調査区の形と地区割り

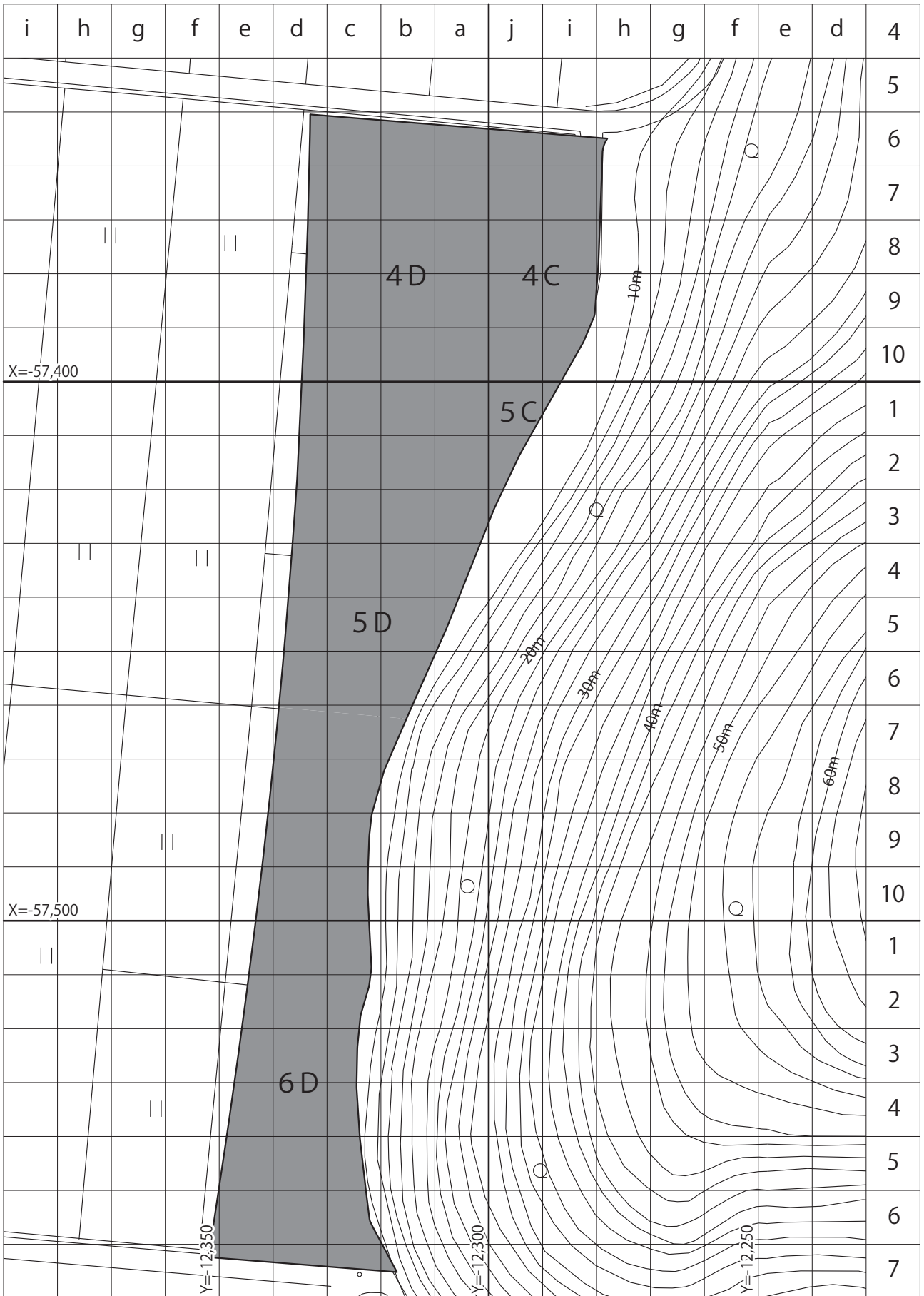
5区は南北に長い調査地である。調査地北端は $X=57,350$ 、南端は $X=57,565$ ライン付近にあり、全長は200mをこえる。調査区西側の境は、計画されている道路の軸に沿うため直線的だが、東側は釣山の山裾に沿った形となっている。そのため調査地は細長い撥形をしており、北側が最も幅広で東西約50m、南側の幅は東西約36mである。また、最も幅が狭くなるのは $X=-57,480$ ラインの付近で、東西約19mである。

調査地の地区割りは、平面直角座標系の第V系（世界測地系）に基づく（第III章第2節参照）。調査時には第IV区画となる10m四方の最小区画に基づき調査記録などを作成した。5区に割り付けられたグリッドは、第I区画T23、第II区画8C、第III区画4D～6D・4C～5Cであり、各第III区画内を10m四方に分割したのが第IV区画となる〔第IV-1図〕。なお、第IV区画に分割されたグリッド名は、第I～IV区画の各名称の組み合わせによるが、本報告書では、全てのグリッドに共通する第I区画T23と第II区画8cを省略し、第III区画と第IV区画のみをグリッド名として記述する。

(3) 基本土層断面

調査区は扇状地性低地の末端または谷底低地部分にあり、泥質堆積物が堆積していると考えられる。また、釣山の山裾にあり、微地形を利用した耕作や居住の痕跡が存在する可能性がうかがわれた。そこで、現在にいたる地形の変化を把握するため、調査の当初に基本層序を記録するための土層断面記録用の畦（以下、土層断面）を設定することにした。

東西方向の土層断面は北端から50m毎に記録を作成することとし、 $X=-57,380$ 、 $X=-57,430$ 、 $X=-57,480$ 、 $X=-57,530$ ラインに土層断面を設定した。南北方向の土層断面については、調査区内を貫通する $Y=-12,300$ ラインが調査区北半で調査区の西壁に接近するため、記録の作成が難しいことから、北半部を記録の対象とし、 $Y=-12,300$ 、 $Y=-12,320$ ラインに土層断面を設定した。



第IV-1 図 5区調査区グリッド配置 (1:1000)

第2節 基本層序

分層時に、人為による攪乱の有無に注意を払い、耕作土や造成土など人為的な攪乱の痕跡が明瞭に観察できる土層を「a層」、河川の氾濫などに起因する自然堆積層を「b層」、過去の地表面に形成された古土壌層で、人為による攪乱が明瞭に観察されないものを「a'層」とした（a'層には、a層とb層の区別が肉眼では判別できなかったものを含む）。そして、アラビア数字と、「a」「b」「a'」の組み合わせを、土層名とした（第III章第4節第2項参照）。

調査地の堆積は、耕作などによる攪拌を受けたa層が各所で連続しており、b層が面的に確認できる場所はわずかであった。そのため、この調査で記録した遺構の多くは、a層の下面で検出したものである。各遺構が掘削、構築された当時の地表はa層の形成によって失われているので、同一面で検出、記録した各遺構は必ずしも同一時期のものとは限らない。以下、各層の特徴と、その下面で検出した主な遺構と、その時期について概略する〔第IV-2-1～7図 第2分冊図版2～11〕。

第1a層 室町時代～近代までの土器を伴う。灰色～灰白色の粗砂～シルト層で、攪拌された耕作土層である。調査地全域に広がる。圃場整備以前に耕作されていた近代の水田耕作土層である。酸化鉄とマンガン斑が多く認められた。また、調査地北西で、第1a層下面に酸化鉄やマンガン斑が集中する場所が検出された。その範囲は後述する弥生時代後期の700盛土の形状に相当している。また、当層下面では15世紀頃の土器を伴う1溝を検出した。したがって、中世から近世の堆積は、第1a層の耕作によって攪拌され、失われているものと考えられる。

第2a層 奈良時代～鎌倉時代の土器を伴う。第1a層よりも明るい灰白色を呈す粗砂を含むシルト層で、攪拌された耕作土である。調査地全域に認められた。当層下面では擬似畦畔などを検出した。

第2b層 調査地北西部、4D-9c・9d・10c・10d区で確認できる自然堆積である。細砂～粗砂層が第3-1-1a層上面を覆っていた。範囲は狭く、記録の対象とした基本土層断面にはあらわれていない。

第3-1-1a層 弥生時代後期から飛鳥時代までの土器を伴う。調査地全域に認められ、やや暗い灰色～灰白色または黄灰色で、細・粗砂が混じるシルト層である。第3-1-1b層を母材とする耕作土で、調査地北西では2b層に覆われる畦畔が遺存していた。当層の下面では、調査地の東西方向に連なる複数の土坑群を検出した。砂の堆積を避けるように掘削されており、粘土の採掘坑と考えた。

第3-1-1b層 第3-1-2a層を覆う自然堆積層である。第3-1-1a層の形成時の攪拌で大半が失われており、調査地の北側に一部が残存していた。灰白色の細砂～粗砂層で、葉理が明瞭に観察できる。第3-1-1a層下面で検出した土坑群の一部を覆っている。Y=-12,300、320ラインの土層断面〔第IV-2-6・7図 第2分冊図版7-1・8-3〕で、X=-57,390～380ライン周辺で認められる。

第3-1-2a層 第3-1-1a層よりも暗い灰色～黄灰色を呈す。木質遺物や黒色化した植物遺体などの有機質遺物を多く含むシルト～粘土層である。標高の高い調査地の南側では、第3-1-1a層の形成時に失われており、確認ができなかった。また、当層下面で、調査地を南北に縦走する古墳時代前期中葉の土器を伴う水路（2溝）を検出した。第3-1-2a層はこの水路が埋没する最終過程で、周辺に形成された湿地環境において生成された土壌と考えられる。人の関与が希薄な時期に堆積したものとみられ、当層中からは出土した遺物は少ない。なお、当層が失われている調査地南側で検出した導水施設（4落ち込み）は、第3-1-1a層下面で検出したものだが、2溝と一連の遺構であることから、第3-1-2a層下面に帰属する遺構として調査記録を作成した。

第 3-1-3a 層 第 3-1-2a 層よりも明るい灰白色～灰色を呈すシルト～粘土層である。ブロック土や炭化物を含む。第 3-1-2a 層同様に調査地南側には認められない。遺物の出土量も少ない。堆積の範囲は、第 3-1-2a 層よりも狭く、層厚も薄い。当層下面では、平面形が四隅突出形を呈す盛土遺構（700 盛土）と、その周囲に掘削された溝（701 溝）をはじめとする弥生時代後期初頭～終末期の遺構を検出した。なお、当層が失われている調査地南側では、当該期の土器を伴う水路（5 溝）、土坑（100 土坑）、掘立柱建物（掘立柱建物 1・2）などの遺構を第 3-1-1a 層下面で検出した。

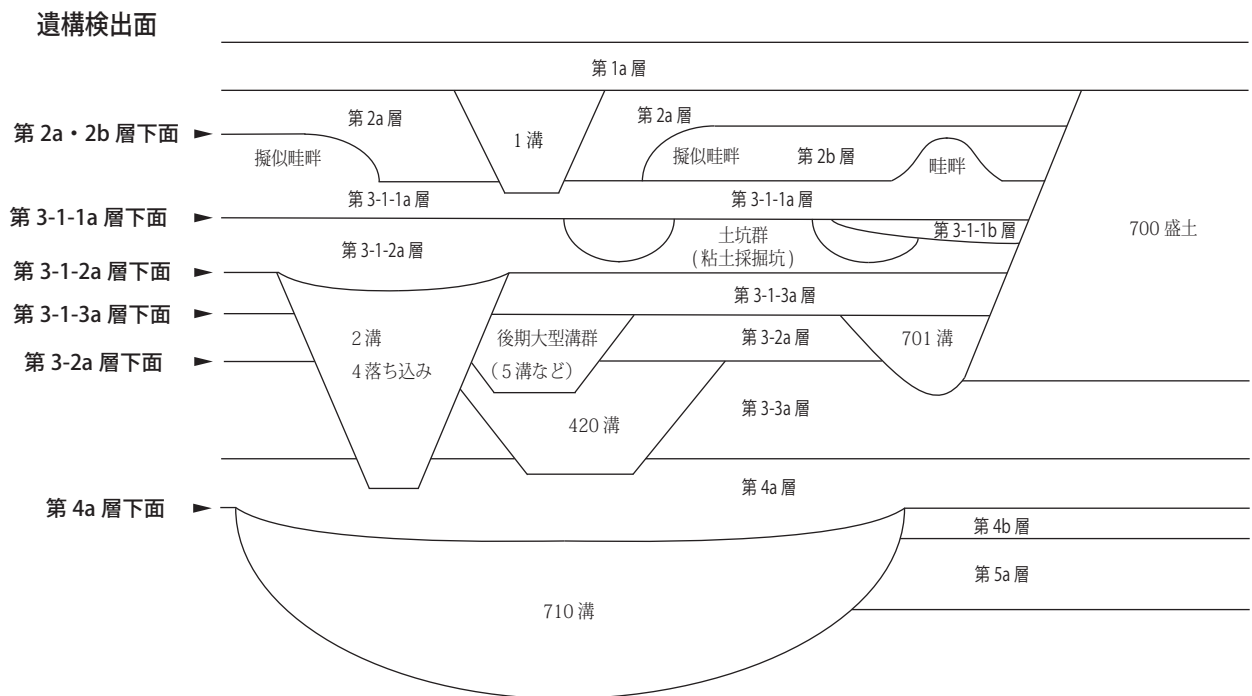
第 3-2a 層 弥生時代中期の土器を伴う。灰白色の細砂混じりのシルト～粘土層である。調査地全域に広がる。調査地北側では炭化物や下層土のブロックが混じる。当層下面で、弥生時代中期中葉～後葉の土器を伴う水路や住居跡、土坑、ピットを検出した。

第 3-3a 層 灰色～灰白色の細砂混じりのシルト層である。調査地のほぼ全域に認められる。北側で層厚が厚い。一部がグライ化しており、青灰色を呈していた。炭化物や下層土のブロックを含む場所が点在し、弥生時代中期以前の土器が含まれていたが、当層下面で遺構は検出できなかった。

第 4a・4a' 層 グライ化し、青灰色～灰白色を呈す細砂混じりのシルト～粘土層である。調査地全体に堆積しており、下層土に由来する粘土ブロックなどを含む場所がある。全体に炭化物が少量混じるが、局所的に炭化物が集中する地点が認められた。また、砂層を挟在する場所もあり、当層下面で検出した河川跡（710 溝）などから氾濫した水の影響を受けながら、生成された土壌層と考える。少量ながら、当層中から弥生時代開始期の突帯文土器や遠賀川式土器が出土している。また、当層下面で検出した 710 溝を埋める粗砂からは多量の木材と共に突帯文土器や遠賀川式土器が出土した。他に、縄文時代晩期中葉の溝なども当層下面で検出している。

第 4b 層 調査地南側（X = -57,480 ライン付近）でみられるシルト層である。層厚は 1～3 cm ほどで、葉理が明瞭に観察できる。河川からの氾濫堆積物の可能性が高い。

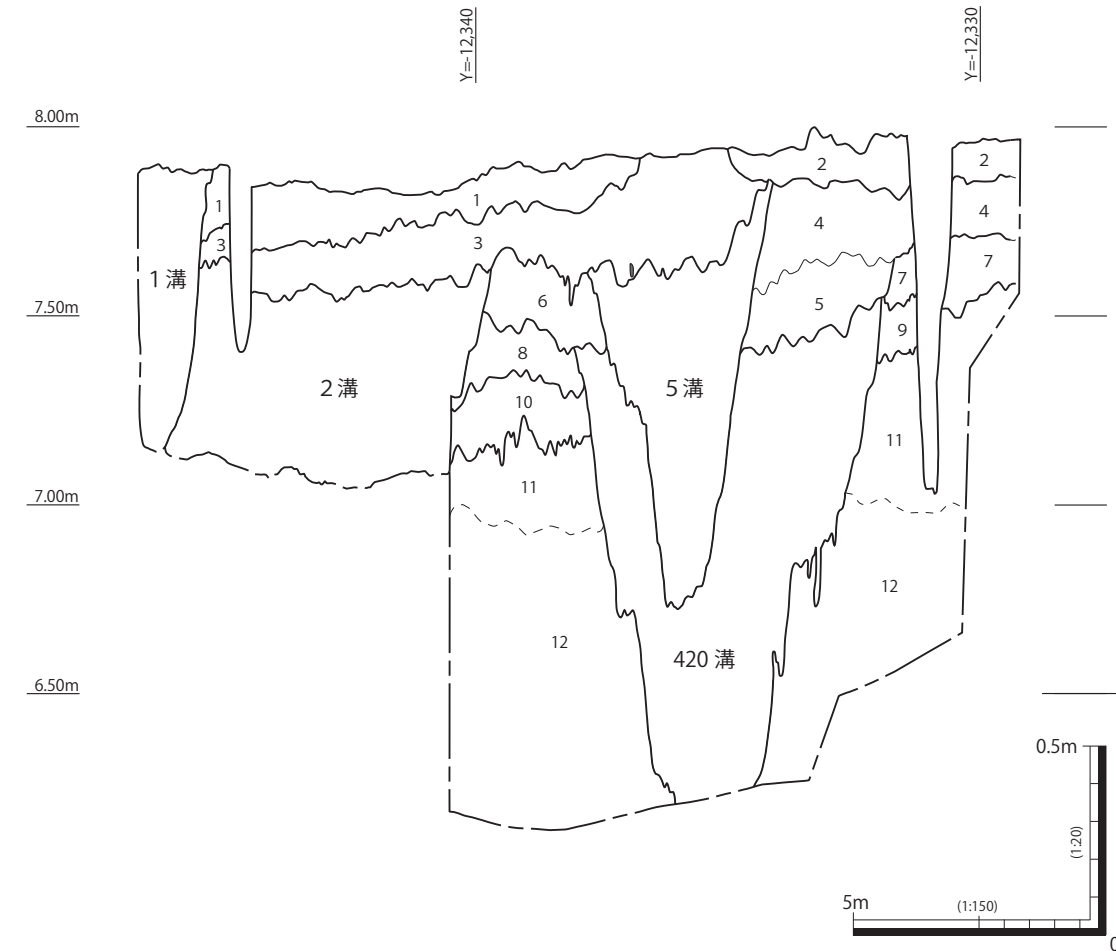
第 5a・5a' 層 グライ化した青灰色～灰白色で、細・粗砂混じりの粘土～シルト層である。調査地



第IV-2-1 図 5区土層断面模式図

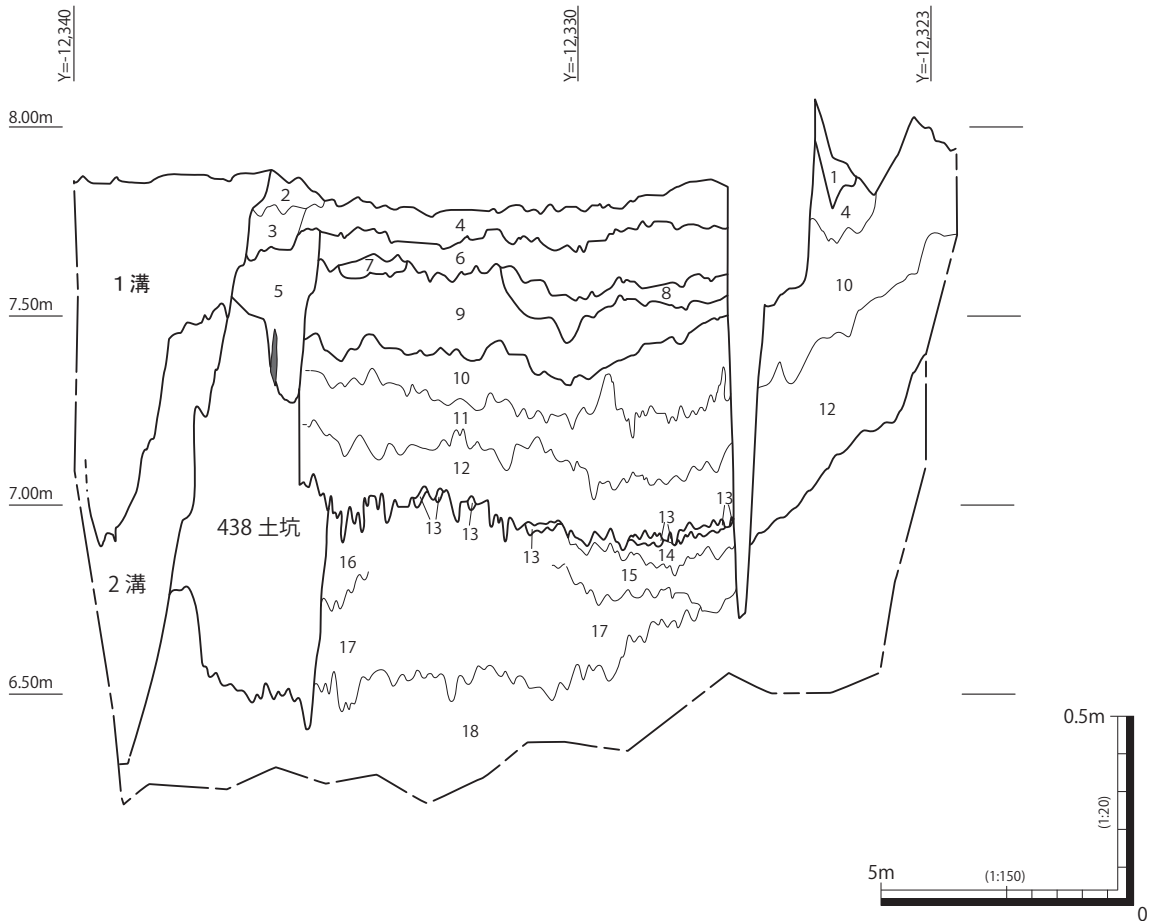
全域に認められる。当層中から縄文時代後期～晩期前半の土器が少量出土している。調査地南側では、当層内で炭化物の集中する場所も散見されたが、明確な遺構は存在していない。

調査はこの第5a層をさらに掘り下げ、遺物、遺構がみられなくなった所で終了している。遺構検出面としては、第4a層下面までであり、第4a層下面の標高は、北側のX=-57,380ライン上で6.7m、南側のX=-57,530ラインで7.1mである〔第IV-2-2・5図〕。各遺構面も基本的に調査地の南側と釣山によった東側の標高が高い。



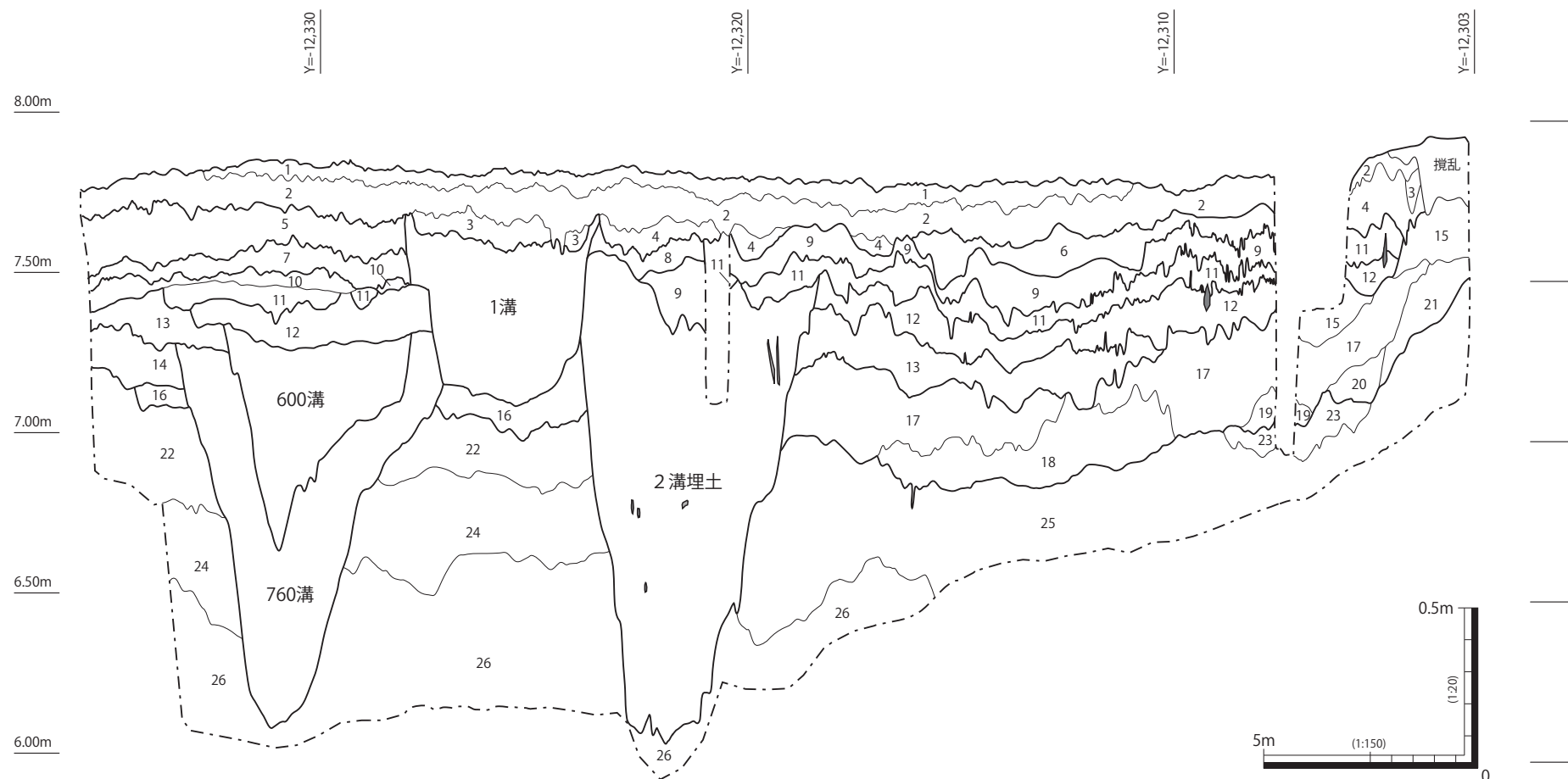
- | | | |
|-------------|----|---------------------------------------|
| 第2a層 | 1 | 2.5Y7/1灰白色 粗砂混じりシルト～細砂 (層中にマンガン斑多く含む) |
| 第3-1-1a層 | 2 | 2.5Y6/2～7/2灰黄色 シルト |
| 第3-1-2a～3a層 | 3 | 5Y6/1灰色 粗砂～粘土 (土器含む) |
| 第3-2a層 | 4 | 2.5Y6/2灰黄色 細砂～粘土 |
| | 5 | 5Y6/2灰オリーブ色 細砂～粘土 |
| | 6 | 2.5Y6/2灰黄色 細砂～粘土 |
| 第3-3a層 | 7 | 5Y7/2灰白色 細砂混じりシルト～粘土 |
| | 8 | 5Y7/1～7/2灰白色 細砂混じりシルト |
| 第4a層 | 9 | 5Y6/1灰色 シルト～細砂 |
| | 10 | 10GY6/1緑灰色 シルト～細砂 |
| 第5a層 | 11 | 5BG6/1青灰色 粘土～細砂 (部分的に炭化物混じる。ラミナは見えない) |
| | 12 | 5BG6/1青灰色 細砂～粘土 |

第IV-2-2 図 X=-57,530 ライン土層断面



- 第 1a 層 1 5Y7/2 灰白色 礫混じり粘土～シルト
- 第 2a 層 2 5Y6/1 灰色 粗砂混じりシルト～粗砂
- 3 7.5Y6/1 灰色 粗砂混じり細砂～シルト
- 4 5Y7/1 灰白色 シルト～細砂
- 遺構埋土? 5 10GY7/1 明緑灰色 粘土 (下部に炭化物比較的多く含む。15 cm大の礫含む。平面では遺構検出できず)
- 第 3-1-1a 層 6 5Y6/1 灰色 シルト～細砂
- 第 3-1-2a 層 7 10BG6/1 青灰色 粘土～シルト (炭化物含む)
- 8 5BG6/1 青灰色 粘土と細砂の互層
- 第 3-2a 層 9 10GY6/1 緑灰色 シルト～粘土 (7・8層直下においては、第 3-1-3a 層が残存?)
- 10 10GY6/1 緑灰色 シルト～細砂
- 第 4a 層 11 10GY7/1 明緑灰色～6/1 緑灰色 シルト～粘土
- 12 10GY6/1 緑灰色 シルト～細砂 (部分的にブロック土含む)
- 第 4b 層 13 10GY6/1 緑灰色 シルト
- 14 7.5GY7/1 明緑灰色 粘土 (層上面が明緑灰色に変色。13 層直下でのみ確認される)
- 15 10GY7/1 明緑灰色 細砂混じり粘土 (部分的にだが炭化物が層状に堆積する。層上面が明緑灰色に変色。13 層直下でのみ確認される)
- 第 5a 層 16 10GY7/1 明緑灰色 粘土
- 17 10GY7/1 明緑灰色～6/1 緑灰色 細砂混じり粘土
- 18 10G6/1 緑灰色 粘土

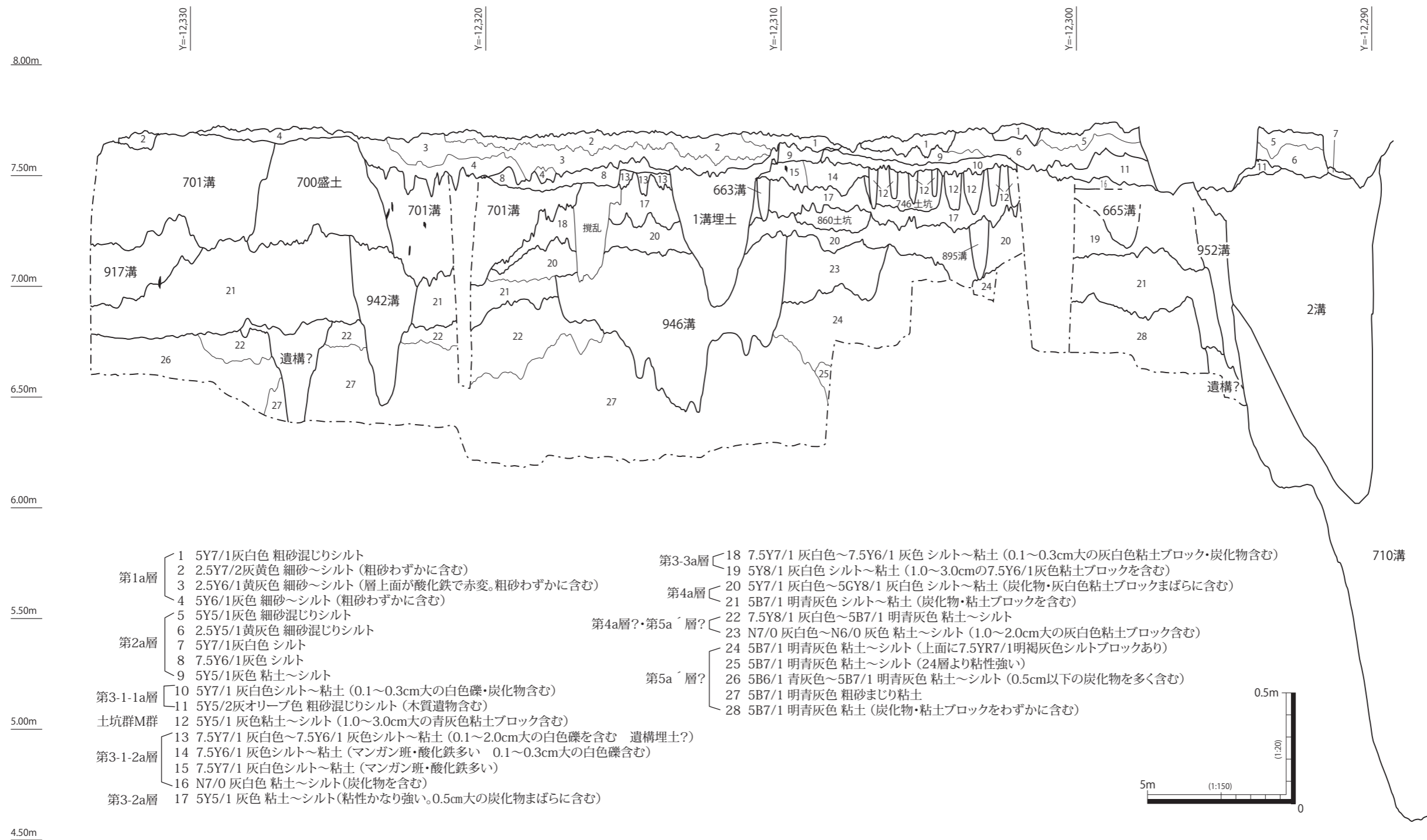
第IV-2-3 図 X=-57,480 ライン土層断面



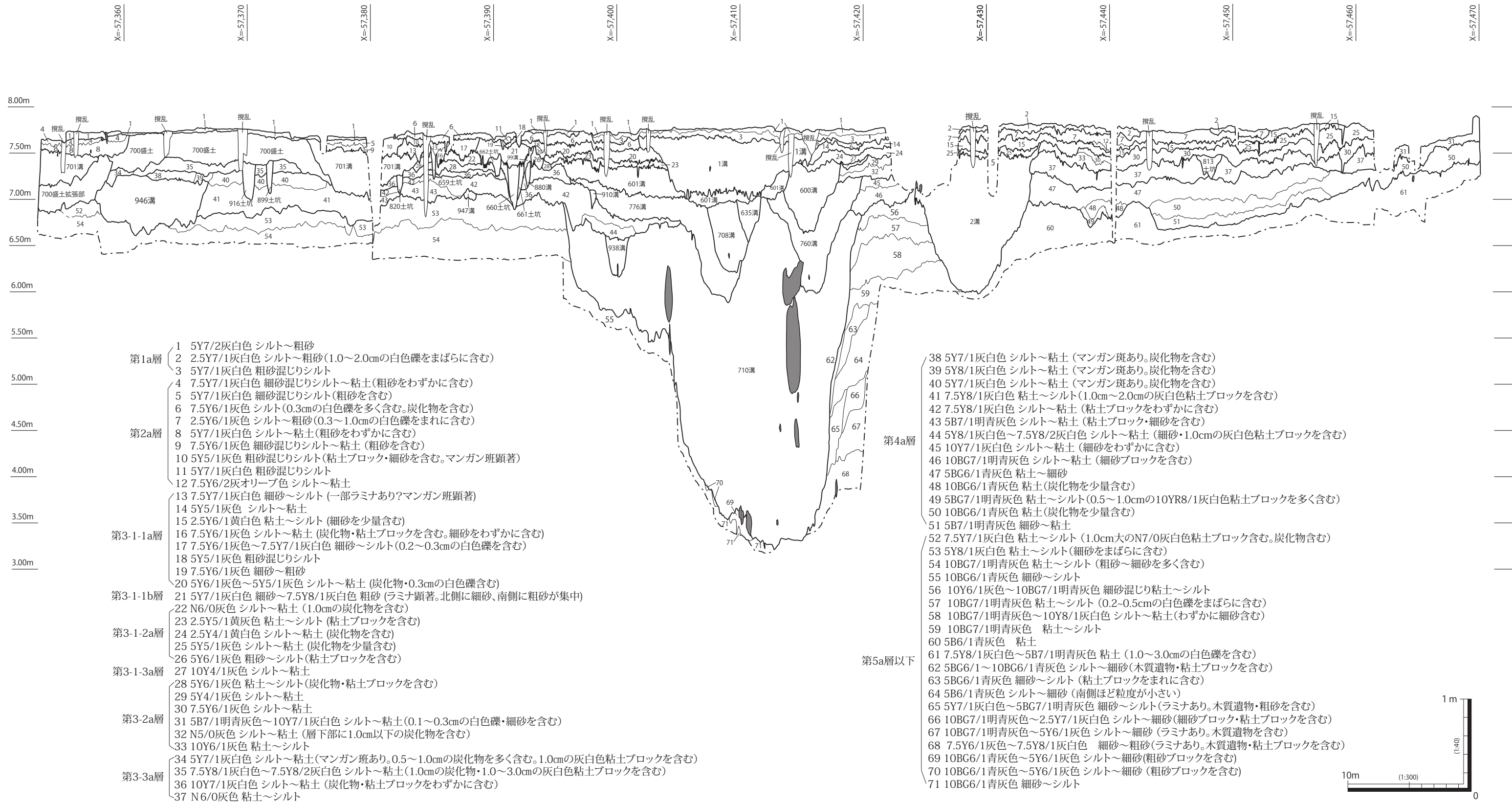
- 第1a層 1 5Y6/1灰色シルト～粗砂(上部に酸化鉄層。マンガン斑多く含む)
- 第1a層 2 5Y7/1灰白色粘土～粗砂(酸化鉄・マンガン斑多く含む)
- 第1a層 3 7.5Y7/1灰白色シルト～細砂(酸化鉄・マンガン斑多く含む)
- 第2a層 4 5Y6/1灰色粘土～細砂(酸化鉄多く含む)
- 第2a層 5 5Y6/1灰色粗砂混じりシルト～粘土(マンガン斑多く含む)
- 第2a層 6 7.5Y5/1灰色細砂混じりシルト
- 第3-1-1a層 7 7.5Y6/1灰色シルト～粘土
- 第3-1-1a層 8 5Y5/1灰色シルト～粘土(0.1cmの白色礫・粘土ブロックを含む)
- 第3-1-1a層 9 5Y5/1灰色粗砂混じりシルト(0.2～0.3cmの礫を含む)
- 第3-1-2a層 10 10GY5/1緑灰色粘土～シルト(淘汰がよい)
- 第3-1-2a層 11 7.5Y5/1灰色シルト～粘土(炭化物・粘土ブロックを多く含む)
- 第3-1-3a層 12 7.5Y8/1灰白色シルト～粘土(炭化物を含む)
- 第3-2a層 13 7.5Y7/1灰白色粘土～シルト
- 第3-3a層 14 7.5Y7/1灰白色細砂混じり粘土～シルト(粘土ブロックを含む)

- 第4a層 15 10Y7/1灰白色シルト～粘土(0.5cm大の炭化物・1.0～3.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを含む)
- 第4a層 16 10BG7/1明青灰色～10Y7/1灰白色細砂混じりシルト～粘土(粘土ブロックがまれに含む)
- 第4a層 17 5B6/1青灰色シルト～粘土(炭化物・粘土ブロックを含む)
- 第4a層 18 N7/0灰白色～5B7/1明青灰色粘土～シルト
- 第4a層 19 5B6/1青灰色シルト～粘土(1.0～2.0cmの10YR7/1灰白色粘土ブロックを含む)
- 第4a層 20 5B7/1明青灰色～5B6/1青灰色シルト～粘土(シルト質が強い。5Y8/3淡黄色の細砂を含む。層下方に1.0cm大の10YR7/1灰白色シルトの塊が堆積)
- 第4a層 21 5B7/1明青灰色～5B6/1青灰色シルト～粘土(0.5cmの10YR7/1灰白色粘土ブロックを含む。0.5cm以下の炭化物を含む)
- 第5a層 22 5B7/1明青灰色～10Y7/1灰白色粘土～シルト(わずかに細砂含む。粘土ブロックを特に上方に含む)
- 第5a層 23 N6/0灰色～N7/0灰白色粘土～シルト(0.5～1.0cmの10YR7/1灰白色粘土ブロックを含む)
- 第5a層 24 5B6/1青灰色粘土～シルト(0.2cmの白色礫を含む)
- 第5a層 25 10BG7/1明青灰色粘土～シルト(炭化物を含む)
- 第5a層 26 5B6/1青灰色粘土～シルト

第IV-2-4 図 X=-57,430 ライン土層断面



第IV-2-5 図 X=-57,380 ライン土層断面



第IV-2-7 図 Y=-12,320 ライン土層断面

第3節 第1a層・第2a層・第2b層下面の遺構

ここでは第2a層下面として記録した遺構の報告を行う。ただし、ここには、本来、第1a層下面に帰属する溝、第2b層下面に帰属する畦畔を含む。

1 溝〔第IV-3-2・3図 第2分冊図版12～14・19-1・2〕

5区内を南北に縦走する中世の溝である。本来は第1a層下面に帰属するが、古代の耕作土と認識した第2a層と同時に掘削した場所もあり、第1a層の下面では平面的な調査を実施しなかった。土層断面にのこる掘方の幅は3.5～4m、深さは0.5～0.7mである。なお、掘削当時の生活面は、第1a層の耕作により失われており、本来の幅と深さではない。

1溝を調査区南西隅からたどると、調査区の西壁沿いを北に延びるが、X=-57,480ラインあたりから調査区中央に寄る〔第IV-3-2図〕。釣山裾の形状に沿うように緩く湾曲しており、山裾の傾斜変換部から20～30mほど西側に山裾の形状を意識しながら掘削されていることがわかる。

溝内には新旧2段階の堆積を認識した〔第IV-3-3図〕。当初、掘削された溝を埋める堆積物が第IV-3-3図13～24層、それを再掘削した後に堆積したのが2～12層である。旧段階の溝を埋める堆積には、葉理が認められる砂層が介在しており、流水の影響が認められる。一方、新段階の溝は、溝の幅が0.8mほど狭く、深さが0.2mほど浅くなる。新段階の溝の最下層にある11層は止水性の堆積であり、溝が放棄される直前には水の流れがなかったことが考えられる。また上部に堆積している1～8層には、粘土ブロックが多く含まれており、放棄直後に埋め戻されていることがわかる。

溝に伴う遺物は少ないが、旧段階の溝底付近から土師器皿〔第V-11図3～5〕や木製椀〔本弓Ⅱ第IV-3図2〕が出土した。また、X=-57,370ライン以北には人頭大の礫が多く含まれていた〔第2分冊図版14-3〕。第3-1-3a層下面検出の700盛土に伴う礫が、溝の掘削や上部の耕作時に攪乱され、溝内に堆積したものだろう。

第2a層下面の擬似畦畔と第2b層下面の畦畔〔第IV-3-1図 第2分冊図版15～17〕

第2a層下面の擬似畦畔 第2a層には古代の遺物が包含されていることから、古代に耕作されていた水田に伴う畦畔の痕跡である。

5区の南側、X=-57,500ラインよりも南には擬似畦畔が釣山裾部の等高線に沿うように展開している。一方、調査区中央部のX=-57,470～490ライン間には長方形の区画をなす擬似畦畔が認められた〔第2分冊図版15-1〕。1区画の面積が正確にわかるものはない。

5区北側では調査区北西隅に方形を呈す擬似畦畔を確認した〔第2分冊図版16-2〕。第3-1-3a層下面に帰属する700盛土の輪郭に沿っており、700盛土の高まりを利用した水田の区画が古代以降に存在していたと考えられる。また、この周辺には、擬似畦畔沿いに人頭大の礫が散在していた。水田耕作時に下部に埋没していた700盛土に伴う礫が、耕作時に攪乱され、水田の区画沿いに集積されたものだろう。

第2b層下面の畦畔 X=-57,390ラインの付近に残存していた第2b層下面で、幅が1～1.2mを測る畦畔を検出した〔第2分冊図版17〕。第2a層が耕作される以前のものである。この畦畔は1溝の西側にあり、南東方向に延びる。なお、1溝よりも東側には第2b層が残存していなかったが、第2a層の下面で、第2b層下面の畦畔に向かって延びる擬似畦畔を検出した。第2a層の耕作に伴う水田の区画が、その前段の区画を踏襲していたとすれば、ここに畦畔が存在した可能性がうかがわれる。

第4節 第3-1-1a層下面の遺構

第3-1-1a層の下面に帰属する遺構は、調査地北側に集中する。東西に連なる土坑群と、664構造物と2溝上木製構造物である。

第1項 土坑群

X = -57,380 ~ 400 ライン間 (4C-9i・9j・10i・10j・4D-9a ~ 9d・10a ~ 10d) に、東西方向に連なる複数の土坑を検出した〔第IV-4-2図〕。土坑の総数は353基である。土坑は複数の列をなしており、調査区内で検出した土坑の列は長さ50mに及ぶ。土坑の列は調査区東側では釣山裾部で途絶えるが、調査区の西側では調査区外に続いており、全長は不明である。なお、土坑には、楕円形に掘りくぼめた土坑が列状にならぶものと、溝の底部に土坑が掘られているものがある。後者については、調査時に溝と認識して調査を進めたことから、6溝、99溝という遺構名を冠した掘方を伴うものがある。また、溝や土坑の底面から、掘削に用いた刀先痕を検出している〔第2分冊図版31-3・32〕。

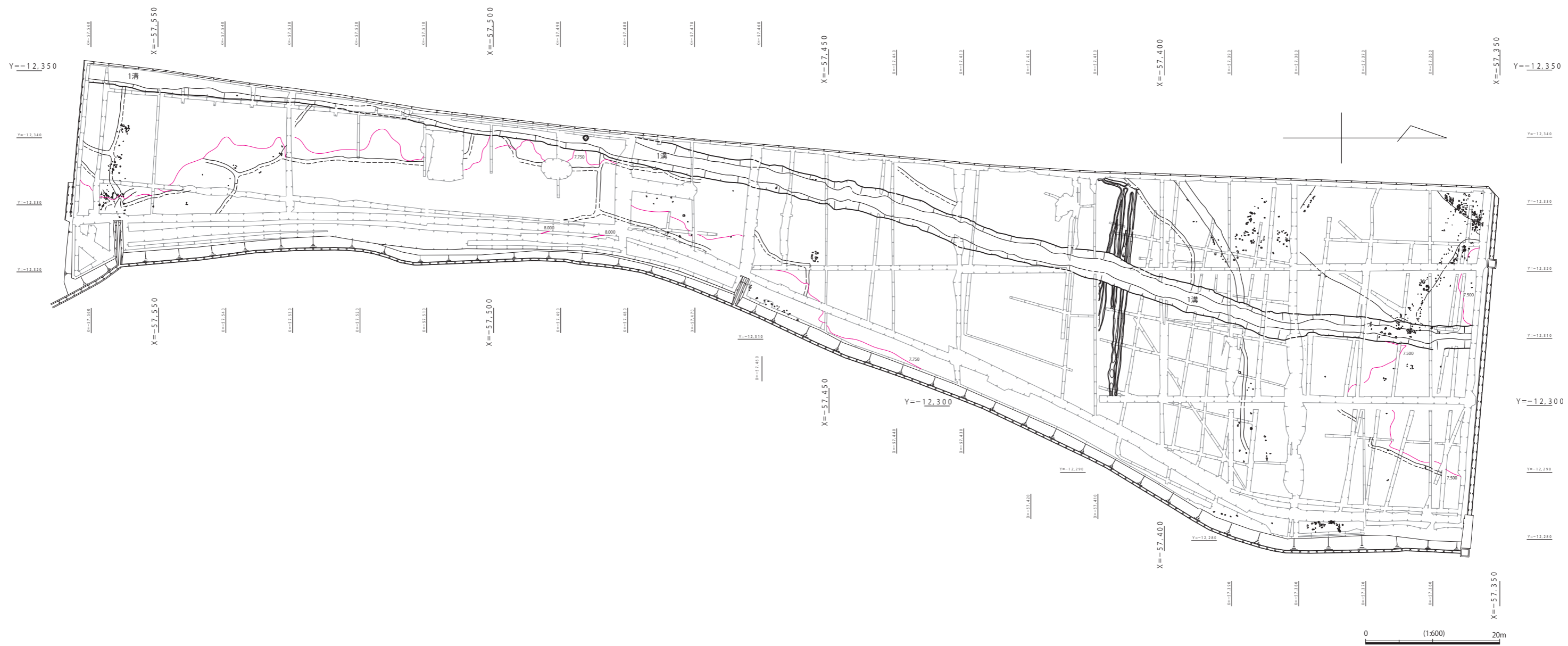
以下、両者も含め、列として認識できる土坑をグループ分けし、A～L群とした〔第IV-4-2図〕。グループ分けは列をなす土坑のまとまりを考慮したが、長い土坑列は、作図の関係上、方向の変わる部分などで群を分けて記録した。そこで、報告においては一連の土坑列となる組み合わせを適宜補足し、各群の特徴を整理する。また、土坑群の埋土の記録については第IV-4-1～3表にまとめた。

① A群〔第IV-4-3図 第2分冊図版20〕

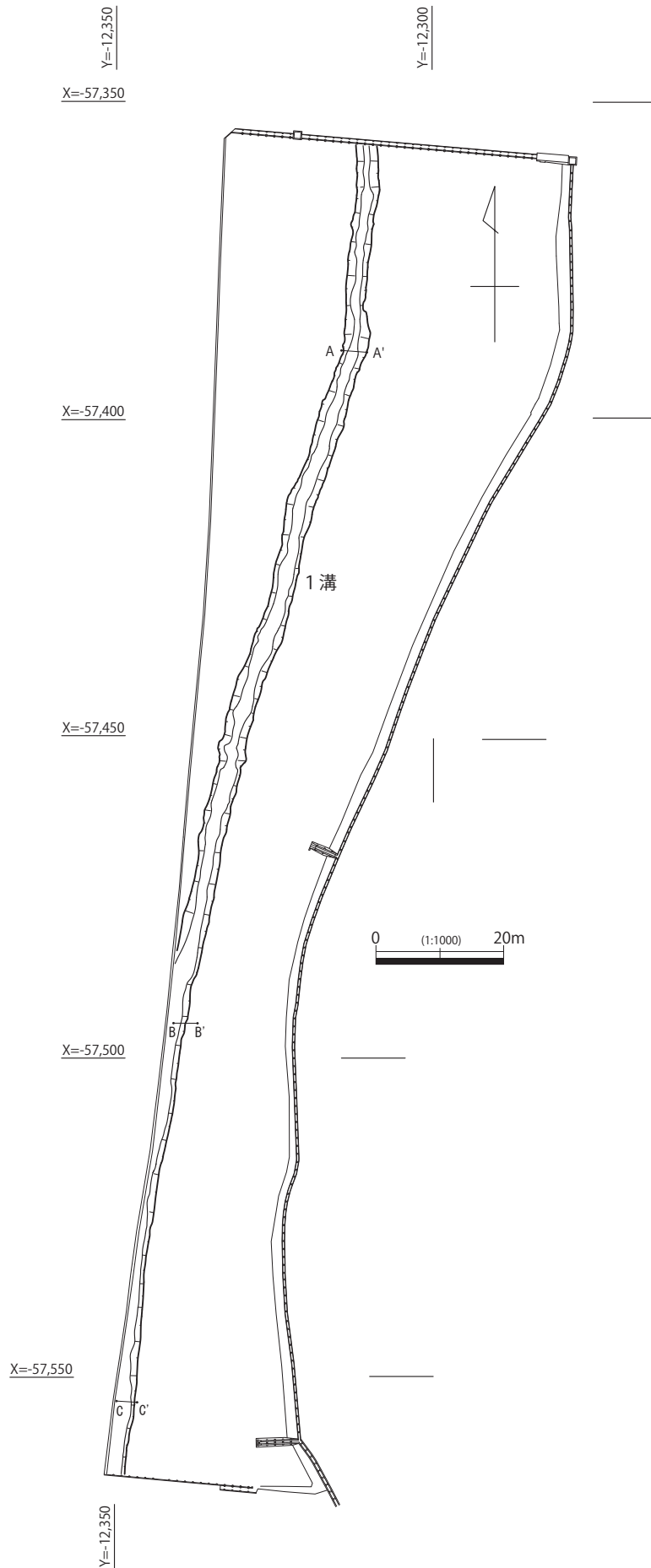
土坑群東端にある土坑列である。B群の北側に位置する。北東-南西方向に延びる。全長は約16.6mである。6溝が伴う土坑群で、最初に浅い溝（6溝）を掘り、その底面に土坑を掘削している。溝は最大幅で2.5m、深さ0.4mほどである。ただし、6溝として調査を行った溝には、軸が若干異なる溝と土坑列が重複している。切り合い関係から、やや南よりにある溝と土坑列（261～265・267・269・271・273・275土坑）が古く、その後、北よりに新たに溝と土坑列（259・260・266・268・270・272・274・276～283）が掘削されている。以下の記述に関係するので、前者をA群古段階、後者をA群新段階とする。土坑が埋まった後も浅い溝として残ったようで、溝の上部は氾濫堆積物によって埋まっていた。各土坑は、径0.4～0.6mほどの円形、または長軸0.8m、短軸0.3～0.4mほどの楕円形を呈す。深さはいずれも0.2～0.3mであった。

② B群〔第IV-4-4図 第2分冊図版21・22〕

A群の南側に位置する土坑群である。北東-南西方向に延びるが、Y = -12,290ライン以西はより大きく湾曲し、西側に向かう。全長は約21mである。溝（99溝）に伴う土坑群で、A群と同じく浅い溝を掘り、その底面に連続して土坑を掘削している。溝の幅は1m前後で、Y = -12,290ラインあたりで溝の掘方が消えてなくなる。土坑は径0.6～1mほどの円形、または楕円形のものが多い。ただし、A群に存在するような軸の長い楕円形を呈すものはない。深さはいずれも0.2～0.3mであった。また、溝を伴わない土坑列（東から253・251・247・248・244・245・242・241・240・238・237・233など）が、99溝に伴う土坑列の西側に並列している。一部、99溝に伴う土坑列と重複するが、切り合い関係による前後関係の確認はできなかった。

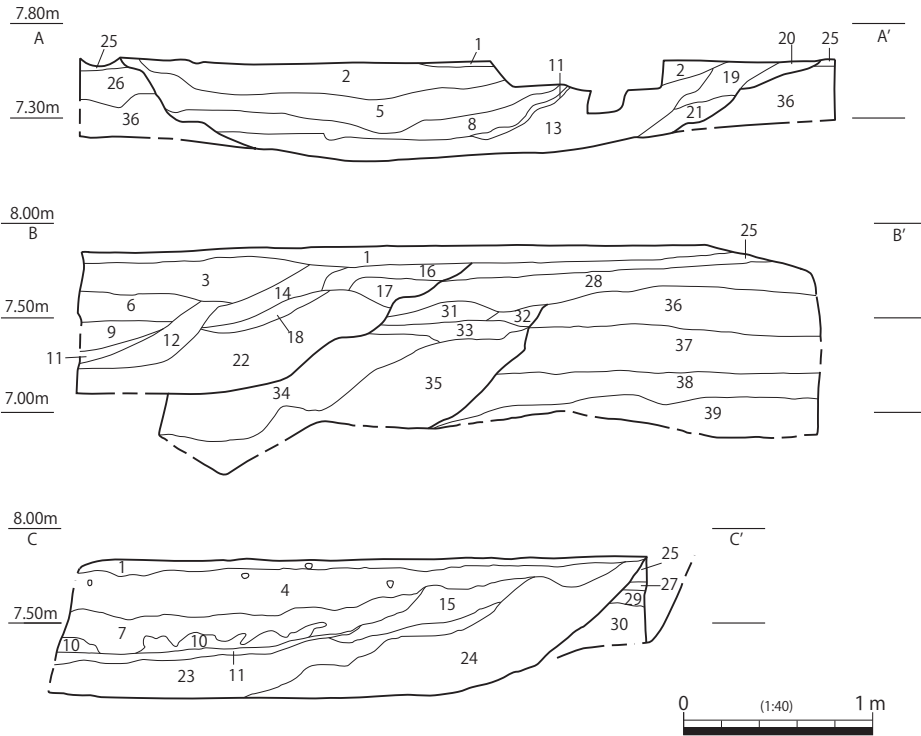


第IV-3-1 図 第1a・2a・2b層下面全体



第IV-3-2 図 1 溝平面

第IV章 調査成果



- 第1a層
 - 1 7.5Y6/1灰色～8/1灰白色 粗砂～シルト
 - 2 7.5Y7/1灰白色 シルト～細砂 (マンガン斑顕著)
 - 3 5Y6/1灰色 粘土～細砂 (マンガン斑顕著。ブロック土わずかに含む)
 - 4 5Y6/1灰色～7/2灰白色 粗砂混じりシルト (上方暗色化。下方にはブロック土目立つ。径3cmの礫含む)
 - 5 N7/0灰白色 シルト～粘土
 - 6 7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト (ブロック土含む)
 - 7 5Y7/1灰白色 粘土～シルト (5BG4/1暗青灰色 粘土がブロック状に混じる)
 - 8 2.5GY5/1オリーブ灰色 粘土～5GY8/1灰白色 粘土 (炭化物・ブロック土含む)
 - 9 10GY7/1明緑灰色 粘土 (ブロック土多く含む)
 - 10 10GY5/1緑灰色 粗砂～シルト (部分的にラミナあり。炭化物及び有機物を含む)
 - 11 10G6/1緑灰色～5G5/1緑灰色 シルト混じり粘土 (ラミナあり。上方明色化。溝底の止水性堆積)
 - 12 10GY7/1明青灰色 粘土～10GY5/1緑灰色 シルト～粘土 (上方暗色化)
 - 13 5Y5/1灰色 シルトと、5Y8/1灰色 粗砂の互層
 - 14 5BG5/1青灰色 粘土～細砂 (ラミナあり。層中に粗砂～細砂層を帯状に含む)
 - 15 7.5Y8/1～7/1灰白色 細砂～粗砂
 - 16 5Y6/1灰色 粗砂～シルト
 - 17 5Y6/1灰色 粗砂～粘土
- 1 溝埋土 (新)
 - 18 10GY5/1緑灰色 シルトと、5Y8/1灰白色 粗砂～細砂の互層
 - 19 7.5Y7/1灰白色 細砂混じりシルト
 - 20 N6/0灰色 シルト～粘土 (ブロック土含む)
 - 21 7.5Y6/1灰色 シルト～細砂 (ラミナあり)
 - 22 5GY4/1暗オリーブ灰色 シルトと、5BG6/1青灰色 粗砂～細砂の互層 (木質遺物を含む)
 - 23 7.5GY5/1～6/1緑灰色 シルト～細砂 (ラミナあり。炭化物を層状に含む)
 - 24 7.5GY5/1緑灰色 シルトと、5Y7/1灰白色 粗砂の互層 (ラミナ顕著だが転倒している箇所もある。炭化物を層状に含む)
- 第2a層
 - 25 5Y6/1灰色～5Y7/1灰白色 粗砂混じりシルト
- 第3-1-1a層
 - 26 5Y7/1灰白色 シルト～粘土
- 第3-1-2a層
 - 27 10Y6/1灰色 粗砂混じりシルト (マンガン斑顕著)
 - 28 5Y5/1灰色 シルト～粘土
- 2 溝埋土
 - 29 10GY5/1緑灰色 粗砂混じりシルト (酸化鉄顕著)
 - 30 10GY4/1暗緑灰色～5/1緑灰色 シルト～粘土 (ラミナあり。上方細粒化)
 - 31 10BG5/1青灰色 粗砂～粘土
 - 32 5BG6/1 青灰色 粗砂～粘土
 - 33 10GY4/1 暗緑灰色 粘土～シルト
 - 34 5Y7/1～7/2 灰白色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著)
 - 35 N7/0灰白色～N6/0灰色 細砂混じり粘土 (炭化物・木質遺物含む)
- 第3-2a層
 - 36 7.5Y8/1 灰白色 粘土～シルト
- 第4a層
 - 37 10BG7/1 明青灰色～10Y8/1 灰白色 シルト～粘土
- 第4a'層
 - 38 10BG7/1 明青灰色 粘土～シルト (下方粗粒化。緑灰色 粘土～シルトをブロック状に含む。炭化物含む)
 - 39 10BG6/1 青灰色～N6/0 灰色 粘土 (38 との境に緑灰色 粘土～シルトを帯状に挟在する)

第IV-3-3 図 1 溝土層断面



第IV-4-1図 第3-1-1a層下面全体



第IV-4-2図 6・99溝 土坑群全体

③ C群〔第IV-4-5図 第2分冊図版 23〕

A・B群の西側にあり、東西方向に延びる。全長は15.6 mである。検出時、6溝として認識していたもので、溝の延伸方向からA群新段階に連続するものと考えられる。ただし、A群との間に空白があるので、C群とした。A群と同様に、溝（6溝）が掘られた後に土坑が掘削されている。Y = -12,300 ライン以西では、溝の北側に平坦面が造られている。溝幅は2～2.9 mで、深さは0.2 mである。土坑は径0.6～0.8 mほどの円形、または楕円形を呈す。深さはいずれも0.1～0.3 mである。前後関係はわからないが、溝の北側に391～395・409からなる土坑列が並列している。

④ D群〔第IV-4-6図 第2分冊図版 23〕

C群の北側にある。溝が伴い、底面に土坑が掘削されている。ほぼ東西を向くが、やや東南-西北方向に傾く。全長は約9 mである。延伸方向からA群古段階と連続するものと考えられる。切り合い関係から、溝を掘った後に土坑列が掘られている。東側では、本体となる土坑列の北側に637・638・656～657が並列している。本体となる土坑列の前後関係は不明である。溝は、幅が1.2～1.7 m、深さは0.1～0.2 m、Y = -12,360 ライン付近で掘方が失われている。土坑は長軸0.8 m～1.2 m、短軸0.4～0.6 mほどの長楕円形を呈すものが多い。土坑の深さは0.1～0.4 mと一定しない。

⑤ E群〔第IV-4-7図 第2分冊図版 24-1〕

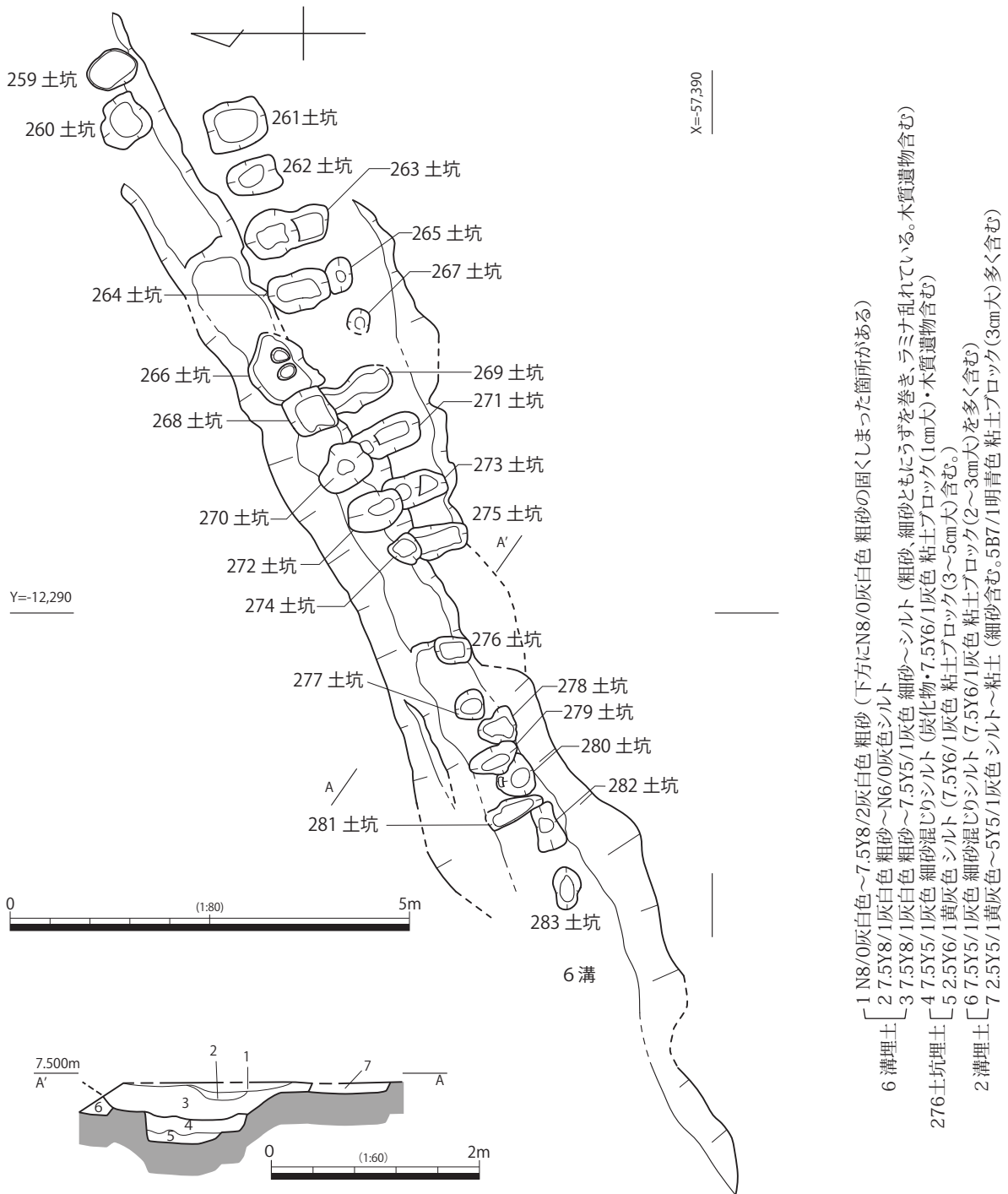
D群の北側にある。ほぼ東西方向に延びる。全長約11 m、周囲に群在する土坑を当群に含めた。延伸方向から、D群の本体となる土坑列の北側に並列する土坑列と連続する可能性がある。また、524・525土坑は、その形状から2つの土坑が切りあっていると考える。おそらく、北側の細長い土坑は、1溝によって失われた空白部を介して、532・533・535・536・538・539土坑に連なっていた可能性がある。一方、651・652土坑は、647土坑から648土坑にいたる本体をなす土坑列と一連のものである可能性が高い。E群の土坑列は溝を伴わない。土坑は径0.8 m前後の円形、または長軸0.6～0.7 m、短軸0.3～0.4 mほどの長い楕円形を呈す。深さは0.1～0.2 mである。

⑥ F群〔第IV-4-8図 第2分冊図版 24・25〕

E群の西側にある。317土坑は2基の土坑が南北に並列している。東から319・318・317（北側）と1 mほどの空白を介して309～312土坑までが一連の土坑列、そして、332・331・335・334・323・322・321・317（南側）が一連の土坑列となる。全長はどちらも6 m弱である。各土坑は長軸1～1.6 m、短軸0.5～0.7 mほどの長い楕円形を呈す。深さは0.1～0.2 mである。

⑦ G群〔第IV-4-9図 第2分冊図版 25-1〕

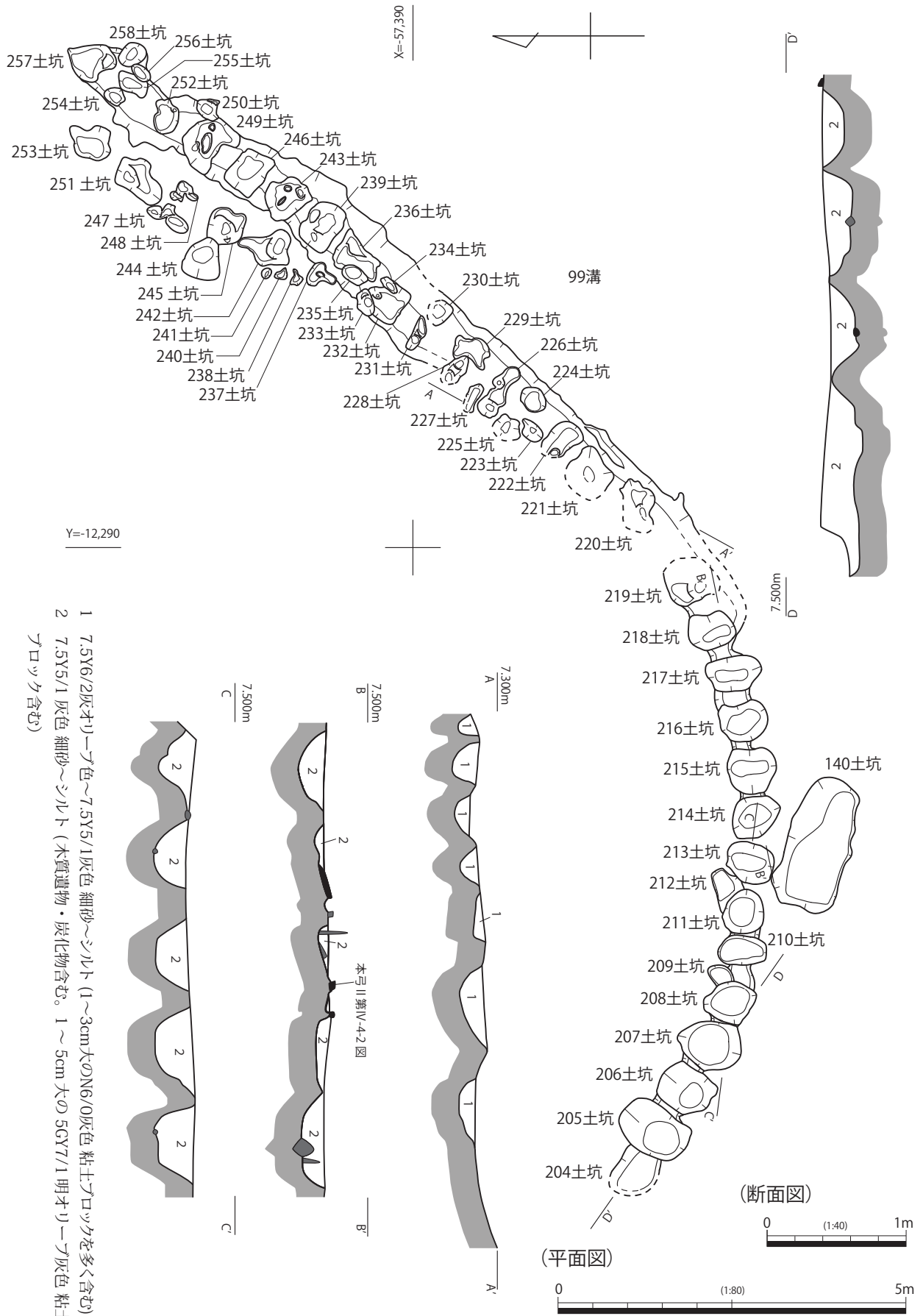
F群の西側にある。313落ち込みとして検出を行ったもので、土坑列ではない。長軸4.8 m、短軸2.8 mで、不整な形をしている。深さは最深部で0.2 mである。浅い落ち込みの底面に複数の窪みがあり、いくつかの土坑が重複している可能性もある。埋土は一層で、切り合い関係は観察できなかった。



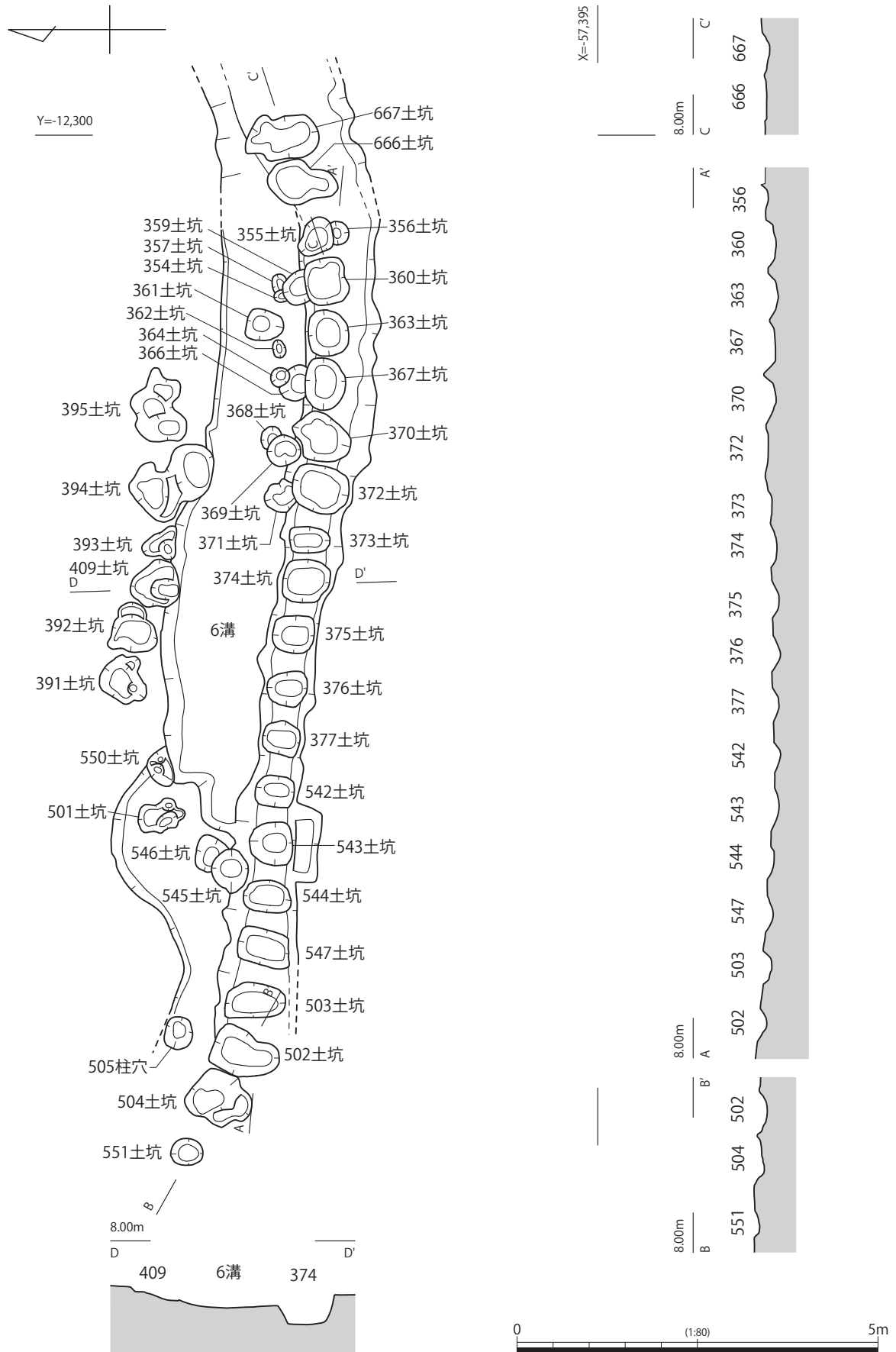
第IV-4-3図 土坑群A 群平・断面

⑧ H群 [第IV-4-10図 第2分冊図版 25-2・26]

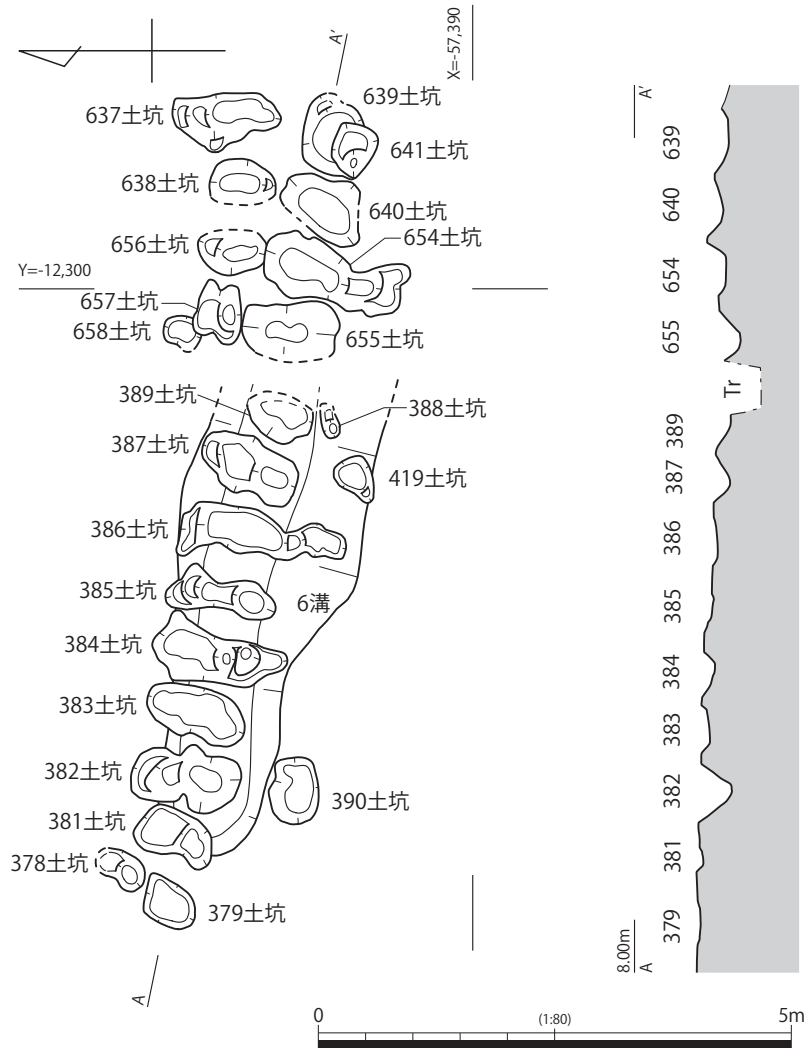
F・G群の南に位置する。南東-北西に延びる2条の土坑列である。1つは、351土坑から301土坑にいたる直線的な列である。全長は約8mである。各土坑は長軸1~1.4m、短軸0.3~0.5mほどの楕円形のものが多く、深さは0.1~0.2mである。延伸方向や土坑の形・規模から、1溝を介して、C群に連なる可能性がある。もう1つは、515土坑から298土坑にいたる湾曲する土坑列である。その西側に分布する小土坑も、一連のものかもしれない。とすれば、全長は約5mほどとなる。土坑は



第IV-4-4 図 土坑群B群平・断面



第IV-4-5 図 土坑群C群平・断面



第IV-4-6 図 土坑群 D 群平・断面

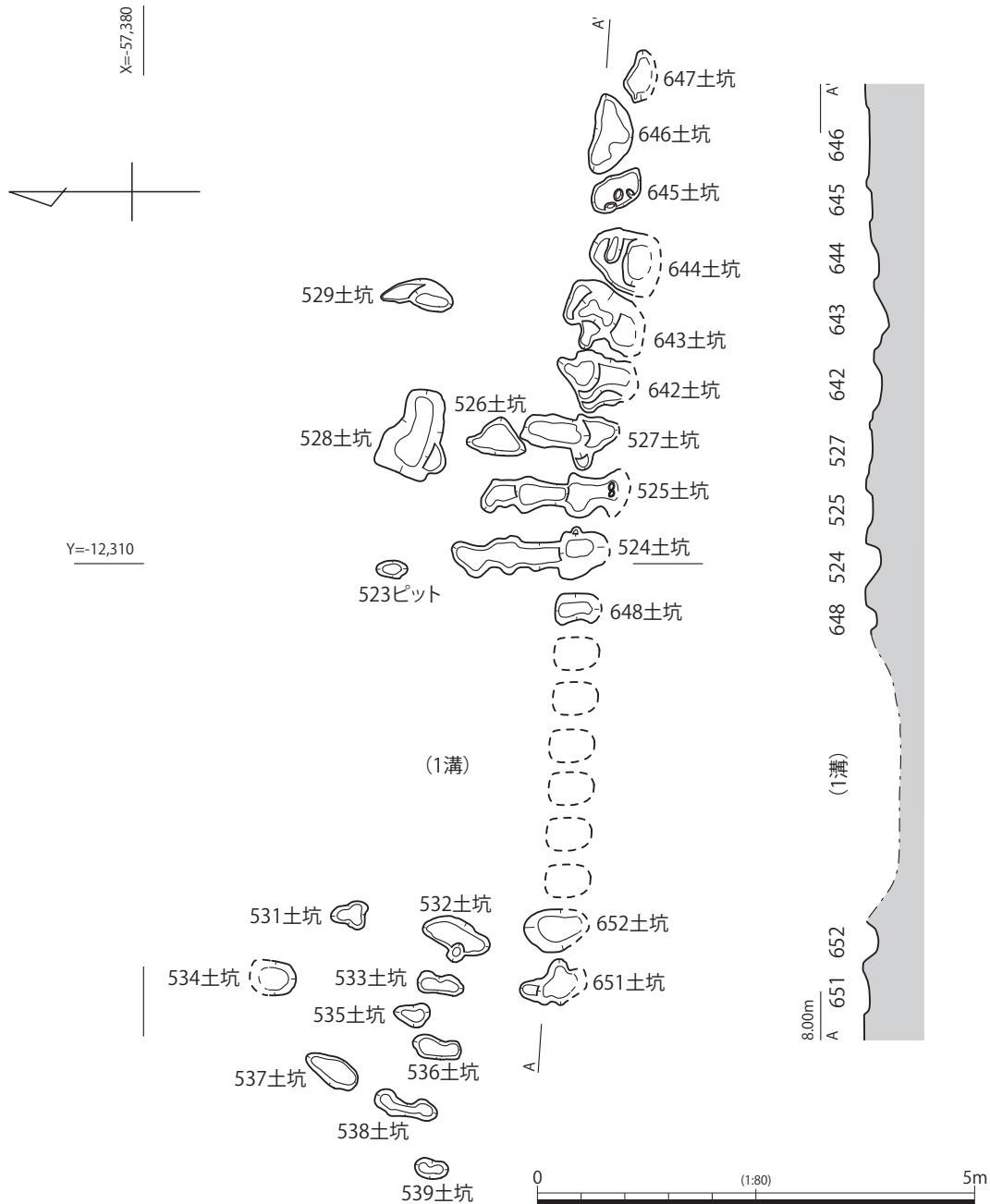
長軸 1～1.2 m、短軸 0.3～0.5 m ほどで、楕円を呈すものが多い。深さは 0.1～0.2 m である。全体的に、C 群に連なる可能性の高い土坑列を構成する土坑よりも、小振りな土坑が多い。また、切り合い関係の観察できる場所がなく、両土坑列の前後関係は不明である。

⑨ I 群 [第IV-4-11 図]

C 群の東側にある。C 群の東端付近から派生し、東側に延びる。幅が 0.8～1.8 m ほどの溝を伴い、底面に土坑が掘削されている。土坑は長軸 0.5～0.9 m、短軸 0.6 m ほどの楕円形を呈す。深さは 0.1～0.2 m である。559 土坑以東の土坑は、1 溝によって上部が削平されているが、土坑の底面付近が残存している。当群内での全長は 12 m である。周囲に小規模な土坑やピットが点在している。

⑩ J 群 [第IV-4-12 図 第2分冊図版 27]

I 群の東側に位置する土坑列などを J 群とした。596～33 にいたる土坑列は I 群から連続するもので、南西方向に方向を変えながら延びる。6 溝として検出したものの一部であり、当群内での全長は約 14 m である。6 溝は 2 段堀となっており、上端の最大幅 5.1 m、深さ 0.15 m である。Y = -12,328

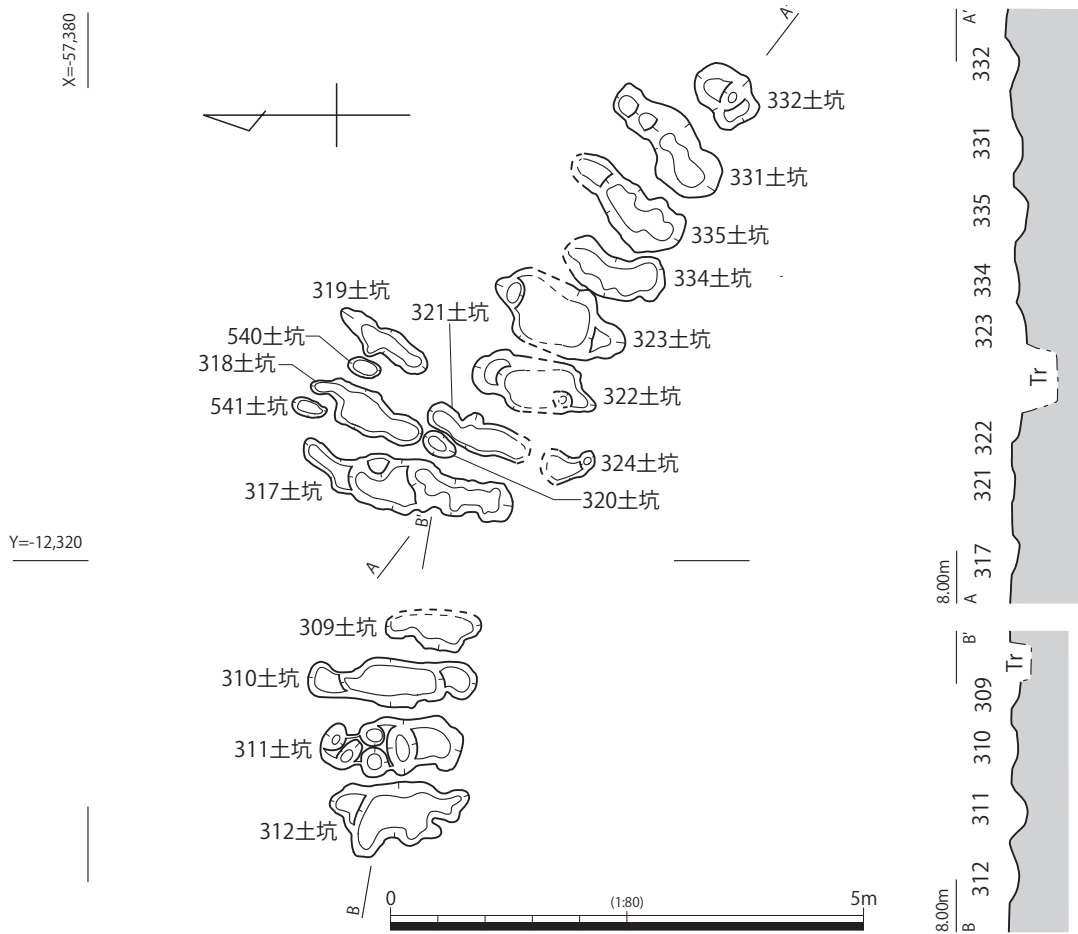


第IV-4-7 図 土坑群 E 群平・断面

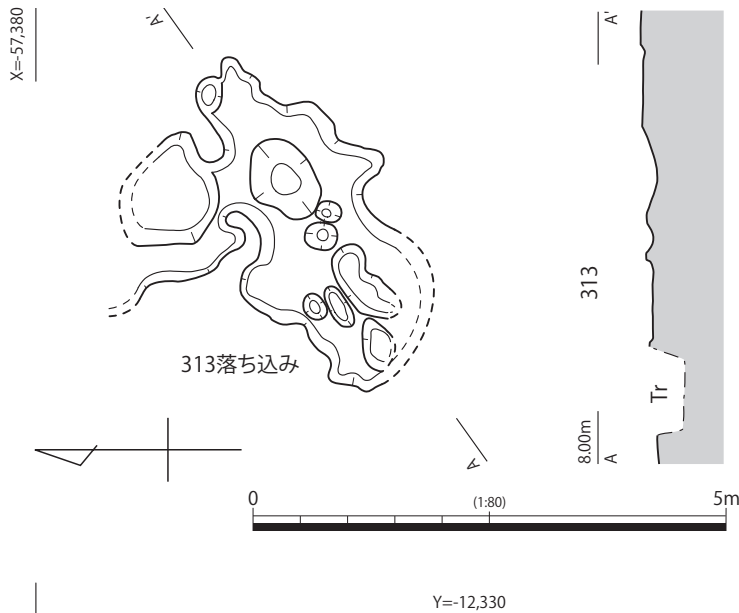
ライン付近で幅が狭まり、1～2 mほどとなる。土坑は2段目の溝にそって掘られており、0.6～0.8 mほどの楕円形を呈す。深さは0.1～0.2 mである。西側には、長軸3.9 m、短軸1.8 m、深さ0.1 mほどの浅い不整形を呈す7落ち込みがある。6溝を切るが、土坑列との関係は不明である。

⑪ K 群〔第IV-4-13 図 第2分冊図版 28-1〕

J 群の北側に位置する土坑列などである。径0.3～0.6ほどの不整な円形を呈す土坑が多い。深さは0.1～0.2 mである。少なくとも3条ほどの土坑列が認識できる。いずれも東西方向に延びる。この中で、複数の土坑が明確な列をなすのは、560～401にいたる土坑列、399～326にいたる土坑列、284落ち込みである。560～401にいたる土坑列は、北側に溝の堀方を伴う。全長は約7.6 mである。



第IV-4-8 図 土坑群F 群平・断面



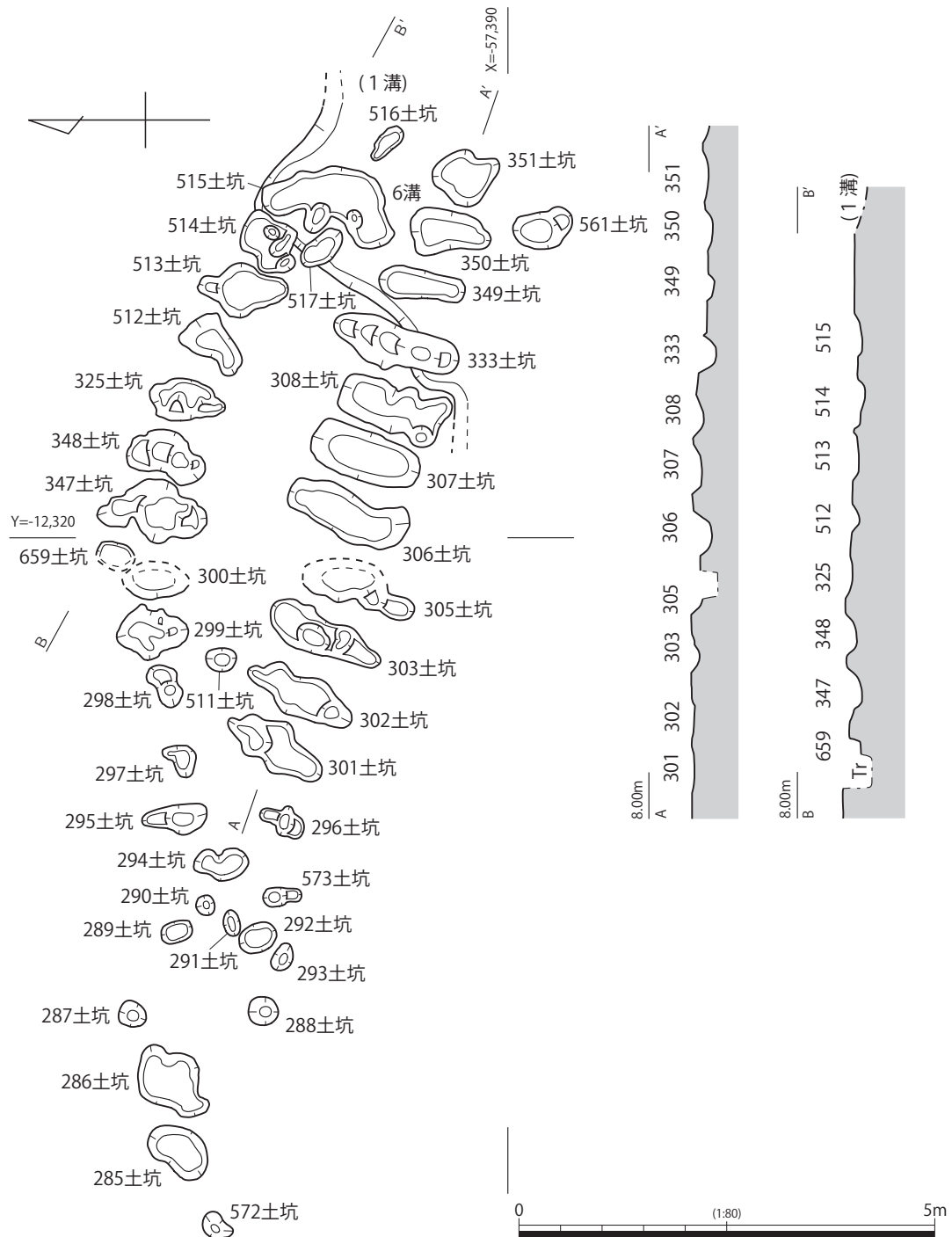
第IV-4-9 図 土坑群G 群平・断面

399～326 にいたる土坑列は全長約 3 m と小規模である。ここに連なる土坑は小規模で、2 段堀となっているものが認められる。また、284 落ち込みは 5 基程度の土坑が連続したもので、全長は約 4.6 m である。各土坑は、形状も類似しているが、埋土に大きな違いはない。

⑫ L 群〔第IV-4-14 図 第2分冊図版 28・29-1〕

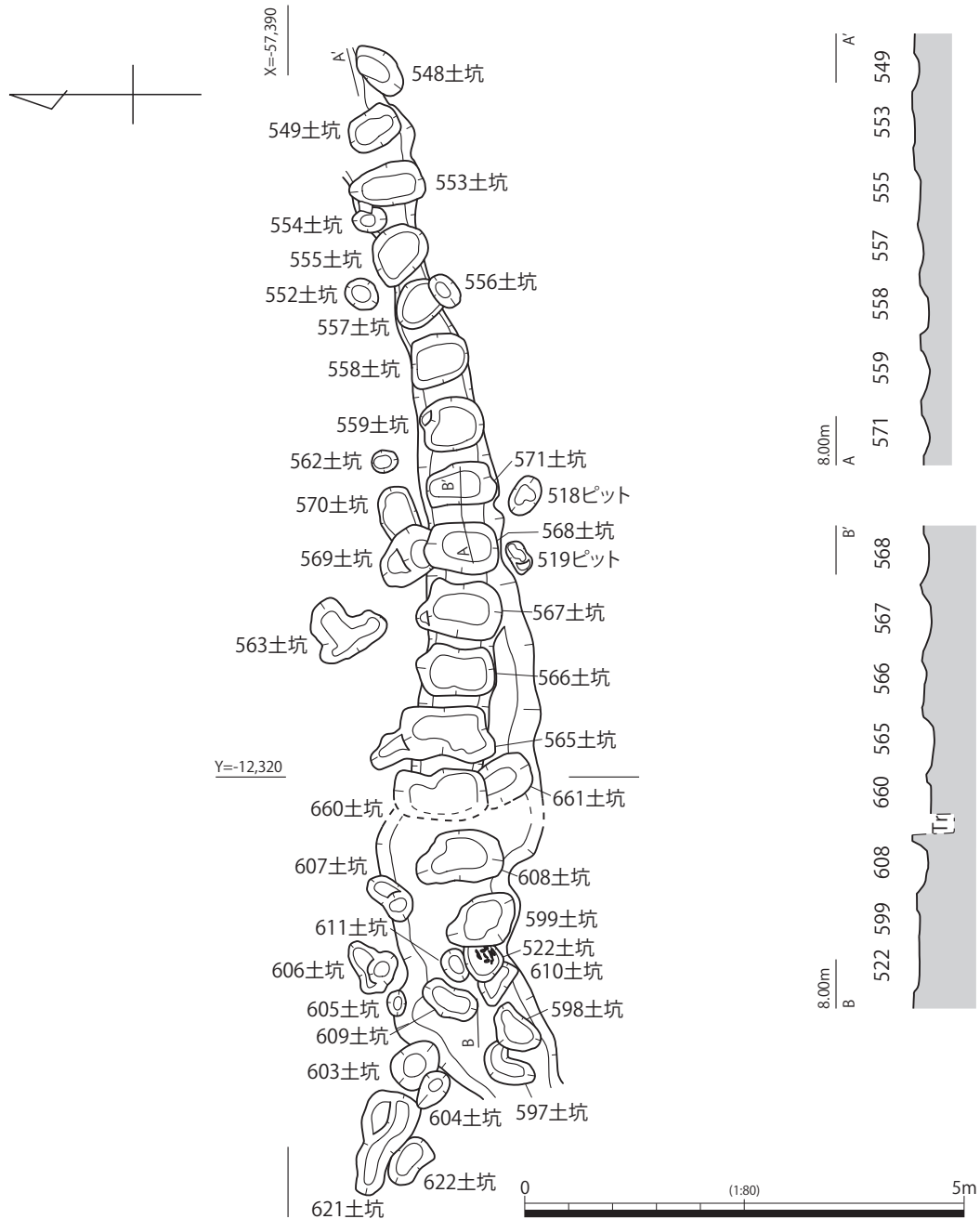
J 群の北西側にある。K 群との連続性が考えられる一群である。北東-南西方向に延びる土坑列が 3 列ほど重複している可能性が高い。1 つは 15～

9 にいたる土坑列、1 つは 21～18 を経て 345 にいたる土坑列、1 つは 17 土坑～8 落ち込み中の 343 土坑にいたる土坑列である。横長の楕円形を呈す 327 土坑には、2 つの土坑が横並びとなっており、



第IV-4-10図 土坑群H群平・断面

南側に位置する方は、17土坑からはじまる土坑列に含まれる。各土坑列の全長はいずれも概ね5m、土坑は長軸0.9～1.5m、短軸0.4～0.6mほどの楕円形を呈す。深さは0.1m程度の浅いものが多い。8落ち込みも、この土坑列に伴う掘り込みと思われる。また、南側に土坑列と同じ方向にのびる22溝がある。規模は、幅0.5～0.8m、深さ0.1m、現存長は7.1mである。6溝として検出した溝と切り合っており、2溝より22溝の方が新しい。ただし、土坑群との関係は不明である。

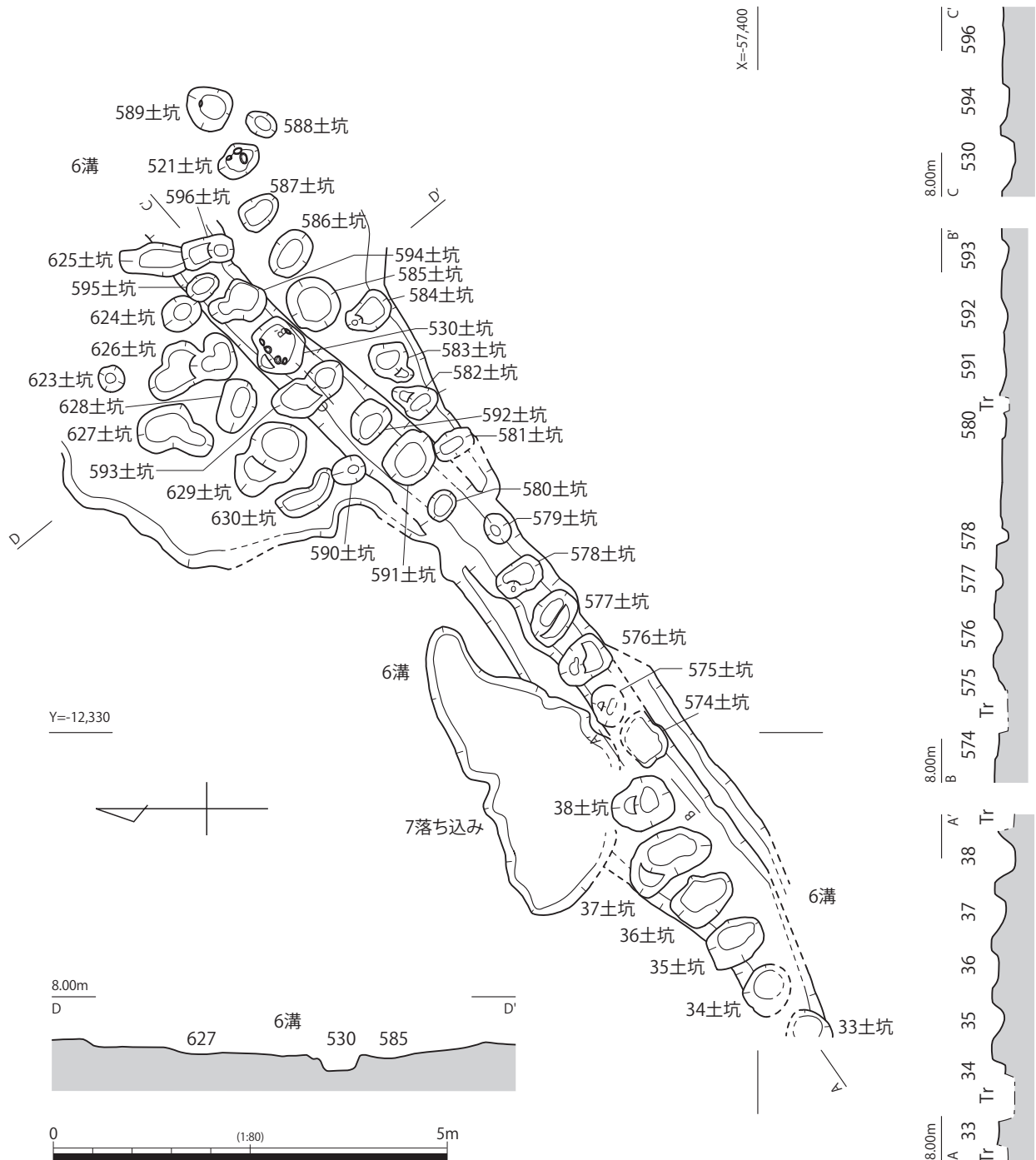


第IV-4-11 図 土坑群I 群平・断面

⑬ M 群 [第IV-4-13 図 第2分冊図版 29-2]

土坑群の中で、最も北側に位置する土坑列である。ほぼ東西方向に延びるが、 $X = -57,380$ ラインに設定した土層観察用のトレンチによって、半分以上を失ってしまい、土坑列全体の状況を記録することができなかった。残存長は5 m、土坑は長軸0.4～0.8 m、短軸0.3～0.7 mほどの楕円形を呈している。深さは0.1～0.2 mである。他の土坑群と比べて底面からの立ち上がり角度が急である。

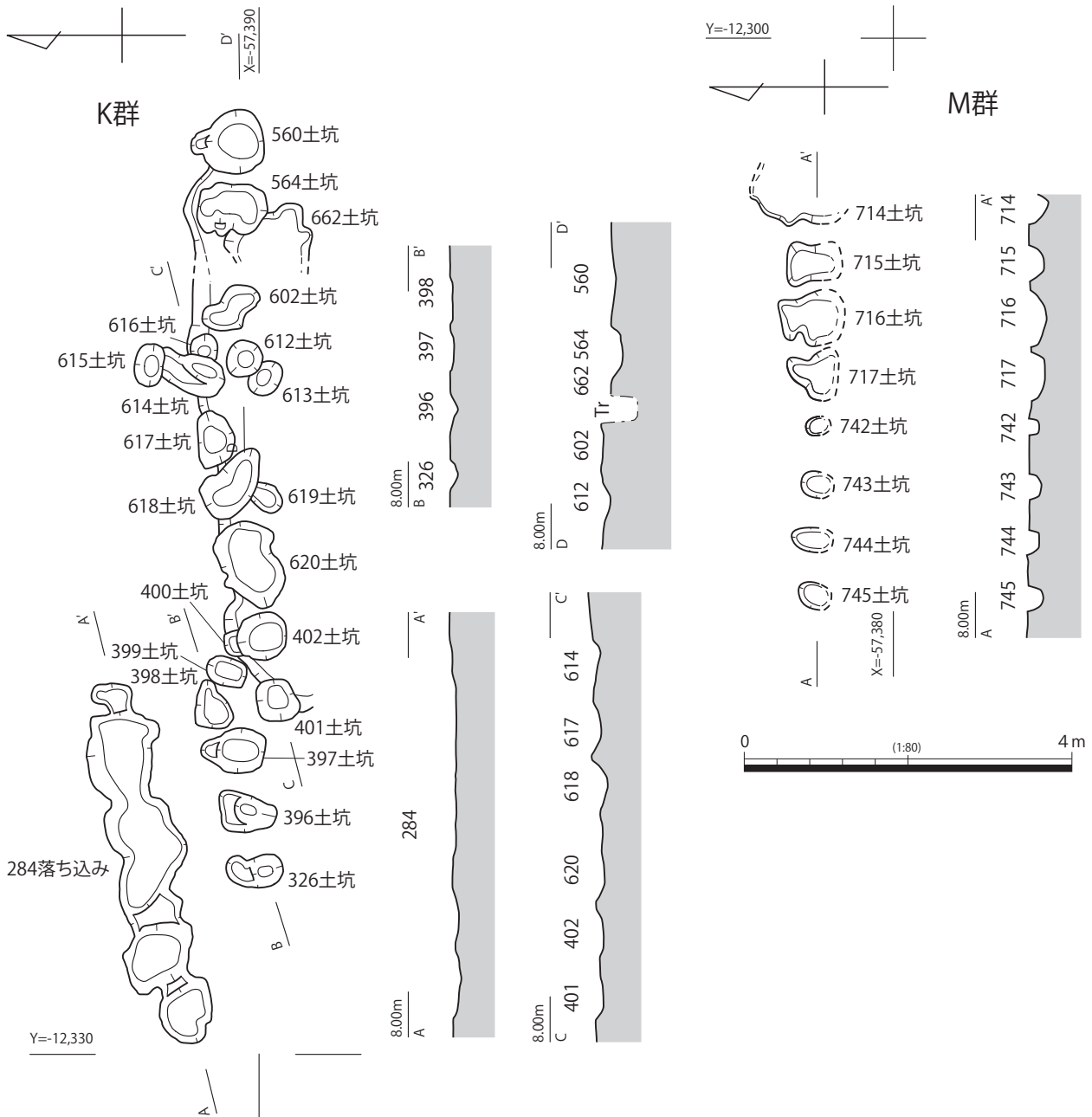
以上、土坑群を一定のまとまりに分割して報告を行った。この土坑群の特徴は、楕円形の土坑が列状にならぶことである。土坑列には、平面形が円形に近く、深く掘削された土坑によって構成される



第IV-4-12 図 土坑群J群平・断面

ものと、長い楕円形を呈し、浅く掘られた土坑によって構成されているものに大別できる。前者は南側の土坑群 (B・C・I・J群) に多く、後者は北側の土坑群 (D・E・F・H・L群) に多い。この差は、土坑を掘削する目的の違いを表すものではなく、掘削を行った作業者、または掘削の時期差を示すものかもしれない。ただし、調査時の観察では、時期差を明確に捉えることができなかった。

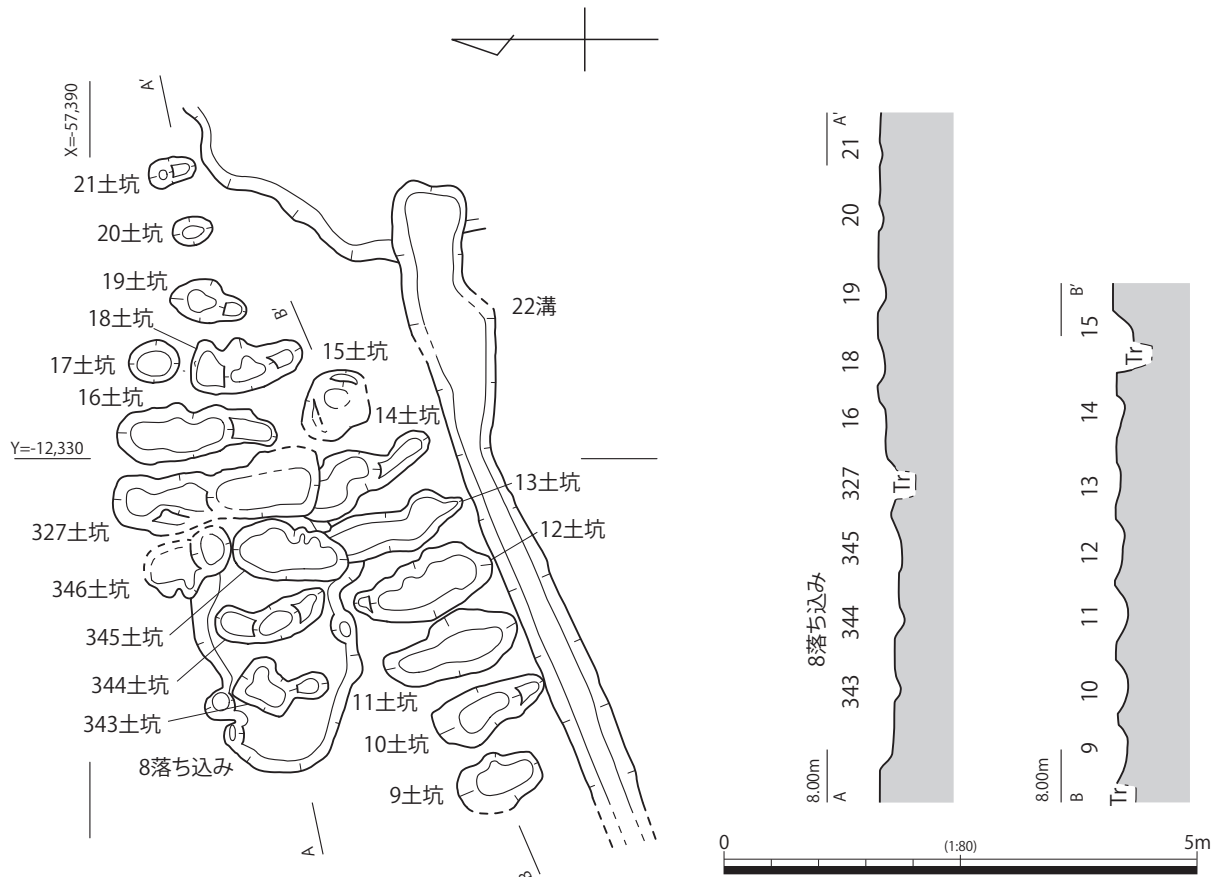
一方、掘削の目的については、次のように考えることができよう。1つは、ほぼ同じ形、規模の土坑が列状に連続して掘削されていることから、この土坑は連続して同じ量の土を掘削することを意図している可能性がある。こうした土坑の列に対し、道路状遺構の下部構造が推定されることもあるが、この土坑列の場合、複数の列が並列しており、連続して土坑を掘削すること自体が目的だったと考え



第IV-4-13 図 土坑群 K・M 群平・断面

られる。そして、土坑の掘削深度が砂質の強まる第 3-1-3a 層以下に及ばず、粘性の強い第 3-1-2a 層に止まっていることも看過できない。つまり、同規模の土坑を連続して掘削する目的が、定量の粘性の強い土を得ることだった可能性がうかがわれる。粘性の強い土を効率的に採取し、運搬するために、列状に土坑を掘削したのではないだろうか。粘性の強い土が浅いところで得られる場合は溝を伴わず、一定の深度が必要な場合には溝を掘削し、掘削深度を深くしているのかもしれない。なお、土坑の中で、形態が安定している土坑 5 基について土坑内の容量を計算した。306 土坑 (H 群) は 0.079 m³、566 土坑 (I 群) は 0.049 m³、567 土坑 (I 群) は 0.083 m³、568 土坑 (I 群) は 0.058 m³、655 土坑は (D 群) 0.095 m³で、平均値は 0.073 m³である。

また、各土坑から土坑の埋没時期を示す遺物は出土していない。ただし、6 溝内から TK10 型式段階の須恵器 [V-12 図 2・3] が出土している。上部を覆う第 3-1-1a 層の下限が古墳時代終末期であり、



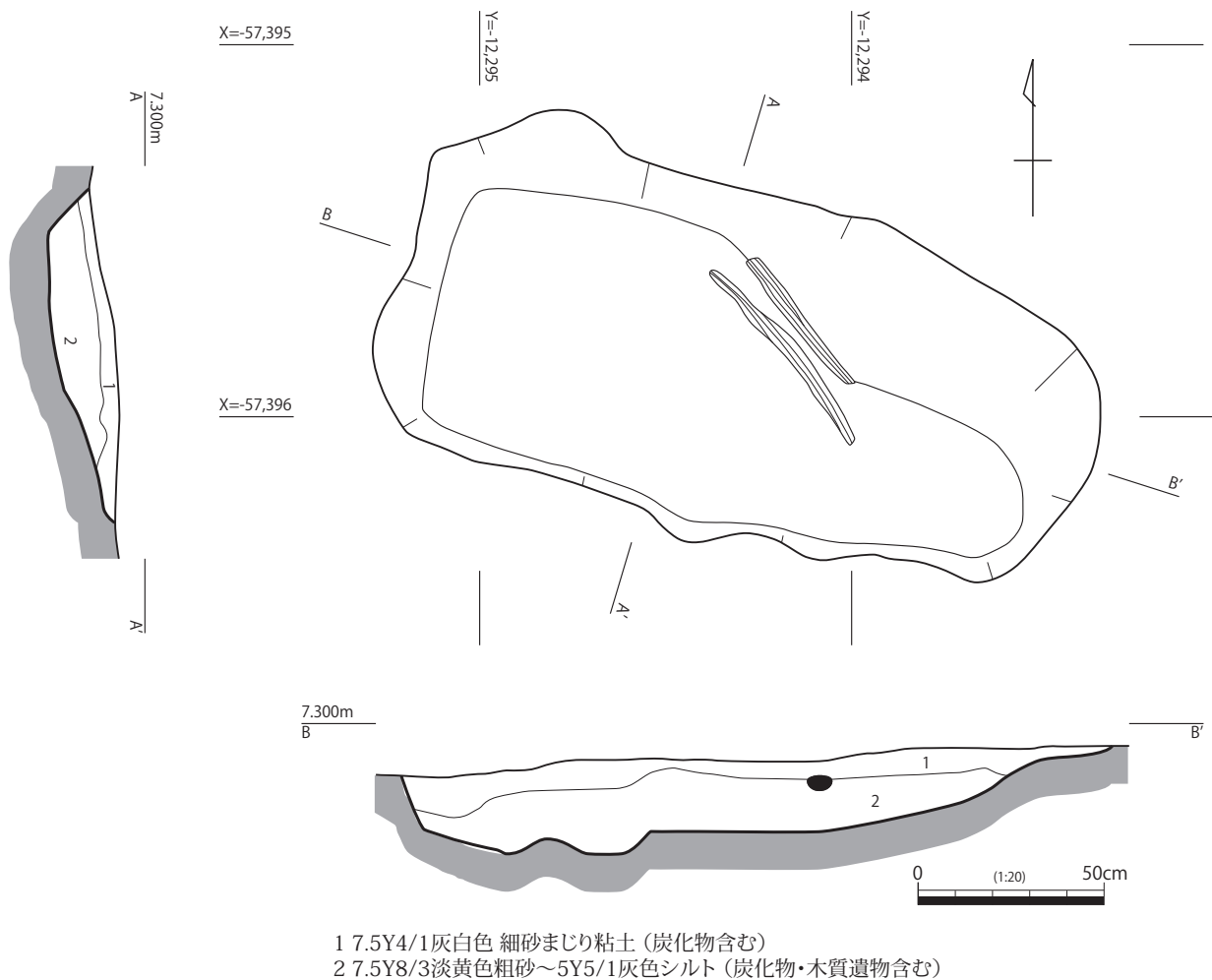
第IV-4-14 図 土坑群L群平・断面

第IV-4-1 表 土坑群埋土一覧

遺構名	群	埋土	出土遺物
16 土坑	L 群	7.5Y4/1 灰色 シルト～細砂 (第4a層母材とする7.5Y7/2灰白色粘土ブロックを含む)	
17 土坑	L 群	7.5Y4/1 灰色 シルト～細砂 (第4a層を母材とする7.5Y7/2灰白色粘土ブロックを含む)	
18 土坑	L 群	7.5Y4/1 灰色 シルト～細砂 (第4a層を母材とする7.5Y7/2灰白色粘土ブロックを含む)	
19 土坑	L 群	7.5Y4/1 灰色 シルト～細砂 (第4a層を母材とする7.5Y7/2灰白色粘土ブロックを少量含む)	
20 土坑	L 群	7.5Y4/1 灰色 シルト～細砂 (第4a層を母材とする7.5Y7/2灰白色粘土ブロックを少量含む)	
21 土坑	L 群	7.5Y4/1 灰色 シルト～細砂 (第4a層を母材とする7.5Y7/2灰白色粘土ブロックを少量含む)	
228 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
229 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
230 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
231 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
232 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
234 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
236 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
237 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
238 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
239 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
240 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
241 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
242 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
243 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
245 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
246 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	
247 土坑	B 群	7.5Y6/2 灰オリーブ色～7.5Y5/1 灰色 細砂～シルト (N6/0 灰色粘土ブロックを多く含む)	

第IV-4-3表 土坑群埋土一覧 (3)

遺構名	群	埋土	出土遺物
389 土坑	D 群	10YR5/1 褐灰色 シルト～細砂 (第 4a 層を母材とする 10Y7/1 灰白色粘土ブロックを含む)	
391 土坑	C 群	7.5Y5/1 灰色 シルト～細砂	
392 土坑	C 群	7.5Y5/1 灰色 シルト～細砂	
393 土坑	C 群	7.5Y5/1 灰色 シルト～細砂	
394 土坑	C 群	10YR5/1 褐灰色 シルト～細砂 (第 4a 層を母材とする 10Y7/1 灰白色粘土ブロックを含む)	
395 土坑	C 群	10YR5/1 褐灰色 シルト～細砂 (第 4a 層を母材とする 10Y7/1 灰白色粘土ブロックを含む)	
409 土坑	C 群	7.5Y5/1 灰色 シルト～細砂	



第IV-4-15図 140 土坑平・断面

土坑群は古墳時代後期に掘削され、埋没したものと考えられる。

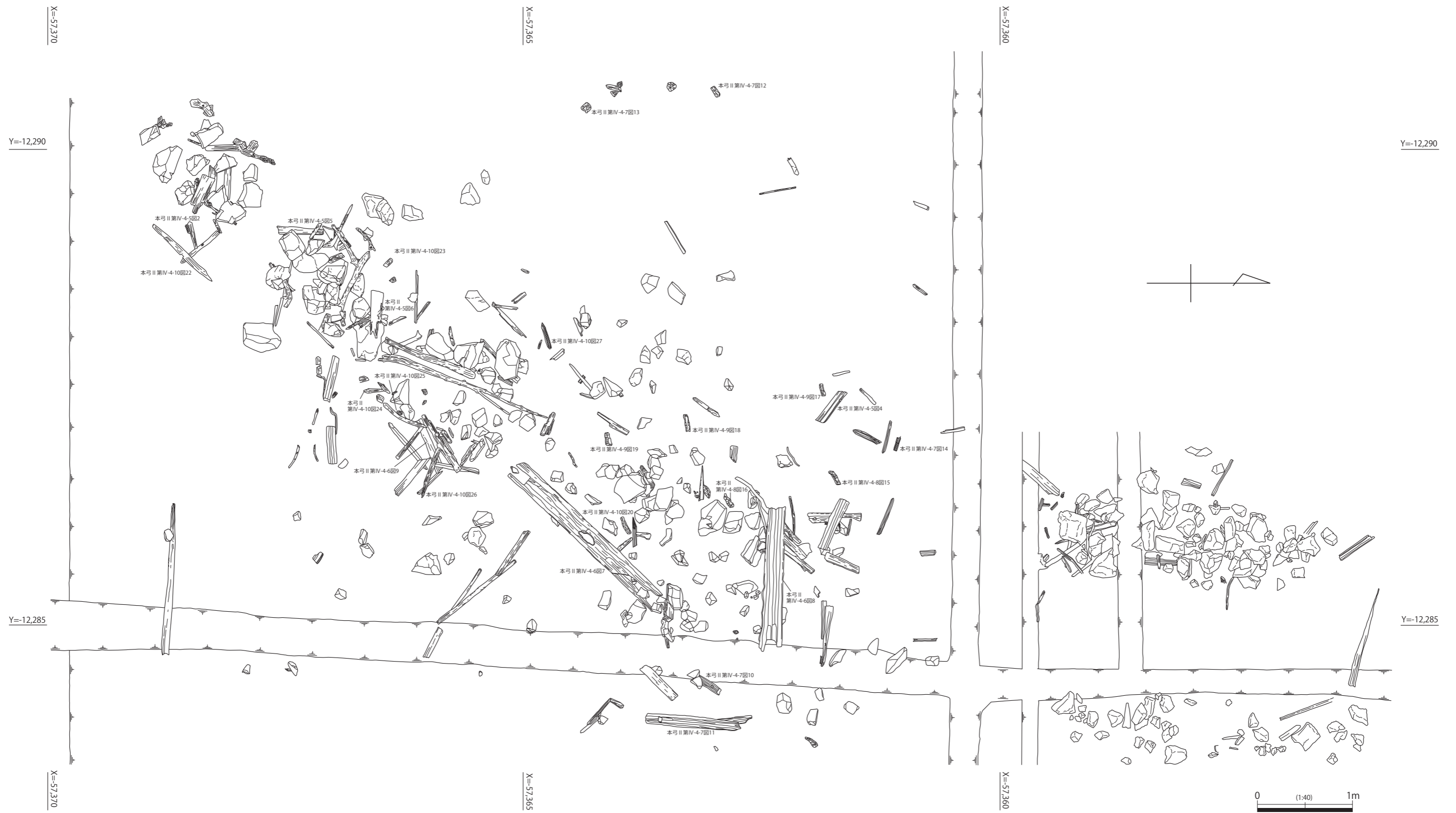
第2項 土坑

140 土坑〔第IV-4-15図 第2分冊図版 33〕

土坑群 B 群の南側にあり、平面形は隅の丸い長方形をしている。断面形は浅い皿形で、北東側の壁の立ち上がりが緩い。平面規模は長軸 1.9 m、短軸 0.9～1 m、深さは最深部で 0.26 m である。埋



第IV-4-16 図 664 構造物平・立面



第IV-4-17 図 2溝上部木製構造物平面

土には炭化物等が含まれ、長さ 0.4 ～ 0.6 m の棒状の木材が出土した。土坑群との関係は不明である。

第3項 構造物

調査区北側で 2 溝埋没後に生じた窪地部分に相当する範囲で構造物を検出した。

(1) 664 構造物〔第Ⅳ-4-16 図 第2分冊図版 34・35-1〕

4D-10a 区にある。土坑群が埋没した後に構築された構造物で、土坑群の上部に堆積した氾濫堆積物（第 3-1-1b 層）に打設されている。調査区北側の釣山裾部が冠水した時期に設けられたものと推測される。構造物の広がりには南北 5.4 m、東西 6 m ほどで、矢板や杭の点数は約 30 本である。周囲には 0.2 ～ 0.5 m ほどの礫が集中していた。構造物としての原形は留めていないようで、原位置を保つ杭や矢板は数カ所にしか認められない。以下、矢板や杭がまとまる部分を中心に報告を行う。

杭 1 南東端にある。長さ 1 ～ 1.4 m ほどの杭を主体に、やや幅の広い矢板状の材が打設されている。

杭 2 当構造物のほぼ中央に位置する。東西-南北方向に杭が打設されている。杭の長さは、1.2 ～ 1.6m ほどである。横たわる棒状の角材があり、杭に横木がかませた可能性がある。また田下駄〔本弓Ⅱ第Ⅳ-4-3 図 2〕が出土した。また、杭 2 の南西側に集中する礫群からも田下駄（本弓Ⅱ第Ⅳ-4-3 図 1）が出土している。

矢板 南東構造物の西側に矢板が打設されていた。面をそろえて、北東-南西方向にならぶ。幅 0.15 m、長さ 0.8 m 前後のものが多い。他に比べ、この矢板の根元には礫が少ない。

(2) 2 溝上部木製構造物〔第Ⅳ-4-17 図 第2分冊図版 35-2・36-1〕

5 区北東隅、4C-6i・6j・7i・7j・8i・8j 区にある。杭や板状の木製品、人頭大の礫が南西-北東方向に列状に並ぶように出土した。構造物を構成する部材と考えられるが、原位置を保つものはない。特に X = -57,360 ライン以北に大型の礫が密集しており、この付近で礫や木材が出土する方向が変わる。板状の木製品の中には大型の建築部材と思われるものもあり、構造物の部材に転用されたものと考えられる〔本弓Ⅱ第Ⅳ-4-6 図 7〕。

この構造物は、2 溝上部に堆積した第 3-1-2a 層上にあった。土坑群との時間的前後関係を示すものではなく、664 構造物との関係も不明である。第 3-1-2a 層は場所により植物遺体の含有量や色調が異なるが、特に、この構造物の周囲には、腐食に富む黒い土が堆積しており、この構造物が構築された当時、調査区の北東隅が冠水していたものと考えられる。

なお、構造物の列は、後述する 2 溝の走行方向とは全くは一致しておらず、X = -57,365 ライン以北ではほぼ南北方向を向く。土層断面の観察などからは確証を得ることができなかったが、2 溝埋没後にも南西から北東方向に水が流れる溝または河川があって、冠水した環境を利用するために設けられた構造物の可能性がある。

第5節 第3-1-2a層下面の遺構

第3-1-2a層下面では、5区南西隅で木製構造物を伴う4落ち込みと、4落ち込みから派生し、調査地を南北に縦走する大型の水路である2溝などを検出した。4落ち込み内に設けられた木製構造物は埋没するたびに何度も繰り返し構築されており、転用された建築部材や木製品が出土するとともに、構造物を構築するさいに用いられた土嚢や編組製品などを確認した。これらには古墳時代前期中葉の土師器が伴う。古墳時代前期の水利施設や土木建築技術を知る好資料である。以下、2溝と4落ち込みを水利施設と総称する。

第1項 水利施設

(1) 2溝〔第IV-5-2～8図 巻頭図版2-2 第2分冊図版36-2～45〕

5区全域を南北に縦走する大型の溝である。調査区南西隅にある4落ち込みから調査区西端に沿って北上し、 $X = -57,450$ ライン付近で北東に方向をかえ、調査区東側にある釣山の山裾に沿うように徐々に軸を北側に変えながら調査区北東隅へと続く。 $X = -57,450$ ライン以南では、先述した1溝と重複している。全長は200mをこえ、幅は5.6～7.4m、深さは1.2～1.5mである。断面形が幅広のV字形ないし逆台形を呈しており、山裾の地形に沿いながら、直線的な方向を指向していることから、人の手が加わった水路と考える。

①堆積

2溝を埋める堆積を上層、中層、下層の3層に大別した〔第IV-5-3図 第2分冊図版37〕。下層は粘土やシルトを主体とする自然堆積層である。下層のうち、底面近くに堆積した砂層(56層)には明瞭なラミナが観察できることから、この水路には砂が運ばれる程度の水流があったと考えられる。その後の堆積にもラミナが観察できる砂層(44層など)が介在しており、埋没する過程にも水の流れが継続していたことがわかる。

また、埋没の過程で、水の流れを確保するために、必要に応じて溝の再掘削が行われていたことが、土層断面に観察できる堆積からうかがわれる。調査中には、再掘削の段階を仔細に把握することはできなかったが、2溝が接続する4落ち込み内では、設置された木製構造物の構築単位を一定程度整理できる。基本的には、その構築単位に対応する形で2溝の再掘削も行われ、水路としての機能維持がはかられていたと考える。

中層として認識した堆積は、概ね厚さ0.6mほどであった。中層に含まれる堆積は、砂層を主体としており、止水性の堆積をうかがわせる堆積は確認できなかった。土層断面の観察では、中層上面は窪地のような形状をしており、そこに堆積した上層には粘土やシルトを主体とする自然堆積が認められた。ラミナの明瞭な砂層も介在しておらず、しばらくの間、機能維持がはかられていた2溝も、中層段階で実質的な機能を失い、しだいに水の流れが失われた後に低湿な環境が生じ、泥土が堆積したものとみられる。

基本層序(第IV章第2節)にも記述したが、調査区北側には低湿な環境で形成されたとみられる13～16層が広がっている。これらは腐食に富み黒色を呈しているが、この中には、礫や砂などの夾



第IV-5-1図 第3-1-2a層下面全体

雑物が含まれる。2溝の中層堆積時に溝の外部にあふれだした土砂が母材となっているものとする。

②出土遺物〔第2分冊図版38・39〕

上層、中層、下層から土器、木器、石器が出土した。特に中層に含まれる遺物が多い。出土した土器には下層から混入した弥生土器などが含まれるが、2溝の埋没時期を示すのは古墳時代前期中葉の土師器である。土師器には完形に近い形状を保つものが一定量ある。弥生土器に比べて、土師器は磨滅も少なく、2溝の使用、廃絶時期を知るのに有効な資料と考える。また、上層、中層、下層から出土した土師器は、概ね同一型式の範疇で理解できるものであり、2溝が土器一型式の時間幅の中で機能していたことがうかがわれる。

また、2溝内には、杭と横木が組み合わされた木製構造物が検出された。木製構造物には、それに関係すると思われる建築部材を転用した杭や材が多く出土している。杭や矢板の他に、長さ2mをこえる大型の木材も多く出土している。なお、2溝に接続する4落ち込み内に構築された杭などには樹皮の付いた芯持ち丸太を一部加工したものが多いが、2溝内から出土する木材には、割材や建築部材と考えられるものが多く、出土する木材に差異が認められる。

さらに、2溝内 X=-57,508 ライン付近で、肉眼でイネ科植物の草本類と思われる繊維質の塊を中層から検出した〔第IV-5-4図 第2分冊図版38〕。規模は南北0.9m、東西0.8m、厚さ0.2mで、幅5mmほどのワラのような繊維の単位が同一方向に続いているのが確認される。また繊維の方向は北西-南東のものとそれに対して90度異なる北西-南東のものがある。2溝からは、建築部材が多く出土しており、屋根材の可能性もある。ただし、灰像分析を行った結果、イネ科植物の機動細胞や珪化細胞組織は認められなかった（第VIII章第5節）。

この他に2溝底面から鉄製の方形鍬鋤先が出土している。鉄器はこの1点のみであった。

なお、出土した土器については、第3分冊第V章第13節、石器については同第VI章、鉄器については第VII章、木製品については平成25年度刊行『本高弓ノ木遺跡Ⅱ木器編』第IV章第5節を参照いただきたい。

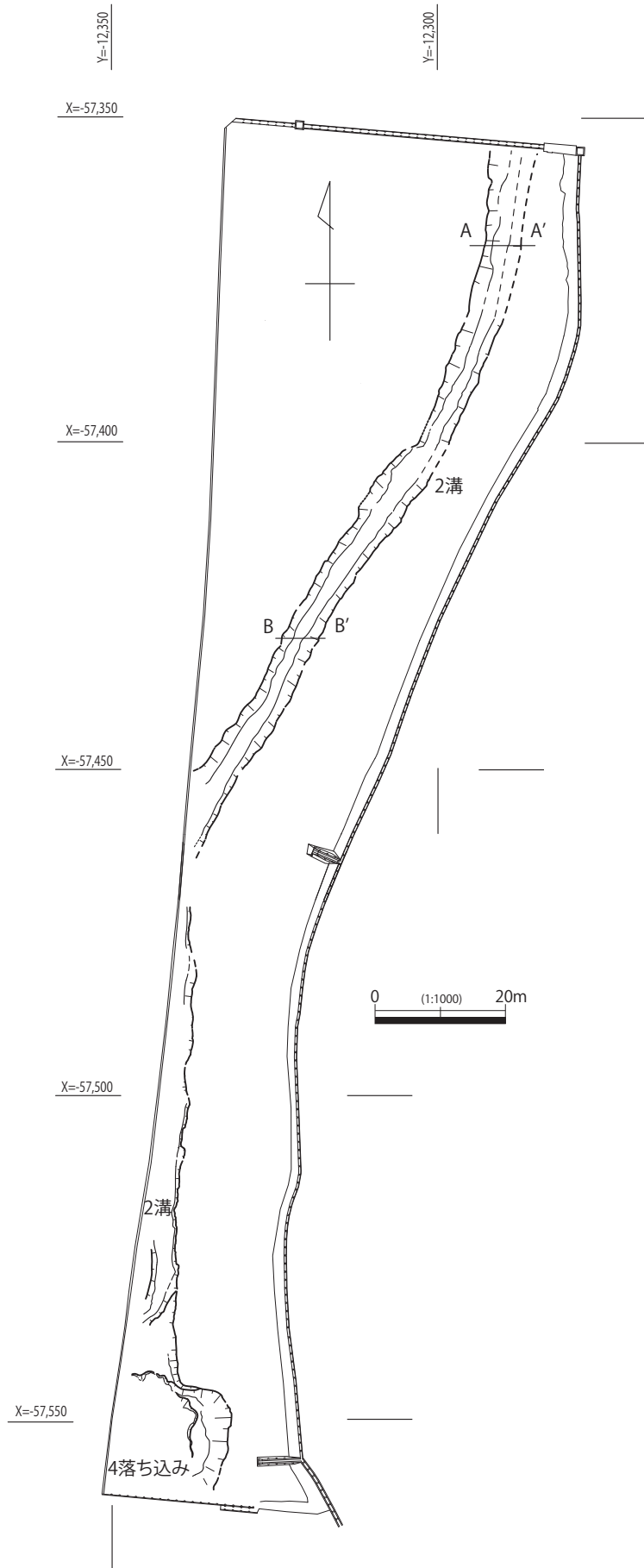
③木製構造物

2溝内からは堰と考えられる木製構造物やその残骸と思われる杭や矢板などが数多くみつかっており、周囲の水田経営にとって重要な水路であったと考えられる。またその規模から、船舶による人や物資の運搬も可能であり、そういった運河のような役割もあった可能性がある。古墳時代前期段階に4落ち込みとあわせて大規模で計画的な土木工事を行い、これまでとは質・量共に異なる地域開発を行った事が想定できる。

木製構造物1・3〔第IV-5-5図 巻頭図版3-2 第2分冊図版41～44-1〕

2溝内 X=-57,383 ライン付近で検出した。埋土中層を掘削中に杭、矢板が並んで横木と組んだ状況で出土した。長さ0.7～1.5mほどの杭、矢板11本とそれらに直交する長さ1.7mの横木1本、2溝下層段階の東側の法面に差し込まれた杭などで構成されている。2か所に木材のまとまりがあったので、X=-57,383 ラインより北側を木製構造物1、南側を木製構造物3と呼称する。いずれも中層直下で検出した。いずれも水の流れに直行するよう、溝を横断するように構築されている。

木製構造物1 2溝下層埋没段階の溝幅を意識して構築されている。杭や矢板には、埋土下層に打



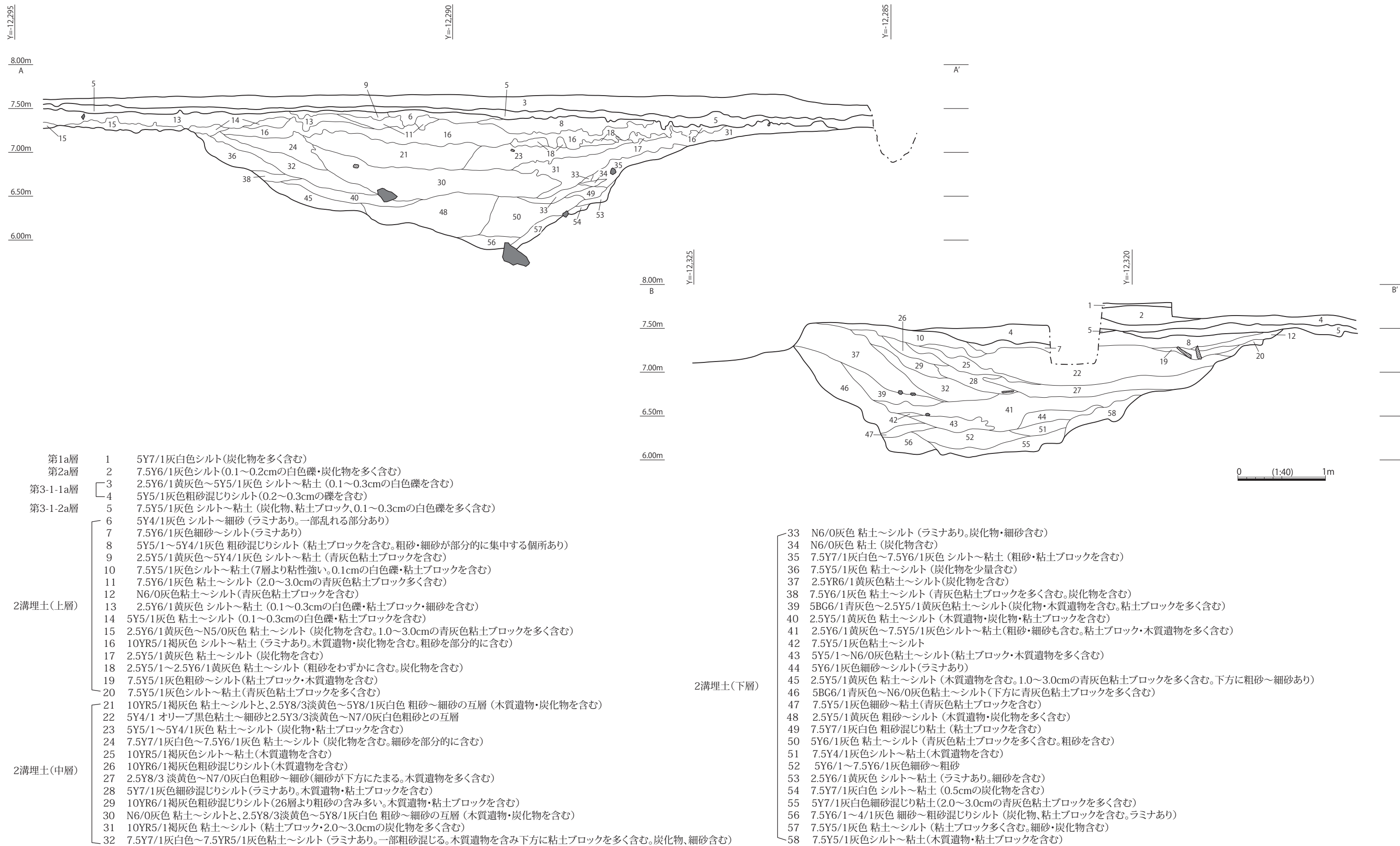
第IV-5-2図 2溝・4落ち込み平面

ち込まれたものが確認できた。溝内に倒れ込んだ杭や矢板は、水平または北側のレベルが高く、南側からの流れてくる水を受けていたものと推測される。堰のような構造のものと考える。最終的には、中層を構成する粗砂を供給した水流によって倒壊した可能性がある。

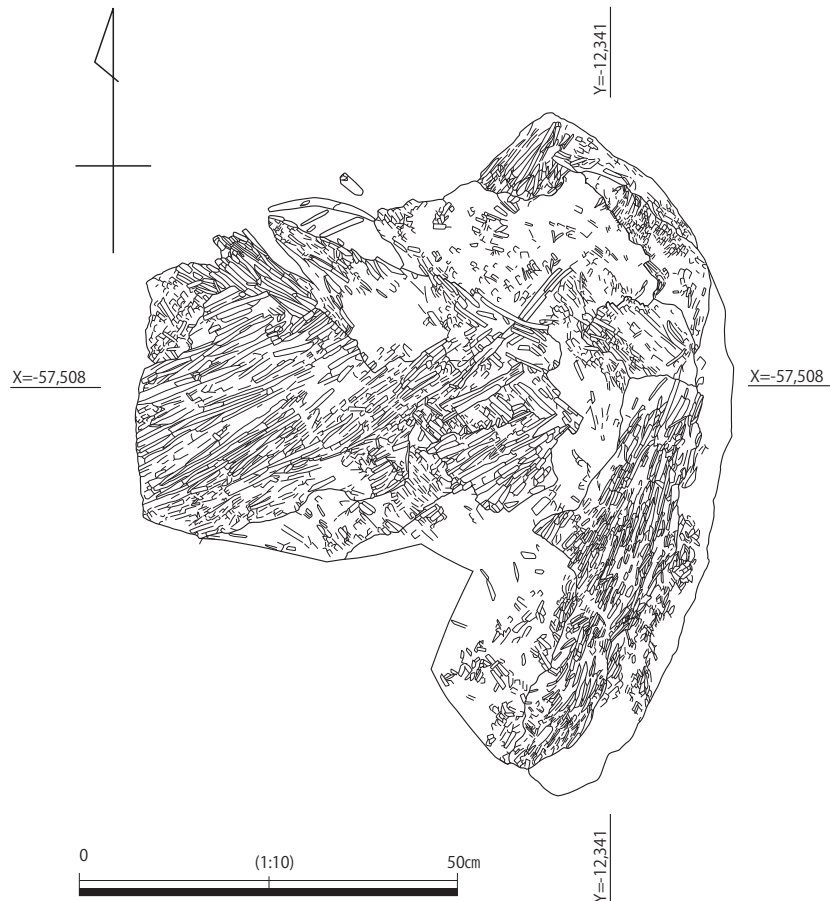
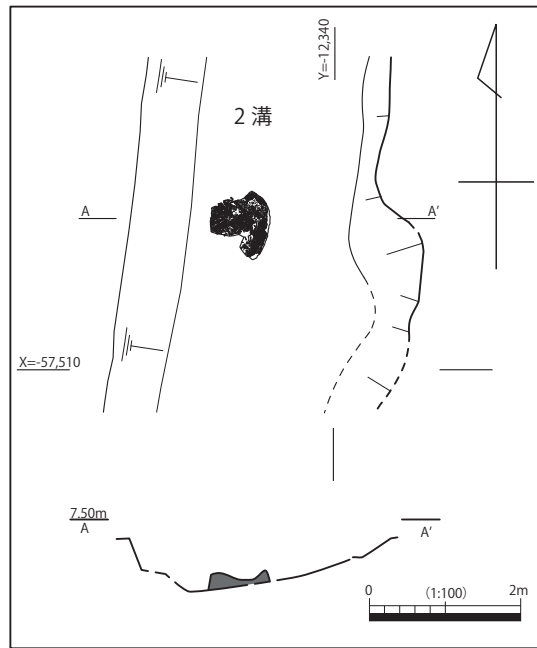
木製構造物3 長さ0.6～1.85 mほどの杭、矢板や木材で構成されている。いずれも溝の走行方向と並んで出土しているが、大型の芯持ち丸太で、本来は横木として使用されていた木材の可能性がある。2溝下層段階での流芯より西側に木材が集中している。一部の杭は下層に差し込まれた状況で出土している。木製構造物1と同様に、杭や矢板は水平または北側のレベルが高い状況であり、南側からの水流で倒されたものと考えられ、構造も同様に堰のようなものと考えられる。

木製構造物2〔第IV-5-5・7図〕

X = -57,383 ラインより北にあり、木製構造物1の東側でみつかった。2溝下層掘削中に検出したことから、木製構造物1・3よりも古い時期に構築された構造物と考えられる。2溝最下面のほぼ流芯上に存在する。長さ2 mをこえる木材や矢板、杭などは溝の走行方向と並んで出土しており、杭や矢板と重ねて固定するための挟りをもつ横木は、それらと直交して出土している。これらも検出レベルは水平もしくは北側がやや高い状況であり、他の木製構造物と同様に南側からの水流で流されたものと考えられる。構造については堰のようなものと考えられる。この他、木材と近接して土師器が出土し



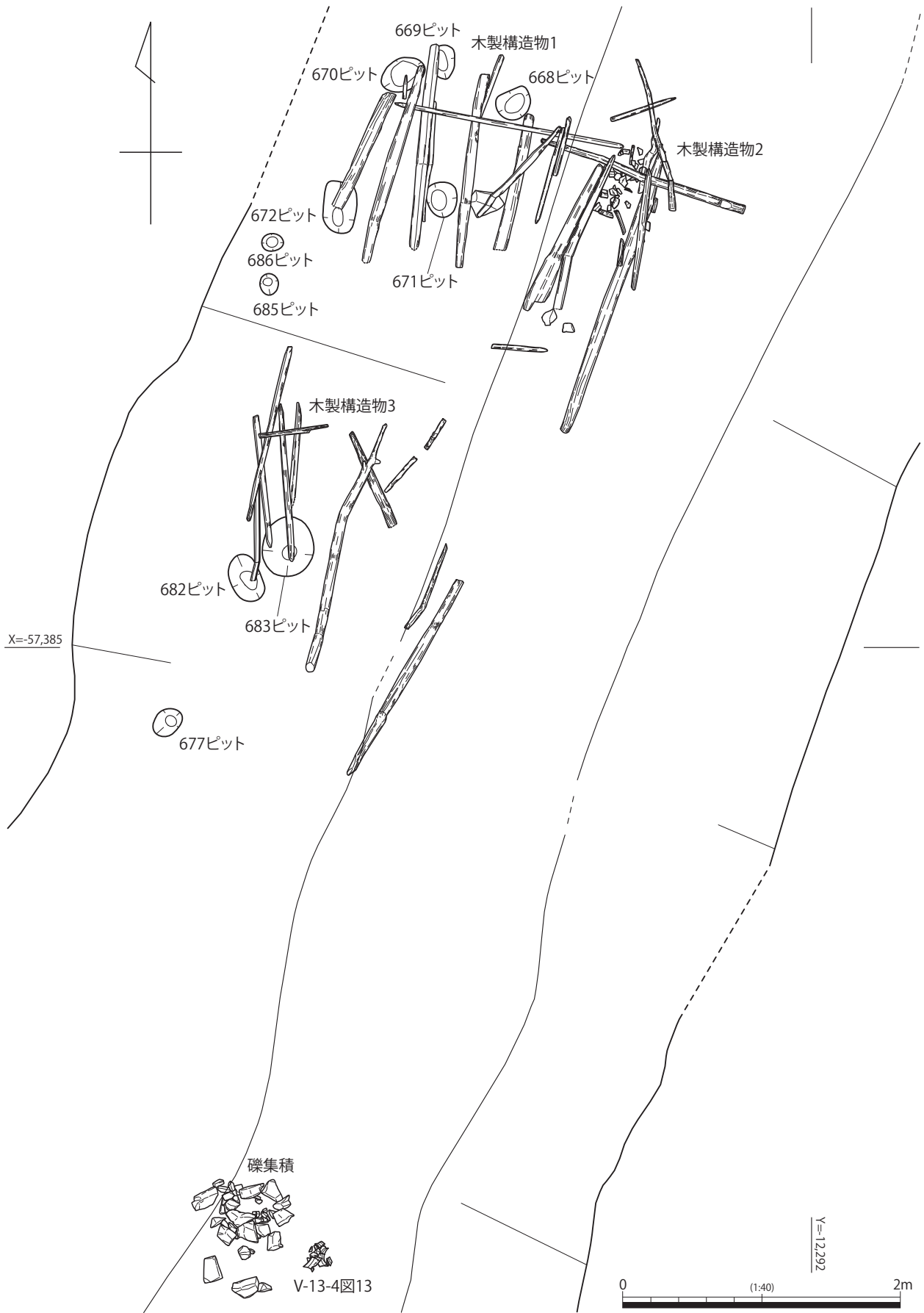
第Ⅳ-5-3図 2溝土層断面



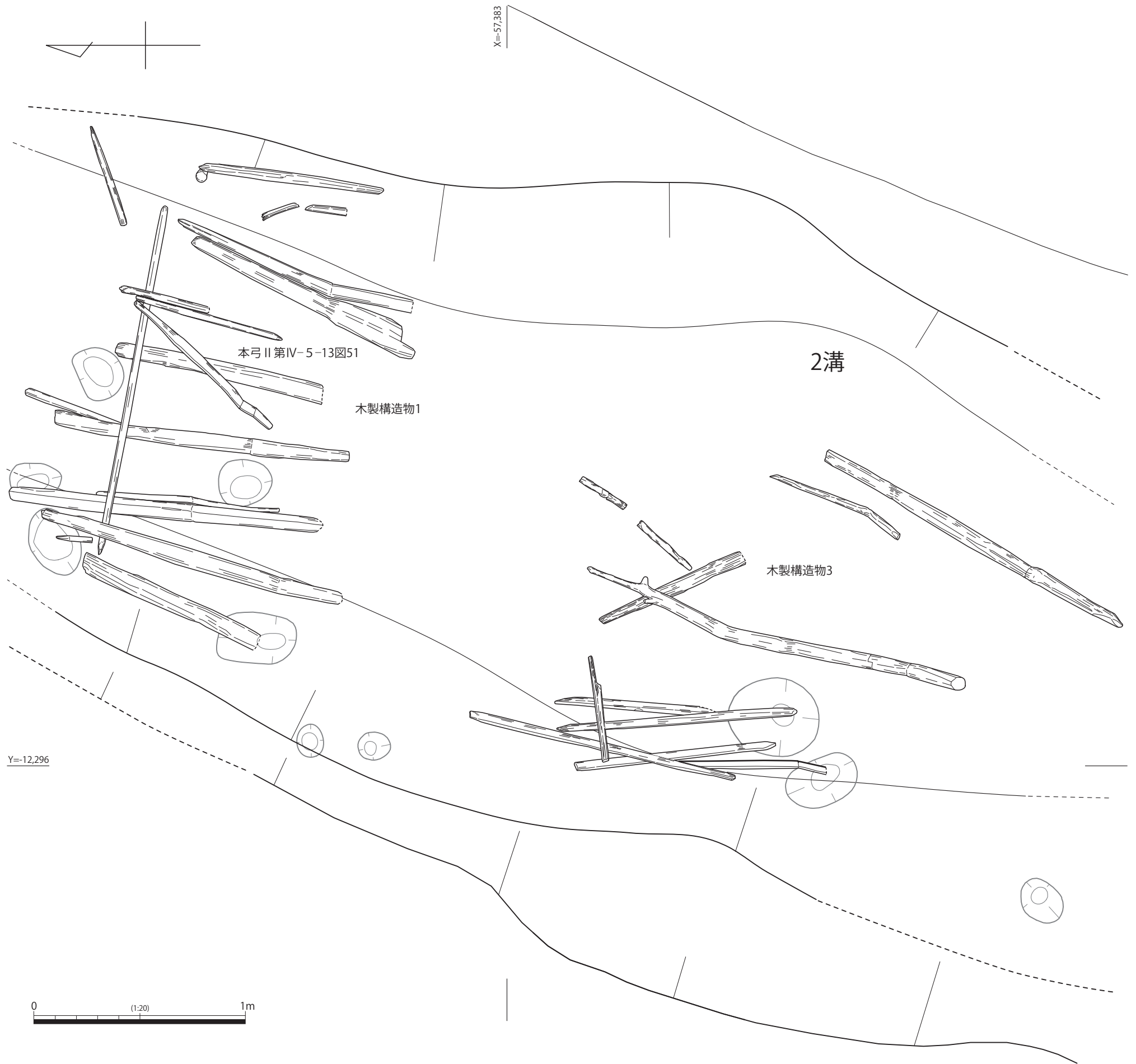
第IV-5-4図 2溝内ワラ束状繊維塊出土状況

ている〔第V-13-7図33〕。古墳時代前期中葉のものである。

ピット〔第IV-5-5図 第2分冊図版44-1〕 2溝底面では、構造物の直下や周辺でいくつかピットがみついている。いずれも溝の底面で検出した。径0.15～0.4m、深さ0.1m程度で、埋土は、



第IV-5-5図 2溝内木製構造物1～3 ピット群平面



本弓II第IV-5-13図51

木製構造物1

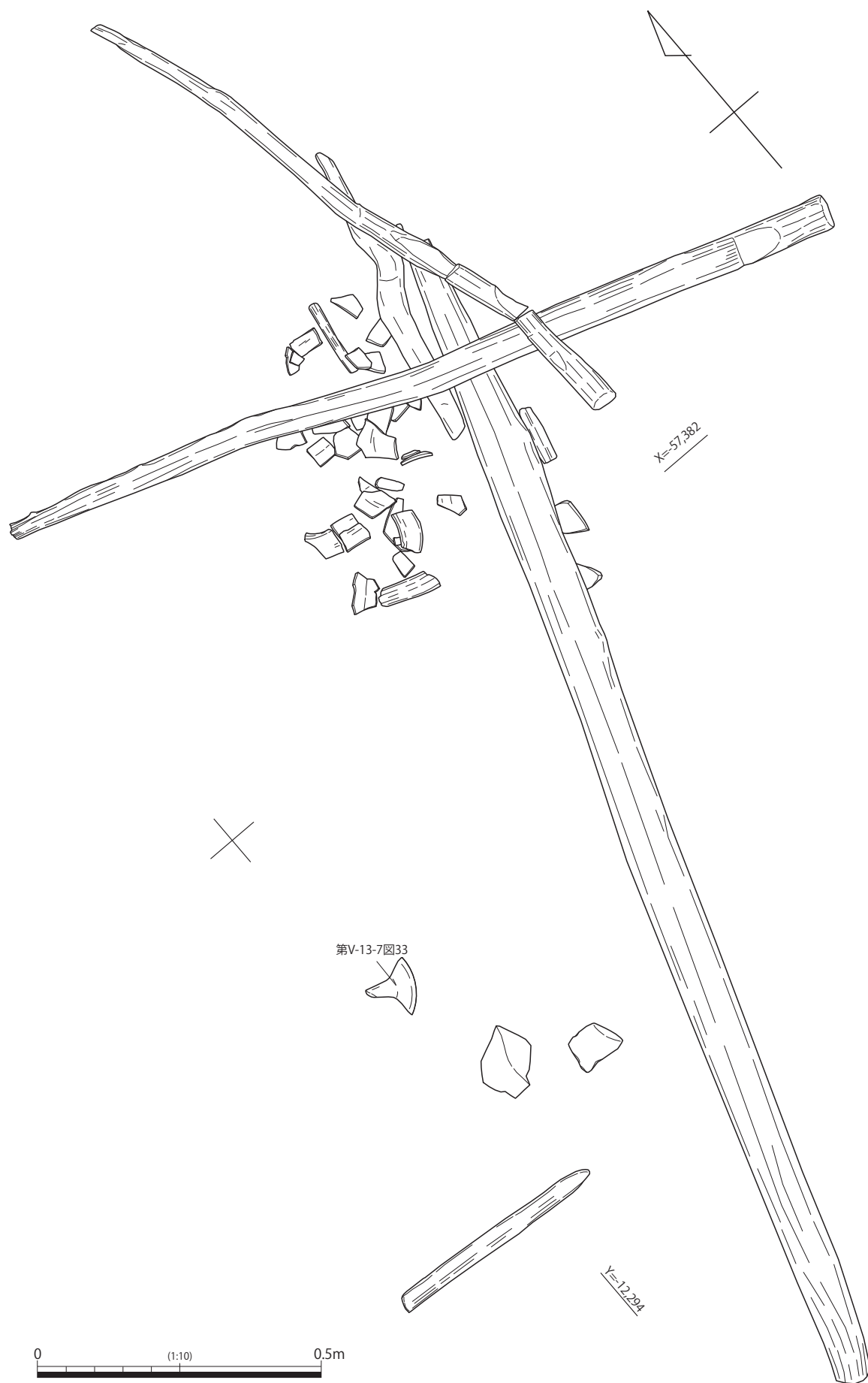
2溝

木製構造物3

Y=-12,296

0 (1:20) 1m

第IV-5-6図 2溝内木製構造物1・3 ピット群平面



第IV-5-7図 2溝内木製構造物2平面

5Y4/1～5Y5/1 灰色の粘土～シルトで、粘土ブロックや細砂を含んでいる。平面は南北方向に長い楕円形が多い。2溝西側法面に多くあり、杭や矢板が打ち込まれていた痕跡かもしれない。特に木製構造物1・3には、杭や矢板の一部がピットに重なる部分もあり、木製構造物1・3段階に打ち込まれた構造物の痕跡かもしれない。

礫集積〔第IV-5-5図 第2分冊図版44-2〕 2溝内、X = -57,389、Y = -12,296 ラインの位置で0.1～0.2 m大の礫の集積を検出した。2溝底面にあり、20個ほどの礫が南北0.8 m、東西0.75 mの範囲で一部重なりながら出土している。周囲からこうした礫は出土していないことから、人為的に集められたものと考えられる。近接して、土師器〔第V-13-4図13〕も出土している。古墳時代前期中葉のものと考えられる。

2溝中層砂層内木製構造物〔第IV-5-8図 第2分冊図版40〕

2溝内、X = -57,490 ラインより2 m南、Y = -12,340 ライン上で矢板や杭、木材が集中して出土した。いずれも2溝中層で検出した。X = -57,493 ライン付近で東西方向に矢板や杭、木材が北側にやや傾いているが立った状態で出土している。また2溝東側法面では、杭が北側へ連続して打たれている。また長さ2 m大の木材が、流れと並行して出土している。一部杭と接している部分もあるが、横木と思われる。この構造物も2溝中層段階に埋没して機能をなくしたものと考えられるが、先述した木製構造物1～3の検出レベルが水平に近い出土状況であったのに対して、強度があったためか、この構造物の残りはよい。なお、杭、矢板付近で盛土のような土は確認できなかった。

第IV-5-1表 2溝内ピット群一覧

遺構名	地区名	規模 (cm)			埋土	出土遺物
		長軸	短軸	深さ		
668	ピット	4C-9j	27	20	7	5Y4/1 灰色 粘土～シルト (青灰色粘土ブロックと細砂を含む)
669	ピット	4C-9j	24	16	7	5Y4/1 灰色 粘土～シルト (青灰色粘土ブロックと細砂を含む)
670	ピット	4C-9j	32	24	10	5Y4/1 灰色 粘土～シルト (青灰色粘土ブロックと細砂を含む)
671	ピット	4C-9j	25	22	8	5Y4/1 灰色 粘土～シルト (青灰色粘土ブロックと細砂を含む)
672	ピット	4C-9j	37	24	12	5Y5/1 灰色 粘土～シルト (青灰色粘土ブロックと細砂を含む)
677	ピット	4C-9j	23	18	9	5Y4/1 灰色 粘土～シルト (青灰色粘土ブロックと細砂を含む)
682	ピット	4C-9j	34.5	22	12	未記録
683	ピット	4C-9j	45	37.5	14	未記録
685	ピット	4C-9j	15	13	10	5Y5/1 灰色 粘土～シルト (青灰色粘土ブロックと細砂を含む)
686	ピット	4C-9j	15	12	4	5Y5/1 灰色 粘土～シルト (青灰色粘土ブロックと細砂を含む)



第IV-5-8図 2溝中層砂層内木製構造物平・立面

(2) 4落ち込み〔第IV-5-9～61図 巻頭図版3-1・4～8 第2分冊図版46～77〕

4落ち込みは、5区の南端で確認された。検出面の標高は約7.5 mである。西側と南側については調査区外に広がるため、全形は不明である。検出できた遺構の平面規模は、東西18 m、南北15 mである。北側は、水路として掘削されたと考えられる2溝と接続しており、流路内堆積物と考えられる砂礫層が連続して認められることから、両遺構が同時期に機能していたことがわかる。

4落ち込みの調査を開始した際、検出面下0.8 m以上にわたってシルト～粘土を主体とした細粒の自然堆積層が確認された。そこで、当初は池のような滞水域を想定していた。ところが、調査の進行に伴い、細粒の堆積層の下部に、粗粒な砂礫を主体とする堆積物が厚く堆積していることが明らかになった。さらに、この粗粒な堆積物を除去したところ、もっとも深い場所で標高約4.5 m、検出面からの深度が3 mにおよぶことが判明するとともに、水流による浸食が顕著に認められた〔第IV-5-9図〕。また、上部の細粒の自然堆積層にかかる自然科学分析では、流水域におけるタフォノミーが想定される結果が得られた（第VIII章第6節）。したがって、4落ち込みは安定した滞水域ではなく、流路の一部であったことがうかがわれる。浸食方向や堆積状況から南西方向から4落ち込みに水が流れ込んでいたと想定できる。遺構南西側は調査区外となるため、河道の復原はできないが、現在、4落ち込みの南方100 mに東流する有富川があり、堆積状況からは河川からの直接的な影響が看取できる。

4落ち込みの内部には、重層する木製構造物群があった。木製構造物は基本的に南北方向を指向し、長さ3～5 m程度の横木を主軸に、直交するように設置された杭材との組み合わせによって構築されている。使用されている木材は3000点以上、木材の上面や前面には盛土や肉眼観察ではイネ科と推測される植物の茎や葉を用いた編組製品などを被覆材とする部分を確認している。したがって、この木製構造物群の外見は、本来、土堤状をなすもので、木製構造物自体はその躯体である。

ただし、盛土や被覆材は水の浸食などで大部分が失われており、機能時の状態を正確に把握することは困難であった。また、木製構造物を躯体とする土堤は、大量に供給される砂礫によって度々埋没しており、その都度、砂礫の上部に新しい構造物が築かれている〔第IV-5-11図〕。砂礫の堆積は木製構造物の西側に顕著で、木製構造物の構築は、東から西へ変遷している。

こうした状況から、この木製構造物群は、西側を前面とし、北方に接続する2溝へ水を導く水利施設であったと理解できる。なお、4落ち込みと2溝との接続部には、大規模な盛土遺構があった。詳しくは後述するが、この盛土遺構にも、木製構造物群と同様、段階的に構築された痕跡が確認できた。この構築は4落ち込み内に築かれた土堤（木製構造物）の変遷に連動している可能性が高い。砂礫の供給により4落ち込みや2溝が埋没する過程で、4落ち込み内の土堤や接続部の盛土の再構築、さらには2溝の再掘削を行いながら、導水機能を維持していたものと考えられる。

また、4落ち込み内の木製構造物群と、2溝内の盛土遺構は、最終的に厚い砂礫の供給によって同時に埋没している〔第IV-5-11図20層 第2分冊図版47-2〕。4落ち込み南端では、この砂礫層の直上から、古墳時代前期中葉の特徴を有す土師器甕〔第V-13-13図1 第2分冊図版48-1〕が出土しており、木製構造物群と盛土遺構による水利施設が放棄され、廃絶された時期を示すものと理解される。

その後、4落ち込みはわずかに水が流れる浅い落ち込みとして徐々に埋没していく〔第IV-5-11図12～19層 第2分冊図版48-2〕。12～15層は、標高7.3 m付近まで埋没した4落ち込み内を流れていた小流路の堆積物と捉えられるが、12層で埋没していた流路内には、東西方向に杭と横木を設置

する状況が確認された〔第2分冊図版49〕。落ち込み内の流水を利用した痕跡と考えられるが、同流路については平面的に検出できなかったため、詳細は不明である。直上の10・11層からは、飛鳥時代のものと考えられる遺物が出土している。

②木製構造物の解体と木材の取り上げ

4落ち込みの調査では、内部に構築された木製構造物の構築単位と構築方法の把握を主たる目的としながら、構造物の解体と使用されている木材の取り上げを行い、現地で一次的な整理を行った。以下、その方法を概略する。

まず、調査中には検出した木材の乾燥を防ぐためにPEGを10%に希釈した溶液を表面に散布し、農業用のビニールシートで覆った〔第2分冊図版50-1〕。さらに、検出した木製構造物を一定期間現状維持させる際には、木製構造物の隙間に支柱を設置し、足場を組んで、その上にブルーシートを覆った。また、掘り下げに伴う湧水によって、調査区や遺構の法面に小規模な崩落が頻発した。その際には、調査が完了した場所を部分的に埋め戻すなどしたり、土嚢を積み上げ、杭を打設するなどして補強した。そのため、遺構の記録写真は必ずしも本来の形状を保っていない。

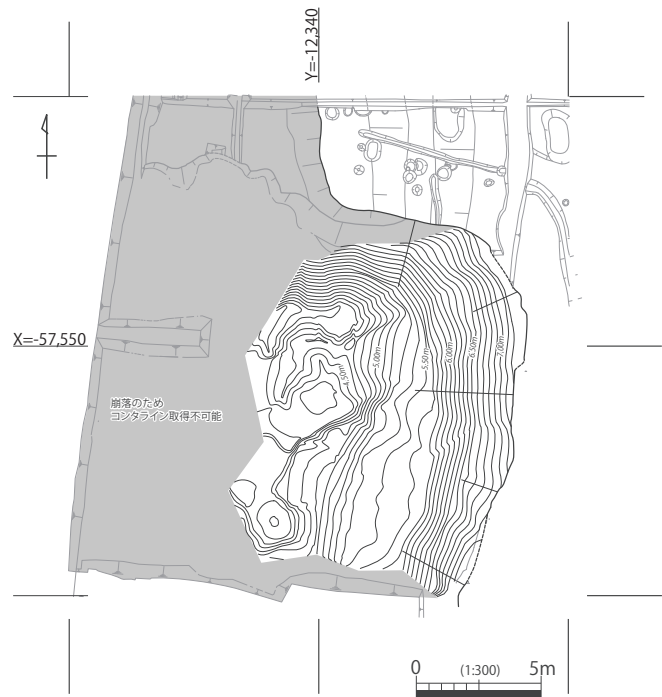
また、木材の取り上げは、トータルステーションによる測量や、Kuravesによる写真計測〔第2分冊図版50-2〕やオルソフォトの作成により出土状況を記録した後に、それぞれの法量を計測し、デジタルカメラによるメモ写真を撮影した。こうして記録化された木材の総点数は約3000点におよぶ。そして、木製構造物に転用されていた製品は全量持ち帰り、明確な加工が施されていない材については、樹種同定などの分析を行うため一部を切断し、サンプルを持ち帰ることとした。

調査中に用いた用語について

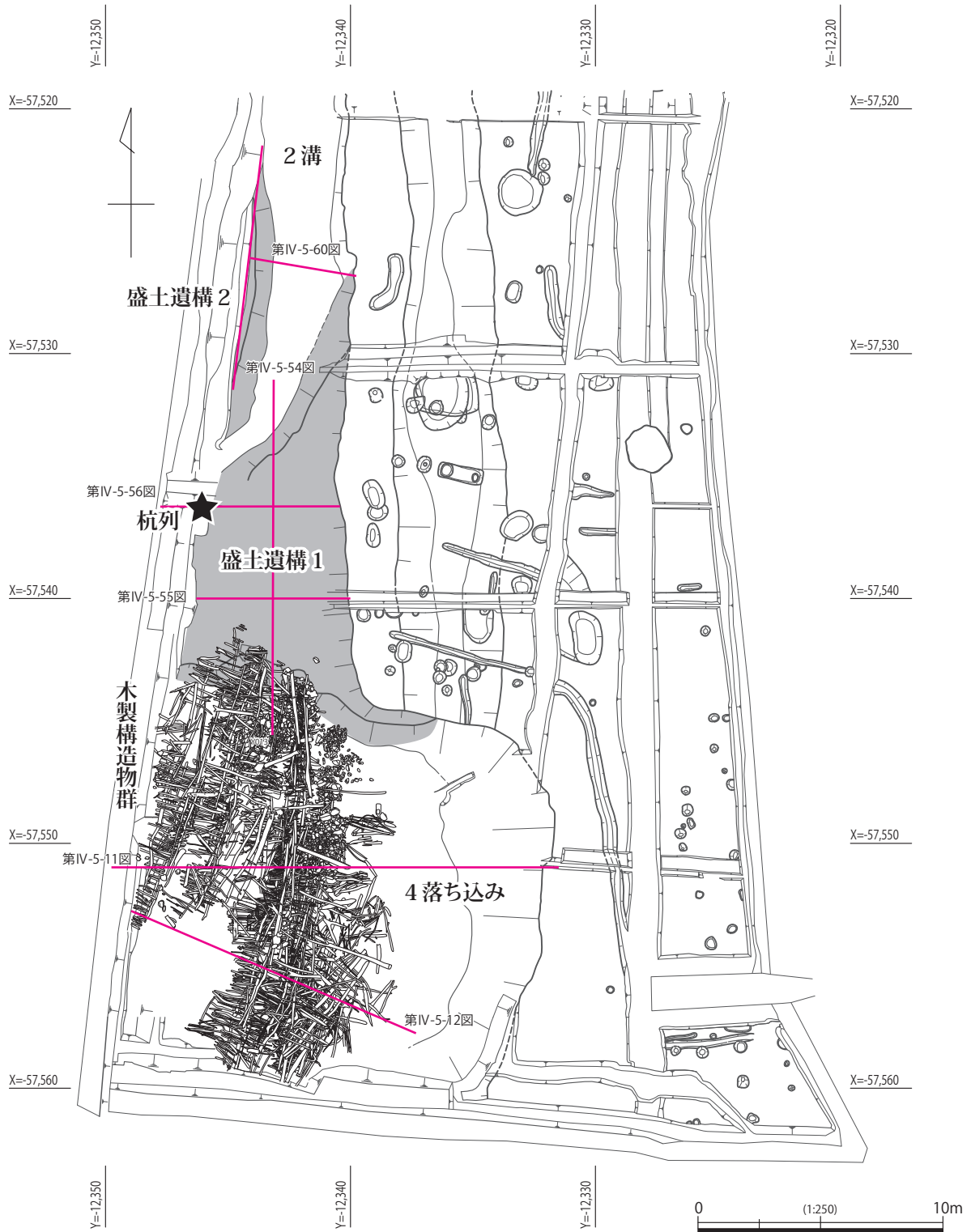
こうした現地作業を実施するにあたり、各木材に番号を付すとともに、木製構造物の部材名として、以下の用語を使用した。不適切な用語もあるかもしれないが、混乱を避けるため、ここでの記述にも、その用語を使用する。また、木製構造物の表裏については、水に接している側を前面ないし表面、水に接しない側を背面ないし裏面とする。

杭 木製構造物前面に設置された木材。表面となる西側の法面傾斜に合わせて斜めに設置される。設置角度が30～40°前後と緩やかなものが多く、下端が尖らないものも多く含まれることから、杭と呼称したが、打設されたものは少ないと考えられる。杭とした木材のほとんどが樹皮の付いた芯持材で、わずかに転用材や放射状分割（ミカン割り）された木材が混じる。総点数は1350点以上あり、最も多い。

横木 木製構造物の主軸方向（おおよそ南北方向）に設置された長大な木材を横木と呼称した。長さ5mを超えるものもある。建築部材の転用材も含まれるが、樹皮の付いた芯持材も多い。先端部を



第IV-5-9図 4落ち込み完掘状況



第IV-5-10図 土層断面取得位置

部分的に欠き込んだり、円頭状に加工するものがある。こうした先端部の加工は運搬時に縄をかけるためのものと考えられる。

縦木 木製構造物の背面に向けて打設された木材。前面にある杭とは逆に東側に傾斜し、比較的太い木材が使用されていた。総点数91本、杭の総点数に対して7%程度と少数である。横木や杭と組み合わせるものがあることから、構造物を背面側から支えるための材と考えられる。

盛土 木製構造物の構築に伴って、積み上げられた土を盛土と呼称した。有機物を含むシルトを主体とする暗緑灰色土と、青灰色シルト～粘土層がブロック状に混じり合った状況のものを盛土と判断した。前者は落ち込み内の堆積層、後者は基盤となる第5a'層に由来するものだろう。木製構造物の各所で部分的に確認された。木製構造物の前面や上面を被覆する部分があり、本来は構造物の全体を覆っていたと考えられるが、水の影響によって流失しているとみられる部分が多い。

被覆材 木製構造物の前面や上面を被覆したり、盛土間に敷き込まれる植物を被覆材と呼称した。肉眼観察ではイネ科植物の葉や茎、針葉樹の樹皮とみられる素材が用いられており、特に前者が多い。素材を1～3cmほどの厚さに敷き重ねただけのものもあるが、もじり編みによる編組製品が用いられていた場所もある。

なお、調査中には、「材」や「木」という用語も使用した。材としたのは、木製構造物中からみつかれる木製品だが、他の部材とは組み合わせず、構造材として評価できなかったものである。一方、木としたのは、木製構造物の一部だった可能性があるが、破損や流失によって本来の場所から遊離していたものである。ただし、どちらも、本文中では使用しない。

以上の用語で整理した部材で構成される木製構造物は、基本的には横木を支える縦木と、横木に並べられた杭からなり、断面形は合掌型となる。先述したが、背面に設置された縦木は杭に比べて非常に少なく、横木や前面の杭と組み合わせたり、これらを支えていると考えうる構造が随所にみられることから、堰の断面形を検討した山崎頼人の分類案では、「片合掌型」に類するものである〔山崎2005〕。

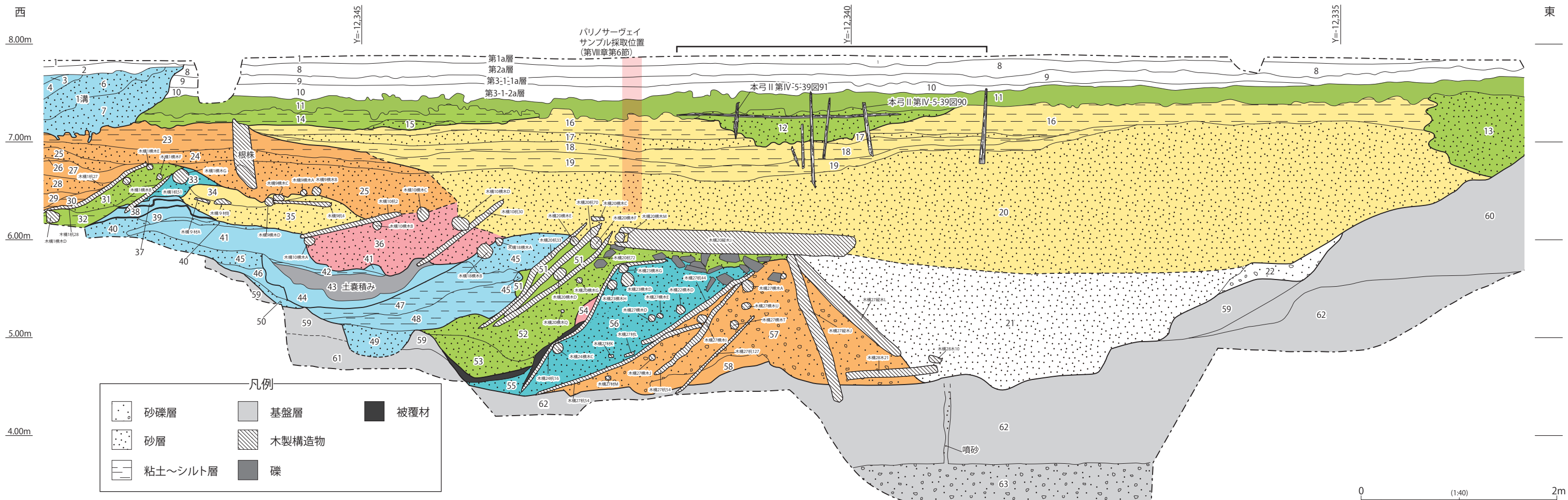
構築過程の整理について

また、木製構造物の構造と構築の過程を整理のために、次のような呼称を用い作業を行った。

前面流路 水利施設の一部をなす木製構造物は、その西側が導水径路となっている。そこで、ここでは、構造物の前面を前面流路と呼ぶ。一方、東側の背面側には、東西を繋ぐような水路が存在した可能性も想定されるが、この調査では、その存在を確認できなかった。

構築単位 木製構造物の基本は概ね南北に主軸を持つ横木と、それに直交し、西に傾斜しながら設置された杭の組み合わせである。この基本構造の連続が一つの構築単位となっている。本文中では、複数の構築単位から成る木製構造物のうち、各単位を明瞭に抽出でき、その構造を説明する上で必要な場合に限り、構築単位にそれぞれ異なるアルファベットを付して図示、記述している。なお、現地調査時には、同様の観点から、木製構造物の取り上げ単位を設け、木製構造物1～29という番号を付して作業を行った。ところが、この番号は図面記録、出土遺物を整理する上で基礎情報となるが、調査成果を整理していく中で、単位を誤認していたり、現地で認識していた前後関係に齟齬があるものが明らかとなった。そのため、本報告においては、木製構造物に付した番号を現地記録と対照するさいに必要と考えられる範囲で記載することにした。なぜなら、取り上げ時の遺物ラベルなどの一次記録には、先述した部材の用語に加え、取り上げ単位の番号が付されているためである。本報告とは別に刊行される木器編において、本書で使用する番号、用語との対照を行っているので参照されたい。なお、本文中並びに図面等では、略称として「木構」と表現する箇所もある。

ステージ 木製構造物は、複数の構築単位が南北に並列されることで、北方へ水を導く水利施設であり、水の影響によって破損したり、埋没する度に、修復や改築が行われている。これを時系列に沿って整理する必要があるため、各段階を表す用語としてステージという呼称を用いた。基本的には新旧

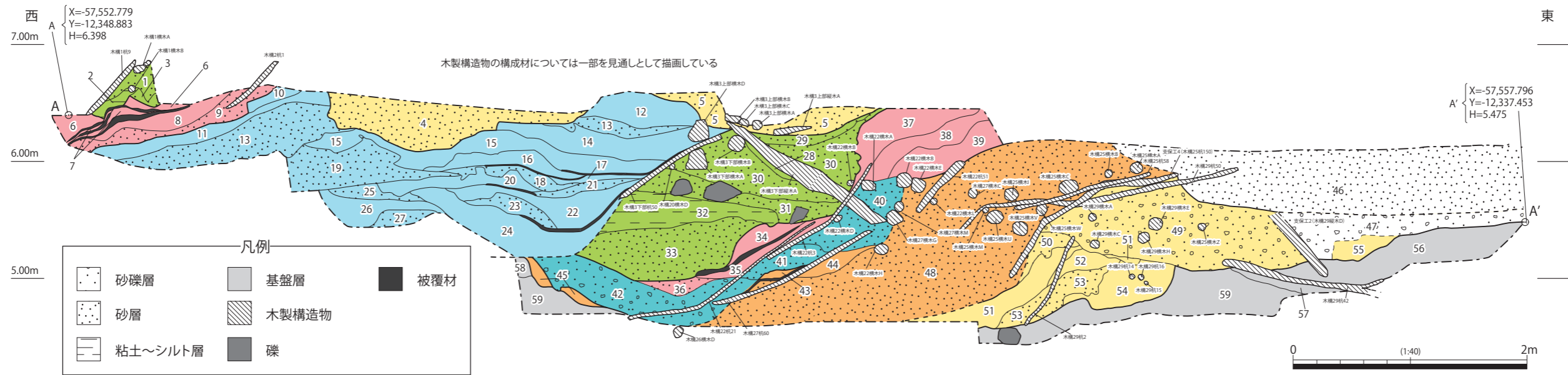


凡例

	砂礫層		基盤層		被覆材
	砂層		木製構造物		
	粘土～シルト層		礫		

- | | | | | | |
|----------------|----|---|--------|---|--|
| 第1a層 | 1 | 2.5Y7/1灰白色 粘土～極粗砂 (径3cmまでの礫・炭化物を含む) | ステージ12 | 31 | 5Y8/2灰白色 粗砂～細砂 (ラミナあり) |
| | 2 | 5Y6/1灰色～7/2灰白色 粗砂混じりシルト (上方暗色化。下方にはブロック土目立つ。径3cmの礫含む) | | 32 | 10Y5/2オリーブ灰色 粘土～シルト (ラミナあり) |
| | 3 | 5Y7/1灰白色粘土～シルトに、5BG4/1暗青灰色粘土がブロック状に混じる | ステージ11 | 33 | 7.5Y6/2灰オリーブ色 粗砂～細砂 (ラミナあり) |
| 1溝埋土 | 4 | 10G5/1緑灰色粘土～細砂に、10G7/1明緑灰色粘土がブロック状に混じる | ステージ9 | 34 | 5BG6/1青灰色 粘土と、10G5/1緑灰色 シルト～粘土の混土 |
| | 5 | 10G6/1緑灰色～5G5/1緑灰色 シルト混じり粘土 (ラミナあり。上方明色化。溝底の止水性堆積) | 35 | 5Y7/1灰白色～5Y8/3淡黄色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著。微小な木片を層状に多く含む) | |
| | 6 | 7.5GY5/1～6/1緑灰色 シルト～細砂 (ラミナあり。炭化物を層状に含む) | ステージ8 | 36 | 5Y8/2灰白色 粗砂～細砂に、5BG6/1青灰色 粘土の偽礫を多く含む。 |
| | 7 | 7.5GY5/1緑灰色シルトと、粗砂の互層 (ラミナ顕著だが転倒している箇所もある。炭化物を層状に含む) | | 37 | 5BG6/1青灰色 シルト (層底面に被覆材あり) |
| 第2a層 | 8 | 5Y7/1灰白色 粘土～粗砂 (酸化鉄(根痕)顕著) | | 38 | 10BG6/1緑灰色 シルトと、10Y5/1灰色 シルトの混土 (層底面に被覆材あり) |
| 第3-1-1a層 | 9 | 7.5Y6/1灰色 粗砂混じり粘土 | | 39 | 5BG6/1青灰色 粘土と、10G5/1緑灰色 シルト～粘土の混土 |
| 第3-1-2a層 | 10 | 5BG5/1青灰色 細砂混じり粘土 (酸化鉄(根痕)顕著) | | 40 | 5Y8/1灰白色 粗砂～極粗砂 (ラミナあり) |
| 泥質な堆積 | 11 | 7.5Y4/1灰色 粘土～粗砂 (上方細粒化。木質遺物を含む) | | 41 | 5BG6/1青灰色 粘土と、10G5/1緑灰色 シルト～粘土の混土 |
| | 12 | 5Y8/2灰白色～8/3淡黄色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著) | | 42 | 10G6/1緑灰色 シルト～細砂(微小な木片を層状に多く含む) |
| 落ち込み内の小流路 | 13 | 10GY8/1明緑灰色 粗砂～細砂 (ラミナあり) | ステージ7 | 43 | 5BG5/1青灰色 シルト～粘土と、10GY4/1暗緑灰色 シルト～粘土の混土(土嚢充填土) |
| | 14 | 10Y5/1灰色 粗砂混じりシルト～粘土 | | 44 | 10G6/1緑灰色 シルト～粘土と、5BG6/1青灰色 細砂の混土 |
| | 15 | 5Y8/3淡黄色 粗砂～細砂 (ラミナあり) | | 45 | 5BG5/1青灰色 細砂と、5Y8/2灰白色 粗砂の互層 |
| | 16 | 5BG5/1～6/1青灰色 粘土～シルト (炭化物を含む) | | 46 | 10GY5/1緑灰色 細砂～シルト(ブロック土多く含む) |
| 大規模な流路内堆積物 | 17 | 5BG5/1青灰色 細砂～シルト (ラミナあり。炭化物多く含む) | | 47 | 10G5/1緑灰色 細砂～シルト(微小な木片を層状に多く含む) |
| | 18 | 5BG5/1青灰色～4/1暗青灰色 シルト (炭化物多く含む) | | 48 | 10GY5/1緑灰色 シルト～細砂と、10G7/1明緑灰色 細砂～粗砂の互層(微小な木片を層状に多く含む) |
| | 19 | 10BG6/1青灰色 粘土～細砂 (部分的にラミナあり。上層細粒化) | | 49 | 5Y8/2灰白色 粗砂と10G6/1緑灰色 細砂～シルトの互層(微小な木片を層状に含む) |
| | 20 | 5Y8/2灰白色 粗砂～細砂と、10Y5/1緑灰色 細砂～シルトの互層 | | 50 | 5Y8/2灰白色 粗砂～細砂(ラミナ顕著) |
| 時期不明の堆積物 | 21 | 5Y8/1～8/2灰白色 礫～粗砂 (ラミナ顕著。層底面に直径3cmまでの礫を多く含む) | ステージ6 | 51 | 5BG6/1青灰色 シルト～粘土と、5Y7/2灰白色 細砂の混土 |
| | 22 | 5Y8/1～8/2灰白色 極粗砂 (直下層の偽礫を含む) | | 52 | 5BG6/1青灰色 シルト～粘土と、10G5/1～6/1緑灰色 細砂の互層 |
| | 23 | 10BG6/1青灰色 シルト～粘土(ラミナあり) | | 53 | 10GY5/1緑灰色 シルト～細砂と、10G7/1明緑灰色 粗砂との互層(層底面に微小な木片が堆積。層下部に礫含む) |
| | 24 | 5BG6/1青灰色 粘土～シルトと、5Y8/3淡黄色 細砂～粗砂の互層 | ステージ5 | 54 | 10G5/1緑灰色 細砂～シルト(部分的にラミナあり) |
| 木製構造物を埋没させる堆積物 | 25 | 7.5Y6/2灰オリーブ色 細砂～粗砂 (直下層の粘土ブロックを含む) | | 55 | 5Y8/2灰白色 粗砂～細砂(ラミナ見えない) |
| | 26 | 5Y8/3淡黄色 細砂～粗砂 (ラミナあり) | ステージ4 | 56 | 5Y8/2灰白色 粗砂～細砂と、10G 5/1 緑灰色 シルトの互層 |
| | 27 | 5BG6/1青灰色 粘土と、10G5/1緑灰色 シルト～粘土の混土 | ステージ3 | 57 | 5Y8/1灰白色～8/4淡黄色 礫～粗砂 (ラミナ顕著) |
| | 28 | 5Y8/3淡黄色 粗砂～細砂に、直下層の粘土ブロックを含む (ラミナは見えない) | | 58 | 10GY緑灰色 シルト～粘土と、5GY5/1 緑灰色 シルトの混土(直径1cmまでの礫を含む。炭化物を東方に含む) |
| | 29 | 5BG6/1青灰色 粘土と、10GB5/1緑灰色 シルト～粘土の混土 | 第5a層 | 59 | 10G5/1緑灰色 粘土～シルト |
| | 30 | 10Y5/1灰色 シルト～粗砂 (微小な木片を層状に多く含む) | | 60 | N6/0 灰色 細砂～シルト (ラミナ見えないが淘汰はよい) |
| | | | 第5b層 | 61 | 10G6/1緑灰色 細砂～シルト(ラミナ見えないが淘汰はよい) |
| | | | | 62 | 10GY5/1～6/1緑灰色 細砂～シルト(ラミナ顕著) |
| | | | | 63 | 5BG5/1青灰色 礫～粗砂 (直径3cm以上の礫を多く含む) |

第IV-5-11図 4落ち込み東西土層断面 (X=-57,551ライン)



- ステージ12
 - 1 10GY8/1明緑灰色 細砂～粗砂と、10GY 5/1緑灰色 シルトの互層
 - 2 10GY5/1緑灰色 粘土 (層中に粗砂帯入る。自然堆積層?)
 - 3 10GY6/1緑灰色 粗砂～細砂 (ラミナは見えない)
- ステージ9
 - 4 10GY5/1緑灰色 シルト～細砂と、5Y8/1～8/2灰白色 粗砂～極粗砂の互層 (西方に偽礫多く含む)
 - 5 10GY8/1明緑灰色 細砂～粗砂と、10GY5/1緑灰色 シルトの互層 (西方に偽礫多く含む)
- ステージ8
 - 6 5BG6/1青灰色 粘土に、10BG5/1青灰色 シルトがブロック状に混じる
 - 7 10G6/1緑灰色 粘土
 - 8 5BG6/1青灰色 粘土と、10BG5/1青灰色シルトと、5Y8/1～8/2灰白色 細砂～粗砂の混土
- ステージ7
 - 10 5BG6/1青灰色 粘土に、10BG5/1青灰色 シルトがブロック状に混じる
 - 11 5BG6/1青灰色 粘土と、10BG5/1青灰色シルトと、5Y8/1～8/2灰白色 細砂～粗砂の混土
 - 12 5BG6/1青灰色 粘土と、10BG5/1青灰色シルトと、5Y8/1～8/2灰白色 細砂～粗砂の混土
 - 13 10GY8/1明緑灰色 細砂～粗砂と、5/1緑灰色 シルトの互層 (層中に有機物多く含む)
 - 14 5BG6/1青灰色 粘土に、10BG5/1青灰色 シルトがブロック状に混じる
 - 15 5Y8/2灰白色細砂～粗砂に、緑灰色～暗緑灰色のシルト～粘土がブロック状に混じる
 - 16 10GY7/1明緑灰色 シルト～粘土と、7.5GY4/1暗緑灰色 シルト～細砂の混土
 - 17 10GY5/1緑灰色 細砂～シルト
 - 18 10GY5/1緑灰色 細砂 (ラミナが転倒している。層上面に青灰色粘土をブロック状に多く含む)
 - 19 5Y8/1灰白色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著)
 - 20 10GY4/1暗緑灰色 シルト～細砂 (ブロック土をわずかに含む)
 - 21 10GY4/1暗緑灰色 シルトと、10GY8/1明緑灰色 粗砂～細砂の互層
 - 22 5BG6/1青灰色 粘土と、10GY4/1暗緑灰色 シルト～粗砂の混土
 - 23 10GY4/1暗緑灰色 シルト～細砂と、5Y8/2灰白色 粗砂の互層
 - 24 10G4/1暗緑灰色 粗砂～シルト (木質遺物含む)
 - 25 5Y8/1灰白色 粗砂 (ラミナ顕著)
 - 26 10GY4/1暗緑灰色 粗砂～シルト (木質遺物・ブロック土含む)
 - 27 5Y8/1灰白色 粗砂 (ラミナ顕著)

- ステージ6
 - 28 30にブロック土が混じる。(③下部タテ木A打設時の攪乱か?)
 - 29 10Y5/2オリブ灰色 粘土～シルト (ラミナあり。上部暗色化)
 - 30 5Y8/1灰白色 細砂と、10GY5/1緑灰色 シルトの互層
 - 31 5Y8/3～8/4淡黄色 粗砂～細砂
 - 32 10BG5/1青灰色 細砂～シルト (ラミナあり)
 - 33 10G6/1青灰色 粗砂混じり 細砂～シルト (ラミナあり)
- ステージ5
 - 34 10G5/1緑灰色 シルト～細砂に、5BG6/1青灰色 粘土～シルトが混じる
 - 35 10G5/1緑灰色 シルト～細砂に、5BG6/1青灰色 粘土～シルトが混じる
 - 36 2.5Y7/1灰白色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著)
 - 37 10GY5/1緑灰色 細砂～シルト
 - 38 10G5/1緑灰色 細砂 (炭化物含む)
 - 39 5BG5/1青灰色 細砂～粗砂 (わずかに炭化物含む)
- ステージ4
 - 40 5Y8/4淡黄色 極粗砂～細砂と、10GY5/1緑灰色シルトの互層 (底面に直径1cmまでの礫層あり)
 - 41 10Y6/1灰色 シルト～粗砂と、5Y8/3 淡黄色 粗砂の互層
 - 42 2.5Y8/1灰白色 極粗砂～細砂 (ラミナ顕著)
 - 43 5BG6/1青灰色 シルトと、10GY5/1 緑灰色 シルトの混土
- ステージ3
 - 44 5Y5/1灰色 粗砂～シルトに、10GY6/1 緑灰色 粘土～シルトのブロックが混じる (木製構造物22設置時の盛土か)
 - 45 10G6/1緑灰色 粘土～シルト (わずかにブロック土を含む。盛土の可能性あり)
 - 46 7.5Y7/1灰白色 細砂～粗砂と、5BG5/1灰色 シルト～細砂の互層
 - 47 5BG7/1明青灰色～5Y8/6黄色 極粗砂～粗砂 (ラミナ顕著。上部に偽礫を含む)
 - 48 5Y8/1灰白色 細砂～粗砂 (ラミナ顕著)
 - 49 5Y/8/3淡黄色 極粗砂～粗砂と、5BG6/1青灰色 粘土～細砂の互層 (粗砂中に礫多く含む)
- ステージ2
 - 50 5Y7/2 灰白色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著)
 - 51 5BG5/1青灰色 粗砂～粘土と、6/1青灰色 粘土～粗砂の混土 (52との間に粗礫の敷設あり)
 - 52 5BG5/1青灰色 粗砂～粘土に、5G6/1緑灰色 粘土がブロック状に入る
 - 53 5G6/1緑灰色 細砂と、5Y8/1 灰白色 粗砂～細砂の互層
 - 54 5G6/1緑灰色 粘土 (細砂を含む。下部に礫帯あり)
 - 55 10GY5/1緑灰色 シルトと、5G7/1明緑灰色 シルト～粘土の混土 (崩落土?)

- 基盤層
 - 56 10G6/1緑灰色 シルト～粘土 (わずかにブロック土を含む)
 - 57 5BG5/1青灰色 粗砂～粘土と、6/1青灰色 粘土～粗砂の混土
 - 58 5BG6/1青灰色 シルト～細砂
 - 59 10G6/1緑灰色 細砂～シルト (ラミナ見えないが淘汰はよい)

第IV-5-12図 4落ち込み木製構造物ステージ1～12土層断面

のステージ間には砂礫層が挟在しており、古いステージの構造物が埋没した後に、新しいステージの構造物が構築されている。ステージ間の砂礫層を、木製構造物が水利施設として機能している際の堆積層と理解すると、各ステージは機能段階と同義となるが、構築作業中の河川氾濫や、作業の一時的な中断に伴う埋没などの可能性を否定することもできない。そのため、ここでステージとして整理したものには、機能段階と構築段階の二種の意味が含まれている。ただし、盛土や被覆材などの有無から、その両者を区別することが可能な場合には、本文中で記述する。

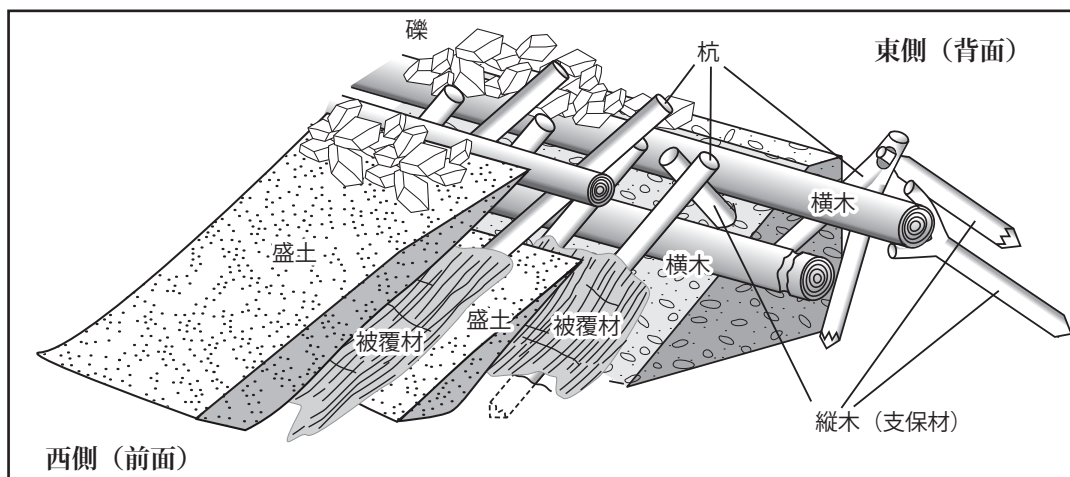
木製構造物の計測について

さらに、構築単位やステージごとに整理された木製構造物の構造や関係性を理解するために、現地 で得られた記録をもとに、下記のような計測を行った。その計測方法と基準は以下の通りである。

構築単位の主軸角度 各構築単位における主軸は、導水方向を反映している。木製構造物の主軸方向は横木によって決定され、それに杭などの部材が伴う形となっているため、平面的にみた横木の方 向をもとに真北に対する振れを計測した。複数の横木で大きく異なる計測値が確認される際には、計 測値の振り幅を記載する。

杭の設置角度 木製構造物は盛土や被覆材に覆われていたと考えられたことから、本来は、土堤状 を成す水利施設の躯体と考えたほうがよい。杭の設置角度は、表面を覆う盛土などが流失してい て、本来の遺構形状を反映した有意な情報である。計測にあたっては、各ステージにおける構築単位 の中で、原位置を保つか、もしくは大きく動いていないと考えられる杭を、できるだけ等間隔に5本 抽出した上で、杭の上端標高と下端標高から模式図を作成した〔第IV-5-16・21・31・34・38・43・46・50 図〕。ただし、杭や木製構造物の構築状況により、全てのステージで模式図が作成できたわけではない。模 式図では、縦軸を標高、横軸を杭の座標平面上の長さを示すものとし、各構築単位の杭を上端標高と 下端標高を結ぶ直線として復元した。なお、杭に用いられている材の多くは屈曲した自然木であり、 杭として示した直線は、用いられている木材そのものの形状を示すものではない。

前面流路の底面標高 前面流路の底面標高は、水利施設としての木製構造物を理解する上で重要で ある。木製構造物の砂礫による埋没は、前面流路による浸食と再堆積の過程を示しており、砂礫の除



第IV-5-13図 木製構造物 構造物模式図

去面は、浸食されていても、前面流路の底面標高をある程度反映していると理解した。そこで、断面の記録から計測した砂礫除去面の高さを底面標高として記述する。

③木製構造物の構築過程

複雑に重なり合った木製構造物の構造と変遷を把握するためには、構築単位の集合として理解をはかったステージを時系列に整理することが必要である。ここでは、現地での調査所見に加え、写真や図面などの記録から構築単位相互の関係性を検討し、水利施設として機能していたと考えられる木製構造物の構造と変遷を概ね12の段階で抽出できた。ここでは、古い段階から順にステージ1～ステージ12と呼称する。

また、12の段階に整理した木製構造物は、東側の木製構造物ほど古い段階のものとされており、4落ち込み内の最も低い位置に設置されている。そして、砂礫によって木製構造物が埋没すると、その上部および西側に新しい構造物が築かれており、木製構造物は東から西に向かって累重している。以下、木製構造物群の構築過程をステージ1から順に記述する。

ステージ1（木製構造物29）〔第IV-5-14図〕

堆積層順からみて最も古い段階のもと考えられるのが木製構造物29である。4落ち込み南東隅で検出した。水流によって破壊され、木材の多くが二次堆積した状況を呈しているものの、横木については数本単位で平行している状況が確認されている。木材上面の標高も5.5m程度で揃い、水平に据えられた状況が看取できることから、これらが原位置を留めている、または原位置に近いものである可能性が考えられよう。横木について、真北からの振れを測ると、N-20～25°Eであった。

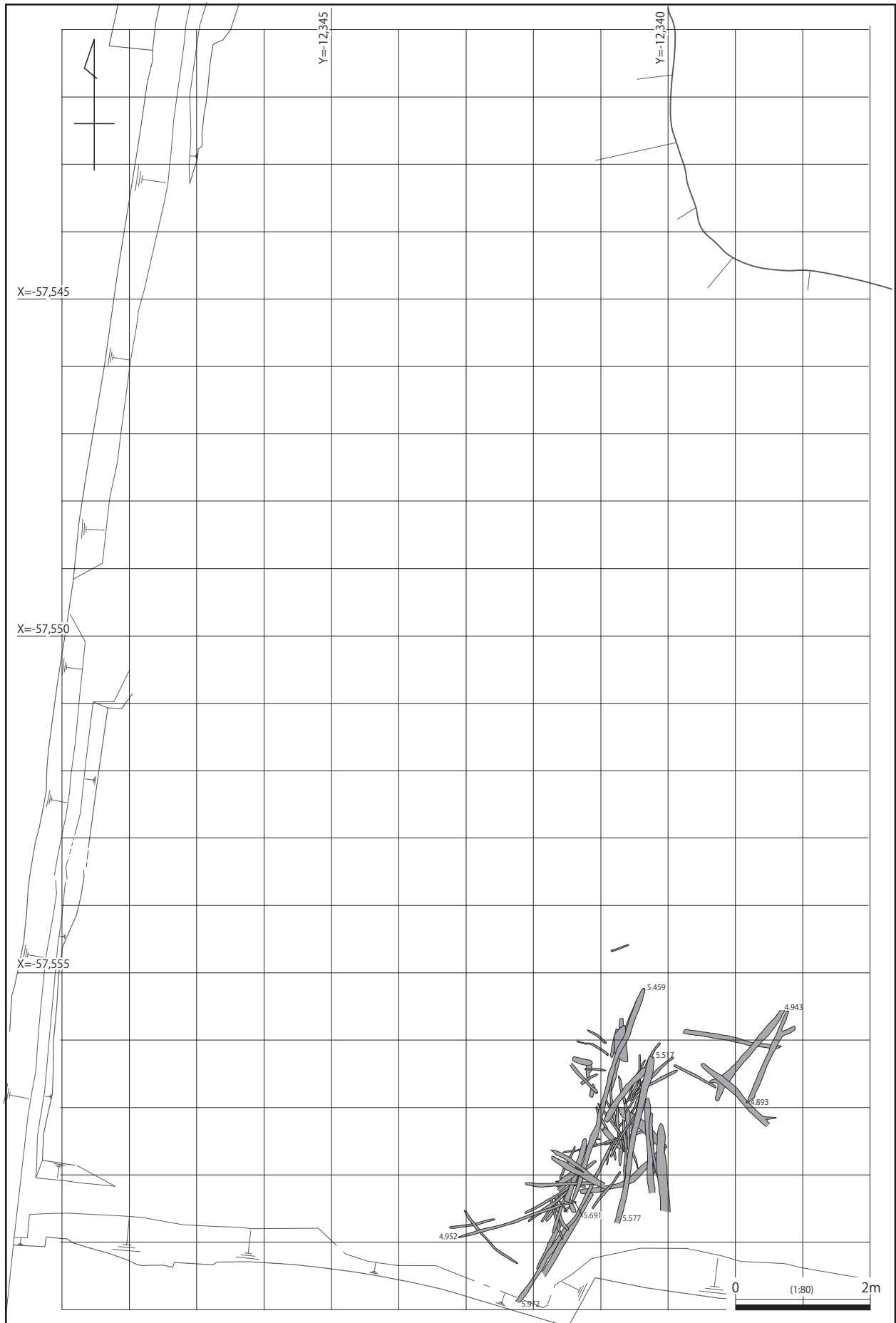
ステージ2（木製構造物25・28）〔第IV-5-15～18図 第2分冊図版51-2～54〕

ステージ1埋没後、その上部、西側に構築されたのが構造物25・28である。延長規模は2倍以上になり、4落ち込みの北側の法裾付近まで木材が広がるが、木製構造物の北側は流失した木材が二次堆積している状況であり、本来の構造を保つものではない〔第2分冊図版52-2〕。原位置を留めた木製構造物については、多くの横木と杭が交互に重なり合い、杭は154本を数える。横木は構造物の上部と下部で、真北からの振れが異なっているが（上部N-40°E、下部N-17°E）、両者の間には盛土層や被覆材などは確認できず、上下の木材も接していた。上部杭の設置角度はよく揃い、13～22°を測る。平均は16.6°と緩やかで、構造物の前面というよりは、上面を覆うような設置状況がみられる。〔第IV-5-16図 第2分冊図版52-1〕。

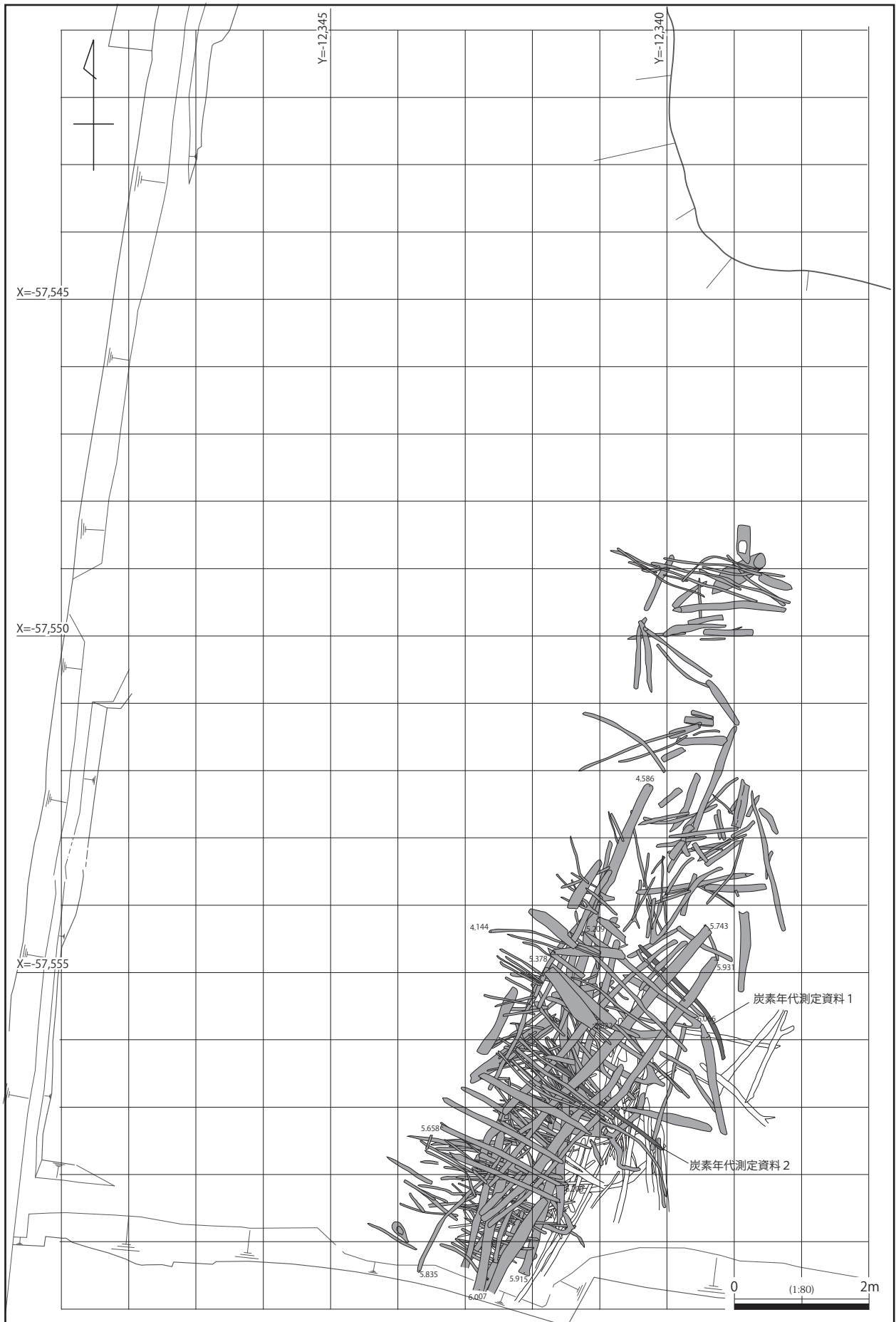
また、木製構造物の最下部で、枝分かれした股木が4本確認された。下部の杭と傾斜を同じくして設置されており、この股木に接して横木が設置されている。木製構造物背面側には、股木を支えるように組み合わせられた木材も確認されており、これら股木と縦木は、横木とその上に構築されていく木製構造物を背面側から支える工法が使用されているものと考えた〔第IV-5-17図〕。以下、これらをサポート工1～4とする。

支持工〔第IV-5-17・18 第2分冊図版53・54〕

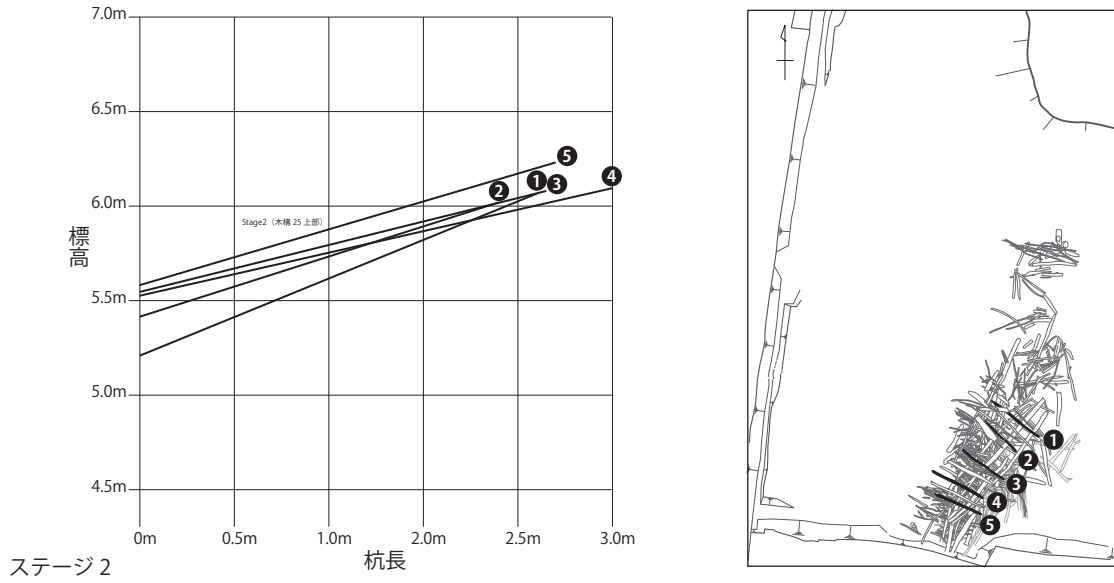
支持工1は、股木同士を組み合わせたものである〔第IV-5-18図〕。横木を支える股木（木構25杭149）の基部に開けられた、おそらくは方形の穿孔（股木基部の上部は欠損）に、背面側の股木（木



第IV-5-14図 ステージ1平面



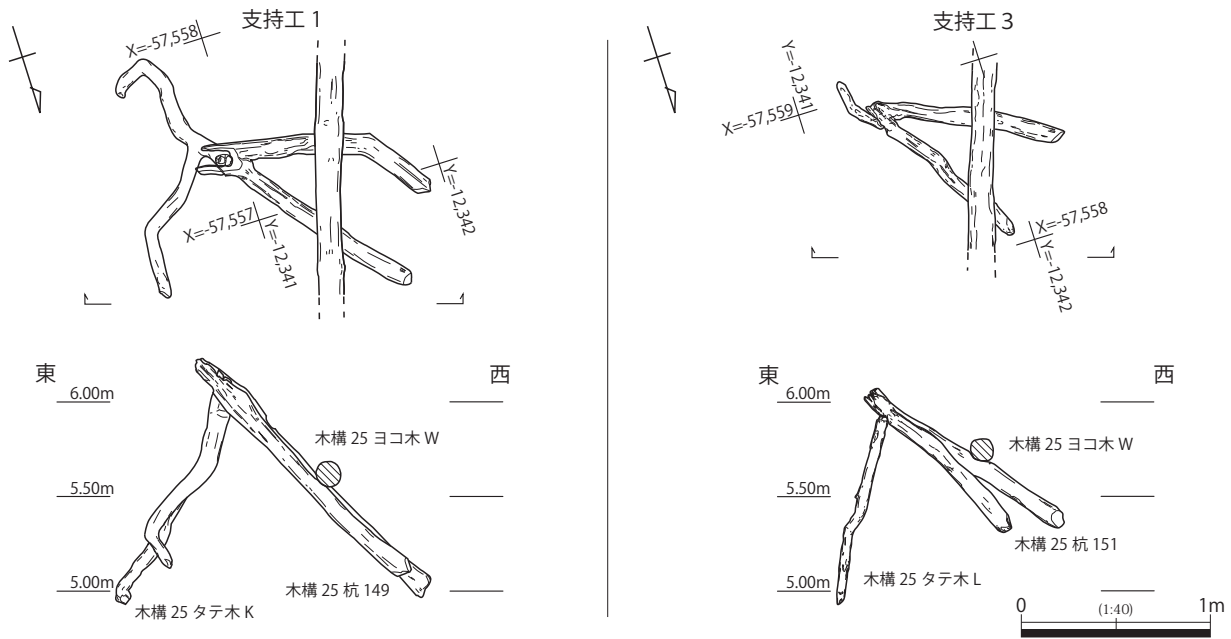
第IV-5-15図 ステージ2平面



第IV-5-16図 ステージ2杭設置角度



第IV-5-17図 ステージ2支持工位置



第IV-5-18図 支持工1・3平・立面

構 25 縦木 K) の上部を差し込み合掌形に組み合わせている。

支持工 2 は、横木を支える股木 (木構 25 杭 60) を、背面側からの縦木 (木構 25 縦木 D) で支えるものであるが、組み合わせ方法は不明である。ただし、縦木の上端はほぞ状に削り出されており、股木上部にこれと組み合う穿孔があった可能性がある。

支持工 3 は、横木を支える股木 (木構 25 杭 151) を、背面側からの縦木 (木構 25 縦木 L) で支えている [第IV-5-18 図]。加工を伴う木組みは確認できない。

支持工 4 では、股木を支える縦木が確認できなかった。しかし、上部に設置される 3 本の横木 (木構 25 横木 A・C・W) に接しており、これらを支える支持工と判断した。なお、これ以外の支持工については、支持工 1・3 が 1 本、支持工 2 が 2 本の横木に接して直接的に支える構造となっている。

ところで、股木の枝分かれ側を下にして打設することは不可能なことから、支持工 1・3・4 は木製構造物の構築の初段階に設置されたものと考えられるが、[第 2 分冊図版 53-1] では、支持工 1・3・4 とともにラミナの明瞭な砂礫層の斜面に設置されている。このことから、ステージ 2 の木製構造物の構築にあたっては、ステージ 1 を埋めた砂礫を除去することなく、それを削って西傾斜の法面を造成し、木製構造物のベースとしていることがわかる。同様の状況はこれ以降の木製構造物の多くにみられ、4 落ち込み内に流入する土砂が多量で、除去しきれなかった状況を示唆する。

放射性炭素年代測定

また、ステージ 2 の杭材 2 点について、炭素年代測定を行った [第IV-5-15 図]。詳細は第八章第 1 節で述べるが、ここで簡単にふれておく。資料 1 (PLD-17674) は、炭素年代で $1,803 \pm 21$ (yrBP)、較正年代 (2σ) は 133 ~ 256AD を示す。資料 2 (PLD-17673) は、炭素年代で $1,835 \pm 22$ (yrBP)、較正年代 (2σ) は 126 ~ 241AD を示す。両資料ともに確度 90% 以上で 2 世紀前半から 3 世紀中頃にかけての年代幅を示している。

ステージ3 (突堤状遺構・北側石積・木製構造物 22・27 下部) [第IV-5-19~23 図 第2分冊図版 56・57]

突堤状遺構と木製構造物 22・27 下部がステージ3の段階に相当する。構造物の北端が4落ち込みの北側法面に達する。このことで、4落ち込みは東西に分断されることになり、以降は西側に拡張していく形で木製構造物が重層していく。

突堤状遺構

ステージ3段階には、構造物の北側に、4落ち込み北側法面から南に張り出した遺構が造成されていた。これを突堤状遺構と呼称する〔第IV-5-20 図 第2分冊図版 55〕。内部は、淘汰のよい青灰色シルト～粘土層となっており、周辺の基盤層と近似するが、部分的にブロック土や角礫を含む状況が確認されることから、基盤層を主な構成土とする盛土と理解した。

突堤状遺構の表面には凝灰岩の角礫が敷き詰められている。後述するステージ4で木製構造物上部に構築される石積みと区別するため、突堤状遺構の上部にみられた石積みを「北側石積」と呼ぶ。北側石積に用いられている礫には、特に大きなもので直径50cmにおよぶものがある。また、礫の間には杭の打設や短い横木の設置がみられる。

木製構造物 [第IV-5-19 図 第2分冊図版 56・57]

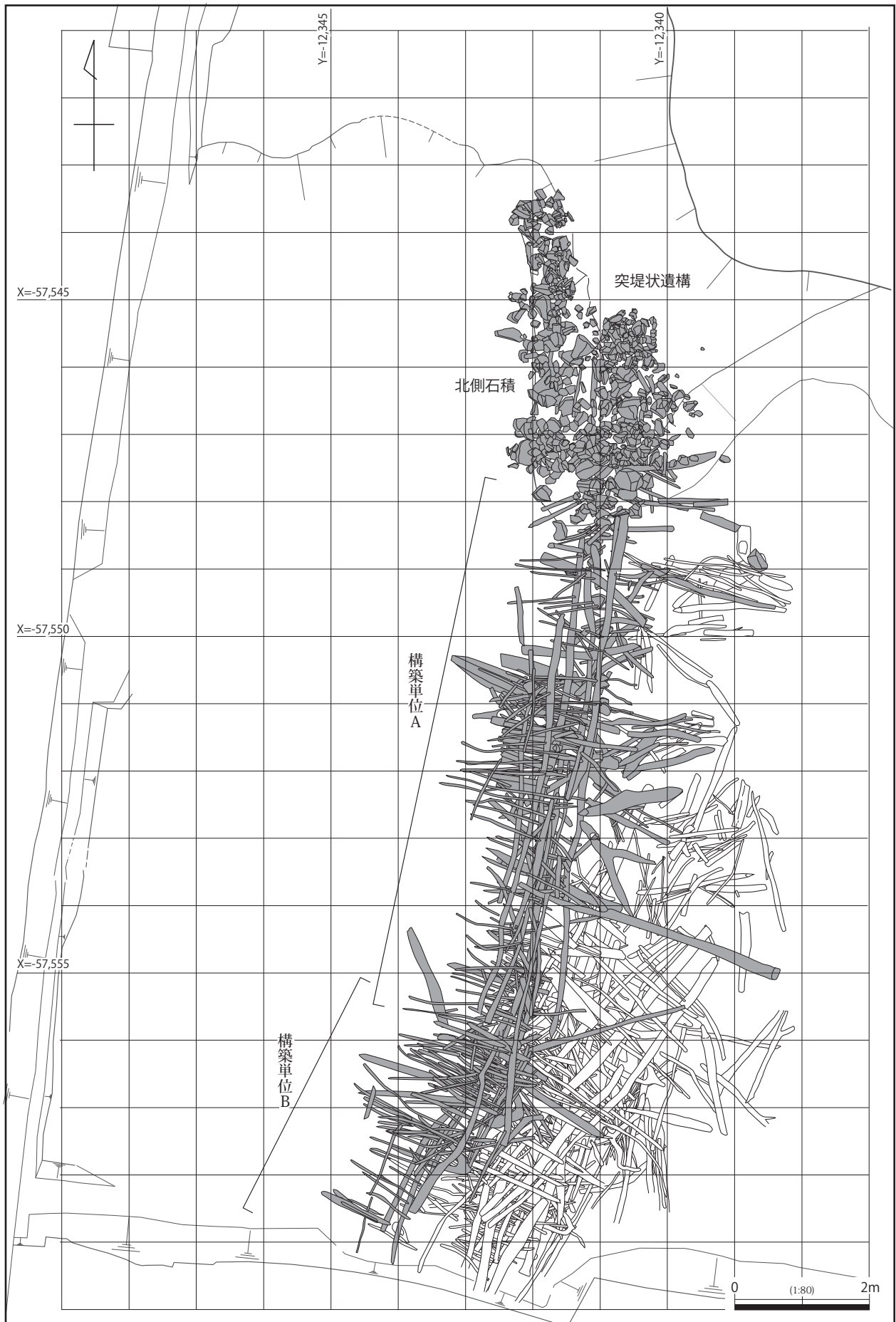
木製構造物は、突堤状遺構の南裾から南方に伸び、全長は約11mを測る。多くの杭と横木が重複して構築されており、杭材だけでも257本を数える。木製構造物上端の標高は、南端で6.0m前後を測るが、突堤状遺構との接続部付近では5.1m前後と低くなる。付近には杭が少なく、ブロック土や円礫など大径粗粒の堆積物を多く含む流路内堆積物が顕著にみられる。このことから、この場所が、分断された4落ち込みの東西エリアを接続する水路となっていた可能性を考えることができよう。また、横木の設置状況からは、大きく2つの構築単位を捉えることができた。北側を構築単位A、南側を構築単位Bとする。

構築単位A 主軸はN-12°Eである。やや東に振っている。突堤状遺構から南方向に約8m延びる。杭の設置角度は35°前後でよく揃う。設置角度の平均は約36°である。構築単位Aでは、その構築初段階において、横木と杭を組み合わせていく構築工程が詳細に確認された。第IV-5-22 図は、木製構造物の構築初段階の工程を模式的に表したものである。

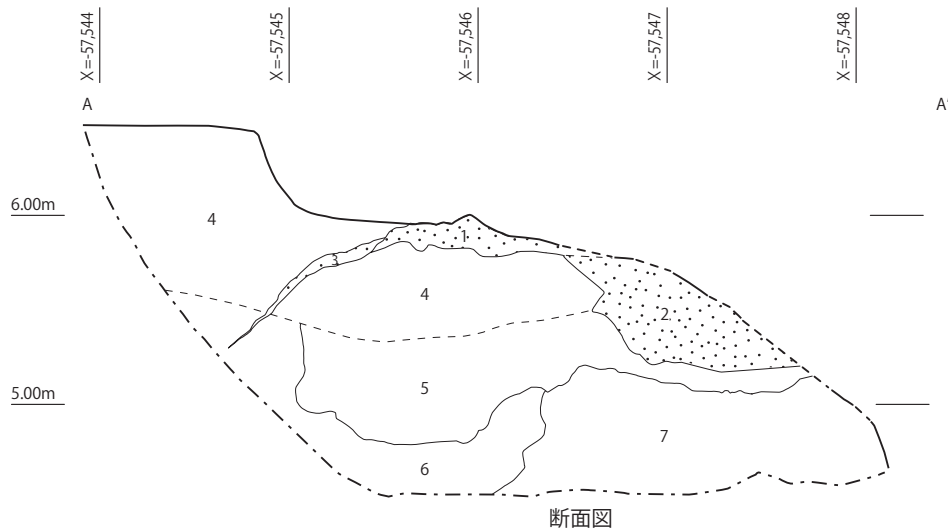
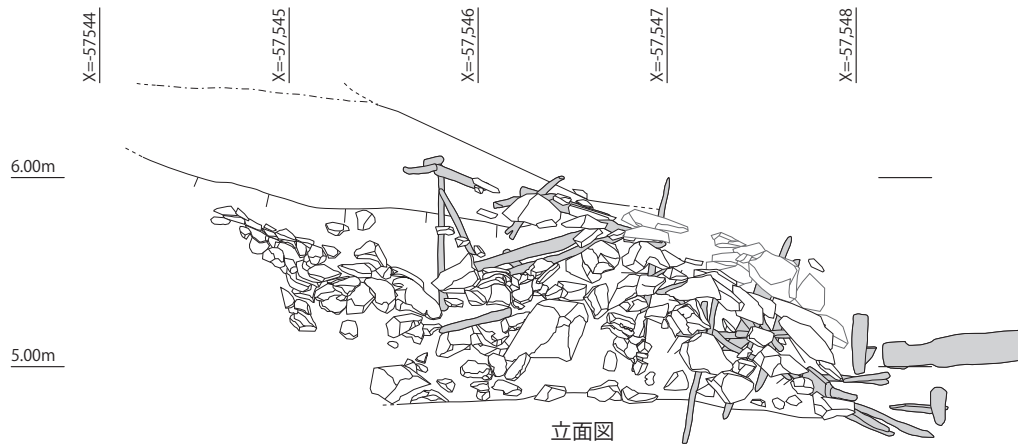
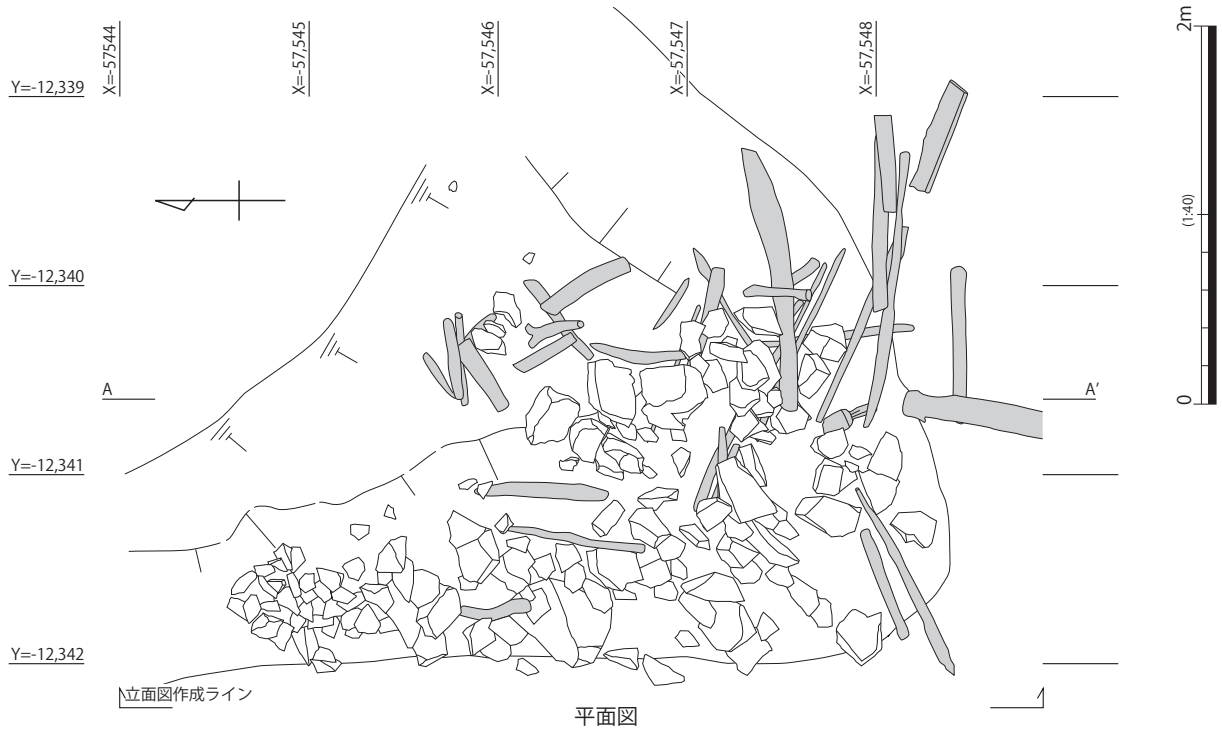
- ①前段階の木製構造物を埋没させた砂礫を削って斜面を造り出し、杭を置く。
- ②杭の上に横木を置く。南北方向に延長するように横木を並べ、その上に杭を置く。
- ③最初の工程で置いた杭の上に、斜めに杭を置く。
- ④斜め杭の上に杭を置く。
- ⑤さらに上に横木を置き、その上に杭を置く。

以上の工程を経た後、⑤の工程が繰り返され、重層的な木製構造物が構築される。こうした構築工程は、4落ち込み内の木製構造物群に一般的にみられるもので、盛土の多寡や被覆材の有無などの小異はあるものの、基本的な工法として用いられていたものと考えられる。ただし、③の工程でみた斜め杭については、構築単位Aの構築初段階でしか確認できない。ここでは、斜め杭を基準として小単位が構成されている状況が確認された〔第2分冊図版 56-2〕。

また他に、部分的ではあるが、杭ではなく板を立ち並べている場所も確認された〔第IV-5-23 図 第2分冊図版 57-1〕。幅10～20cm、厚さ0.3～1cmほどの板が16枚、部分的に重なりながら隙間



第IV-5-19図 ステージ3平面

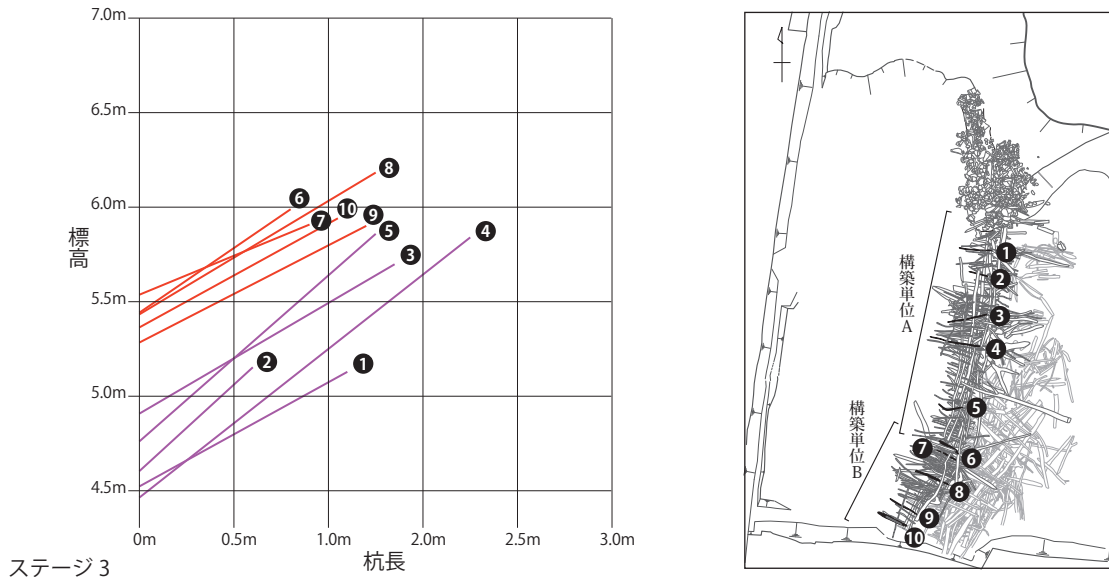


- 4落ち込み埋没砂礫
- 1 5Y8/3淡黄色 細砂と、5Y5/1灰色 細砂～シルトの互層(直下層を偽礫として含む)
- 2 5Y8/2灰白色 細砂と、10BG6/1青灰色 粘土～シルトの互層(直下層を偽礫として含む)
- 3 4層に近似するが、ブロック土を含む。崩落によって入ったクラック内の充填層か?
- 4 5BG6/1青灰色 シルト～粘土 (層中に炭化物の集積あり。第5a'層か?)
- 5 5BG6/1青灰色 シルト～粘土に、10G6/1緑灰色 シルト～細砂が混じる(人頭大の礫を含む)
- 6 10G6/1緑灰色 シルト～細砂に、5BG6/1青灰色 シルト～粘土が混じる
- 7 10G6/1緑灰色 細砂～シルト (ラミナあり)

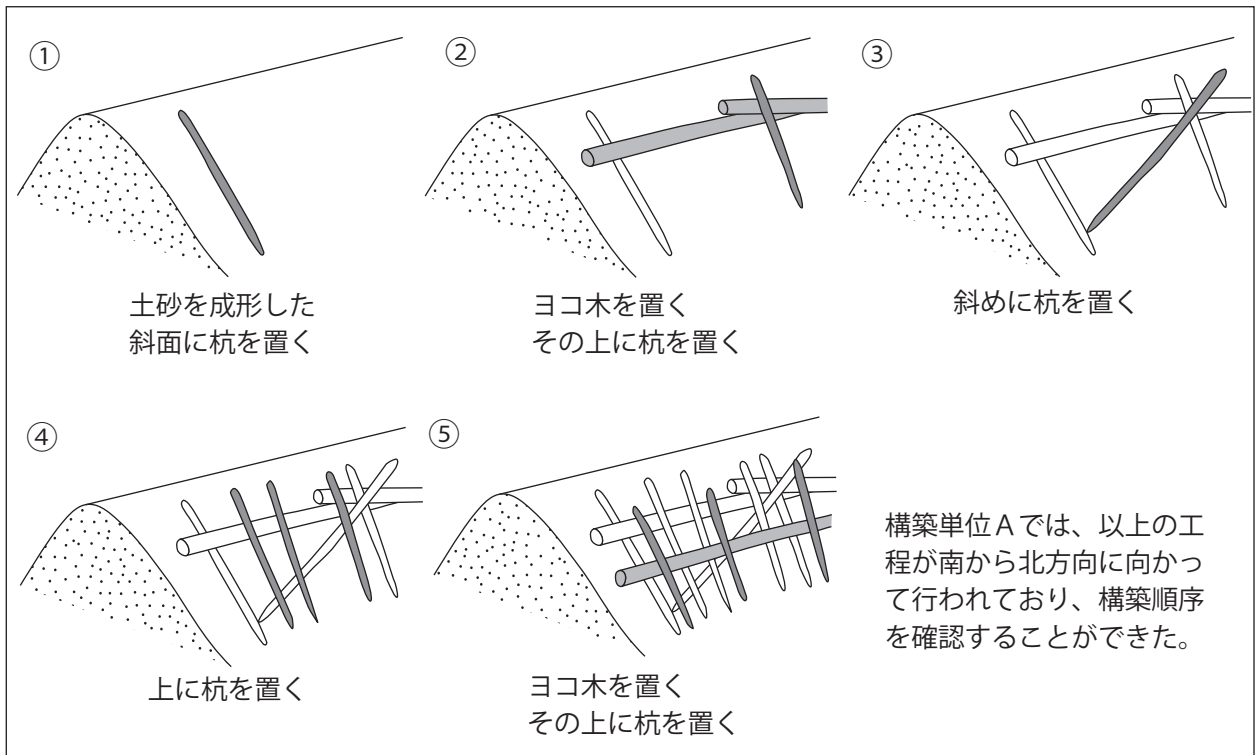
第IV-5-20図 突堤状遺構

なく並ぶものである。下端が斜めに切断されたものが含まれ、壁板もしくはへぎ板などの建築部材を転用した矢板の可能性はある。

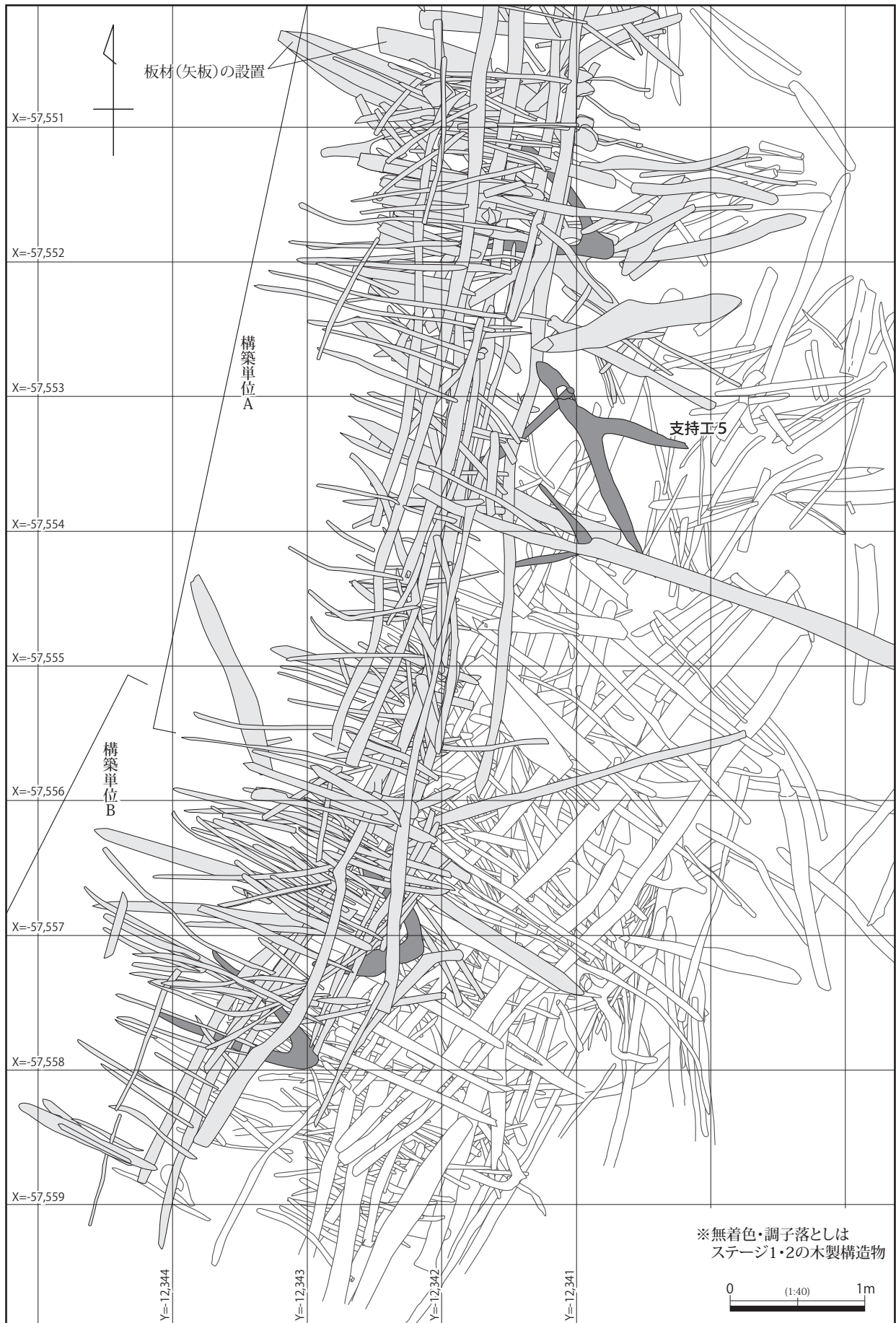
構築単位B 主軸はN-27°Eである。大きく東に振っている。構築単位の延長距離は約5mである。杭の設置角度は25°前後で、平均は約28°であった。構築単位Aと同じく、設置角度がよく揃い、緩い角度での杭の設置がみられるが、設置標高は全体に高い（第IV-5-21図）。構築単位Bが、ステージ2の木製構造物の上部前面に構築されているためであろう。



第IV-5-21図 ステージ3杭設置角度



第IV-5-22図 ステージ3構築単位模式図



第IV-5-23図 ステージ3木製構造物 二股木位置平面

支持工

ステージ3においてもステージ2と同様に、木製構造物の最下部に据えられた股木が確認された。構築単位Aで3ヶ所、構築単位Bで2ヶ所である。これらも構造物を支えるために設けられた支持工と考えた。ただし、ステージ2の支持工1～3とは異なり、背面側から股木を支える縦木はみられず、股木のみが設置されている例がほとんどである〔第IV-5-23 図〕。唯一、支持工5としたものだけは支持工1と同じように、股木基部の穿孔に後方の支持材を組み合わせる形をとる。しかし、股木の配置は東側、木製構造物背面側になっており、他のものと逆方向を指向して設置されている〔第2分冊図版 57-2〕。

このことは、木製構造物背面側、4 落ち込み東側にも何らかの構造物が存在した可能性を示すが、調査では確認されていない。ただし、ステージ3の木製構造物背面側には、東に傾斜を持つ太めの杭(縦木)が多く打設されている。これらの縦木は、前面の木製構造物を支える機能を有していると同時に、背面側の法面を形成する構造物材であるとも考えられる。第IV-5-11 図では、21 層と 57 層は同様に砂礫層ながら、ステージ3で設置された縦木を境に分層される。21 層の堆積がどの段階に起こったのかは不明だが、21 層の堆積時には、4 落ち込み内に57 層を芯とした堤状の施設が存在した可能性は高い。

構造物により東西に分断される4 落ち込みをみたとき、その西側で、南西方向から引き入れた水を北方の2溝に導水していることについては疑いない。一方で東側については、どのような利用がなされていたのか不明である。ただし、先述したように北側石積と、その南方の木製構造物の接続点付近に、東西を接続する水路を想定できることから、東側についても、何らかの水利機能を有していた可能性は高い。

ステージ4 (南側石積、板敷遺構、木製構造物 26・22 上部)〔第IV-5-24~30 巻頭図版 4-2~5 第2分冊図版 58~62〕

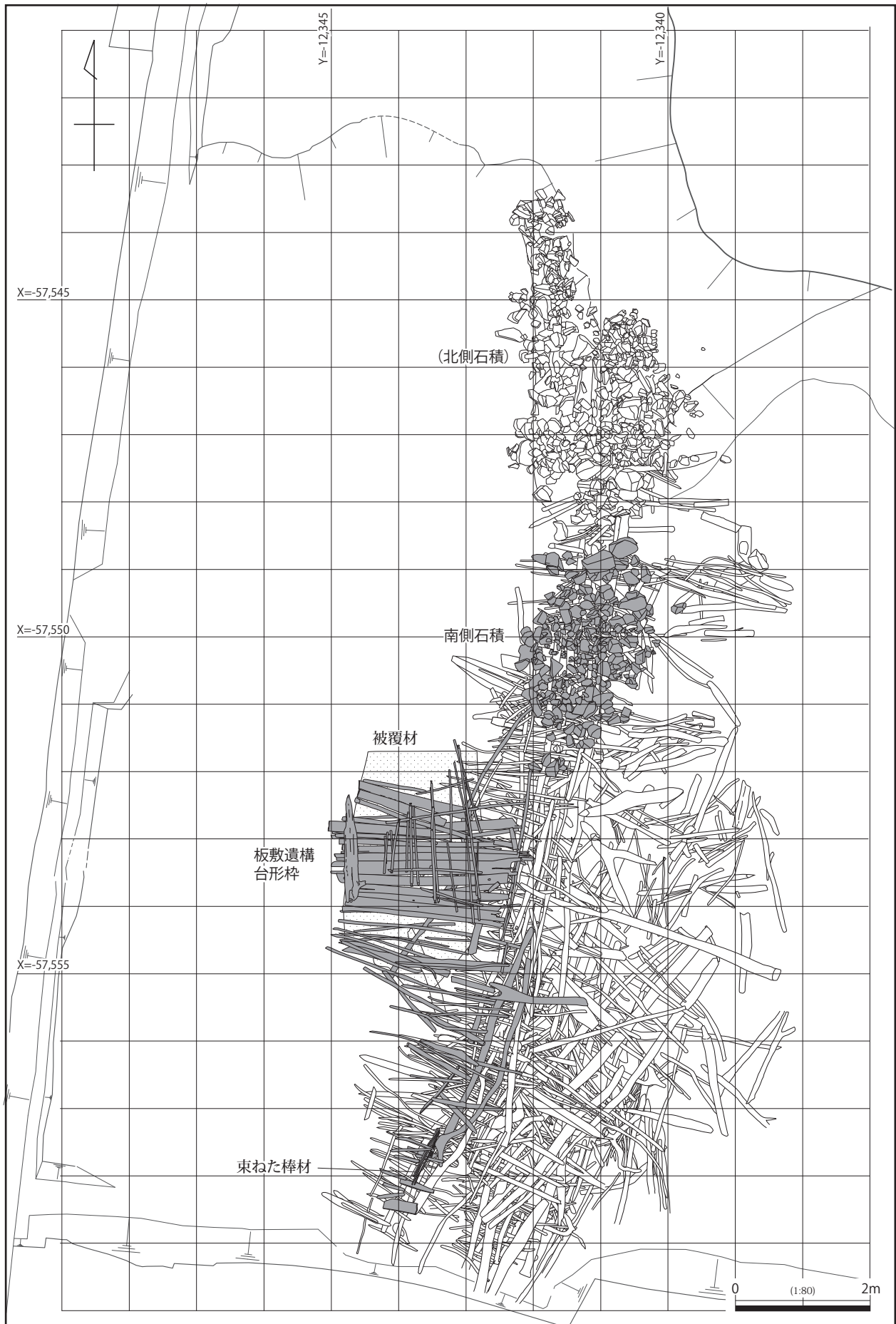
ステージ3の木製構造物を部分的に覆う砂層の上部に構築された木製構造物 26・22 上部や、南側石積や板敷遺構をステージ4として理解した。このうち、板敷遺構は、ステージ3の木製構造物の前面流路を埋める砂層の上に構築されており、段階の差が明瞭である〔第IV-5-26 図〕。一方、南側石積はステージ3で構築された北側石積と連続し、板敷遺構の東辺はステージ3の木製構造物に接しており、いずれもステージ3の構造物に付属するような形となっていた。したがって、ステージ4における木製構造物の構築は、ステージ3構造物の部分的な埋没と、それに伴う修復行為によるものと評価できよう。

横木と杭を組み合わせた木製構造物も、ステージ4段階のものは規模が小さい。南側石積みから南方に延びる状況が確認されるものの、使用されている木材も少ない。なお、木製構造物の主軸はN-12°~20°-Eで、南側ほど東に振っている。

また、木製構造物の南側(X=-57.557~558 ライン間)から、長さ70cmほどの棒状に加工された木材〔本弓Ⅱ第IV-5-25 図〕が30点ほど出土した〔第2分冊図版 77-6〕。いずれも向きを揃えており、出土状況に一定のまとまりが認められることから、本来は、紐などで束ねられた状態にあったと考えられる。編組製品などに用いられる素材の束などの可能性がある。

南側石積

ステージ3の木製構造物の北端部を埋める砂層の上に施された石積である。ステージ3の北側石積



第IV-5-24図 ステージ4平面

と区別するために、南側石積と呼称した。南側石積の西側では、4落ち込み底面標高が4.0～4.4mであり、石積の頂部との高低差は1.0～1.7mとなる〔第2分冊図版58〕。X=-57,548.5ライン付近を境にして、ステージ3の北側石積と接続し、大規模な堤防状の形状となる〔第IV-5-25図〕。両石積ともに同じ砂礫で埋没しており、北側石積をベースに南側石積が構築されているが、ステージ4において一体的に機能していたことが窺える。

両者の接続部付近は石積上面の標高が低く、緩やかなV字形を描いて東西方向に開口しているように見える〔第IV-5-25図〕。この場所は、ステージ3段階で北側石積と木製構造物の接続部であり、東西方向に水を動かす水路としての機能が継続していることがうかがわれる。

板敷遺構

X=-57,552～554ライン間で、幅6～21cm、厚さ0.9～1.9cmの板が、整然と並べられた状況でみつかった。土圧により湾曲・変形しているが、本来は平坦で直線的な板が西側にわずかに傾斜しながら並べられていたと考えられる〔第IV-5-26図 巻頭図版4-2 第2分冊図版59・61〕。後述するが、建築部材からの転用と考えられる板材は、サイズと形状によって選択的に設置する場所を決めている可能性があり、方位軸に合わせて並べられている。横木と杭を主要な構造材とし、南北方向ではあるものの、やや東に振った主軸を持つ他の木製構造物とは、大きく様相を異にしており、その機能も異なるものであった可能性が高い。そのため、これを「板敷遺構」と呼称して、他の木製構造物と区別



第IV-5-25図 北側石積み・南側石積み平・断面

することとした。板敷遺構の上下には、被覆材や平面台形の杵材などが検出され、周囲の木製構造物を含めた段階的な構築が想定される〔第IV-5-27～29図〕。これについて、時系列に沿って記述する。

ステージ4段階における木製構造物の構築と変遷

①**構築前段階（ステージ3前面流路の埋没）** ステージ3で構築された木製構造物は、埋没時に、前面流路を流れる水に浸食されて木製構造物が露出していたと考えられる。流路底面の標高は4.1 mで、砂礫を主体とする堆積物によって5.0 m付近までが埋没したようだ。次にステージ4段階における木製構造物の構築を復元する。

②**基礎杭と被覆材の設置** ステージ3前面流路の埋没後、砂礫の上面に杭が設置される。設置角度60°前後を測るステージ3の上部杭に比べると、20°前後と非常に緩やかな角度で設置されている。杭の上部には、肉眼観察においてイネ科植物の茎や葉と考えられるものを主体とする被覆材と盛土が確認された。被覆材の範囲は、南北約3.5 m、東西約2.2 mであり、上部に構築される板敷遺構を中心とするように敷設されている〔巻頭図版5〕。

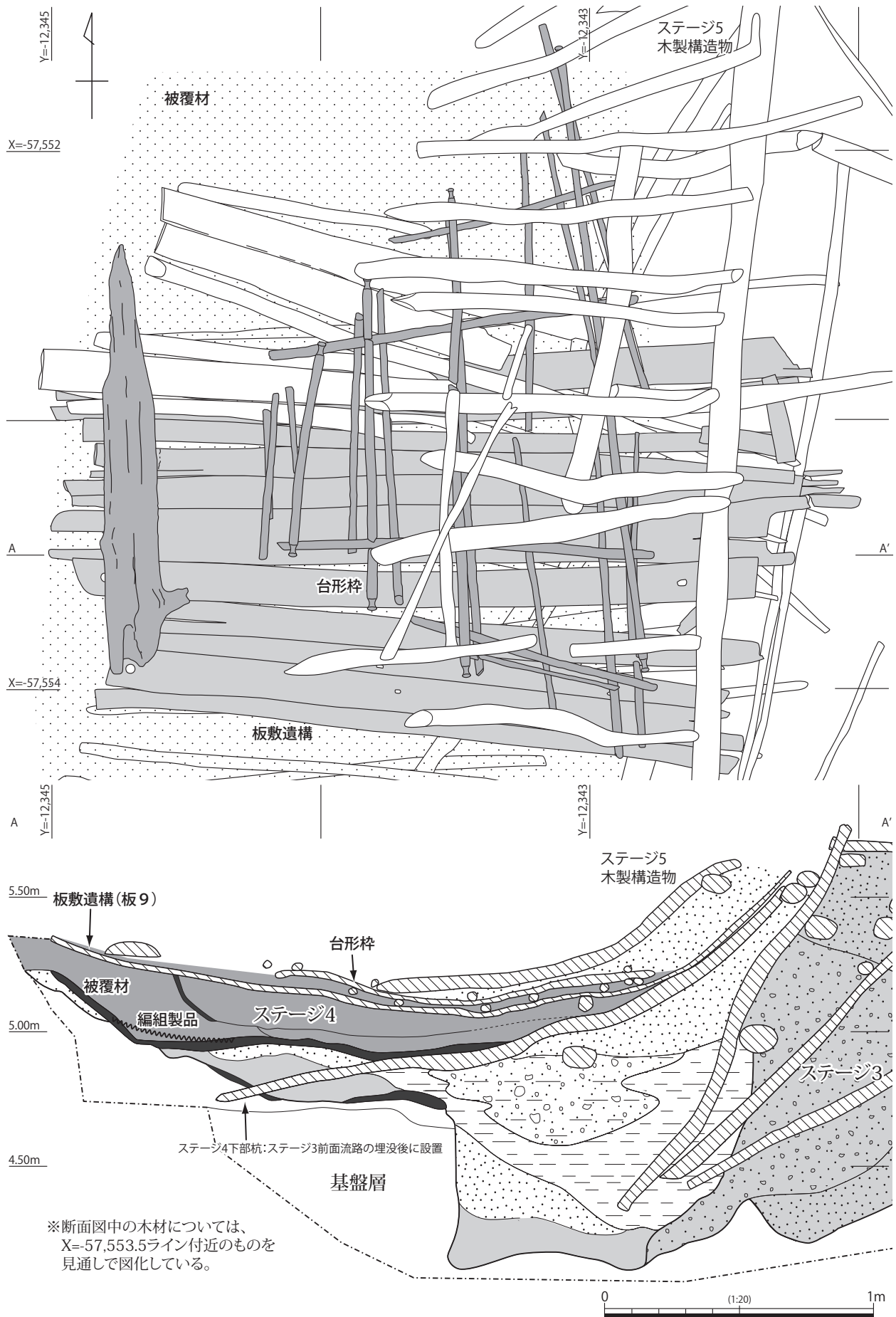
被覆材の一部には編組製品が確認された〔第IV-5-27図①〕。編組製品は100×50cmを測り、横材となる植物の茎状のもの方向が長辺となる。材を編む〈縦糸〉は、横材同様の植物茎である。傷みで状況が不明な端部を除いて5条が確認され、間隔は14～18cmを測る。材を2～3本ずつ束ねて編み込んでおり〔第2分冊図版62-1〕、民俗例にあるような菰編機（台）の使用が想定できる。

③**板敷遺構の設置** 被覆材の上に、細長い板材を11枚並べる。中央に配置される板9は、両端に輪薙込らしい仕口がみられ、中央に6×10cmの隅丸方形の穿孔が認められる。その両側に5枚ずつ板材が並べられ、全体としては約2.5×1.5 mの長方形の平面形状を構成している。南側に配置された3枚の板（板10・12・13）には、直径3～4cmの円孔が認められ、西側の端部は曲線的に仕上げられている。他の板材に同様の加工がみられないことから、これら板材については、建築部材からの転用であり、加工は部材としての使用時に施されていたものと考えられるが、部材としての機能は明らかでない。ただし、一本だけわずかに長い板9の中央穿孔を束柱の貫孔、両端の仕口に側柱が通ると考えると、床板としての機能を想定することができ、長さ、厚さが近似する他の板材も同様のものと考えられよう。

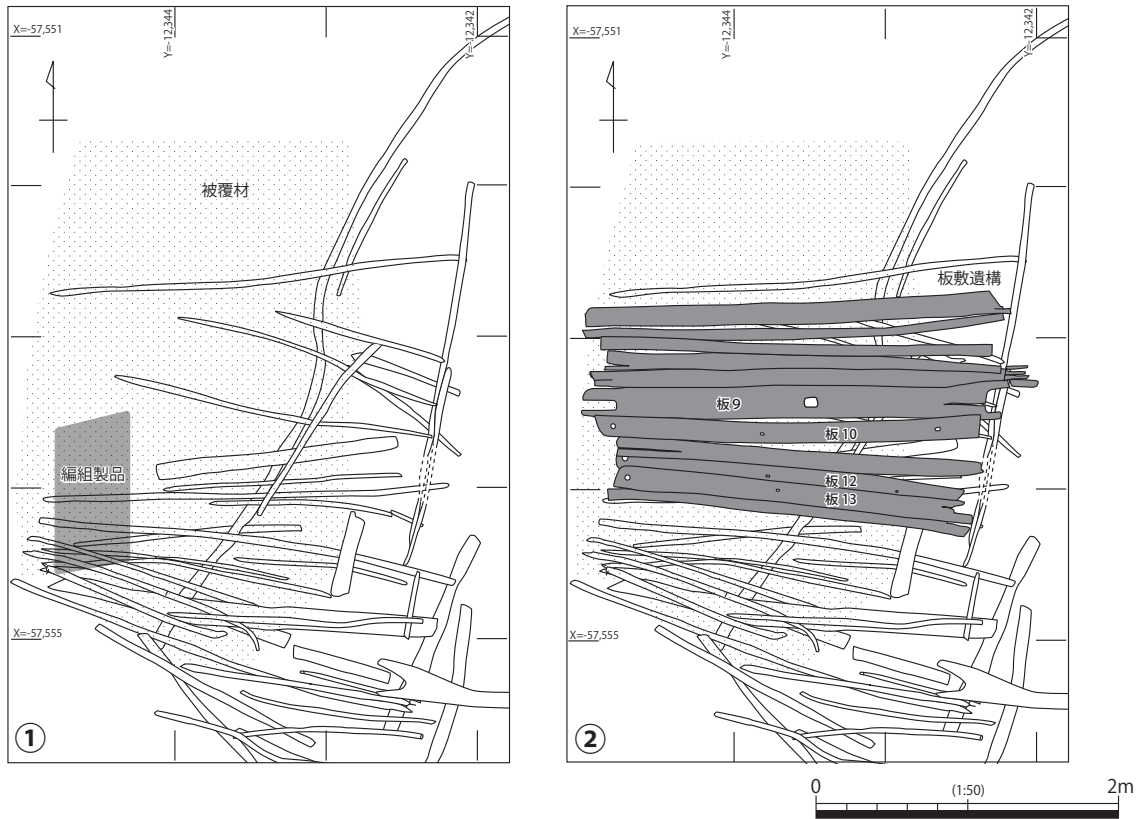
④**北側の板敷** ②で設置された板敷遺構の北側上部に、新しく板材と丸木が並べられる。これらの木材のうち、南側の3本は②の板敷遺構と同じく方位軸に合わせて設置されているが、（丸木5）以北の木材は軸がずれている。これについては、ステージ5の木製構造物設置に伴い、二次的な移動が考えられる。

⑤**台形杵の設置** ②・③で並べられた板材の上に、棒材を組み合わせた杵状の構造物が出土した。この構造物は平面形が台形を呈し、西側の短辺で約0.8 m、東側の長辺で約2.4 m、両辺間は約1.3 mを測る。以下、「台形杵」と呼称する。台形杵は、板敷遺構同様、主軸が方位にはほぼ合致しており、上部には①に施されていた被覆材と同じく、イネ科植物の葉や茎と思われる被覆材が部分的に確認できた。もともと台形杵の上部は全面が被覆材で覆われていた可能性がある。しかし、上部の砂礫層を堆積させた水の浸食により、多くが流出しているようで、残存状況が悪く十分な検討ができなかった。また、台形杵の西側50cmには、半裁された丸太材が南北方向に置かれている。台形杵に比べて、傷みが著しいこともあり、表面に明瞭な加工痕などは確認できなかった。

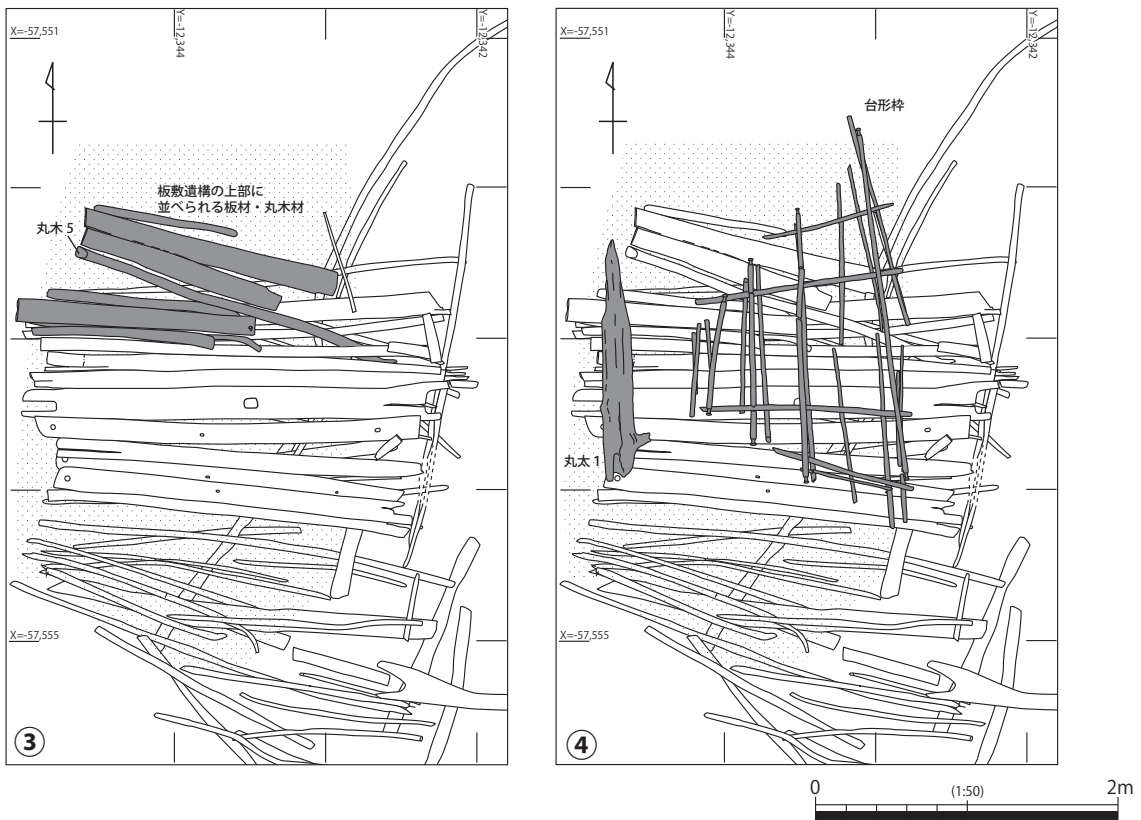
台形杵は南北方向のヨコ材と、東西方向のタテ材で構成されており、4本ないしは5本のタテ材を



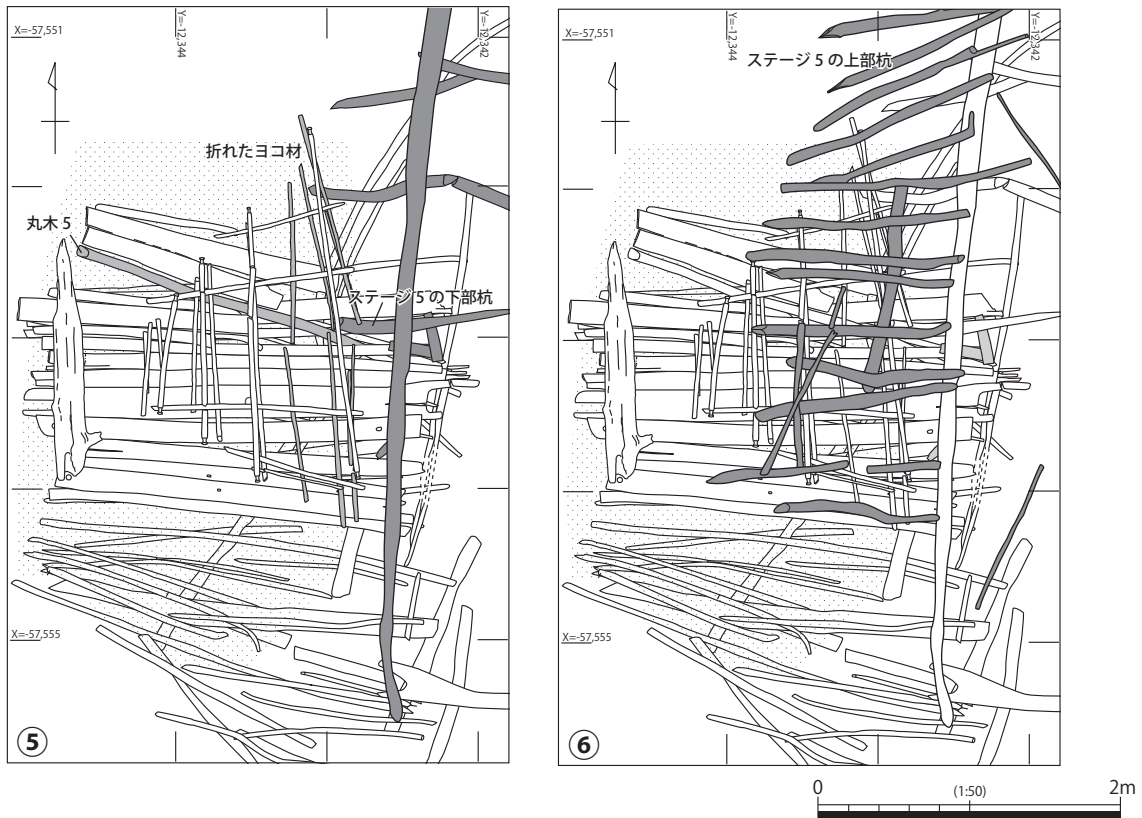
第IV-5-26図 ステージ4板敷遺構平・断面



第IV-5-27図 ステージ4構築過程①-②



第IV-5-28図 ステージ4構築過程③-④



第IV-5-29図 ステージ4構築過程⑤-⑥

挟み込むように、ヨコ材が組み合わされていた。タテ材上部には4本、下部には確実なもので8本のヨコ材が確認されており、東側のものほど長い材が使用されている。

また、ヨコ材は、タテ材の上下で形状が異なっていた。タテ材下部のヨコ材が両端を斜めに切断されているのに対し、タテ材上部のヨコ材の両端は、先端から3cmほどを削り込んでくびれを作っている。紐などによる緊縛を意図したものと思われるが、台形枠の周囲には、これに関係するような構造物は確認できなかった。したがって、この台形枠については、水利施設に伴う構造物ではなく、建築部材の一部が、組み合ったまま、板敷遺構の上に設置、ないしは廃棄された可能性が考えられる。

⑥**ステージ5の木製構造物の設置** ステージ5段階の木製構造物の設置による影響が認められるので、ステージ4から5への移行について概略しておく。

ステージ4では、台形枠の上部を薄く覆う砂層が堆積した後に、ステージ5の木製構造物が設置されている。ステージ5の木製構造物は、南北方向の横木を据える前に、杭の設置を行い、下部構造を造っている。X = -57,553 ライン付近に打設された杭の下端は、③に記述した丸木5に接しており、この杭の設置時、もしくは設置後の上部からの土圧により、丸木5に対して西方向への力がかかり、丸木5やその北側の板材などが位置を変えているものと想定された。④の台形枠のヨコ材についてもこの杭の付近で折れているものが目立つ。下部構造の設置による影響がうがわれる。

さらに、下部構造の上に、南北に長い横木が設置され、その上に密な間隔で杭が並べられている。そして、その後に、基盤層に由来するを疑礫を含む盛土が施される〔第2分冊図版 62-2〕。

以上、ステージ4における板敷遺構の構築前段階から後述するステージ5段階の木製構造物設置にいたる過程を復原した。建築部材を集中的かつ選択的に使用し、段階的に構築していることから、土

堤状施設の躯体としての木製構造物とは異なる目的意識をもって設置された遺構と考えられるが、周辺から遺物の出土もなく、実際にどのような機能を持つ遺構であるのかは、明らかにし得なかった。

ステージ5 (木製構造物 23・24) [第IV-5-31~33 図 第2分冊図版 63・64-1]

ステージ3・4で構築された石積の西側の面に設置された木製構造物 23・24がステージ5に相当する。総延長距離は約12mを測るが、使用されている杭材は約100本と、それほど多くはない。ステージ4段階の構造物とは、砂礫層を挟在して上下関係にあるが、基本的な構造はステージ4段階の状態を維持していたようで、大きな変化は観察できなかった。ステージ3、ステージ4との連続する時間幅の中で、修復、補強、さらに板敷遺構などの施設が付加されながら、ステージ5段階の木製構造物が構築されたと理解できよう。



第IV-5-30図 板敷遺構平面

実際、ステージ5段階に新しく構築された木製構造物は、4落ち込み北端からX = -57,555 ライン付近まで延びるが、それ以南には確認できない。また、ステージ3・4段階に構築されていた木製構造物と、ステージ5段階に木製構造物に用いられた横木の南端が接しており、前段階までの木製構造物に連続するように構築、利用されていたことがわかる。

また、この段階の木製構造物は、構築単位が明瞭で、南北2単位に分けることができる。北側を構築単位C、南側を構築単位Dとした〔第IV-5-32図〕。

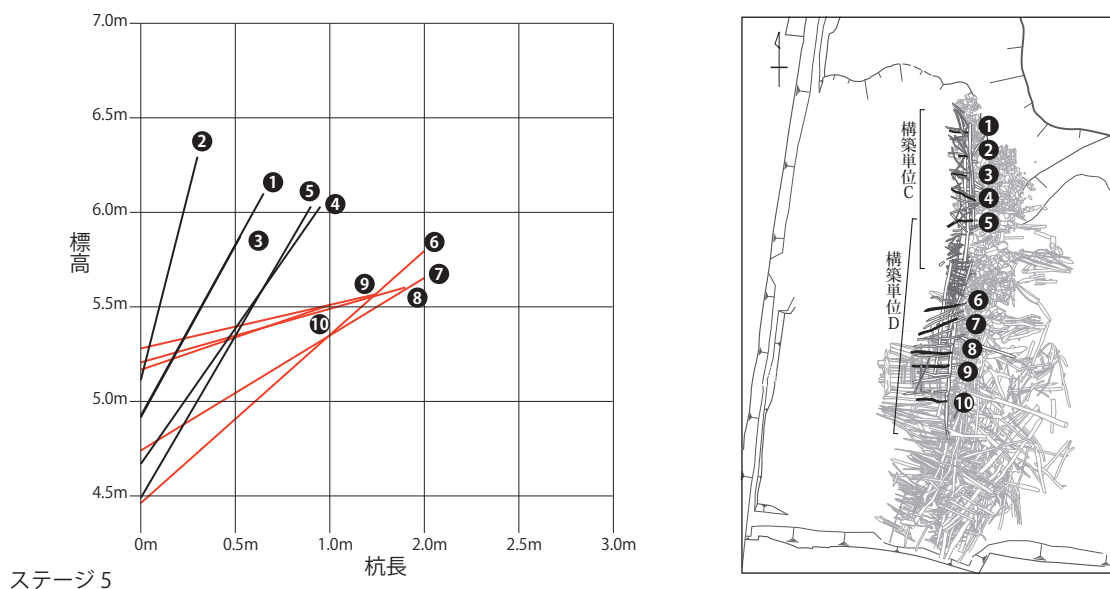
構築単位C

北側に位置する構築単位Cは、ほぼ真北に合わせた主軸を持ち、延長距離は約6mを測る。杭は石積の法面に貼りつくように並べられており、設置角度は60°前後と急である。杭の下端は深く、調査中に下端を確認できなかったものも多い。

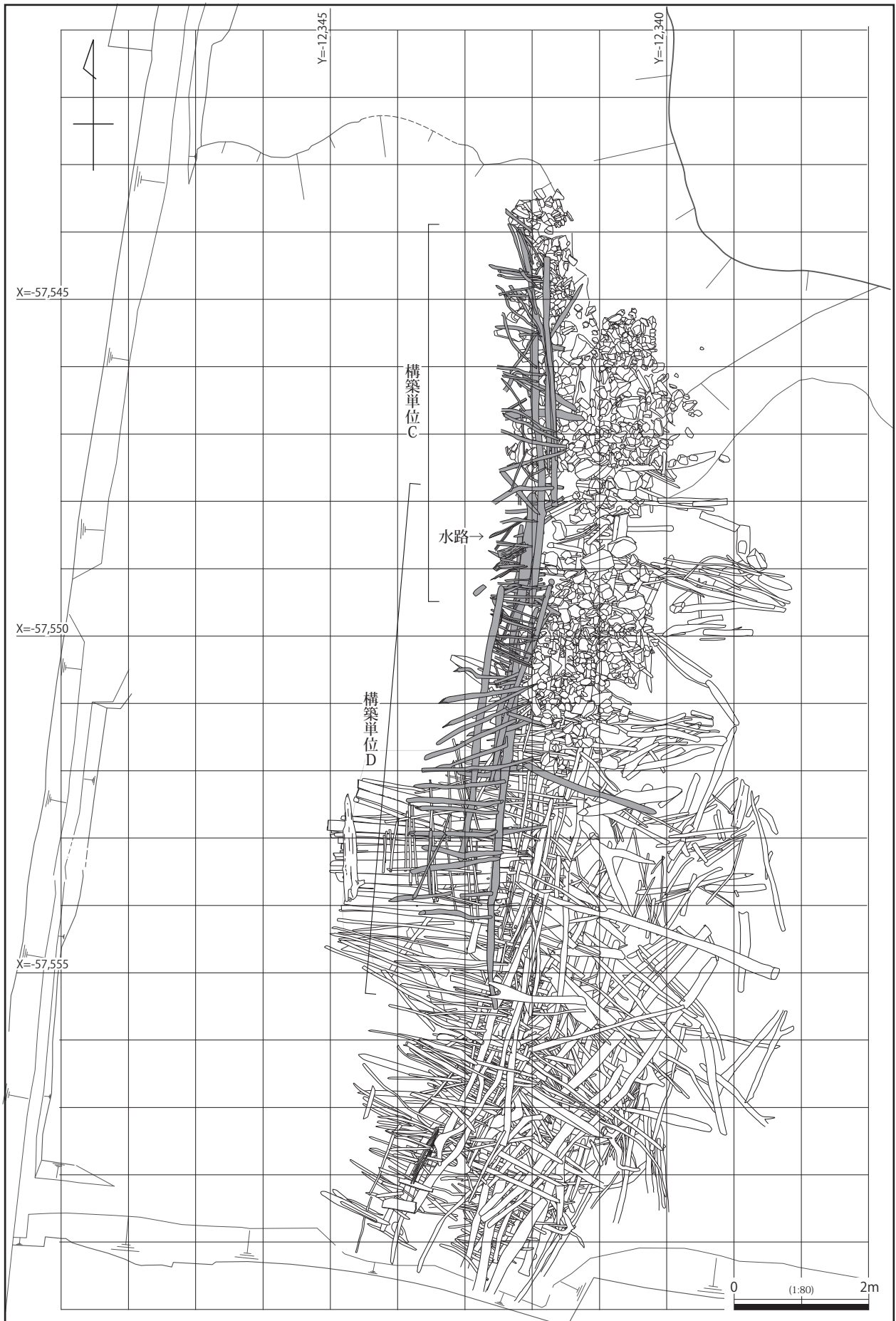
構築単位D

南側に位置する構築単位Dの主軸方向はN-5°-Eであり、わずかに東に振る。延長距離は約8mである。杭の設置角度は、北側と南側で異なる。北側にあるもの(⑥・⑦)は30~40°、南側にあるもの(⑧・⑨・⑩)は15°前後で、北側の方が角度が急である。また、南側の杭の下部には、ステージ4段階に構築された板敷遺構などがある。この杭の下端が、下部にある板敷遺構などに若干干渉しているが、杭の打設により大きく破損している部分がないことから、下部の構造物を意識することで、南側の杭の設置角度が緩くなっている可能性がある。

また、X = -57,548.5 ライン付近が構築単位C・Dの境界となる。この部分では、上部の横木が1mほどの間隔をあげながら設置されており、杭の上端標高も低い〔第IV-5-33図 第2分冊図版63-2〕。さらに、この付近を中心に砂礫が東西方向に厚く堆積していることから、ステージ4段階に石積の一部が開口していたのと同様に、ステージ5段階にも、ほぼ同様の場所に東西方向に抜ける水路が設けられていた可能性がうかがわれる。さらに、次のステージ6においても、同じような場所にある



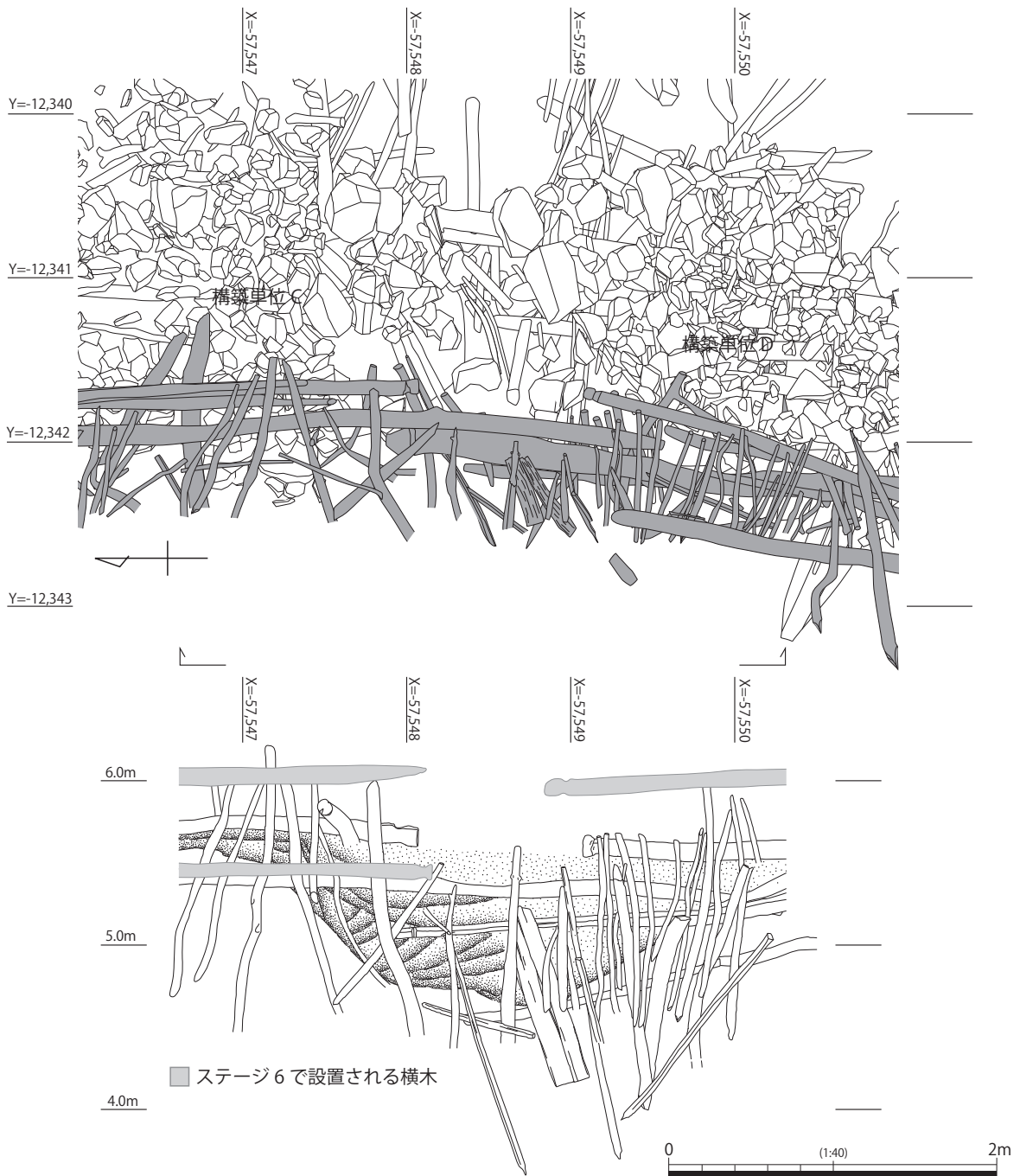
第IV-5-31図 ステージ5杭設置角度



第IV-5-32図 ステージ5平面

横木が同様に間隔をあけながら設置されている状況が観察できた〔第IV-5-33図〕。したがって、ステージ3段階に4落ち込みの内部が東西に分けられて以降、東西の空間を繋ぐ水路が設定され、しばらくの間、維持されていたことが想定できる。

また、ステージ5と、次のステージ6で用いられている横木には、先端部を粗く削り込んだものが目立つ。これらには他に加工痕がなく、樹皮が付いたままの芯持材が多い。構造物の構築にかかわる継手・仕口のようなものではなく、木材の切り出し、運搬にさいし、縄をかけるための加工であろう。



第IV-5-33図 構築単位C・D境界付近平・立面

ステージ6 (木製構造物3下部・20・21・18下部・19) [第IV-5-34~37図 巻頭図版6 第2分冊 図版64・67-1]

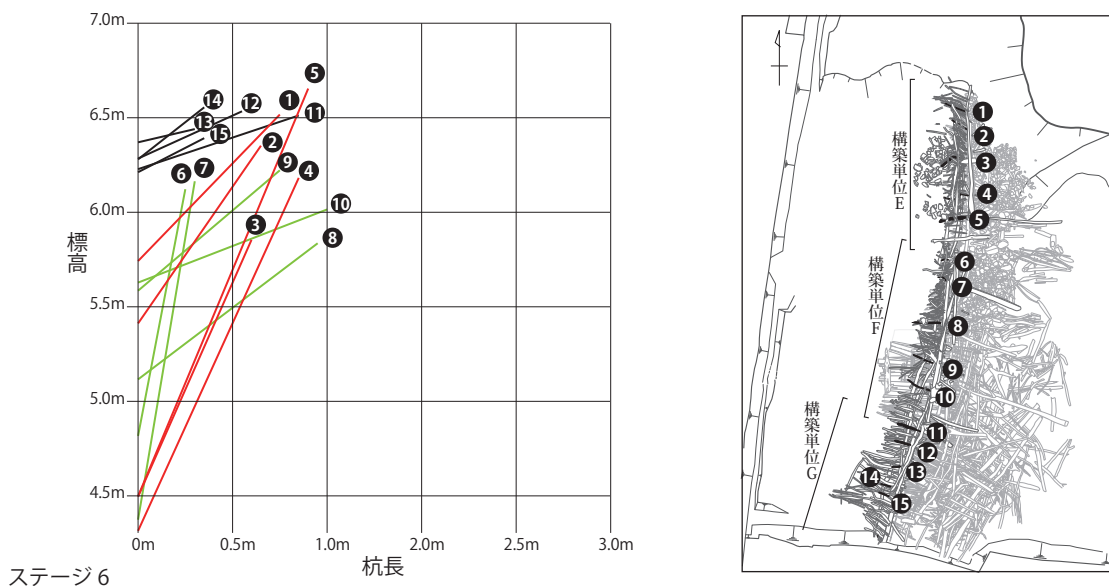
ステージ6に相当するのは、4落ち込みの北端から、調査区の南端に構築された木製構造物である。総延長距離は16mを超え、南端の横木は調査区外に延びる。ステージ5までの構造物の西側を覆うように構築されており、前段階までの基本的な構造を踏襲している可能性が高いが、構造物全体を改築している状況が看取される。このステージのものとして取り上げた杭は300本を超える。特に中央部から北側に多く設置されていた。構築単位は大きく3つに分かることができ、北から構築単位E・F・Gとする。また、土嚢積みや支持工が確認された場所もある。

構築単位E

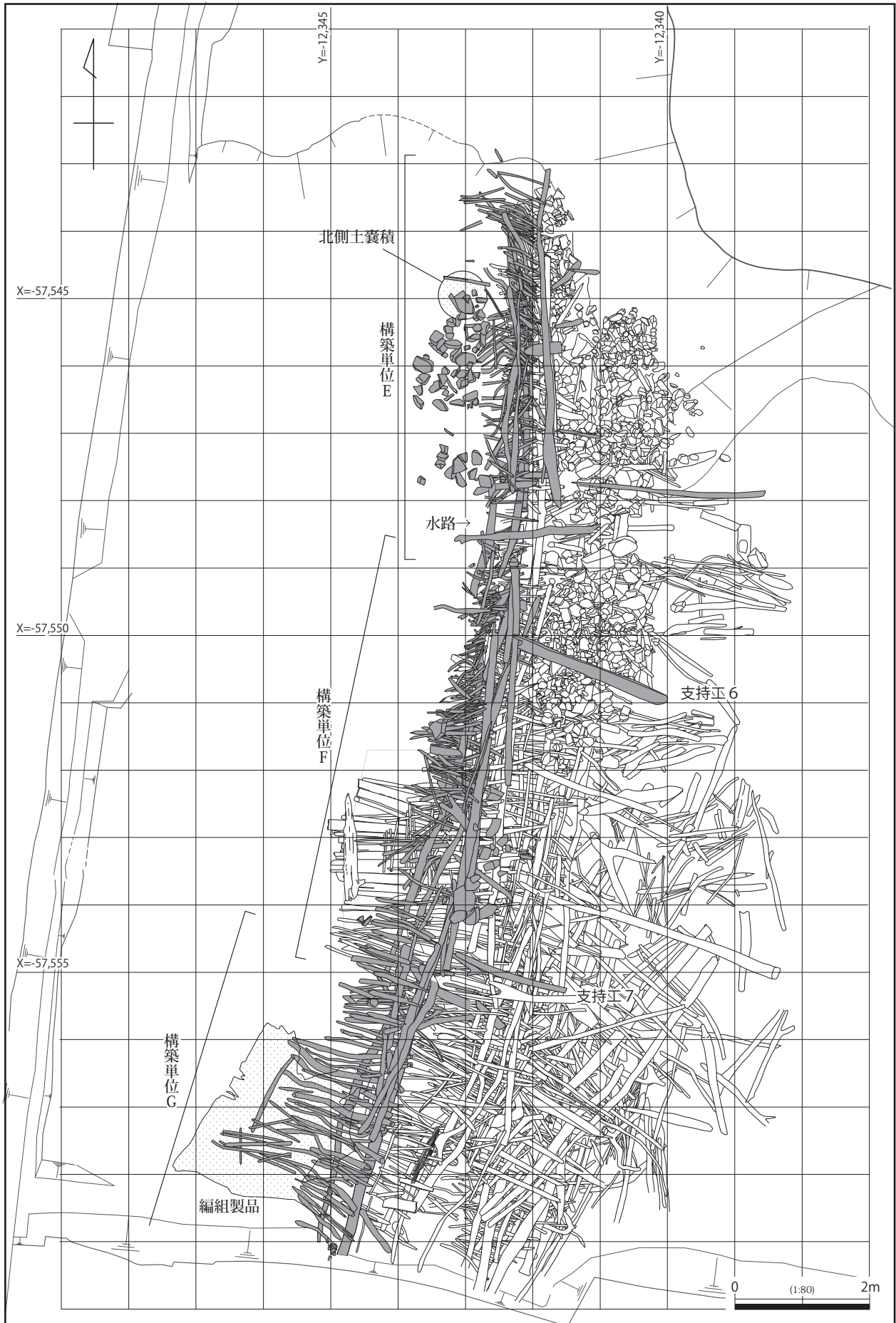
北側にある。主軸はほぼ真北に振る。延長距離は約6mである。杭の設置角度は55°前後だが、南側のもの(③・④)に比べて、北側のもの(①・②)ほど角度は緩いが、設置標高が高い[第IV-5-34図]。また、ステージ6段階では、ステージ3段階に構築された突堤状遺構を拡張するように2溝との接合部に盛土遺構1が構築されている。したがって、構築単位Eの北端は盛土遺構に接続している。杭の設置状況は、こうした盛土遺構の構築に関連するものといえよう。

杭材の下端は標高4.5m以下に埋没しているものが多く、調査時に確保できた掘削深度の関係から、下端の状態を確認できなかったものも多い。ただし、下端が確認できた杭には、先端を鋭く加工していないものが多くあった。したがって、この多くは打設したものと考えるにくい。このことを考慮すると、杭材の設置は、木製構造物の前面に溝を掘り、その中に立てかけるようなものだったのかもしれない。しかし、こうした工法を示す痕跡は確認できなかった。

また、構築単位Eの北端では、被覆材、盛土、石積が確認された。被覆材は、肉眼観察の範囲でイネ科植物の茎や葉と考えられる植物遺体を重ねたもので、厚みが10cmにおよぶ場所もあった。こうした被覆材には、構築単位Eの杭下部から、4落ち込み北側の斜面に連続しているものが確認された[第2分冊図版64-1]。広い範囲を対象にした盛土の実施を示すものかもしれない。そして、被覆材と



第IV-5-34図 ステージ6杭設置角度



第IV-5-35図 ステージ6平面

盛土が厚い互層を成しており、その間には砂礫層を挟在しない。このことから、版築のような工法を用いて造成されたことが想定できる。

この盛土は、4落ち込みから北方に延びる2溝への出水口付近に設けられる盛土遺構のうち、もっともはやくに構築された盛土遺構 1-1 の南側にあたるものと考えられる。ステージ5段階における木製構造物の改築と、2溝との接合部での盛土遺構の整備は、当段階に水利施設の再整備が行われたことを示唆している可能性がある。

構築単位F

主軸はN-8°~16°-Eである。やや東に振る。延長距離は約6mである。杭の設置角度は北方ほど急になる〔第IV-5-34図〕。南側(⑧・⑨・⑩)で40°前後に対して、北側の2本(⑥・⑦)は約80°を測り、検出された木製構造物群の中では最も急な角度を持っている。これは構築単位EとFの間に想定される東西水路と関係した構築状況を示す可能性があろう。ただ、構築単位Eと同様に下端が先鋭になっていない杭も多い。

構築単位G

主軸方向はN-17°-Eである。全長は約5mである。南端はさらに調査区外に延びる。杭の設置角度は25°前後で、構築単位E・Fに比して緩やかである〔第IV-5-34図〕。設置標高も高く、いずれの杭も上端、下端ともに6.2~6.5mにある。杭の上端では、イネ科植物の茎などを素材とする編組製品が確認できた〔巻頭図版6-1〕。この編組製品は縦糸をヨコ糸でもじったもので、もじり網によって編まれた蓆(むしろ)や菰(こも)のようなものである。

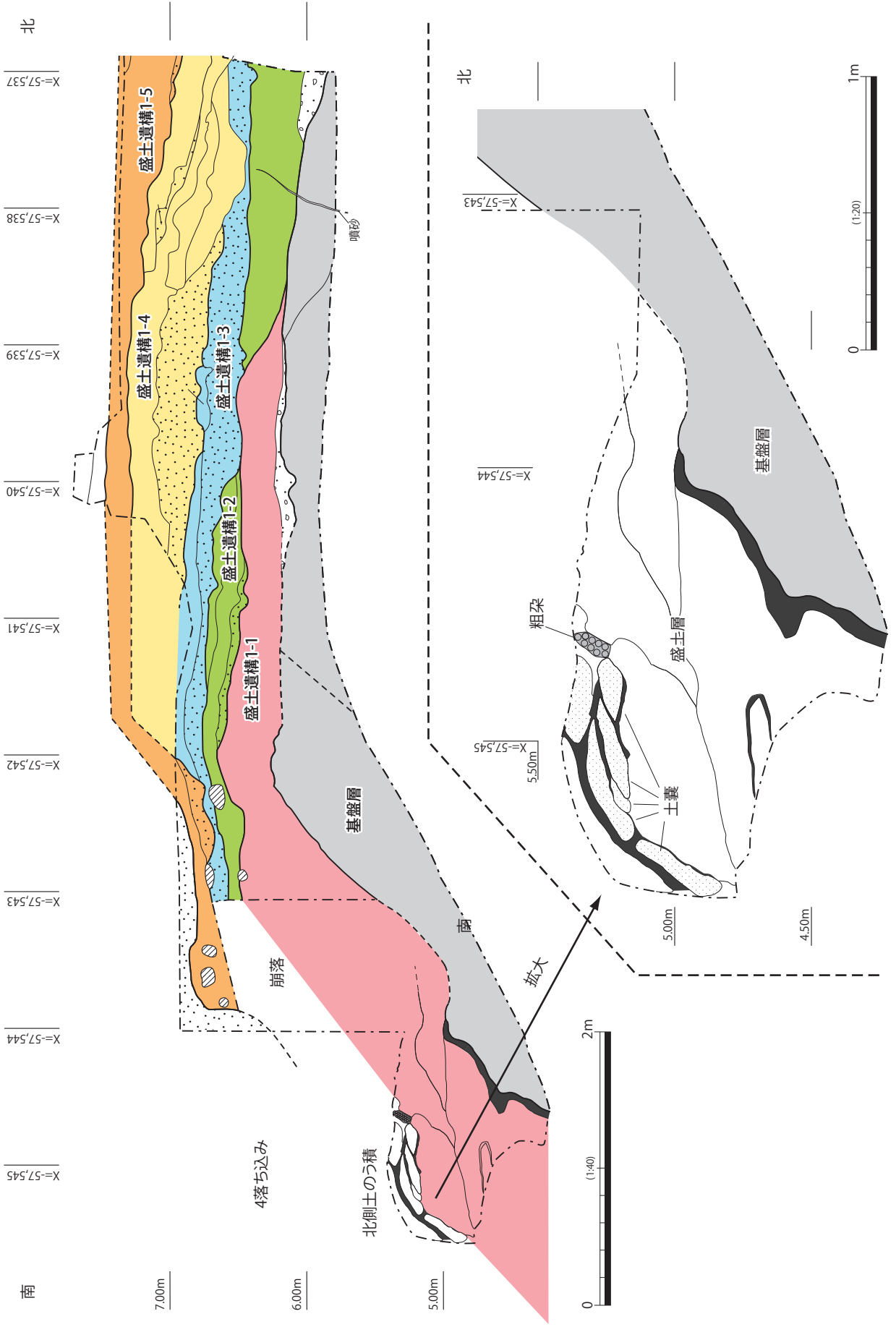
検出した編組製品〔第IV-5-35図アミカケ部〕は、長辺2.4m以上、短辺約1mである。南端は側溝を掘削した際に失ってしまった。西端と北端は確認できるが、東端は上部に別の被覆材に覆われており、これを除去した後も、明瞭に範囲を確認することができなかった。20cm弱の等間隔に5単位のヨコ糸が確認できる。上部を覆う被覆材で確認できない東側にもヨコ糸を想定すると、6単位ほどのヨコ糸でタテ糸をもじっていたものと想定できる。この材についても灰像分析を行ったが、イネ科植物の機動細胞や珪化細胞組織は認められない(第VIII章第5節)。

この編組製品は本来の形状を広範囲にとどめているが、非常にぜい弱な状態であった。古墳時代前期の編組製品を考えるうえで重要な資料であることから、遺物として取り上げを行うことにした。ただし、全体を一括して取り上げることはできないので、分割して、下部の土ごと切り取り、真空凍結乾燥による保存処理を行った。

土嚢積み(北側土嚢積)

4落ち込み北側の斜面で土嚢積と考えられる堆積を確認した〔巻頭図版6-2 第2分冊図版64-2〕。ステージ7にも土嚢積が確認されたが、ステージ6段階の土嚢積は北側の斜面にあるので、便宜的にステージ6段階の土嚢積を「北側土嚢積」と呼ぶ。北側土嚢積は、北から南に下る斜面の表面を覆うように積み重ねられている。この斜面は盛土遺構 1-1 の南端にあたる。北側土嚢積は盛土遺構 1 の造成に伴うものと理解できよう。

断面観察で明瞭に確認できた土嚢は6単位である〔第IV-5-36図〕。1つの土嚢の単位は、幅は35~40cm、厚みは6~8cm前後、周長は約90cmである。土嚢には、各所に見受けられた被覆材と同じく、肉眼観察の範囲でイネ科植物の茎や葉と考えられる植物遺体が明瞭に観察された。イネ科植物を素材とする編組製品で基盤層などから採取されるシルト層を巻き、土嚢としているようだ。また、



第IV-5-36図 盛土遺構1 土層断面

北側土嚢積の北端に沿うように、広葉樹と考えられる葉や小枝が集中する状況が確認された。

土嚢の下部は、層厚 50cm 以上の盛土層が認められる。なお、不明瞭ではあるが、この盛土層の内部にもいくつかの単位をみる事ができるため、部分的に土嚢積であった可能性がある。周辺は湧水と軟弱地盤のために崩落が著しく、平面的な調査が十分に実施できなかったのは残念であるが、確認された場所はステージ6において構築される木製構造物の前面流路の水衝部に当たる。盛土層の上を土嚢や植物繊維で丁寧に覆っている状況から、北側土嚢積については、崩落や浸食を防ぐ護岸工としての性格が考えられよう。

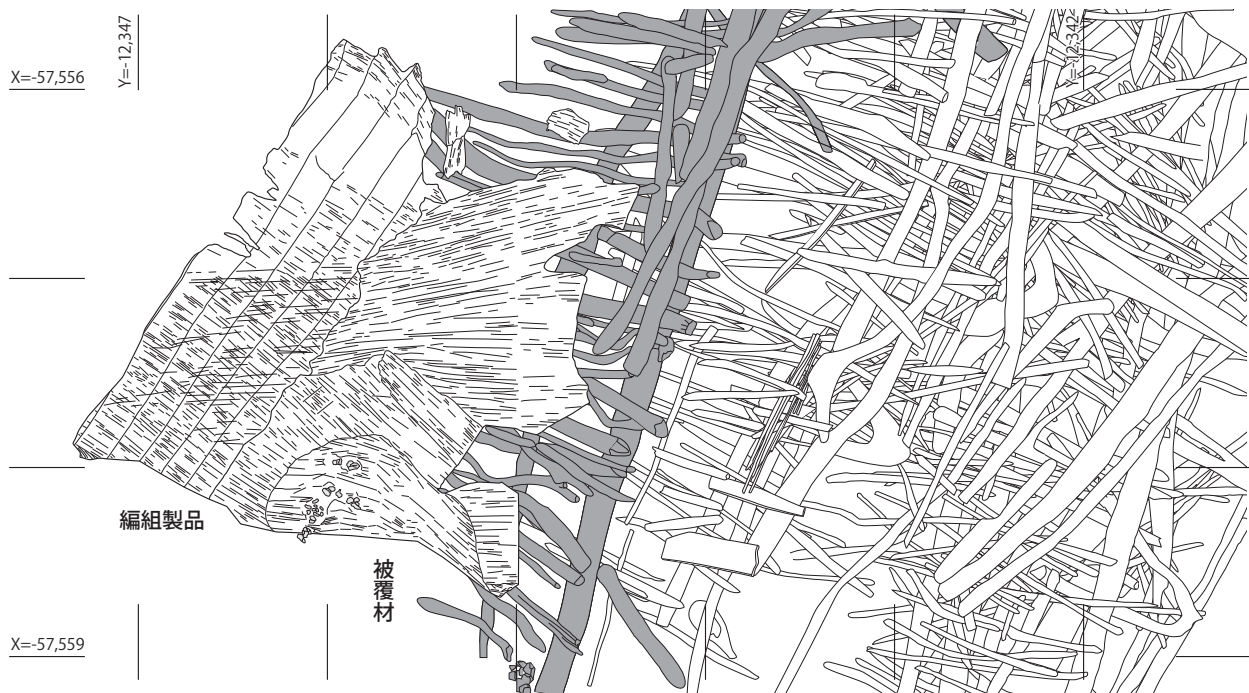
支持工

支持工6は、長さ 2.5 m の板状の縦木の西端に設けられた方形の欠き込みに、長さ 3.4 m の横木を T 字状に組み合わせるものである〔第2分冊図版 66〕。縦木先端の欠き込みは丁寧に加工されており、丸い横木に対して方形を呈することから、もともと部材に設けられていた仕口を利用した可能性が高く、このタテ木については建築材などからの転用が考えられよう。縦木はわずかに東傾斜を持つものの、ほぼ平坦に設置されており、上部を被覆する盛土の重量・土圧などによって固定し、横木を支えていたと想定されるが、上部は大規模な流路内堆積物によって覆われ、盛土は観察されなかった〔第IV-5-11 図〕。

支持工7は、長さ 2.1 m の縦木の西端の枝分かれ部に、長さ 4.8 m の横木の南端をわたすことによって、後方から支える。これについても縦木がほぼ平坦に設置されており、支持工6と同様の構造を持つと考えられる。

ステージ7（木製構造物 13・17・18）〔第IV-5-38~42 図 巻頭図版 7・8-1 第2分冊図版 67-2~69-1〕

ステージ7としたのは、4 落ち込みの北側において、ステージ6の構造物を埋めた砂礫の上部に構築された木製構造物である。総延長距離は約 9 m、X = -57,552 ラインより南側には、新しい木製構



第IV-5-37図 構築単位G前面の被覆材と編組製品

造物を確認できなかった。

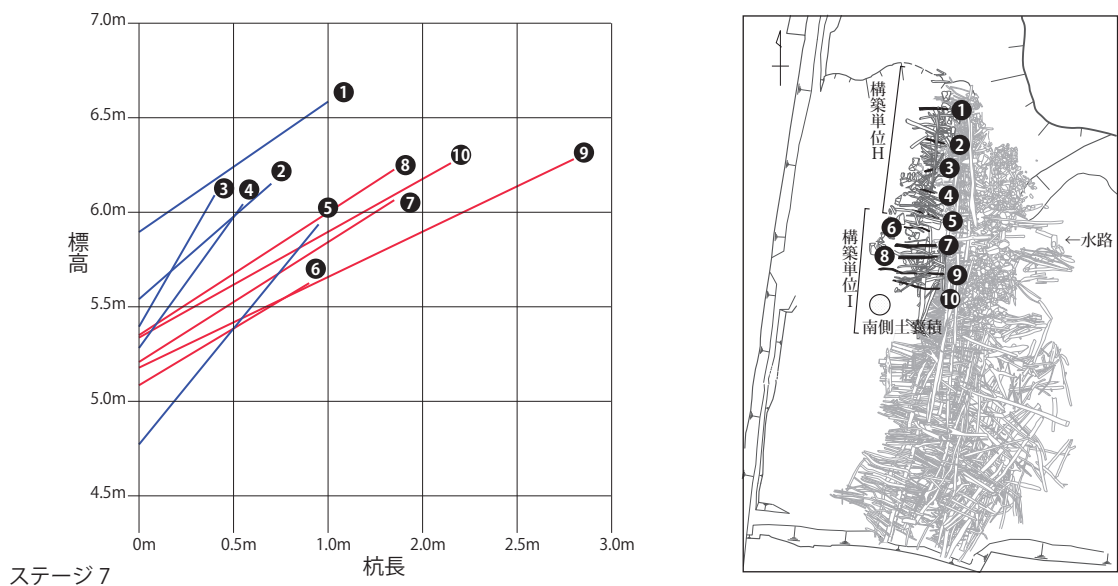
構築単位は大きく2つに分かれ、これを北から構築単位H、構築単位Iとする。ステージ6の木製構造物における構築単位E・Fから1mほど西に構築されたもので、多量の砂礫が供給され、埋没したことに伴う木製構造物の改築と想定する。平面形は、やや湾曲していた下層の木製構造物に比べ、直線的に設置されている。使用されている杭は84本、北側ほど杭が多く使用されている。

構築単位H

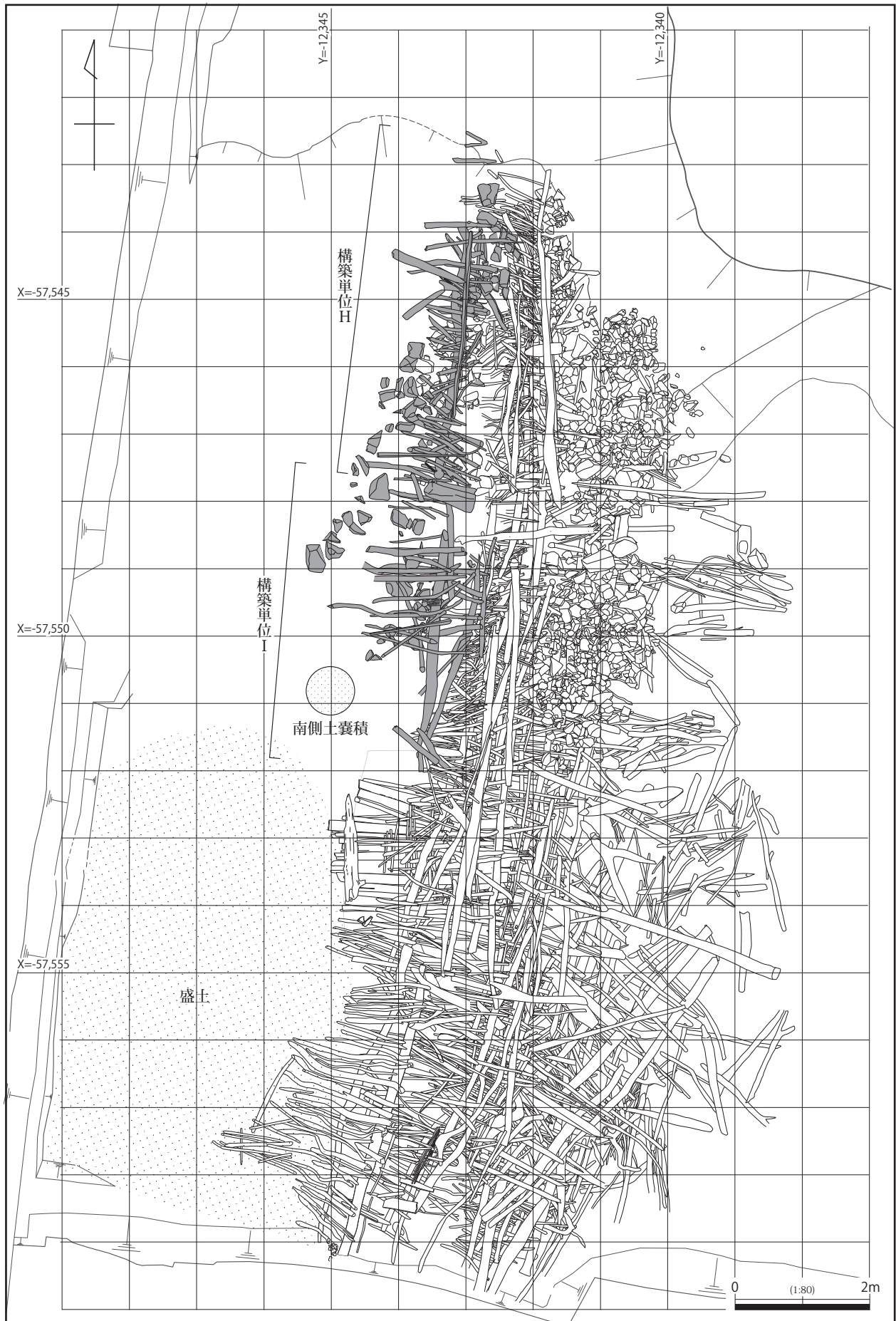
主軸はN-7°-Eである。杭の設置角度は南北で異なる。北側(①・②)は27～41°と緩く設置標高も高いが、南側(③～⑤)は51～60°と急である〔巻頭図版7-1 第IV-5-38図〕。こうした設置状況の差異は、ステージ6と同じく、構築単位の北端が2溝内の盛土遺構に接続することに起因する。杭の前面下部には盛土が残存するが、南方ほど厚くはない。盛土の上には凝灰岩の角礫が置かれていた。一方で、南方の構築単位Iとの境界付近には、盛土が残存せず粗い砂礫層が堆積していた。下位のステージ同様に、X=-57,548～549ライン付近が4落ち込みの東西を接続する水路となっていたと考えられる。ただし、砂礫層の上には杭が密集して確認され、直径40cmほどの大径木が、杭とは逆の東傾斜をもって設置されていた。水路を使用しない、もしくは不要となった際に閉塞させるために打設された木材と考えられよう。

構築単位I

主軸はN-5°-Eである。ただし、構築初段階のものと考えうる下位にある横木は、より東に主軸を振っている。杭の設置角度は、30°前後で、全体によく揃う〔第IV-5-38図〕。構築単位Iは、X=-57,552ラインを南端として、その先にはこのステージでの木製構造物はみられない。構築単位Hと同じく、杭の前面は盛土で被覆されている。この盛土層の中から、部分的ではあるが土嚢積が確認された〔第IV-5-36図〕。ステージ6で確認された、護岸のために斜面に斜め積みされたものとは異なり、木製構造物の前面流路に平積みされている。これをステージ6で確認された土嚢積と区別するため〈南側土



第IV-5-38図 ステージ7杭設置角度



第IV-5-39図 ステージ7平面

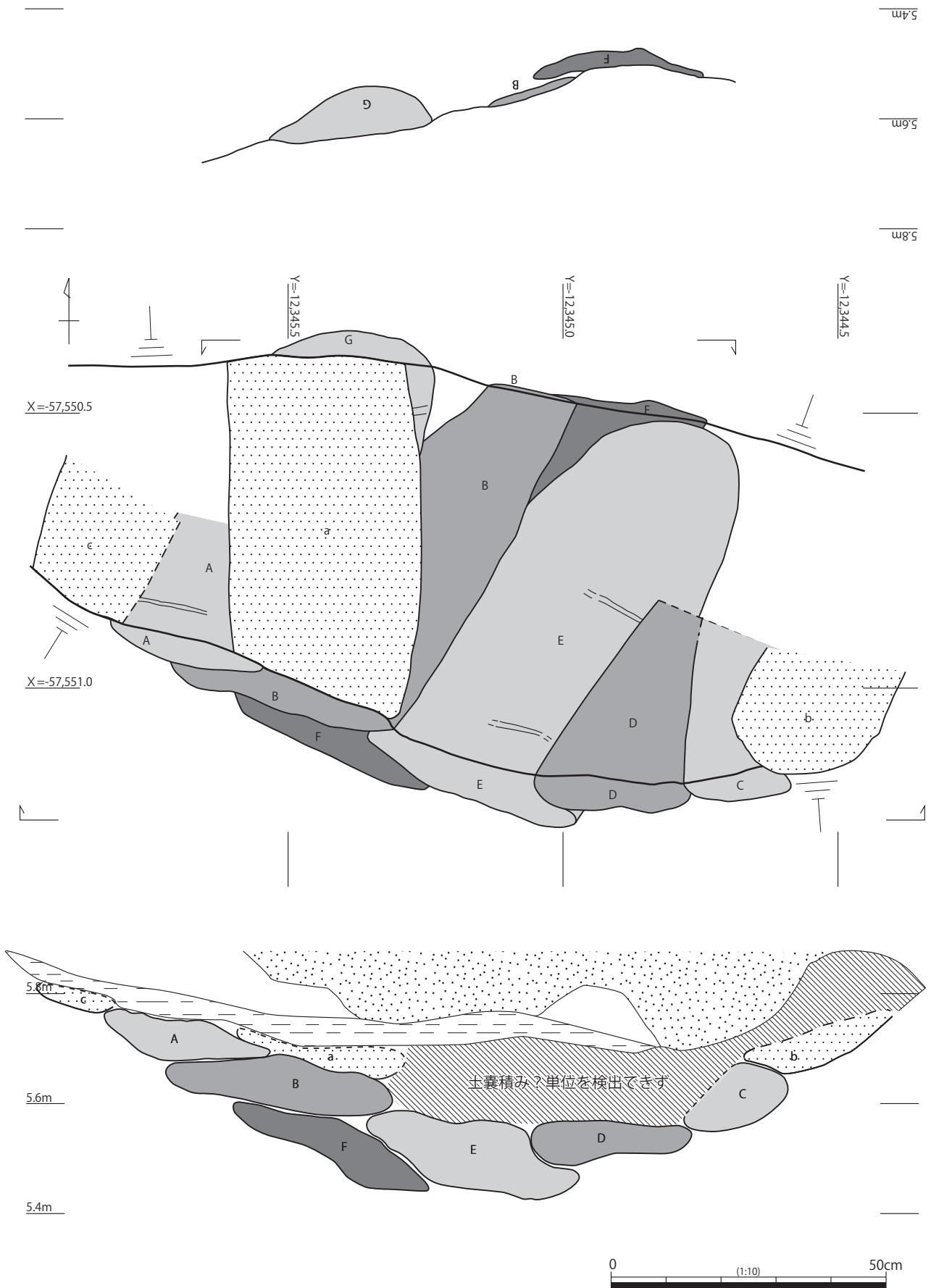
囊積)と呼称し、詳細については後述する。

盛土

なお、ステージ7段階には、木製構造物の前面で大規模に盛土が施されていた。この盛土の造成は、これ以降の木製構造物の構築に大きな影響を及ぼしている。盛土には、基盤層に由来するシルト～粘土層が用いられており、砂礫が含まれたり、ラミナが転倒する砂層などが確認できた。流路の浚渫に伴って盛られたものかもしれない。この盛土により、水路は大きく西側に移動している。特に4落ち込みの南で顕著である。ステージ8段階の木製構造物の芯となっている砂礫層の下部を底面とすれば、底面の標高も約5.7mと大きく上昇している。



第IV-5-40図 ステージ7南方の盛土



第IV-5-41図 南側土囊積平・立面

また、南側ではステージ6段階の木製構造物を埋める厚い堆積層の上に、大規模な盛土が施されており、この段階での前面流路は4mほど西に移動している（第IV-5-40図）。ステージ7以降、4落ち込みに設けられた水利施設が機能を失うまで、4落ち込み南方に木製構造物が構築されないことを合わせて考えると、当該段階の盛土造成とそれによる前面流路の西側への移動により、木製構造物の構築自体が不要になったと考えられよう。

土嚢積（南側土嚢積）

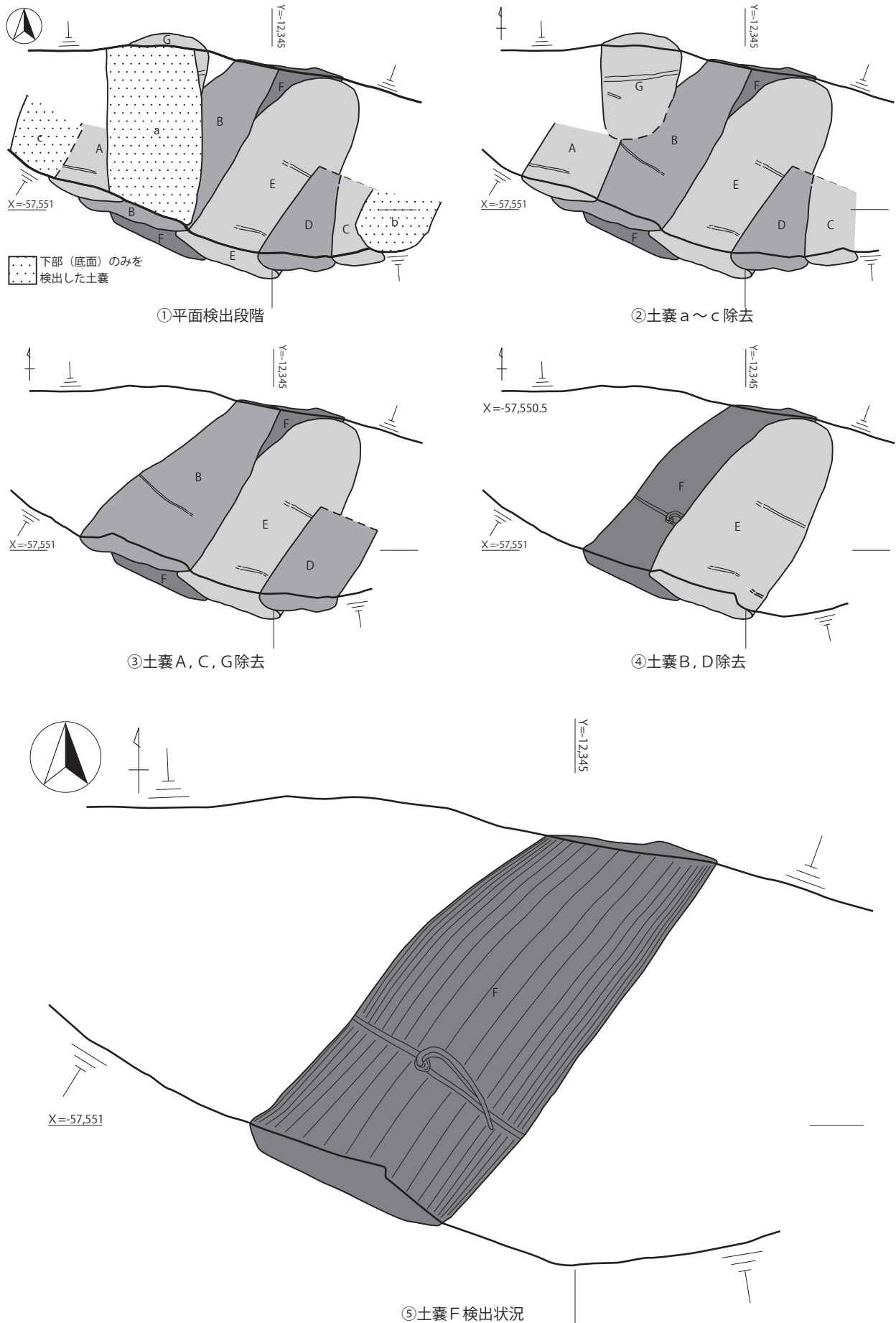
検出 4落ち込みの東西方向の断面記録を取得するために、X=-57,551ラインに設けた土層断面に土嚢積の痕跡を確認した。確認当初、盛土層の内部を網目状に分割する有機物の薄い層が観察され、土嚢を積み上げた単位の可能性があると考えられた。ところが、平面検出の段階で、誤って上部を掘削してしまった。そのため、上部に存在した土嚢の一部については記録することができなかった。一方、下部の土嚢については、土層断面の畔幅のみであるが、平面検出を行うことができた。確認された土嚢は9点である〔第IV-5-41図〕。これらの土嚢について、掘削により土嚢上半部を失ってしまったが、下半部のみが確認できた3点については「土嚢a～c」、その下部で検出した土嚢については、「土嚢A～G」と呼称する。

土嚢 調査のさいには、平面的に確認した土嚢を上部から順に除去し、土嚢積の構造を把握することに努めた〔第IV-5-42図〕。いずれの土嚢も、肉眼観察ではイネ科植物の茎や葉と考えられる素材を長軸方向に向きを揃えて並んでいた。また、これを横断する方向に巻かれた紐状の繊維が部分的に確認できたものもある。このことから、土嚢は、粘質土をイネ科植物の茎や葉を素材とする編組製品にくるみ、紐で横に縛られていたと考えられる。したがって、ここに検出した土嚢は、嚢（袋）に土を詰めたものではないが、一定量の土を積み上げる工法が、現在の土嚢積と共通することから、ここでは編組製品にくるまれた土の単位も土嚢と呼称することにした。

なお、南側土嚢積を構成する土嚢には、北側土嚢積のものに比べて有機質に富み、暗色のシルトを主体としつつ、基盤層に由来すると思われるグライ化したシルト層をブロック状に含む土がくるまれていた。各土嚢は、幅35～40cm、厚み5～10cm前後であった。ただし、長さについては、調査時の掘削によって端部を失っているため不明であるが、最も残りの良かった最下部の土嚢Fについては、75cm以上になることが想定される。ステージ4の板敷遺構下部の編組製品、ステージ6構築単位Gを覆っていた編組製品などは、縦方向に用いられた素材の長さが約100cm程度と共通している。したがって、長さは100cm程度と考えておきたい。なおかつ、土嚢を人力で運搬していたとすれば、長さが100cmを超えるような土嚢は想定しにくいだろう。

なお、土嚢を横に縛る紐については、最下部の土嚢Fが最も良好な状態にあった〔巻頭図版7-2・8-1 第2分冊69-1〕。ただし、明確な撚りは観察できなかったもので、撚らない素材を使用していた可能性もあるが、ここでは紐と呼称する。編組製品をくくっていた紐の幅は1～1.5cm程度で、肉眼観察では、紐の素材も土嚢に用いられているものとよく似ていた。土圧により潰れていたが、土嚢の中央部分に紐の結び目が明瞭に確認できた。

土嚢積の構造 ステージ7に認められた土嚢積の機能について所見を記す。ステージ7では、ステージ6の木製構造物を埋める堆積層の一部を掘削して、前面流路を設けていると考えられるが、土嚢積は、その流路の流芯部で確認された。ステージ6の北側土嚢積のように、斜面に斜め積みされたものではなく、流路の中央部を埋め戻すように平積みされている。このことから、護岸のために積まれた



第IV-5-42図 南側土囊積 土囊A~F平面

ものとは考え難い。したがって、流路の強度を高めるためのものか、軟弱な地盤において作業をするための足場を確保するなどの締め固めを目的に施工された可能性が考えられよう。

ステージ 8 (木製構造物 2・9・10) [第IV-5-43・44 図]

ステージ 8 での木製構造物は部分的な構築に留まるもので、延長距離は約 6 m、使用されていた杭材も 43 本と少ない。主軸角度は N-20°~30°-E で、大きく東に傾いている。横木は垂直方向の重なりを持たず、1.5m ほどの幅で平行するように設置されていた。上部杭の設置角度も 5° 前後で、ほとんど傾斜を持たない。他の木製構造物と異なり、川表となる西側斜面に構築されたものではなく、土堤状の構造物の上部を被覆するもののようにもみえた [第IV-5-43 図]。

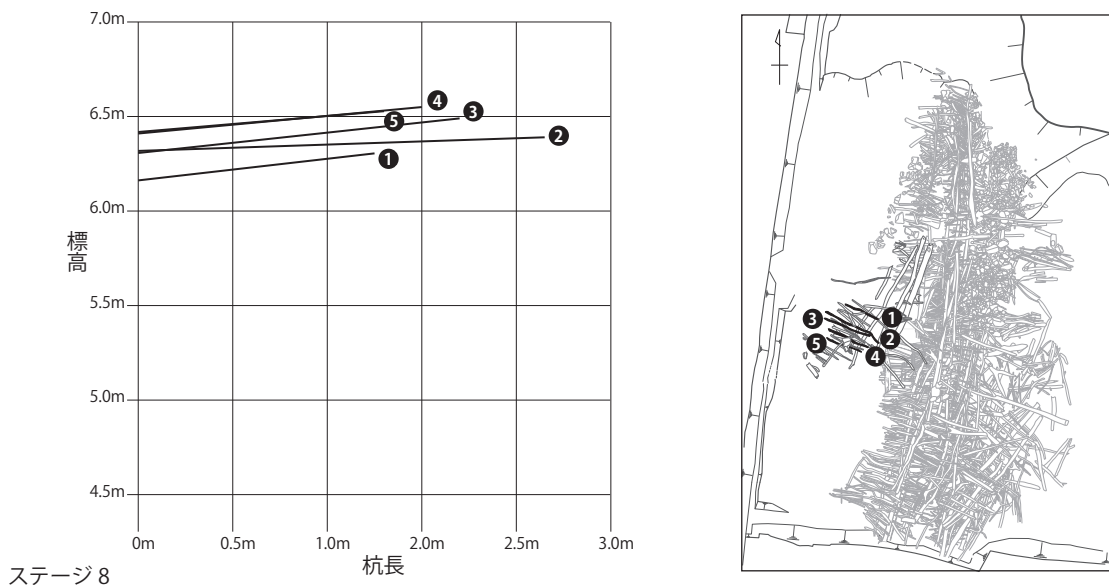
木製構造物の北端は、ステージ 7 の構築単位 H に接続すると考えられたが、南端の X = -57,553 ライン以南には木製構造物が確認できなかった。これはステージ 7 における大規模な盛土造成によって、特に南の方で導水径路が大きく西に移動したことを示唆するものとみられる。また、当ステージの木製構造物の主軸が東に偏ることは、そのさいに移動した前面流路の径路を間接的に示すものと推測する。なお、ステージ 8 段階における前面流路の底面標高は約 6.1 m である。

ステージ 9 (木製構造物 5・9・16) [第IV-5-45・46 図 第 2 分冊図版 69-2・70-1]

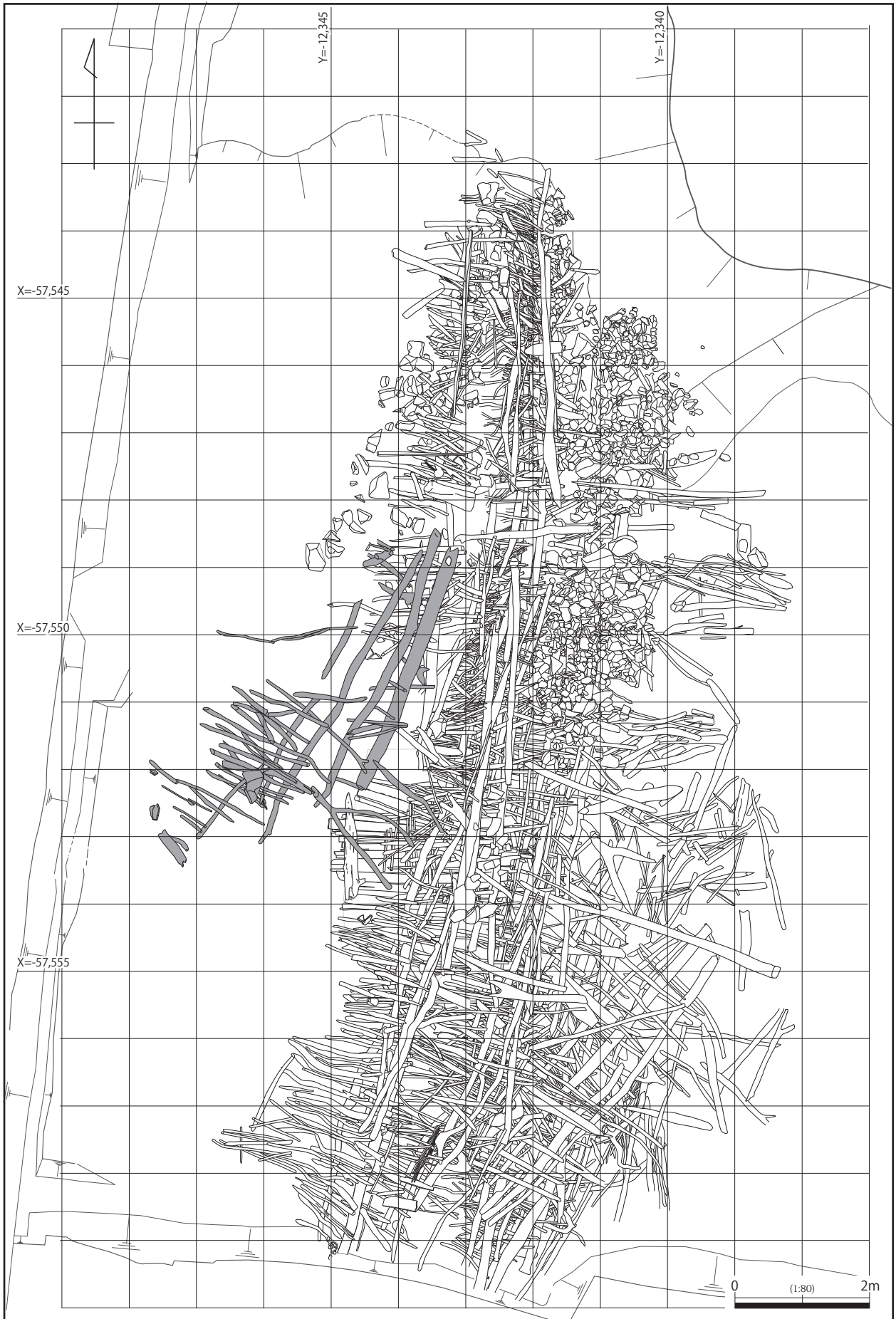
ステージ 9 段階には、4 落ち込みの北端から南方向に延びる木製構造物が新しく構築されていた。X = -57,553 ライン付近を南端とし、ステージ 8 段階までに構築された木製構造物と盛土を維持しながら、その上部に新しく木製構造物が構築された状況がうかがわれた。

ステージ 9 段階に構築された構造物の延長距離は約 11 m を測る。しかし、明瞭な構築単位は確認できなかった。ただし、X = -57,547 ~ 550 ラインの間には、南北方向の横木が重なっていることから、この付近で構築単位を分けることも可能である。使用されている杭材は 134 本。杭の設置角度は北側ほど急角度で、南側に向かって緩くなる [第IV-5-46 図 第 2 分冊図版 70-1]。

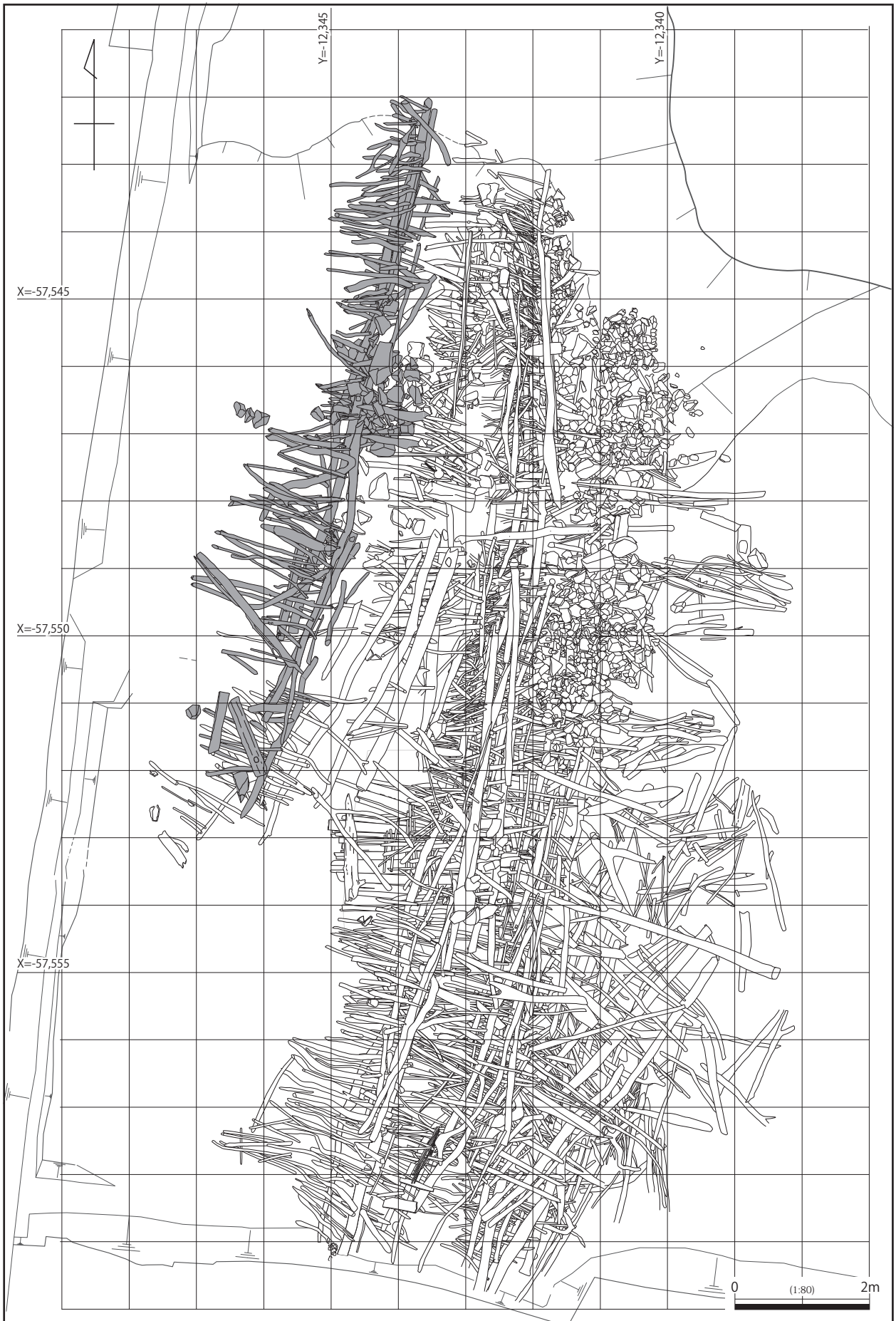
木製構造物の主軸は、N-15°-E で、わずかに東に傾くが、直線的に構築されている。直線的な構築は、その後、ステージ 12 段階まで踏襲されている。したがって、ステージ 9 以降、導水経路の変化があっ



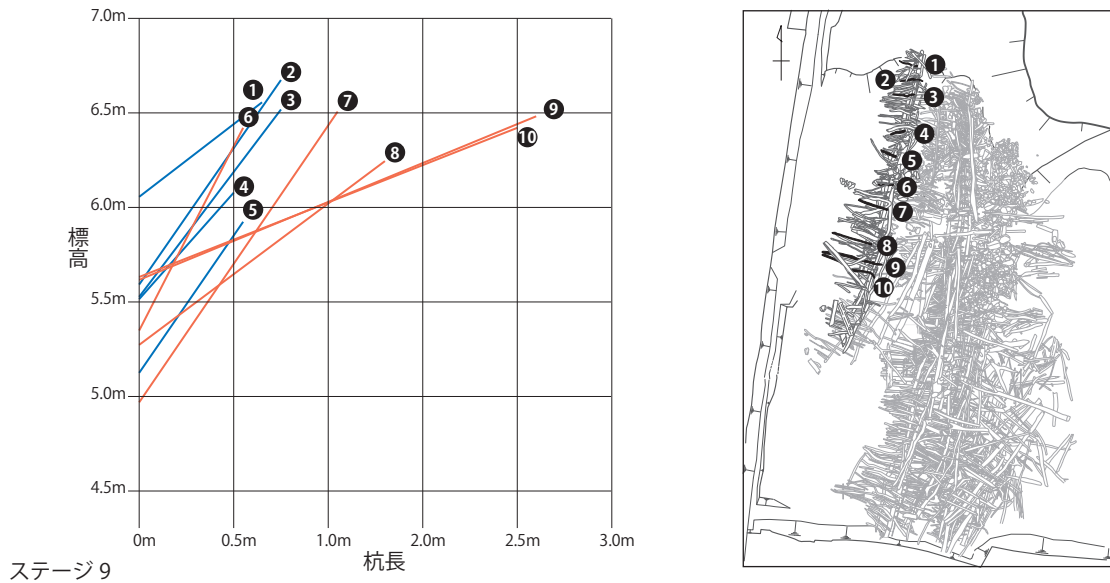
第IV-5-43図 ステージ 8 杭設置角度



第IV-5-44図 ステージ8平面



第IV-5-45図 ステージ9平面



第IV-5-46図 ステージ9杭設置角度

たことがうかがわれる。

ステージ10 (木製構造物 8・11・12) [第IV-5-47 図]

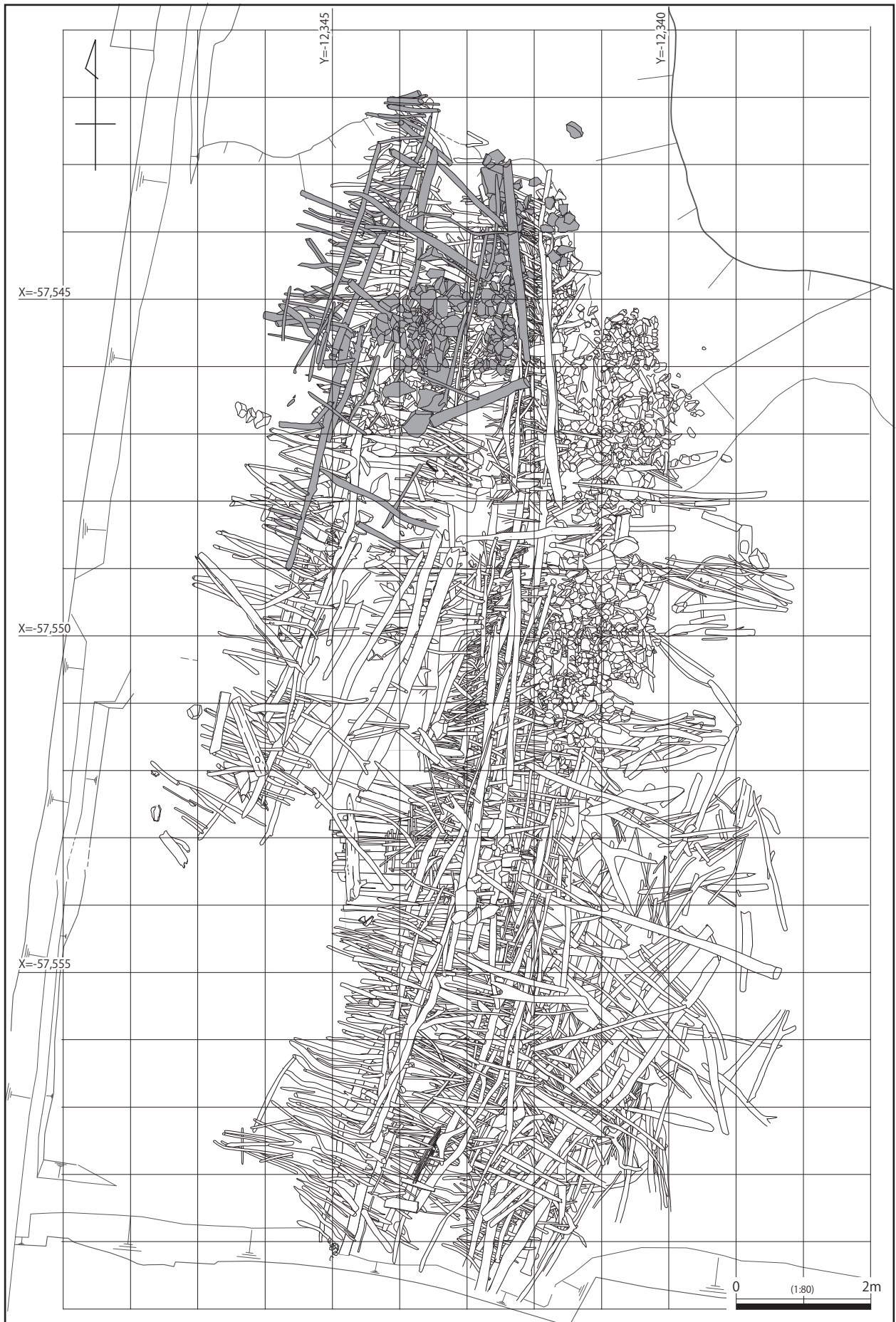
ステージ10段階のものと理解したのは、ステージ9段階の木製構造物の北半分 (X = -57,549 ライン以北) に構築された木製構造物である。主軸は N-16°-E で、ステージ9段階とほぼ共通している。ステージ10段階に特徴的なのは、木製構造物が西側斜面だけでなく、ステージ9段階までに構築された木製構造物の上部を覆うように凝灰岩の角礫や木材が設置されていることである。その様子はステージ8段階における木製構造物の設置状況に似ている。これらの上部構造物は、堤防の馬踏み (通行用に設けられた平らな部分) とも理解できる場所に構築されており、前ステージに構築された構造物を破壊していない。

ステージ11 (木製構造物 1・7・8) [第IV-5-48 図]

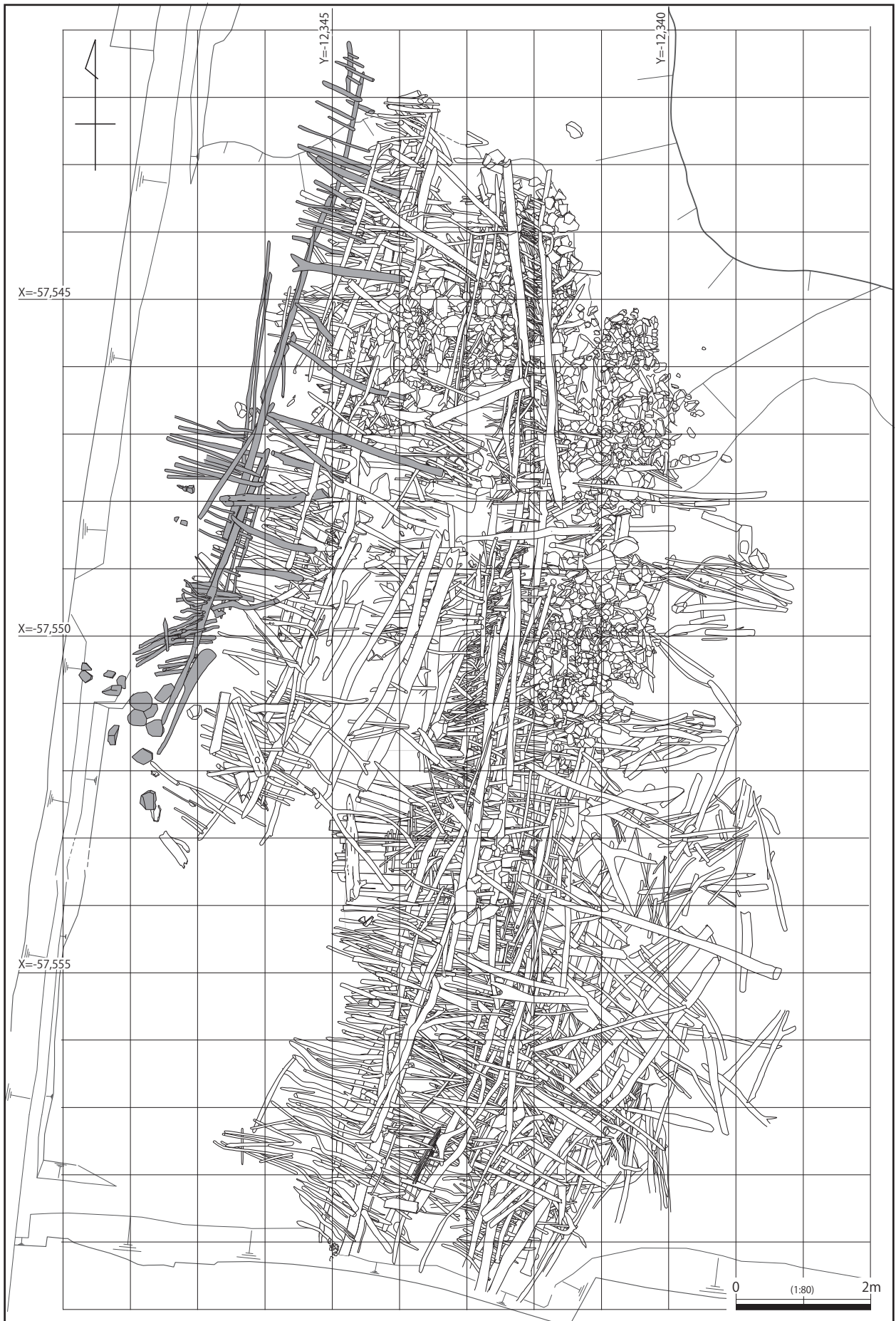
ステージ11段階には、4落ち込み北端から X = -57,552 ライン付近まで、直線的に木製構造物が構築されていた。延長距離は約 11 mであった。主軸は N-17°-E で、ステージ9・10段階の木製構造物と同様であった。使用されていた杭材は 63 点と少ないが、木製構造物後方の支持材と考えられる縦木は 12 本あり、他の木製構造物に比べて多く設置されていた。木製構造物の南端にのみ、角礫が散乱していたので、本来は、この付近に積まれていた可能性がある。

ステージ12 (木製構造物 1・4~6・8・14) [第IV-5-49・50 図 第2分冊図版 70-2 ~ 72-1]

ステージ12段階には、4落ち込み北端から、調査区の西端にかけて木製構造物が構築されていた。延長距離は約 12 mを測る。さらに南西に延びるかもしれないが、木製構造物の南端で、横木が途切れていることから、その周辺で端部と考えられる。使用されていた杭材は 102 本を数える。縦木は 1 本も確認できなかった。主軸は N-17°-E で、ステージ9以降の木製構造物と同様となる。南側では、段階的に構築された状況が想定できるが、下部の杭と上部の横木が接しており、大きな時間差は見出



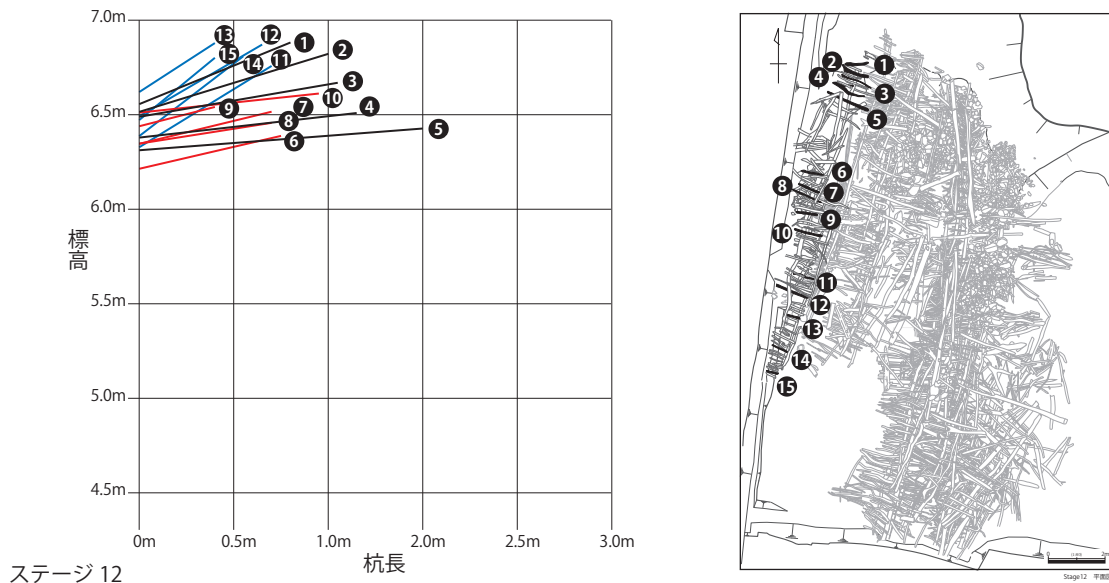
第IV-5-47図 ステージ10平面



第IV-5-48図 ステージ11平面



第IV-5-49図 ステージ12平面



第IV-5-50図 ステージ12杭設置角度

しがたい。構築単位を明瞭に把握することはできなかったが、おおよそ3つくらいの構築単位が想定される。3単位とも杭の設置角度は緩やかで設置標高は高い〔第IV-5-50図〕。ステージ12は、4落ち込みと2溝が埋没する直前の最終段階の木製構造物であり、累重しながら埋没してきた前ステージまでの木製構造物を基に構築された状況がうかがわれる。

放射性炭素年代測定

ステージ12の杭材2点について、炭素年代測定を行った〔第IV-5-49図〕。測定結果の詳細は第八章第1節を参照いただきたい。資料3 (PLD-17672) は、炭素年代で $1,714 \pm 21$ (yrBP)、較正年代 (2σ) は 255 ~ 394AD を示す。資料4 (PLD-17671) は、炭素年代で $1,749 \pm 21$ (yrBP)、較正年代 (2σ) は 235 ~ 351AD を示す。ステージ2の杭の分析結果と比較すると、炭素年代にしておよそ100年ほど新しい時期幅が示される結果となった。

④2溝接合部に設けられた盛土遺構〔第IV-5-51 ~ 60図 第2分冊図版73・74〕

4落ち込み内に累積する木製構造物は、遺跡の北方へ水を導くため設けられた施設の躯体と理解できる。さらに、木製構造物は、水の浸食による破損や、土砂による埋没の度に補修や改築が繰り返された結果、水路が西方向へ移動している。一方、4落ち込みから北方に延びる2溝は調査地内を200m以上にわたって縦走している。4落ち込み内の木製構造物のような単位が見えないので、廃絶するまでの過程を詳細な段階としてとらえることはできていないが、やはり2溝も途中、浚渫や再掘削により機能の維持が図られており、基本的に4落ち込みと一連の変遷をたどる可能性が極めて高い。

そして、4落ち込みと2溝との接続部付近では、盛土遺構が2基（盛土遺構1・盛土遺構2）検出された〔第IV-5-51図〕。盛土遺構1・2は、2溝の一部を埋め戻すようにして、それぞれ東岸、西岸に構築されているが、正対せず南北にずれている。両者は同じ砂礫層によって覆われており、最終的に埋没するさいには、並存し、同時に機能していることがわかる。したがって、最終的に4落ち込みから2溝内に導かれた水は、この盛土遺構の間を蛇行していたことがわかる。また、盛土遺構を覆う砂礫層からは、小型丸底壺〔第V-13-3図31〕のほか、高床建物の束柱と考えられる建築部材が出土

した（本弓Ⅱ第IV-5-4図11）。

盛土遺構の調査では、最初に上部に堆積した砂礫層を除去し、盛土遺構の平面形を確認した後に、断ち割りをを行い、盛土の断面観察を行った〔第IV-5-54～56図 第2分冊図版73-2〕。ただし、盛土遺構2については、調査地の西端に一部を確認できた程度で、詳細を把握することはできなかった。

盛土遺構1〔第IV-5-53～59図〕

断面観察を行うための断ち割りは、東西方向に2本、南北方向に1本設定した。ただし、湧水による崩落によって、記録を十分に作成できなかった場所もある。また、調査中に、誤って盛土の上部を掘削してしまった場所もあり、盛土遺構上面には記録が不十分な部分がある。

断面観察では、ラミナが顕著に確認される自然堆積層を挟在しながら盛土が施される状況を確認した。盛土遺構1については、少なくとも5回におよぶ段階的な構築の過程を復元できる。また、盛土遺構1が、ステージ3段階で4落ち込み北側に造成される突堤状遺構を拡張する形で造成されていることも観察できた。したがって、ステージ3段階に設置された突堤状遺構については、盛土遺構1の初現的な遺構と評価できよう。

なお、5回におよぶと考えられる盛土遺構1の構築過程の各段階における平面形を把握することはできなかったが、断面観察によって把握できた盛土遺構1の構築過程を、以下、盛土遺構1-1～1-5とし、その基になる遺構と考えられる突堤状遺構の構築から、順をおって、所見を述べる。

また、盛土遺構1の構築は、4落ち込み内の木製建造物の構築状況と密接な関係性を持つ。第IV-5-57～59図は、それらの変遷過程を整理したものである。

突堤状遺構 4落ち込み内のステージ3段階に構築されたもので、4落ち込みの北側法面から南側に向かって張り出している。上部には凝灰岩の角礫が敷かれていた（北側石積）。X=-57,540ライン上で図化した第IV-5-55図には、2溝の東岸の肩から張り出す盛土層（23・24層）が確認できる。西方の22層との間が流芯となっていたと可能性が高い。湧水によりこれ以下の断面確認はできなかったが、2溝の底面標高は約6.0mであった。100m北方に位置するX=-57,440ラインにおいても、2溝の底面標高は約6.0mなので、4落ち込みと2溝の間には、ほとんど高低差が設けられていない。

なお、この突堤状遺構は、南方に構築されているステージ3段階の木製建造物と接続しており、この段階において4落ち込み内が、東西に分割されていたことになる〔第IV-5-53図①〕。ステージ4段階には、南方に設けられた木製建造物の上部も角礫で覆われており（南側石積）、標高の低くなる南北の石積の間が、4落ち込みを東西を結ぶ水路となっている可能性がある〔第IV-5-53図②〕。

2溝への導水経路として機能する4落ち込み西側に対して、東側は渇水時のための貯水や、逆に増水時に水量を調節するための機能が想定されるが、その実態は確認できなかった。

盛土遺構1-1 ステージ3段階に設けられた突堤状遺構の裾を拡張するように施された盛土である。前段階の突堤状遺構の裾の流路を埋め戻すようにして、砂礫を挟在する盛土層が確認できる〔第IV-5-55図19～21層〕。この盛土により、2溝の流芯は西方向に移動しており、さらに底面の標高が6.3～6.4mまで上昇している可能性が高い。

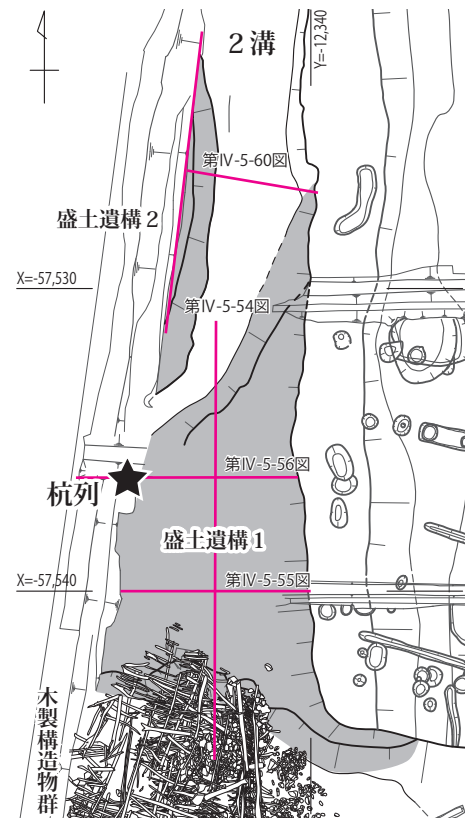
南北方向の断面〔第IV-5-54図〕では、この段階の盛土層（29層）が2溝底面に堆積した砂礫層（36・37層）を覆っていた。この断面の南端には、4落ち込みの北側斜面がかかっており、斜面上部には斜めに積まれた土嚢があった（ステージ6段階に構築された北側土嚢積）。調査中に、X=-57,543～544ライン付近で断面が崩落したため、図化できなかったが、調査中には29層と北側土嚢積の直下に確

認められた盛土層（32～35層）との間に、砂礫層などの挟在は認められなかった。したがって、これらは同一の盛土層として捉えられることができる。

また、ステージ6段階の構築単位E・Fでは、木製建造物の前面を掘削して杭を立ち並べ、その上に被覆材と盛土を何重にも施していた。繰り返すが、ステージ5段階までと比べて、ステージ6段階には大規模な改修が行われている状況がうかがわれる。盛土遺構1-1の斜面上に積まれた土嚢は、そのさいに、水の浸食を受けやすい盛土遺構の法面を強化するために導入された工法であろう。

盛土遺構1-2 盛土遺構1-2は盛土遺構1-1の裾部を拡張するもので、X=-57,536ラインの断面〔第IV-5-56図 第2分冊図版73-2〕では、2溝の底部を埋め戻す土層（26・27層）がある。これにより、2溝の底面標高は約6.4mまで上昇していると考えられる。

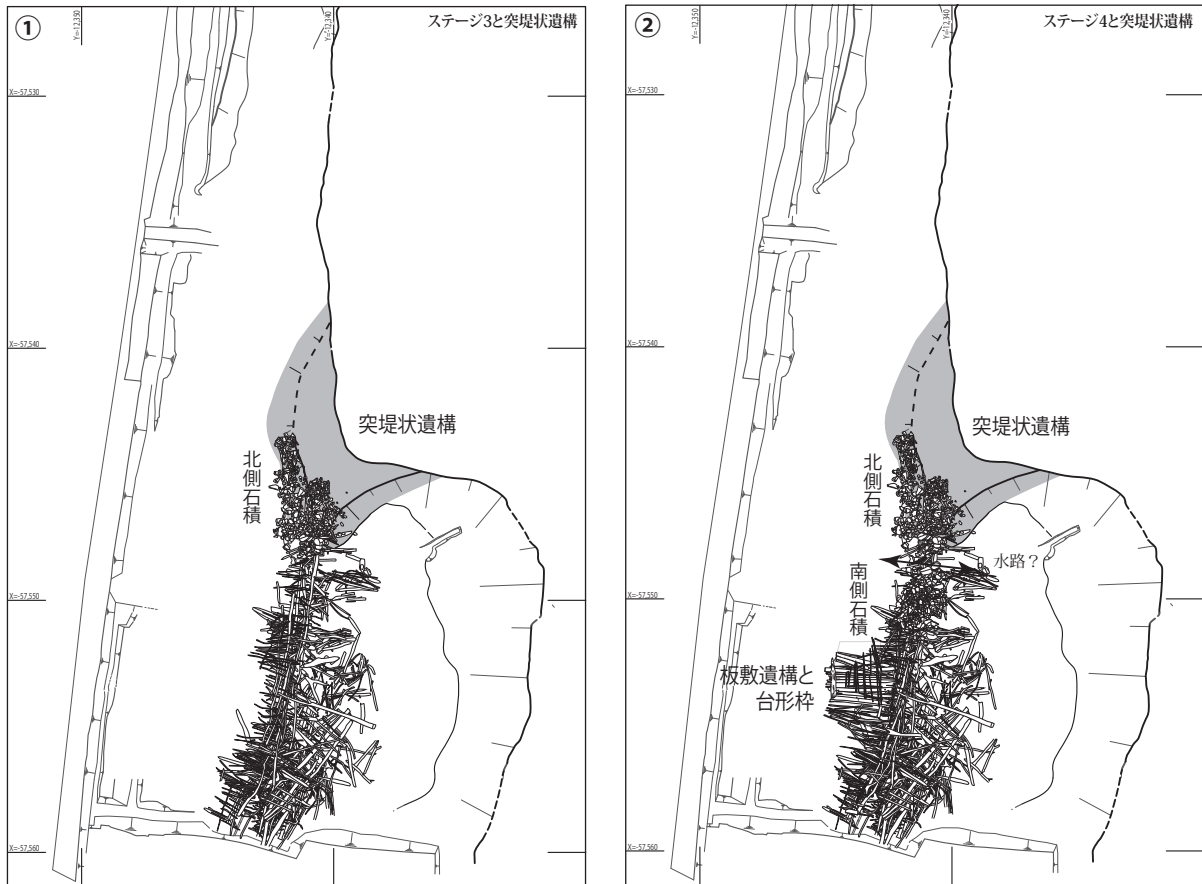
盛土遺構1-2は、ステージ7段階に相当すると考えており、



第IV-5-51図 2溝盛土遺構平面



第IV-5-52図 2溝盛土遺構1・2間 杭列遺物出土状況



第IV-5-53図 突堤状遺構と木製構造物

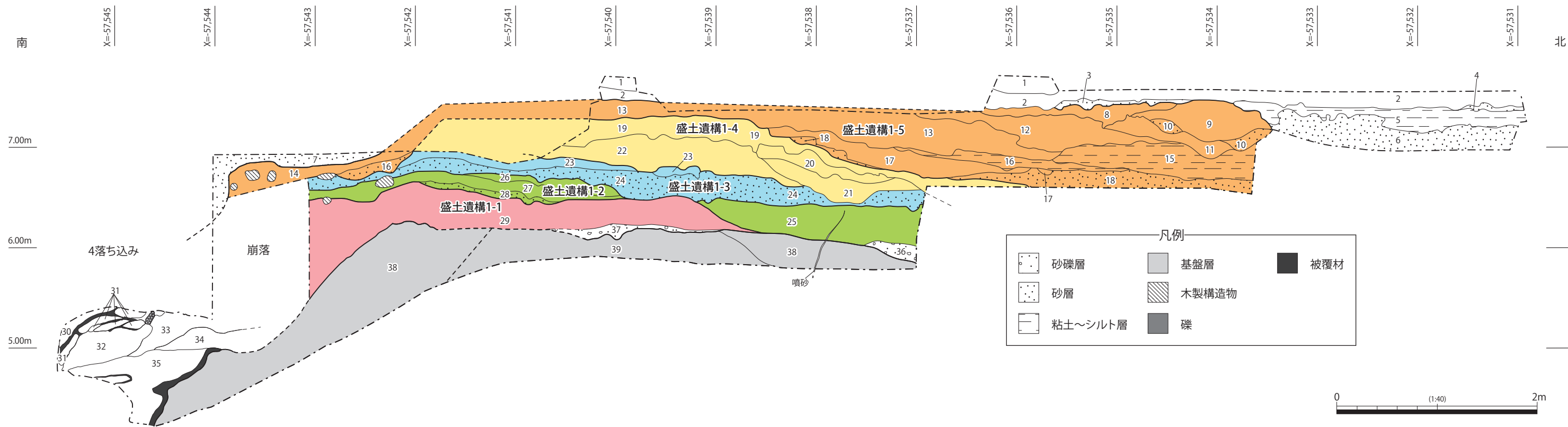
4 落ち込みの南半に大規模な盛土が施され、この段階に設けられた木製構造物の前面には土嚢が積まれている（南側土嚢積）。今回の調査で土嚢積が確認できたのは、ステージ6およびステージ7の段階であり、特に、この段階に土嚢を積み上げる工法が多用されていることがうかがわれる。

盛土遺構 1-3 盛土遺構 1-2 同様、あまり大きな造成は行われていない。盛土遺構裾部に盛土を施すことで、さらに2溝の底面標高が嵩上げされているようで、 $X = -57,536$ 、 $-57,540$ ラインともに底面の標高が約 6.4～6.5 mほどになっている可能性が高い。

盛土遺構 1-4 この段階にも、あまり大きな造成は行われていない。盛土遺構裾部への盛土によって、2溝の底面標高が嵩上げされており、 $X = -57,536$ 、 $-57,540$ ラインともに底面の標高が約 6.7 mほどになる。

盛土遺構 1-5 最終段階の盛土遺構である。西端は調査区外となるため確認ができなかった。この盛土遺構を覆う流路内堆積物は、4 落ち込み内を大規模に埋めた砂礫と共通する。この堆積物が供給されたことで、盛土遺構と木製構造物からなる水利施設が廃絶したことになる。

盛土遺構 1 の上面は、第 3-1-2a 層直下で確認され、埋没後に行われた耕地などにより、上部が削平されている。また、調査中に一部を誤って掘削した場所もあり、この調査で記録できた上面の高さはもともとのものではないが、土層断面から、盛土上部の標高は約 7.5 mほどだったと推測する〔第 IV-5-54 図〕。2溝の検出面標高は約 7.7 mである。もちろん2溝の上端も後世の耕作などの影響により本来の高さを維持していないが、盛土遺構 1-5 については、ほぼ2溝の上端と同じ高さまで盛土がなされていたのではないかと考える。



- 第2a層~第3a層 1 5Y6/1灰色~7/1灰白色 粗砂混じり粘土~シルト
- 第3a-1-2層 2 10GY4/1暗緑灰色 粗砂混じり粘土 (酸化鉄顕著)
- 3 10GY5/1緑灰色~8/1明緑灰色 シルト混じり粗砂 (西方粗粒化・明色化)
- 2溝堆積層 4 7.5GY5/1緑灰色 細砂 (ラミナ顕著)
- 5 10GY4/1暗緑灰色 粘土~シルト (部分的に粗砂含むが淘汰はよい。有機物を多く含む)
- 6 10GY4/1暗緑灰色 シルトと、5Y8/2灰白色 粗砂~細砂の互層 (部分的にラミナが転倒)
- 4落ち込み堆積層 7 5BG6/1青灰色 シルトと、5Y8/3淡黄色 細砂の互層 (南方ほど粗粒化)
- 8 10GY5/1緑灰色~8/1明緑灰色 シルト混じり粗砂 (西方粗粒化・明色化)
- 9 5Y6/1灰色 細砂~粗砂 (ブロック土多く含む。特に下方に多い。盛土肩部の崩落土をかき上げた二次盛土)
- 10 5Y7/2~8/2灰白色 粗砂~細砂 (部分的にラミナあり)
- 11 5Y7/2灰白色 粗砂と、10G6/1緑灰色 シルト~粘土の混土
- 盛土遺構1-5 12 5Y7/2灰白色 粗砂~シルト (ブロック土多く含む)
- 13 5BG6/1~5/1青灰色 粗砂~粘土 (ブロック土多く含む)
- 14 10GY6/1緑灰色 シルトと、5Y8/1淡黄色 細砂~粗砂の混土
- 15 10G5/1緑灰色 シルトと、5Y8/2灰白色 粗砂~細砂の互層
- 16 10GY5/1~6/1緑灰色 シルト (木質遺物を層状に含む)
- 17 5BG6/1青灰色 粘土~シルトと、5/1青灰色 粗砂~シルトの混土
- 18 5Y8/2~7/2灰白色 細砂 (部分的にラミナあり)
- 盛土遺構1-4 19 5BG5/1青灰色 粗砂~粘土 (ブロック土多く含む)
- 20 5BG6/1青灰色 粘土 (ブロック土多く含む)
- 21 5BG5/1青灰色 粘土混じり粗砂 (ブロック土多く含む)
- 22 10G5/1緑灰色 シルトと、5Y8/1~8/2灰白色 粗砂~細砂の互層 (偽礫含む)

- 盛土遺構1-3 23 10G6/1緑灰色 シルトと、5/1緑灰色 粗砂~シルトの混土
- 24 10GY5/1緑灰色 シルトと、5Y8/1灰白色 粗砂~細砂の互層
- 25 10GY5/1緑灰色 極粗砂混じり粘土 (直径2cmまでの礫を含む)
- 盛土遺構1-2 26 10G5/1緑灰色 シルト (ブロック土含む)
- 27 5BG6/1青灰色 粘土と、10GY4/1暗緑灰色 粗砂~粘土の混土 (直径1.5cmまでの礫を東方に多く含む)
- 28 7.5GY5/1緑灰色 シルトと、8/1明緑灰色 細砂との互層 (ラミナ顕著。部分的にブロック土と崩落土含む)
- 盛土遺構1-1 29 5BG6/1青灰色 粘土と、7.5Y7/1~8/1灰白色 細砂~粗砂の混土
- 30 5BG6/1青灰色 粘土と、10GY4/1暗緑灰色 粘土の混土
- 4落ち込み 31 10G6/1 緑灰色 シルトと、5/1 緑灰色 シルトの混土 (土嚢充填土)
- 肩部盛土 32 5G4/1 暗緑灰色 シルトと、6/1 緑灰色 シルトの混土 (ブロック土多く含む。層中にシルトの薄層があり土嚢積みの可能性がある)
- 33 5BG6/1 青灰色 粘土に、10G 6/1 緑灰色 シルト~粘土がブロック状に混じる
- 34 5BG5/1 青灰色 シルト~細砂に、6/1 青灰色 粘土がブロック状に混じる
- 35 5G4/1 暗緑灰色 シルトと、6/1 緑灰色 シルトの混土 (ブロック土多く含む)
- 2溝堆積層 36 10GY8/1明緑灰色 礫~粗砂 (ラミナ見えない。径2cmまでの礫を含む)
- 37 5BG7/1明青灰色~4/1暗青灰色 礫混じり極粗砂~細砂 (ラミナ顕著。偽礫を含む)
- 基盤層 38 10BG7/1明青灰色 粘土
- 39 10G6/1緑灰色 細砂~シルト (部分的にラミナあり)

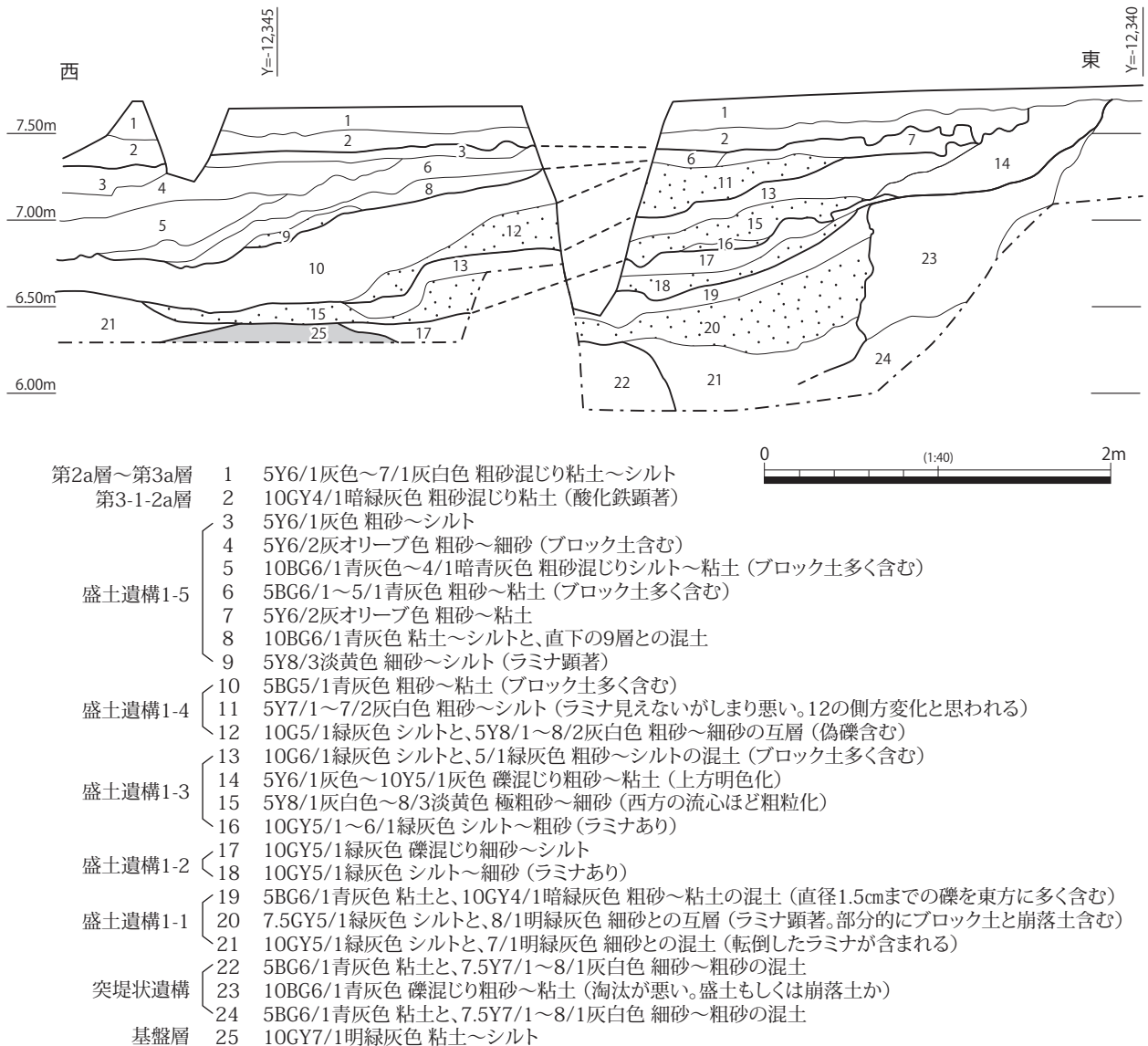
第IV-5-54図 2溝南北土層断面 (Y=-12,343ライン)

南北方向の平面規模は、4落ち込みの肩部から北に向かって約18mを測る。水利施設としての機能が絶える直前には、大規模なものとなっていることがわかる。平面の形状は不定形で、2溝東肩から西に向かって突き出し、突堤状を呈している。北側は盛土遺構2と向き合っており、2溝内の流路幅を狭めている。

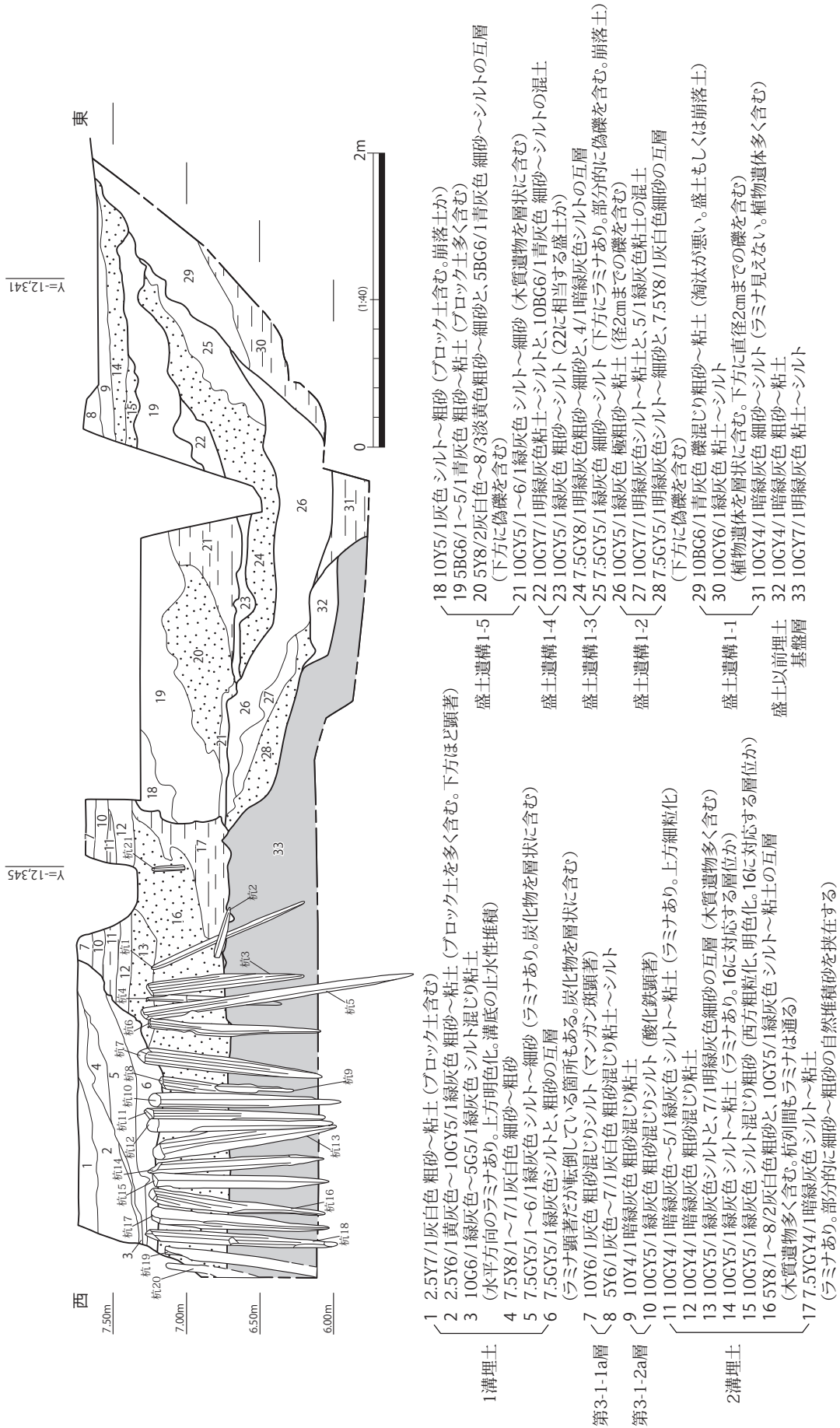
杭列

盛土遺構1に伴う杭列を検出した。杭列は2溝を横断するように、東西方向に設置されていた〔第IV-5-52・56図 第2分冊図版74〕。杭には、粗くミカン割りされた材が用いられており、垂直方向に深く打設されていた。ただし、杭は横一列に打設されるのみで、これに伴う横木などはない。また、杭を埋める堆積層（第IV-5-56図16層）は、杭を介して南流側と北側に連続しており、ラミナが観察された。

この杭列の機能については判然としない。4落ち込みから2溝に流れる水位を調整するためのものとも考えられる。しかし、検出できたのは、調査区西端の一部であり、全容がわからないことから確定できない。また、杭が打設されたのは第IV-5-56図33層であり、このときの底面標高は約6.7mとなる。



第IV-5-55図 2溝東西・盛土遺構土層断面（X=-57,540ライン）



第IV-5-56図 2溝東西・盛土1・杭列土層断面(X=-57,536ライン)



第IV-5-57図 盛土遺構1-1・1-2と木製構造物

盛土遺構2〔第IV-5-60図〕

盛土遺構1の北側にある。調査区西端に一部が検出できたにすぎず、その大部分は調査区外にあると考えられる。盛土遺構1と同様に東西、南北方向に断ち割りを入れて断面観察を行ったが、位置的な制約から観察が一部に止まり、構築の過程は把握できなかった〔第IV-5-60図〕。

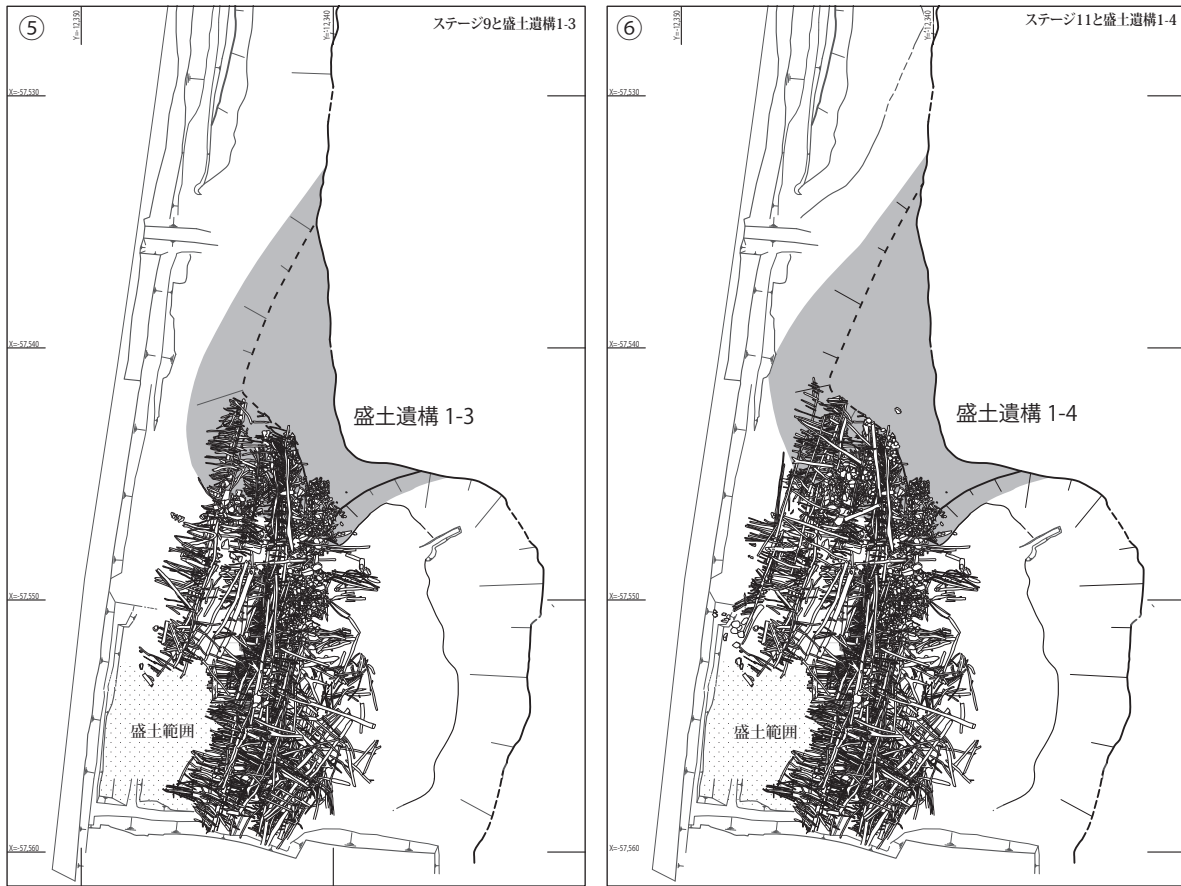
同じ砂礫層で埋没していることから、盛土遺構1の最終段階である盛土遺構1-5と、盛土遺構2が同時に廃絶していることは疑いない。溝内の施設として同時に機能していたものと考えられるが、盛土遺構1で想定された5次にわたる構築段階のうち、どの段階で当遺構が構築されたのかは定かではない。

⑤出土遺物

4落ち込み内における遺物の取り上げと出土状況について概略する。出土した遺物のうち、土器、石器については本書第3分冊、木製品については『本高弓ノ木遺跡（5区）Ⅱ』を参照いただきたい。

さて、4落ち込みにおける調査では、出土した遺物を、上層（第IV-5-11図16～19層）、中層（第IV-5-11図20、21層上部～30層）、下層（第IV-5-11図21層下部、各構造物内基盤層直上）に分けて取り上げを行った。また、木製構造物の解体に伴い出土した土器などは、各構造物単位で取り上げを行った。その他、盛土遺構に伴う遺物も区別して取り上げを行った。

土器〔第V章第13節第2項〕 出土量は、4落ち込みに接続する2溝に比べると少ない。さらに、古い時代の土器が多く混入しており、4落ち込みの構築、機能、廃絶の時期を示すものは、その中の



第IV-5-58図 盛土遺構1-3・1-4と木製構造物

一部にすぎない状況であった。4落ち込みに本来伴うと考えられるのは、古墳時代前期中葉の土師器であるが、堆積過程の中で混入した縄文時代～弥生時代後期の土器も含まれる。特に周辺で遺構が検出された弥生時代中期から後期の土器が多い状況にあった。実際、4落ち込みに切られる弥生時代前期中葉の土器を伴う420溝や、後期前葉の土器を伴う5溝出土の土器と、4落ち込みから出土した土器片に接合関係が確認できた。

各構造物、盛土遺構、中層、下層から出土した土師器には甕の破片が多く、その他に、壺、高杯、低脚坏などがみられる。また、各構造物や各層から出土した土師器には、特に型式差が認められない。したがって、前期中葉の時間幅において、4落ち込みに水利施設が構築され、廃絶している可能性が高い。

木器〔『本高弓ノ木遺跡（5区）Ⅱ』第IV章〕 木製構造物には、ほとんど加工が施されていない杭材や丸太材の他に、もとは建築部材などとみられる転用材も多く使用されていた。また、各所から、盤などの容器類や、腰掛の脚部などの指物も出土した。こうした小型の木製品は、木製構造物の間や、挟在する砂礫層に埋没していたものが多い。なお、構造物に使用されている材については、古い段階の木製構造物ほど転用材の使用率が高く、木製品を含む傾向が看守された。ステージ4段階の構造物から出土した窓枠状の木製品や板敷きの部材を除けば、図示した木製遺物132点中、18点がステージ2段階に構築された木製構造物に絡んで出土したものである。また、木製構造物背面（東側）では、4落ち込みの底面付近〔第IV-5-11図21層下部〕から、臼や鳥形木製品が出土している〔第2分冊図版75-5～7〕。ただし、木製品についても土器と同様に弥生時代後期以前のものを含む可能性

が否定できない。

石器〔第IV章第2節〕 量は少ないが、石鏃、打製石包丁、磨製石包丁、叩き石などが出土している〔第2分冊図版75-8〕。これらは、4落ち込みに伴うものではなく、弥生時代後期以前のものと考えられる。

⑥ 4落ち込みに関連する若干の考察

以上、4落ち込み内に構築された木製構造物と、2溝との接合部に設けられた盛土遺構について調査の所見を述べた。

これらは、2溝と一体のもので、遺跡の北方に水を導くことを目的とした水利施設である可能性が高いと考えられる。4落ち込み、2溝ともに、構築されてから廃絶に至るまでの過程が、それぞれに把握できた。木製構造物が重複する4落ち込み内では、その過程を12におよぶステージとして整理できる。この変遷は、土砂の供給と、その上部などに再構築された構造物の単位によって把握できもので、変遷過程で、4落ち込み内の底面が上昇するとともに、構造物および水路が西方向へと移動していることが明らかになった。

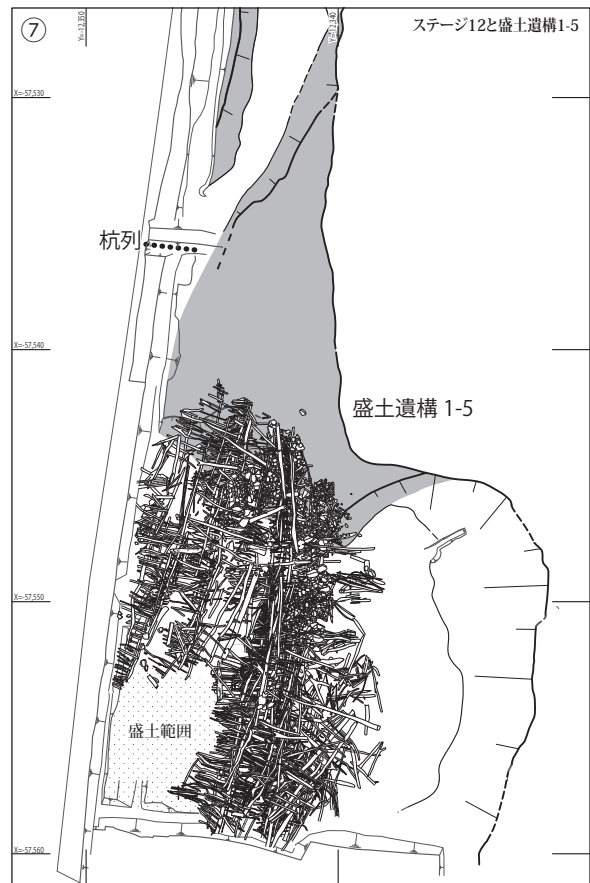
一方で、ステージ1～12として段階を把握した木製構造物の構築は、その間に、構造物が水の浸食や、供給される土砂による埋没によって、機能が維持できないほどの破損が生じたことを意味している。木製構造物の補修や改築が、その直前のステージに位置づけられる構造物の裾部にまで及んでいることから、各段階に行われた補修、改築は修繕的なものではないことが明らかである。

その場合、こうした作業は、4落ち込みに流入する水を止めた状態で行われることが推測される。そのためには、水元には水門などを伴う取水部があり、必要に応じて、4落ち込みへ引き込み、水量を調節していた可能性が高い。

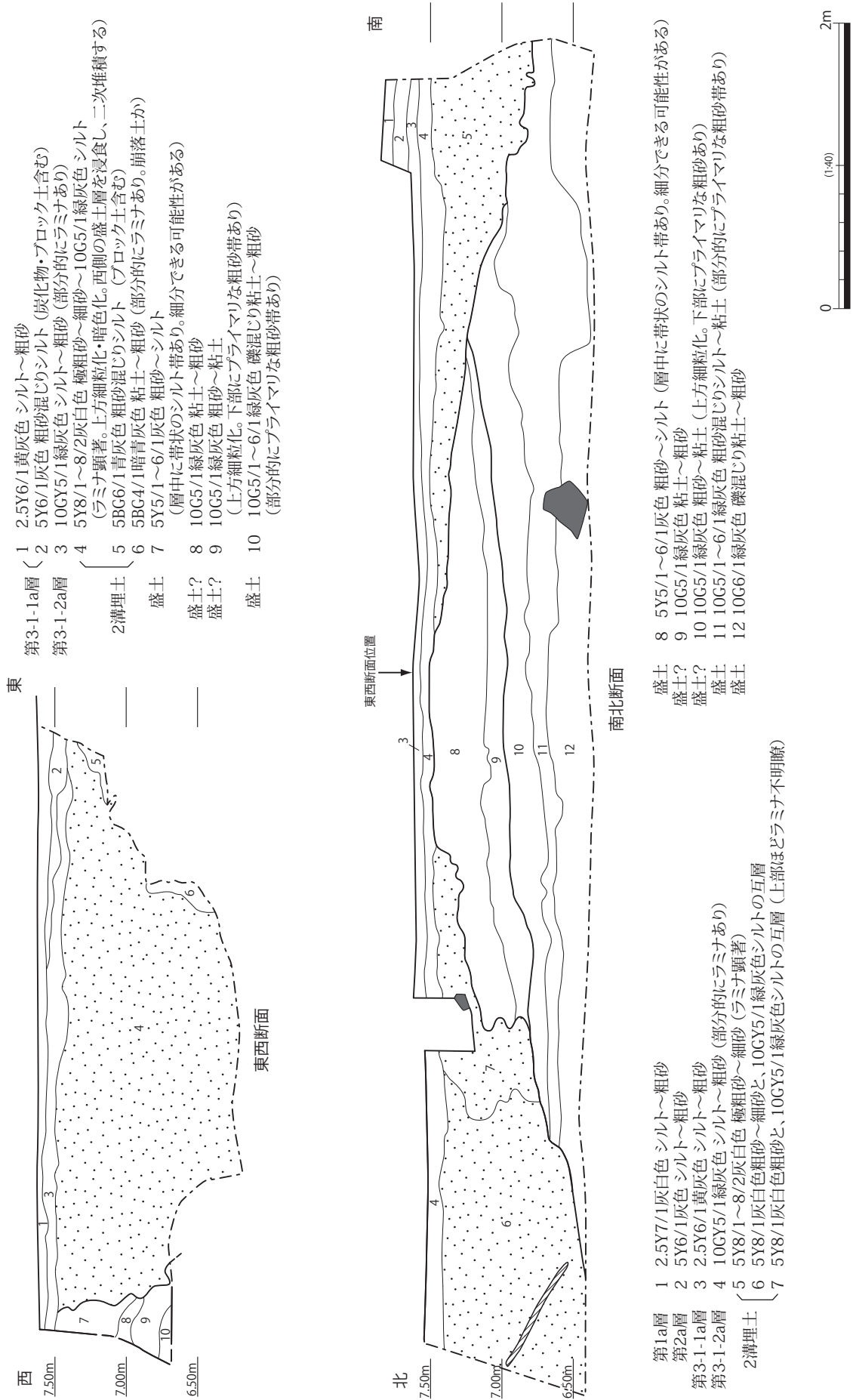
そして、こうした取水部の施設が存在するのであれば、増水時には、当然、水量の調整が行われていたものと考えうる。にもかかわらず、4落ち込み内の施設が、増水に伴う水の影響や、砂礫の供給により、被害を受けていることは、4落ち込みに水を導く水路が、氾濫もとなる河川に直結したものであった可能性がある。なお、度重なる被害を受けても、この施設が維持されていることは、この水利施設が、遺跡が所在する谷底平野の開発において重要な位置にあったことをうかがわせる。

また、木製構造物を躯体とする施設には、杭と横木の組み合わせの他に、股木を用いた支持工や、被覆材や土囊積みによる補強など、多様な土木技術が駆使されていた。こうした施設を構築し、一定期間、その機能を維持するためには、集約的な労働力が必要であることは想像に難くない。

以下、4落ち込みに構築された水利施設の構造と変遷について、全体的な概括を行うとともに、土囊積や板敷遺構について、調査担当者としての所見を述べておく。



第IV-5-59図 盛土遺構1-5と木製構造物



木製構造物の構造

調査では、4落ち込み内の水利施設が、激しい水流によって繰り返し損傷している状況が明らかとなった。盛土や被覆材は浸食されて遺存状況は悪く、本来の水利施設の形状を確実に確認できなかった。また、被害後に行われる復旧作業においても、破壊されたり、埋没している前代の水利施設に影響を与える形で改修が行われているため、各段階の水利施設がどのような形状であったのかを把握することは困難であった。

そうした状況の中で、木製構造物の構造と、構築単位の新旧を確認することを主眼とした調査を実施したところであり、木製構造物を躯体とする水利施設の変遷過程については、ある程度明らかにできた。最も古段階と想定されるステージ1については、木製構造物が破壊されており、その形状などを明らかにし得なかったが、ステージ2以降、4落ち込み内に土堤状の水利施設が設けられ、埋没の度に西方に移動（拡張）しながら10以上にわたって構築され続けた状況がわかる。

木製構造物の基本的な構築方法については、横木と杭を組合せ、盛土と草本の束などを主体とする被覆材を施したものである。弥生時代から古墳時代にかけての堰や護岸など、河川や水路に付随する水利施設の調査例は列島各地にあり、当遺跡の木製構造物はこれらと近似する構造を持っており、当時の水利施設としては一般的な構築方法に拠っているとみられる。木製構造物の大規模な累重についても、岡山県津寺遺跡〔木下1999〕のように、砂礫などの堆積物を挟んで複数の構築単位が累重する例があり、水利施設の浸食と埋没への対処としての補修や改築の結果と捉えることができよう。ただし、細部では特徴的な構造がみられる場所もあり、ここで触れておきたい。

木製構造物の段階的構築は、ほぼ同様の構築方法の繰り返しによるものだが、一部に段階ごとの特徴が確認できる。枝分かれした木材（股木）を用いて構築される支持工は、ステージ2・3に特徴的で、他にはみられない。ステージ6でも支持工6・7が確認されているが、横木に仕口や枝別れのある木材を直接組み合わせるもので、ステージ2・3のものとは構造が異なる。段階が下るほど、木製構造物の下や背面側に古い段階の構築物が累重することになるので、木製構造物を背面側から支える支持工法自体が不要になったのであろう。支持工に用いられる股木については、弥生時代から古墳時代にかけて当遺跡同様の木製構造物を確認している大阪府久宝寺遺跡でも多く出土しており、その構造については一定の検討がなされている〔(財)大阪府文化財調査研究センター1996・1998 島崎1997 本田1996〕。ステージ4では特徴的な板敷遺構がみられる。これについては、水利施設の躯体としての木製構造物とは構造も用材も大きく異なっており、何らかの特殊な機能もしくは用途を伴って設置された可能性が高いが、明らかにできなかった。また、同じくステージ4段階でみられる水利施設北側の南北石積は、その中央に開口部を持つことから、水利施設によって東西に分かれる4落ち込みを接続する水路整備の一環となっている可能性がある。構築物の上面全体を礫で覆うような構造はこの段階特有のものである。

ステージ5では、石積の西側に木製構造物が構築され、ステージ6で南北18m以上に及ぶ大規模な木製構造物が構築される。ステージ7以降には、南方の広い範囲で盛土がなされ、導水経路が大きく西遷したようで、ステージ8以降には木製構造物の構築は、 $X = -57,553$ ライン以北に限定されるようになる。木製構造物の主軸はより東に偏り、直線的に構築される。最終段階と考えられるステージ12になると、南北約12mにわたって構築される木製構造物の設置標高もかなり上昇し、上部の杭は、標高6.5～7.0m付近に集中する。設置位置からみても、ステージ1・2からは約8.5m西に移動

したことになり、導水経路の西遷はかなり大きい。

また、以上のような各段階の木製構造物の形状については、全てのステージにおいてではないものの、杭の設置角度から検討を試みた。設置角度については、各ステージの記述の中で図示し、記述したが、各杭の測量値については、第IV-5-2表に示しておく。

木製構造物の利用樹種

木製構造物の調査によって、取り上げた木材は3000点以上におよぶ。これらについては鳥取大学地域学部地域環境学科の中原計准教授の協力を得て、樹種同定を行った。その結果について、詳細は別冊の木器編で述べているが、概要は、木製構造物に利用された木材は、ヤブツバキが最も多く、ついでスギ、シイノキ属、タブノキ属が多い結果となっている。ヤブツバキの多くは樹皮のついたままの杭材であり、スギについては建築材などからの転用材がほとんどである。利用されている樹種は、平地や丘陵上など生育環境に偏りはなく、遺跡周辺の様々な場所から調達され、また建築材などを再利用していたと考えられる。

4 落ち込みの東西分断

4 落ち込み内に構築された木製構造物群の主軸は、おおよそ南北方向となっている。構築段階ごとの状況については先述したが、木製構造物の構築によって、ステージ3以降、4 落ち込みが東西に分断されている状況が確認された。木製構造物の前面となる西側については、2 溝への導水径路として機能していたことが考えられるが、木製構造物の背面となる東側については、どのような利用状況にあったのか明らかにできなかった。

4 落ち込みの東西方向の断面図〔第IV

第IV-5-2表 杭設置角度

	No.	上端標高	下端標高	比高差	水平距離	設置角度	角度範囲	角度平均		
ステージ2	①	6.066	5.209	0.857	2.10	22	16~22	17		
	②	6.020	5.415	0.605	1.90	18				
	③	6.080	5.546	0.534	2.15	14				
	④	6.095	5.526	0.569	2.50	13				
	⑤	6.231	5.582	0.649	2.20	16				
ステージ3	構築単位A	①	5.129	4.523	0.606	1.10	29	29~42	36	
		②	5.153	4.604	0.549	0.60	42			
		③	5.698	4.908	0.790	1.35	31			
		④	5.840	4.464	1.376	1.75	38			
		⑤	5.859	4.761	1.098	0.80	41			
	構築単位B	⑥	5.989	5.442	0.547	0.80	34	22~34	29	
		⑦	5.908	5.537	0.371	0.90	22			
		⑧	6.183	5.433	0.750	1.25	31			
		⑨	5.901	5.284	0.617	1.20	27			
		⑩	5.941	5.364	0.577	1.05	29			
ステージ5	構築単位C	①	6.100	4.924	1.176	0.65	61	55~76	63	
		②	6.293	5.111	1.182	0.30	76			
		③	5.874	4.915	0.959	0.53	61			
		④	6.030	4.669	1.361	0.95	55			
		⑤	6.031	4.489	1.542	0.90	60			
	構築単位D	⑥	5.796	4.462	1.334	0.80	42	13~42	24	
		⑦	5.653	4.740	0.913	1.50	31			
		⑧	5.603	5.206	0.397	1.40	16			
		⑨	5.568	5.280	0.288	1.25	13			
		⑩	5.510	5.167	0.343	1.00	19			
ステージ6	構築単位E	①	6.517	5.742	0.775	0.75	46	32~67	60	
		②	6.352	5.412	0.940	0.65	55			
		③	5.854	4.496	1.358	0.60	66			
		④	6.182	4.315	1.867	0.85	66			
		⑤	6.652	4.495	2.157	0.90	67			
	構築単位F	⑥	6.122	4.817	1.305	0.25	79	21~80	51	
		⑦	6.164	4.374	1.790	0.30	80			
		⑧	5.836	5.116	0.720	0.95	37			
		⑨	6.222	5.585	0.637	0.75	40			
		⑩	6.015	5.628	0.387	1.00	21			
	構築単位G	⑪	6.512	6.228	0.284	0.85	18	13~38	24	
		⑫	6.534	6.284	0.250	0.55	24			
		⑬	6.440	6.370	0.070	0.30	13			
		⑭	6.537	6.262	0.275	0.35	38			
		⑮	6.392	6.212	0.180	0.35	27			
ステージ7	構築単位H	①	6.144	5.521	0.623	1.20	27	27~60	47	
		②	6.154	5.543	0.611	0.70	41			
		③	6.089	5.394	0.695	0.40	60			
		④	6.043	5.282	0.761	0.55	54			
		⑤	5.936	4.772	1.164	0.95	51			
	構築単位I	⑥	5.625	5.085	0.540	0.90	31	20~33	29	
		⑦	6.084	5.208	0.876	1.35	32			
		⑧	6.031	5.175	0.856	1.35	33			
		⑨	6.281	5.178	1.103	2.30	20			
		⑩	6.260	5.337	0.923	1.65	30			
ステージ8	①	6.305	6.162	0.143	1.25	7	2~7	5		
	②	6.390	6.318	0.072	2.15	2				
	③	6.490	6.307	0.183	1.70	6				
	④	6.550	6.410	0.140	1.50	5				
	⑤	6.528	6.418	0.110	1.30	5				
ステージ9	構築単位J	①	6.556	6.056	0.500	0.65	38	38~56	51	
		②	6.674	5.592	1.082	0.75	55			
		③	6.518	5.527	0.991	0.75	53			
		④	6.078	5.515	0.563	0.50	56			
		⑤	5.924	5.125	0.799	0.55	55			
	構築単位K	⑥	6.241	5.349	0.892	0.55	63	21~63	40	
		⑦	6.507	4.969	1.538	1.05	56			
		⑧	6.245	5.273	0.972	1.30	37			
		⑨	6.482	5.617	0.865	2.10	22			
		⑩	6.421	5.632	0.789	2.00	21			
ステージ12	構築単位L	①	6.882	6.556	0.326	0.80	22	4~22	12	
		②	6.822	6.515	0.307	1.00	17			
		③	6.669	6.489	0.180	1.05	10			
		④	6.509	6.379	0.130	1.15	6			
		⑤	6.427	6.312	0.115	1.50	4			
	構築単位M	⑥	6.388	6.214	0.174	0.75	13	6~14	11	
		⑦	6.516	6.346	0.170	0.70	14			
		⑧	6.457	6.347	0.110	0.70	9			
		⑨	6.541	6.439	0.102	0.40	14			
		⑩	6.612	6.511	0.101	0.95	6			
		構築単位N	⑪	6.758	6.328	0.430	0.70	32	30~39	34
			⑫	6.871	6.492	0.379	0.65	30		
			⑬	6.879	6.620	0.259	0.40	33		
			⑭	6.809	6.387	0.422	0.55	38		
			⑮	6.801	6.472	0.329	0.40	39		

-5-11 図] をみると、4 落ち込み中央付近に設置された木製構造物が埋没と修復を繰り返しながら西方向に発達していく様子がわかる。しかし、その東側は砂礫で埋没するのみで、人為的な痕跡を見出すことはできなかった。これらの砂礫については規模の大きさと湧水により全体的な観察や検討が行えず、十分な記録化ができなかったが、全くの単一層ではなく、数次にわたる流水と堆積で形成されている。うち 20 層は、木製構造物が埋没した後に堆積した砂礫層と把握できたが、その下層の 21 層については、西側の堆積層との層序対比が行えず、どのようなタイミングで堆積したのか不明である。

木製構造物群全体を概観すると、木製構造物群の中を東西に横切るような杭が少なかったり、横木が途切れたりする場所が確認できる。また、木製構造物群の東側で目立つ石積みについても、その場所だけ開いた V 字形に落ち込んでいる [第IV-5-25 図 第2分冊図版 58]。こうした状況は、木製構造物の構築によって、4 落ち込み内が完全に分断されていたのではないことを示唆する。この東西ライン周辺では、流水による浸食痕跡と、それによって流失し二次堆積した杭が多く観察されており [第IV-5-33 図]、4 落ち込みの東西を結ぶ水路があった可能性が考えられる。また、数次にわたる木製構造物の構築段階に共通して東西ラインが確認できることから、木製構造物群の機能中は、導水経路として継続的に利用された可能性がある。ただし、水路を塞ぐように木製構造物が設置されている場所も確認され、導水経路は常時開口していたのではなく、必要に際して臨時的に利用された可能性を示している。周辺の調査が行われていない段階では、東西方向の導水経路が果たす役割について明らかにできないものの、堰などには「魚道」や「舟通」などの施設が設けられることがあり、こうした施設に類するものかもしれない。また、東側も含め、越流堤や余水吐きなどのような水利機能を持つ可能性もある。今回の調査では、機会を得ることができなかったが、遺跡でみつかると水利施設については、河川工学のような関連諸学の観点からも評価、再検討していく必要がある。

遺跡における土嚢の遺存とその利用法

既往の発掘調査における土嚢の検出例は、非常に稀である。第IV-5-3 表で示すように、検出例は古墳が圧倒的に多く、土嚢を用いた計画的かつ合理的な墳丘造成が想定されているが、古墳での検出例は、一定の単位（大きさ）を持つ「土塊」もしくは「粘土ブロック」などとされており、土を入れる、もしくはくるむ土嚢表面素材は確認されていない。土嚢積みである可能性は高いといえるものの、一定単位の土の塊を積み上げた可能性を完全に否定しきれないのも事実である。

工事現場において、大量に消費され使い捨てられる土木資材としての土嚢は、水田のイネや湿地のアシ類等、大量に入手でき、加工が容易なイネ科植物の草本類を用いて製作されていたと考えられるが、これらの植物繊維は脆弱で土中で分解されやすい。そのため長い年月にわたって遺存することはほとんどなく、古墳での土塊検出例はそうした状態を指すものと理解されている。

一方で、当遺跡のような低湿地に立地する遺跡の場合、多量の水分を含む砂礫や粘質土に密封されることで分解作用を受けずに遺存する場合がままあり、河内平野中央部に位置する亀井遺跡、新家遺跡での発掘例も同様の環境下において植物繊維が遺存したものである（江浦 1996 大阪府教育委員会 1994 (財)大阪府文化財調査研究センター 1995 小山田 1998)。また、大阪府狭山池の北堤断面においてみられる土嚢も、大規模かつ綿密な版築と、堤内の湛水による無酸素環境下で遺存したものと見える（小山田 2009）。

当遺跡で検出された土嚢は、古墳時代前期に遡る例であり、表面の素材を遺存する発掘例としては国内最古となるが、重要なのは単純な年代的価値だけではない。先述したように、発掘調査における

第IV-5-3表 土囊出土遺跡一覧

	遺跡名	所在地	年代	検出位置	検出状況
1	椿井大塚山古墳	京都府	3世紀末	前方後円墳・後円部墳丘	人頭大の粘土塊
2	亀井遺跡	大阪府	5世紀(中期末)	流路内堤体	植物層で巻かれた土塊(断面では網目状に確認)
3	藏塚古墳	大阪府	6世紀中頃	前方後円墳・後円部墳丘	人頭大の黒褐色土塊
4	瓦屋西古墳群(B3号墳)	静岡県	6世紀前半(MT15)	前方後円墳・後円部墳丘	人頭大の黒色土塊
5	瓦屋西古墳群(C5号墳)	静岡県	6世紀前半	前方後円墳・後円部墳丘	70×40×10cmの箱状に見える暗茶色土塊
6	大門大塚古墳	静岡県	6世紀前半	円墳墳丘	墳丘断面の楕円形土塊
7	晩田山古墳群(28号墳・30号墳)	鳥取県	6世紀末～7世紀初頭	円墳墳丘	墳丘断面の楕円形土塊
8	晩田山古墳群(29号墳)	鳥取県	6世紀末～7世紀初頭	円墳墳丘	墳丘断面の楕円形土塊
9	狭山池	大阪府	7世紀前半	溜池堤体	墳丘断面の楕円形土塊(周囲からイネの珪酸体)
10	屋代遺跡群	長野県	9世紀後半	水路内洪水砂層下部	大きな揃った土塊
11	新家遺跡	大阪府	14世紀後半～15世紀初頭	道路改良	三列に並んだ土俵群(表面のワラ?残存)
12	品寧校洞古墳群(1号墳・3号墳)	韓国 慶尚南道	5世紀前半	円墳墳丘	黒褐色粘土塊

土囊の確認例は、6世紀以降の古墳における調査が多くを占め、墳丘造成工事での土囊利用が想定される。しかし数は少ないものの、亀井遺跡と狭山池における調査例は、治水・利水工事に伴うもので、土囊積が墳丘造成のみでなく、大規模な土木工事において一般的に利用されていたものであることを示唆している。当遺跡の土囊積みは、そうした想定を裏付けるものであると同時に、その利用が広い地域にまたがっていたことを示す重要な発見と言え、土木技術史的観点からみて大きな意味を持つ。

また、『播磨国風土記』の揖保郡条では、以下のような興味深い記述が見られる。

(略)

御橋山 大汝命 積俵立橋 山石似橋 故号 御橋山

(略)

この記述からは、橋を作るような土木工事において、「俵を積む」作業が行われていたことが分かる。河川や湿地のように水流のある場所や低湿な場所にあっても、容易に土を積み上げ、締め固めることができる土木資材として「俵」が使用されたのだろう。現代における「土囊」の用語は、近代において麻や布などの袋が利用され、現代においてはポリエチレン製の袋が用いられていることで定着したものと考えられる。それ以前には、「米俵」のように円柱形状の両端を塞ぐ部材である「棧俵」を使用せず、側面部材となる「菰(こも)」の両端と中央部などを横に縛っただけの「吠(かます)」や「土俵」といったものが、簡素で合理的な土木資材として利用されていたのであろう。近世まで使用されていた「炭俵」は、棧俵を欠く構造であった(宮崎1985)。藁(むしろ)などの資材を使用した梱包材としては、棧俵を必ずしも必要としなかったことがうかがえる。むしろ、定量的な容器としての機能を付加した米俵の方が特殊な構造といえるのかもしれない。

土囊の簡素なつくりと工事における利便性から、土囊の使用は早くから一般的なものであった可能性が高い。当遺跡の土囊積は、土木資材としての土囊の使用が古墳時代前期において、畿内主要部だけでなく、国内各地で成立している可能性を示す好例といえよう。屋代遺跡群や新家遺跡の検出例は、後世に下るものではあるものの、土木工事や災害復旧に土囊が使用された実態を示すものといえる。

4 落ち込み木製構造物内から出土した台形枠について

ステージ4の説明で述べたように、特徴的な加工を持つ部材が、平面台形になるような配置で出土しており、建築部材としての形状を留めたまま廃棄もしくは利用されたと考えられる。ここでは、台形枠を建築部材と考える立場から、復元的検討を行いたい。

台形枠の出土状況は、部材の原位置をよく保ったものと考えられるが、土圧や後の段階での木製構造物の構築によって、部材が移動したり折損したりしている状況も看取できる。特にステージ5での

木製構造物の杭の下端は台形枠に接しており、この杭の設置によって台形枠の特に横方向となる部材の一部が原位置からずれた形となっている可能性が高い。

台形枠は呼称どおり、長さの異なる2組4本のタテ材（タテ材1～4）に段階的に長さを変えたヨコ材を組み合わせることで台形になるように組まれている。なお、タテ材となる可能性がある部材がもう1本出土（タテ材5）しているが、タテ材1～4に比較して短く細い。このため、基本的な構造とは認め難く、修復や補強などで入れられた補助材と理解している。タテ材の上部から出土したヨコ材は4本（ヨコ材1～4）でそれぞれ246、183、126、79cm。先端には削り込まれた括れがある。タテ材の下部から出土したヨコ材には、折れて原位置を留めないものも多く本数も明確でないが、おそらくは8本のヨコ材がある。それぞれ242（ヨコ材5+14+15）、240（ヨコ材13）、211（ヨコ材12）、174（ヨコ材11）、119（ヨコ材10）、91（ヨコ材9）、82（ヨコ材7+8）、63（ヨコ材6）cmとなり、上部のヨコ材と同じく段階的に長さを変えている。先端は斜めにカットされている。これらの材の組



第IV-5-61図 台形枠出土状況

み合わせを現地での出土状況〔第IV-5-61 図 第2分冊図版59〕とあわせて考えると、各部材によって上辺80cm、底辺245cm、高さ140cmほどの平面台形が構成され、斜辺の角度は約58°となる。

古墳時代の建物の中で、台形や三角形のような斜辺を持つ建築部材を想定するとき、勾配を持つ屋根材が候補に上がる。屋根材の中でも垂木や木舞などは、単独で斜辺を持つような構造にならないため、台形枠は屋根勾配が顕著に反映される場所に用いられる部材と考えられよう。竪穴住居では煙出し、掘立柱建物では妻側の部材が該当する。竪穴住居の煙出しにはめ込まれたとみられる部材の出土は管見にないが、掘立柱建物の妻側部材に関しては、県内遺跡で豊富な木製品出土量を誇る青谷上寺地遺跡の出土例がある。弥生時代中期から後期にかけての資料であるが、台形に加工された板材の出土があり、妻壁に使用されたことが推定されている。斜辺の角度は45～50°くらいで、屋根勾配を反映したものであろう。また、妻壁板端部角度に50°前後のグループと40°前後のグループの2種があり、前者は茅葺、後者は樹皮葺きと想定されている（鳥取県埋蔵文化財センター2007）。当遺跡で出土した台形枠の斜辺角度は58°であり、青谷上寺地遺跡の掘立柱建物のあり方とは異なっている。

引用・参考文献

- 上田健太郎2010「弥生時代の取水堰について」『先史学・考古学論究5』龍田考古会
- 上原真人編1993『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所
- 江浦洋1996「轍と開発 一新家遺跡「土俵敷き遺構」の再検討一」『大阪文化財研究』第10号
- 大阪府教育委員会1994『亀井遺跡発掘調査概要』
- 木下晴一1999「岡山市津寺遺跡の護岸施設の再検討」『古代吉備』第21集
- 岐阜県教育文化財文化財保護センター2005『柿田遺跡』
- 工楽善通1995「古代築堤における「敷葉工法」」『文化財論叢2』奈良文化財研究所
- 小山田宏一1998「亀井遺跡の堤と古代の治水」『古代探求』中央公論社
- 小山田宏一2009「天然素材を用いた土構造物の補強と保護」『狭山池博物館研究紀要6』
- (財)大阪府文化財調査研究センター1995『新家遺跡』
- (財)大阪府文化財調査研究センター1996『久宝寺竜華（その1）』
- (財)大阪府文化財調査研究センター1998『久宝寺竜華（その2）』
- (財)大阪府文化財調査研究センター1998『蔵塚古墳』
- 狭山池調査事務所1999『狭山池論考編』
- 島崎久恵1997「久宝寺遺跡出土の堰」『大阪文化財研究』第12号
- 本田奈都子1996「古墳時代の合掌型堰—久宝寺遺跡竜華地区検出例をもとに—」『大阪文化財研究』第10号
- 宮崎清1985『ものと人間の文化史55-I 藁I』法政大学出版局
- 山崎頼人2005「初期灌漑技術の発展過程I」『九州考古学』第80号 九州考古学会
- 山田隆一2009「大阪の水制—杭出し水制について—」『狭山池博物館研究紀要6』
- 大山町教育委員会ほか2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告IV』
- 寺内隆夫2002「更埴条里遺跡・屋代遺跡群に見る災害と開発」『国立歴史民俗博物館研究報告』第96集 国立歴史民俗博物館
- 東亜大学校博物館1992『晶寧校洞古墳群』
- 鳥取県埋蔵文化財センター2007『「楼観」再考』

中島正 1999 「椿井大塚山古墳の築造過程」『東アジアの古代文化』99号

浜松市博物館編 1991 『瓦屋西古墳群—A・B・D群、瓦屋西I遺跡』

浜松市博物館編 1991 「瓦屋西C古墳群」『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳』

淀江町教育文化事業団 2000 『妻木晩田遺跡』

第2項 土坑

746 土坑〔第IV-5-62 図〕

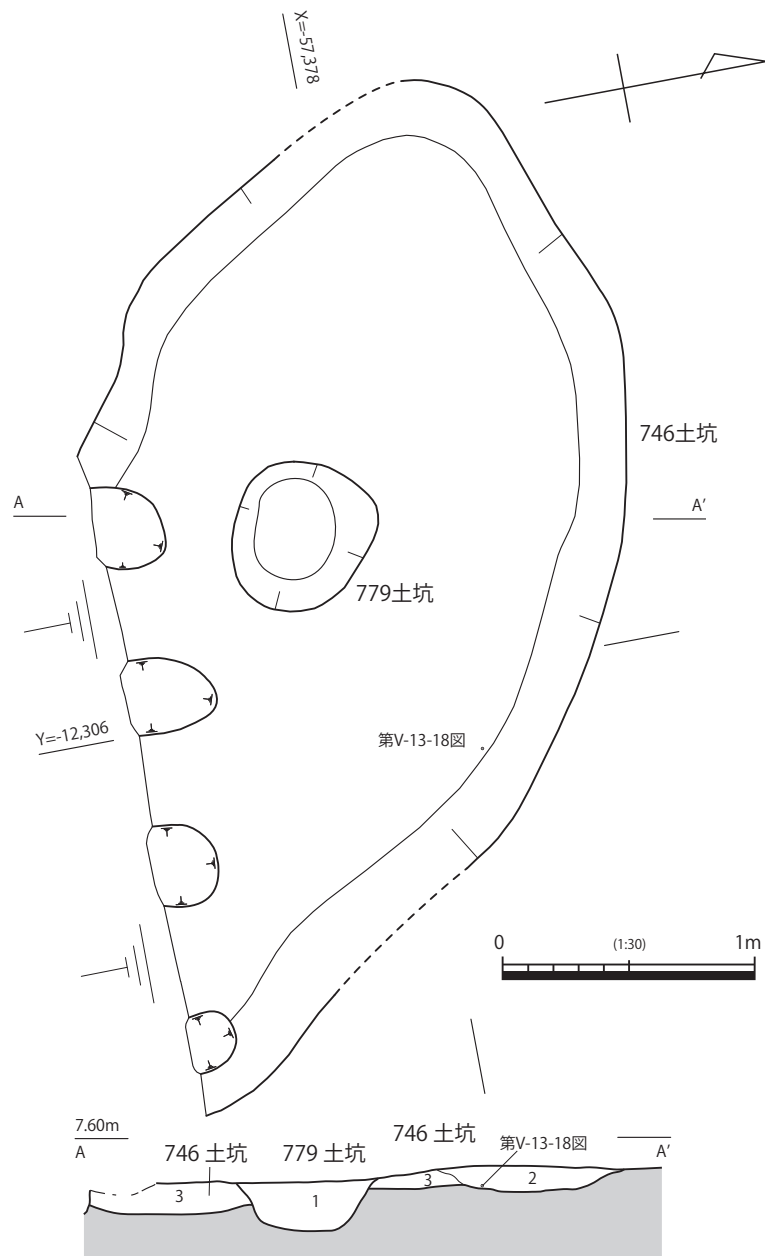
X = -57,380 ラインの土層観察用のトレンチによって南側が掘削されているが、現存で長軸 4.2 m、短軸 2.2 m の東西方向に長い楕円形の大型の土坑である。深さは 0.1 m ほどである。埋土には青灰色粘土ブロックを多く含み、人為的に埋め戻された可能性がある。底面付近で土師器底部〔第 V -13-18 図〕が出土している。

779 土坑〔第IV-5-62 図〕

779 土坑の埋没後、掘削された径 0.6 m の円形の土坑である。深さは 0.2 m。上層である第 3-1-1a 層下面の土坑群（M 群）の一部である可能性もあるが、形態や規模が M 群のものと異なることから、ここでは検出した第 3-1-2a 層下面の遺構とした。

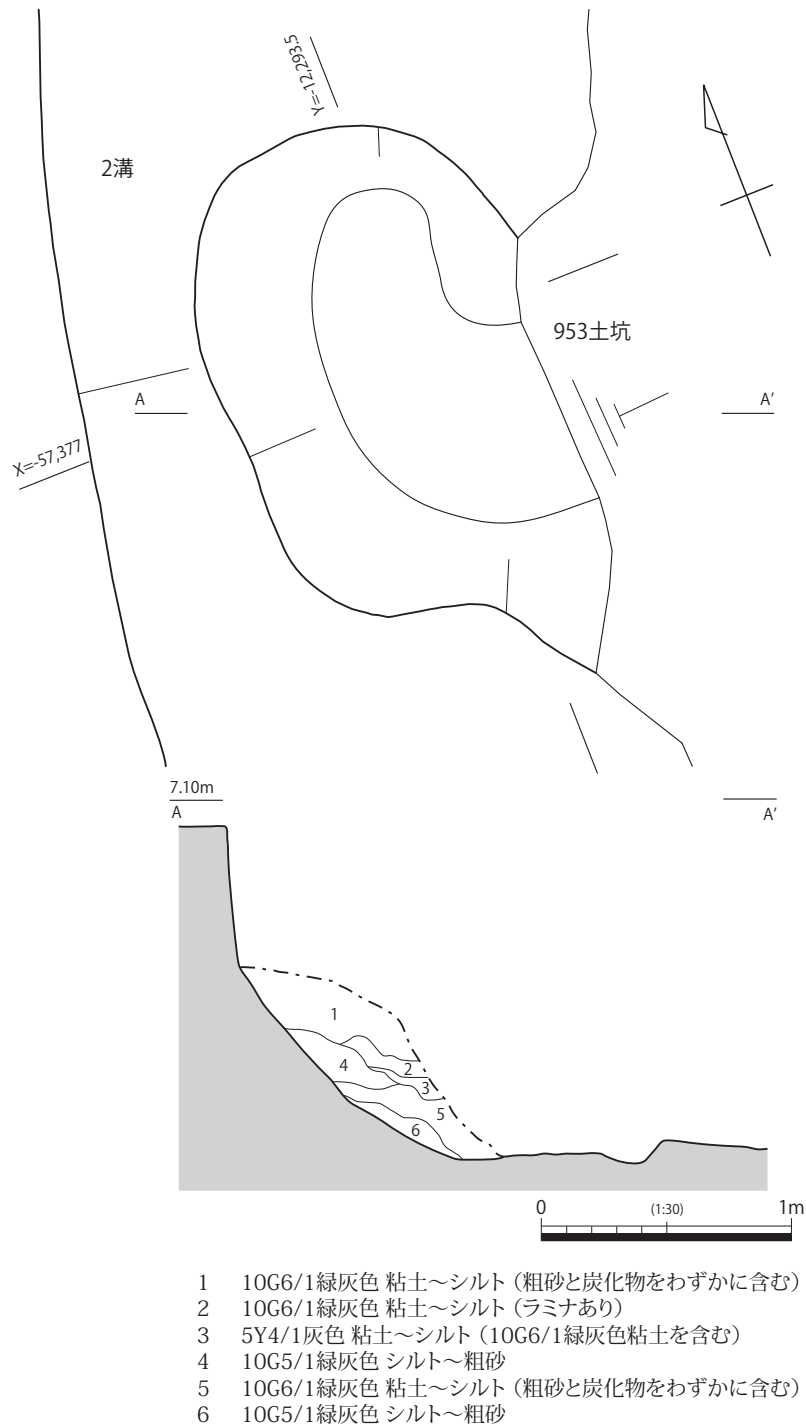
953 土坑〔第IV-5-63 図〕

2 溝西岸の法面でみつかった土坑。東側は一部検出できなかったが、現存で長軸 2.44 m、短軸 1.21 m の楕円形をしており、深さは最深部で 1.33 m ある。2 溝掘削中にみつかったもので、埋土の記録の多くがとれていない。埋土から土師器甕と高杯が出土している〔第 V-13-19 図〕。



- | | | |
|-------|---|---|
| 779土坑 | 1 | 5Y6/1灰色シルト～粘土 (0.5cm以下の炭化物を含む) |
| 746土坑 | 2 | 5Y6/1灰色シルト～粘土 (1.0cm大の青灰色粘土ブロックを含む) |
| | 3 | 5Y6/1灰色～5Y7/1灰白色シルト～粘土 (1.0cm大の青灰色粘土ブロックを多く含む。0.5cm以下の炭化物を含む) |

第IV-5-62図 746・779土坑平・断面



第IV-5-63図 953土坑平・断面

第6節 第3-1-3a層下面の遺構

第3-1-3a層の下面で検出した遺構は、5区北側と南側で様相が大きく異なっていた〔第IV-6-1図〕。

北側では、弥生時代後期後葉～終末期の土器を伴う周溝(701溝)と盛土遺構(700盛土)を検出した。盛土遺構上で明確な埋葬施設を確認することはできなかったが、盛土の一部に貼石が残存していたこと、さらに、その平面形が四隅突出型を呈することから、墳丘墓の可能性が推測された。

また、調査区の中央と盛土遺構との間には、弥生時代後期前葉～終末期の土器を埋土に含む溝や流路跡が重複しており、南西または西から北東方向に向かう大型の溝群として調査を行った。

一方、大型溝群を介して、調査区の南側では、北側の大型溝群に連なる5溝が弥生時代後期初頭に埋没した後に、居住域が営まれていたとみられる。掘立柱建物や、多量の土器が廃棄された土坑などを検出した〔第IV-6-2図〕。こうした遺構には弥生時代後期後葉の土器を伴うものが多い。

こうした状況から、第3-1-3a層下面では、弥生時代後期に営まれた集落構造の一端をうかがうことができる。

第1項 溝

X=-57,450ライン以北で、調査区の南西ないしは西側から北東方向へと向かう大型の溝群を検出した。調査中に認識できたのは、弥生時代後期前葉～終末期の土器を伴う6条の溝である。

X=-57,380ライン以北では、上層に形成された2溝によって失われている部分も多くあった。また、一部については2溝と誤認して掘削を行ったために、平面的な検出が出来なかった。こうした地点については、土層断面の観察から得られた情報をもとに復元的な検討を行った。

また、調査地の南側でも、埋没時に弥生時代後期初頭の土器が一括廃棄された5溝を検出した。古墳時代前期中葉の土器を伴う2溝や4落ち込みによって一部が掘削されているが、調査区内をほぼ縦走しており、調査地中央付近で大型溝群に合流していた。以下、各溝について報告を行う。

(1) 5溝〔第IV-6-3～5図 第2分冊図版86-2・87・88-1〕

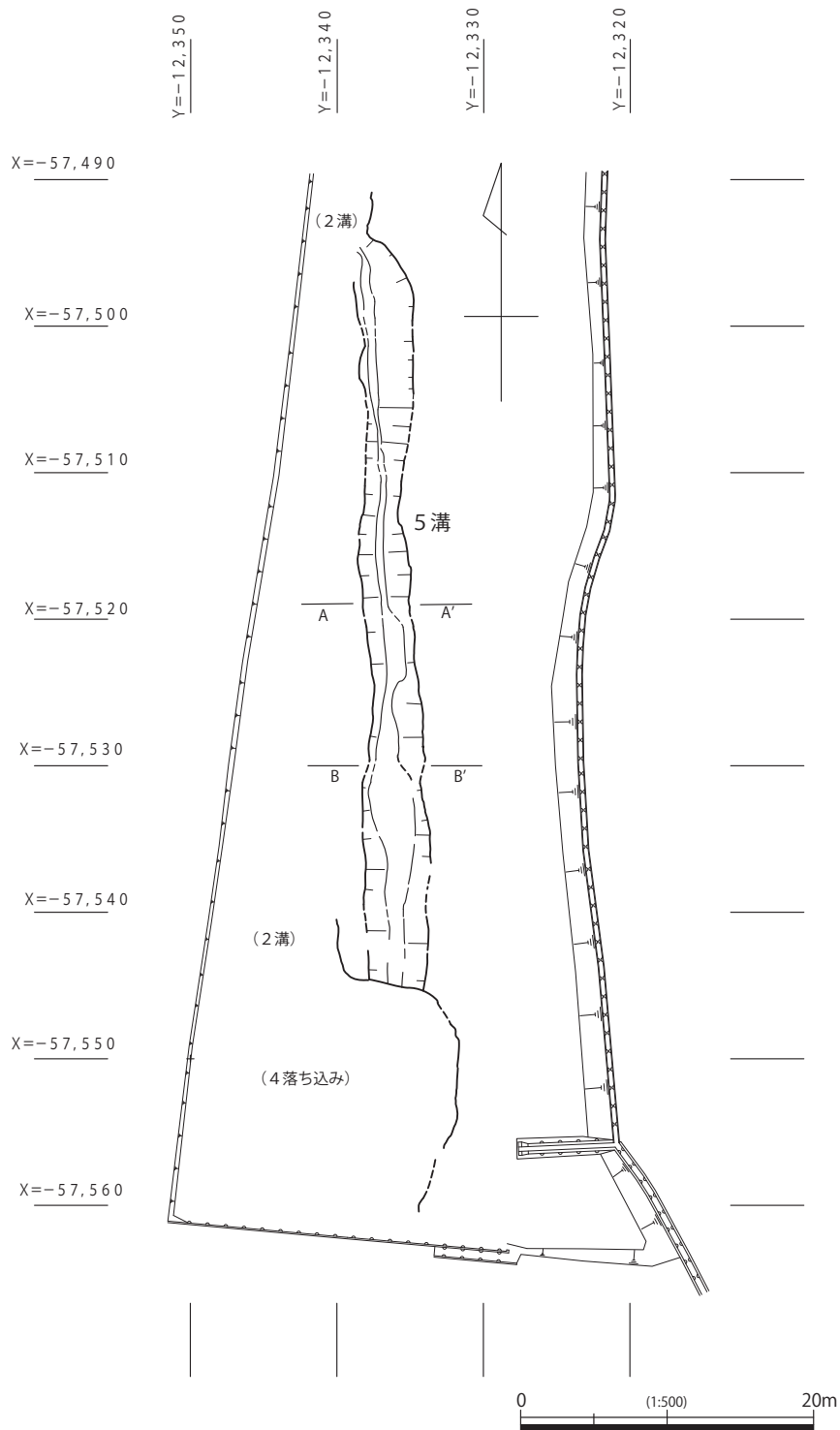
調査区南端近くの4落ち込み北岸(Y=-12,335ライン付近)から、北に向かい、調査地のほぼ中央付近で、北東方向に蛇行していく。溝の幅3～4.5m、深さ0.6～0.7mである。なお、調査地の南側では、5溝として検出、調査を行ったが、X=-57,420ライン付近から南側については、年度を違えて調査を実施したため、後述する600溝が5溝の延長である。

埋土下層〔第IV-6-4図 A-A'6層、B-B'9層〕に薄いシルトないし砂の堆積があった。淘汰が良く、ラミナも認められることから、水の流れがあったことが考えられる。しかし、それよりも上には、ラミナの観察できる堆積はなかった。この堆積には、ブロック土や炭化物が多く含まれており、意図的に埋め戻しが行われた可能性が高い。

また、5溝検出時に、埋土最上層から、弥生時代後期初頭の土器がまとまって出土した〔第IV-6-5図、第V-14-1・2図〕。X=-57,525ライン付近にあり、平面的な広がり東西2m、南北2mの範囲であった。土器の出土した標高は、ほぼ同じで、ほぼ完形に復元できる個体も多い。また、大型の壺類はいずれも口縁を下にして出土している〔第2分冊図版87〕。5溝を埋め戻した後に、一括廃棄された土器と考える。また、土器溜りの付近からは5～10cm大の炭化した木片なども多く出土した。

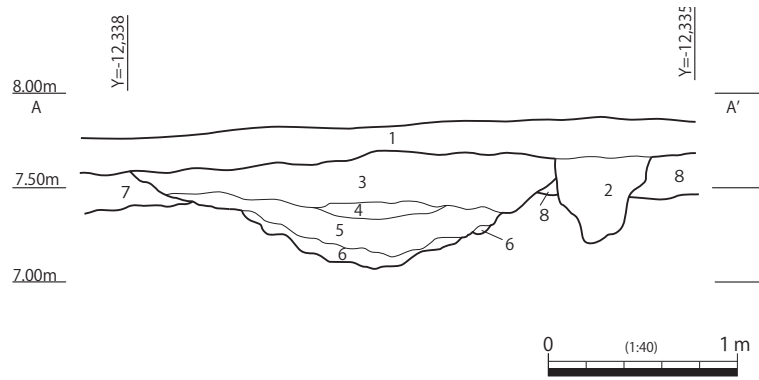


第IV-6-2図 調査地南側全体

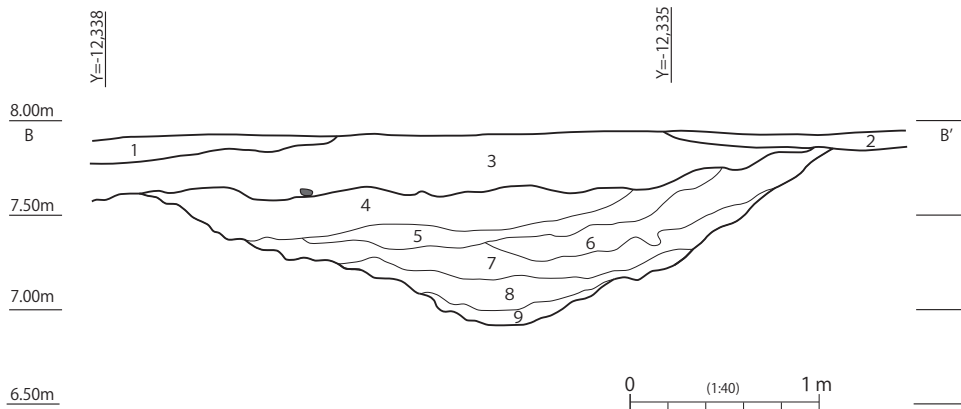


第IV-6-3図 5溝平面

この他に、埋土の上層を中心にして、弥生時代後期初頭の土器が出土している。したがって、5溝は、弥生時代後期初頭に埋め戻されているとみてよからう。また、弥生時代中期の土器も出土しているが、これらは5溝の下部に存在した420溝に本来は伴うものである可能性が高い。



- | | | |
|--------|---|--|
| 第3-1a層 | 1 | 5Y5/1~6/1 灰色 細砂混じりシルト~粘土 (炭化物を含む) |
| | 2 | 5Y7/2 灰白色粘土~シルトと、5BG5/1 青灰色 粘土~シルトの混土 |
| | 3 | 5Y6/2 灰オレンジ色 細砂混じり粘土~シルト |
| 5 溝埋土 | 4 | 7.5Y7/1 灰白色 粘土~シルト |
| | 5 | 5Y7/1 灰白色 細砂~シルトと、10Y5/1~6/1 灰色シルト~粘土の互層 (炭化物を多量に含む。ブロック土含む) |
| 第3-2a層 | 6 | 5Y7/1 灰白色 細砂~シルト (ラミナあり。溝底の堆積砂) |
| | 7 | 5Y7/1 灰白色~6/1 灰色 細砂混じりシルト~粘土 |
| | 8 | 5Y7/1 灰白色 細砂混じりシルト~粘土 |

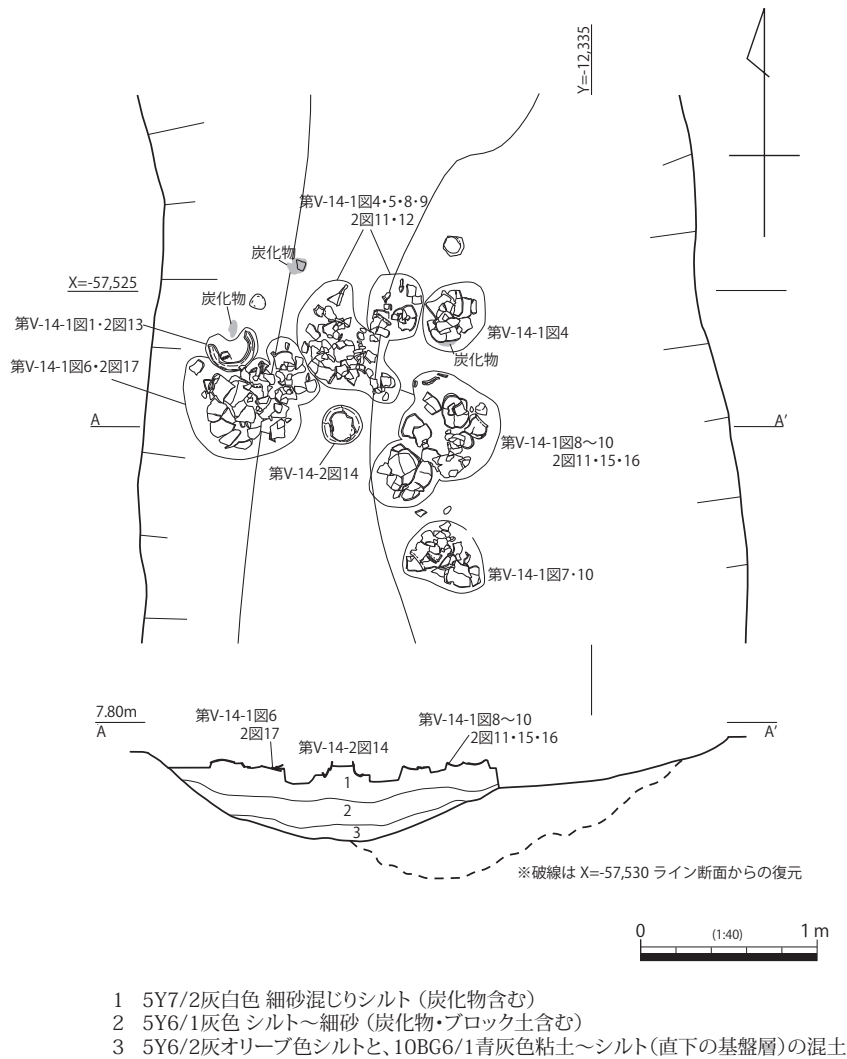


- | | | |
|--------|---|--|
| 第2a層 | 1 | 2.5Y7/1 灰白色 粗砂混じりシルト~細砂 (層中にマンガン斑多く含む) |
| 第3-1a層 | 2 | 2.5Y6/2~7/2 灰黄色シルト (1と対応する可能性がある) |
| | 3 | 5Y6/1 灰色 粗砂~粘土 (土器含む) |
| 5 溝埋土 | 4 | 5Y6/1 灰色 粘土~粗砂 (炭化物含む。ブロック土多い) |
| | 5 | 10Y6/1 灰色 粘土~粗砂 |
| | 6 | 10Y7/1 灰白色 粗砂混じり粘土~シルト |
| | 7 | 10G7/1 暗緑灰色 細砂混じりシルト~粘土 |
| | 8 | 5BG6/1 青灰色~7/1 明青灰色 細砂混じりシルト~粘土 |
| | 9 | 7.5Y7/1 灰白色シルト (淘汰よいがラミナ見えない。溝底の堆積砂) |

第IV-6-4図 5 溝土層断面

(2) 大型溝群 [第IV-6-6 ~ 9 図 第2分冊図版78 ~ 85]

X=-57,420 ライン以北で、調査区の南西ないし西側から北東方向へと向かう大型の溝群を検出した。平面的な検出作業および土層断面の観察から認識できた溝は6条である。この中には自然の流路も含まれるかもしれないが、いずれの溝も断面形が幅広で緩いV字形ないし台形を呈するものが多く、多少なりとも人為の加わった溝として理解した。



第IV-6-5図 5溝土器溜まり遺物出土状況

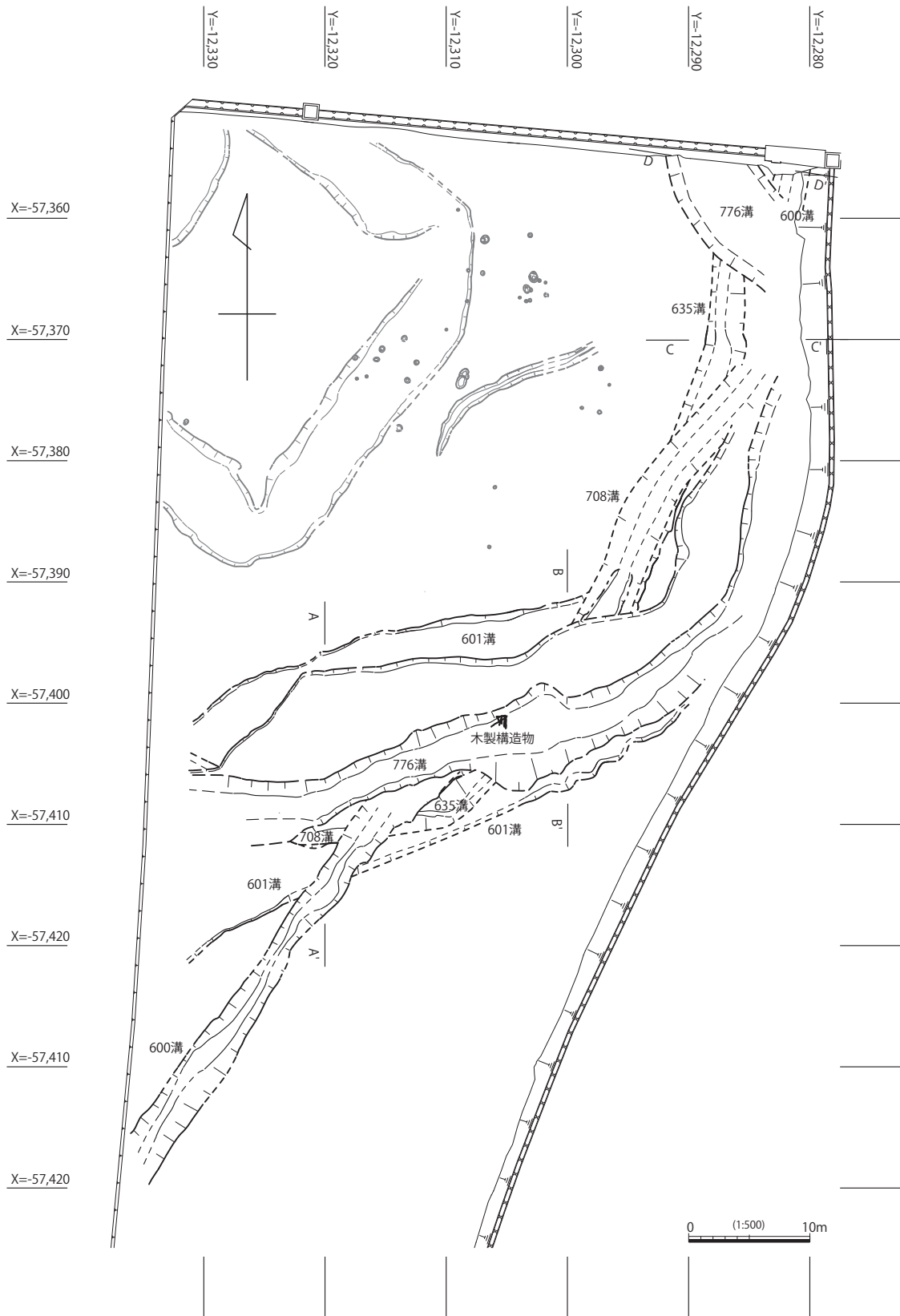
6条の溝の新旧関係を新しい方から整理すると、順に601溝、635溝、707溝、708溝、776溝、600溝となる。各溝は、ほぼ同一の場所に重複している。古墳時代前期の2溝によって失われている部分も多くあり、平面的な切り合い関係を確認できない部分も多くあったが、土層観察を繰り返し、前後関係の把握を行った。

各溝を埋める堆積には、いずれも粗砂や細砂が含まれており、ラミナが観察できた。止水性の堆積状況を示すものは確認できなかった。また、5溝で確認できたような埋め戻しに伴う堆積も、この大型溝群では観察ができなかった。

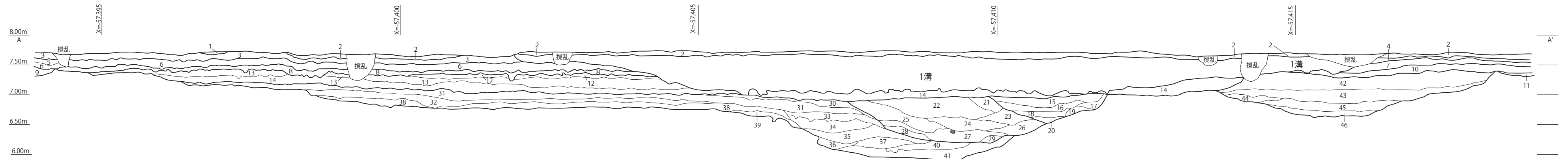
また、最も古い600溝は、規模や方向から、調査区南側で検出した5溝と一連のものである可能性が高い。600溝はX=57,420ライン付近から調査区の北東隅に向かって、ほぼ直線的に延びており、古墳時代前期の2溝と近似した位置にある。

これに対して、776溝以降の溝は、X=57,400～420ライン間の調査地西端から出現して東へ延び、調査区東端では釣山の山裾に沿って北に向かう。これは、後述する弥生時代中期の760溝や弥生時代開始期の710溝の位置と重なる。

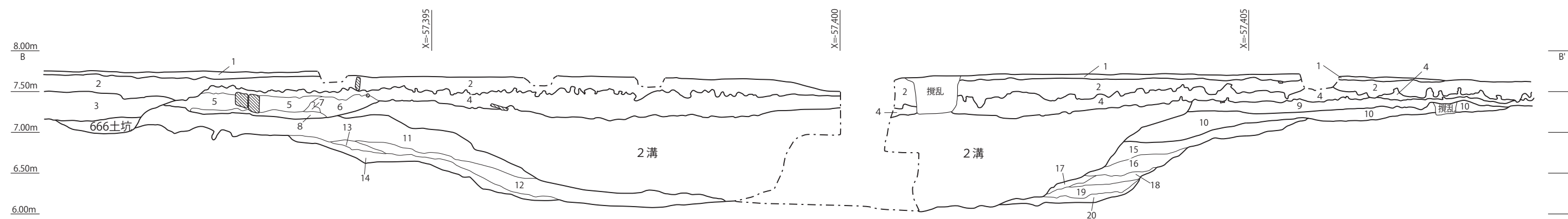
したがって、600溝と、その他の溝とは、やや性格の異なる水路であった可能性がある。ただし、



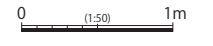
第IV-6-6図 大型溝群平面



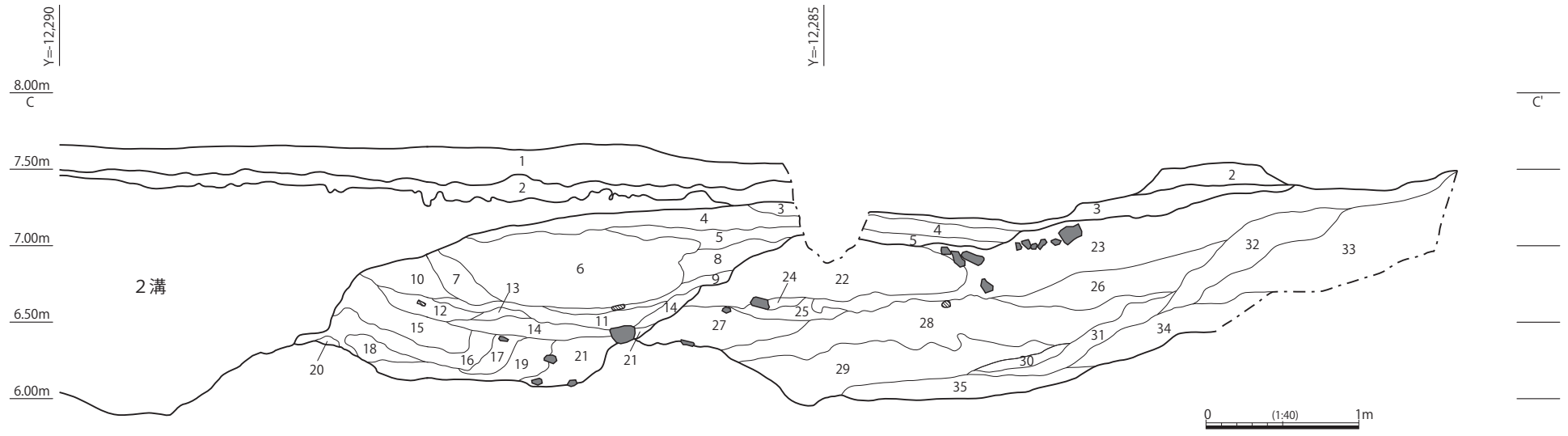
- | | | |
|----------|----|---|
| 第1a層 | 1 | 7.5Y8/1灰白色シルト(粗砂をわずかに含む) |
| | 2 | 5Y7/1灰白色粗砂混じりシルト |
| 第2a層 | 3 | 7.5Y6/1灰色シルト(0.3cmの白色礫を多く含む。炭化物を含む) |
| | 4 | 7.5Y6/1灰色粗砂混じりシルト |
| 第3-1-1a層 | 5 | 5Y5/1灰色粗砂混じりシルト |
| | 6 | 5Y6/1灰色～5Y5/1灰色シルト～粘土(炭化物・0.3cmの白色礫を含む) |
| | 7 | 5Y5/1灰色シルト～粘土 |
| 第3-1-2a層 | 8 | 2.5Y5/1黄灰色粘土～シルト(粘土ブロックを含む) |
| | 9 | 5Y6/1灰色粗砂～シルト(粘土ブロックを含む) |
| 第3-1-3a層 | 10 | 2.5Y4/1黄灰色シルト～粘土(炭化物を含む) |
| | 11 | 10Y4/1灰色シルト～粘土 |
| 601溝 | 12 | N7/0灰白色粘土～シルト(炭化物・粘土ブロック・細砂を含む) |
| | 13 | 5Y7/1灰白色シルト～粘土(炭化物・粘土ブロックを含む) |
| 635溝 | 14 | 5B5/1青灰色～5Y6/1灰色粘土～シルト(層上部に細砂を含む。炭化物・粘土ブロックを含む) |
| | 15 | 7.5Y6/1灰色粘土～シルト(明青灰色粘土ブロック・炭化物を含む。細砂わずかに含む) |
| | 16 | 10Y6/1灰色細砂混じり粘土～シルト(明青灰色粘土ブロック・0.2～0.3cmの白色礫を含む) |
| | 17 | 10Y6/1灰色～7.5Y7/1灰白色細砂混じり粘土～シルト(0.2～2.0cmの礫をまれに含む) |
| | 18 | 7.5Y5/1灰色細砂混じりシルト～粘土(明青灰色粘土ブロック・0.2cmの白色礫をまれに含む) |
| | 19 | 7.5Y6/1灰色～7.5Y5/1灰色細砂混じり粘土～シルト(0.5cmの白色礫をごくまれに含む) |
| | 20 | 5Y5/1灰色シルト～粘土(明青灰色粘土ブロック・木質遺物を含む) |
| 708溝 | 21 | 5Y5/1灰色～2.5Y5/1黄灰色シルト～粘土(ラミナあり。2.5Y7/2灰黄色細砂ブロックを含む) |
| | 22 | 5Y5/1灰色シルト～細砂(一部に灰色粘土ブロックを含む。2.0～5.0cmの白色礫をまばらに含む) |
| | 23 | 5Y5/1灰色～2.5Y5/1黄灰色シルト～細砂(ラミナあり。明青灰色粘土ブロック・灰白色細砂ブロック・炭化物を含む) |
| 708溝 | 24 | 2.5Y6/1黄灰色と、5Y6/1灰色シルト～細砂(0.2cmの白色礫をまれに含む。炭化物・木質遺物・明青灰色粘土ブロックを含む) |
| | 25 | 7.5Y5/1灰色シルト～細砂(0.3～1.0cmの白・黄色礫を多く含む。炭化物・灰白色粘土ブロックをまれに含む) |
| | 26 | 7.5Y5/1灰色～10Y5/1灰色シルト～粘土(炭化物・木質遺物・明青灰色粘土ブロック・灰黄色細砂ブロックを含む) |
| | 27 | 7.5Y5/1灰色～10Y5/1灰色細砂混じりシルト～粘土(0.2～0.5cmの白・黄色礫を多く含む。炭化物・灰白色粘土ブロックをまれに含む) |
| | 28 | 10Y6/1灰色～N6/0灰色シルト～細砂(木質遺物・0.2～0.5cmの白色礫を含む) |
| | 29 | 10BG7/1明青灰色粘土～シルトと、10Y5/1灰色シルト～細砂(炭化物・木質遺物・0.2～0.5cmの白色礫・灰色粗砂ブロックを含む) |
| | 30 | 5Y6/1灰色シルト～細砂(粗砂をわずかに、0.2～1.0cmの白色礫を含む) |
| 776溝 | 31 | 5Y5/1灰色細砂混じりシルト～粘土(粗砂をわずかに含む) |
| | 32 | 5Y5/1灰色～5Y6/1灰色細砂混じりシルト～粘土(炭化物・灰色粘土ブロックをまれに含む) |
| | 33 | 7.5Y6/1灰色と、2.5Y7/1灰白色細砂混じり粘土～シルト(粗砂をわずかに含む。0.5cmの白・黄色礫をごくまれに含む) |
| | 34 | 5Y6/1灰色～5Y5/1灰色シルト～粘土(0.2～0.5cmの白色礫まれに含む。木質遺物含む) |
| | 35 | 5Y5/1灰色シルト～細砂(粗砂～細砂ブロック・木質遺物・炭化物を含む) |
| | 36 | 7.5Y5/1灰色シルト～細砂(ラミナあり。木質遺物含む。0.5cm大の灰色粘土ブロックわずかに含む) |
| | 37 | 7.5Y5/1灰色～7.5Y6/1灰色シルト～細砂(灰白色細砂ブロック・木質遺物・炭化物を含む) |
| | 38 | 5Y7/1～5Y5/1シルト～粘土(2.5Y8/1灰白色ブロックを含む。粗砂をわずかに含む) |
| | 39 | 7.5Y5/1灰色シルト～細砂(ラミナあり。木質遺物・炭化物を含む。0.5cmの灰色粘土ブロックまれに含む) |
| | 40 | 5Y6/1灰色～5Y7/1灰白色シルト～粘土(木質遺物・炭化物をまれに含む) |
| | 41 | 7.5Y4/1灰色～10Y7/1灰白色細砂～粘土(木質遺物・青灰色粘土ブロック・0.2cmの白色礫を含む。南側ほど粘土の割合多い) |
| | 42 | 5Y5/1灰色と、2.5Y6/1黄灰色シルト～粘土(0.2cmの白色礫・炭化物をまれに含む) |
| 600溝 | 43 | 5Y6/1灰色シルト～粘土(わずかに粗砂を含む。0.2～2.0cmの白色礫をまれに、0.1cm～1.0cmの炭化物をまばらに含む) |
| | 44 | 7.5Y6/1灰色細砂混じり粘土～シルト(灰色土ブロックを含む) |
| | 45 | 10Y6/1灰色細砂混じり粘土～シルト(灰白色細砂ブロックを含む。炭化物をまれに含む) |
| | 46 | 10BG7/1明青灰色粘土～シルト(細砂をわずかに含む。0.1～0.5cmの炭化物を含む) |



- | | | |
|----------|----|--|
| 第2a層 | 1 | 7.5Y7/1灰白色シルト～粘土(0.3cmの白色礫・炭化物を多く含む) |
| 第3-1-1a層 | 2 | 2.5Y6/1黄灰色～5Y6/1灰色シルト～粘土(0.3cmの白色礫を含む) |
| 第3b層 | 3 | 5Y8/2灰白色～2.5Y5/1黄灰色粗砂～細砂(ラミナ顕著。北側に灰白色粗砂が多い。堆積構造が変化している部分あり。地震痕跡の可能性あり) |
| 第3-1-2a層 | 4 | 5Y4/1灰色シルト～粘土(0.3cmの白色礫・炭化物を少量含む) |
| | 5 | 5Y5/1灰色粗砂～シルト(5Y8/1灰白色～5Y8/3淡黄色の粗砂を多く含む) |
| 第3b-2層 | 6 | 10YR5/1褐灰色粗砂まじりシルト～粘土(0.1～0.3cmの青灰色粘土ブロック・木質遺物を多く含む) |
| | 7 | N6/0灰色粘土～シルト(粘土ブロックを含む) |
| | 8 | 7.5Y5/1灰色粘土～シルト(粗砂・粘土ブロックを含む) |
| 第3-1-3a層 | 9 | N7/0灰白色粘土～シルト(炭化物・粘土ブロックを含む) |
| 601溝 | 10 | 5Y6/1灰色細砂混じりシルト～粘土(粗砂をわずかに含む。1.0～2.0cmの白色礫を含む) |
| 708溝 | 11 | 5B6/1青灰色粘土～シルト(1.0～2.0cmの炭化物を含む。粗砂を部分的に含む) |
| | 12 | 5Y4/1灰色～N6/0灰色細砂まじりシルト～粘土(炭化物・木質遺物・2.0～3.0cm粘土ブロックを含む) |
| | 13 | 2.5Y6/1黄灰色細砂まじりシルト(粗砂をわずかに含む) |
| | 14 | 5B6/1青灰色粘土～シルト(1.0～3.0cmの青灰色粘土ブロック・細砂を含む) |
| | 15 | 5Y5/1灰色～5Y6/1灰色シルト～粘土(細砂わずかに含む。0.2cm～1.0cmの白色礫をまれに含む) |
| | 16 | 5Y5/1灰色～5Y4/1灰色粘土～シルト(粗砂をわずかに含む) |
| 776溝 | 17 | 5Y5/1灰色細砂混じりシルト(ラミナあり。炭化物を含む) |
| | 18 | 5Y6/1灰色～5Y5/1灰色粘土～シルト(ラミナあり。灰白色細砂ブロック・炭化物を含む) |
| | 19 | 5Y5/1灰色粘土～シルト(ラミナあり。炭化物を含む) |
| | 20 | 5Y6/1灰色～7.5Y5/1灰色粘土～シルト(木質遺物を含む) |

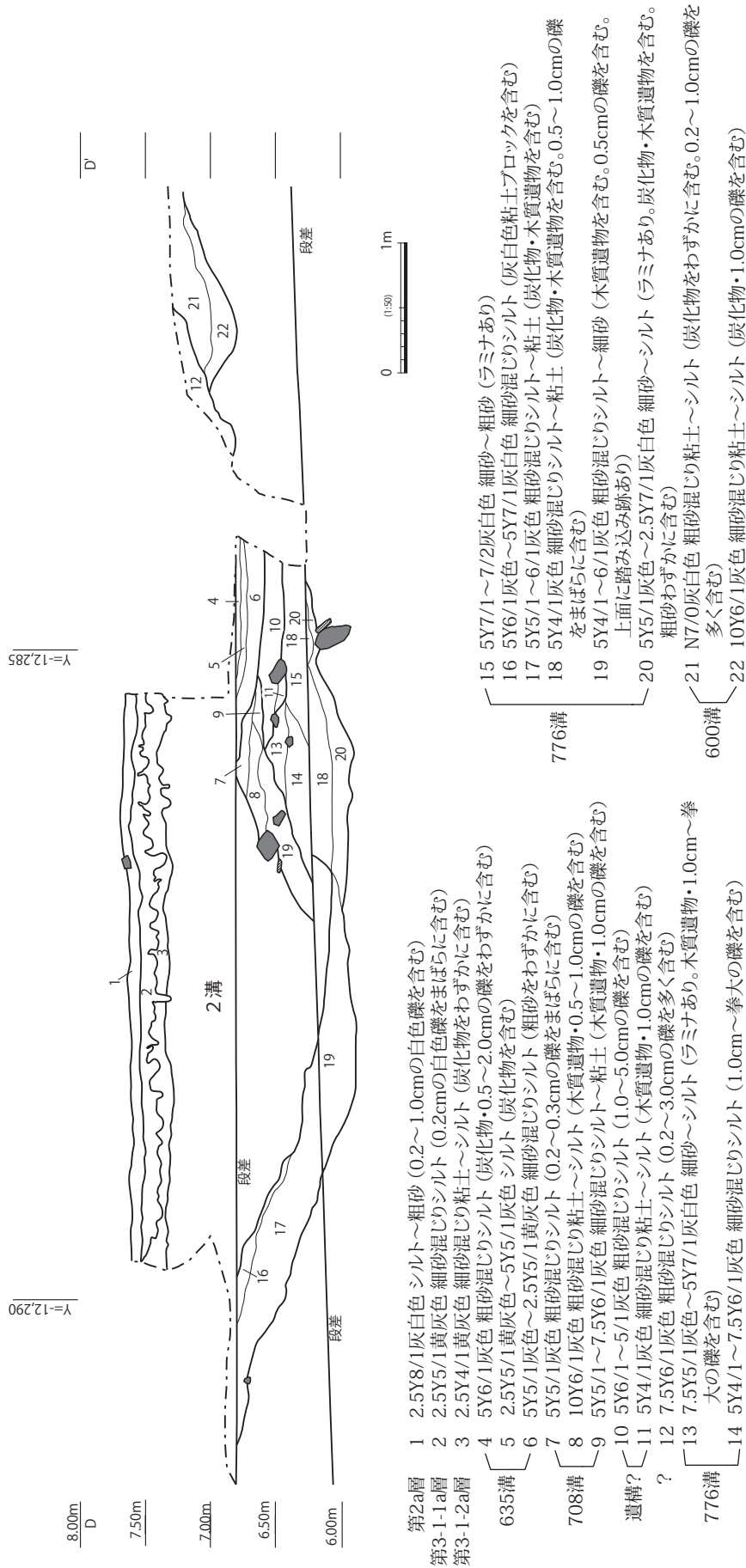


第IV-6-7 図 大型溝群土層断面 (1)



- | | | | | |
|----------|----|---|----|--|
| 第3-1-1a層 | 1 | 2.5Y6/1黄灰色～5Y5/1灰色シルト～粘土 (0.1～0.3cmの白色礫を含む) | 17 | 2.5Y6/1黄灰色 粘土～シルト (1.0cmの白色礫・0.5cmの炭化物・木質遺物を含む) |
| 第3-1-2a層 | 2 | 7.5Y5/1灰色シルト～粘土 (0.1～0.3cmの白色礫を多く含む) | 18 | 2.5Y6/1黄灰色シルト～粘土 (1.0cmの白色礫・木質遺物を含む) |
| 635溝 | 3 | 5Y7/1～5Y8/1灰白色シルト～粘土 (粗砂をわずかに含む。0.5cm以下の炭化物を含む) | 19 | N6/0灰色粘土～シルト (1.0～3.0cmの青灰色粘土ブロックを多く含む。0.5cmの炭化物をわずかに含む) |
| | 4 | 5Y5/1～5Y4/1灰色シルト～粘土 (1.0～3.0cmの白色礫を層の東側に多く含む。0.5cmの炭化物・灰白色粘土ブロックを含む) | 20 | 7.5Y6/1灰色シルト～粘土 (0.5cmの炭化物を含む) |
| | 5 | 5Y7/1灰白色シルト～粘土 (ラミナあり。1.0cmの白色礫・細砂・炭化物含む) | 21 | N5/0灰色 礫混じりシルト～細砂 (1.0～5.0cmの白色礫・木質遺物を含む) |
| | 6 | 2.5GY7/1明オリーブ灰色～7.5Y5/1灰色 (1.0～3.0cmの2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロックを多く含む。0.5cmの炭化物を含む) | 22 | 5Y5/1灰色シルト～粘土 (0.2～1.0cmの白色礫を多く含む) |
| | 7 | 2.5Y6/1黄灰色シルト～細砂 (ラミナあり。細砂を含む) | 23 | 5Y6/1～5Y4/1灰色粗砂～シルト (0.5～5.0cmの礫を多く含む。15.0cmの角礫を含む) |
| | 8 | 2.5Y6/1黄灰色シルト～細砂 (ラミナあり。細砂を含む) | 24 | 7.5Y7/1灰白色～7.5Y6/1灰色 細砂～粗砂 |
| | 9 | 2.5Y5/1黄灰色シルト～粗砂 (ラミナあり。5Y8/3淡黄色の粗砂を層下方に含む) | 25 | 5Y4/1灰色シルト～粘土 (炭化物をごくまれに含む) |
| | 10 | 5Y6/1灰色シルト～粘土 (1.0～3.0cmの白色礫・0.5cmの炭化物・1.0cm以下の青灰色粘土ブロックを含む) | 26 | 5Y4/1灰色シルト～粘土 (0.2～1.0cmの白色礫をまばらに含む。灰白色粘土ブロック・木質遺物を含む) |
| | 11 | 2.5Y5/1黄灰色～5Y5/1灰色 細砂～シルト (層中央～東側でラミナあり。木質遺物を含む) | 27 | 5Y4/1灰色 細砂まじりシルト (粗砂～細砂ブロック・木質遺物を含む。0.5cmの白色礫を多く含む) |
| | 12 | 5Y6/1灰色～2.5Y6/1黄灰色シルト～粘土 (1.0～3.0cmの白色礫・0.5cmの炭化物・青灰色粘土ブロック・木質遺物を含む) | 28 | 5Y4/1～5Y5/1灰色シルト～粘土 (0.2～1.5cmの白色礫をまばらに含む。木質遺物を含む) |
| | 13 | 2.5Y5/1黄灰色シルト～細砂 (0.5cmの粘土ブロックをわずかに含む) | 29 | 5Y5/1灰色シルト～細砂 (ラミナあり。細砂ブロック・木質遺物を含む) |
| | 14 | 2.5Y6/1黄灰色～5Y6/1灰色シルト～細砂 (層下方に1.0cmの白色礫を多く含む。1.0cmの青灰色粘土ブロック・木質遺物を含む) | 30 | 5Y7/1～7.5Y8/1灰白色シルト～細砂 (ラミナあり。木質遺物を含む) |
| | 15 | 5Y6/1灰色粘土～シルト (1.0～3.0cmの白色礫・0.5cmの炭化物を含む) | 31 | 5Y5/1灰色シルト～粘土 (0.3～1.0cmの白色礫をまばらに含む) |
| | 16 | 2.5GY7/1明オリーブ灰色～5Y6/1灰色 粘土～シルト (1.0～3.0cmの明オリーブ灰色の粘土ブロックを多く含む。層下方は根の攪乱の可能性あり) | 32 | 5Y6/1～5Y5/1灰色シルト～粘土 (細砂ブロック・0.5～2.0cmの白色礫を多く含む) |
| 708溝 | | | 33 | 5Y6/1～7.5Y6/1灰色粘土～シルト (0.2～2.0cmの白色礫を多く含む。炭化物をまれに含む) |
| | | | 34 | 5Y5/1灰色粘土～シルト (0.2～1.0cmの白色礫をまばらに含む) |
| | | | 35 | 5Y4/1～5Y6/1灰色 細砂～シルト (ラミナあり。0.5～3.0cmの礫を多く含む) |

第IV-6-8 図 大型溝群土層断面 (2)



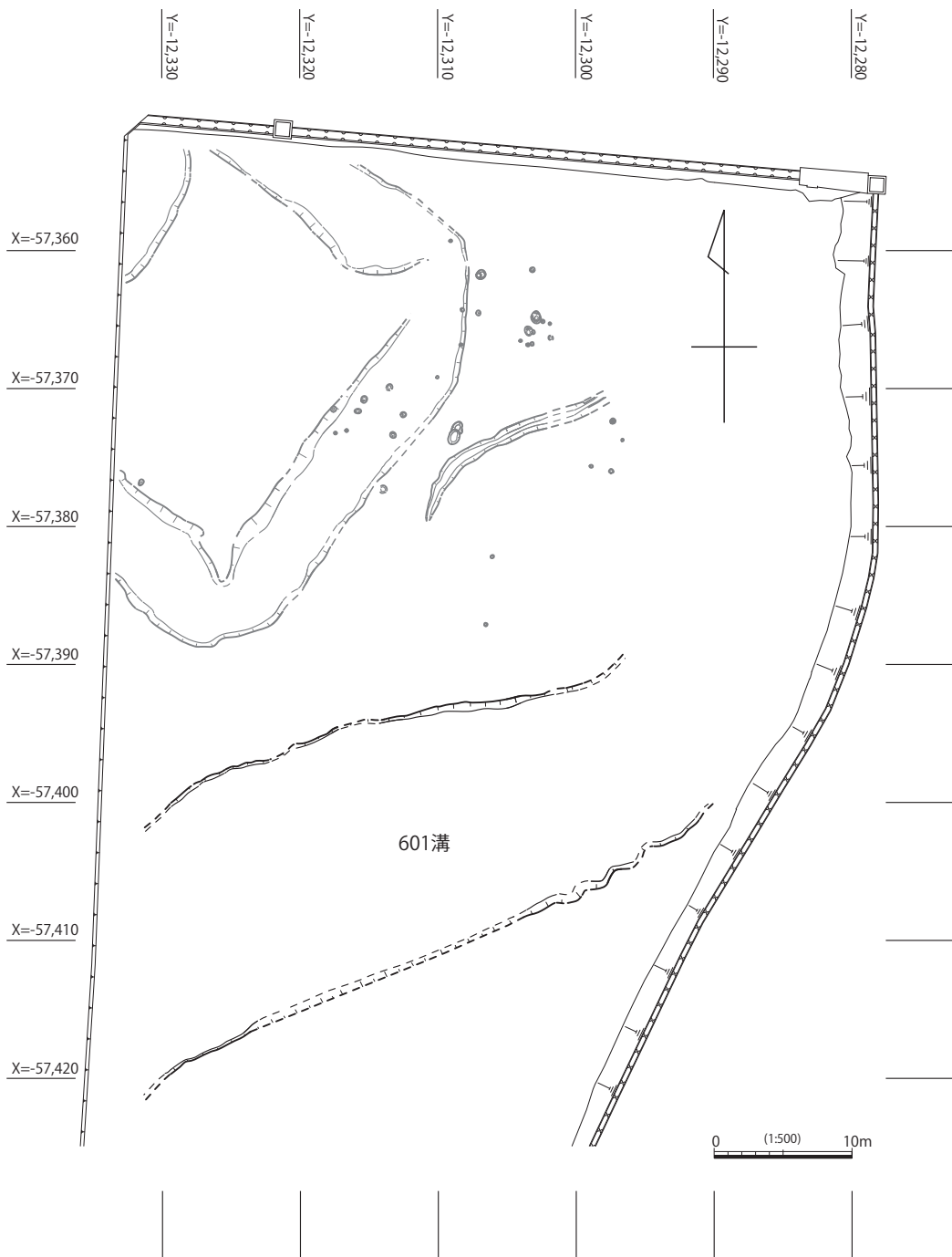
第IV-6-9図 大型溝群土層断面 (3)

いずれにしても各溝がそれぞれ若干位置を変えながら何度も掘り直して利用されていることから、この遺跡周辺における生業活動などに欠かせない水路であったと考えられる。

以下、新しい溝から順に調査所見を記す。

601 溝〔第IV-6-10 図 第2分冊図版79-1〕

大型溝群の中で最も新しい溝である。他の溝と比べ、幅広で、浅い。調査区西端、X=-57,400～420 ライン間に出現し北東方向に直線的に延びる。溝の南岸は、Y=-12,320～303 ライン間では検出できていなかった。理由は、大部分が中世の1溝と古墳時代前期の2溝によって掘削されていたから

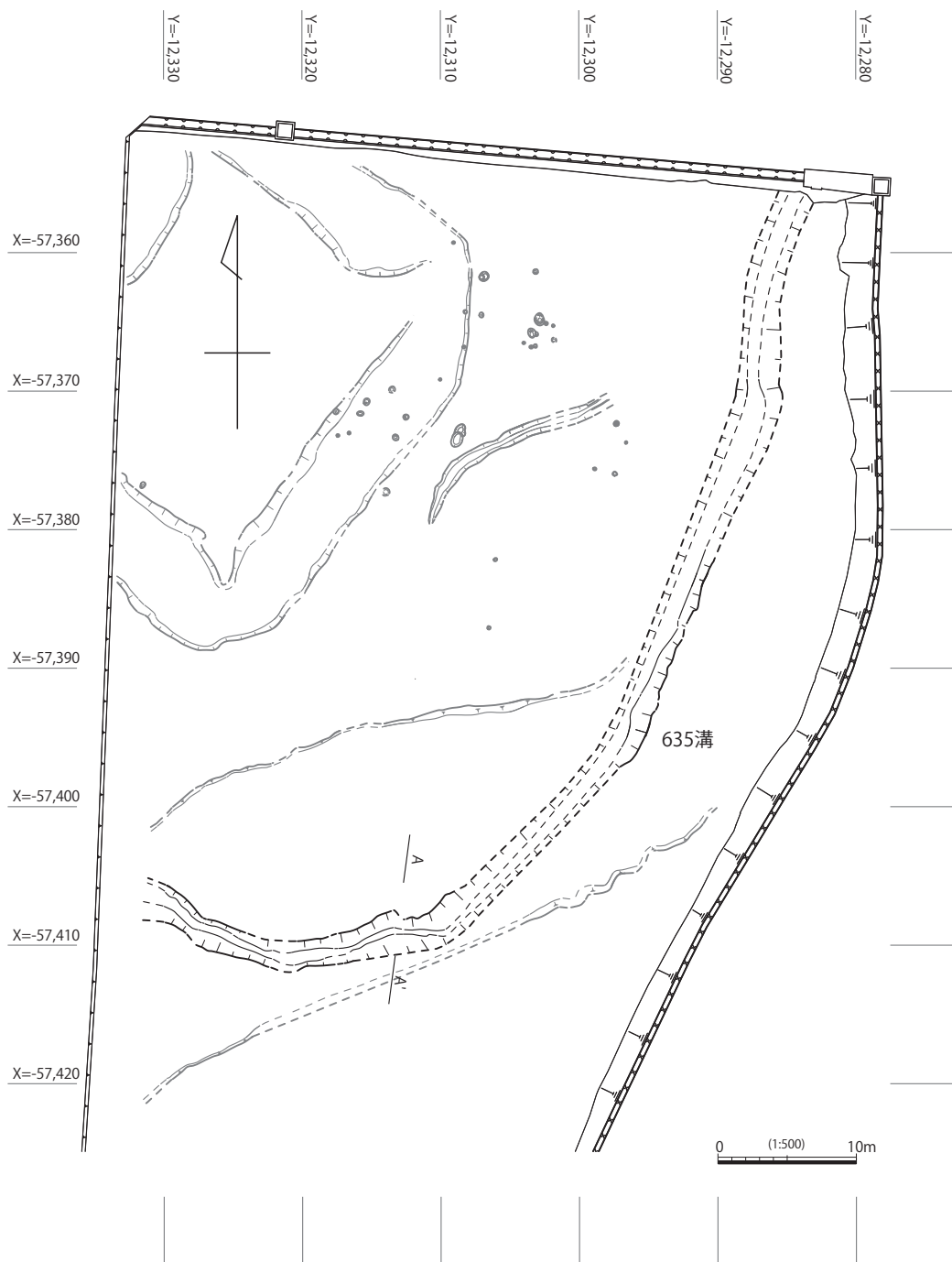


第IV-6-10図 601溝平面

である。したがって、Y=-12,290 ラインまで平面的に溝の形状を検出できたが、それ以北では土層断面にも、601 溝の掘方は確認できなかった。もともとが浅い溝なので、2 溝や、後世の耕作により、失われたものと考えられる。

溝の幅は 13.5 ～ 18 m、深さは 0.3 m ほどで、埋土には細砂もわずかに含むが、シルトもしくは粘土を主体とする堆積が認められた。埋土は、以下で報告する他の溝とは様相が異なっていた。実際には、埋没した溝の上部に生じた幅の広い窪みのような地形で、水路のような機能を担う溝ではなかったのかもしれない。

なお、埋土には弥生時代開始期～終末期の土器が含まれていた〔第 V-144 図〕。下層などからの混



第IV-6-11図 635溝平面

入品が多く、溝の埋没時期を示すのは弥生時代終末期と考えられる。

635 溝〔第IV-6-11 図 第2分冊図版79〕

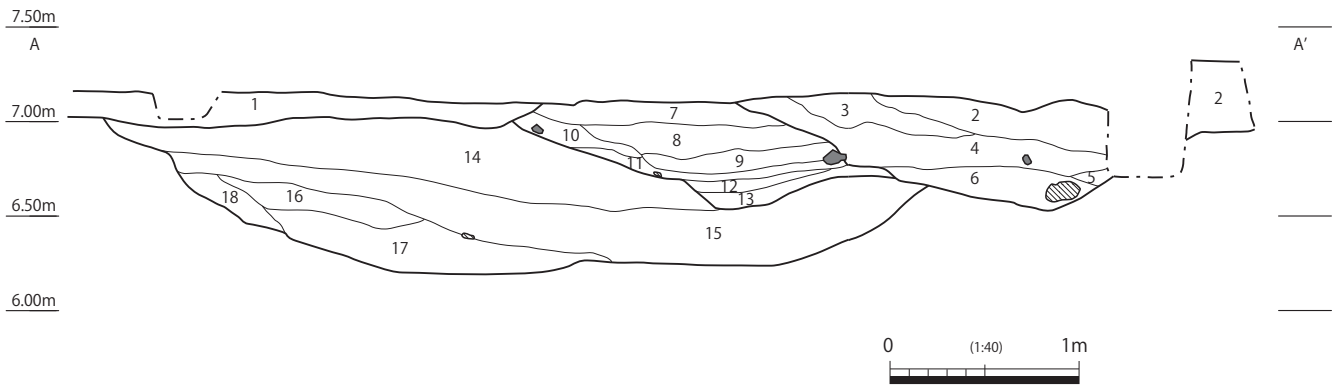
調査区西端、X=-57,406 ライン付近から一旦南東方向に向かい、Y=-12,315 付近で北東方向に延びる。後述する 708 溝とほぼ同じ位置を通っていた。調査区の西側から、Y=-12,310 ライン付近までは溝の形状が良く残っていた。溝の規模は、幅が 2.5～2 m、深さが 0.5～1.2 m となる。

一方、Y = -12,297～290 ライン間については、溝の東側しか確認できなかった。しかし、調査区北東隅の壁面に設けた土層断面〔第IV-6-9 図〕には、この溝の掘方が良く残っており、他の溝との切り合いが明瞭で、溝の掘削時期の前後関係が把握できた。

埋土中からは弥生土器や打製石斧が出土した。土器は弥生時代前期～後期のもので〔第V-14-5 図〕、後期中葉の土器片が、635 溝出土土器の中では最も新しい型式を示す。ただし、635 溝より古い溝である 707・708・776 溝から弥生時代終末期に一般的な特徴をもつ土器片が出土していることから、後期中葉の土器片が溝の埋没時期を示すものではない。また、打製石斧〔第VI-3 図1〕は、弥生時代前半期以前のもと考えられるので、下層に帰属する 710 溝などに本来は伴うものの可能性が高い。

707 溝〔第IV-6-12 図 第2分冊図版82-1〕

平面的な検出はできなかったが、調査区西端の土層断面〔第IV-6-12 図〕において掘方を確認した溝である。635 溝がほぼ同じ位置に存在した可能性が高く、635 溝によって、707 溝の大半が失われ



- | | | |
|------|----|--|
| 601溝 | 1 | 5Y5/1灰色～2.5Y7/1灰白色シルト～細砂(粘土ブロックをまばらに含む) |
| | 2 | 5Y5/1灰色 細砂まじり粘土～シルト(灰白色粘土ブロック・0.2～0.3cmの白色礫をまばらに含む) |
| | 3 | 5Y6/1灰色～2.5Y7/1 灰白色シルト～粘土(細砂わずかに含む。灰白色粘土ブロックを多く含む) |
| 635溝 | 4 | 5Y5/1灰色 細砂まじりシルト～粘土(灰白色粘土ブロック含む。0.2cmの白・黄色礫まれに含む) |
| | 5 | 5Y5/1灰色と、10BG7/1明青灰色 細砂まじり粘土～シルト(灰白色粘土ブロックを含む) |
| | 6 | 7.5Y5/1灰色 細砂まじり粘土～シルト(灰白色・明青灰色粘土ブロック・0.5～1.0cmの礫・木質遺物を含む) |
| | 7 | 7.5Y6/1灰色シルト～粘土(細砂わずかに含む。灰白色粘土ブロックをまばらに含む) |
| | 8 | 5Y5/1灰色 細砂まじりシルト～粘土(炭化物含む。灰白色粘土ブロックをまれに含む) |
| | 9 | 7.5Y6/1灰色シルト～細砂(灰白色粘土ブロックを多く含む) |
| 707溝 | 10 | 5Y5/1灰色シルト～細砂(炭化物・0.5～1.0cmの灰白色粘土ブロックをまれに含む) |
| | 11 | 2.5Y5/1黄灰色 細砂まじりシルト～粘土(0.5cmの灰白色粘土ブロックをまれに含む) |
| | 12 | 10Y6/1灰色シルト～粘土(明青灰色粘土ブロックを含む) |
| | 13 | 7.5Y6/1灰色シルト～粘土と、10BG7/1明青灰色粘土～シルト(1.0cmの白色礫・炭化物ごくまれに含む) |
| | 14 | 5Y4/1灰色と、2.5Y5/1黄灰色 細砂まじり粘土～シルト(0.5cm白・黄色礫・炭化物を含む) |
| | 15 | 7.5Y5/1灰色シルト～細砂(ラミナあり。炭化物・木質遺物・1.0cmの白色礫を含む) |
| 708溝 | 16 | 5Y6/1灰色シルト～細砂(0.2～0.5cmの白色礫・灰色粘土ブロックを含む) |
| | 17 | 2.5Y6/1黄灰色と、5Y5/1灰色 細砂まじりシルト～粘土(ラミナあり。0.5～1.0cmの白色礫をまれに含む) |
| | 18 | 7.5Y6/1灰色シルト～細砂(0.2cmの白色礫をまばらに含む) |

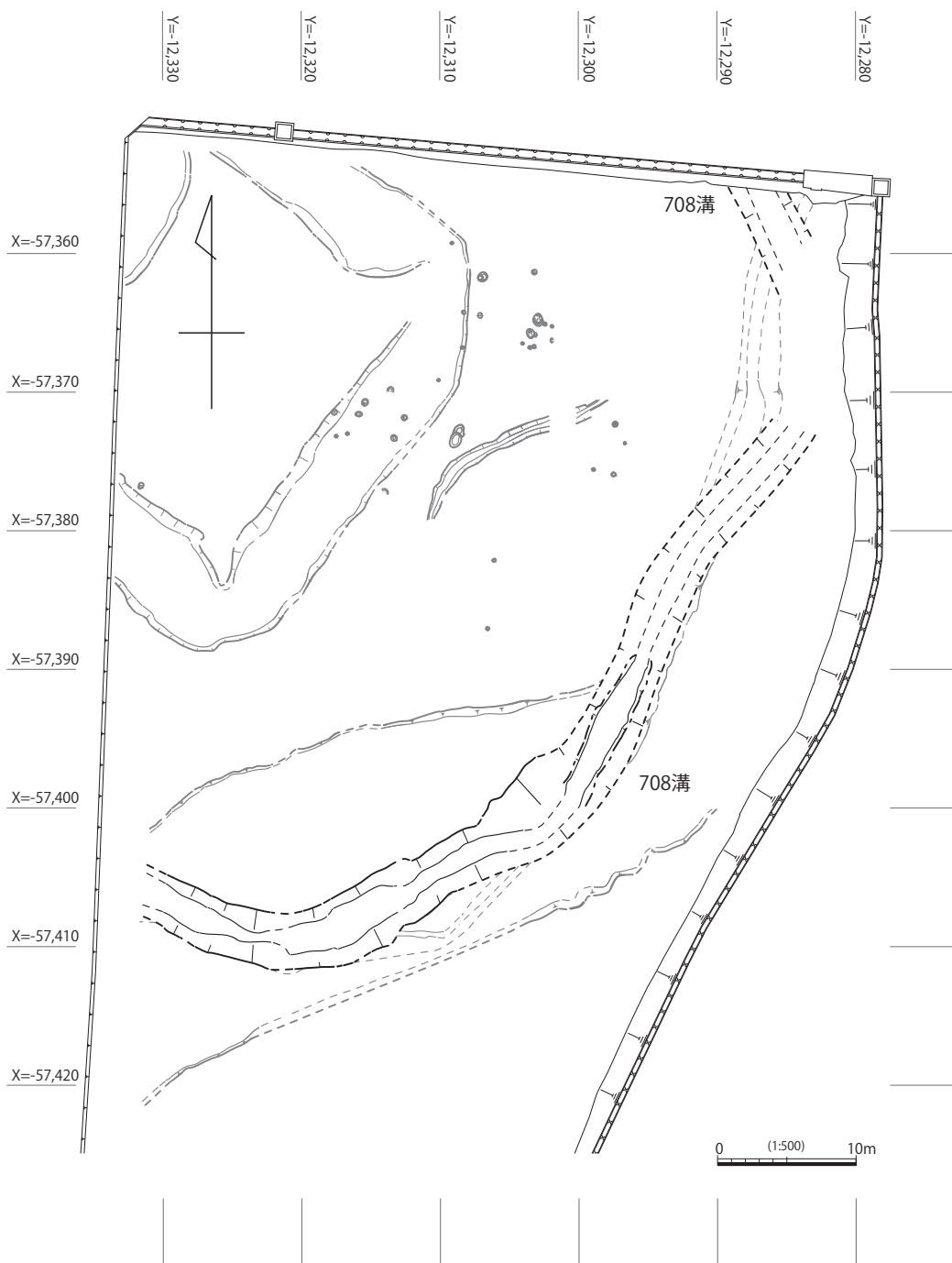
第IV-6-12図 601・635・707・708溝土層断面

ているものとする。下層に、薄いシルト～粘土の堆積が複数認められた。また、埋土上層は細砂混じりの堆積が認められた。人為的に埋められたかどうか判断できないが、明瞭なラミナは認められなかった。土層断面に残る掘方は、幅 2.2 m、深さ 0.55 m である。

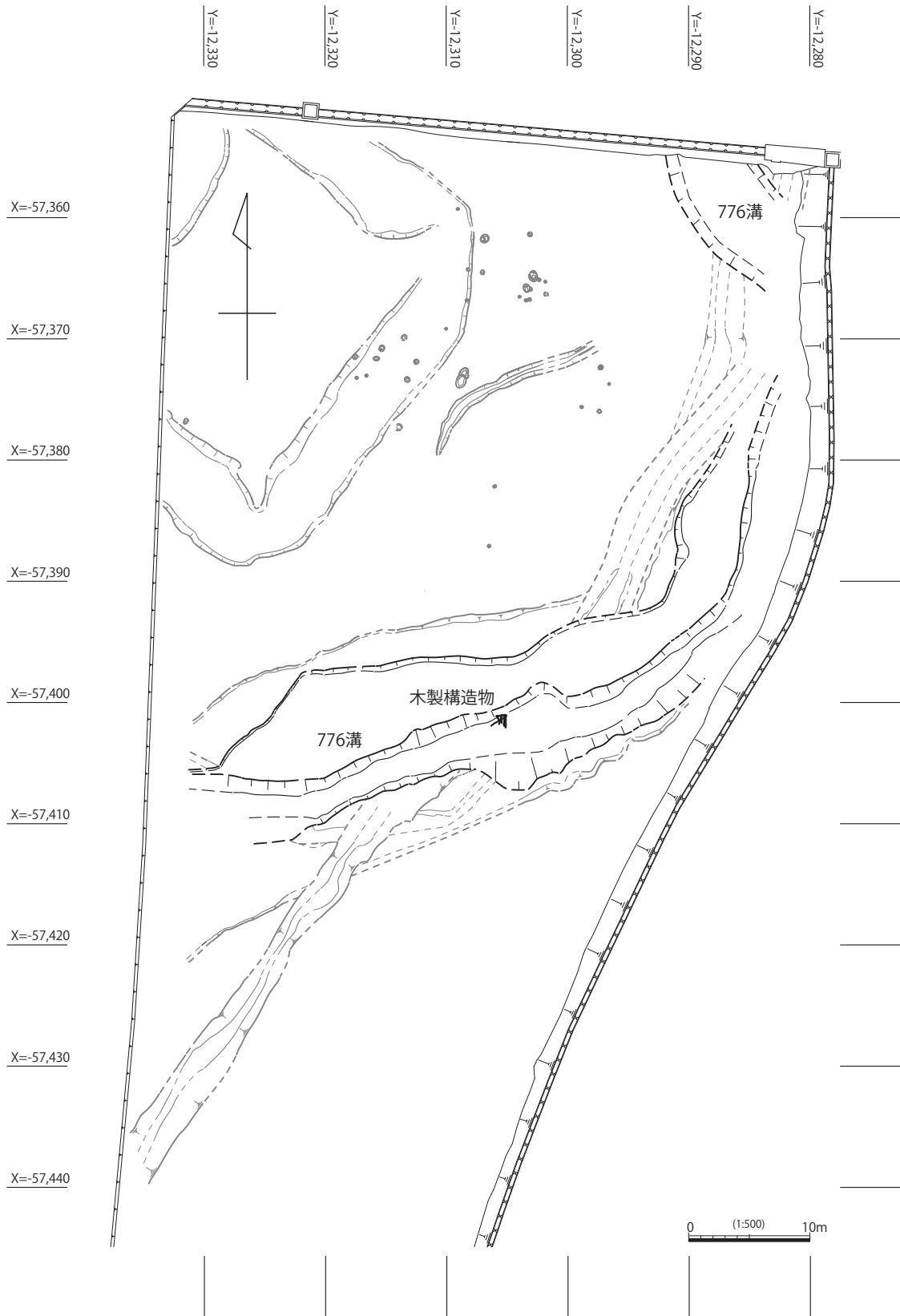
埋土から弥生時代後期～終末期の土器が出土している〔第 V-146 図 第 2 分冊図版 82-1〕。このうち終末期に一般的な特徴をもつ土器片が溝の埋没時期を示しているものと考えられる。

708 溝〔第IV-6-13 図 第 2 分冊図版 80～83〕

調査区西端の X=-57405 ライン付近から南東方向に向かうが、Y=-12,350 ラインから北に向かって



第IV-6-13図 708溝平面



第IV-6-14図 776溝平面

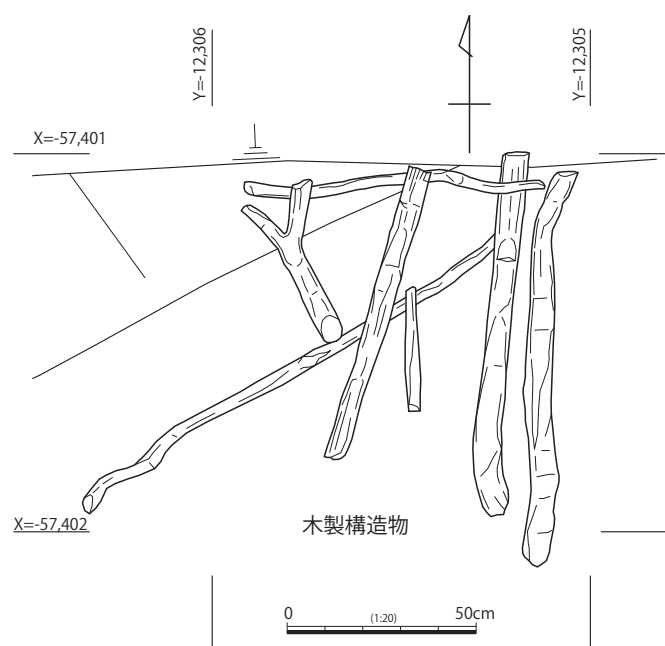
弧を描くように延びる。ほぼ635溝と同一のコースをたどる。したがって、全形を平面的に検出することはできなかったが、調査区の西側から X=57,396 ライン付近までは比較的残りが良かった。溝の規模は、幅 3.4～5 m、深さ 0.8 m 程度である。また、X=57,390～400 ライン間は底面が確認できた。また、土層断面では、調査区北東隅の壁面〔第IV-6-9図〕と X=57,370 ライン〔第IV-6-8図〕で掘方が確認できた。こうした断片的な痕跡をつなぎ、それらから想定すると、調査区北東隅では、635溝よりも、やや北西方向へ通ることが想定された。

埋土中から弥生土器〔第V-147図〕や打製石斧〔第VI-3図2〕、木器が数多く出土した〔第2分冊図版82・2・3・83〕。大型溝群内として調査を行った溝の中では、遺物の出土量が最も多い。土器には弥生時代中期後葉～弥生時代終末期のものがあり、終末期に一般的な低脚杯が埋没時期を示している可能性が高い。打製石斧は下層に帰属する710溝などに本来は伴うものだろう。また、木器は斧柄や杭、矢板片などがある〔本弓II第IV-6-1図〕。

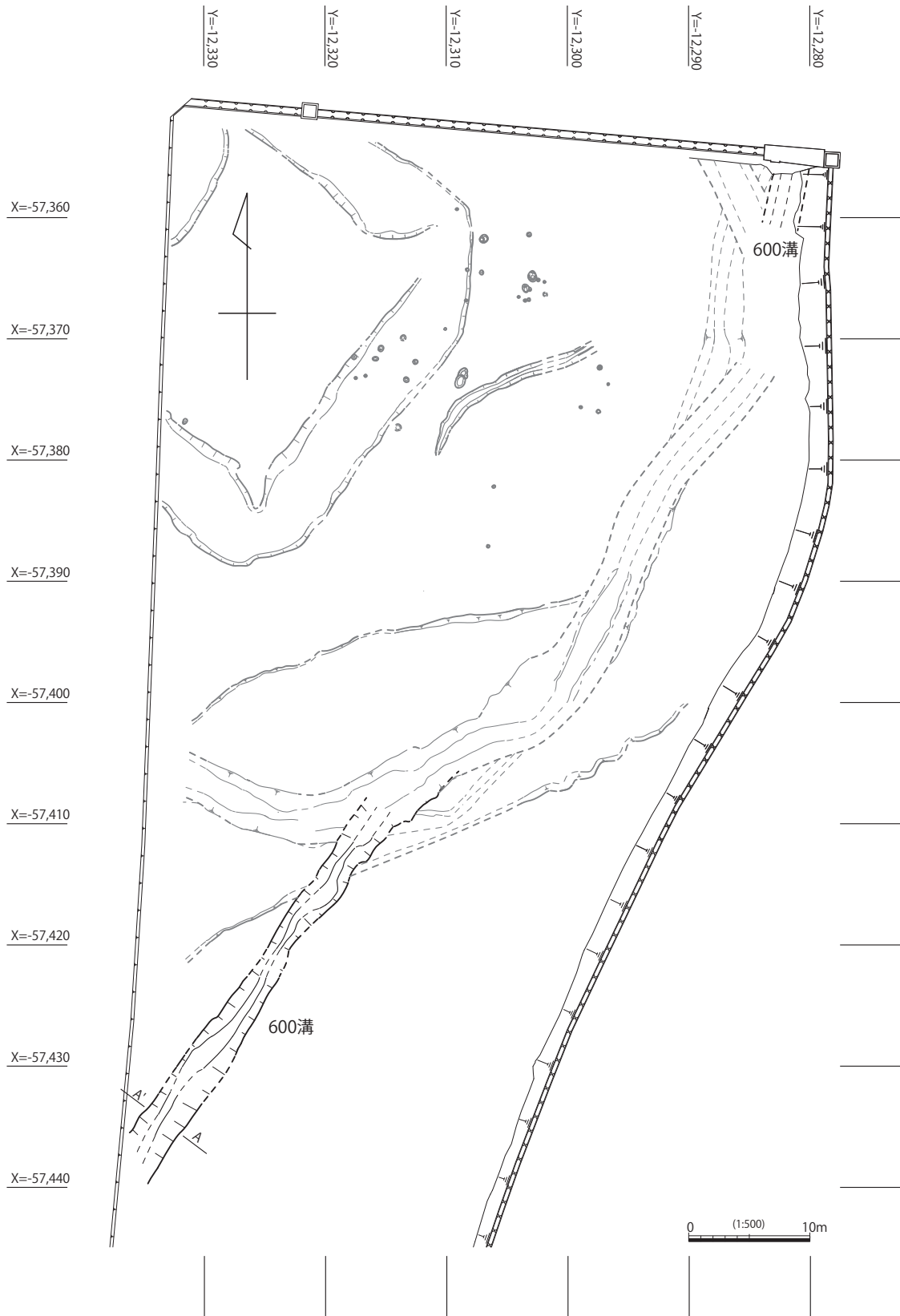
776溝〔第IV-6-14・15図 第2分冊図版84〕

X=57,395～415 ライン間をほぼ東に向かい、調査区東端の釣山の裾部に沿って北に延びる。上部を他の溝が掘りこむが、平面的な形状を広範囲に確認できた。ただし、調査区北端では、一部、溝の続きが検出できない箇所があった。しかし、調査区北東隅の断面〔第IV-6-9図〕と X=57,360 ラインでは776溝に相当する掘方が確認できたので、この付近で溝の方向が北西方向に変わっていると推定された。

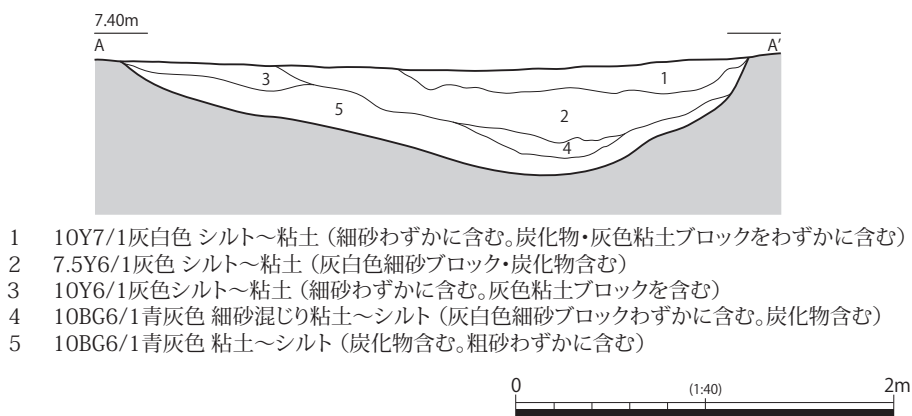
溝の掘り込みは、北側の縁部が2段になっている場所が広くあり、溝幅は最大で8.6 mとなる。一段目の掘方は浅く、深さ0.3 mで、全体的に平坦な面を形成していた。埋没時の堆積を観察すると、1段目から2段目へ流れ込む土があり、別の溝が重複しているのではなく、この形状で機能していた可能性が高い。一方、溝の南側については、他の溝で掘削されている可能性もあり、北側の縁部同様に平坦面があったかどうか不明である。なお、北側縁部の平坦面を除く溝の規模は、幅3～9.5 m、深さ0.9 mほどとなる。



第IV-6-15図 776溝内木製構造物平面



第IV-6-16図 600溝平面



- 1 10Y7/1灰白色シルト～粘土（細砂わずかに含む。炭化物・灰色粘土ブロックをわずかに含む）
- 2 7.5Y6/1灰色シルト～粘土（灰白色細砂ブロック・炭化物含む）
- 3 10Y6/1灰白色シルト～粘土（細砂わずかに含む。灰色粘土ブロックを含む）
- 4 10BG6/1青灰色 細砂混じり粘土～シルト（灰白色細砂ブロックわずかに含む。炭化物含む）
- 5 10BG6/1青灰色 粘土～シルト（炭化物含む。粗砂わずかに含む）

第IV-6-17図 600溝断面

埋土からは弥生土器〔第V-14-8図〕や小型の磨石〔第VI-3図3〕、木材が出土した。出土した土器片は弥生時代終末期のものである。また、木材は自然木が多くあったが、一部に切断などの加工が認められるものもあった。製品の類は出土していない。

また、底面では丸太材を組み合わせた木製構造物を検出した〔第IV-6-15図 第2分冊図版84-2〕。構造物があったのは、Y = -12305 ～ 306 ライン間に位置する。径0.1 m、長さ0.8 ～ 1 m大の丸太材3本とY字状に枝分かれしている長さ0.3 ～ 0.4 m大の丸太材が南北方向に並んで出土し、さらにそれらと直交して組み合う形で径0.1 m以下、長さ0.8 ～ 1.2 mの細い丸太材が2本並んでいた。溝の底に対してほぼ水平な状態で出土しており、堰のような構造物の一部が残存したものと考えた。

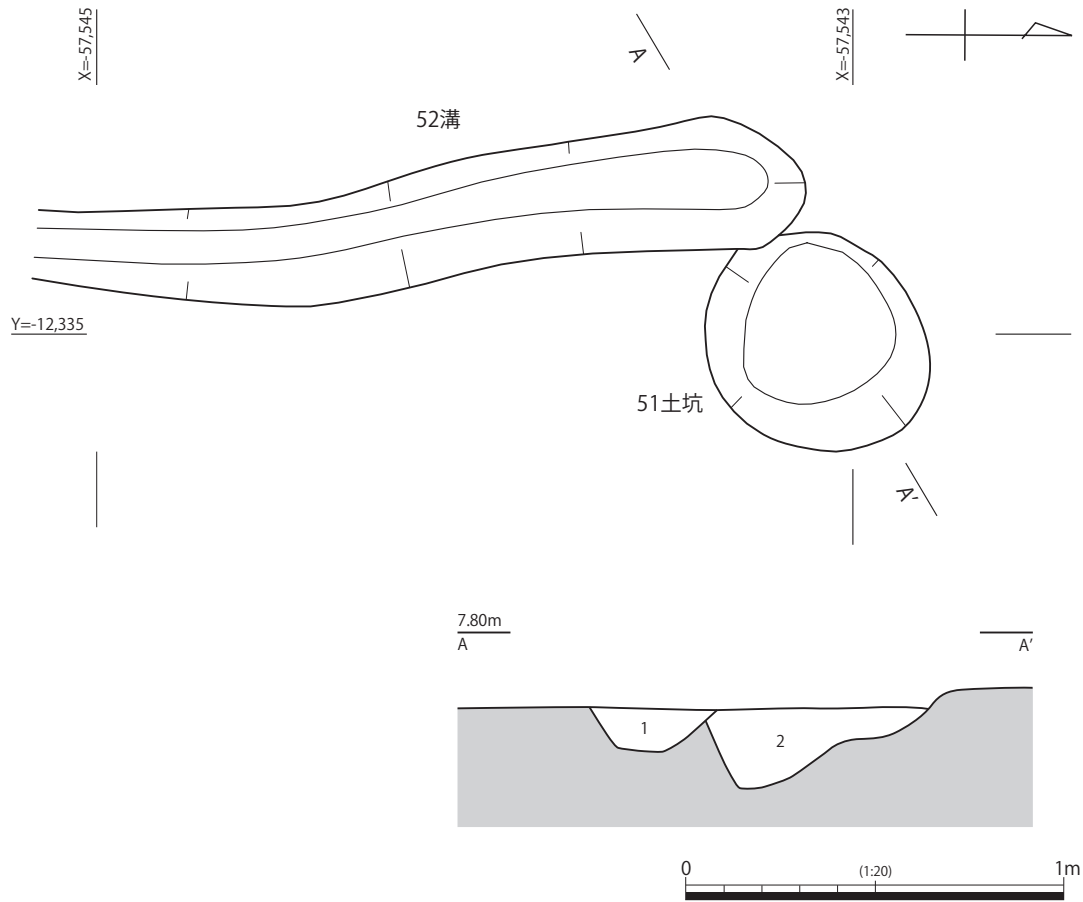
600 溝〔第IV-6-16・17図 第2分冊図版85・86-1〕

大型溝群として調査した溝の中では最も古い溝である。調査区西端のX=-57,440 ライン付近から出現し、直線的に北東方向へのびる。幅1.5 ～ 3.3 m、深さは0.6 mで、その後に掘削された溝とは溝のあり方が明らかに異なる。平面的に確認できたのはX=-57,410 ライン付近までの約30 mでそれより北側については、上部から他の溝に掘削されて、大部分が失われていた。ただし、調査区北東隅の壁面〔第IV-6-9図〕に、600 溝と考えられる埋土が一部確認できたことから、調査区の北端に向かって直線的に伸びていることがうかがわれる。

位置や規模などから、調査区南側で検出した5溝の延長である可能性が高い。埋土から弥生時代後期前葉の高坏の脚部〔第V-14-9図〕が出土しており、埋没時期にも矛盾がない。

以上、大型溝群として調査を行った各溝について報告した。このうち600 溝と、600 溝埋没後に掘削された776 溝以降の溝とでは、溝のあり方に大きな違いが認められた。また埋土中から出土した土器をみても、600 溝は弥生時代後期前葉、776 溝以降の溝は終末期に埋没している可能性が高い。したがって、600 溝と776 溝の間には、かなりの時期差があったことがわかる。したがって、一連の調査で把握した溝として報告を行ったが、600 溝と776 溝以降の溝は、別のものとして評価をする必要がある。

詳しくは後述するが、600 溝と5溝が埋没した後、弥生時代後期中葉以降の調査区南側には、掘立柱建物や土坑などが多数分布している。776 溝以降の溝については、調査区南側に営まれた居住域と



- 52 溝 1 5Y7/1灰白色～6/1灰色 シルト～粘土 (わずかに粗砂含む。炭化物・ブロック土を含む)
 51 土坑 2 10G4/1晴緑灰色 シルトと5Y7/1灰白色シルト(直下の包含層(第3-2a層))の混土

第IV-6-18図 51土坑・52溝平・断面

の関係がうかがわれる。

(3) その他の溝

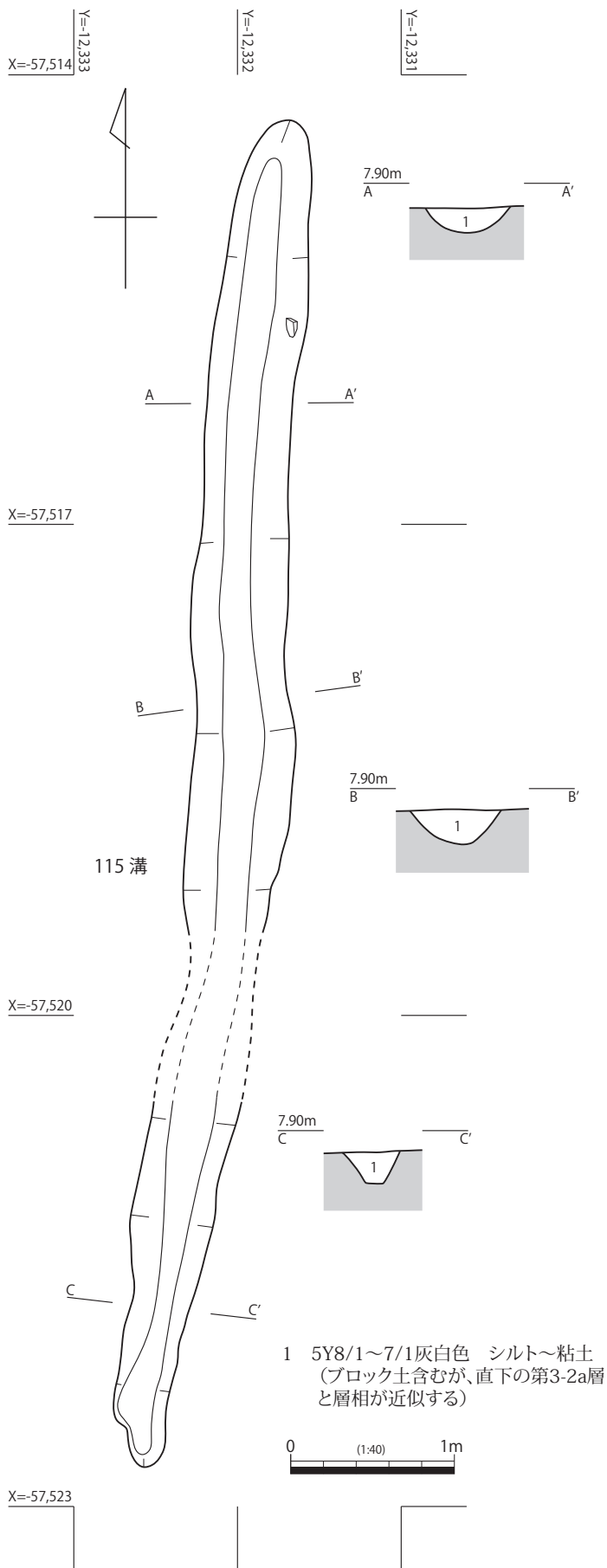
第3-1-3a層下面では、調査区南側を中心に、先述した大型溝群以外にも、多くの溝状遺構を確認している。

ここでは、埋土中から時期のわかる遺物が出土していたり、規模の大きな溝状遺構について述べることにする。

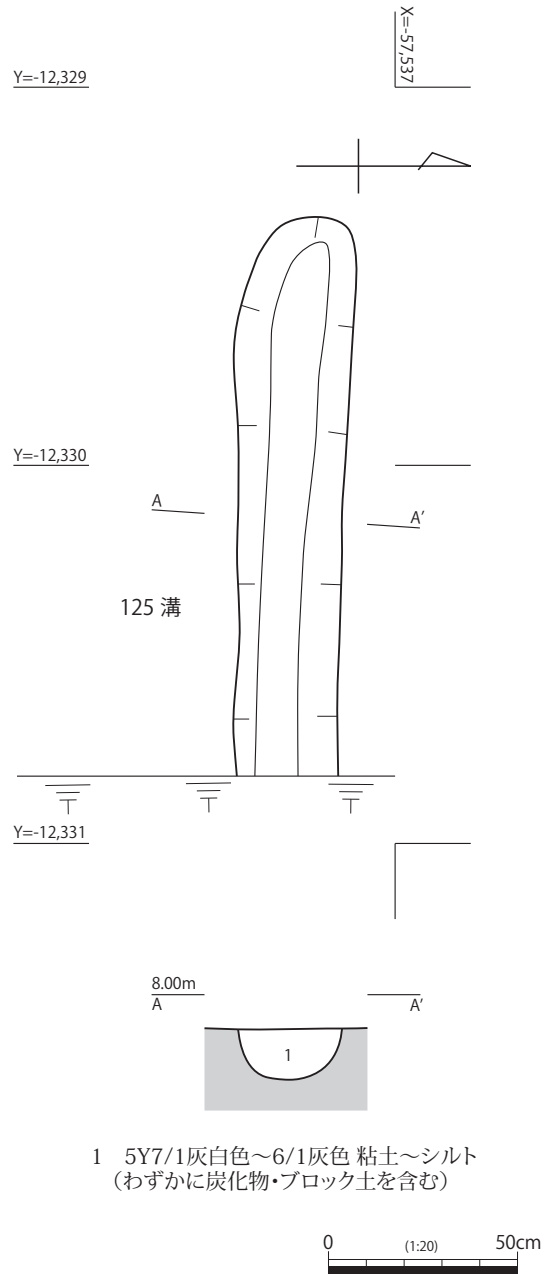
また、遺物を伴わない溝状遺構については、本節末に掲載した一覧表〔第IV-6-1～3表〕に、位置や規模、埋土などを記載しているので、参照いただきたい。

52 溝〔第IV-6-18図 第2分冊図版88-2、89-1〕

調査区南、4落ち込み北岸の5溝埋土上で検出した。南北方向にのびる溝で南端は4落ち込みによって掘削されている。北側が一部51土坑を切っている。現存で長さ2m、幅0.2～0.3m、深さ0.1mをはかる。埋土から弥生時代後期後葉の甕〔第V-14-10図〕が出土している。



第IV-6-19図 115溝平・断面



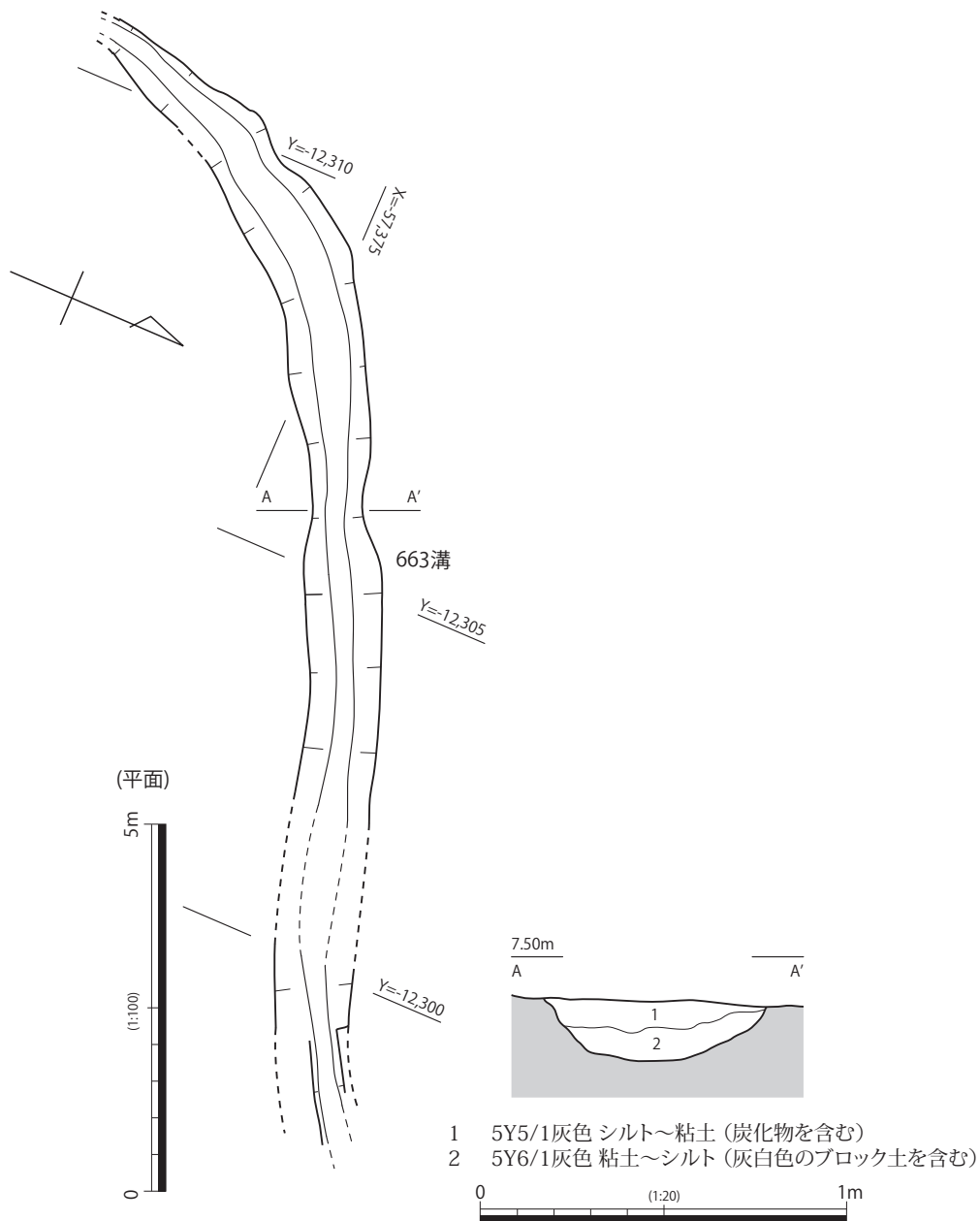
第IV-6-20図 125溝平・断面

115 溝〔第IV-6-19 図〕

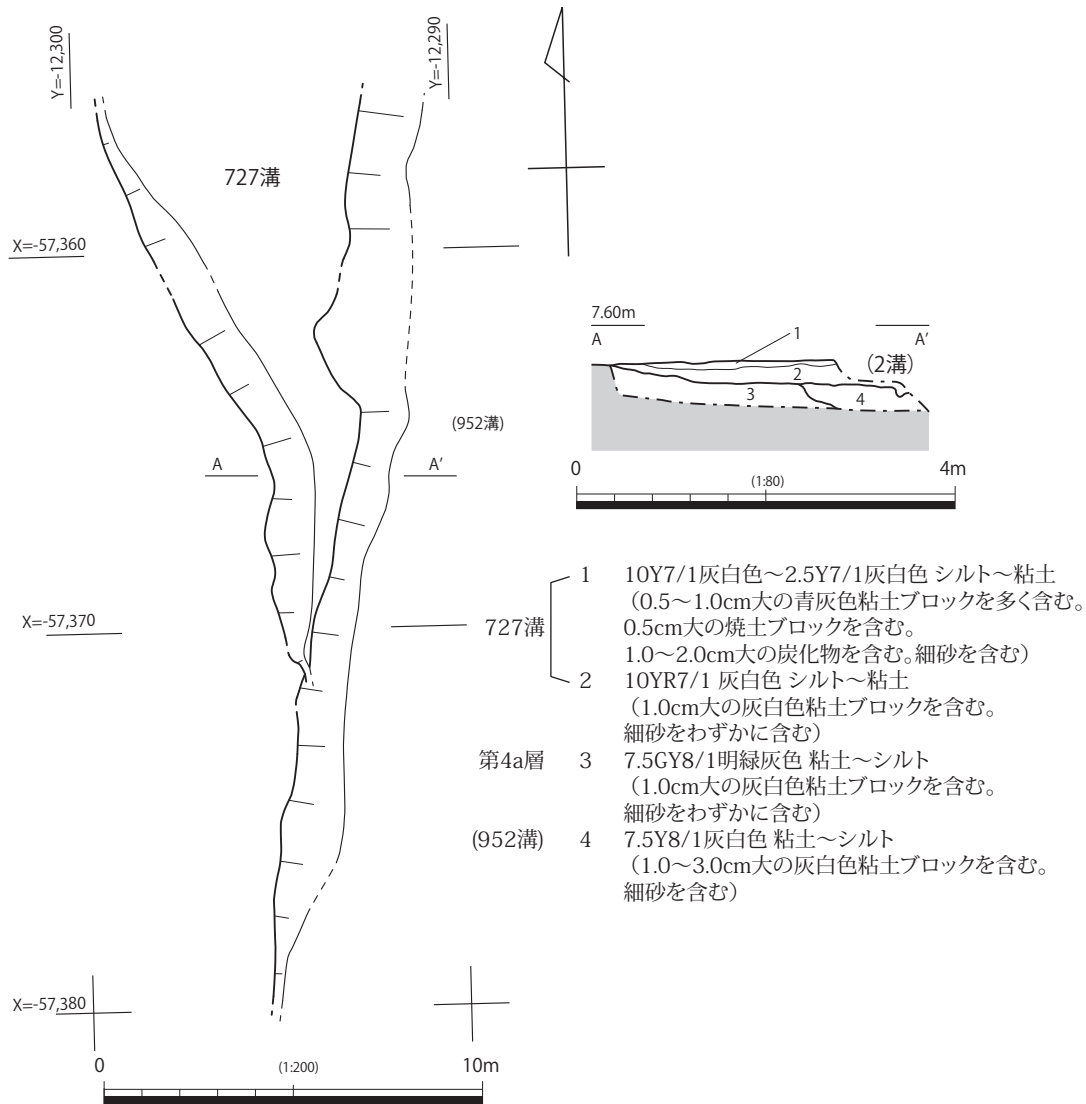
調査区南、X=57,514～523 ライン間のほぼ Y=-12,332 ライン上に位置する。長さ 8.1 m、幅 0.3～0.6 m、深さ 0.15～0.2 m の南北方向にのびる直線的な溝である。断面は北側では半円形であるが、南側では両端とも鋭角的に立ち上がる。埋土から弥生時代後期後葉の壺〔第 V-14-11 図〕が出土している。

125 溝〔第IV-6-20 図 第 2 分冊図版 89-2〕

調査区南、東西方向にのびる溝。東側が暗渠を利用した排水用の溝によって掘削されているが、現存で長さ 1.5 m、幅 0.2～0.3 m、深さ 0.1 m の東西方向にのびる直線的な溝である。断面は半円形である。埋土から弥生時代後期後葉の甕〔第 V-14-12 図〕が出土している。



第IV-6-21図 663溝平・断面



第IV-6-22図 727溝平・断面

663 溝 [第VI-6-21 図]

調査区北側の X=-57,380～370 ライン間、Y=-12,310～320 ライン間に位置する。東西両端は土層観察用のトレンチ等によって掘削されているが、現状で長さ 15.4 m、幅 0.5～1.1 m、深さ 0.15 m の溝である。西端付近は幅が狭いが、徐々に湾曲しながら南西-北東方向へのび、幅も広がっている。東端付近で今度は北側へ湾曲するような平面となっているが、続きは検出できなかった。断面は半円形である。埋土から弥生時代後期前葉の甕と弥生時代終末期後半の鼓形器台の破片が出土している。〔第V-14-13 図〕 検出面から、埋没時期は弥生時代終末期と考えられる。

727 溝 [第IV-6-22 図 第2分冊図版90]

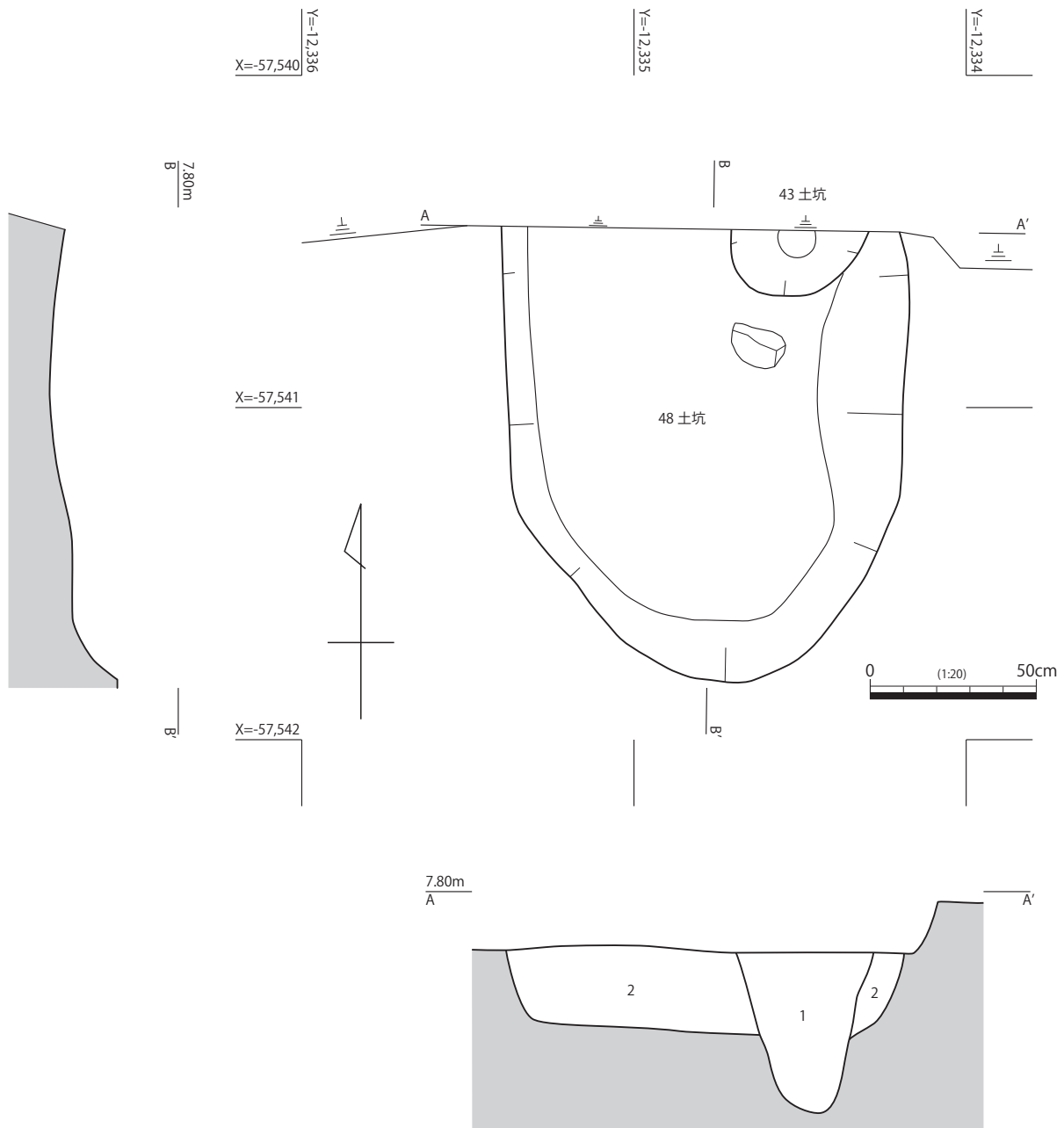
調査区北端、Y=-12,300～290 ライン間に位置し、南へ約 15 m のびる溝である。第3-2a 層下面検出時に 952 溝と共に検出したものであり、土層断面から 952 溝よりも新しい溝である。東側、および南側については、2 溝の掘削によって検出できなかった。北西-南東方向に流れる溝と考えられ、現存で最大幅 5.5 m、深さ 0.25 m。埋土から弥生時代後期前葉～中葉の土器〔第V-14-14 図〕や木材が

出土しており、出土遺物から第3-1-3a層下面遺構とした。規模や位置から、先述した大型溝群の一部の可能性もあるが、具体的にどの溝と繋がるかは不明である。

第2項 土坑など

第3-1-3a層下面では、調査区南側を中心に数多くの土坑、ピットなどを検出している。ここでは、時期の分かる遺物が出土しているものや規模の大きなもの、また埋土や断面などから柱穴と考えられるものについて述べる。

また、ここで触れていない他の遺構については、本節末に、位置や規模、埋土などを記載した一覧



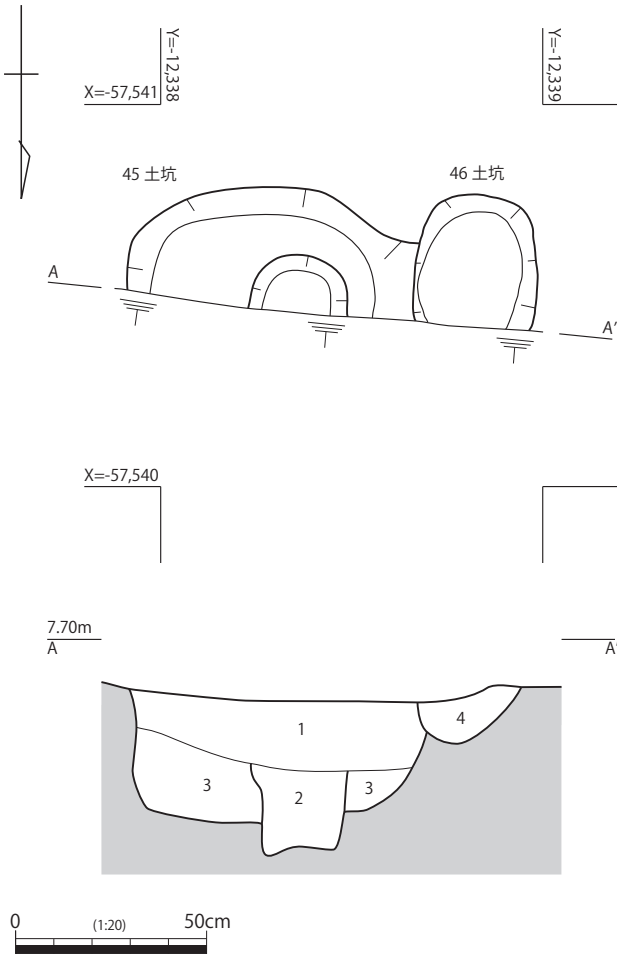
- 1 10G4/1暗緑灰色シルトと、5Y7/1灰白色シルト(直下の第3a-2層)の混土
- 2 5Y7/1灰白色～6/1灰色シルト～粘土(わずかに粗砂含む。炭化物・ブロック土を含む)

第IV-6-23図 43・48土坑平・断面

表を参照されたい〔第IV-6-1～3表〕。

43・48土坑〔第IV-6-23図 第2分冊図版91〕

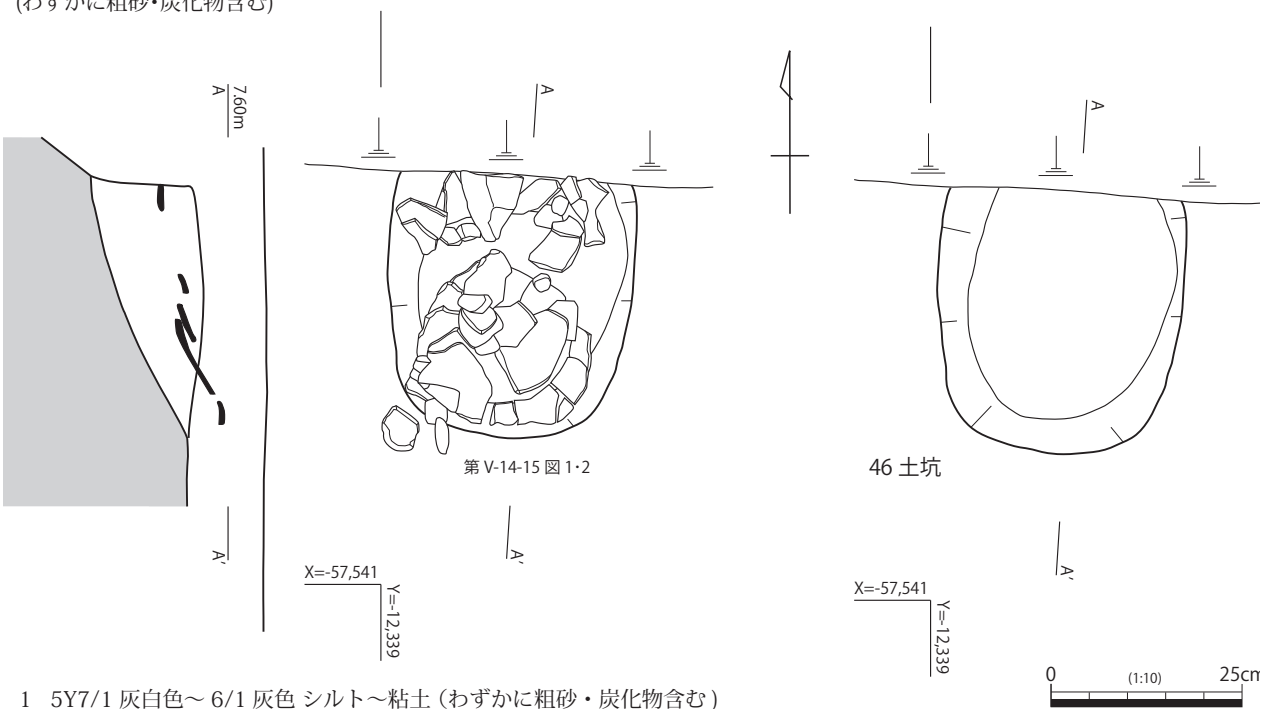
調査区南、X = -57,540 ラインの土層観察用トレンチ沿いで検出した。43土坑は、土層観察用トレンチによって北側半分ほどが掘削されているが、径0.4 m、深さ0.5 mほどの円形の土坑であると考えられる。48土坑埋没後に掘られており、断面形から柱穴の可能性はあるが、周辺に対応するような柱穴は後述する45土坑のみであり、明確な建物跡はみつっていない。48土坑も土層観察用トレンチで北側が掘削されている。全体形は不明だが、現存で長軸1.38 m、短軸1.2 m、深さ0.13～0.25 mの南北に長い楕円形の土坑である。埋土からは炭化物や粘土ブロック、0.15 m大の礫や弥生時代後期の土器片が出土しており、土器などを廃棄した土坑と考えられる。



- 1 5Y8/2灰白色シルト～粘土 (5Y7/1灰白色 粘土・炭化物含む)
- 2 7.5Y8/1灰白色～7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト (5Y7/1灰白色 粘土多く含む。炭化物含む)
- 3 7.5Y8/1灰白色シルト～粘土
- 4 5Y7/1灰白色～5Y6/1灰色シルト～粘土 (わずかに粗砂・炭化物含む)

45・46土坑〔第IV-6-24図 第2分冊図版92〕

調査区南、X=-57,540 ラインの土層観察用トレンチ沿いで検出した。いずれの土坑も北側が

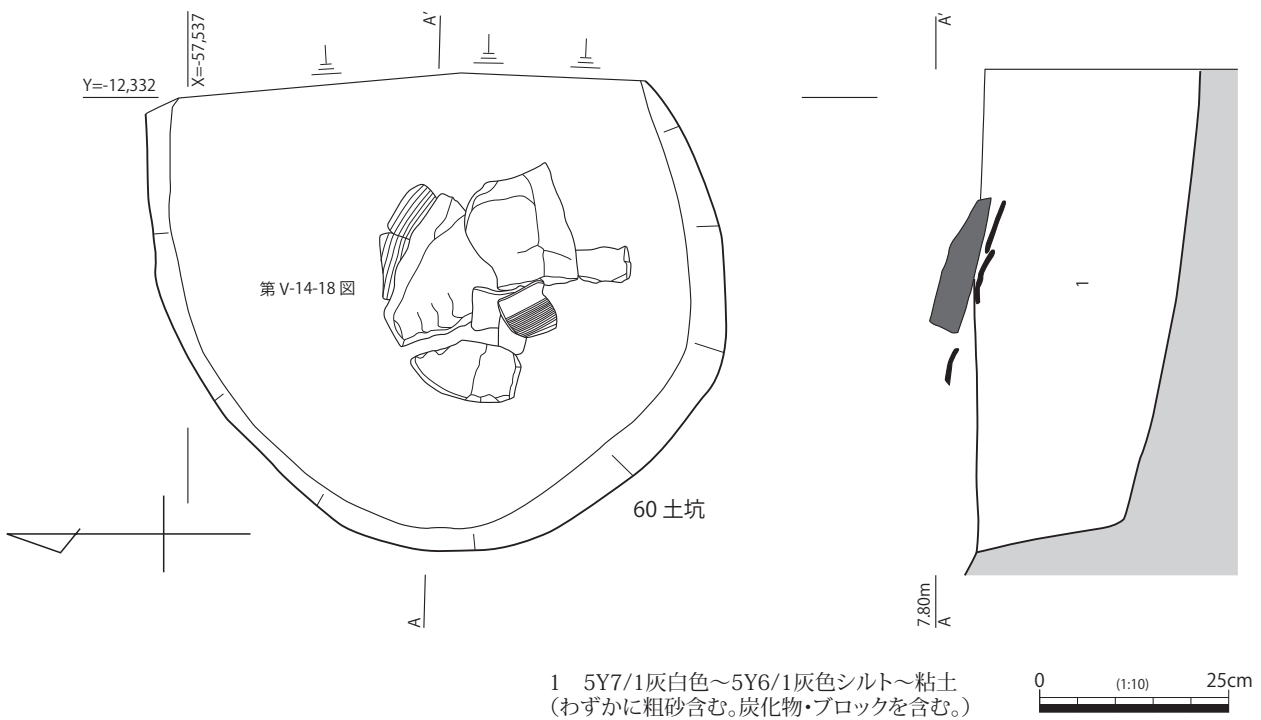
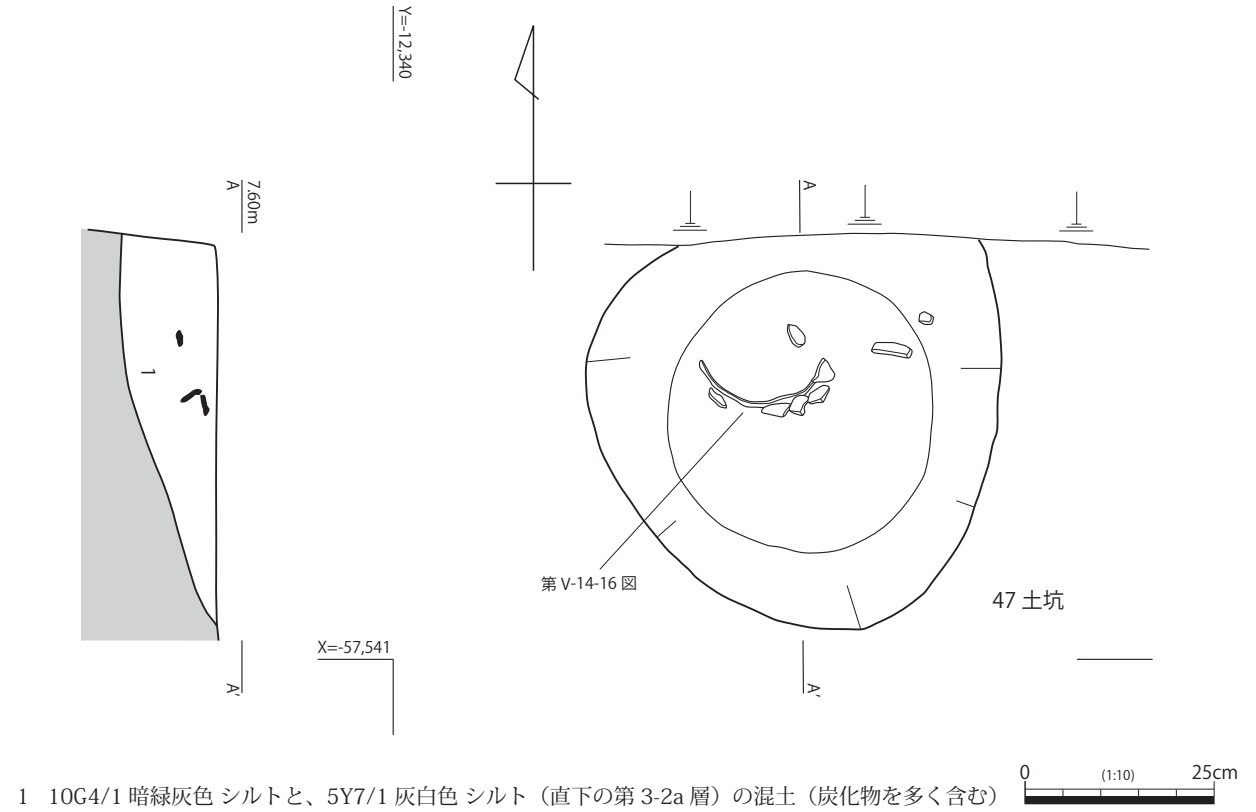


- 1 5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (わずかに粗砂・炭化物含む)

第IV-6-24図 45・46土坑平・断面

土層観察用トレンチによって掘削されている。

45土坑は現存で長軸0.74m、短軸0.32mの東西に長い楕円形の土坑であり、2段堀となっている。1段目の深さは0.2mほどである。2段目は東端より0.3mの位置から真っ直ぐ落ち込んでおり、深さは8cmほどである。2段目も北側が掘削されているが、径0.25m前後の円形のピット状であったと考えられる。土層断面から柱穴の可能性が高いが、先述したように周辺で対応するような柱穴は



第IV-6-25図 47・60土坑平・断面

43 土坑のみである。

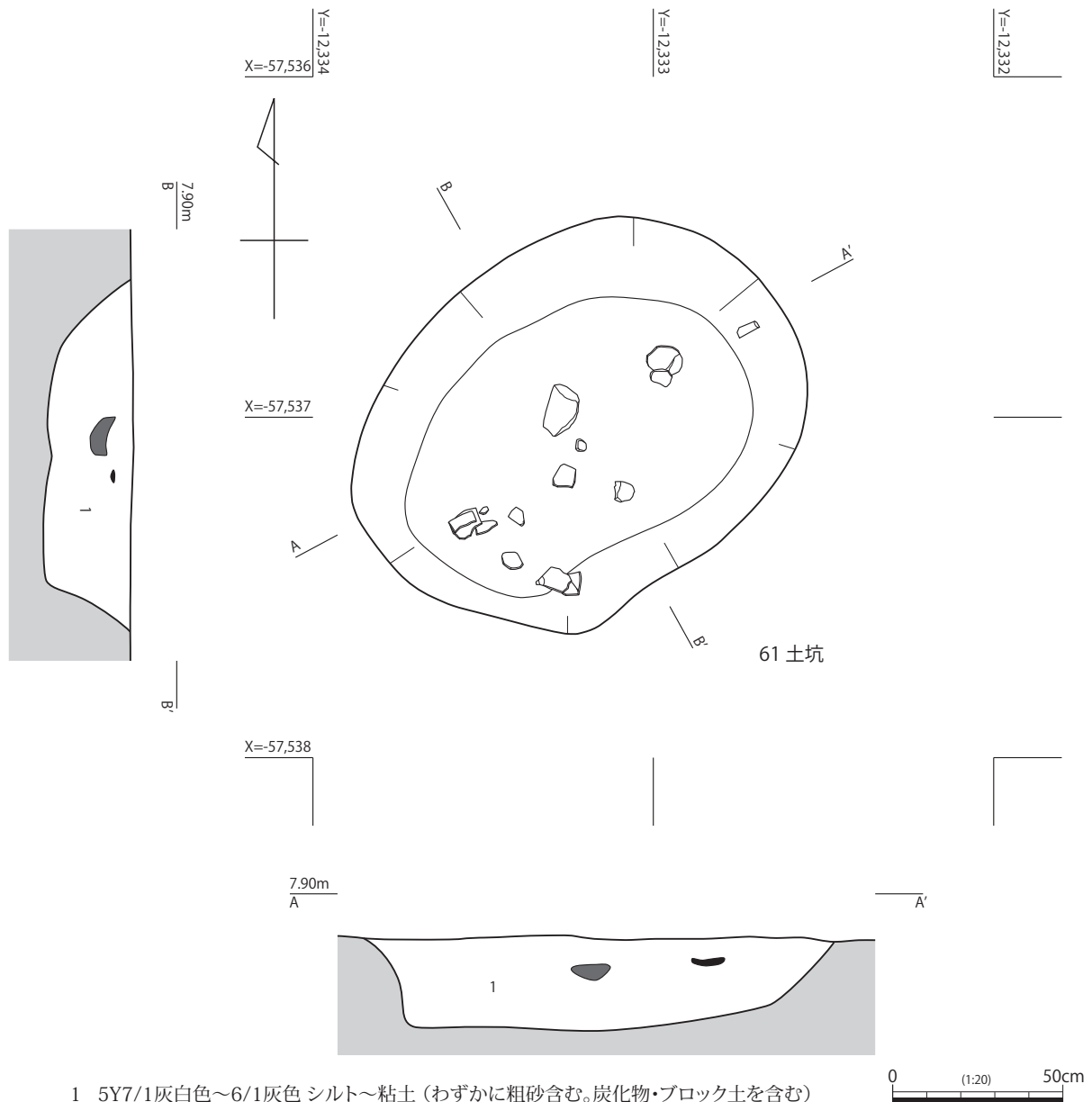
46 土坑は現存で長軸 0.35 m、短軸 0.32 m、深さ 0.15 mの南北に長い隅丸長方形の土坑である。埋土上部から弥生時代後期後葉から終末期の甕〔第 V-14-15 図〕が出土している。

47 土坑〔第IV-6-25 図 第2分冊図版 92-2〕

調査区南、X=-57,540 ラインの土層観察用トレンチ沿いで検出した。北側が一部土層観察用トレンチによって掘削されているが、径 0.6 mほどの円形の土坑と考えられる。深さは 0.1 mで、埋土からは 0.1 m大の礫や 0.2 m大の板石と共に弥生時代終末期の甕が出土している〔第 V-14-16 図〕。他にも炭化物などがみつかっており、土器などを廃棄した土坑と考えられる。

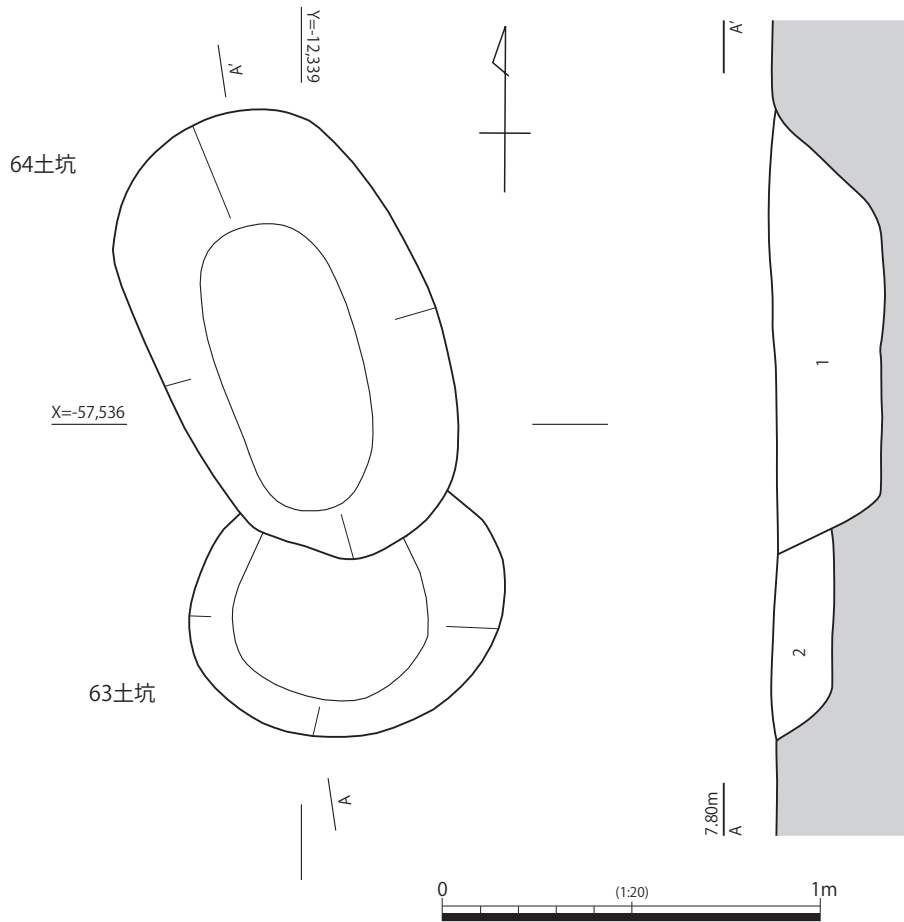
51 土坑〔第IV-6-18 図 第2分冊図版 93-1〕

調査区南、4 落ち込み北岸、5 溝埋土上で検出した。先述した 52 溝と近接しており、52 溝に南西



1 5Y7/1灰白色～6/1灰色 シルト～粘土（わずかに粗砂含む。炭化物・ブロック土を含む）

第IV-6-26図 61土坑平・断面



- 64土坑 1 5Y8/1～7/1灰白色シルト～粘土（ブロック土を含む）
 63土坑 2 5Y7/1～6/1灰白色～6/1灰色シルト～粘土（わずかに粗砂含む。炭化物・ブロック土を含む）

第IV-6-27図 63・64土坑平・断面

隅が一部切られている。径0.6 m、深さ0.1～0.25 mの円形の土坑であり、埋土から弥生時代中期後葉の高坏〔第V-14-17図〕が出土しているが、恐らく下面の5溝のものと考えられる。

60土坑〔第IV-6-25図 第2分冊図版93-2〕

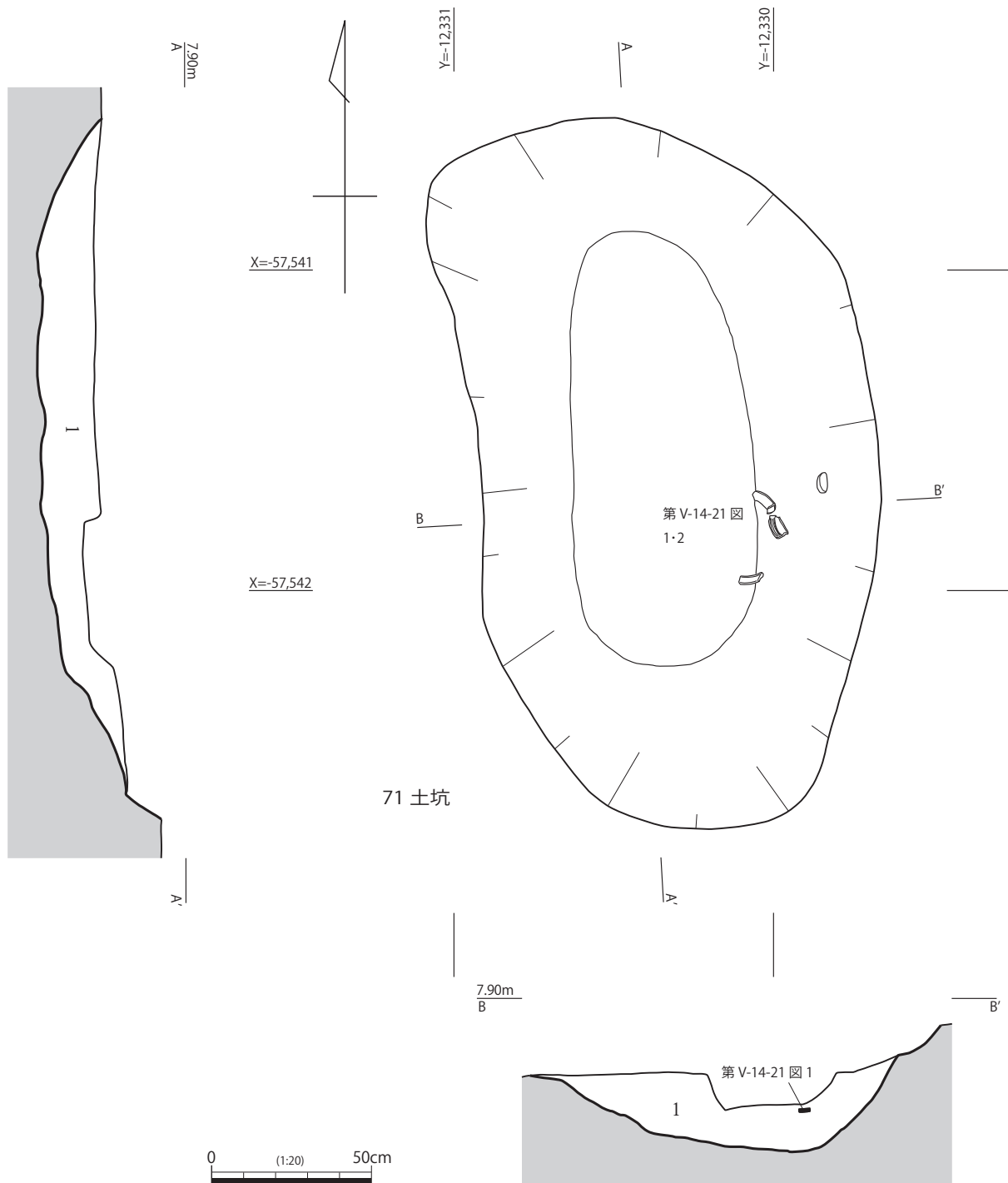
調査区南、X=-57,537ラインとY=-12,332ラインが北東隅にかかる土坑で、東側は側溝によって掘削されている。現存で長軸0.75 m、短軸0.63 m、深さ0.2～0.28 mの南北に長い楕円形の土坑である。埋土上面には0.2 m大の板状の石が置かれており、その下から弥生時代後期後葉の鼓形器台〔第V-14-18図〕がつぶれた状態で出土しており、先述した46土坑と様相が似ている。他にも炭化物や粘土ブロックを含んでおり、土器などを廃棄した土坑と考えられる。

61土坑〔第VI-6-26図 第2分冊図版94〕

調査区南、60土坑の西側に隣接している。長軸1.38 m、短軸1 m、深さ0.2～0.25 mの北東-南西方向が長い楕円形の土坑である。埋土内からは、0.1 m大の礫や弥生時代後期後葉の土器〔第V-14-19図〕が出土している。他にも炭化物や粘土ブロックが認められることから、土器などを廃棄した土坑と考えられる。

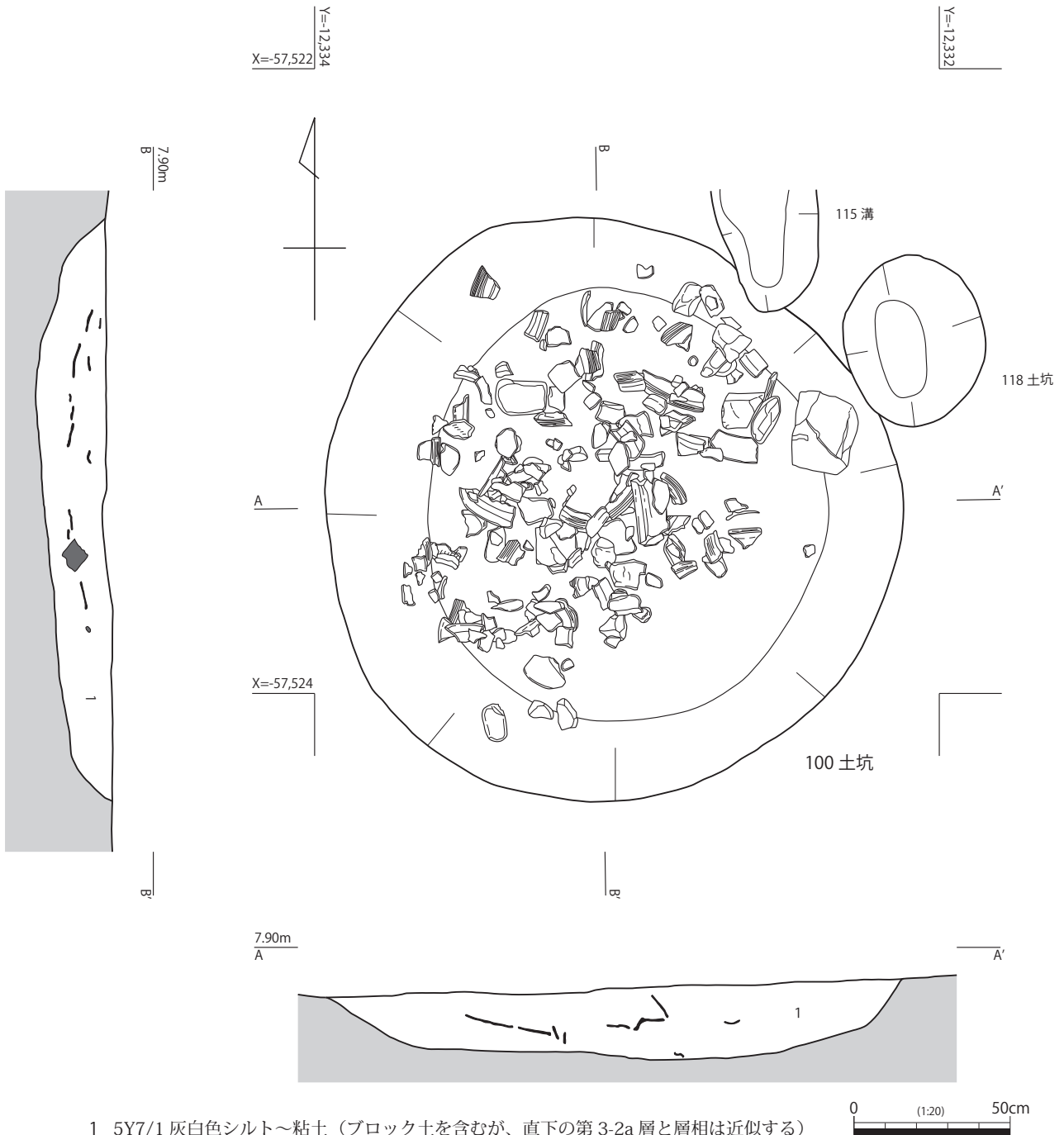
63・64 土坑〔第IV-6-27 図 第2分冊図版 94-2〕

調査区南、6D-4d 区の5溝西岸に位置する。63土坑は長軸1.2m、短軸0.74m、深さ0.3mの北東-南西方向に長い楕円形の土坑であり、64土坑の北側を掘り込んでいる。埋土から弥生時代終末期の甕〔第V-14-20 図〕が出土している。64土坑は、一部63土坑によって削られているが、長軸0.85m、短軸0.7m、深さ0.15mの東西方向に長い円形の土坑である。埋土から遺物は出土していない。



1 5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土(わずかに粗砂含む。炭化物・ブロック土含む)

第IV-6-28図 71土坑平・断面

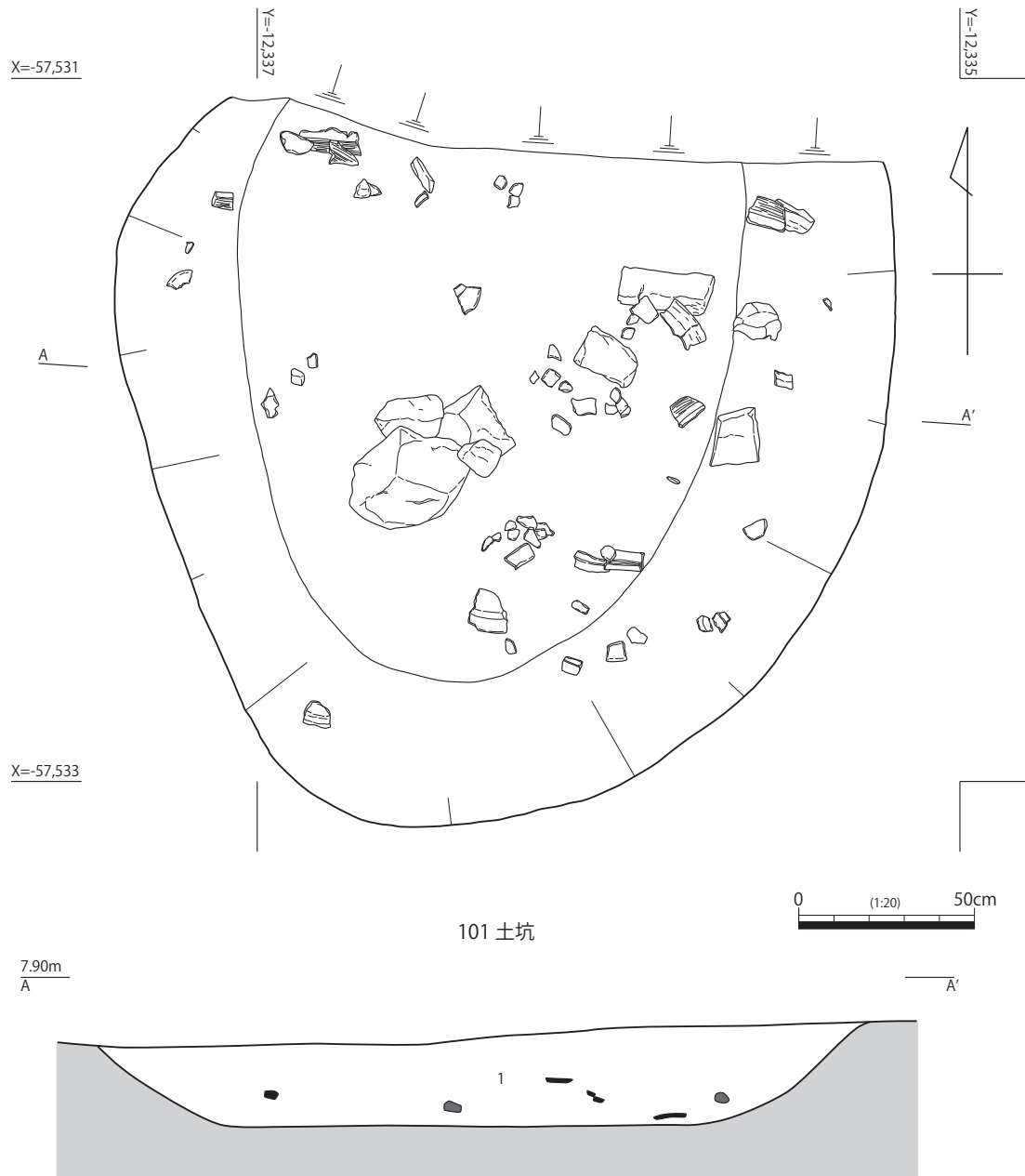


1 5Y7/1 灰白色シルト～粘土 (ブロック土を含むが、直下の第3-2a層と層相は近似する)

第IV-6-29図 100土坑平・断面

71 土坑〔第IV-6-28 図〕

調査区南、X=-57,540 ラインの土層観察用トレンチの南側で検出。Y=-12,330 ラインに一部かかっている。長軸 2.2 m、短軸 1.24 m、深さ 0.2 ~ 0.25 m の南北方向に長い楕円形の土坑である。第 3-1-3a 層下面をさらに掘り下げた段階で検出しているため、実際の深さはもっと深い可能性がある。埋土上部からは弥生時代後期後葉の土器〔第 V-14-21 図〕が出土している。他にも炭化物や粘土ブロックを含んでおり、土器などを廃棄した土坑と考えられる。

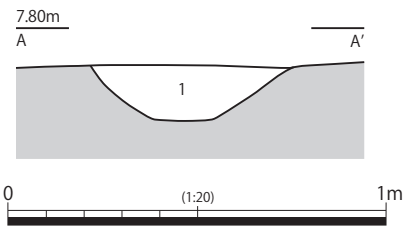
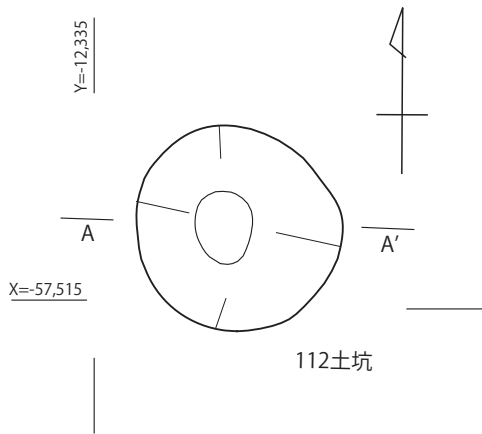


1 5Y7/1 灰白色～5Y6/1 灰色 シルト～粘土（わずかに粗砂・炭化物・ブロック土を含む）

第IV-6-30図 101土坑平・断面

100 土坑〔第IV-6-29 図 第2分冊図版95-2・96〕

調査区南、X=-57,523 ラインと Y=-12,333 ラインの交点が、ほぼ中心となる径 1.85 m のほぼ正円形の土坑である。深さは 0.15 ～ 0.2 m で、埋土の上部から下部まで、0.1 ～ 0.3 m 大の礫と共に多量の弥生時代後期後葉の土器〔第 V-14-24 図〕が出土した。完形に復元できる個体はなく、土器片は廃棄されたものと考えうる。



1 5Y7/1灰白色～6/1灰色シルト～粘土
(わずかに粗砂含む。炭化物・ブロック土を含む)

第IV-6-31図 112土坑平・断面

101 土坑〔第IV-6-30 図 第2分冊図版97・98-1〕

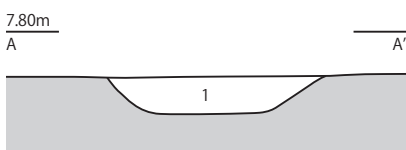
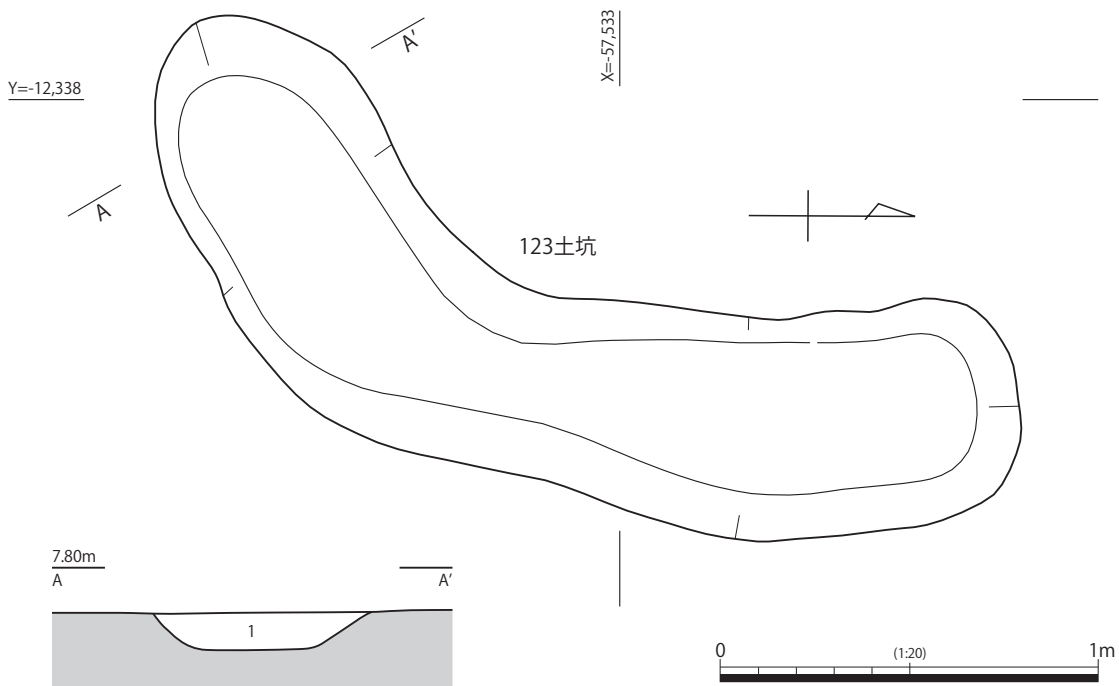
調査区南、X = -57,530 ラインの土層観察用トレンチの南側、5溝埋土上で検出した。北側は土層観察用トレンチで掘削されているが、現状で東西2.2m、南北1.94m、深さ0.2～0.3mの楕円形の土坑である。形態から、長軸は南北方向であったと考えられる。埋土中からは、0.2～0.4m大の大型の礫と共に弥生時代後期後葉～終末期の土器〔第V-14-25 図〕が出土している。炭化物やブロック土も含んでおり、土器などを廃棄した土坑と考えられる。なお、土坑底面で191土坑と掘立柱建物2の柱穴である192土坑を検出している。

112 土坑〔第IV-6-31 図〕

調査区南、6D-2d 区の5溝東岸に位置する。径0.55m、深さ0.15mの円形の土坑である。埋土から、弥生時代後期後葉の甕〔第V-14-26 図〕が出土している。

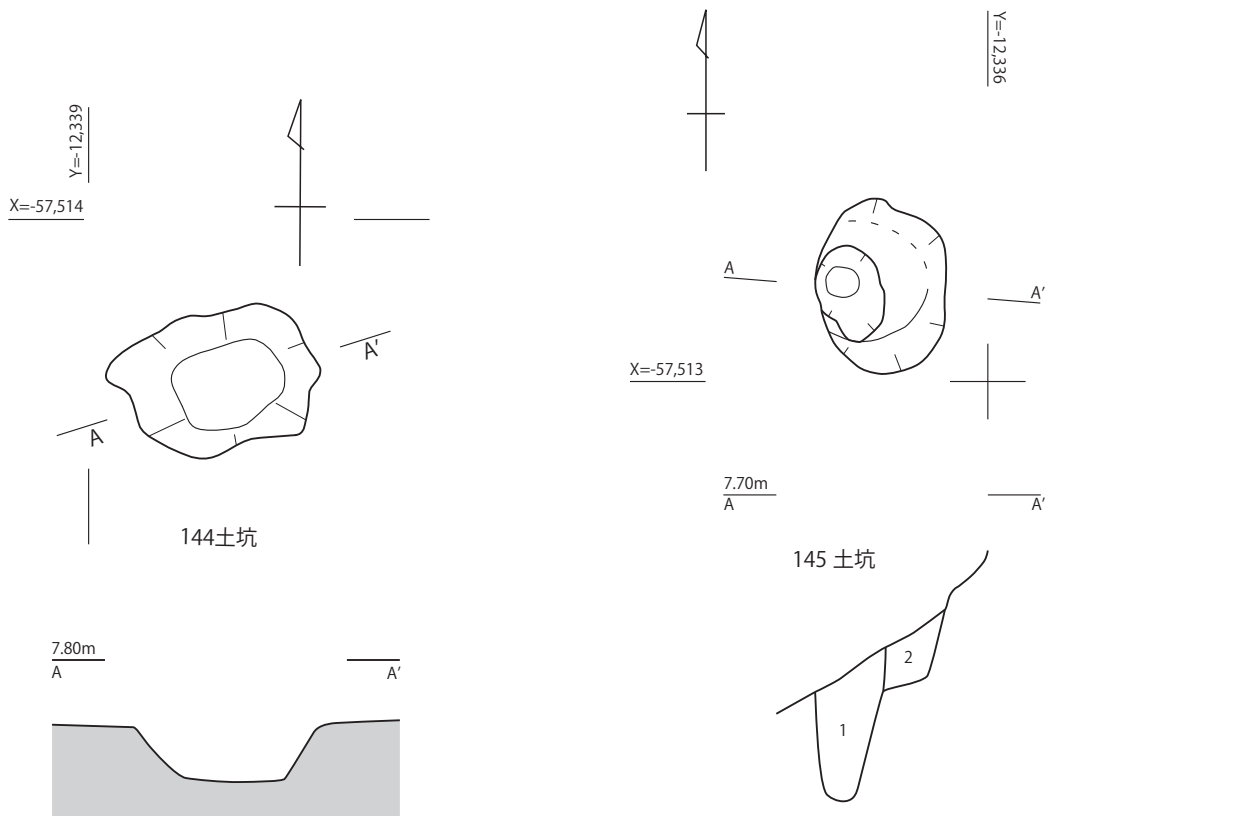
123 土坑〔第IV-6-32 図 第2分冊図版98-2〕

調査区南、6D-3d 区の5溝の西岸に位置する。長軸2.5m、短軸0.9m、深さ0.1mをはかる南北に長く中央部分がやや屈曲して、平面が角度のゆるいV字もしくはL字状の土坑である。埋土から弥生時代後期後葉の甕〔第V-14-27 図〕が出土している。



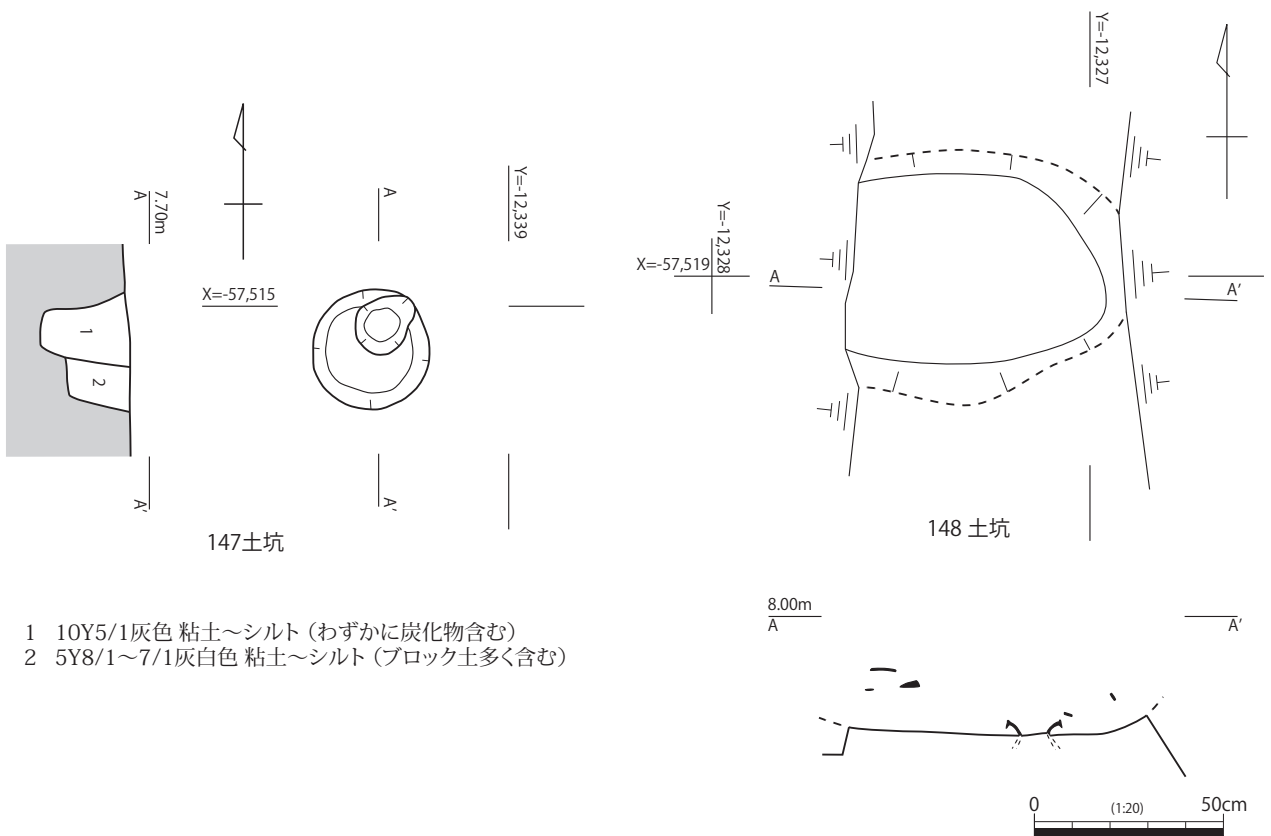
1 5Y7/1灰白色～6/1灰色シルト～粘土 (わずかに粗砂含む。炭化物・ブロック土を含む)

第IV-6-32図 123土坑平・断面



柱痕跡掘方埋土

- 1 5BG5/1青灰色 粘土～シルト (炭化物を微かに含む) 柱痕跡
- 2 5Y8/1～7/1灰白色 粘土～シルト (ブロック土多く含む) 掘方埋土



- 1 10Y5/1灰色 粘土～シルト (わずかに炭化物含む)
- 2 5Y8/1～7/1灰白色 粘土～シルト (ブロック土多く含む)

第IV-6-33図 144・145・147・148土坑平・断面

144 土坑〔第IV-6-33 図 第2分冊図版 104-1〕

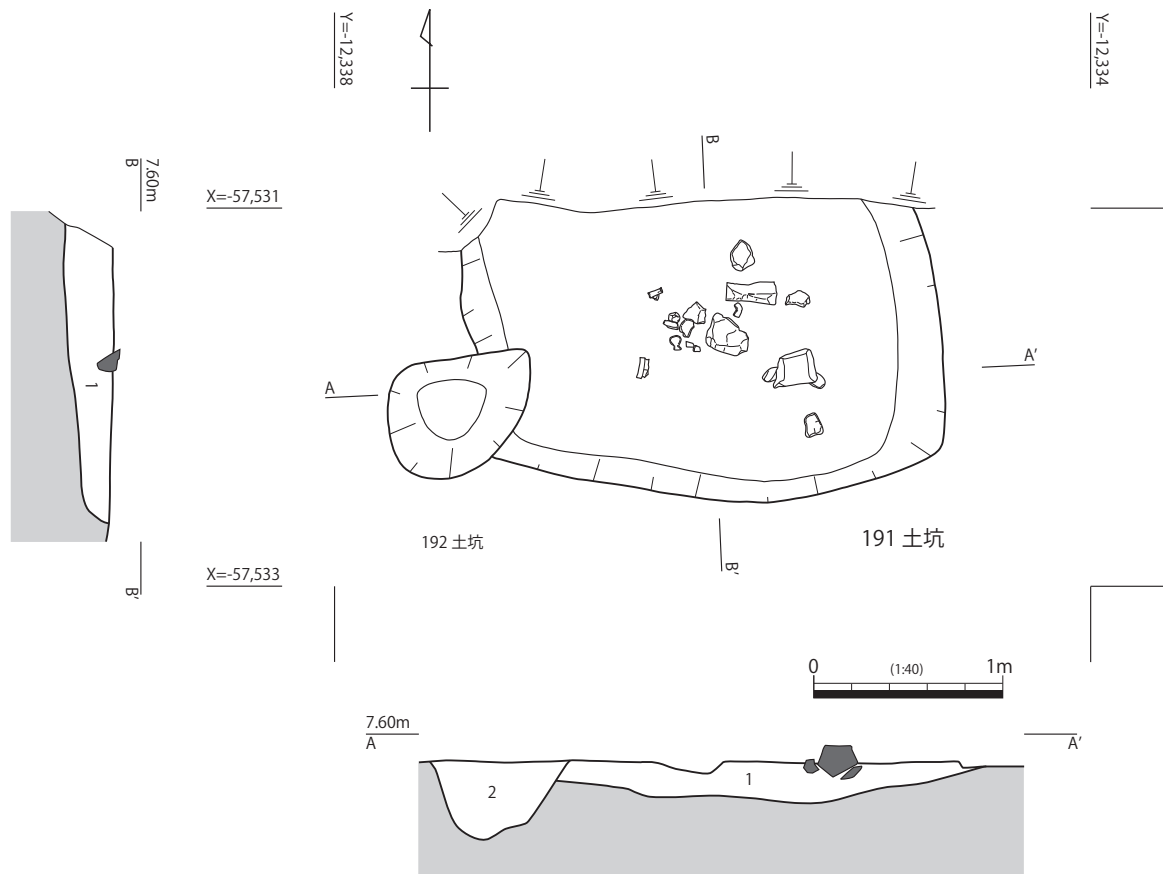
調査区南、6D-2d区にあり、5溝の一部を掘り込む。長軸0.55m、短軸0.35m、深さ0.15m、いびつな形状をしている。埋土から弥生時代終末期後半の甕〔第V-14-28 図〕が出土している

145 土坑〔第IV-6-33 図〕

調査区南、5溝掘削後、その東側法面で検出した。5溝で切られていると考えられ、西側は掘削されている可能性がある。長軸0.46m、短軸0.34mの南北に長い楕円形の土坑で、2段堀になっている。深さは1段目が0.15m、土坑東端から西へ0.15mの位置で2段目が落ち、深さは0.3mである。西側の立ち上がりはそのまま真っ直ぐ上面まで立ち上がる。土層断面などから、柱穴と考えられるが、周辺で柱穴と考えられるのは146土坑のみであり、建物が建っていたかどうか不明である。

147 土坑〔第IV-6-33 図 第2分冊図版 104-2〕

調査区南、5溝と2溝の間の平坦地に位置する。径0.32mの円形の土坑であり、2段堀になっている。1段目の深さは0.16mで、土坑南端から北へ0.15mの位置から2段目が落ち込む。深さは7cm。北側の立ち上がりはそのまま真っ直ぐ上面まで立ち上がる。



- 1 10GY5/1 緑灰色シルト（炭化物・ブロック土含む）
- 2 10GY5/1 緑灰色シルトと、5Y7/1 灰白色シルト（直下の第3-2a層）の混土

第IV-6-34図 191土坑平・断面

先述した146土坑も2段堀の柱穴であるが、底面のレベルが大きく異なっており、関連するかどうか不明である。

148土坑〔第IV-6-33図 第2分冊図版99〕

調査区南、X=-57,519、Y=-12,327上に位置する。東西端が暗渠を使用した排水用の溝で掘削されているが、現存で長軸0.74m、短軸0.68mの東西方向に長い楕円形の土坑である。

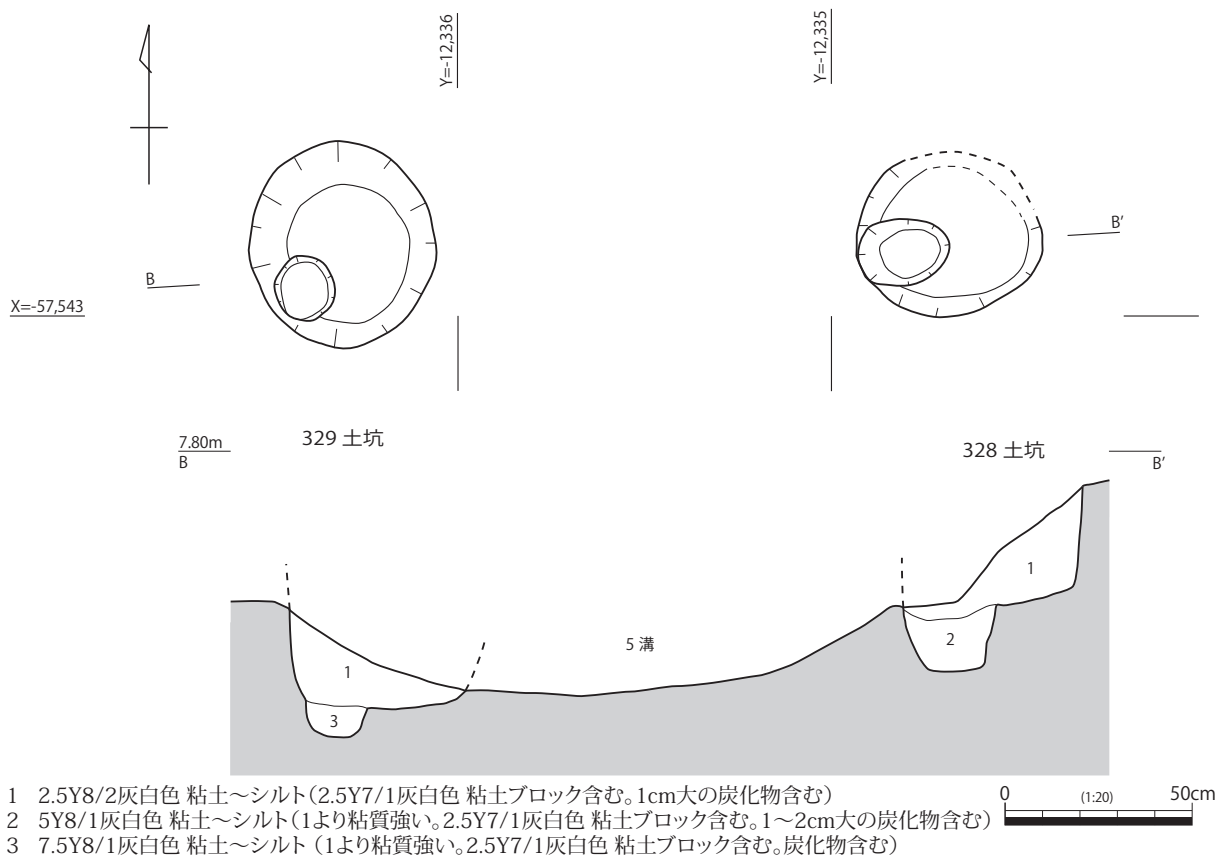
第3-1-3a層掘削中に当該地点で土器が多く出土したため、周囲を精査して本遺構を検出した。よって、上面についてはまだ高かった可能性がある。深さは現状で5cmほどで、土坑内と考えられる範囲で弥生時代後期前葉～後葉の土器が出土している〔第V-14-29図〕。土坑の検出が遅れたため、正確にどの土器が伴うかは不明であるが、恐らく弥生時代後期後葉に埋没したものと考えられる。

191土坑〔第IV-6-34図〕

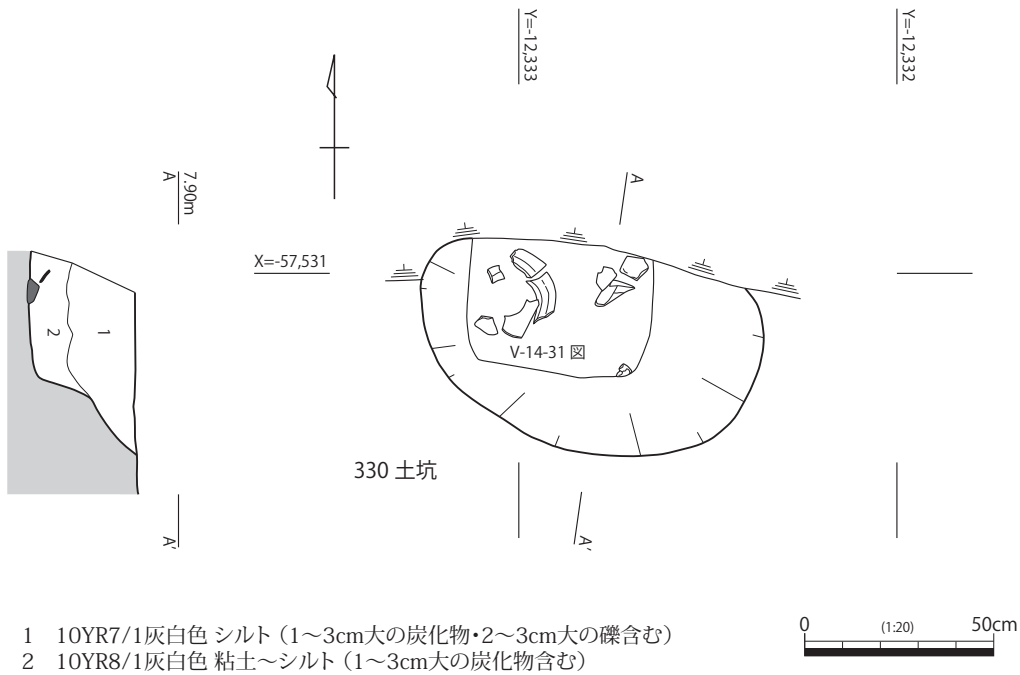
101土坑底面で検出した。X = -57,530ラインの土層観察用トレンチの南側で検出、長軸2.52m、短軸1.4～1.6m、深さ0.15～0.2mの東西方向に長い方形の土坑である。埋土内からは、0.2～0.3m大の礫と共に弥生時代後期後葉～終末期前半の土器〔第V-14-30図〕が出土している。また炭化物やブロック土を含んでおり、土器などを廃棄した土坑であると考えられる。

328・329土坑〔第IV-6-35図 第2分冊図版104-3、105-1〕

調査区南、X = -57,540ラインの土層観察用トレンチの南に位置する。5溝掘削中に検出した。恐



第IV-6-35図 328・329土坑平・断面



第IV-6-36図 330土坑平・断面

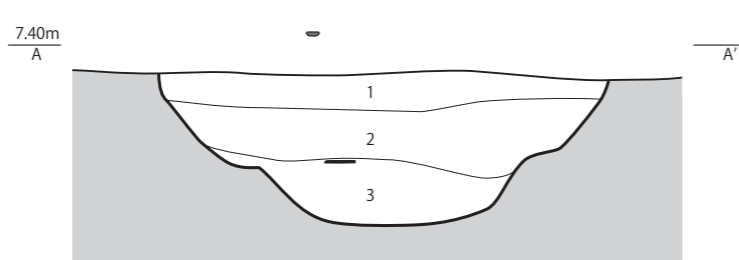
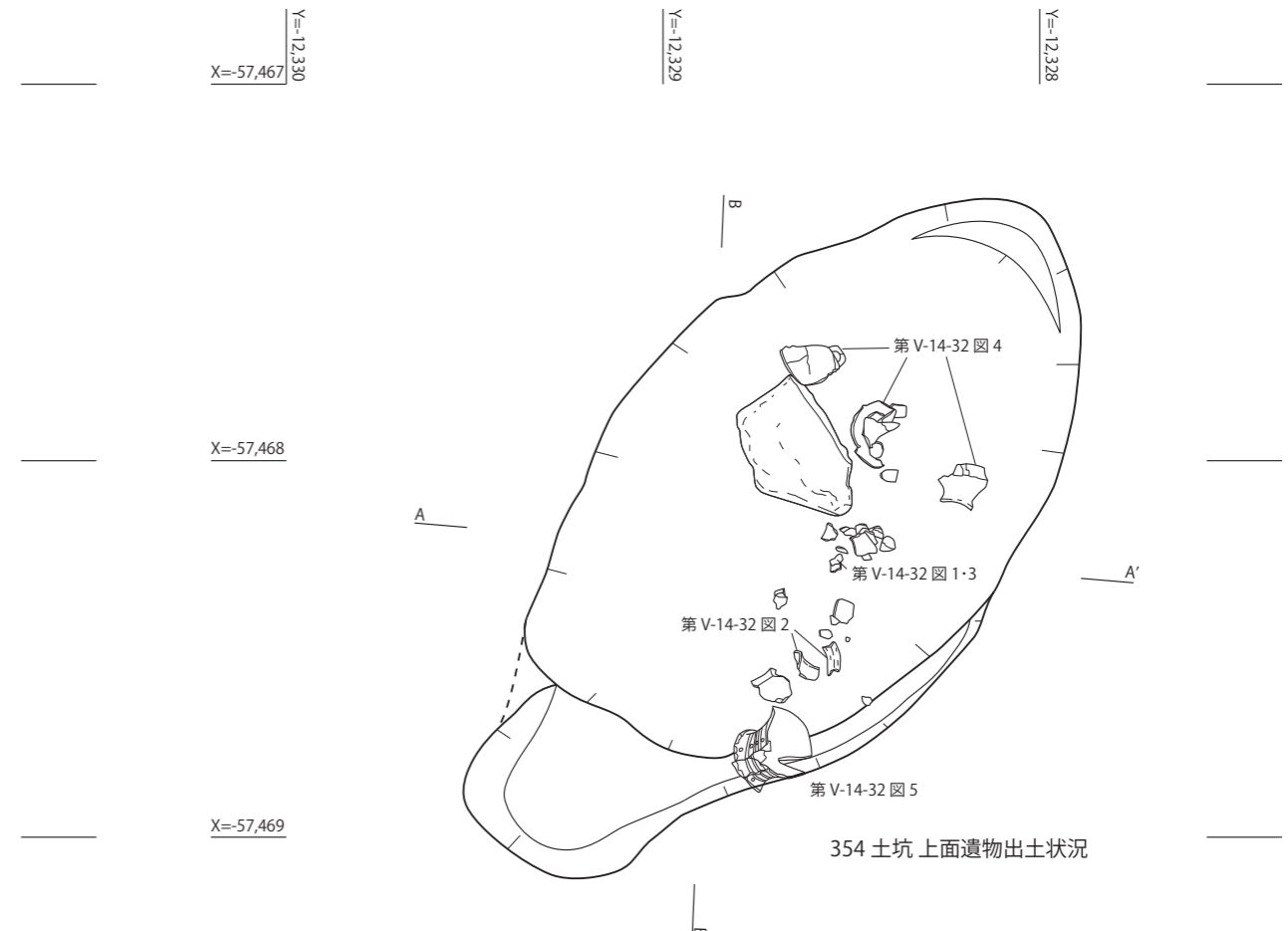
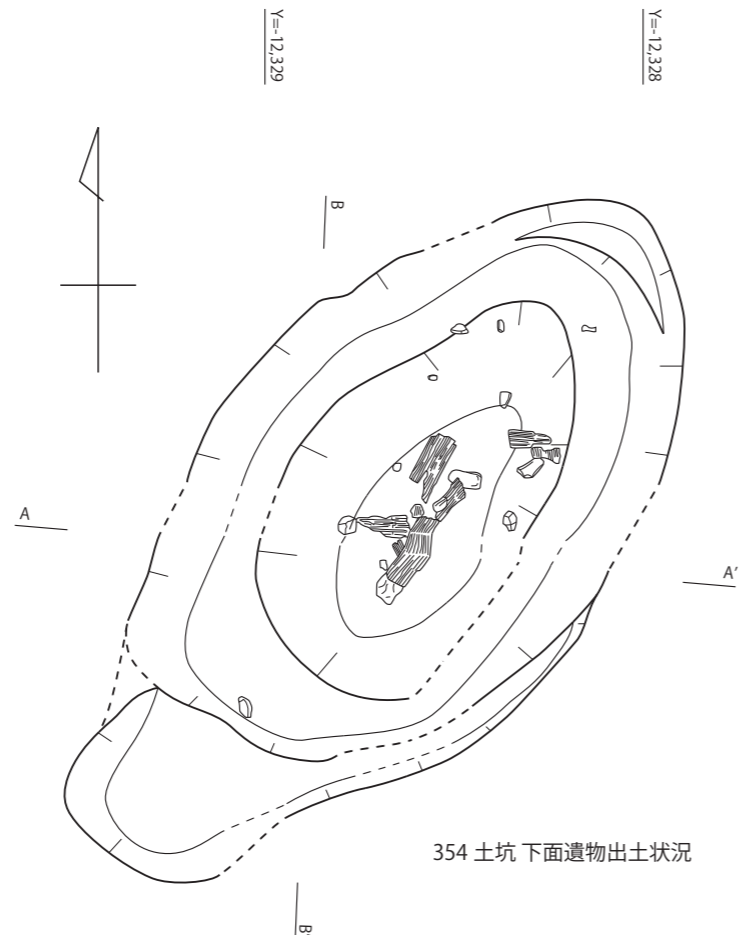
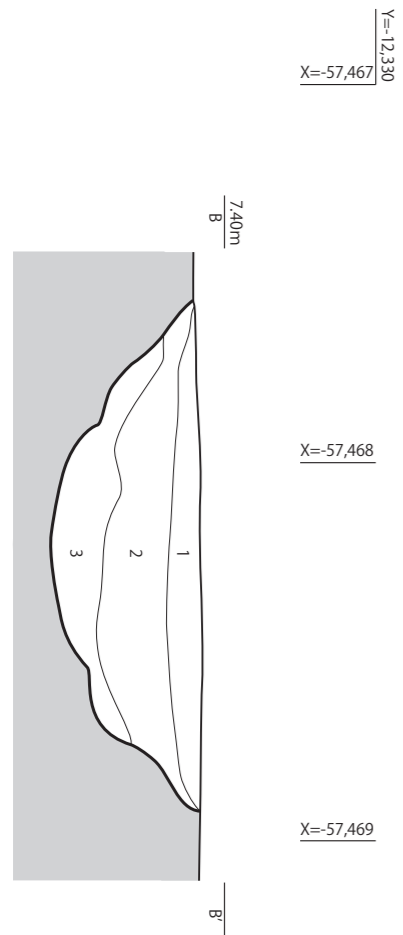
らく5溝埋没後の遺構と考えられる。328土坑は北側を溝で掘削されているが、現存で長軸0.5m、短軸0.45mの東西方向にやや長い円形の土坑と考えられる。2段堀となっており、1段目の深さは0.25~0.35mで、2段目は土坑のほぼ中心から落ち込み、深さは0.17mである。329土坑は、現存で径0.5mほどの円形の土坑である。同じく2段堀となっており、1段目の深さは0.25mで、2段目は南西隅にあり、深さは0.1mである。いずれも柱穴と考えられるが、これらに対応するような他の柱穴は周辺でみつかっていない。

330土坑〔第IV-6-36図 第2分冊図版100〕

調査区南、X=57,530ライン土層観察用トレンチの南、東西位置ではほぼ中央に位置する。北側が土層観察用トレンチで掘削されているが、現状で長軸0.9m、短軸0.55m、深さ0.28mの南北方向に長い楕円形の土坑である。底面の四隅が角張っている。埋土中から0.1m大の礫や弥生時代後期後葉の甕〔第V-14-31図〕が出土している。土器などは土坑内に廃棄されたものと考えられる。

354土坑〔第IV-6-37図 第2分冊図版101・102〕

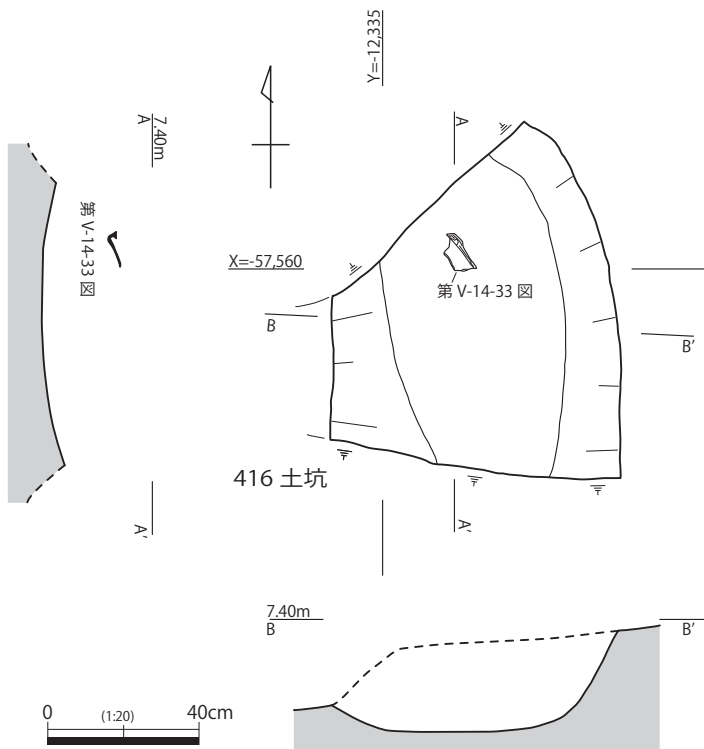
調査区中央、X=57,470ラインの北、東西位置では調査地ほぼ中央に位置する。長軸2.2m、短軸1.12mの北東-南西方向に長い楕円形の土坑である。一部で3段堀となっている。1段目は北東端、南西端それぞれにあって連続しない。北東端のものは、深さ5cmほどで平坦面があらわれ、三日月形である。南西端のものも、深さ5cmほどで平坦面があらわれるが、北東端のものとは異なり、0.4×0.35mの広い平坦面である。範囲は狭くなるものの、さらに南東側に続いて、中ほどで2段目に合流する。2段目の北東端は1段目平坦面も近く、南西端は0.4mほど中心に向かった位置にある。東西両端は同じような立ち上がりになっており、深さは0.15mほどである。3段目は南西側で最大0.24m幅の平坦面があり、そこから落ち込む。東西側縁は0.1mほどの幅で平坦面が巡り、北東側では0.15m幅



- 1 7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)
- 2 N6/0 灰色 粘土～シルト 1～3cm 大の炭化物多く含む。特に底面上に大型 (3～4cm) の炭化物集中)
- 3 10G6/1 緑灰色 粘土 (炭化物含む。5YR7/1 明褐灰色の粘土ブロック含む)



第IV-6-37図 354土坑平・断面



第IV-6-38図 416土坑平・断面

で大きくなっている。長軸1 m、短軸0.68 m、深さ0.1～0.15 m、北東-南西方向に長い楕円形を呈す。

遺物は、2段目の上面検出時に既にみつかっており、0.4 m大の板状の石や弥生時代後期前葉の土器が出土している〔第V-14-32図〕。特に南西隅の1段目の落ち込みには、ほぼ完形に近い状態で器台〔第V-14-32図5〕が出土している。また、埋土2層では、0.1 m以下の礫や炭化物を多く含み、特に下面では10～3 cmほどの大きな炭化物が集中している。何か焼いた跡の可能性もあるが、周囲で被熱痕跡はみられなかった。埋土3層からも炭化物が出土し、粘土ブロックもみられるが、土器などはみつからない。

他の土坑と比較すると特異な形態で、複数の土坑が切りあっている可能性もある

が、土層断面からはうかがえない。埋土の状況などから土器等を廃棄する土坑と考える。

416 土坑〔第IV-6-38 図 第2分冊図版105-2・3〕

調査区南端、6D-6d と7d 区に位置する。暗渠を利用した排水用の溝や4落ち込みによって周囲が掘削されている。現存で南北0.8 m、東西0.75 m、深さ0.24 mの南北方向に長い土坑であるが、溝の可能性もある。第3-1-3a層掘削時に検出したものであり、埋土等詳細は分からなかったが、おそらく埋土と思われる中から、弥生時代後期後葉の甕〔第V-14-33図〕が出土している。

421 土坑〔第IV-6-39 図 第2分冊図版103〕

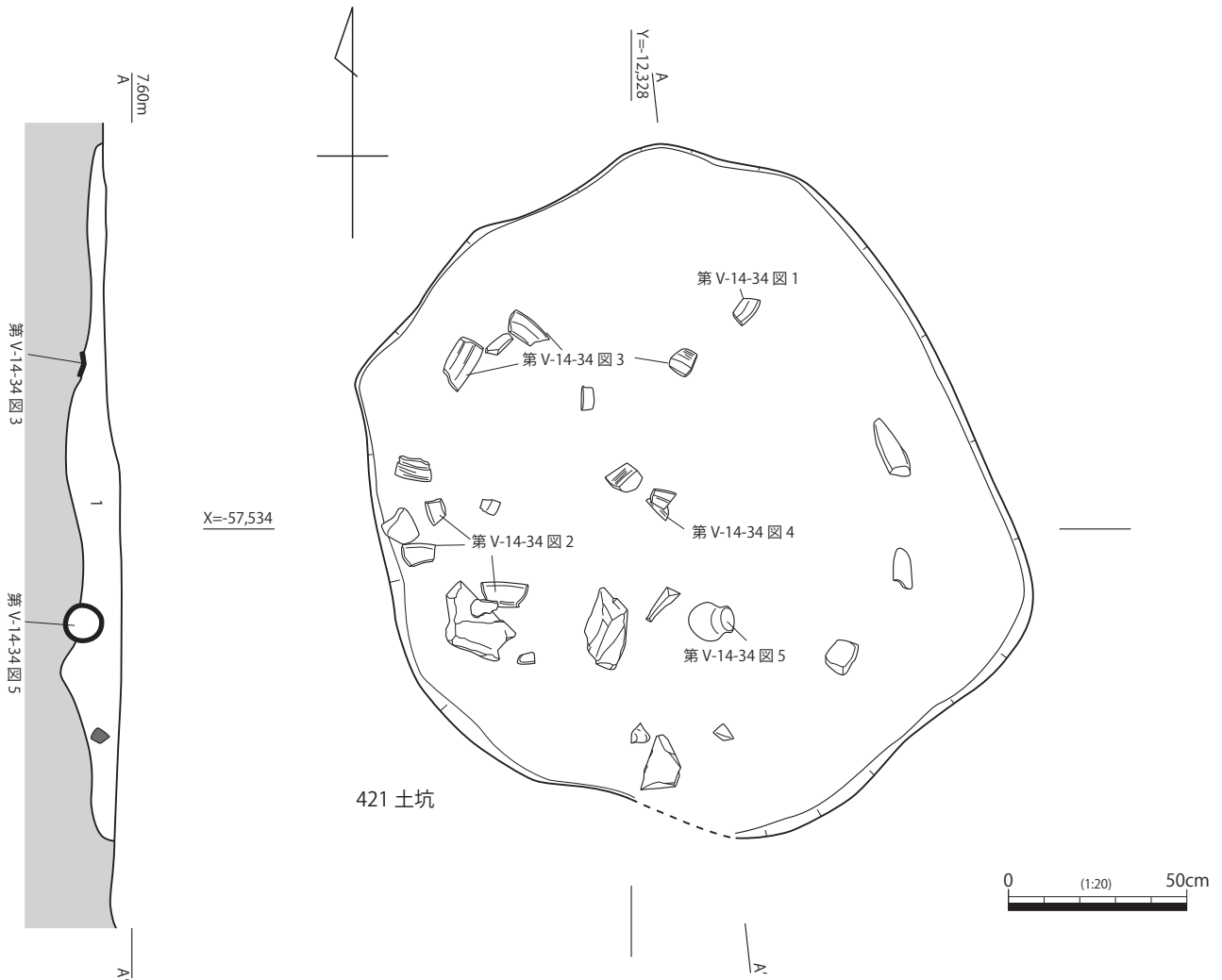
調査区南、X=57,530 ラインの南、東西位置では東端に位置する。径1.8～2 mの不整形な円形の土坑である。深さは3～15 cmで、底面は平坦ではなく凹凸が目立つ。立ち上がりがほぼ垂直で、法面がほとんどない。埋土から0.2 m大の板状の石や0.1 m大の礫と共に、多くの弥生時代後期後葉の土器〔第V-14-34図〕が出土しており、特に直口の小型壺〔第V-14-34図5〕はほぼ完形の状態で出土した。他にも炭化物が出土しており、土器等を廃棄する土坑と考える。

632 土坑〔第IV-6-40 図〕

632 土坑はほぼ調査区中央にあたる5D-6c 区に位置する。長軸0.46 m、短軸0.42 m、深さ0.2 mで、西側が突出する不整形な土坑である。平坦面が2ヶ所ある。

718 ピット〔第IV-6-40 図 第2分冊図版106-1〕

調査区北、X=57,360 ラインの土層観察用トレンチの南、東西位置ではY=12,303 ライン上に位置



1 10G5/1 ~ 6/1 緑灰色 細砂混じりシルト~粘土 (炭化物・遺物含む)

第IV-6-39図 421土坑平・断面

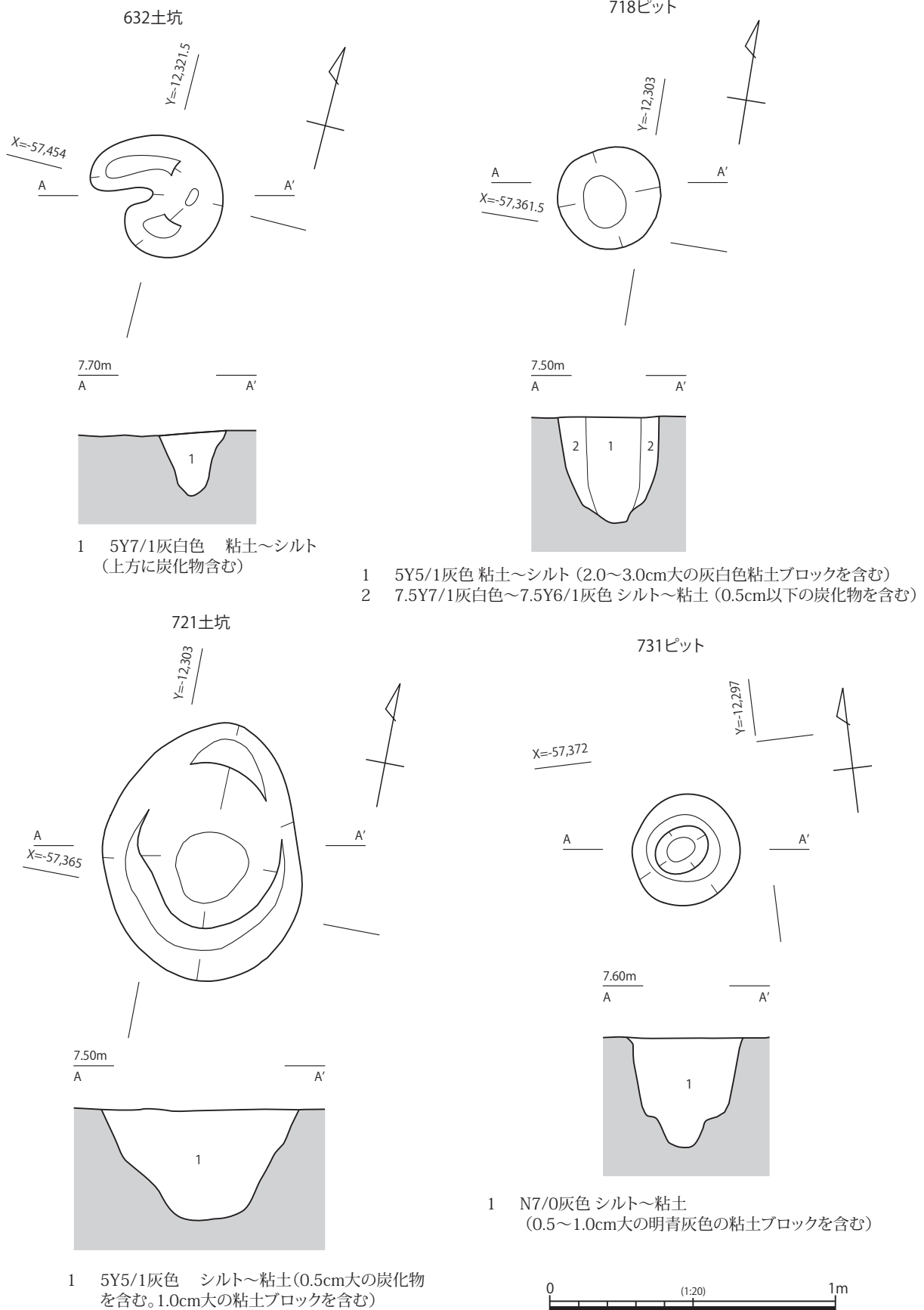
する。径0.35 m、深さ0.37 mの円形の土坑である。断面より柱穴と考えられるが、周囲に対応する柱穴は存在しない。

721 土坑 [第IV-6-40 図]

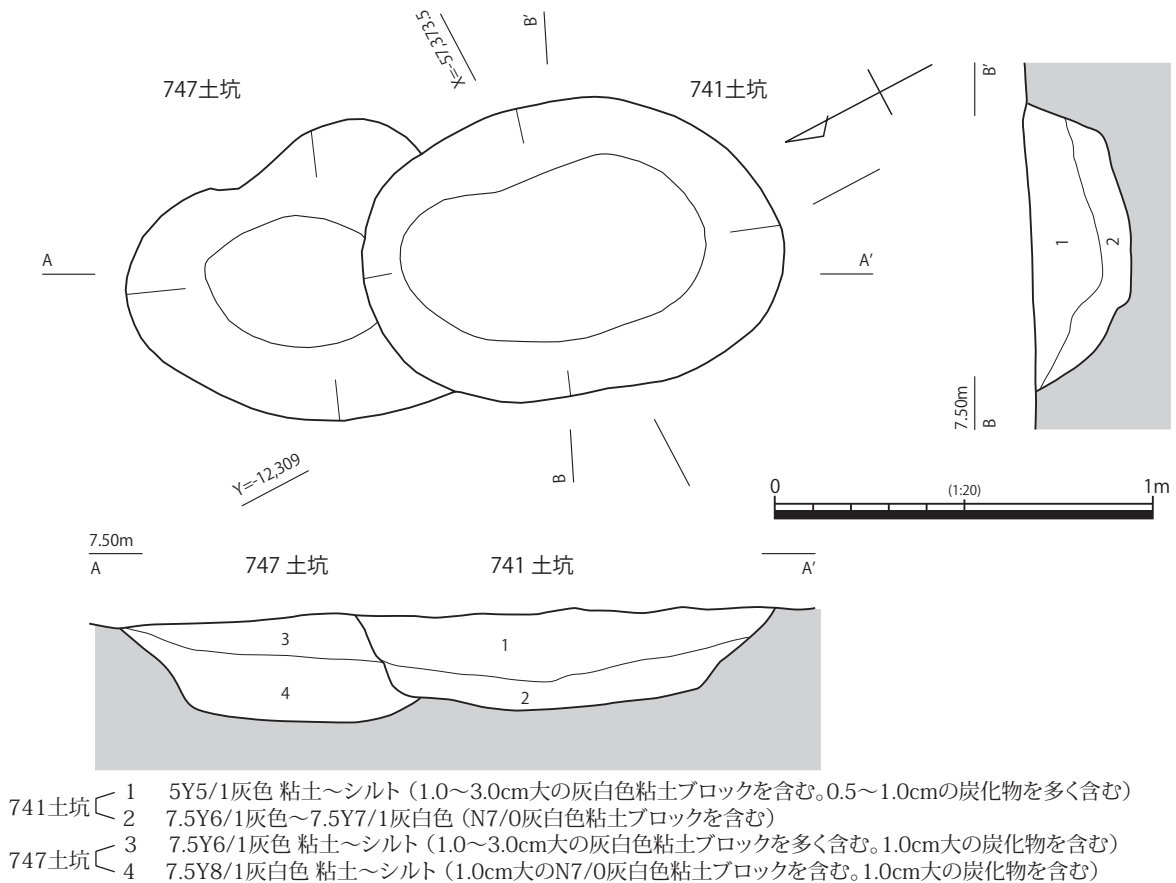
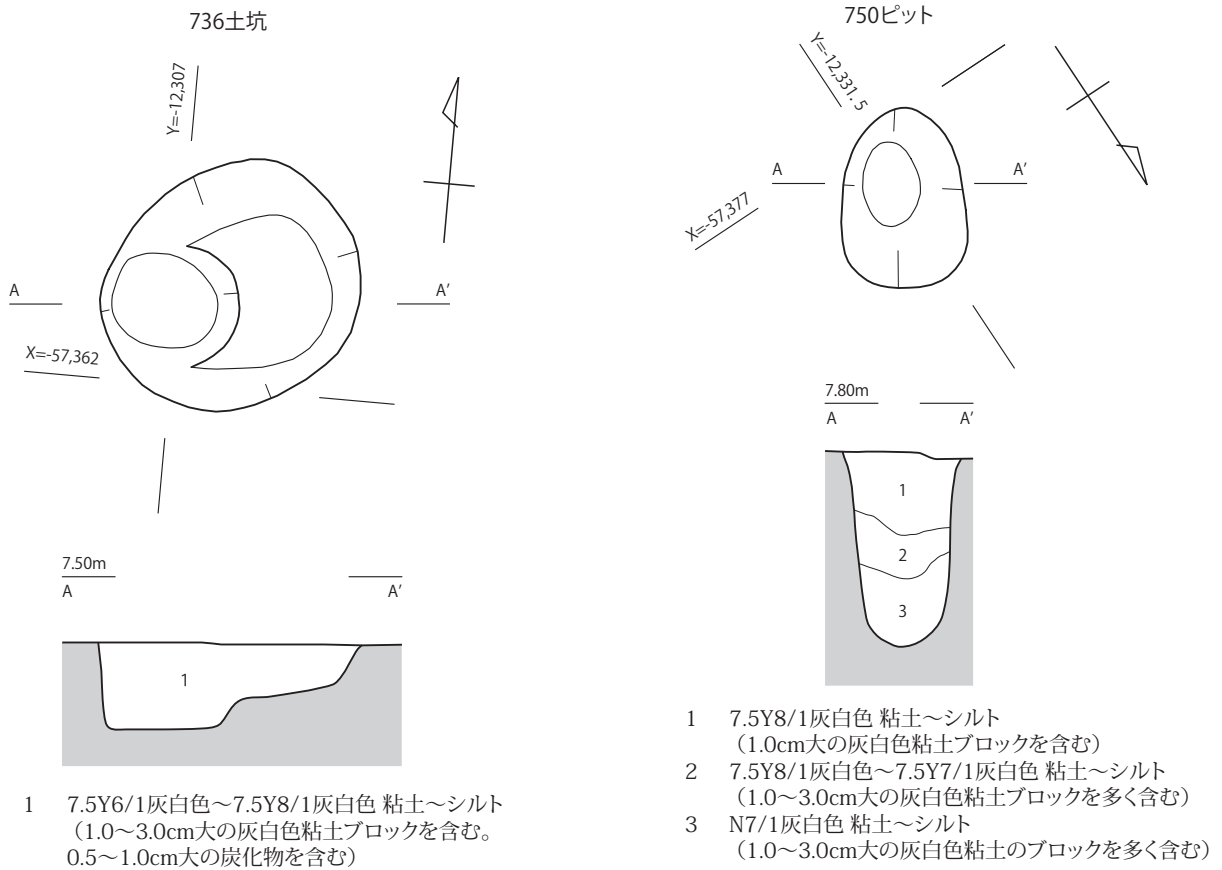
718ピットより南へ3.5 mの位置にある。長軸1 m、短軸0.7 mの南北に長い楕円形の土坑である。土坑内では南北端に平坦面がある。0.1 mほどの深さで北側は半円形、南側は三日月形で、ほぼ半周している。ただし両平坦面は繋がらない。土坑底面は1段目より、0.2 ~ 0.25 m深い。

731 ピット [第IV-6-40 図 第2分冊図版106-2]

調査区北、4C-8j区に位置する。2段堀となっており、1段目は径0.38 m、深さ0.28 mの円形のピットであり、さらに1段目の中心部に2段目が掘られており、長軸0.2 m、短軸0.15 m、深さ0.1 mの北東-南西方向に長い楕円形のピットである。埋土は1層のみであるが、形態から柱穴と考えられる。しかし周囲にある土坑、ピットで対応するようなものはない。



第IV-6-40図 632・721土坑 718・731ピット平・断面



第IV-6-41図 736・741・747土坑 750ピット平・断面

736 土坑〔第IV-6-41 図〕

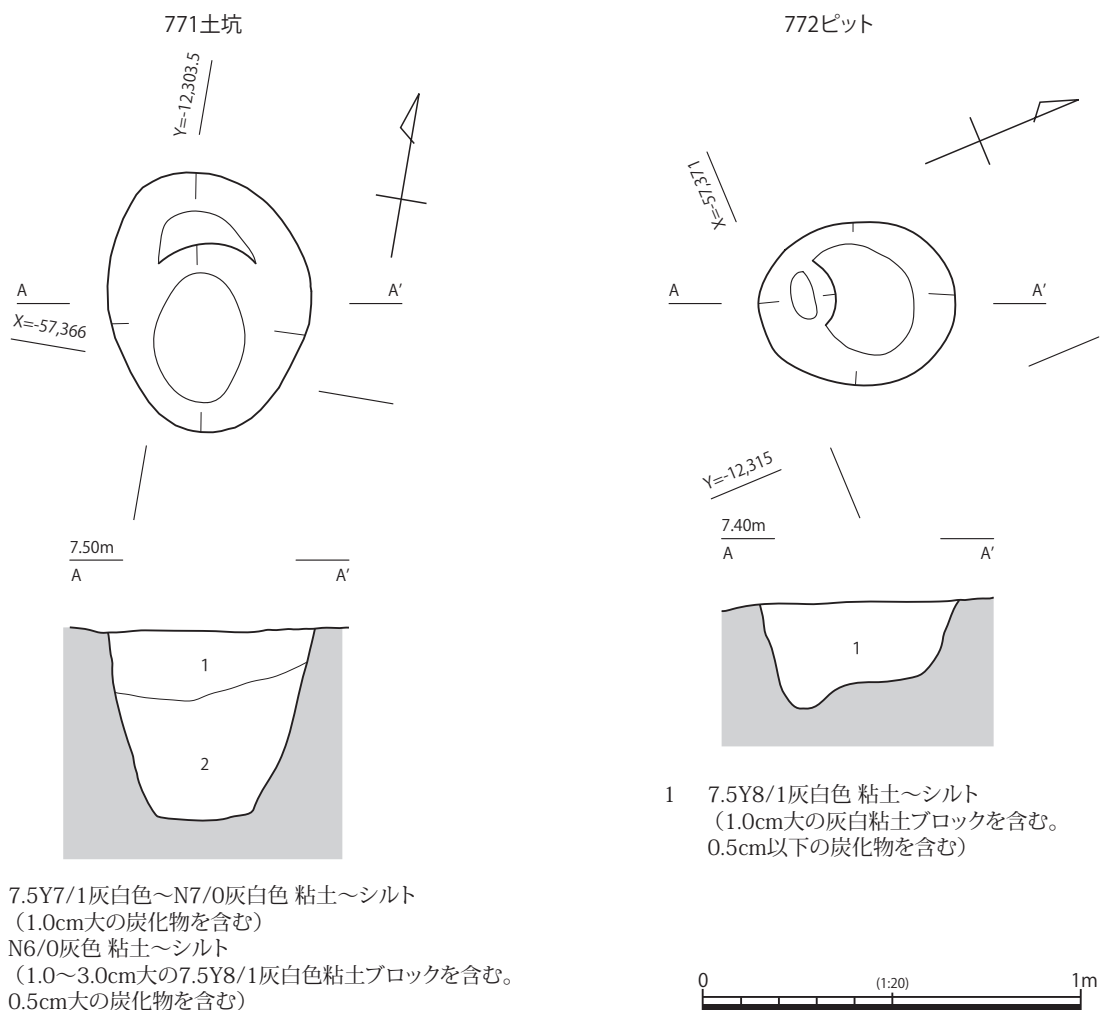
調査区北、X=-57,360 ライン南の 701 溝東側よりも外側に位置する。径 0.7 m ほどのやや東西に長い円形の土坑。2 段堀であり、東側に平坦面がある。1 段目の深さは 0.1 ~ 0.15 m。土坑東端から西へ約 0.3m の位置からさらに落ち込む。2 段目の深さは 1 段目の深さから 8 cm であり、最下面の径は 0.27 m。

741・747 土坑〔第IV-6-41 図 第 2 分冊図版 106-3〕

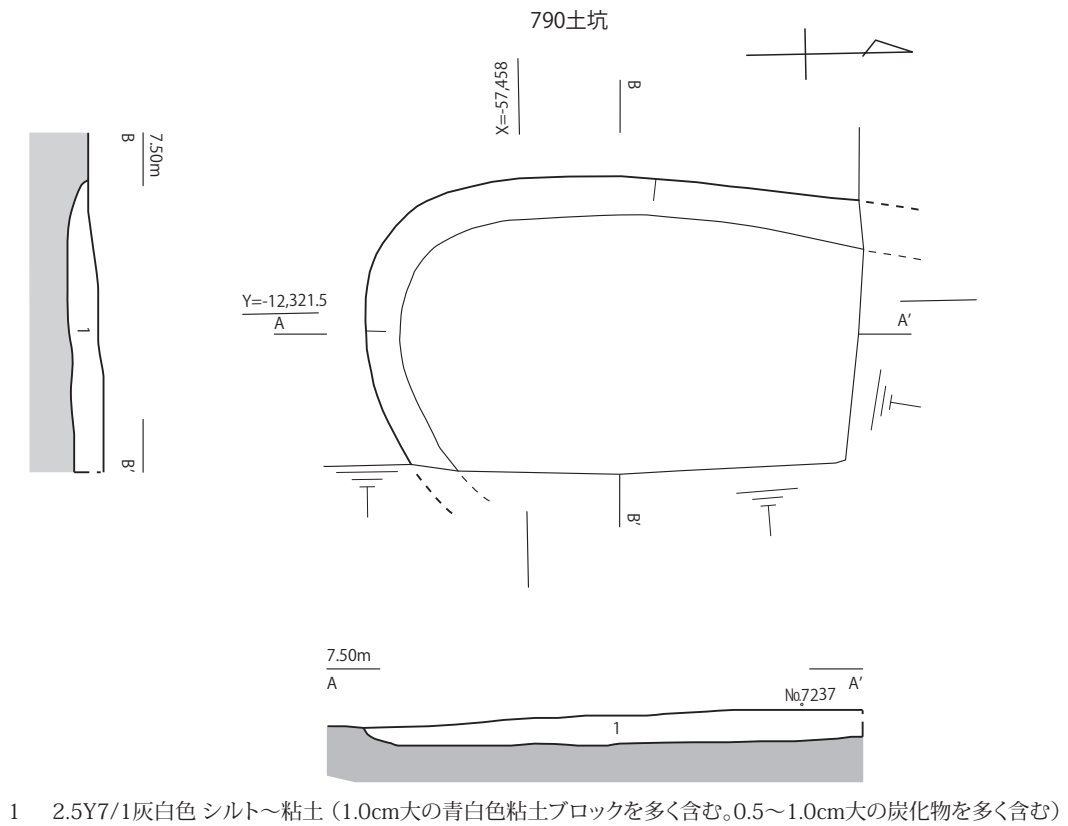
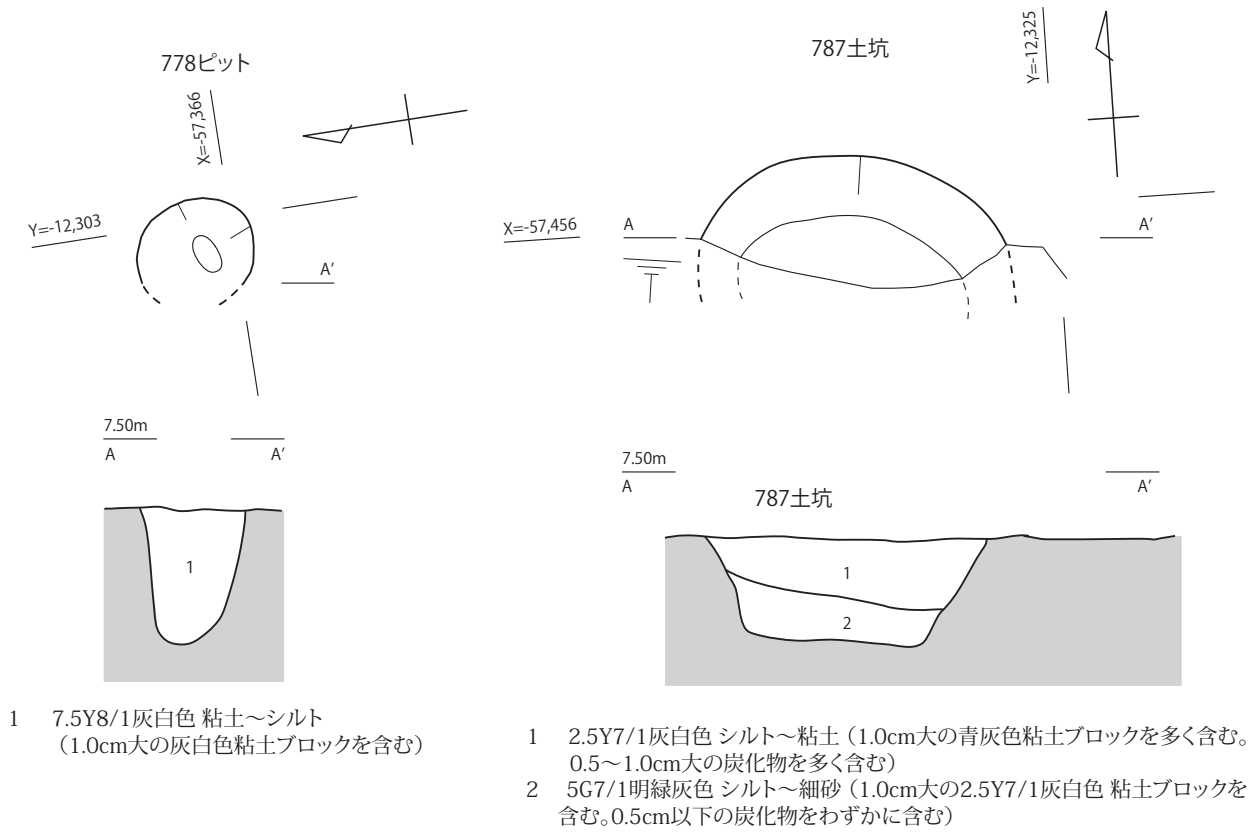
調査区北、4D-8a 区の先述した 663 溝と 701 溝東側との間に位置する。747 土坑は 741 土坑に切られているが、長軸 0.9 m 前後、短軸 0.78 m、深さ 0.25 ~ 0.3 m の南北方向に長い楕円形の土坑であり、一部東側で突出している部分がある。741 土坑は、長軸 1.1 m、短軸 0.78 m、深さ 0.2 ~ 0.28 m の東西方向に長い楕円形の土坑である。いずれも土器や礫などは出土していないが、埋土には粘土ブロックや炭化物が多く含まれている。

750 ピット〔第IV-6-41 図〕

調査区北、700 盛土の南辺に位置する。700 盛土上面で検出した。長軸 0.48 m、短軸 0.32 m、深さ



第IV-6-42図 771土坑 772ピット平・断面

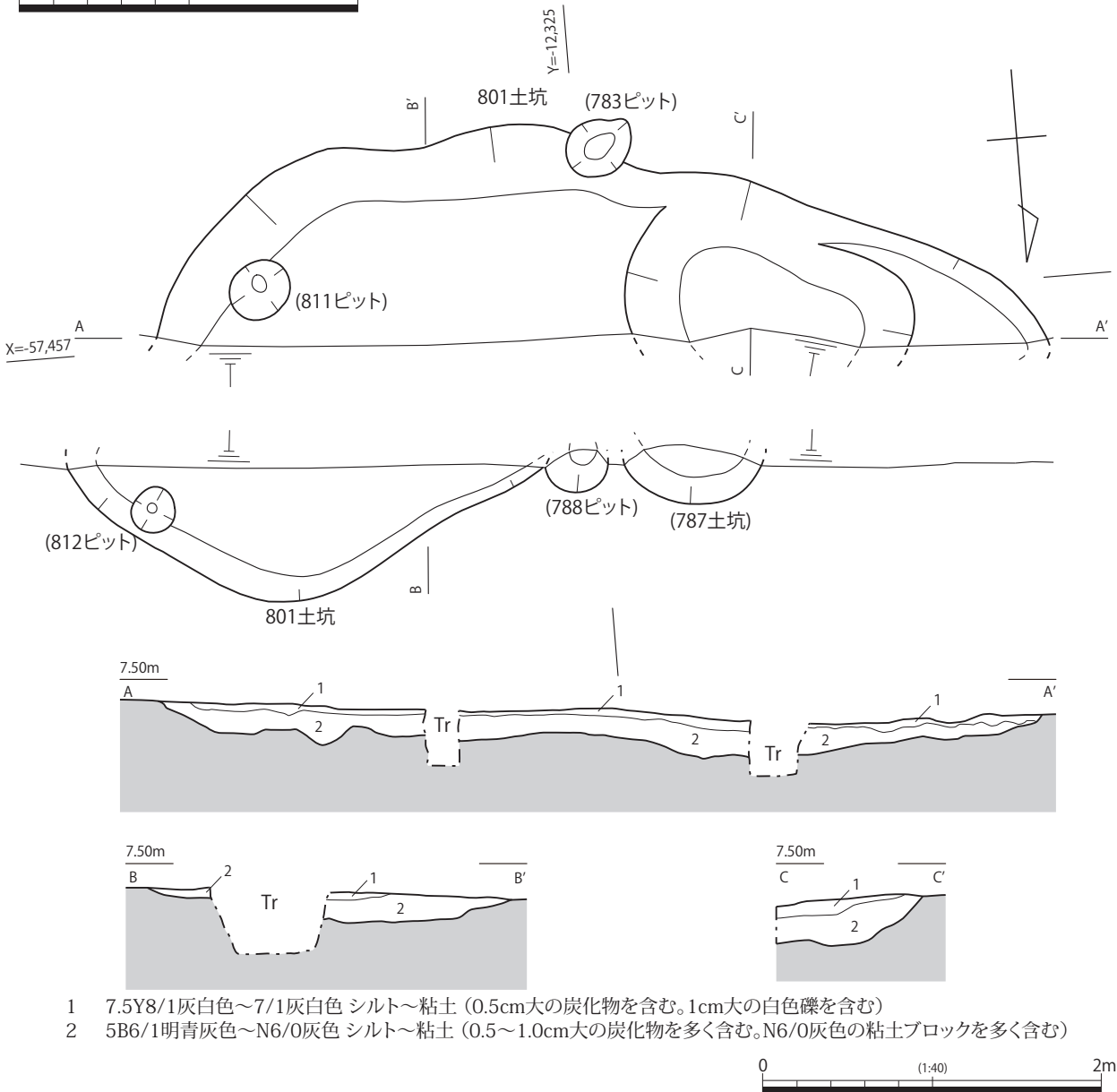
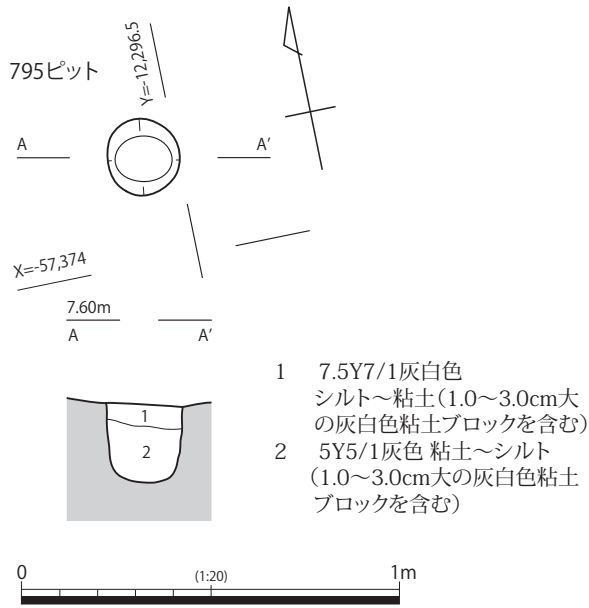


第IV-6-43図 787・790土坑 778ピット平・断面

0.52 mの南西 - 北東方向に長い楕円形のピットである。深さや埋土の状況から柱穴の可能性はあるが、周囲に柱穴がないことや、埋土の質などから、さらに上層からの掘り込みの可能性はある。

771 土坑〔第IV-6-42 図 第2分冊図版 107-1〕

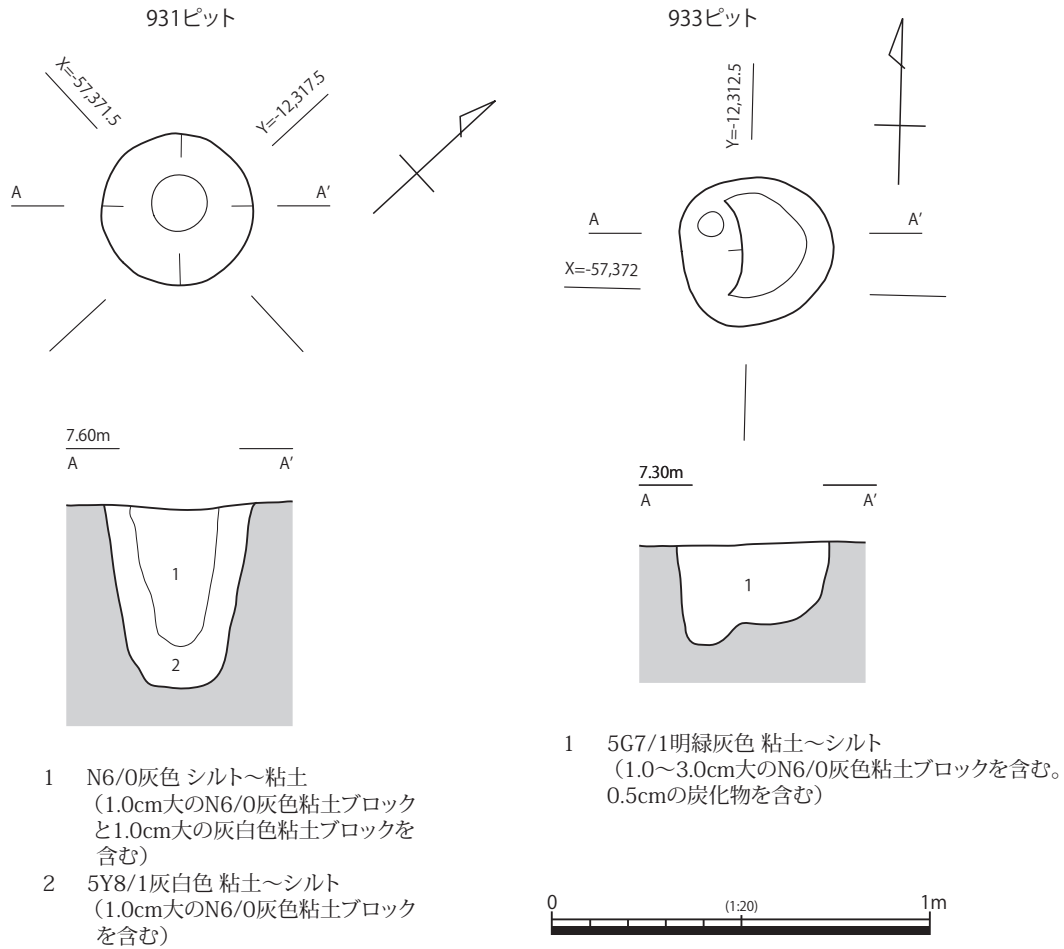
調査区北、4D-7a 区のピット・土坑群の一部。長軸 0.7 m、短軸 0.54 mの南北方向に長い楕円形の土坑。北側で半円形の平坦面がある。平坦面までの深さは0.15 m。北端から0.27m南の位置より、2 段目が落ちる。1 段目の平坦面から 0.35 mの深さである。



- 1 7.5Y8/1 灰白色～7/1 灰白色 シルト～粘土 (0.5cm大の炭化物を含む。1cm大の白色礫を含む)
- 2 5B6/1 明青灰色～N6/0 灰色 シルト～粘土 (0.5～1.0cm大の炭化物を多く含む。N6/0 灰色の粘土ブロックを多く含む)



第IV-6-44図 801土坑 795ピット平・断面



第IV-6-45図 931・933ピット平・断面

4D-7a 区のピット・土坑群の中に2段堀の土坑が他にもあるが、有意な列にはならない。

772 ピット [第IV-6-42 図 第2分冊図版 107-2]

調査区北、701 溝東側の底面で検出。長軸 0.52m、短軸 0.43 mの南北方向にやや長い円形のピット。土坑の中心に平坦面があり、南側でもう1段落ちている。1段目の深さは0.2 mで、2段目の深さは1段目から6 cmほどである。

778 ピット [第IV-6-43 図]

調査区北、4D-7a 区のピット・土坑群の一部。西側が724 ピットに掘削されていた。径 0.3 m、深さ 0.35 mの円形のピットである。深さから柱穴の可能性はある。

787 土坑 [第IV-6-43 図 第2分冊図版 107-3]

調査区中央、5D-6c 区の X=-57,457 ラインと Y=-12,325 ラインの交点付近に位置する。暗渠を利用した排水用の溝で南側が掘削されている。現存で787 土坑は長軸 0.8 m、短軸 0.7 m、深さ 0.25 mほどの東西方向に長い楕円形の土坑と考えられる。なお、後述する 801 土坑とは近接しているが、新旧関係は不明である。

790 土坑〔第IV-6-43 図 第2分冊図版 108-1・2〕

調査区中央、5D-6c 区の Y=-12320 ラインの土層観察用トレンチと暗渠を利用した排水用の溝で掘削されている。現存で長軸 1.3 m、短軸 0.78 m、深さ 8 cm の南北方向に長い楕円形の土坑である。埋土から弥生時代後期前葉の甕〔第 V-14-35 図〕が出土している。埋土には粘土ブロックや炭化物が含まれており、土器等を廃棄した土坑と考えられる。

795 ピット〔第IV-6-44 図 第2分冊図版 108-3〕

調査区北側、4C-8j 区に位置する。径 0.2 m、深さ 0.2 m の円形のピットである。埋土が 2 層であり、深さもやや深いことから、柱穴の可能性もあるが、それに対応するような遺構は周辺にはない。

801 土坑〔第IV-6-44 図 第2分冊図版 109〕

調査区中央、5D-6c 区の X=-57,457 ラインと Y=-12,325 ラインの交点付近に位置する。ほぼ長軸中央部分が、暗渠を利用した排水用の溝で掘削されている。現状で長軸 5.8 m、短軸 2.24 m、深さ 0.2 ~ 0.35 m の東西方向に長い楕円形の土坑である。東側に 2 段目の落ち込みがあるが、埋土は同じである。周辺にピットや土坑があるが、783・811・812 ピットは上からの掘り込みと考えられる。788 ピットと 787 土坑については、前後関係は不明である。埋土からは、炭化物や粘土ブロックと共に弥生時代後期前葉の土器(第 V-14-36 図)が出土している。土器の量は少なく、大型の礫も出土していないが、廃棄用の土坑の可能性が高い。

931 ピット〔第IV-6-45 図 第2分冊図版 110-2〕

調査区北、4D-8b 区の 701 溝東側内で検出した。径 0.4 m、深さ 0.45 m の円形のピットである。柱穴と考えられるが、埋土が他の土坑やピットのものとは異なり、後世のもの可能性が高い。

933 ピット〔第IV-6-45 図 第2分冊図版 110-3〕

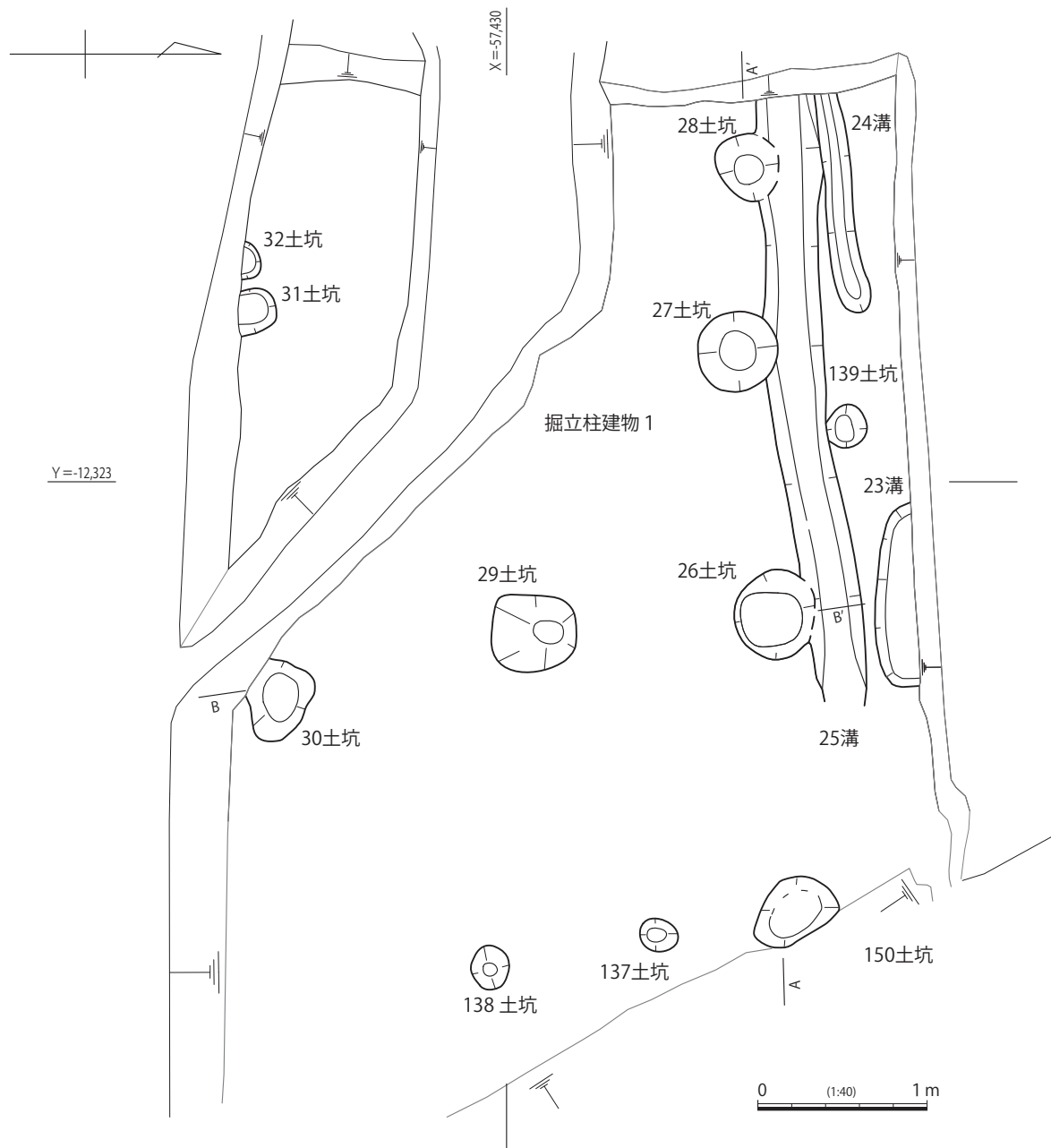
調査区北、4D-8b 区で検出。2 段堀のピットで、ピット中央から東側に半円形の平坦面がある。1 段目は径 0.4 m、深さ 0.2 m の円形で、2 段目は北側に寄っており、径 6 cm、深さは 1 段目から 5 cm である。

第3項 掘立柱建物

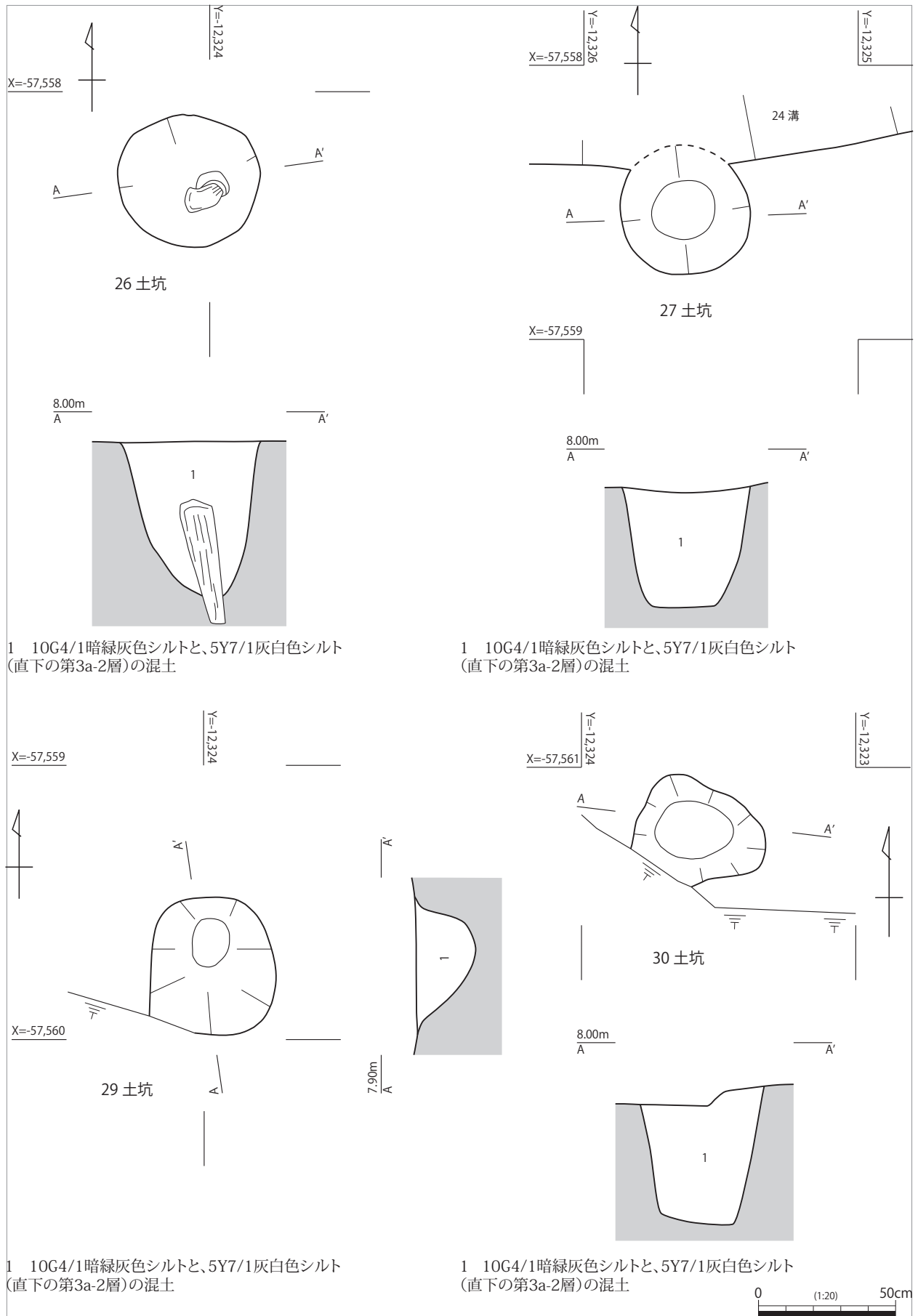
掘立柱建物1 (26～32・150土坑〔第IV-6-46～48図 第2分冊図版111・112-1〕)

調査区の南東隅にある7基の土坑で構成された掘立柱建物。いずれも径0.5m大の円形もしくは楕円形の土坑で、深さは0.22～0.5m、埋土は同じである。26土坑からは、柱根と思われる木材が立ったままで出土している。150土坑からも立ったまま木材が出土しているが、これは、径3cmほどの芯持ちの木材であり、柱材とはいえない。

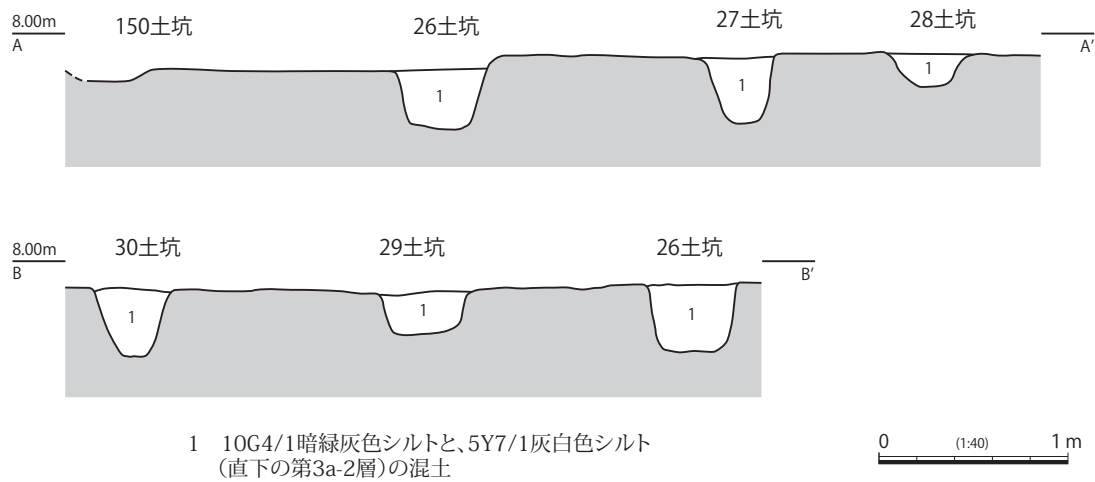
全体で南北3.4m、東西3.1mの2間×2間の建物と考えられる。31、32土坑は柱穴の可能性もあるが、側溝で半分ほどが壊れており、またやや位置がずれている。柱穴間はそれぞれ南北で1.3～1.7m、



第IV-6-46図 掘立柱建物1平面



第IV-6-47図 掘立柱建物1断面



第IV-6-48図 掘立柱建物1断面2

東西で1.1～1.6 mである。

また、北側の柱穴列の西端には、150土坑がある。長軸0.52 m、短軸0.3～0.36 m、深さ0.35 mの北西-南東方向に長い楕円形の土坑で、26土坑との距離は1.8 mである。南側に対応する柱穴がないので、これが柱穴かどうかは不明であるが、その可能性のあるものとして報告しておく。

なお、埋土はいずれも同じであるが、埋没時期を示すような土器は出土していない。

掘立柱建物2 (62・192・304・336～340・352・353土坑) [第IV-6-49図 第2分冊図版112-2～118]

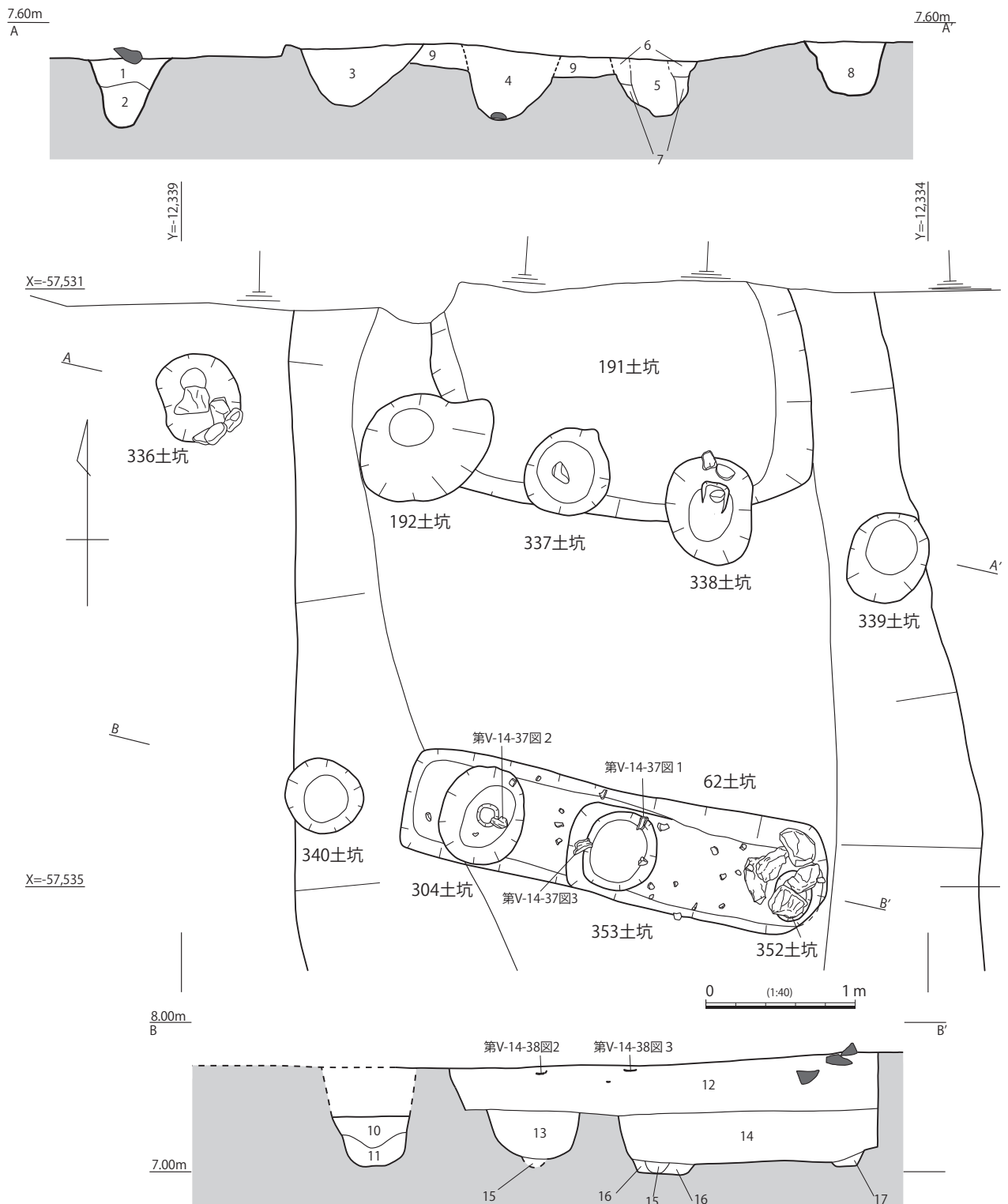
調査区南のX=-57,531～-57,535ライン間、Y=-12,339～-12,334間に位置する。先述した5溝、191土坑が埋没した後でつくられている。規模3.9 m×3.1 m、1間×3間の掘立柱建物で、柱穴間は、南北で2.4～2.6 m、東西で0.9～1.2 m。なお、他の柱穴と同じような336土坑も柱穴列に並ぶので、1間×4間の可能性もあるが、それに対応する遺構は南側で検出できなかった。

北側の柱穴は径0.5～0.8 mの円形で、深さは0.35～0.5 m。底面に礫が置かれているものもある(337・338土坑)。また、実際に柱が底面に当たることによって、底面の一部がくぼんでいるものもある(338土坑)。埋土はそれぞれ異なり、特に338土坑の土層断面は、そのまま柱が残っていたような堆積状況をしている。なお、337・338土坑は191土坑を掘り下げた後に検出しているが、192土坑との関係や埋土の状況などから、191土坑よりも新しい段階のものと考えられる。

南側の柱穴は、340土坑以外は、布堀と考えられる62土坑内で検出している。62土坑は早い段階で調査され、後に周囲の状況から掘立柱建物に関連する遺構と考えて改めて精査し、304・352・353土坑を検出している。長軸2.9 m、短軸0.7 mの南東-北西方向に長い長方形の土坑で、2段堀となっている。1段目の深さは0.3 mで、さらにそこから径0.6 m、深さ0.4 mの円形の304土坑が掘り込まれている。62土坑西端から東へ1.1 mの位置でさらにもう1段落ち込んでいる。2段目は深さ0.3～0.4 mあり、東端はほぼ一直線に上端まで立ち上がっている。2段目の最下面からさらに352・353土坑を検出した。5～8 cmほどの深さで、柱が実際に置かれていた部分と考えられる。

340土坑は、径0.5 m、深さ0.35 mの円形の土坑である。5溝掘削時に検出したため、上面が掘削された状況であった。その為、その他の柱穴と比べて規模が小さい。

62土坑の埋土上層から弥生時代後期前葉～後葉の土器、192土坑から弥生時代後期中葉～後葉の土



- | | |
|---|--|
| <p>1 2.5Y8/1灰白色シルト～粘土(炭化物を含む)
 2 N6/0灰色粘土～シルト
 3 10GY5/1緑灰色シルトと、5Y7/1灰白色シルト(基盤層)の混土
 4 N7/0灰白色～2.5Y7/1灰白色粘土～シルト(炭化物を含む)
 5 N7/0灰白色粘土～シルト(炭化物・7.5R7/1明赤灰色の粘土ブロックを含む)
 6 5Y8/1灰白色粘土～シルト(7.5R7/1明赤灰色の粘土ブロックを含む)
 7 N7/0灰白色～2.5Y7/1灰白色粘土～シルト(炭化物を含む)
 8 7.5Y7/1灰白色～7.5Y8/1灰白色粘土～シルト(1cm大の炭化物・7.5Y7/1 灰白色の粘土ブロックを含む)
 9 10GY5/1緑灰色シルト(炭化物・ブロック土含む)</p> | <p>10 2.5Y8/1灰白色シルト～粘土(炭化物・7.5Y7/1灰白色の粘土ブロックを含む)
 11 7.5Y7/1灰白色シルト～粘土
 12 5Y6/2灰オリーブ色粘土(炭化物わずかに含む)
 13 2.5Y8/2灰白色シルト～粘土
 14 5Y8/1灰白色～5Y7/1灰白色シルト～粘土(1cm大の炭を多く含む)
 15 7.5Y8/1灰白色粘土(炭化物・7.5R7/1明赤灰色の粘土ブロックを含む)
 16 10Y8/1灰白色粘土～シルト(1cm大の炭化物を多く含み、7.5R7/1明赤灰色の粘土ブロックを含む)
 17 5PB7/1明青灰色粘土～シルト</p> |
|---|--|

第IV-6-49図 掘立柱建物2平・断面

器、337 土坑から弥生時代後期後葉の土器が出土している〔第 V-14-37 図〕。また 62 土坑東端と 336 土坑の最上層では 0.2～0.3 m 大の礫が集中して出土している。埋没時期は、弥生時代後期後葉と考えられる。

第4項 盛土遺構

概要 5区北西隅では、第2a層掘削段階で、酸化鉄やマンガン斑が顕著にみられ、また盛土のラインとほぼ一致する擬似畦畔や多量の人頭大の礫がみつかっており、何らかの遺構があることが想定された。土層断面等の観察の結果、周溝（701 溝）で囲まれた、平面が四隅突出形の約 20 m 四方の盛土遺構（700 盛土）であることが判明した。

平面形態や石列の存在から、四隅突出型墳丘墓の可能性があったが、調査の結果、明確な埋葬施設は検出できなかった。なお、盛土内からの出土土器や、周溝最上層の土器溜まりの検討から、弥生時代後期後葉～終末期に築造、埋没したと考えられる。

（1）700 盛土〔第IV-6-50～54 図 巻頭図版9 第2分冊図版119-125〕

5区北西隅に位置する盛土遺構で、溝（701 溝）で周囲を囲まれている。溝も含めると南北約 40 m、東西約 25 m の範囲に広がる。

盛土遺構は、長軸（北東 - 南西）23 m、短軸（北西 - 南東）17 m の長方形で、調査地境で途切れたり、不明瞭な部分もあるが四隅が突出している。四隅で最も良好に形状を留めている南側の突出部の長さは 1.2 m である。大きく 3 層に分かれる盛土で構成されており、高さは最高で溝底面からは約 0.8 m、基盤層からは約 0.4 m である〔第IV-6-53 図〕。

盛土中には基盤層を母材としたブロック土が多く含まれており、著しくマンガン斑や酸化鉄が集中している。大別した 3 層はいずれも 0.1 m 前後の厚さであり、ほぼ水平に堆積している。また、B-B' 断面でみられる 701 溝拡張部分は、詳しくは後述するが、盛土 1 層下面で検出しており、701 溝掘削以前の溝である。このため、盛土 1 層と盛土 2・3 層との間には時間差があった可能性がある。

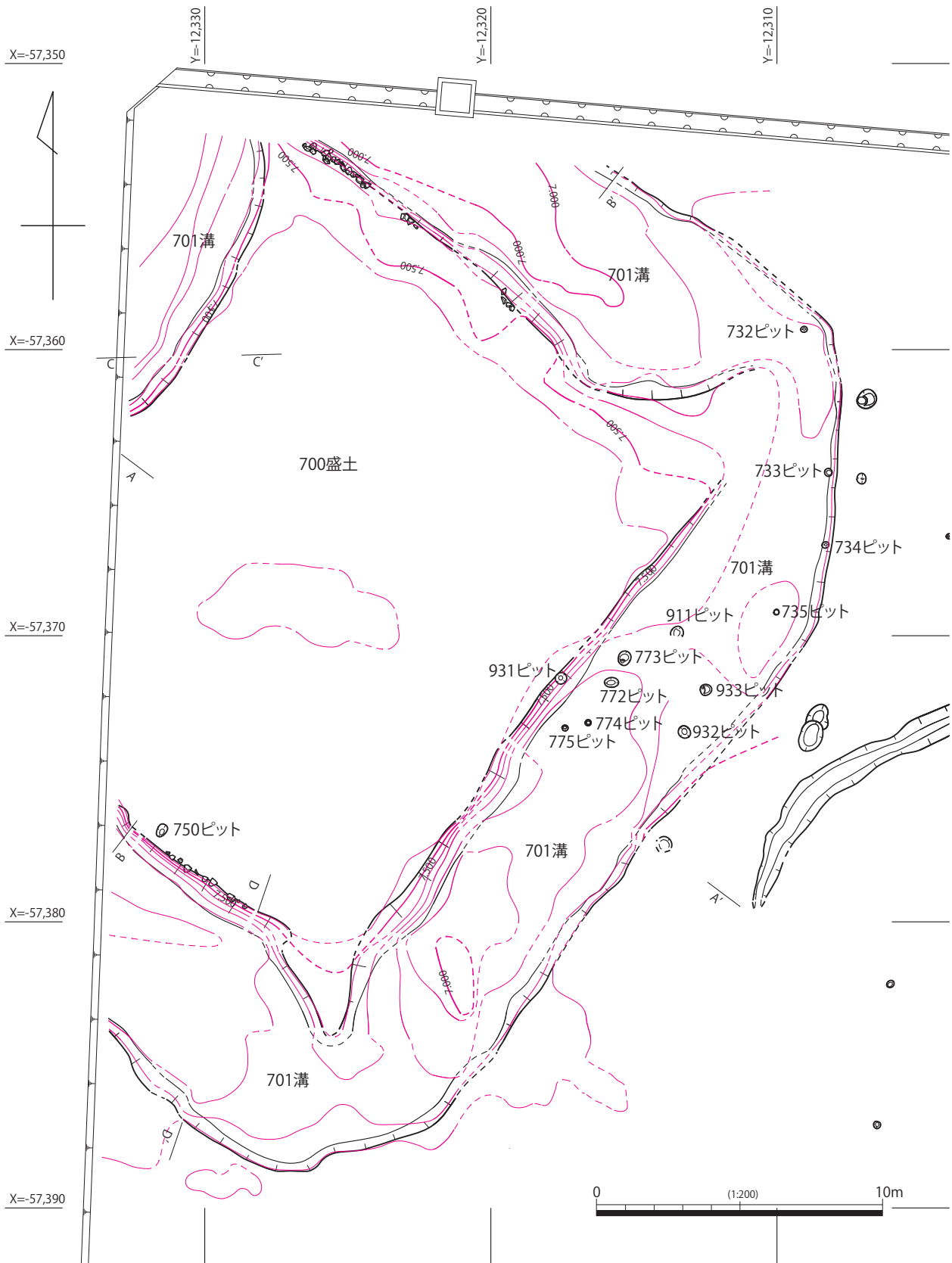
盛土遺構の北側短辺と南側短辺には石列が検出された〔第IV-6-51・52・54 図〕。北側短辺の石列は、Y = -12,330～320 ライン間に 2ヶ所、Y=-12320 ライン以東に 1ヶ所認められる。いずれも人頭大の礫を使用しており、検出レベルは 7.6～7.5 m 前後である。一部 2 段積みされている部分もある。石列設置のための掘方は検出できていない。南側短辺の石列は、残存している南側短辺のほぼ中央に長さ 3.4 m の範囲で残存している。人頭大の礫を使用しており、検出レベルは 7.75 m 前後でほぼ水平である。石列設置のための掘方は検出できていない。

盛土中からは弥生時代開始期から弥生時代後期の土器片が多く出土している〔第 V-14-38・39 図〕。これらは、土を盛る際に混入したものと考えられる。最も新しい時期の土器は弥生時代後期後葉のものである。また、後述するが、周囲を囲む 701 溝東側の埋土上層から土器がまとまって出土しており、これらの時期は弥生時代終末期のものである。このことから、盛土遺構の築造時期は弥生時代後期後葉から終末期の間と考えられる。

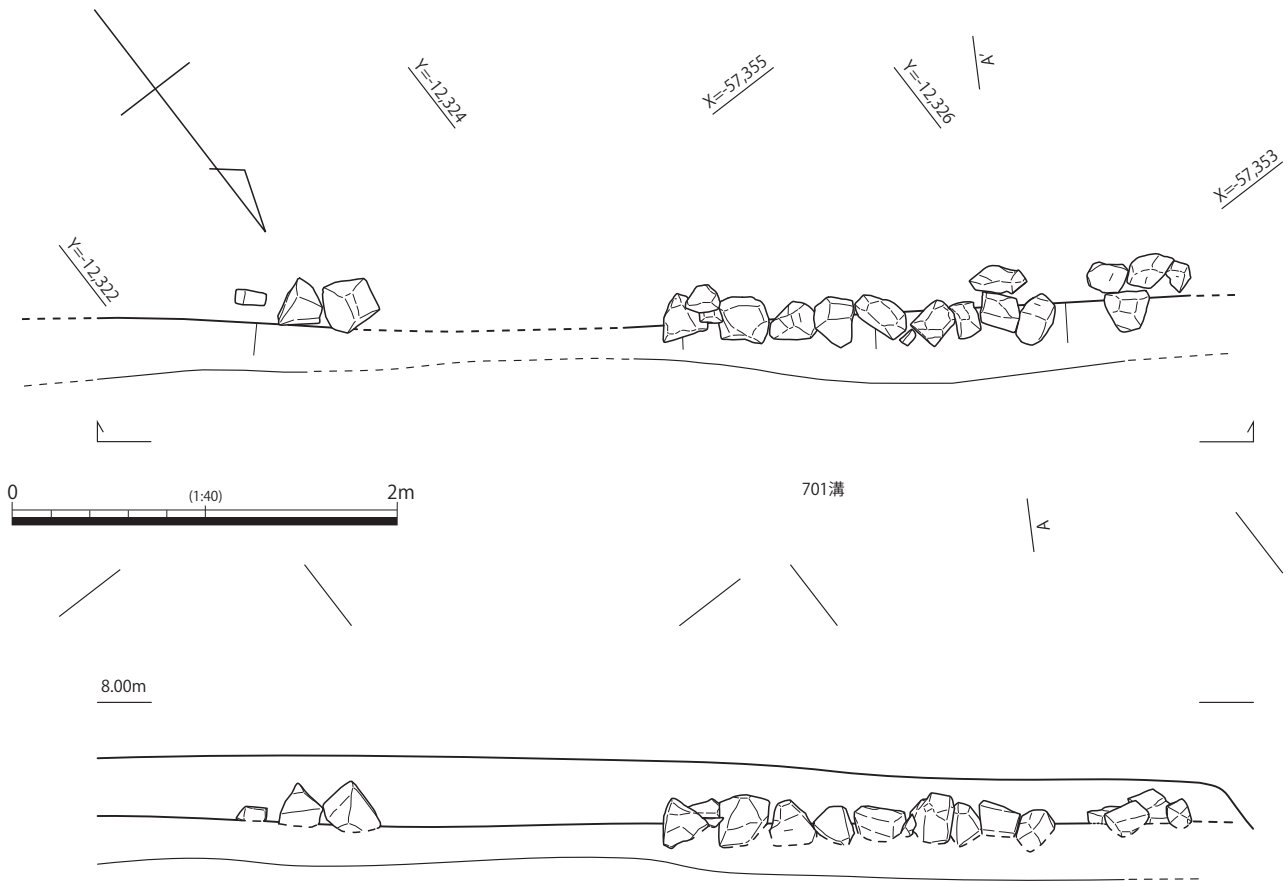
盛土遺構はその形態や石列の存在から四隅突出型墳丘墓の可能性があるが、先述したように盛土は著しくマンガン斑や酸化鉄が集中しており、面的な遺構の確認は困難であった。盛土を 1 層毎掘削し、埋葬施設の検出を試みたが、上層からの掘り込みとみられる土坑以外に、明確な埋葬施設は検出でき

なかった。これは、盛土上部がかなり削平されている可能性が考えられるためである。

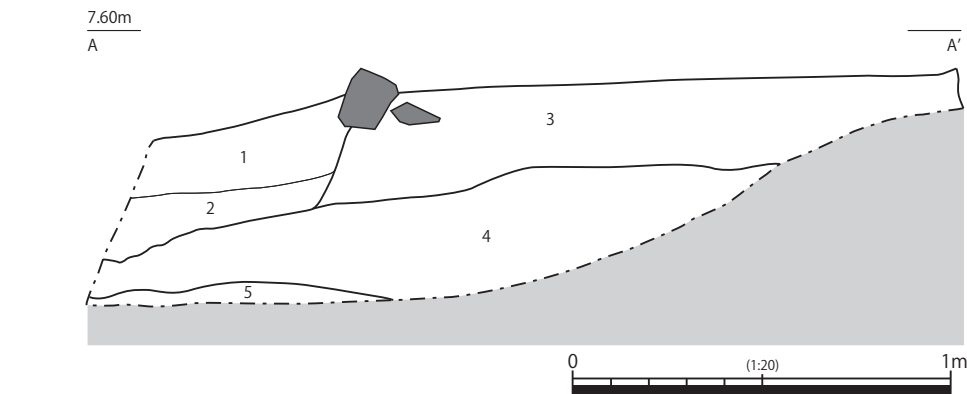
第1a層、第2a層掘削段階で、5区北西隅では、石列に使用されていたと考えられる多量の人頭大の礫が散在しており、酸化鉄やマンガン斑の集中範囲もほぼ方形に認められている。第2a層下面



第IV-6-50図 700盛土検出状況



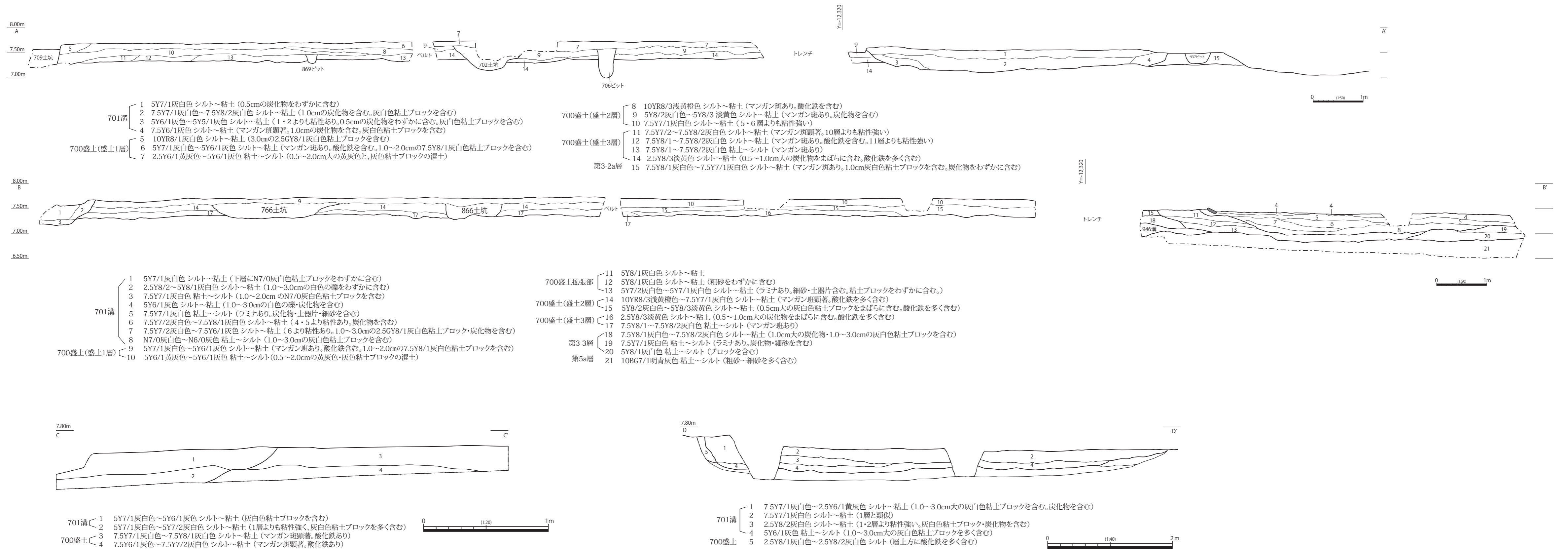
第IV-6-51図 700盛土北側石列平・立面



- | | | |
|----------|---|---|
| 701溝 | 1 | 7.5Y8/2灰白色シルト～粘土(炭化物を含む。N7/0灰白色粘土ブロックを下方に含む) |
| | 2 | N6/0灰色粘土～シルト(N7/0灰白色粘土ブロックを多く含む) |
| 700盛土 | 3 | 7.5Y7/1灰白色シルト～粘土(N7/0灰白色粘土ブロックを含む マンガン斑多く含み分層不可。) |
| 700盛土拡張部 | 4 | N6/0灰白色～2.5GY8/1灰白色粘土～シルト(2.5GY8/1灰白色粘土ブロックを多く含む) |
| 第4a層? | 5 | 2.5GY8/1灰白色粘土 |

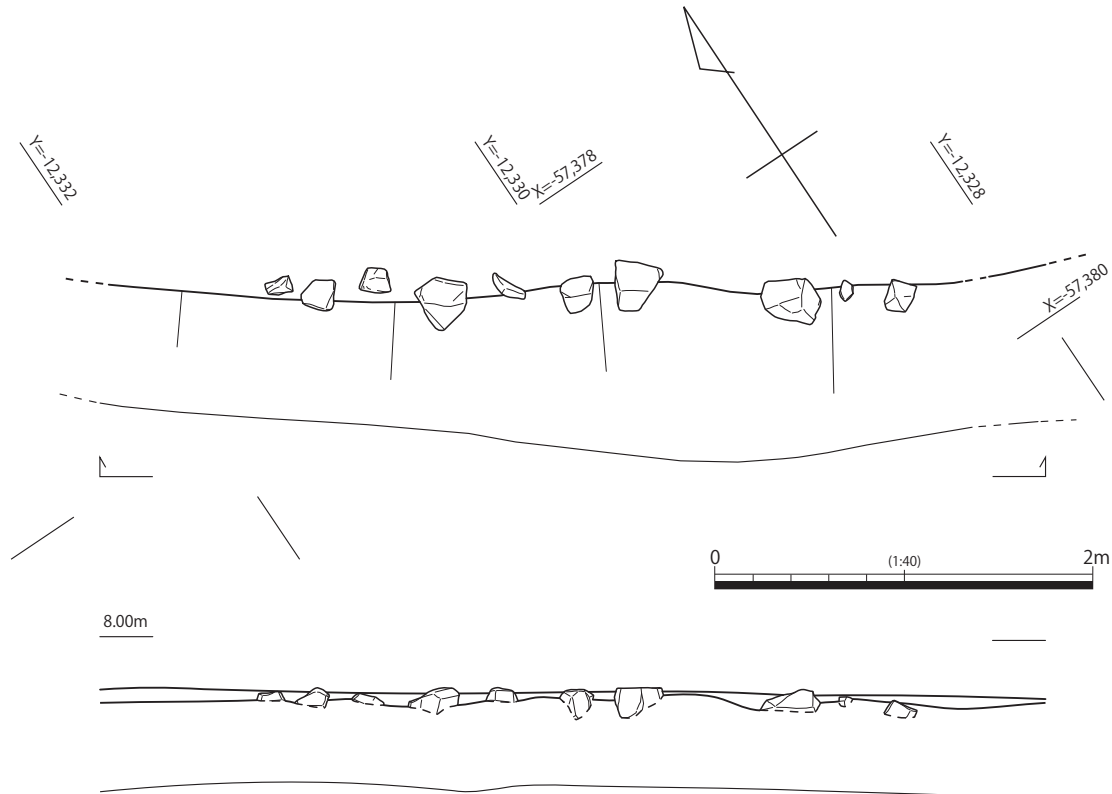
第IV-6-52図 700盛土北側石列土層断面

では、四隅突出の形にあわせた擬似畦畔も検出している。さらに、天保14(1843)年に作成された絵図『高草郡本高村田畑地続全図』では、当該地に島上の高まりが表現されている。また、地元の方によれば、圃場整備以前にはこの場所に高まりがあったという。この高まりが墳丘盛土であったとすれば、築造以降、高まりをいくらか残したまま様々な改変が行われ、最後は圃場整備による削平によって、その基部のみが残ったと考えられる。



5区北 700盛土 断面図

第IV-6-53図 700盛土 701溝土層断面



第IV-6-54図 700盛土南側石列平・立面

(2) 701 溝〔第IV-6-55・56 図 第2分冊図版126・127〕

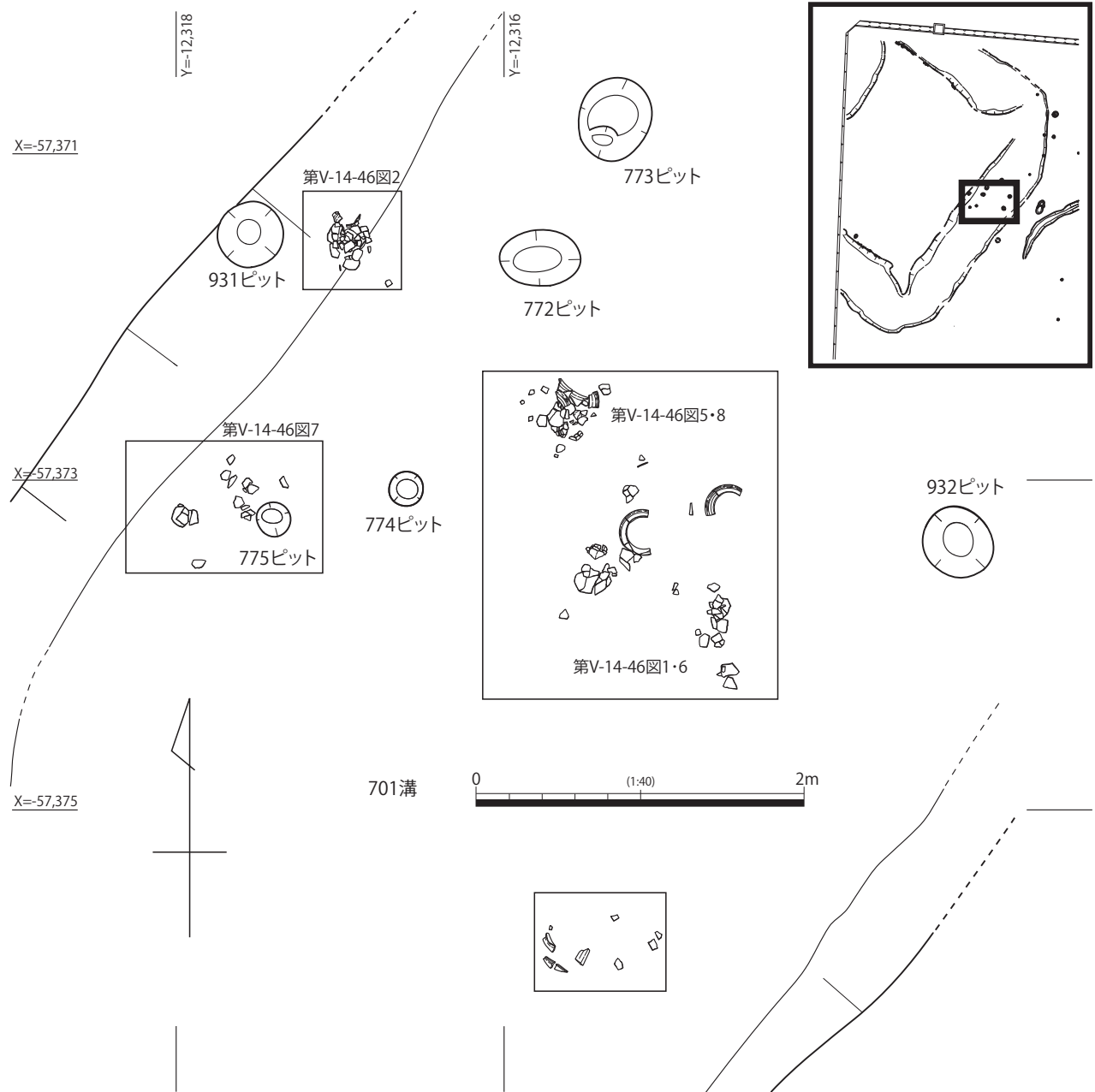
700 盛土を取り囲むように巡る浅い周溝である。幅5.8～7 m、最も狭い突出部での幅4 m、深さは0.4 mほどであり、底面レベルに大きな差はない。埋土には細砂が若干認められ、ラミナのある層もわずかにあるが、粘土ブロックや炭化物を含む層がほとんどである。止水性の堆積もなく、絶えず水が流れていたり溜まっていた状況ではないようである。断面形からも水流による浸食等を受けた形跡は見当たらない。

埋土最上層で土器溜まりを検出した〔第IV-6-55・56 図 第2分冊図版126-1〕。これらの土器は近接して、ほぼ同じレベルで出土しており、溝内での堆積が進む中で置かれたか、一括廃棄されたものと考えられる。溝内では他地点でも、埋土上層～下層にかけて土器が出土しており、それらをあわせて考えると、弥生時代終末期には埋没がはじまっていたと考えられる〔第V-14-45～47 図〕。

また、先述したように溝底から新たな溝を検出している（700 盛土拡張部、889 溝、896 溝、917 溝）。これらは盛土下まで範囲がのびるものもあり、700 盛土の造成、701 溝掘削前のものである。おおまかな範囲は701 溝と重なるため、もともと701 溝掘削以前の盛土遺構があり、やや位置を変えてそれらを再度つくり直したものが、現在の700 盛土と701 溝である可能性がある。

(3) 700 盛土下面検出遺構

これ以降700 盛土1～3層を除去した後に検出した遺構について述べる。先述したように、盛土中のマンガン斑や酸化鉄が著しく、平面での検出が困難であったため、検出面よりさらに上層から掘り



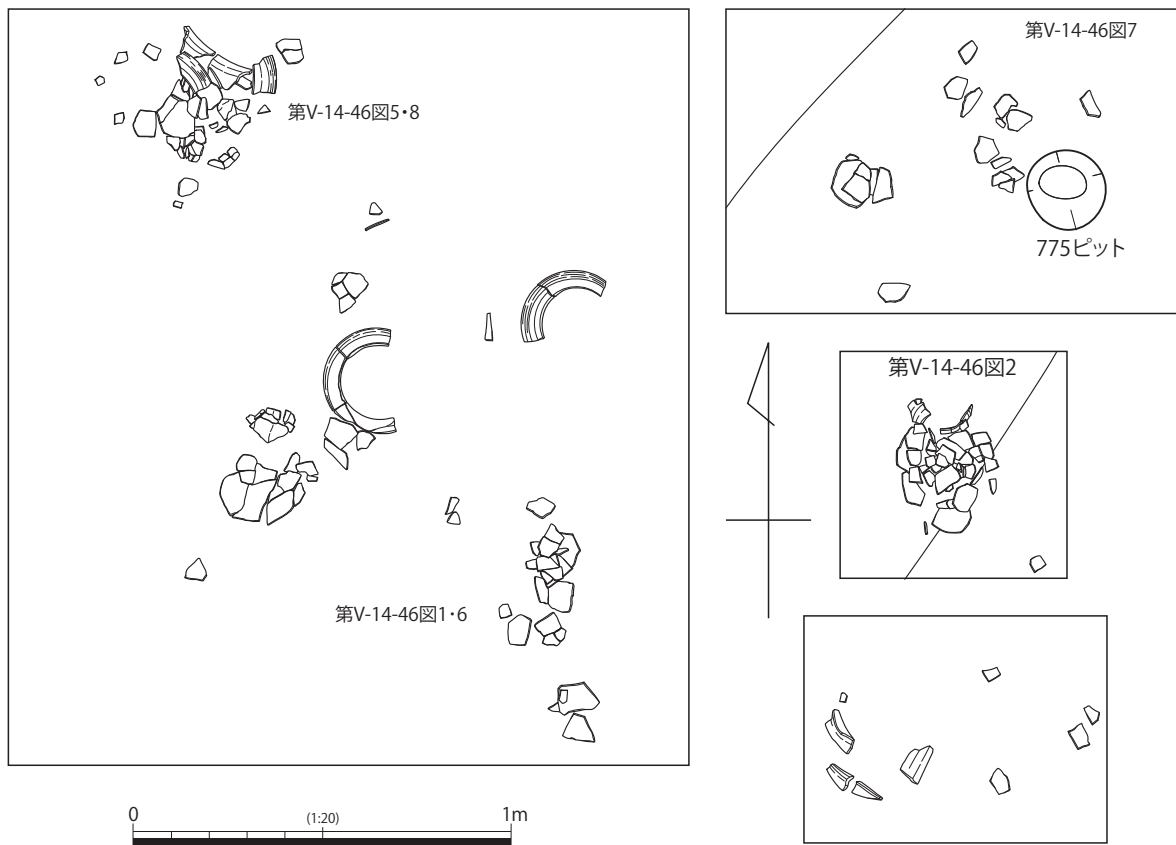
第IV-6-55図 701溝土器溜まり平面

込まれている可能性がある。

① 700 盛土 1 層下面検出遺構〔第IV-6-57 図〕

700 盛土拡張部〔第IV-6-58・59 図 第2分冊図版128・129〕

700 盛土の盛土 1 層を掘削すると、701 溝北側でさらに新たな溝を検出した。溝は 701 溝とほぼ重なっているが、南へ 1 m ほどずれている。盛土遺構全体を巡ることなく、北側の 701 溝内で収まっている。幅 5～7 m、深さは 0.4～0.5 m である。溝底面には、幅 15cm、深さ 2 cm ほどの半円形の窪みが、東西 2 m、南北 3 m の範囲で集中してみつがっている。同じ方向で並ぶ幾つかのまとまりがあり、溝掘削時に使用した鍬や鋤の刃先跡と考えられる。



第IV-6-56図 701溝土器溜まり平面 (拡大)

この溝は、盛土2・3層による盛土遺構を形成した際の溝の可能性がある。701溝東側でも盛土1層を除去すると701溝内でさらに889溝を検出した。これも同様の溝の可能性もある。さらに北西隅や南側で、盛土3層下面ではあるが、896溝と917溝を検出している。これらは、盛土内にマンガン斑や酸化鉄が多く、検出しにくい状況を考慮すれば、盛土1層下面のもので、同じような性格であったかもしれない。とすれば、当初は周溝といえるようなものではなく、各辺に対応した独立した溝を設置していた状況も考えられる。ただし、700盛土内から出土した土器で1層と2・3層の間で明確な時期差はないので、北側の700盛土拡張部分については大きな時期差とは考えられず、作業工程上できたものである可能性もある。

いずれにしても一旦盛土2・3層を盛った後、これらの溝が埋没し、その上に盛土1層を盛って、盛土遺構の範囲を拡張させていると考えられる。

699土坑〔第IV-6-60図 第2分冊図版130-3・131-1〕

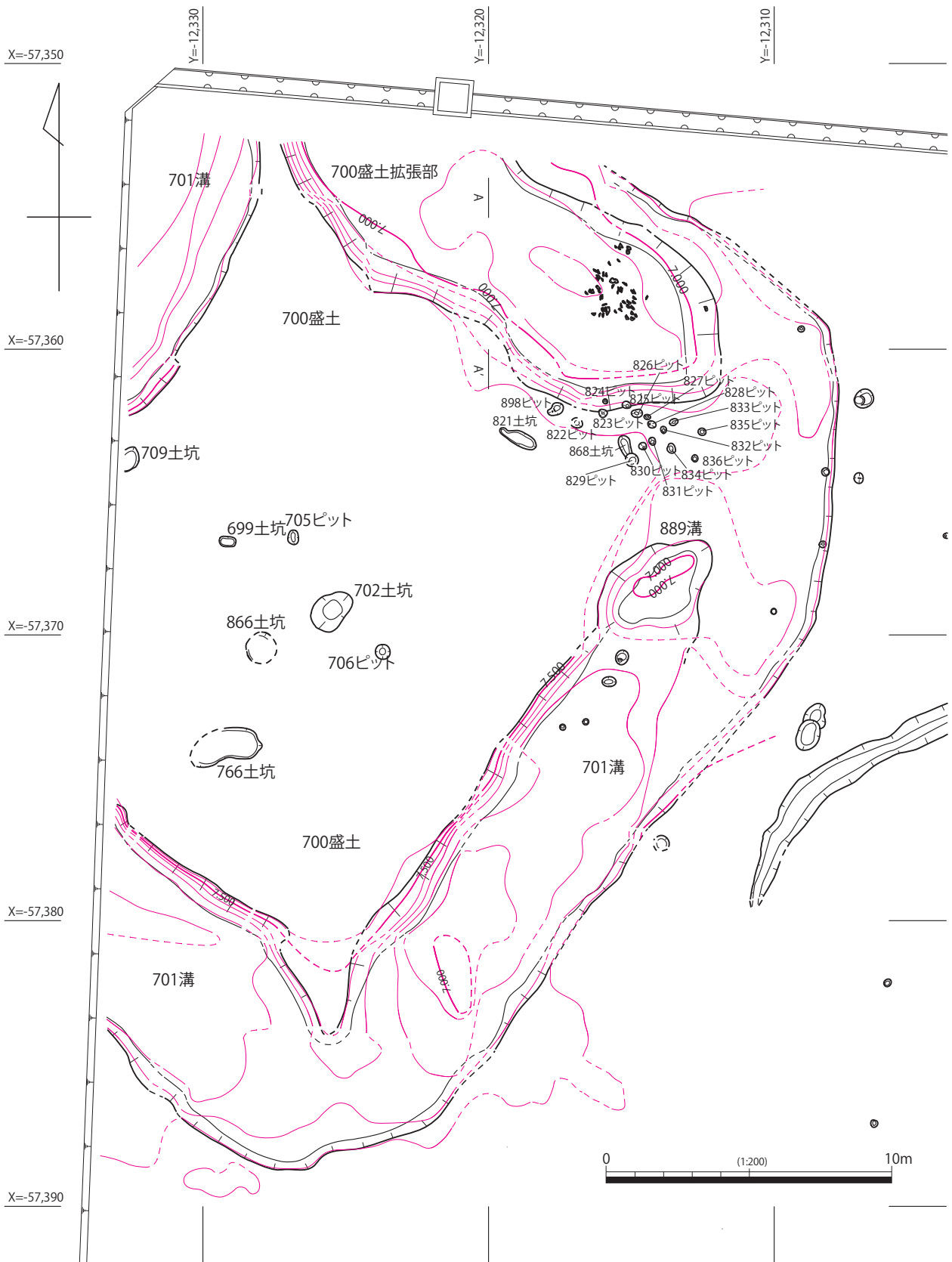
700盛土中央よりやや西に位置する。長軸0.6m、短軸0.35m、深さ6～9cmの東西方向に長い楕円形の土坑。遺物は出土していない。埋土に粗砂が混じっている。

702土坑〔第IV-6-60図 第2分冊図版131-2～132-1〕

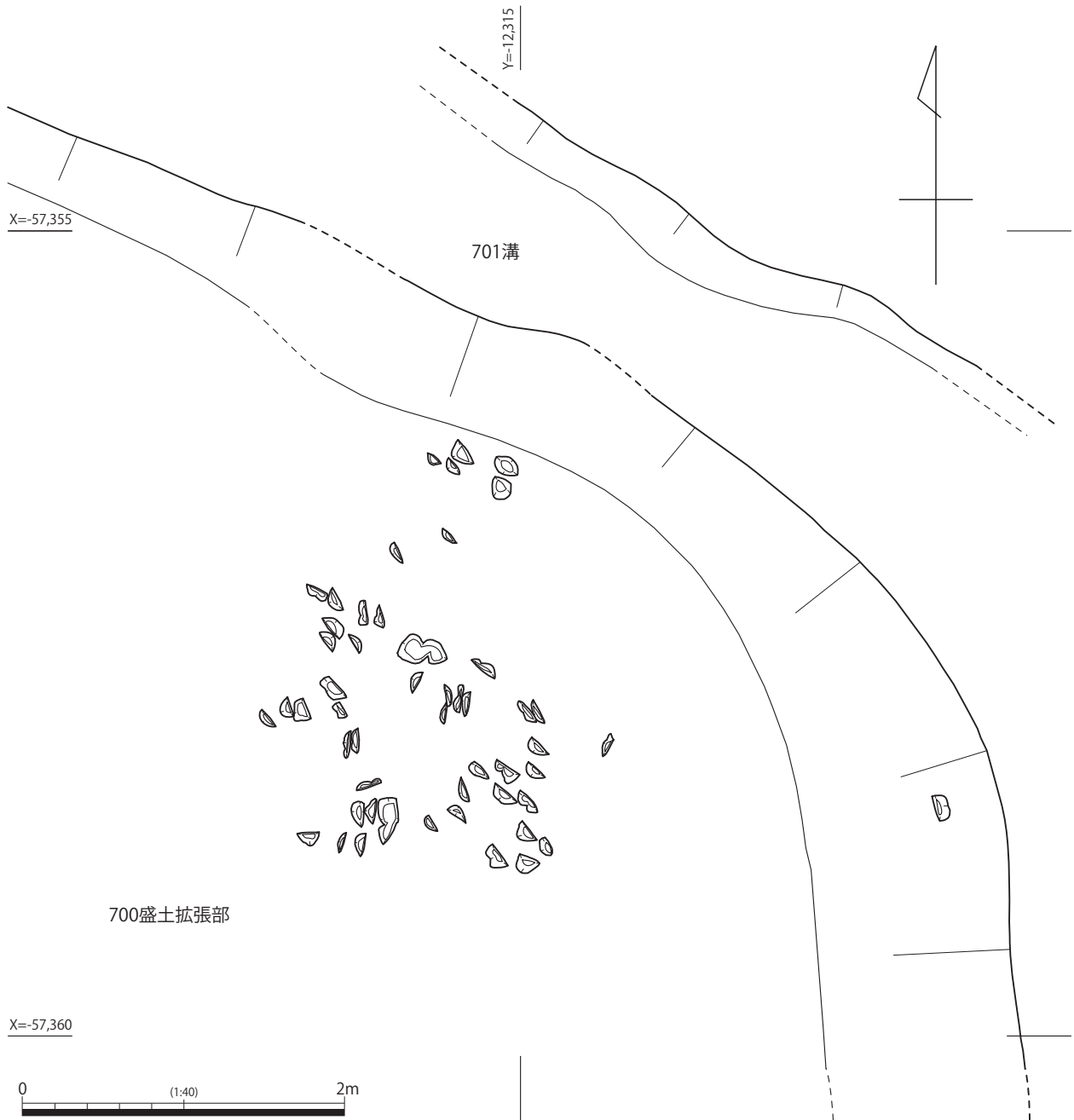
700盛土のほぼ中央に位置する。長軸1.6m、短軸1.1m、深さ0.4mの北東-南西方向に長い楕円形の土坑である。埋土は3層に分かれ、粘土ブロックや炭化物を含む。0.1m大の礫が土坑北側でまとまって底面近くで出土している。

705ピット〔第IV-6-60図〕

700盛土中央よりやや北側に位置する。長軸0.5m、短軸0.37m、深さ0.2mの南北にやや長い円形のピットである。遺物は出土していない。埋土に粗砂が多く、他のピット、土坑とは異なる。699



第IV-6-57図 700盛土盛土1層下面検出状況



第IV-6-58図 700盛土拡張部平面

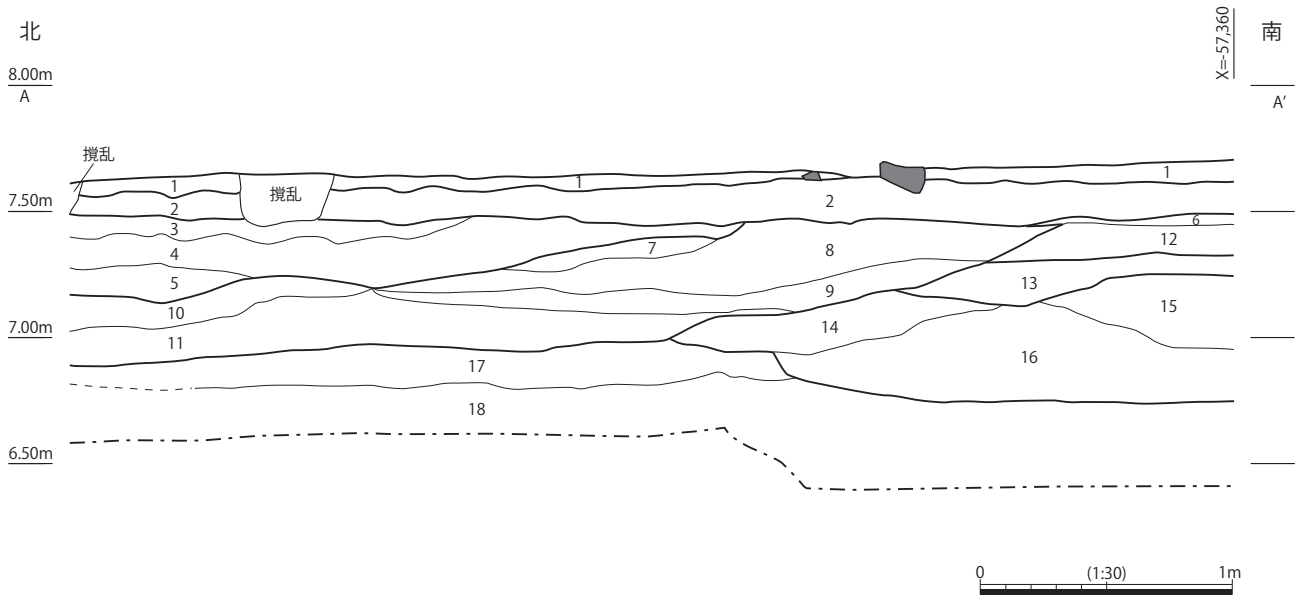
土坑と同様にさらに上層に帰属する遺構の可能性がある。

706 ピット〔第IV-6-61 図〕

700 盛土中央よりやや南東に位置する。径約 0.5 m、深さ 0.6 m の円形のピットである。底面からほぼ垂直に立ち上がる。形態から柱穴の可能性がある。底面のレベルは 7.00m。

709 土坑〔第IV-6-61 図〕

700 盛土の西端中央部に位置する。調査区境で区切られているが、残存している部分で長軸 0.83 m、



第3-1-1a層	1	7.5Y7/1灰白色 細砂まじりシルト～粘土 (粗砂をわずかに含む)
第3-1-2a層	2	5Y7/1灰白色 シルト～粘土 (粗砂をわずかに含む)
	3	2.5Y5/1黄灰色 粘土～シルト (粗砂をわずかに含む)
701溝	4	5Y6/1灰色 粘土～シルト (炭化物を含む)
	5	7.5Y6/1灰色 シルト～粘土 (0.5～1.0cmの灰白色粘土ブロックをまばらに含む)
700盛土(1層)	6	2.5Y6/1黄灰色～5Y6/1灰色 粘土～シルト (0.5～2.0cmの黄灰色・灰色の粘土ブロックの混土)
	7	5Y8/1灰白色 シルト～粘土
700盛土拡張部	8	5Y8/1灰白色 シルト～粘土 (粗砂をわずかに含む)
	9	5Y7/2灰白色～5Y7/1灰白色 シルト～粘土 (ラミナあり。細砂・土器片を含む。粘土ブロックわずかに含む。酸化鉄多い)
	10	7.5Y6/1灰色 シルト～粘土 (炭化物を含む。0.5～1.0cmの灰白色粘土ブロックをまばらに含む)
	11	5Y6/1灰色 シルト～粘土 (炭化物・0.5～2.0cmの灰白色粘土ブロックを含む)
700盛土(2層)	12	5Y8/2灰白色～5Y8/3淡黄色 シルト～粘土 (0.5cmの灰白色粘土ブロックをまばらに含む。酸化鉄多く含む)
700盛土(3層)	13	7.5Y8/1灰白色～7.5Y8/2灰白色 シルト～粘土 (1.0cmの炭化物・1.0～3.0cmの灰白色粘土ブロックを含む)
	14	7.5Y8/1灰白色 粘土～シルト (1.0～3.0cmの灰白色粘土ブロックを含む)
946溝	15	5Y7/1灰白色 シルト～粘土 (炭化物を多く含む。マンガン斑あり)
	16	5B7/1明青灰色 粘土～シルト (1.0～2.0cmの灰色粘土ブロックを含む)
第5a層	17	7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト (1.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロック含む。炭化物含む)
	18	10BG7/1明青灰色 粘土～シルト (粗砂～細砂を多く含む)

第IV-6-59図 700盛土拡張部断面

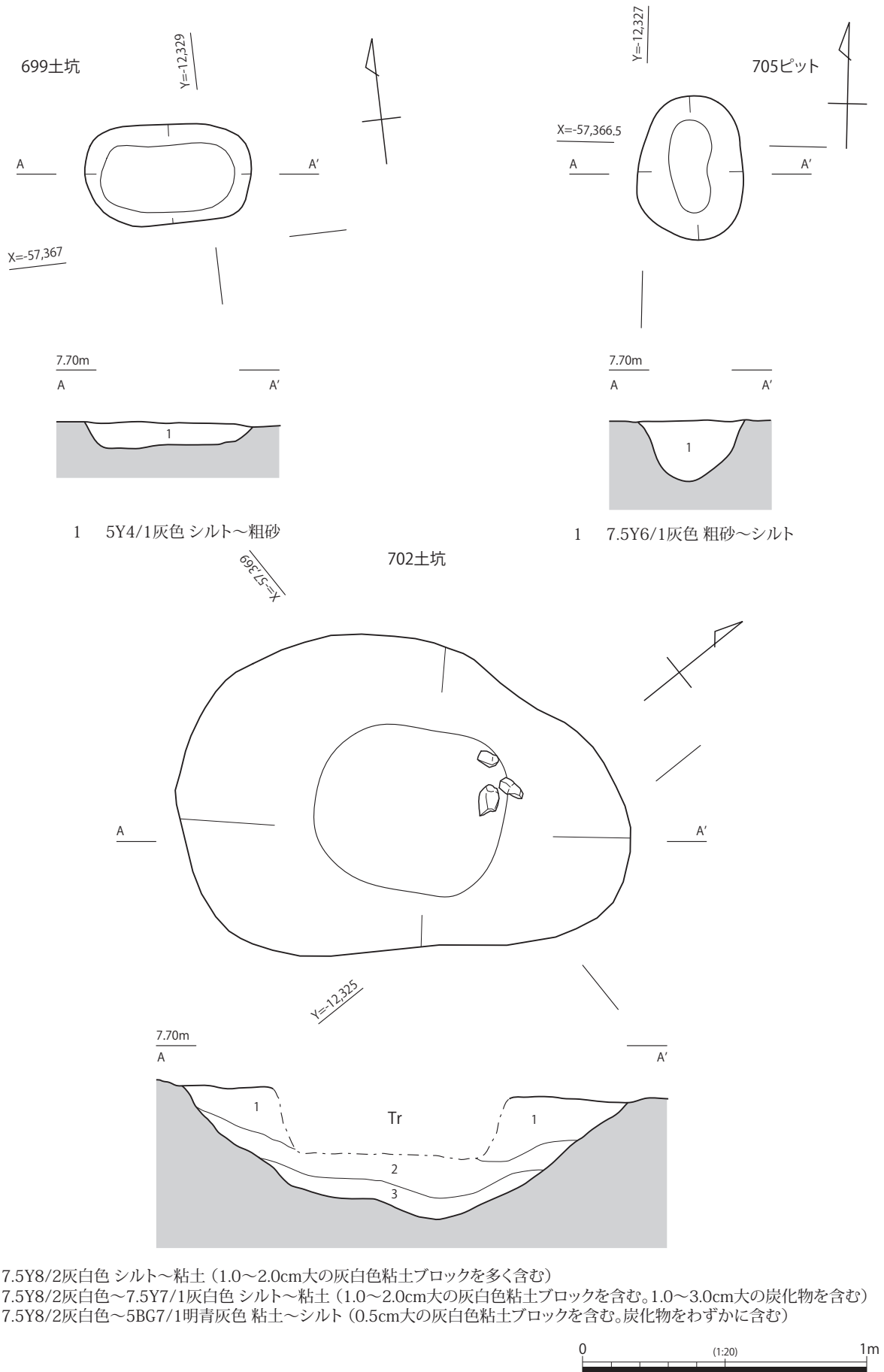
短軸 0.54 mの南北方向に長い楕円形の土坑である。安全面から、完掘してはいないが、深さは0.4m以上である。

766 土坑 [第IV-6-62 図 第2分冊図版 134-3]

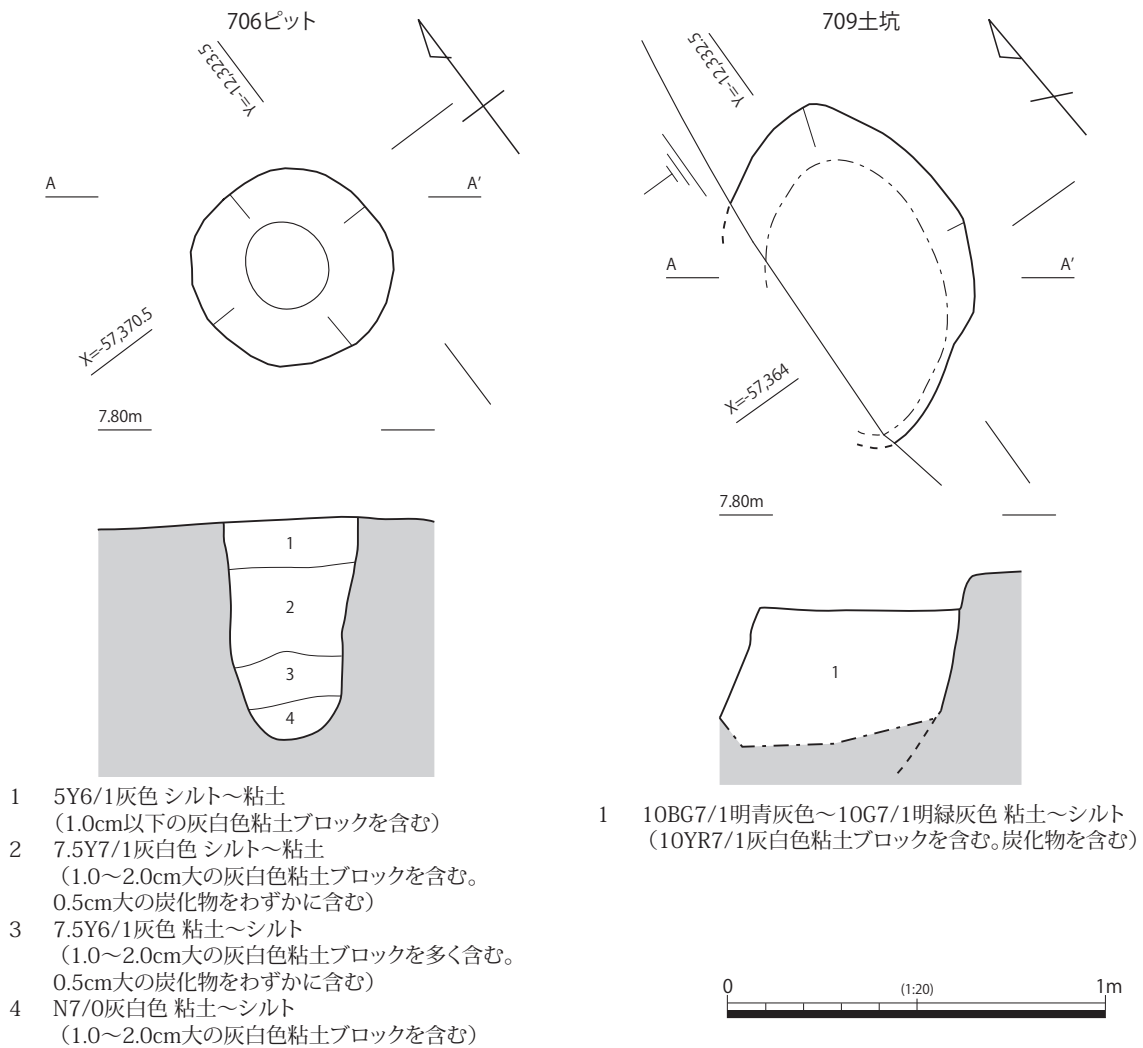
700 盛土中央より南に位置する。主軸トレンチの土層断面観察では、かなり大きな遺構と考えられたが、盛土1層下面では平面でとらえることが出来なかったため、盛土2層下面まで掘って平面を検出、埋土の掘削を行った。土層断面からは上面の長軸は不明、短軸 2.5 m、深さ 0.25 mの東西方向に長い楕円形の土坑と思われる。盛土2層下面での規模は、主軸トレンチで不明な部分もあるが、現存長で長軸 2.26 m、短軸 0.9 m、深さ 8cm の東西方向に長い楕円形の土坑である。埋土から、弥生土器の底部 [第 V-14-42 図] が出土している。

821 土坑 [第IV-6-63 図 第2分冊図版 135-2・3]

700 盛土の北東突出部の付け根付近に位置する。長軸 1.4 m、短軸 0.5 m、深さ 5～10cm の南東 -



第IV-6-60図 699・702土坑 705ピット平・断面



第IV-6-61図 709土坑 706ピット平・断面

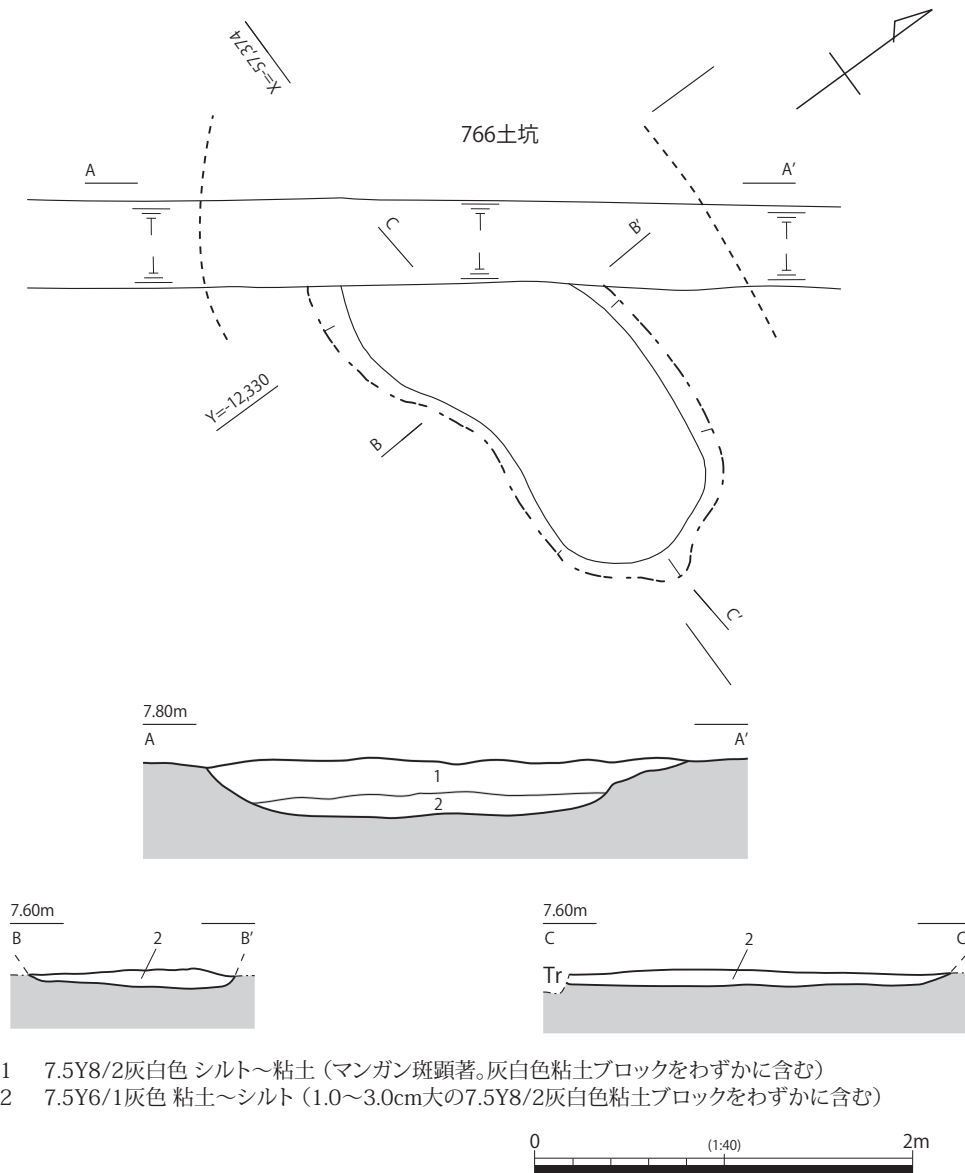
北西方向に長い楕円形の浅い土坑である。埋土から弥生土器の底部〔第 V-14-43 図〕が出土している。

ピット群 (822～836・898ピット)〔第VI-6-57図 第2分冊図版136〕

700盛土北東突出部付近に集中するピット群である。いずれも径0.2～0.5m、深さ0.1～0.3mの円形のものである。ピット上面や埋土から0.1～0.2m大の礫が出土するものもある。埋土は全て同じで、2.5Y～7.5Y8/1灰白色の粘土～シルト層で、1cm大の灰白色粘土ブロックを多く含んでいる。この周辺は盛土1層の堆積が薄いことや、礫は石列に使用されたものと同じであることから、大半が上層からの掘り込みではないかと考えられる。

866土坑〔第IV-6-63図 第2分冊図版137-1〕

700盛土の中央やや南西に位置する。主軸トレンチの土層断面とその北西側で検出したが、それ以外の場所では見つからなかった。南西-東北軸で1.1m、深さ0.2～0.3m。土器等の遺物は出土し



- 1 7.5Y8/2灰白色 シルト～粘土 (マンガン斑顕著。灰白色粘土ブロックをわずかに含む)
- 2 7.5Y6/1灰色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の7.5Y8/2灰白色粘土ブロックをわずかに含む)

第IV-6-62図 766土坑平・断面

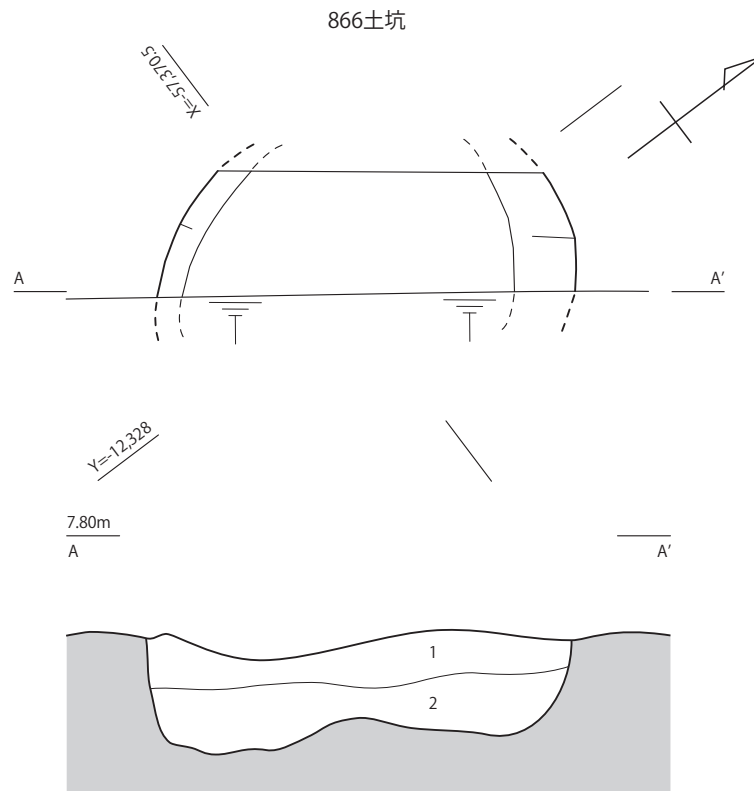
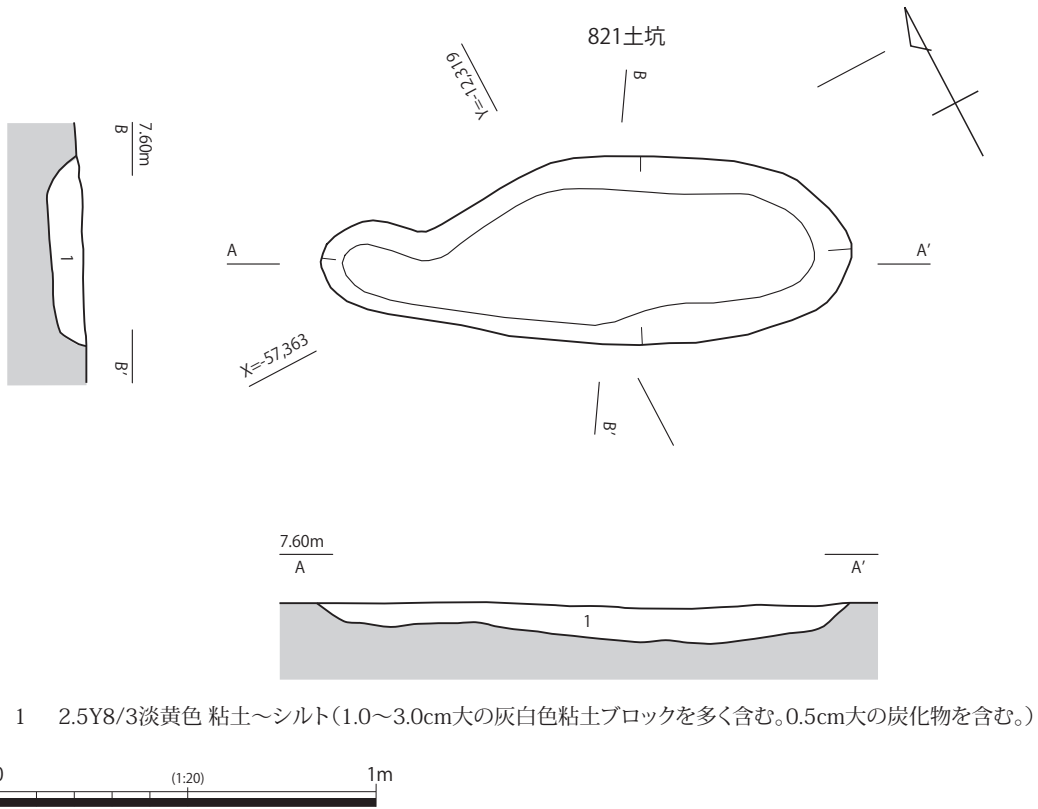
ていない。

868 土坑 [第IV-6-64 図]

700 盛土北東突出部付近に集中するピット群の中に位置する。先述した 829 ピットで一部が切られているが、現存で長軸 0.68 m、短軸 0.4 m、深さ 0.12 m の北西 - 南東方向に長い楕円形の土坑である。829 ピットによって切られているが、埋土が類似していることから、ピット群と同様に上層からの掘り込みと考えられる。

889 溝 [第IV-6-65 図 第 2 分冊図版 138]

700 盛土東側短辺の北側から 701 溝内にかけて検出した。規模は最大幅 3.8 m、深さ 0.3 m ほどであり、長さは北東 - 南西方向で 4.6 m あるが、南側は不明瞭であり、立ち上がりは分からなかったが、さら



第IV-6-63図 821・866土坑平・断面

に南側にのびるようである。700 盛土拡張部で述べたように、盛土1層を盛る前にあったと考えられる溝である。

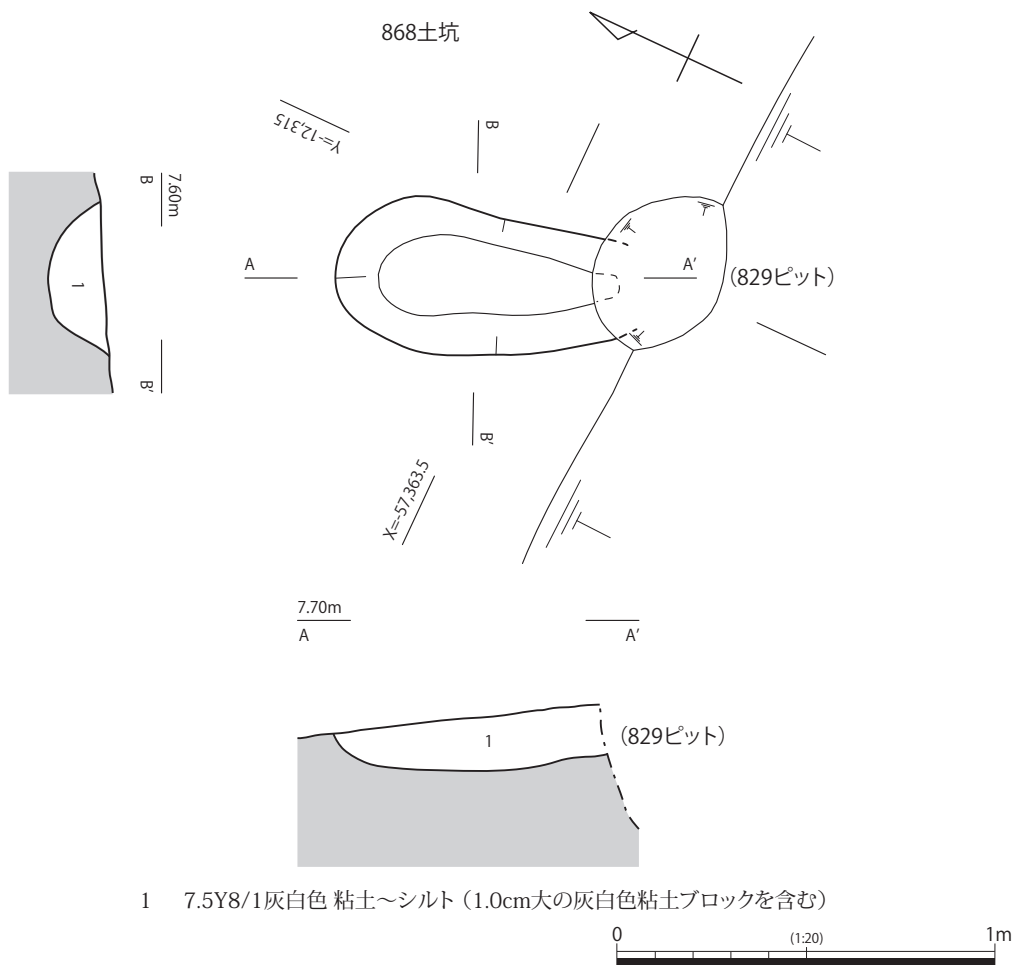
② 700 盛土2層下面検出遺構〔第IV-6-66 図〕

713 土坑〔第IV-6-67 図 第2分冊図版132-2～133-1〕

700 盛土中央より南に位置する。盛土2層下面の検出遺構であるが、土層断面でのみ確認できている。平面での検出は盛土3層下面まで掘り下げて行った。3層下面検出時で、長軸1.68 m、短軸0.66 m、深さ0.34 mの南東-北西方向に長い楕円形の土坑である。埋土5層を中心に弥生時代後期の土器が出土し、周辺からも多く出土している〔第V-14-40 図 第2分冊図版132-2・3〕。また、埋土には粘土ブロックや炭化物も多く含まれており、土器と共に人為的に埋められた可能性が高い。

867 ピット

700 盛土中央よりやや北西に位置する。主軸トレンチの土層断面で検出した。主軸トレンチによって一部が掘削されているが、現存で径0.2 m、深さ0.18 mほどの円形のピットである。盛土1層下面で検出したピットと同規模で埋土も同じであるので、上層からの掘り込みの可能性が高い。



第IV-6-64図 868土坑平・断面

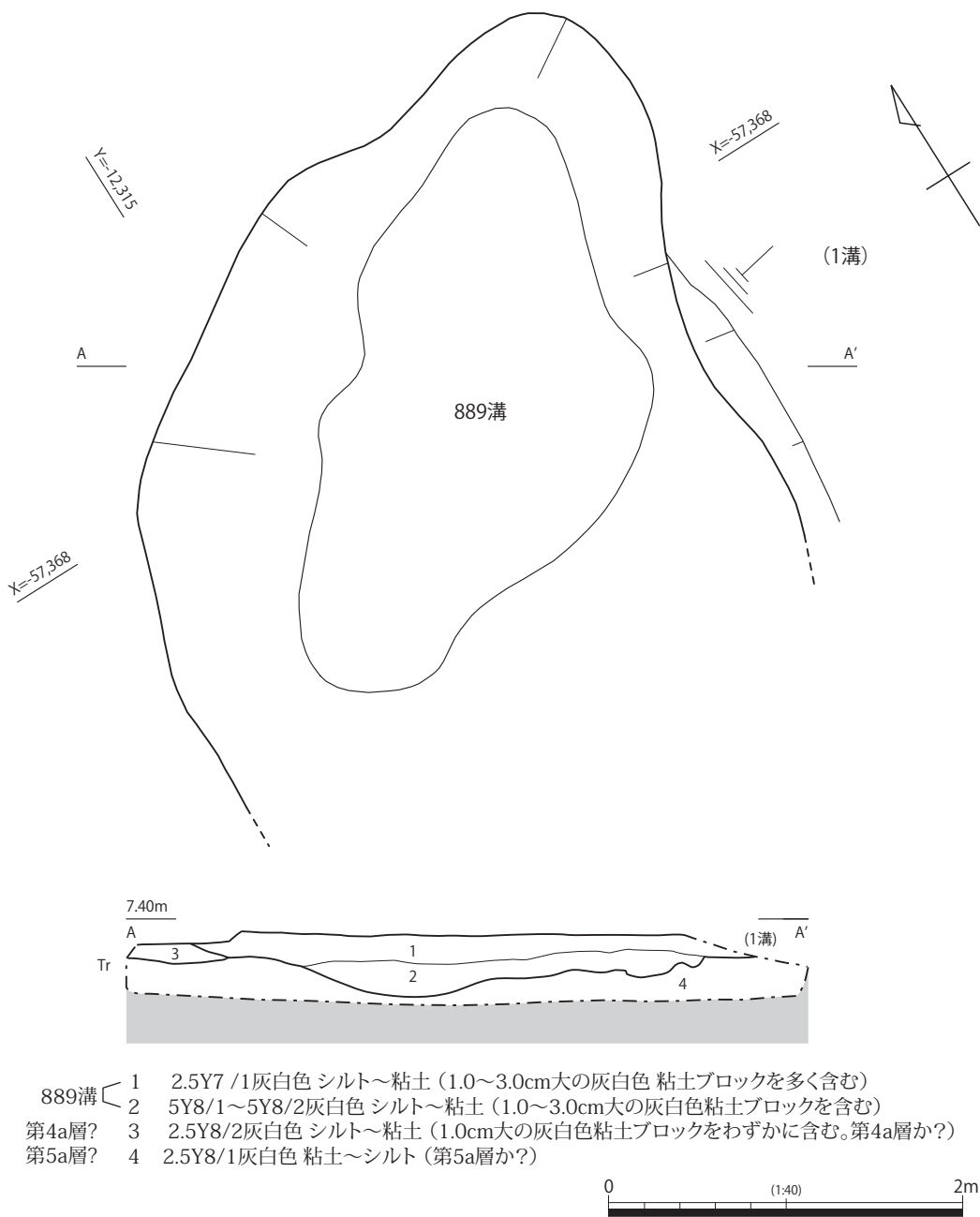
③ 700 盛土3層下面検出遺構〔第IV-6-68 図〕

751 ピット〔第IV-6-69 図〕

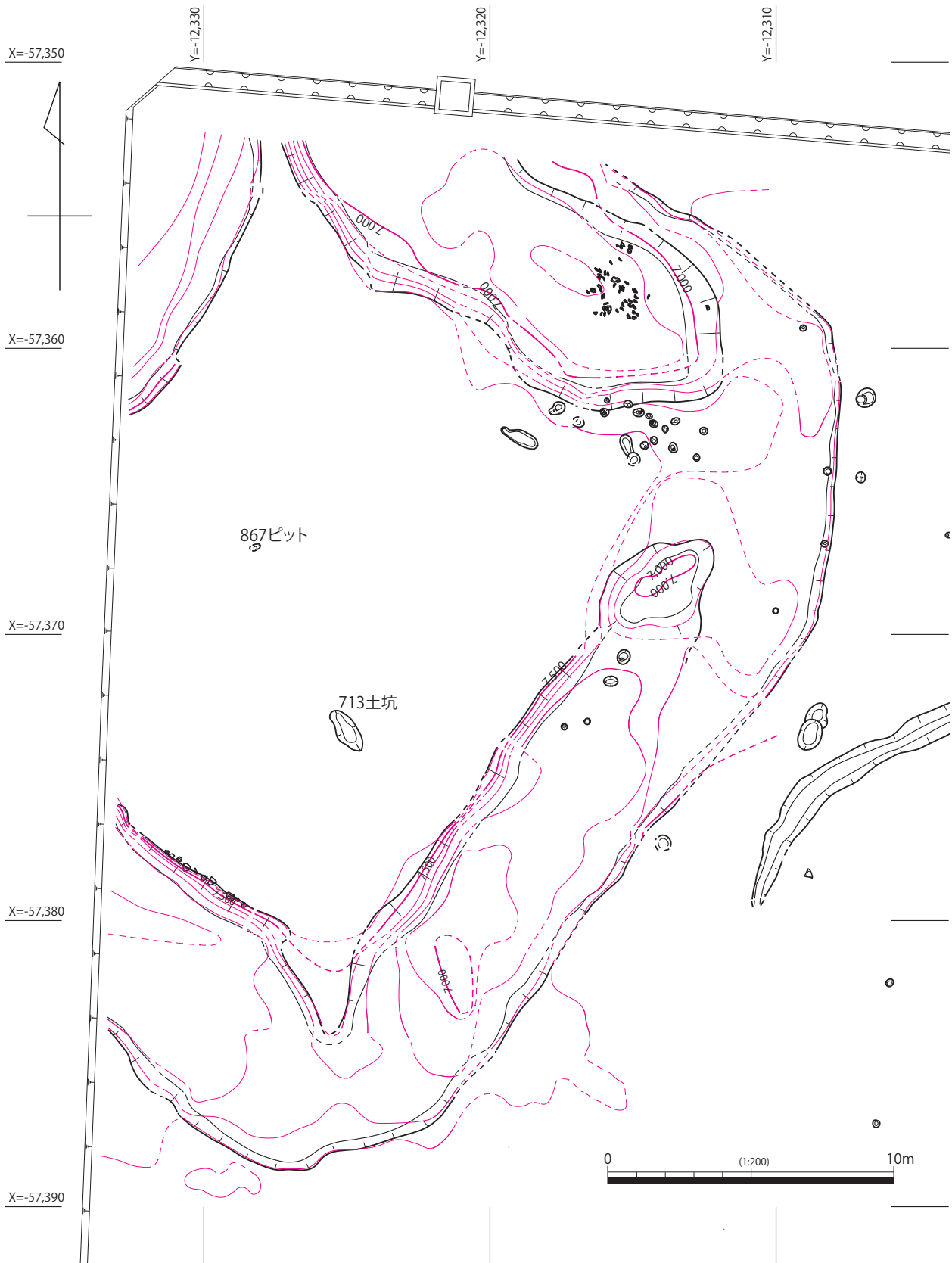
700 盛土南短辺のほぼ中央に位置する。径 0.4 m、深さ 0.15 ~ 0.2 m の円形のピットである。埋土は盛土1層下面で検出したピット群と同じで、上層からの掘り込みの可能性がある。

南側ピット群 (725・752 ~ 758 ピット)〔第IV-6-69 ~ 71 図〕

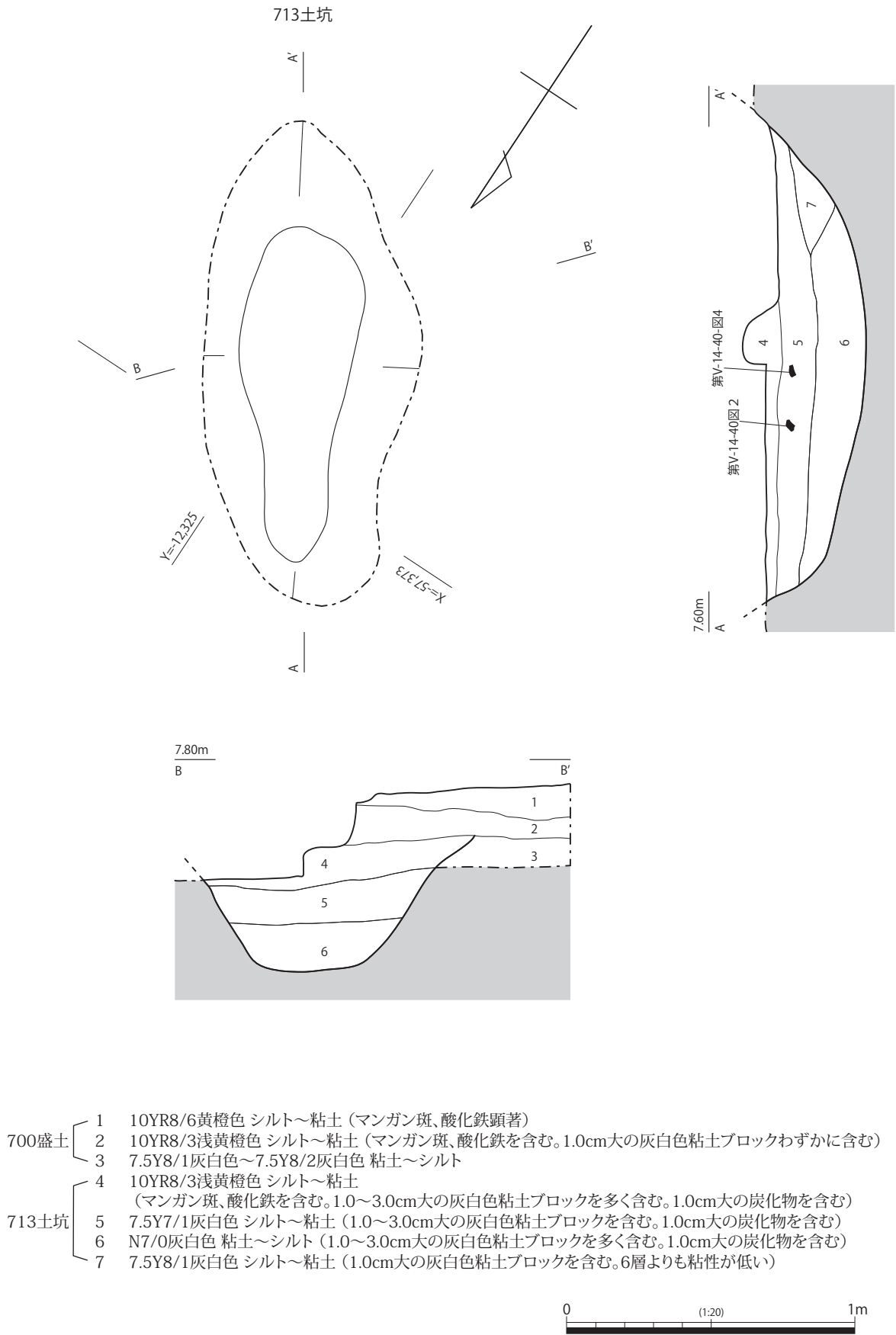
700 盛土中央の南、南北 3.4 m 東西 3 m の範囲で、ピットが集中して検出された。いずれも径 0.2 ~ 0.4



第IV-6-65図 889溝平・断面



第IV-6-66図 700盛土盛土2層下面検出状況



- | | | |
|-------|---|--|
| 700盛土 | 1 | 10YR8/6黄橙色 シルト～粘土 (マンガン斑、酸化鉄顕著) |
| | 2 | 10YR8/3浅黄橙色 シルト～粘土 (マンガン斑、酸化鉄を含む。1.0cm大の灰白色粘土ブロックわずかに含む) |
| | 3 | 7.5Y8/1灰白色～7.5Y8/2灰白色 粘土～シルト |
| 713土坑 | 4 | 10YR8/3浅黄橙色 シルト～粘土
(マンガン斑、酸化鉄を含む。1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む。1.0cm大の炭化物を含む) |
| | 5 | 7.5Y7/1灰白色 シルト～粘土 (1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。1.0cm大の炭化物を含む) |
| | 6 | N7/0灰白色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む。1.0cm大の炭化物を含む) |
| | 7 | 7.5Y8/1灰白色 シルト～粘土 (1.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。6層よりも粘性が低い) |

第IV-6-67図 713土坑平・断面

mの円形のピットである。埋土が単層で深さが0.2 m前後のもの（751～753・756ピット）と埋土が2層以上で深さがそれ以上のもの（754・755・757・758ピット）に大きく分かれる。埋土は盛土1層下面で検出した706ピットと同じものもあり、平面や断面の形態も似ている。特に757・758ピットと706ピットは南北方向にほぼ等間隔（1.6 m）で一列に並び、柱が建っていた可能性がある。ただし、建物跡としてこれに対応するような柱穴はみつかっていない。725・754・755ピットも南北方向に一列に並ぶようであるが、これについても建物跡とはいえない。以上のような状況から、多くが上層から掘り込まれた可能性が高い。

759 土坑〔第IV-6-71 図 第2分冊図版133-2〕

700 盛土中央より南東寄りに位置する。長軸1 m、短軸0.5～0.6 m、深さ0.12 mの東西方向に長い楕円形の土坑である。埋土が盛土第1層下面検出のピット群と類似しており、上層からの掘り込みの可能性もある。

761 土坑〔第IV-6-72 図 第2分冊図版133-3〕

700 盛土中央より東に位置する。長軸1.08 m、短軸0.46 m、深さ0.1 mの北西-南東方向に長い楕円形の土坑である。長軸の両端には半円形の平坦面がある。長軸で土坑端から約0.15～0.2 mほどの範囲で、深さは2 cmほどである。他の土坑と比較して特殊な形態であるが、副葬品や土器等の遺物はみつからなかった。

762 ピット〔第IV-6-72 図 第2分冊図版134-1・2〕

700 盛土中央より北東側に位置する。長軸0.53 m、短軸0.41 m、深さ0.33 mの南西-北東方向に長い楕円形のピット。埋土の状況から柱穴の抜き取りの可能性もあるが、周辺で対応するようなピットはみつかっていない。盛土1層上面のピット群と埋土が似ているので、上層からの掘り込みの可能性もある。埋土より弥生時代後期後葉の甕〔第V-14-41 図〕が出土している。

763 ピット〔第IV-6-72 図〕

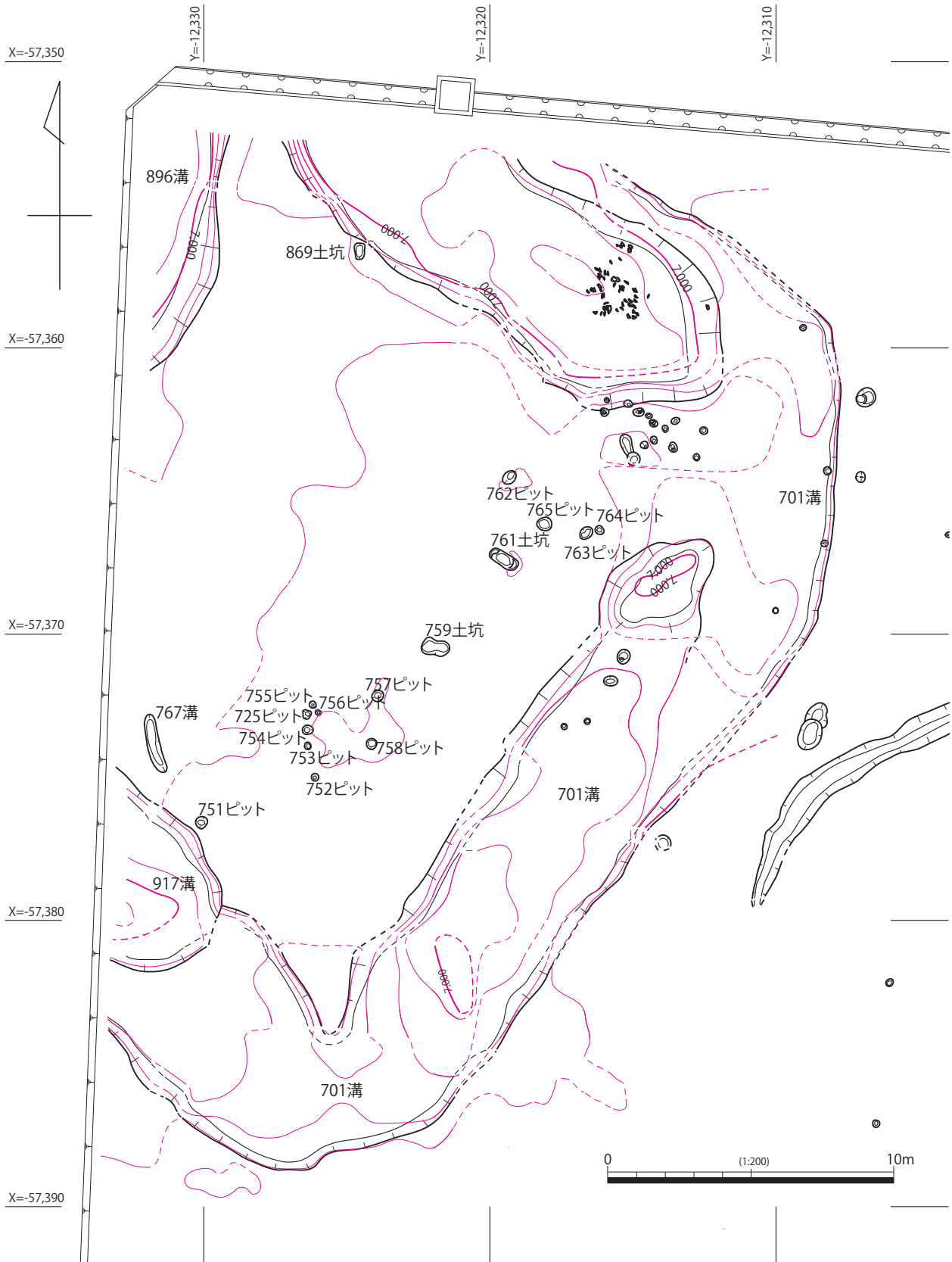
700 盛土の東側長辺の北側に位置する。長軸0.5 m、短軸0.38 m、深さ0.2～0.25 mの南西-北東方向に長い楕円形のピット。盛土1層上面のピット群の埋土と似ているので、上層からの掘り込みの可能性もある。

764 ピット〔第IV-6-73 図〕

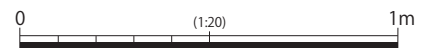
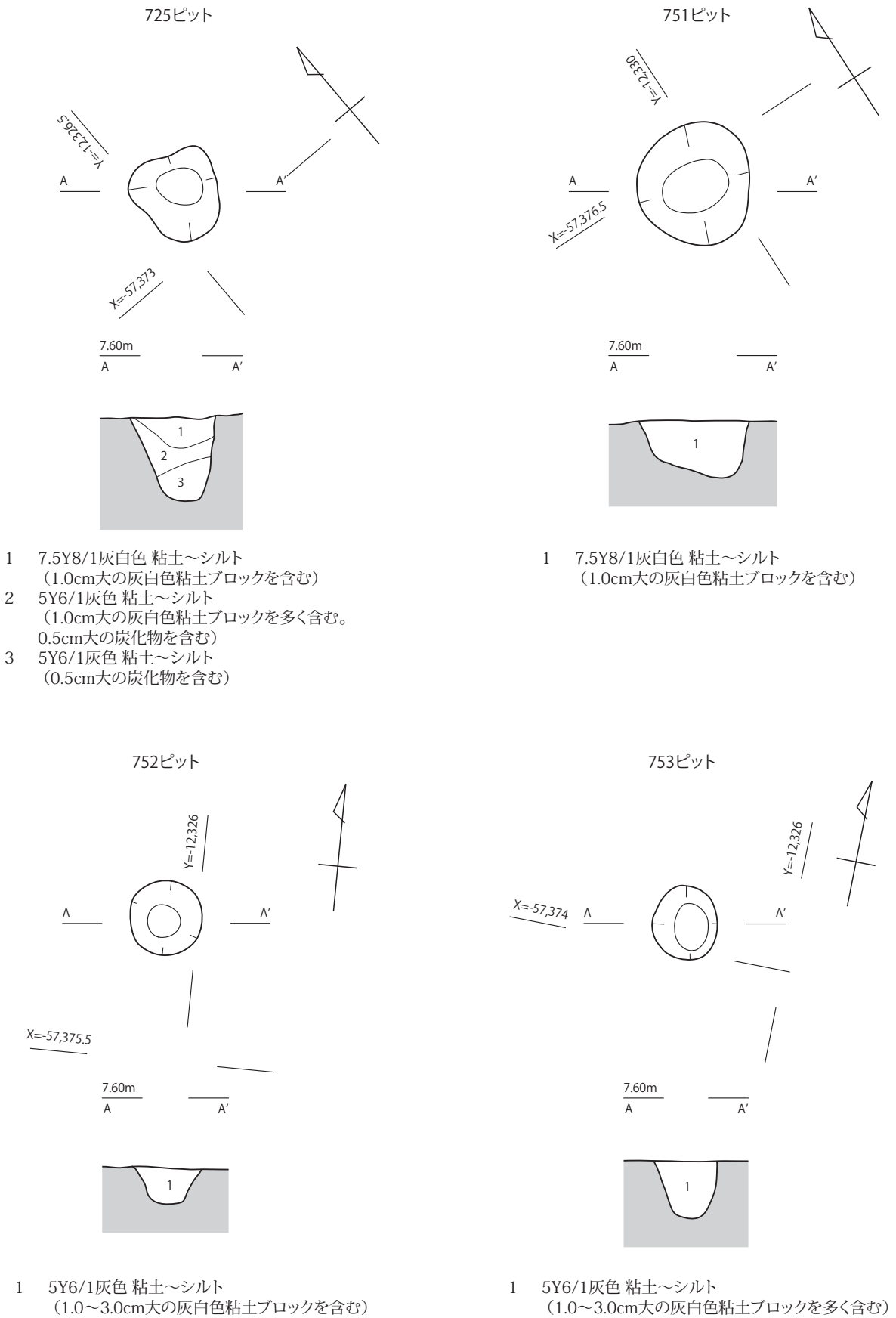
700 盛土の東側長辺の北側に位置し、763ピットと近接する。径0.3 m、深さ8 cmの円形のピット。盛土1層上面のピット群の埋土と似ているので、上層からの掘り込みの可能性もある。

765 ピット〔第IV-6-73 図〕

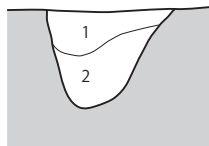
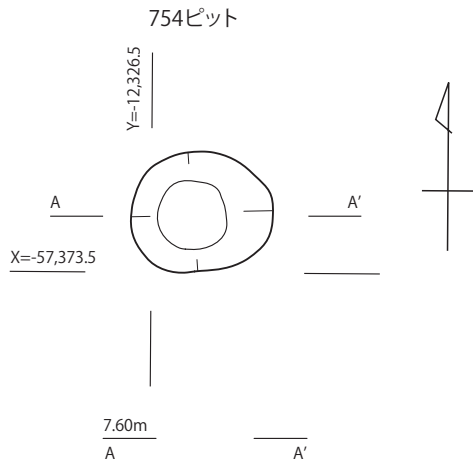
700 盛土中央より東に位置する。径0.5 m、深さ0.23 mほどの円形のピット。埋土の状況は762ピットと似ており、両者に何らかの関係があるかもしれない。また盛土1層上面のピット群の埋土とも似ているので、上層からの掘り込みの可能性もある。



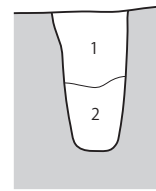
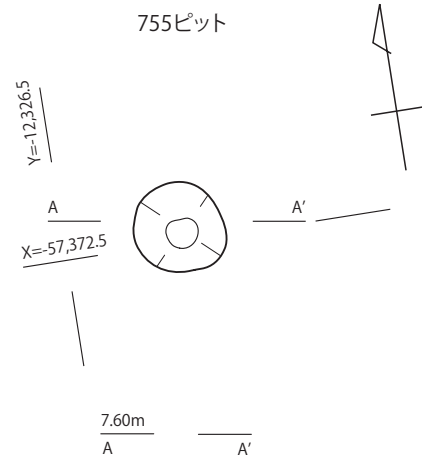
第IV-6-68図 700盛土盛土3層下面遺構検出状況



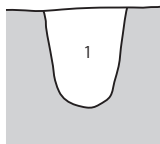
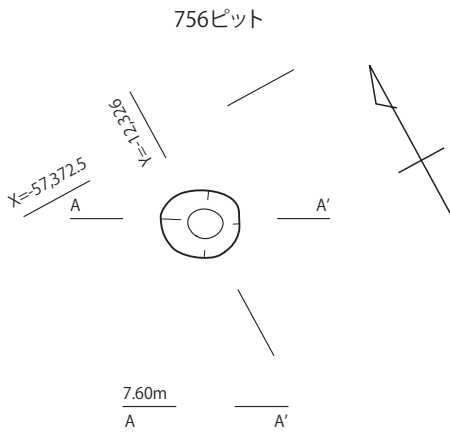
第IV-6-69図 725・751～753ピット平・断面



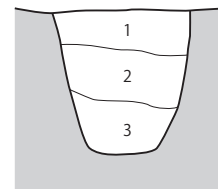
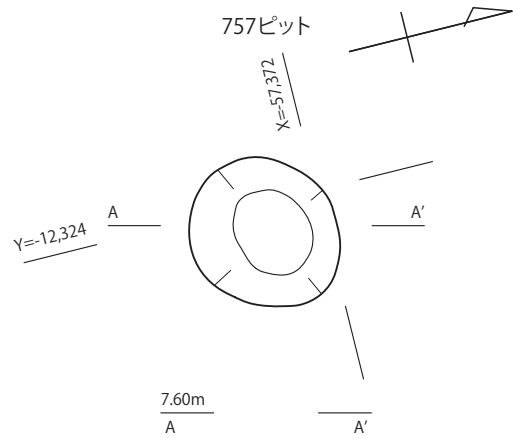
- 1 7.5Y8/1灰白色 粘土～シルト
(1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。
0.5cm以下の炭化物を含む)
- 2 5Y6/1灰色 粘土～シルト
(1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む)



- 1 5Y6/1灰色 粘土～シルト
(1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む)
- 2 7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト
(0.3cm以下の炭化物を含む)



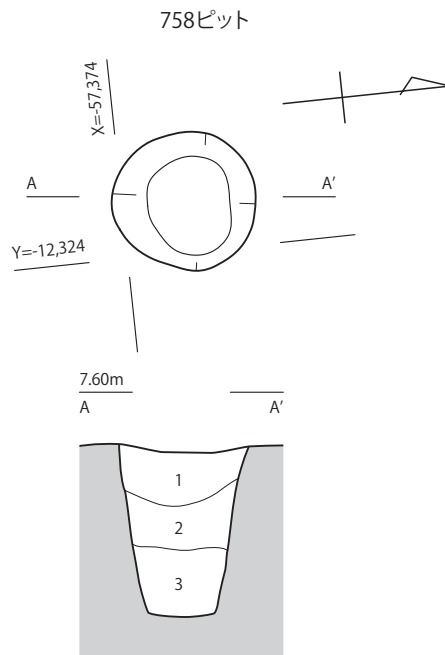
- 1 5Y6/1灰色 粘土～シルト
(1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む)



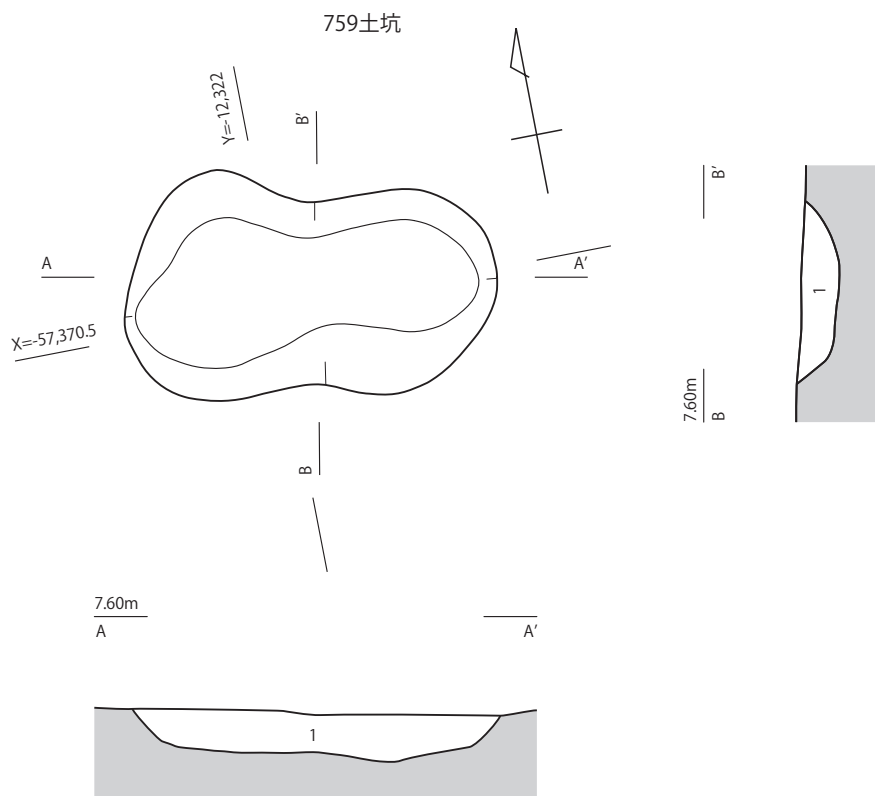
- 1 7.5Y8/1灰白色 粘土～シルト
(1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む)
- 2 7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト
(1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。
0.5cm以下の炭化物を含む)
- 3 7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト
(1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む)



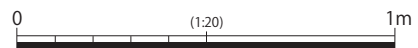
第IV-6-70図 754～757ピット平・断面



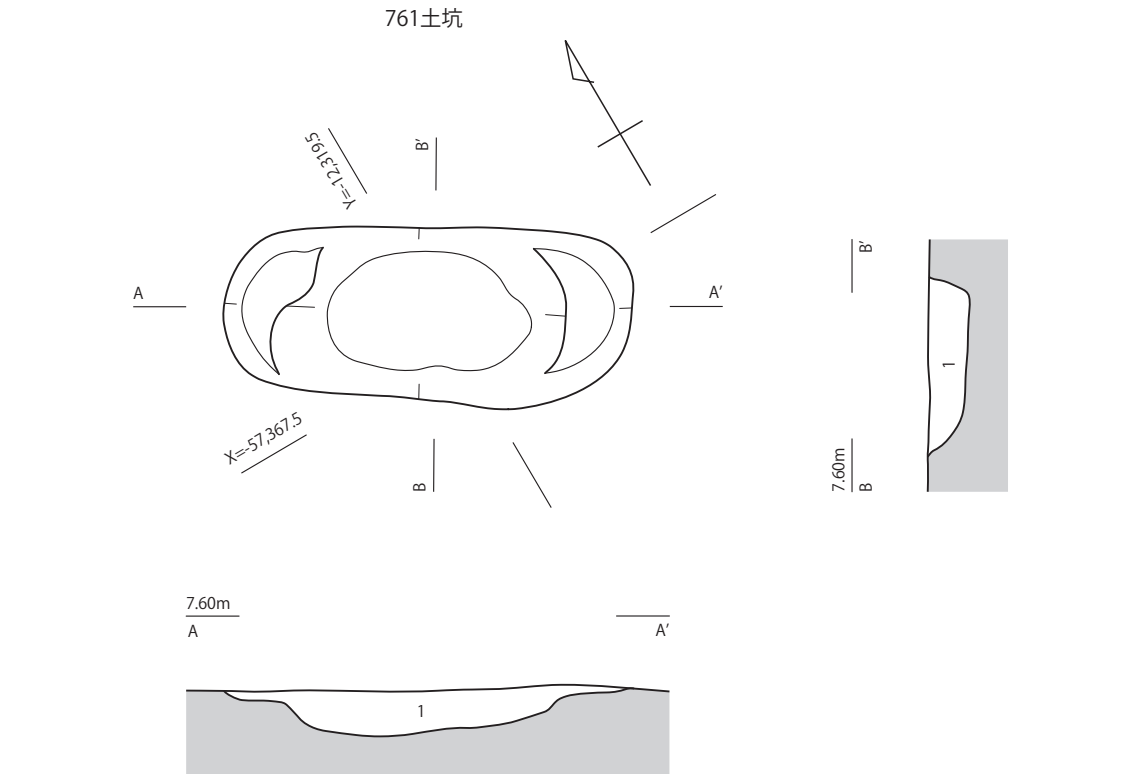
- 1 7.5Y8/1灰白色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。0.5cm以下の炭化物を含む)
- 2 7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。0.5cm以下の炭化物を含む)
- 3 7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む)



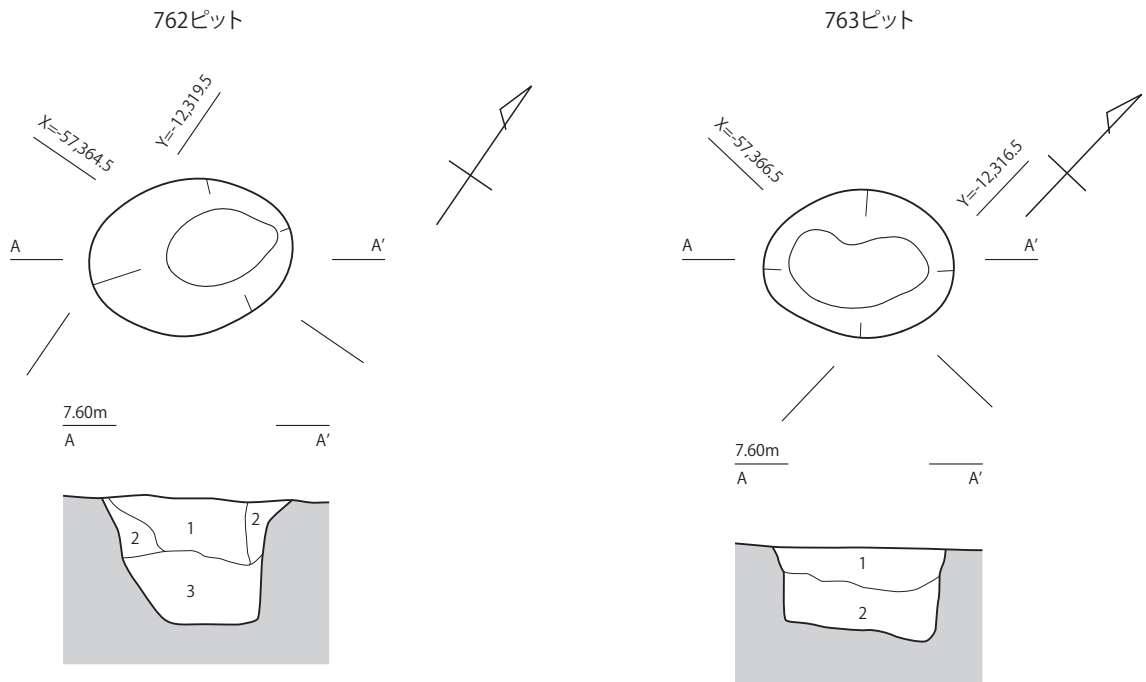
- 1 7.5Y8/1灰白色 粘土～シルト (1.0～2.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む。1.0cm大の炭化物を含む)



第IV-6-71図 758ピット 759土坑平・断面

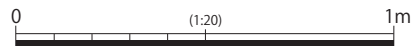


1 7.5Y6/1灰色 粘土～シルト (1.0～2.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む)

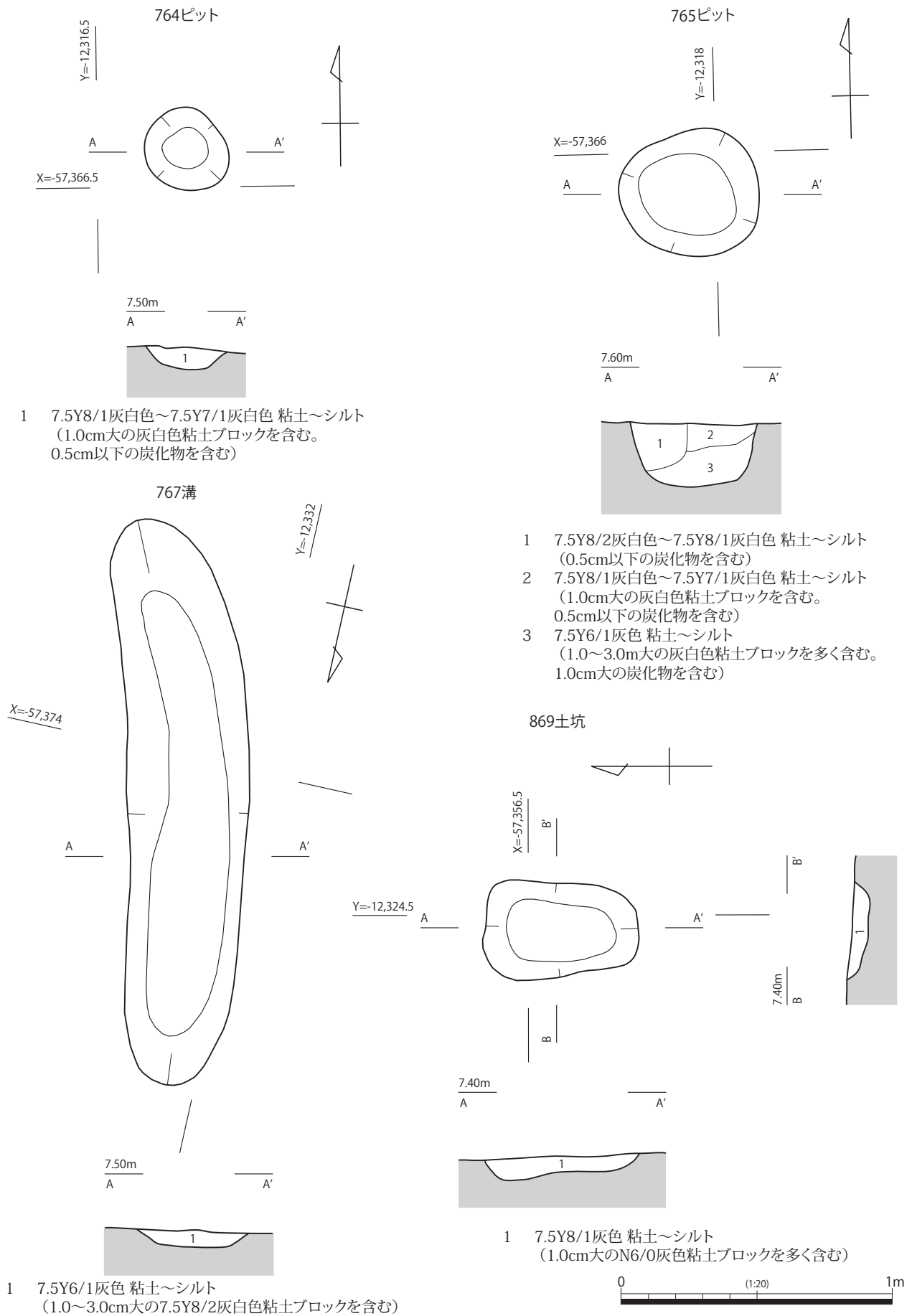


- 1 7.5Y7/1灰白色～7.5Y6/1灰色 粘土～シルト (1.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む)
- 2 7.5Y6/1灰色 粘土～シルト (マンガン斑を多く含む。1.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む)
- 3 7.5Y6/1灰色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む。1.0cm大の炭化物を含む)

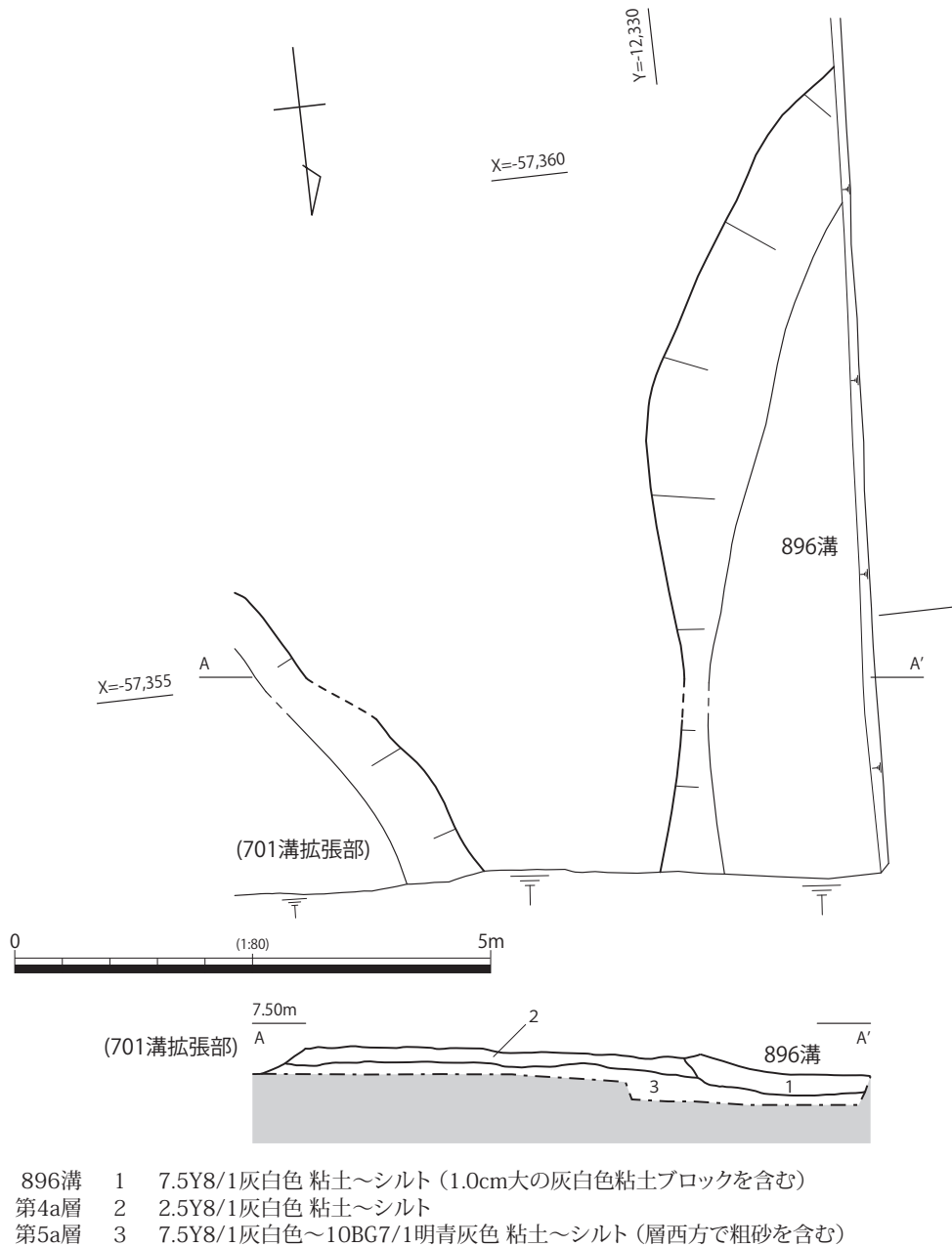
- 1 7.5Y8/1灰白色～7.5Y7/1灰白色 粘土～シルト (1.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。0.5cm以下の炭化物を含む)
- 2 7.5Y6/1灰色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを多く含む。1.0cm大の炭化物を含む)



第IV-6-72図 761土坑 762・763ピット平・断面



第IV-6-73図 767溝 869土坑 764・765ピット平・断面



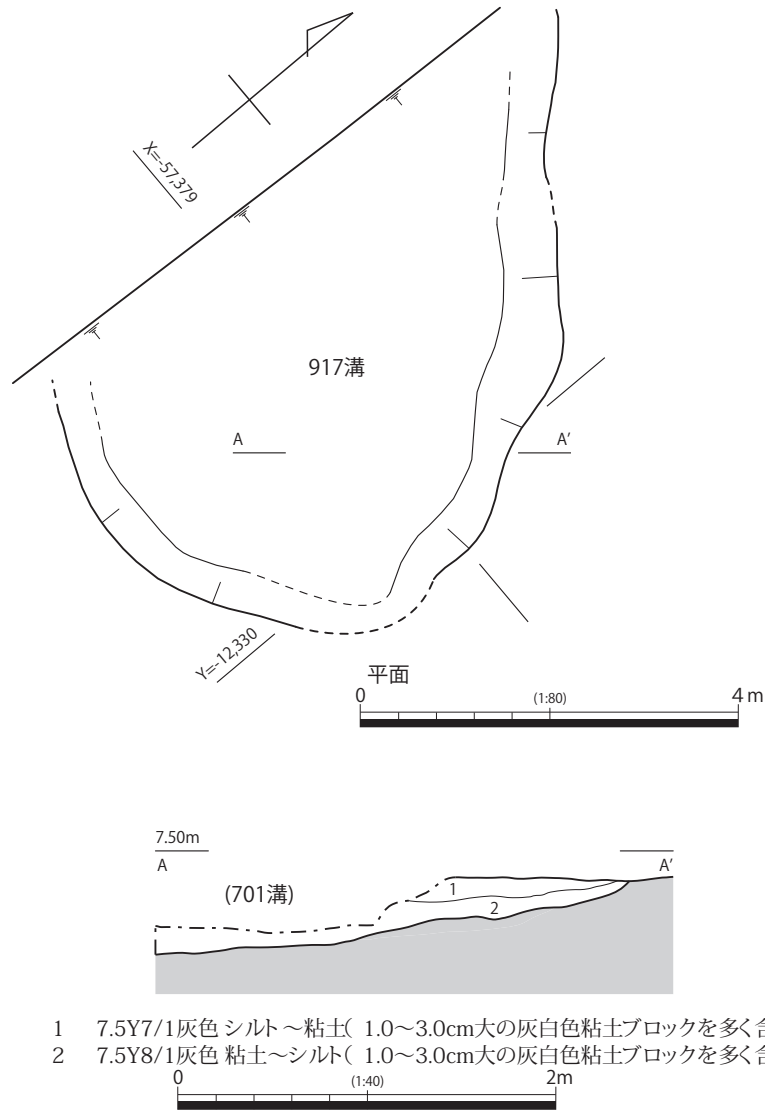
第IV-6-74図 896溝平・断面

767 溝 [第IV-6-73 図 第2分冊図版 135-1]

700 盛土南側短辺の調査区西端近くに位置する。幅 0.42 m、深さ 6 cm ほどの浅い溝である。南北方向に走行しており、長さは 3 m である。遺物は出土していない。

869 土坑 [第IV-6-73 図 第2分冊図版 137-2・3]

700 盛土北側短辺と突出部の境付近に位置する。長軸 0.56 m、短軸 0.35 m、深さ 8 cm の南北方向に長い隅丸方形の形をした土坑である。形態が他の土坑とは異なっているが、遺物は出土していない。盛土 1 層上面のピット群の埋土と似ているので、上層からの掘り込みの可能性もある。



第IV-6-75図 917溝平・断面

896 溝 [第IV-6-74 図 第2分冊図版 139-1]

700 盛土北西隅に位置し、701 溝と同じように南北方向に走行する溝である。大部分が 701 溝の立ち上がりよりも西側にあるが、一部盛土と重なる部分があり、盛土 3 層掘削中に検出したため、盛土 3 層下面の遺構とした。調査区境で途切れており、全体は不明だが、現存で、南北の長さ 8.5m、幅 2.3 m、深さ 0.4 m である。埋土は 701 溝と似ているが、色調や粘土ブロックの多さが異なり、また、701 溝の他の地点では認められていない 2 段堀のようになることから、別遺構として考えた。700 盛土形成前の溝であるが、先述したように 700 盛土拡張部や 889 溝と同じような性格の可能性もある。

埋土から弥生時代中期中葉の甕〔第 V-14-44 図〕が出土している。第 3-2a 層または下面遺構の遺物の混入と考えられるが、当該期の遺構である可能性もある。

917 溝 [第IV-6-75 図 第2分冊図版 139-2]

700 盛土南側短辺の調査区西境に位置する。701 溝と同じように南東 - 北西方向にのびている。調

査区境で途切れており、全体は分からないが、南東-北西方向で長さ6m、幅5.2m、深さ0.45mである。埋土は701溝と類似してはいるが、やはり色調や含有物が異なる。先述した896溝と同様に700盛土形成前の遺構であるが、700盛土拡張部や889溝と同じような性格の可能性もある。

④小結

700盛土中から出土した土器で最も新しい型式を示すのは、弥生時代後期後葉に一般的な特徴をもつ甕である〔第V-14-38図1～3〕。盛土の上部は後世に削平されている可能性が高く、盛土上面が機能していた段階を示す遺物は確認できなかったが、少なくとも後期後葉以降に盛土の造成が行われたものと考えて大過なからう。

一方、700盛土を取り巻く周溝とみられる701溝の埋土上層で土器溜まりを検出した。この土器溜まりから出土した土器には、後期後葉に一般的な特徴を示す甕もあるが、終末期前半に一般的な特徴をもつ甕も出土している〔第V-14-46図2〕。また、下層からも終末期前半に一般的な特徴を示す鼓形器台が出土している〔第V-14-45図8〕。

したがって、700盛土および701溝は弥生時代終末期前半に機能し、埋没している可能性が高い。

また、築造に関しては、700盛土の拡張が行われていた。盛土1層下面で700盛土の拡張と889溝を検出したが、これらが同一時期の所産とすれば、盛土2層段階には全周するのではなく、四辺を溝で区画した盛土だった可能性もある。ただし、出土遺物からは段階的な変遷を示す根拠をえることができなかった。よって、盛土を構築する際の過程または、その際の手順として、例えば、盛土の完成形、範囲を明示するための作業工程の一つであった可能性もある。

なお、701溝に囲まれた700盛土は、平面形態および一部に残存する石列などから、四隅突出型墳丘墓であった可能性もある。しかし、埋葬施設や、そこに埋葬施設が存在したことを傍証する副葬品などは検出できなかった。現状では、あくまで盛土遺構としておくのが妥当と考える。

第IV-6-1表 第3-1-3a層下面その他の遺構一覧

遺構名		地区名	規模 (cm)			埋 土	備 考
			長軸	短軸	深さ		
23	溝	6D-6c	105	(25)	5	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
24	溝	6D-6c	(113)	15	5	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
25	溝	6D-6c	(358)	25	3	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
43	土坑	6D-5d	40	(20)	5	10G4/1 暗緑灰色シルトと5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
49	溝	6D-5d	573	25	19	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
51	土坑	6D-5d	65	55	22	10G4/1 暗緑灰色シルトと5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
52	溝	6D-5d	203	30	11	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
55	土坑	6D-5d	51	51	12	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
56	土坑	6D-5d	40	40	15	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
57	土坑	6D-5d	90	68	20	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
58	土坑	6D-5d	30	25	18	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
59	土坑	6D-5d	36	36	32	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
63	土坑	6D-4d	125	76	28	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
64	土坑	6D-4d	83	(45)	14	5Y8/1～7/1 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
65	土坑	6D-4d	98	55	26	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
68	溝	6D-4d	(410)	43	18	5Y8/1～7/1 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
69	土坑	6D-4d	80	(66)	20	10G4/1 暗緑灰色シルトと5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	

第IV-6-2表 第3-1-3a層下面その他の遺構一覧（2）

遺構名		地区名	規模 (cm)			埋 土	備 考
			長軸	短軸	深さ		
70	土坑	6D-4d	(88)	25	5	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
71	土坑	6D-5c・5d	218	120	28	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
72	溝	6D-5c・5d・6c	(1243)	53	29	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
73	土坑	6D-6c	30	30	14	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
74	土坑	6D-1d	65	23	10	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
75	土坑	6D-1d	65	35	12	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	2段堀
76	土坑	6D-1d	138	92	19	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	人頭大礫含む
77	土坑	6D-1d	65	48	8	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
78	土坑	6D-1d	113	105	33	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
79	溝	6D-1d	(183)	30	14	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
80	溝	5D-10d	390	50	12	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	平面は弧状を呈する
81	土坑	6D-5c	40	40	20	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
82	土坑	6D-5c	40	30	13	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
83	土坑	6D-5c	(28)	25	15	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
84	土坑	6D-5c	32	32	8	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
85	土坑	6D-5c	20	20	9	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
86	土坑	6D-5c	45 (30)	15	15	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
87	土坑	6D-5c	37	37	29	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
88	土坑	6D-5c	50	44	27	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
89	土坑	6D-5c	43	25	31	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
90	土坑	6D-5c	15	15	20	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
91	土坑	6D-5c	45	38	32	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
92	土坑	6D-6c	30	27	14	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
93	土坑	6D-6c	(45)	(43)	15	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
94	土坑	6D-6c	45 (11)	3	3	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
95	土坑	6D-6c	40	34	16	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
98	土坑	5D-10d	(98)	57	15	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
102	土坑	5D-7c	40	32	13	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
103	土坑	5D-7c	38	24	17	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
104	土坑	5D-7c	28	22	12	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
110	溝	6D-2d	198	45	16	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
111	土坑	6D-2d	58	58	21	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
112	土坑	6D-2d	53	53	16	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
113	土坑	6D-2d	50	48	16	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
114	土坑	6D-2d	30	30	11	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
116	土坑	6D-3d	38	38	9	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
117	土坑	6D-3d	45	40	24	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
118	土坑	6D-3d	53	45	22	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
119	土坑	6D-3d	28	28	14	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
120	溝	6D-3d	(282)	55	18	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
121	土坑	6D-3d	30	25	13	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
122	土坑	6D-3d	86	35	20	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
123	溝	6D-3d	250	55	7	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	平面は弧状を呈する
124	土坑	6D-4d・5c・5d	(150)	(115)	6	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
128	土坑	6D-5d	25	25	11	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
129	土坑	6D-5d	40	28	14	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
131	土坑	5D-10d	(70)	71	16	5Y8/1～7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
132	土坑	5D-7c	82	(25)	6	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第3-2a層) の混土	
133	溝	5D-9d	(440)	70	18	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	

第IV-6-3表 第3-1-3a層下面その他の遺構一覧（3）

遺構名		地区名	規模 (cm)			埋 土	備 考
			長軸	短軸	深さ		
134	土坑	5D-9c・9d	26	18	7	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
136	土坑	6D-2d	33	33	30	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
137	土坑	6D-6c	20	20	10	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
138	土坑	6D-6c・7c	25	21	6	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
139	土坑	6D-6c	25	25	3	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
141	土坑	5D-10d	15	13	11	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
142	土坑	5D-10d	37	30	16	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
143	土坑	5D-10d	33	20	13	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
144	土坑	6D-2d	50	36	15	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	
150	土坑	6 D -6c	(65)	21	5	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第 3-2a 層) の混土	
151	土坑	5D-7c	21	20	5	10Y5/1 灰色 粘土～シルト (わずかに粘土ブロック・炭化物含む)	
152	土坑	5D-7c	20	15	5	10Y5/1 灰色 粘土～シルト (わずかに粘土ブロック・炭化物含む)	
153	土坑	5D-7c	25	13	5	10Y5/1 灰色 粘土～シルト (わずかに粘土ブロック・炭化物含む)	
154	土坑	5D-7c	24	21	5	10Y5/1 灰色 粘土～シルト (わずかに粘土ブロック・炭化物含む)	
155	土坑	5D-7c	13	10	3	10Y5/1 灰色 粘土～シルト (わずかに粘土ブロック・炭化物含む)	
157	土坑	6D-6c	33	27	16	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第 3-2a 層) の混土	
158	溝	6D-4c	95	25	7	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第 3-2a 層) の混土	
159	土坑	6D-4c	45	40	4	10G4/1 暗緑灰色シルトと 5Y7/1 灰色シルト (直下の第 3-2a 層) の混土	
328	土坑	6D-5d	50	(35)	29	5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～粘土 (粗砂わずかに含む 粘土ブロック・炭化物含む)	2 段堀

第7節 第3-2a層下面の遺構

第3-2a層下面では弥生時代中期後半の遺構を検出した。遺構の分布は第3-1-3a層下面とは異なり南側で希薄であったが、第3-2a層の中心的な遺構の一つである420溝は、第3-1-2a層下面で検出した5溝の直下にある。弥生時代後期後半から終末期にかけての遺構が多く検出されている第3-1-3a層下面の遺構の中で、5溝は弥生時代後期前葉の土器を伴う古い段階の遺構である。したがって、第3-2a層下面段階の遺構のあり方は、弥生時代後期前葉までは連続的なものとして理解できるかもしれない。また、擬似畦畔が釣山の山裾に沿う形で広範囲に検出された。

一方、調査区の北側では、760溝や杭列を伴う952溝などの大型の溝を、第3-1-3a層下面で検出した大型溝群とほぼ同位置で検出する一方、竪穴住居の痕跡や、小規模な溝や土坑、柱穴と考えられるピットなど居住域の存在をうかがわせる遺構群を検出した。

第3-1-3a層下面とは、大型の溝のあり方に共通する要素も認められるが、居住域が展開する範囲は、両遺構検出面で位置が大きく異なっていることが明らかになった。おそらく、弥生時代後期前葉から中葉にかけて、集落のあり方に大きな変化が生じているものと推察する〔第IV-7-1・2図〕。

第1項 溝

調査区南側で420溝、北側で760溝、952溝といった大型の溝を検出した。また調査区北側では、幅が狭い溝を数条検出した。

(1) 420溝〔第IV-7-3～5図 第2分冊図版141-2～144〕

調査区の南側で、概ねY=-12,335ラインにそって北に延びる溝である。弥生時代中期後葉前半の土器を多く伴う。

南端は第3-1-2a層下面で検出した4落ち込みによって失われている。溝の幅には広狭な部分があり、最大で6m、狭いところで2.8mである。ただし、広くなった場所は溝の東側が浅く2段掘りされていることにより、実際に溝として機能していたのは幅2～3mである。また、深さは検出面から1.3mほどある。

第3-1-3a層下面で検出した5溝のほぼ下部にあり、北に60mほど伸びる。X=-57,490ライン付近から南は、しばらく第3-1-2a層下面の2溝によって掘削されており、失われている。ただし、この付近から少し西向きに方向を変えており、5溝と同様に、調査区外に向かうことが予想される。

埋土には、上層から下層に至るまで炭化物が多く含まれていた。土器〔第V-15-1～6図〕や石器〔第VI-4図〕も出土している。特に多く土器などが出土したのが、6D-3d・4d区である。中でも、7層や10層に多く包含されていた〔第IV-7-4図〕。7層の堆積した掘方は下位の堆積を切るようみえるが、7層と10層から出土した土器の型式には大きな差異が認められなかった。

溝は最初に東岸側からの法面の崩落と共に埋まっていき〔第IV-7-4図13～15層〕、その中で11層ではラミナがみられ、水の流れたと考えられる。その後溝の掘り直しがあり、10層が堆積する。この層では、炭化物や植物遺体が多く認められ、それらに混じって土器等が出土している。おそらくこの段階では細砂が存在するものの流れの少ない状態で堆積が進んでいると思われる。この後、さらに掘り直され、ラミナが認められる9層が堆積している。さらに8層、7層と堆積していくが、

この両層の違いは土器や炭化物の有無であり、基本的には同じ体積である。また、この段階での流芯は西側へ寄っており、後の5溝とほぼ同じである。この後、第3-2a層が420溝を覆うように形成され、さらに5溝が再掘削される。なお、7層で土器が数多く出土しており、炭化物も多く含まれているが、粘土ブロックや礫などは含まれていない。多くの土器は一括廃棄と思われるが、土と一緒に溝を埋め戻すようなことではなかったと考えられる。

また、12層から肉眼で種実と思われる小さな炭化物を多く検出している。種実同定の結果、草本のイヌビエ属、ナデシコ科が多量に検出され、さらにイラクサ科、イグサ科、およびイネ科、カヤツリグサ科などの草本類が生育する人里ないしその周辺環境であったことが推定されている（第VIII章第4節）。また、上層の9層では、二次林性のアカメガシワやニワトコなどが抽出されている。

（2）調査区の北側で検出した溝および杭列〔第IV-7-6 図〕

第3-2a層下面では、X=-57,440ライン以北で大小の溝を多数検出した。760溝、942溝、杭列を伴う952溝などは大型の溝である。一方、665・691・880・895・905・910溝は、幅1m、深さ0.4m未満の小規模なもので、調査区の中央から西側に認められた。

また、調査区の西端で、X=-57,410～415ライン間、南北約5.5mの範囲に8本の杭が一行に打ち込まれているのを確認した。当初は、第3-1-3a層下面遺構の776溝に伴うものと考えていたが、杭の1本を試料として放射性炭素年代測定を行ったところ、弥生時代中期段階まで遡る可能性が高まったので、第3-2a層下面の遺構とした。（第VIII章第1節参照）。

760溝〔第IV-7-7～9図 第2分冊図版145・146〕

調査区西端のX=-57,440ラインより出現し、そこから北東方向にのびて、X=-57,395ラインあたりで調査区東端にぶつかり、そこから北上し調査区北東隅までのびる。平面では、X=-57,395ラインあたりまで検出しているが、それ以北からは2溝や弥生時代後期の大型溝群によって掘削されたこともあり、検出できていない。土層断面では、X=-57,360ラインと調査区北東隅の壁面で確認できている。

検出した規模は、幅3.5～7m、深さ1～1.2mである。埋土最下層やその上層あたりでは、ラミナのある砂層が確認でき、水の流れがあったと思われる。最下層では人による踏み込みの痕跡も確認できているので、水量はそれほど多くはないと考えられる。土層断面A-A'では、砂が多く単位も細かい13～20層と、シルトや粘土が中心となり単位も大きい上層の8～12層とで大きく異なる。土層断面B-B'、C-C'では他の溝によって掘削されているため、はっきりとわからないが、最下層やその上層では、ラミナがあり、砂が多く、単位の細かい層であることは共通している。埋土からは石器や木材が出土している。検出面や規模、土層断面などから420溝とつながっていると考えられる。

665溝〔第V-7-10図 第2分冊図版147-1〕

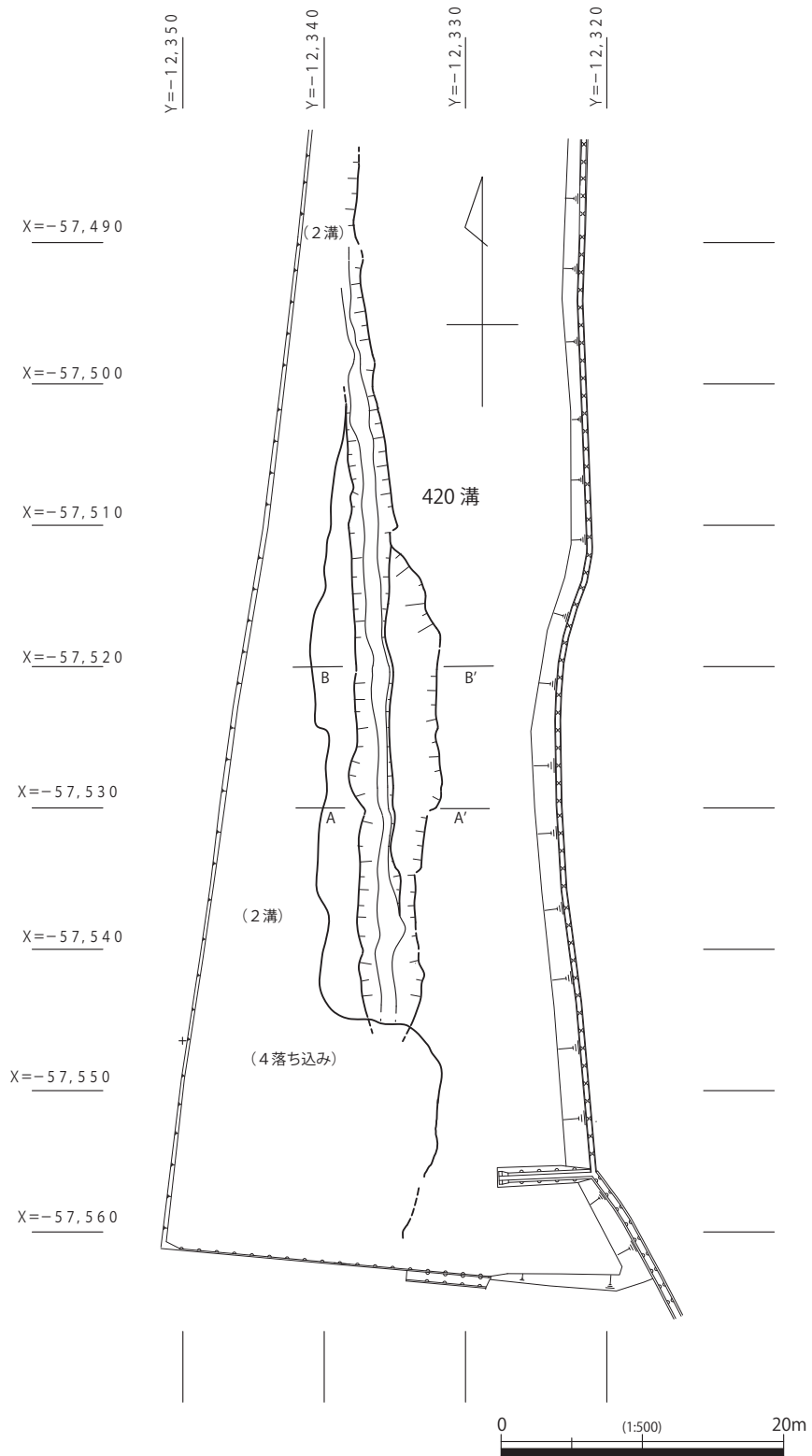
調査区北、X=-57,370ライン、Y=12,295ライン交点あたりから、南西方向にのびる溝である。土層観察用のトレンチや排水用の溝などで、掘削されている部分が多いが、埋土が共通することから、長さ19m、幅0.5～0.7m、深さ0.15mの溝と考えられる。近接する691溝との連続性、新旧関係については不明である。



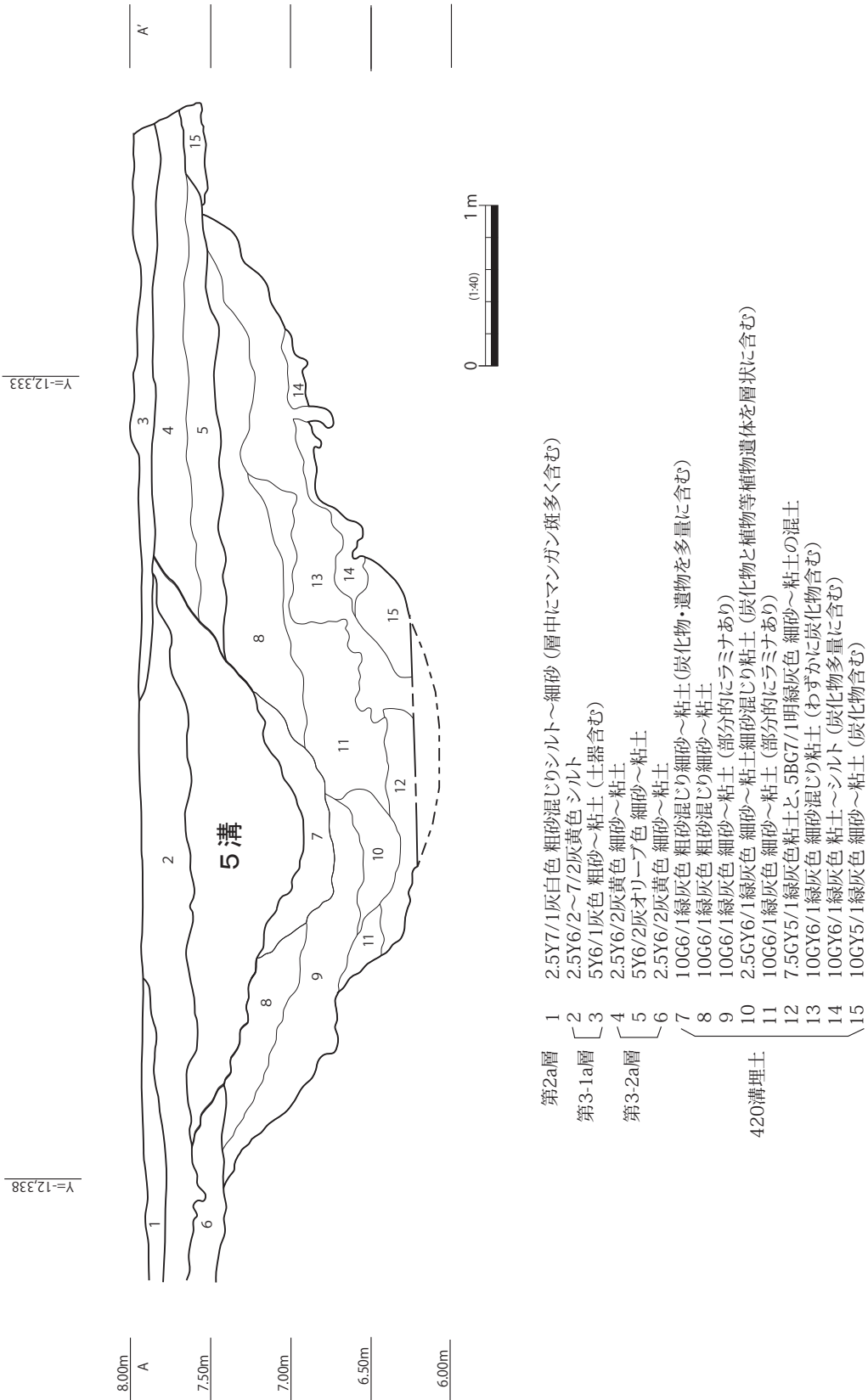
第IV-7-1図 第3-2a層下面全体



第IV-7-2図 第3-2a層下面北側全体



第IV-7-3図 420溝平面



第IV-7-4図 420溝土層断面



第IV-7-5図 420溝断面

691 溝 [第IV-7-10 図]

調査区北端、Y=-12,300 ライン付近から南へのび、X=-57,360 ラインあたりから、東方向へ湾曲して南東方向へ続く溝である。現存で長さ 18.6 m、幅 0.4 ~ 0.7 m、深さ 0.18 ~ 0.35 m。幅、深さで差が大きいのは、溝の南側の検出が第 3-3a 層掘削時であり、一部上部が掘削されているためである。895 溝埋没後に掘削されている。665 溝との連続性、新旧関係については不明である。

880 溝 [第IV-7-11 図 第 2 分冊図版 147-2]

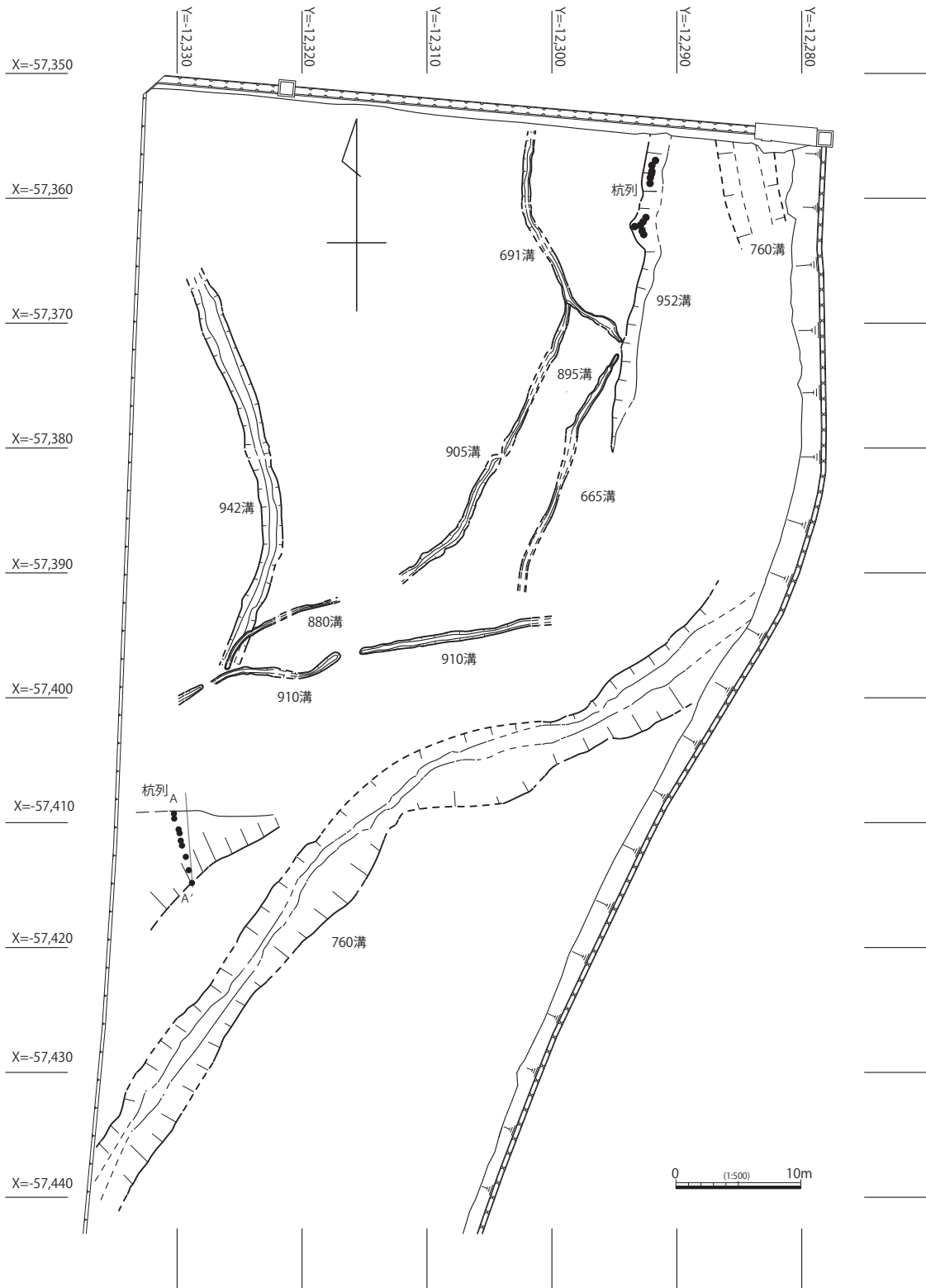
調査区北、4 D-10b ~ 4 D-10c に位置する。北東-南西方向の溝であるが、溝西側では、南方向へ湾曲している。途中、土層観察用のトレンチで掘削されているが、現存で長さ 11 m、幅 0.35 ~ 0.4 m、深さ 0.1 m。942 溝が埋まった後に掘削されている。

この溝の北東に 905 溝があり、繋がる可能性があるが、埋土は異なっている。また、南の 910 溝と切り合い関係はない。

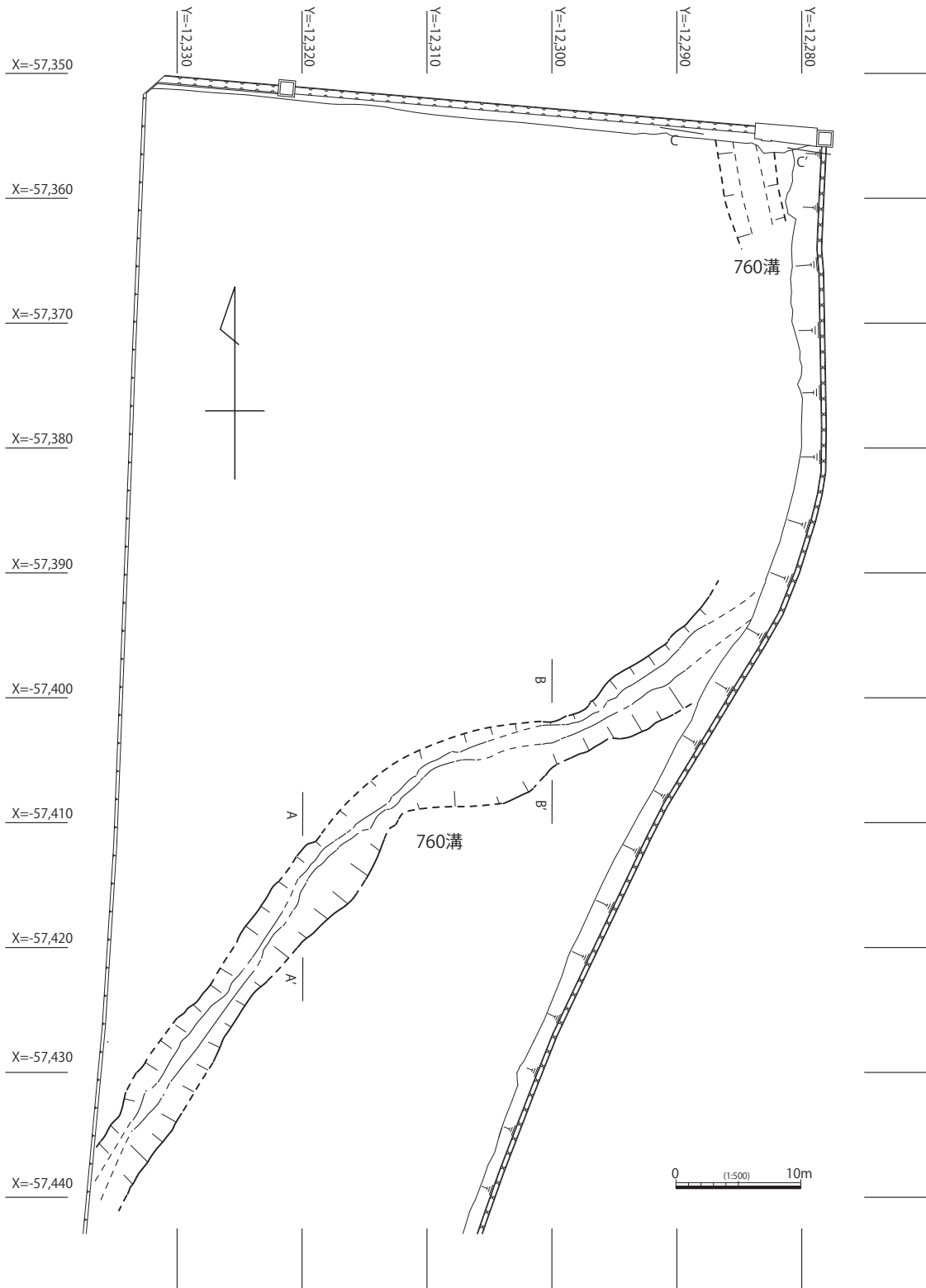
895・905 溝 [第IV-7-10 図 第 2 分冊図版 148-1]

先述した 691 溝の南部分、X=-57,370 ラインと Y=-12,300 ラインの交点付近で切り合っている溝で、南西方向に直線的にのびている。また、さらに南西側に当初別遺構と認識していた 905 溝があるが、埋土が共通することから、同じ溝であると考えられる。905 溝は、Y=-12,310 ラインあたりから、やや湾曲して西方向へ変化しているようであり、さらにその西側の 880 溝とも繋がっている可能性がある。

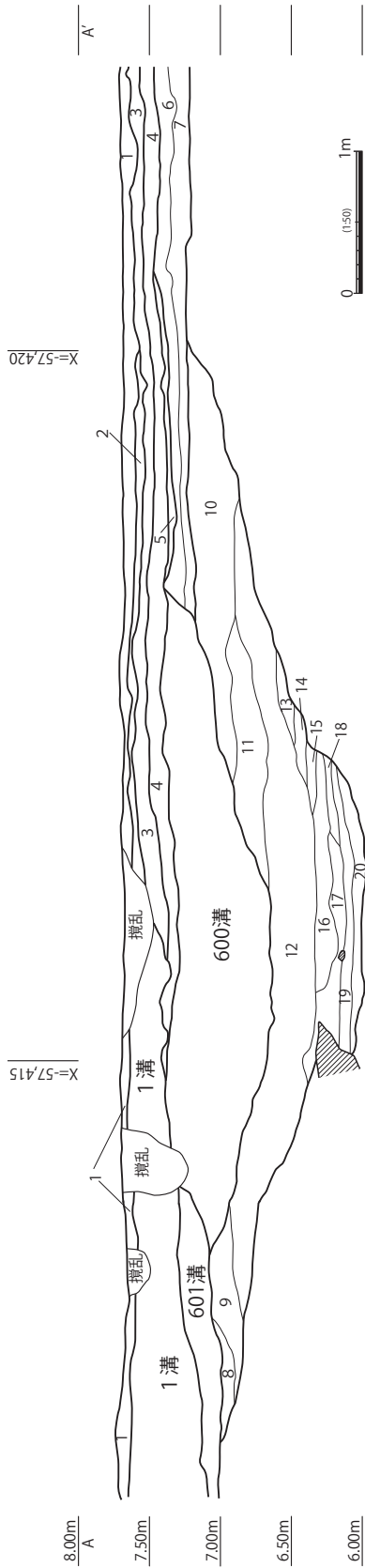
両遺構とも、土層観察用のトレンチや排水用の溝などで、掘削されている部分が多いが、両遺構合わせて、現存で長さ 26 m、幅 0.5 ~ 0.85 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m。691 溝の方が 895 溝を掘削している状況であるが、895 溝の北側は、北東方向から北へやや湾曲している状況であり、切りあっている箇所より北は 691 溝と同じ場所を通っていた可能性がある。埋土から、混入と考えられる弥生時代後期の土器片が出土している。



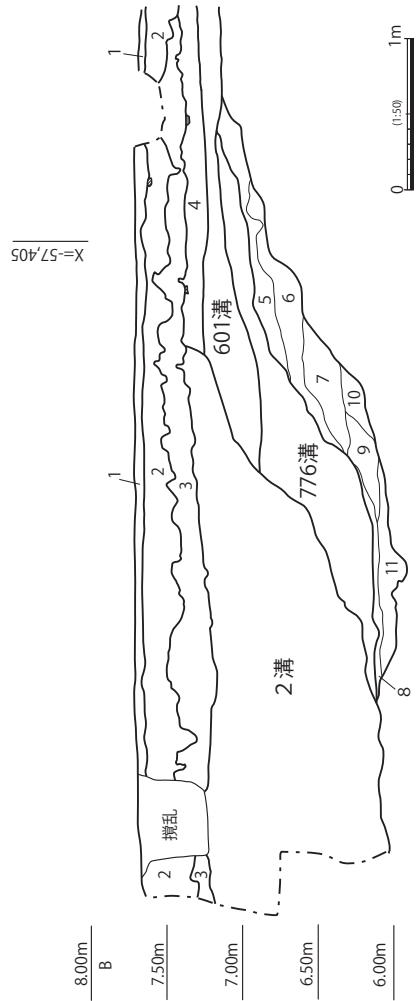
第IV-7-6図 5区北側溝群平面



第IV-7-7図 760溝平面

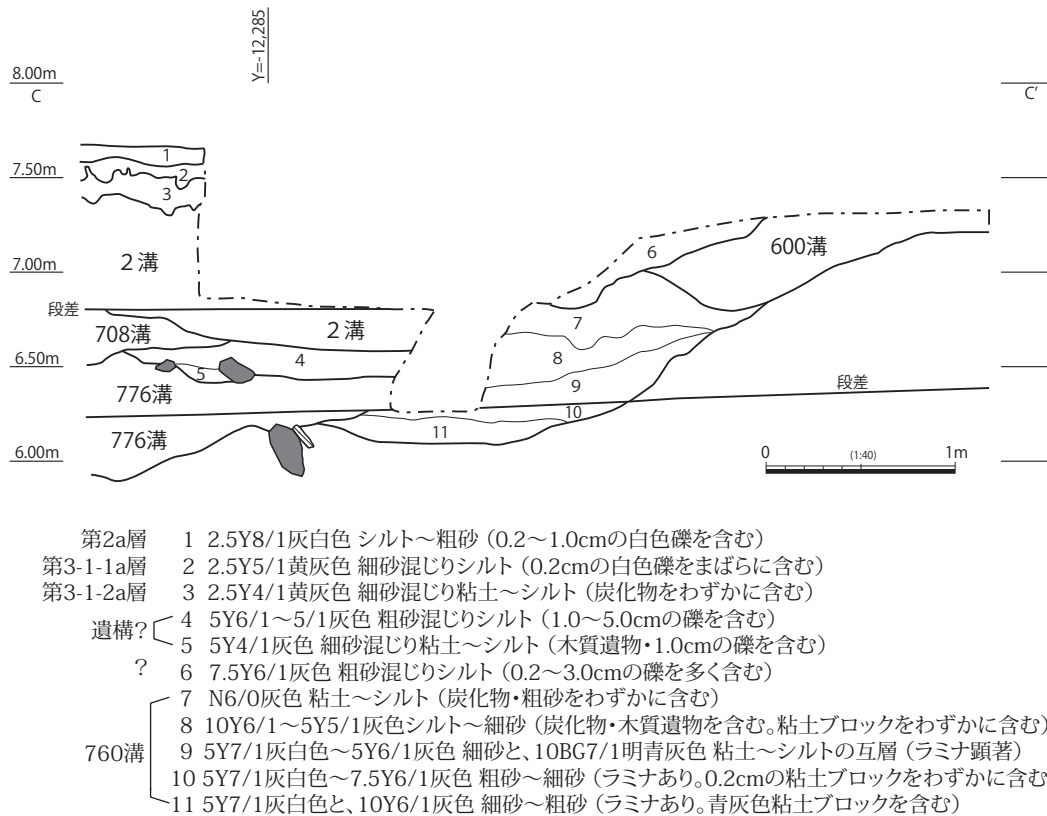


- 第1a層 1 5Y7/1灰白色 粗砂混じりシルト
 第2a層 2 7.5Y6/1灰色 粗砂混じりシルト
 第3-1-1a層 3 5Y5/1灰色 シルト
 第3-1-2a層 4 2.5Y4/1黄灰色 シルト～粘土 (炭化物を含む)
 第3-1-3a層 5 10Y4/1灰色 シルト～粘土
 第3-2a層 6 5Y4/1灰色 シルト～粘土
 7 N5/0灰色 シルト～粘土 (層下部に1.0cm以下の炭化物を含む)
 8 5Y5/1灰色 シルト～細砂(粗砂わずかに含む)
 9 10BG6/1青灰色 シルト～粘土(0.1cm～1.0cmの炭化物をまれに含む。灰色・灰白色粘土・ブロックを含む)
 10 7.5Y6/1灰色 粘土～シルト (炭化物をまれに含む。灰色・灰白色粘土・ブロックを含む)
- 760溝
- 11 10BG6/1青灰色～10BG7/1明青灰色 細砂混じりシルト～粘土 (灰色土ブロックをまれに含む)
 12 N6/0～10Y6/1灰色 粘土～シルト (わずかに細砂を含む。0.2～1.5cmの炭化物まばらに含む)
 13 N6/0灰色 シルト～細砂 (青灰色粘土ブロックを含む)
 14 N6/0灰色～10BG6/1青灰色 シルト (青灰色粘土ブロックを含む)
 15 10Y6/1灰色 粘土～シルト (わずかに細砂を含む。0.2cm程の炭化物をごくまれに含む)
 16 7.5Y6/1灰色～10BG6/1青灰色 粘土～シルト (0.2～1.0cmの炭化物・青灰色粘土ブロックをまばらに含む)
 17 5Y6/1灰色～2.5Y6/1黄灰色 シルト～粘土 (木質遺物・青灰色粘土ブロックを含む)
 18 10BG6/1青灰色 シルト～粘土 (細砂ブロックを含む)
 19 N7/0灰白色～5Y8/1灰白色 細砂 (ラミナあり)
 20 10Y6/1灰色 細砂～シルト (木質遺物・青灰色粘土ブロックを含む)



- 第2a層 1 7.5Y7/1灰白色 シルト～粘土 (0.3cmの白色礫・炭化物多く含む)
 第3-1-1a層 2 2.5Y6/1黄灰色～5Y6/1灰色 シルト～粘土 (0.3cmの白色礫・炭化物を含む)
 第3-1-2a層 3 5Y4/1灰色 シルト～粘土 (0.3cmの白色礫・炭化物を少量含む)
 第3-1-3a層 4 N7/0灰白色 粘土～シルト (炭化物・粘土ブロックを含む)
 5 7.5Y6/1灰色 粘土～シルト (粗砂をわずかに含む)
 6 10Y6/1灰色 細砂混じりシルト～粘土 (粗砂をわずかに含む)
 7 5Y5/1灰色 シルト～細砂 (炭化物をまれに、青灰色粘土ブロックをごくまれに含む)
 8 5Y3/1オリーブ黒色 シルト (灰色粘土ブロック・木質遺物を含む)
 9 5Y5/1灰色～10Y7/1灰白色 粘土～細砂 (ラミナあり。木質遺物・炭化物を含む)
 10 7.5Y5/1灰色～10Y6/1灰色 細砂～シルト (ラミナあり)
 11 5Y4/1灰色粘土～シルトと、5Y8/1灰白色 細砂～粗砂(ラミナあり。木質遺物含む。踏み込み跡あり)
- 760溝

第IV-7-8図 760溝断面



第IV-7-9図 760溝断面 (2)

910 溝 [第IV-7-11 図 第2分冊図版 147-2]

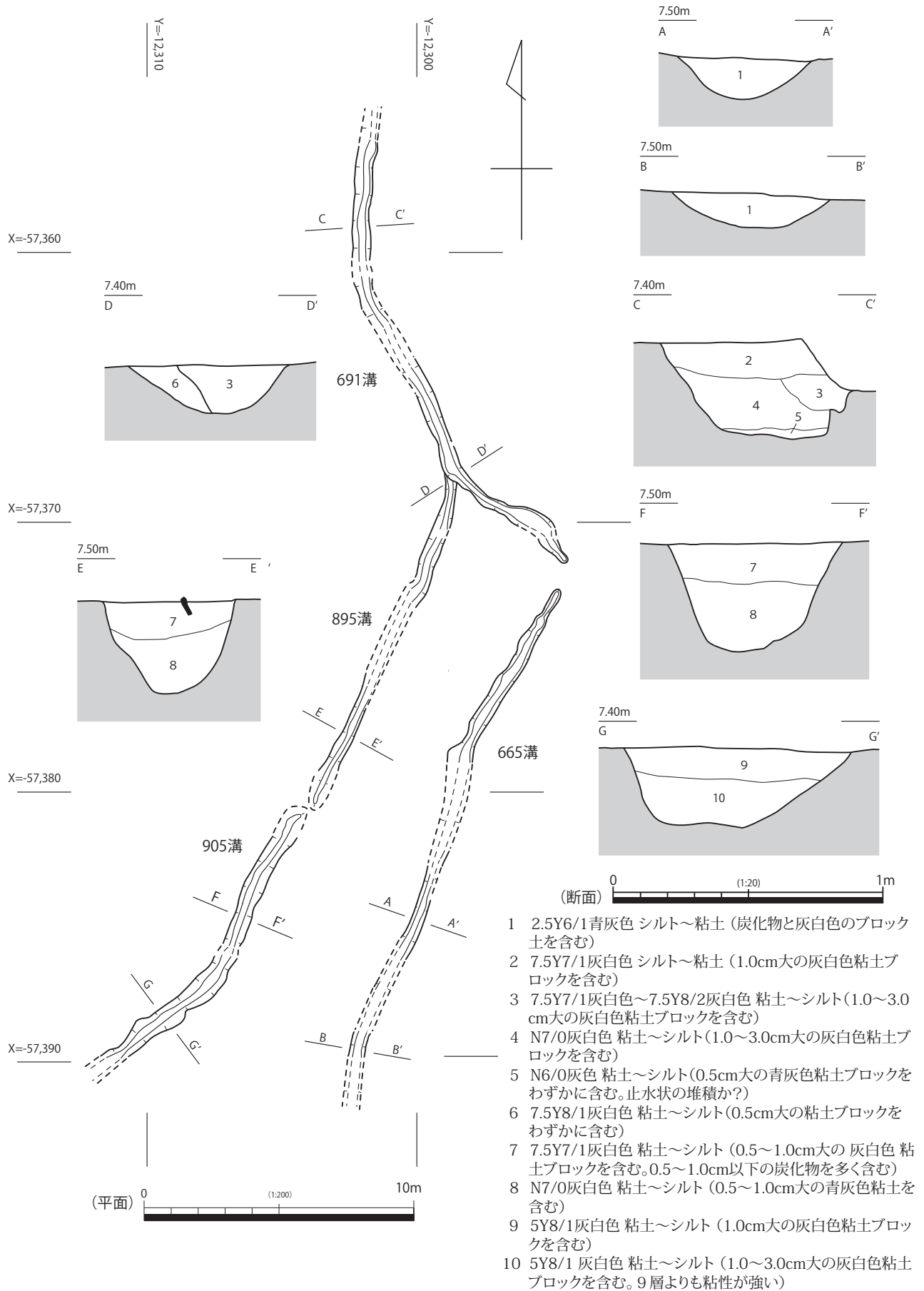
調査区西端、X=57,400 ラインあたりから東へのびる溝である。途中、途切れる部分があり、3つに分かれているが、同一の溝として考える。現存で長さは、東側 14 m、中央部分 10 m、西側 1.6 m であり、中央部分は湾曲している。幅 0.6 ～ 0.75 m、深さは 5 ～ 12cm で、その他の小規模な溝と比べて、幅広く浅い溝である。

942 溝 [第IV-7-12・13 図 第2分冊図版 148-2 ～ 150]

調査区西端、X=57,370 ～ 400 ライン間で南北方向にのびる溝。北側は、北西 - 南東方向で直線的であるが、X=57,385 ライン以南から南方向へ湾曲し、さらに南西方向へと変化している。長さ 31 m、幅 1.5 ～ 2 m、深さ 0.5 ～ 0.9 m で、幅、深さとも南側の方が小さい。埋土最上層の 1 層が南側ではないので、検出時に南側の方を大きく削り込んでいる可能性がある。

埋土では、最下層は粘土ブロックを含む粘土層であるが、第IV-7-12 図第 4 層が厚さ 5 cm ほどのラミナのある砂層であり、この段階で水の流れたことを示す。ただし、この砂層も北に行くほど薄くなり、土層断面 A-A' では認められない。それより上層はいずれも粘土ブロックや炭化物を含む層であり、後述する土器が集中して出土する箇所とあわせて、埋め戻して廃棄された可能性がある。

溝の北側、X=57,370 ～ 374 ライン間の埋土 1 層から、弥生時代中期中葉の壺が出土した〔第 V-15-7・8 図〕。大型の壺〔第 V-15-8 図〕の破片がかなりの大きさで残っており、完形のままその場に置かれていたと考えられる。1 ～ 3 cm 大の炭化物も含んでいるが、その場で火を使ったような痕



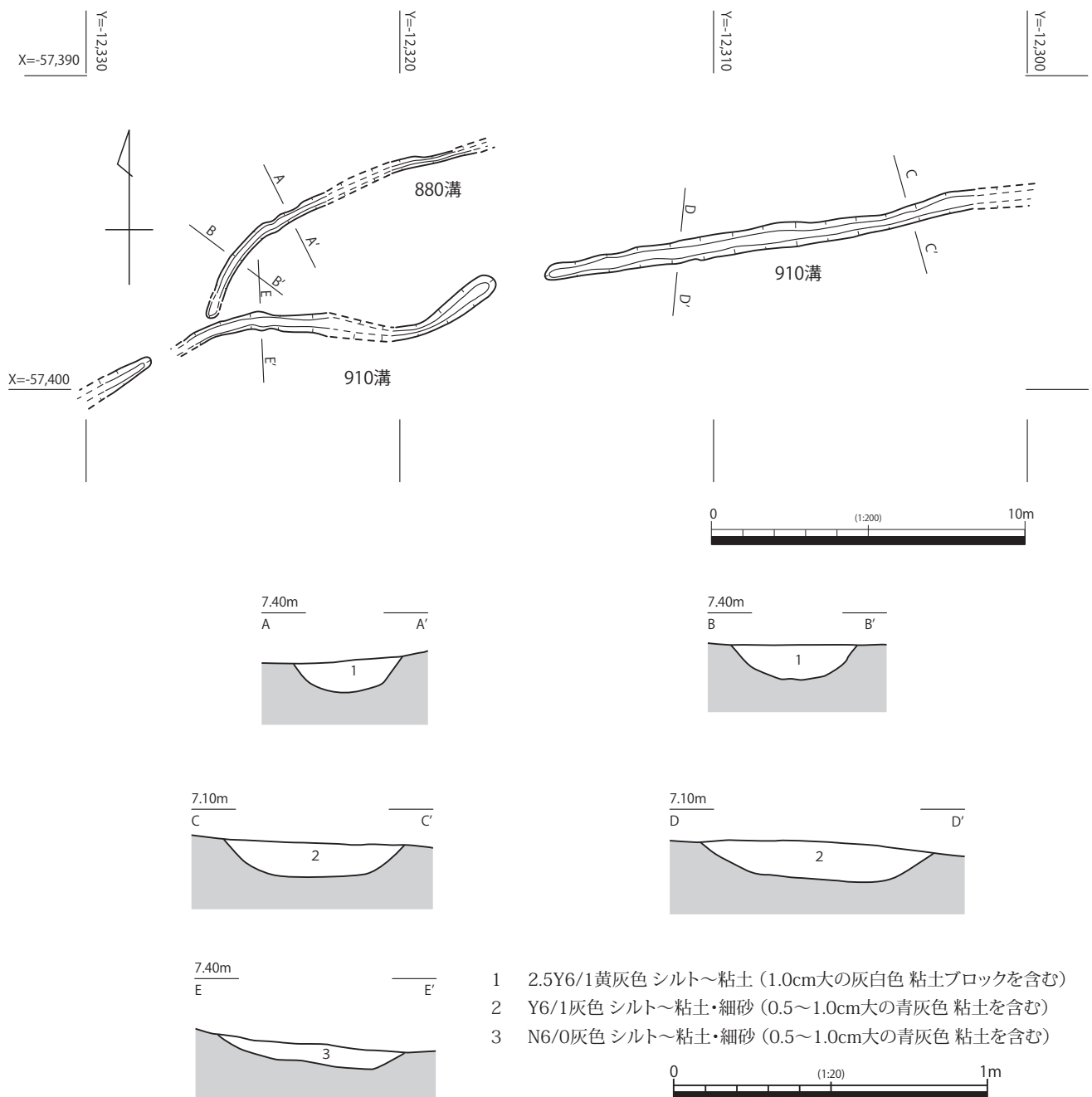
第IV-7-10図 665・691・895・905溝平・断面

跡はない。なお、この溝の真上にある700盛土に含まれていた弥生時代中期の土器は、この溝の土器のものもあると考えられる。

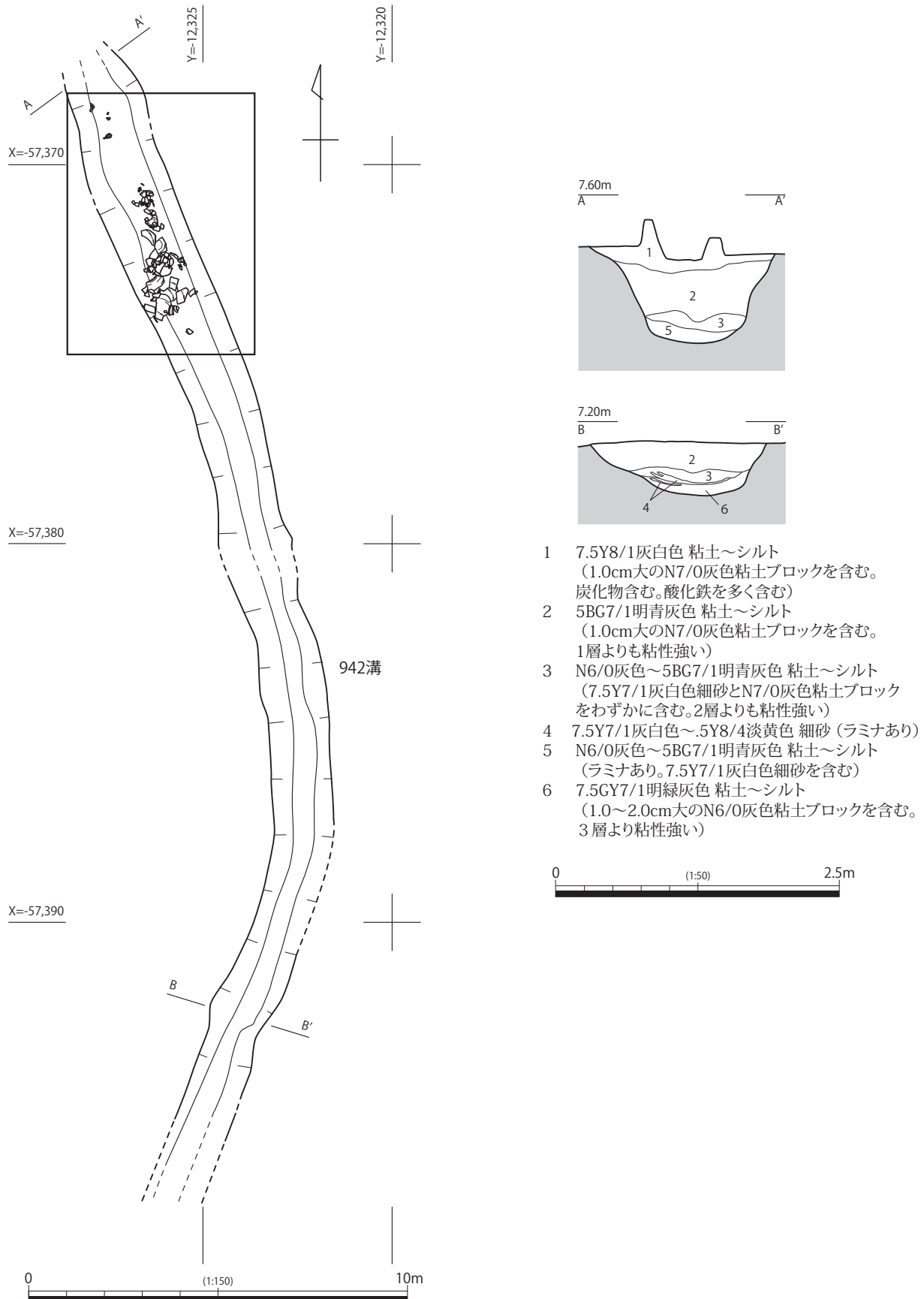
952 溝〔第IV-7-14・15 図 第2分冊図版151・152-1〕

調査区北端、Y=-12,290 ラインより南へ約25mのびる溝。西側は2溝や弥生時代後期の大型溝によって掘削されており検出できていない。現存で西側肩部周辺のみが残存しており、幅1.5～2m、深さ0.3mの規模である。

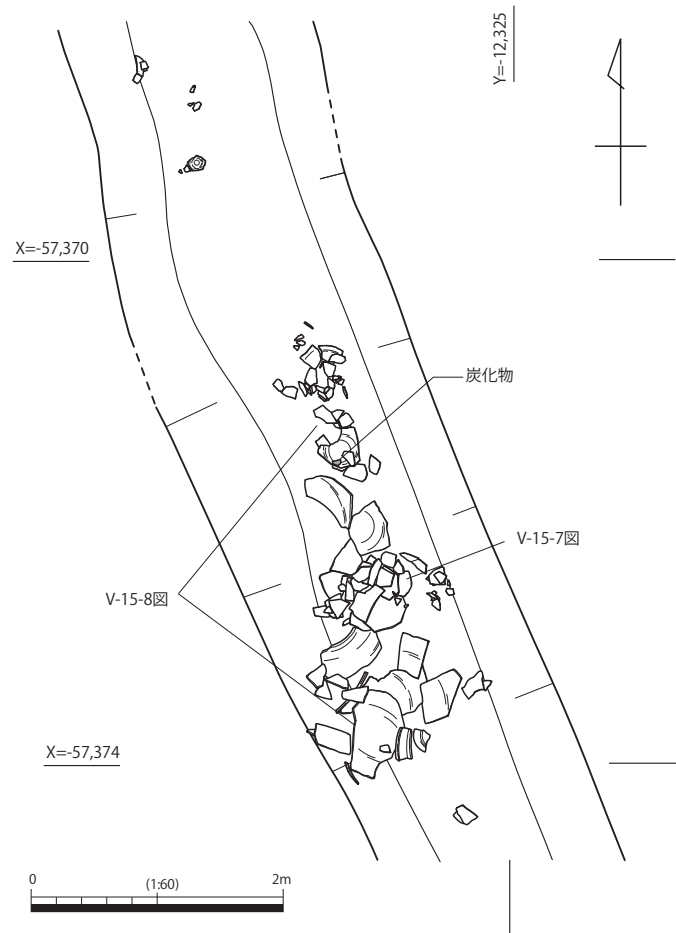
溝の法面で南北方向にのびる杭列がある。杭12本で構成されており、ほとんどが立ったままの状況でみつまっている。杭は長さ0.3～0.8mのスギの割材を利用したもので、溝底面より0.7mも深



第IV-7-11図 880・910溝平・断面



第IV-7-12図 942溝平・断面



第IV-7-13図 942溝遺物出土状況

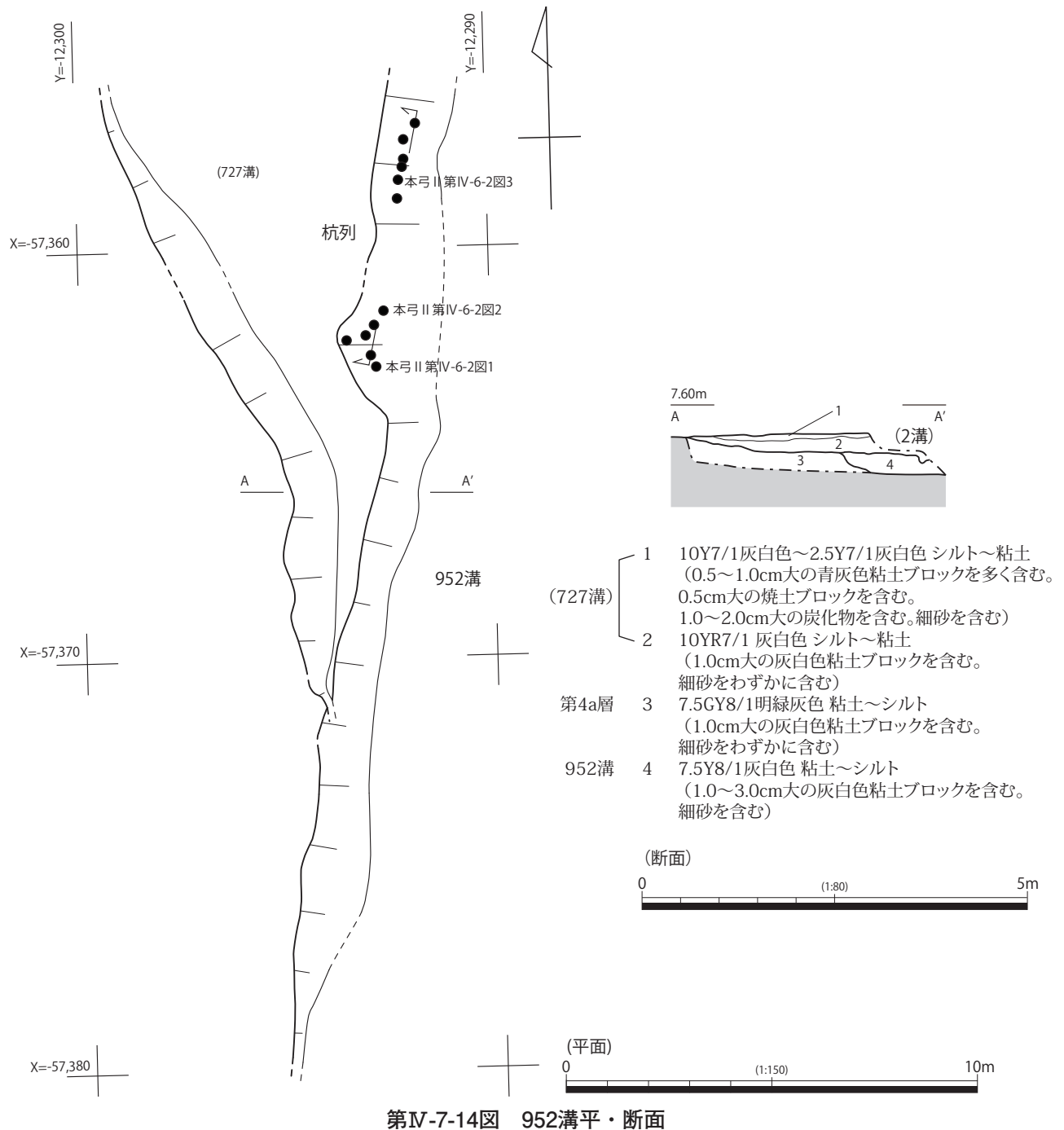
く打ち込まれたものもある。北側の6本の杭と南側6本でまとまりがあるようで、このまとまりの間は2.7 mと大きく離れている。その他の杭間は、0.2～0.8 mである。この杭列は溝の方向と平行であり、護岸の目的などが考えられる。なお、埋土から弥生時代中期中葉の甕〔第 V-15-9 図〕が出土している。

杭列・溝状遺構〔第IV-7-16 図 第2分冊図版 152-2・153-1〕

調査区西端のほぼ Y=-12,330 ライン上、X=-57,410～-57,415 ライン間、南北約 5.5 m の範囲で9本の杭が一行に打ち込まれている。長さ 0.1～0.9 m の割材を用いた杭で、溝底面より 0.5 m も深く打ち込んでいるものもある。また、南側の杭2本は710溝の埋土に打ち込まれている。杭間は短いもので0.3～0.4 m、長いもので0.6～1.2 mである。この杭列に伴うように、南側のみであるが、溝状遺構を検出した。当初は弥生時代後期の776溝と認識していたが、杭のうち1本(PLD-17675)に炭素年代測定を行い、弥生時代中期段階の年代を得た(第VIII章第1節)ことや、法面の傾斜が Y=-12,320 ライン以東と大きく異なることから、この杭列と溝状遺構は776溝ではなく、第3-2a層下面の遺構とした。

また、Y=-12,320 ライン付近の710溝の埋土最上層を掘削した際に、弥生時代中期の土器がいくつか出土している〔第 V-16-1 図 第2分冊図版 155-2〕ことから、この時期の溝状遺構があった可能性があると考えられる。そのように考えると、この杭列と溝状遺構についてもそうした遺構であった可能性が高い。

土層断面をみると、溝底と考えられる部分がある(9層)。そこから判断すれば、幅6 m以上、深さ0.7

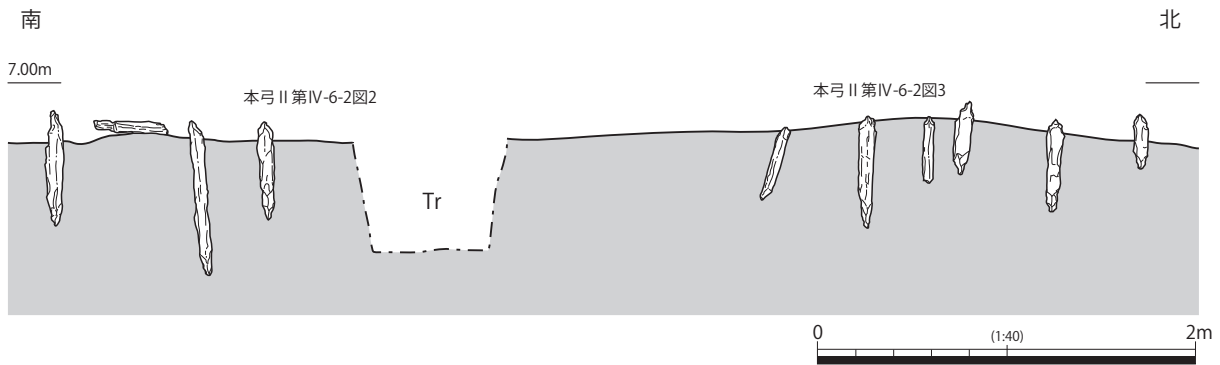


m以上のゆるやかな立ち上がりをもつ溝であったと考えられる。

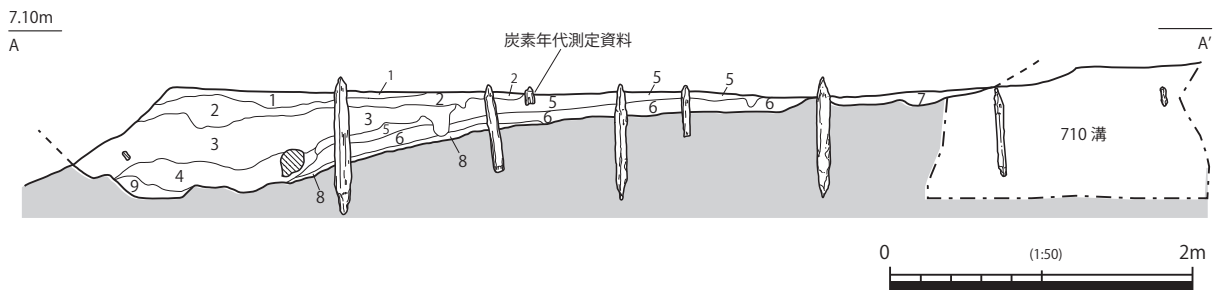
(3) その他の溝

163 溝 (第IV-7-17 図)

X=-57,470～515 ライン間にかけての南北 40m をこえる直線的な長い溝である。途中、X=-57,500 ラインより北 3 mがあいているが、浅い溝のため、後世の掘削等でなくなったものとする。溝の幅 0.2 m、深さ 5 cm ほどで、埋土は北側で 5Y7/1 灰白色の粘土～シルト層。南側で N7/1 灰色の粘土～シルト層である。いずれも炭を含んでいる。



第IV-7-15図 952溝杭列立面図



- | | | | |
|------|---|---|---|
| 溝状遺構 | } | 1 | 5Y6/1灰色 細砂まじりシルト～粘土 (粗砂わずかに含む) |
| | | 2 | 7.5Y5/1灰色～7.5Y6/1灰色シルト～粘土 (粗砂、炭化物をわずかに含む) |
| | | 3 | 5Y5/1灰色～2.5Y5/1黄灰色シルト～粘土 (粗砂ブロック・炭化物・木質遺物を含む) |
| | | 4 | 10Y8/1灰白色 細砂と5Y5/1灰色シルト～細砂 (ラミナあり。粗砂ブロック・炭化物・木質遺物を含む) |
| | | 5 | 5Y6/1灰色～5Y5/1灰色シルト～粘土 (灰白色粘土ブロックを極まれに含む) |
| | | 6 | 5Y7/1灰白色～2.5Y7/1灰白色粘土～シルト (炭化物極まれに含む) |
| | | 7 | 5Y5/1灰色シルト～細砂 (灰白色粘土ブロックを含む) |
| | | 8 | 7.5Y7/1灰白色シルト |
| | | 9 | 7.5Y5/1灰色 細砂～シルト (青灰色粘土ブロックを極まれに含む) |

第IV-7-16図 杭列・溝状遺構土層断面

418 溝 [第IV-7-17 図 第2分冊図版 154-1]

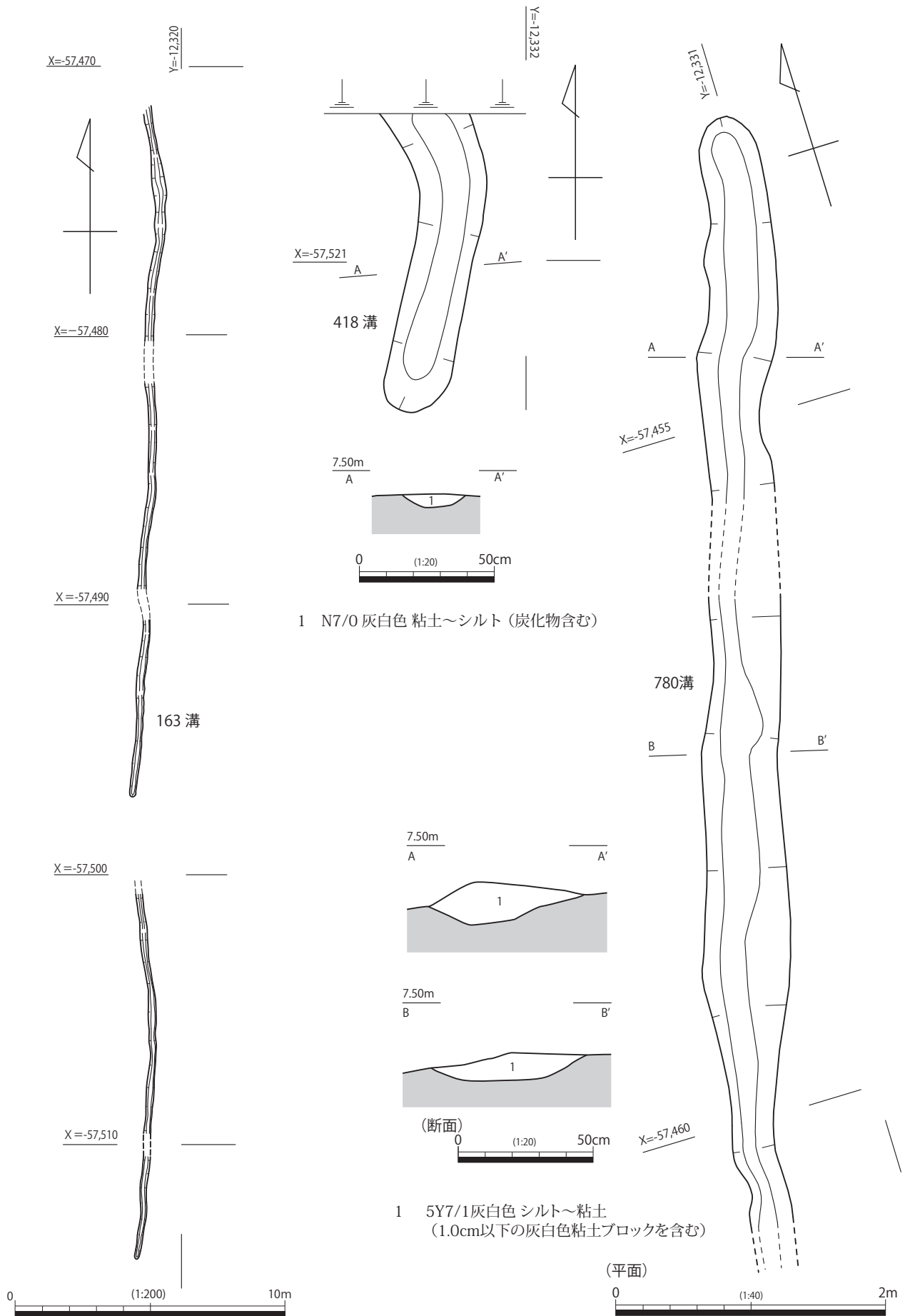
調査区南、X = -57,520 ライン土層観察用トレンチの南端より検出。420 溝の東端と重なる。現存で長さ 1.1 m、幅 0.2 m、深さ 4 cm の南北にのびる溝である。さらに北側にある 163 溝とは、規模や埋土が似ているので、繋がっていた可能性がある。

780 溝 [第IV-7-17 図 第2分冊図版 154-2]

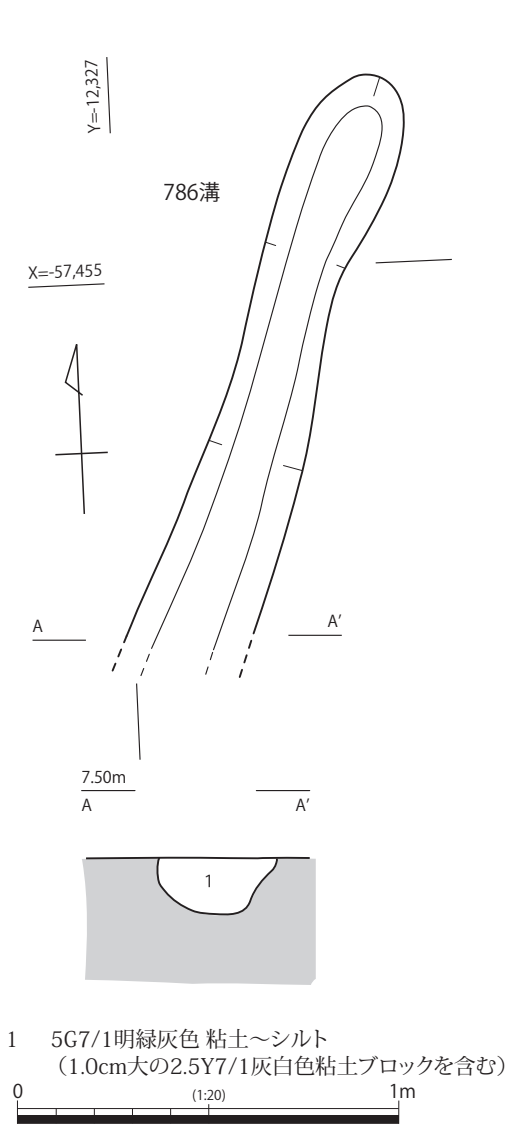
5D-6b 区に位置する南西 - 北東方向にのびる溝で南側は土層観察用トレンチで掘削されている。現存で長さ 10 m、幅 0.4 ～ 0.6 m、深さ 0.1 m をはかる。埋土は先述した 163 溝と同じであるが、規模はこちらの方が大きいため、繋がるかどうかは不明である。

786 溝 [第IV-7-18 図 第2分冊図版 154-3]

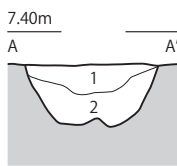
調査区中央の 5D-6c 区に位置し、南側が暗渠を利用した排水用トレンチで掘削されている。現存で長さ 1.6 m、幅 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.15 m の北東 - 南西方向にのびる溝である。規模から考えると、163 溝と似ているが、埋土が異なる。



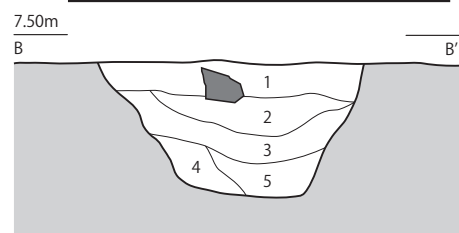
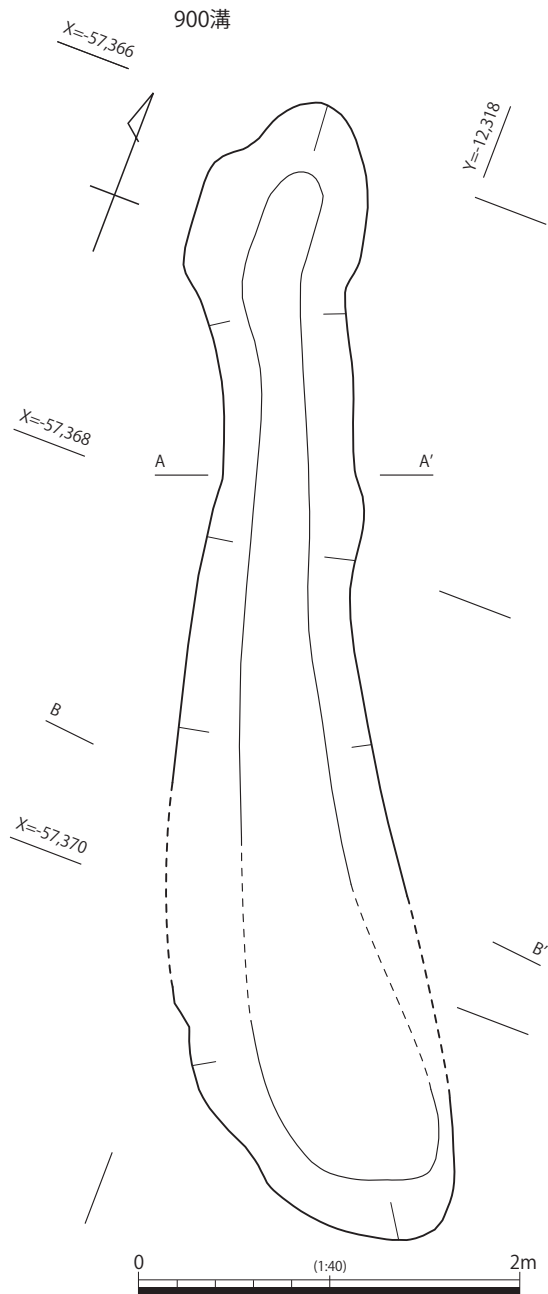
第IV-7-17図 163・418・780溝平・断面



- 1 5G7/1明緑灰色 粘土～シルト
(1.0cm大の2.5Y7/1灰白色粘土ブロックを含む)



- 1 7.5Y7/1～8/1 灰白色 粘土～シルト
(1.0～3.0cm大の炭化物を多く含む。
1.0～3.0cm大の焼土ブロックを含む。
1.0～2.0cm大の7.5Y8/2 灰白色粘土ブロックを含む。
Bセクションに対応)
- 2 5G7/1 明緑灰色 粘土～シルト
(1層よりシルトの量が多い。
0.5～1.0cm大の炭化物を含む。
0.5cm大の焼土ブロックを含む)



- 1 7.5Y7/1灰白色 シルト～粘土(1.0～2.0cm大の炭化物を多く含む。
1.0cm大の焼土ブロックを多く含む。)
- 2 7.5Y7/1灰白色～7.5Y8/1灰白色 粘土～シルト(1.0～3.0cm大の炭化物を多く含む。1.0～3.0cm大の焼土ブロックを含む。1.0～2.0cm大の7.5Y8/2灰白色粘土ブロックを含む)
- 3 5G7/1明緑灰色 粘土～シルト (2層よりシルトの量が多い。0.5～1.0cm大の炭化物を含む。0.5cm大の焼土ブロックを含む)
- 4 5B7/1明青灰色 粘土～シルト (0.5cm大の炭化物をわずかに含む)
- 5 N7/0灰白色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の炭化物を多く含む。
0.5～1.0cm大の5B7/1明青灰色粘土ブロックを含む)

第IV-7-18図 786・900溝平・断面

900 溝〔第IV-7-18 図 第2分冊図版 153-2〕

調査区北、4D-7b・8b 区に位置する。北西から南東方向にのびる溝で、長さ 6 m、幅 0.7 ~ 1.3 m、深さ 0.3 ~ 0.7 m をはかる。北側の方が、幅が狭く深さが浅くなる傾向があるが、これは第 3-2a 層掘削時に北側を深く掘削したためと考えられる。ただし、溝底面のレベルは南側が低い。埋土には砂層がみられず、炭化物や焼土ブロックを多く含んでいるのが特徴で、人頭大の礫もみつまっていることから、何らかの廃棄に伴う溝ではないかと思われる。

第2項 土坑など

170 土坑〔第IV-7-19 図 第2分冊図版 155-3〕

調査区南の X=-57,470 ラインより南へ 4 m ほどの位置にある大型の円形土坑。東側がやや広がるが、規模は径 2.3 m、深さ 5 cm ほどである。浅い土坑であるが、上面は耕作等で掘削されていると考えられる。埋土から混入と考えられる縄文土器片が出土している。

174 土坑〔第IV-7-19 図 第2分冊図版 156-1〕

X=-57,480 ラインの土層観察用トレンチ南端で検出している。調査区の東端にあり、釣山裾部に沿って検出された擬似畦畔を壊す形で掘りこまれている。半分ほどしか残っていないが、南西-北東に軸をもつ隅丸方形の土坑であろう。南西側の上端は攪乱で不整形になっている。現存で長軸 0.8 m、短軸 0.5 m、深さ 0.3 m であり、周囲の遺構と比較して深い。埋土からは炭化物や 1 ~ 2 cm 大の礫が出土している。

180 土坑〔第IV-7-20 図 第2分冊図版 156-2〕

調査区南の 6D-2d 区の 420 溝東岸に位置する。径 0.2 m の円形の土坑である。深さは 0.1 m で浅いが、土層断面をみると柱穴の可能性はある。

182 土坑〔第IV-7-20 図 第2分冊図版 156-3〕

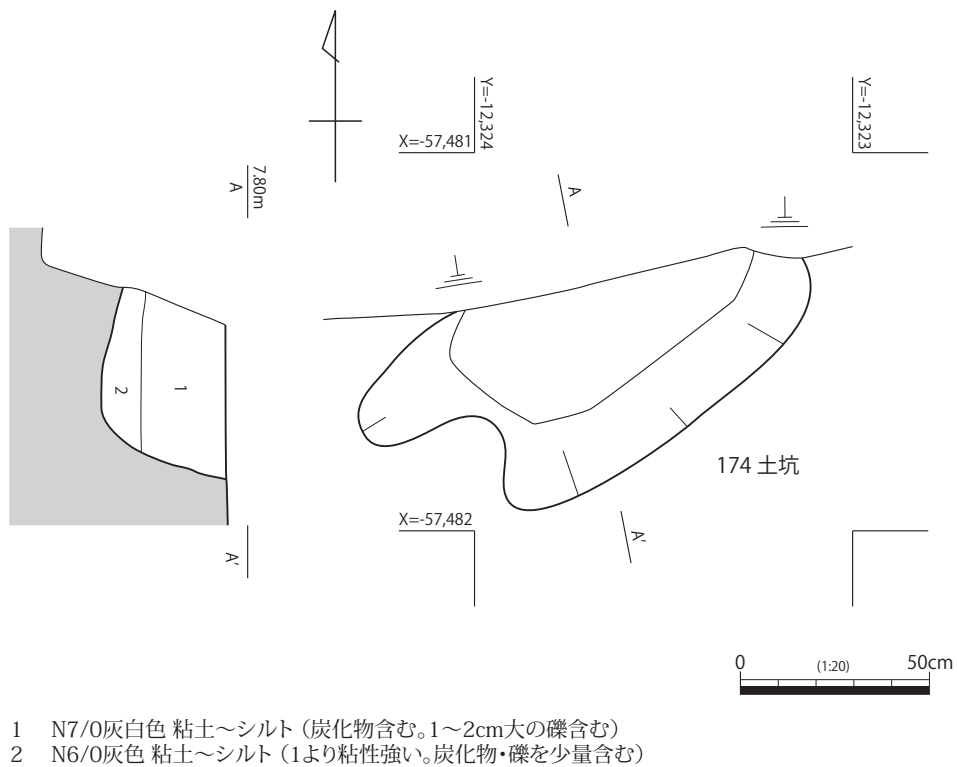
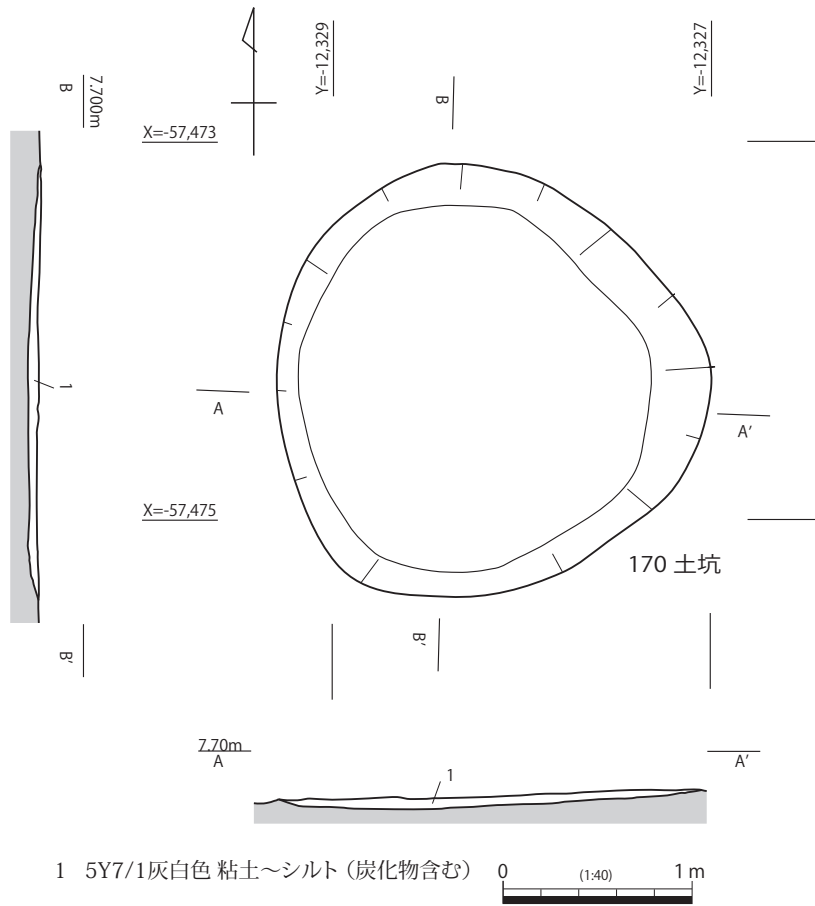
調査区南の 6D-2d 区の 420 溝東側法面に位置する。420 溝掘削後に検出した。長軸 0.3 m、短軸 0.25 m の南北にやや長い楕円形の土坑である。2 段堀になっており、南側に半円状の平坦面がある。1 段目の深さは 3 cm で、そこからさらに 7 cm 下がる。

184 土坑〔第IV-7-20 図 第2分冊図版 157-1〕

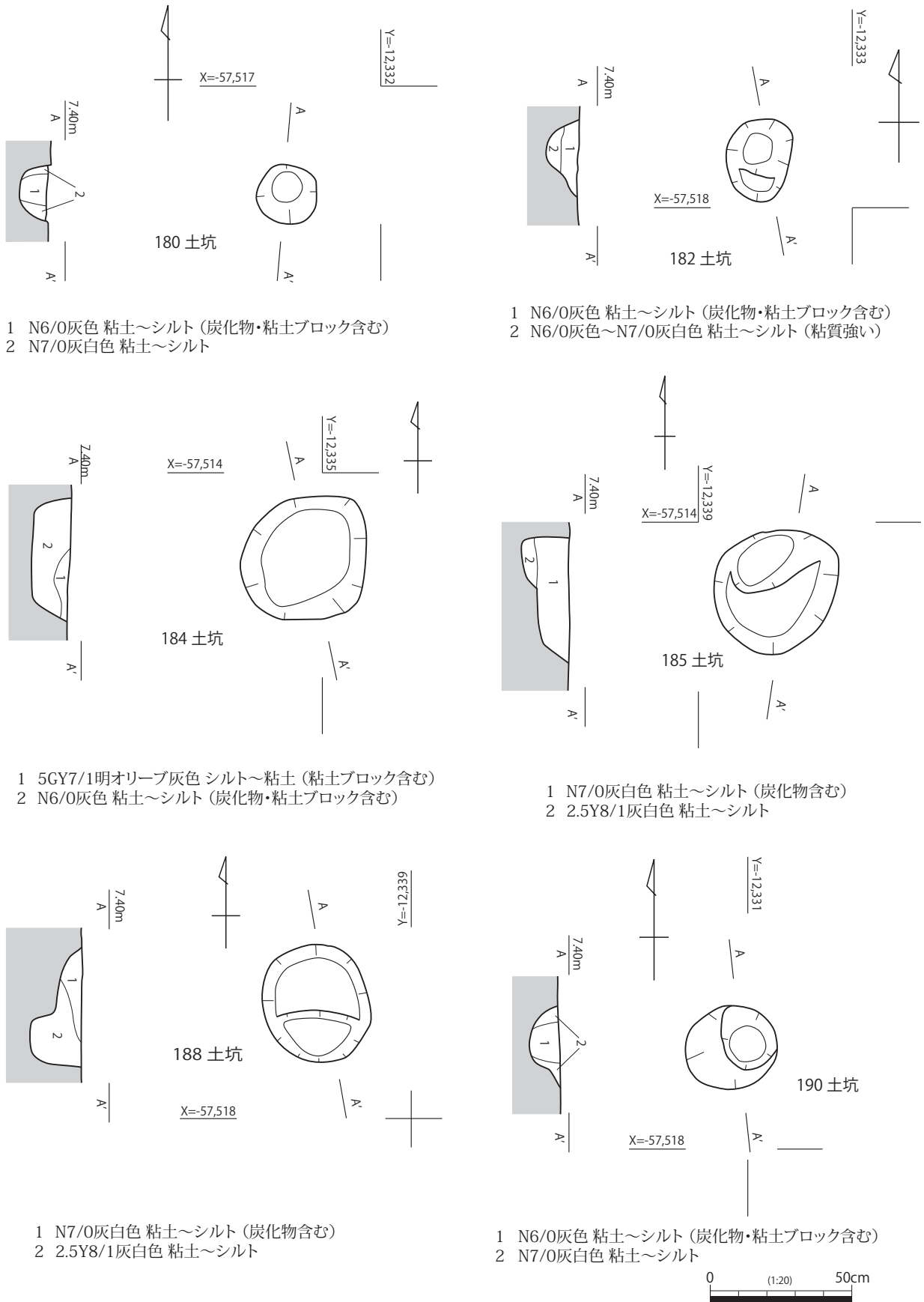
調査区南の 6D-2d 区の 420 溝東側法面に位置する。420 溝掘削後に検出した。182 土坑より北へ約 4 m 離れている。径 0.4 m、深さ 0.15 m の円形の土坑である。

185 土坑〔第IV-7-20 図 第2分冊図版 157-2〕

調査区南の 6D-2d 区の 420 溝西岸に位置する。径 0.45 m の円形の 2 段堀の土坑である。南側に半円状の平坦面があり、1 段目の深さは 0.1 m。土坑中央付近からさらに 6 cm 下がる。



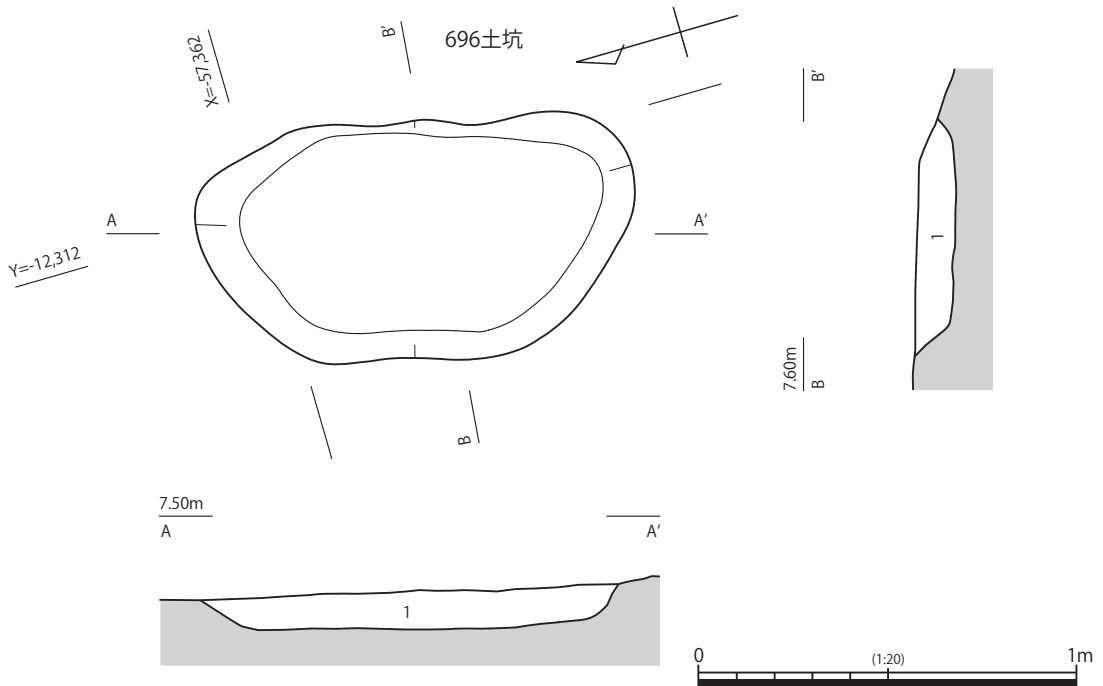
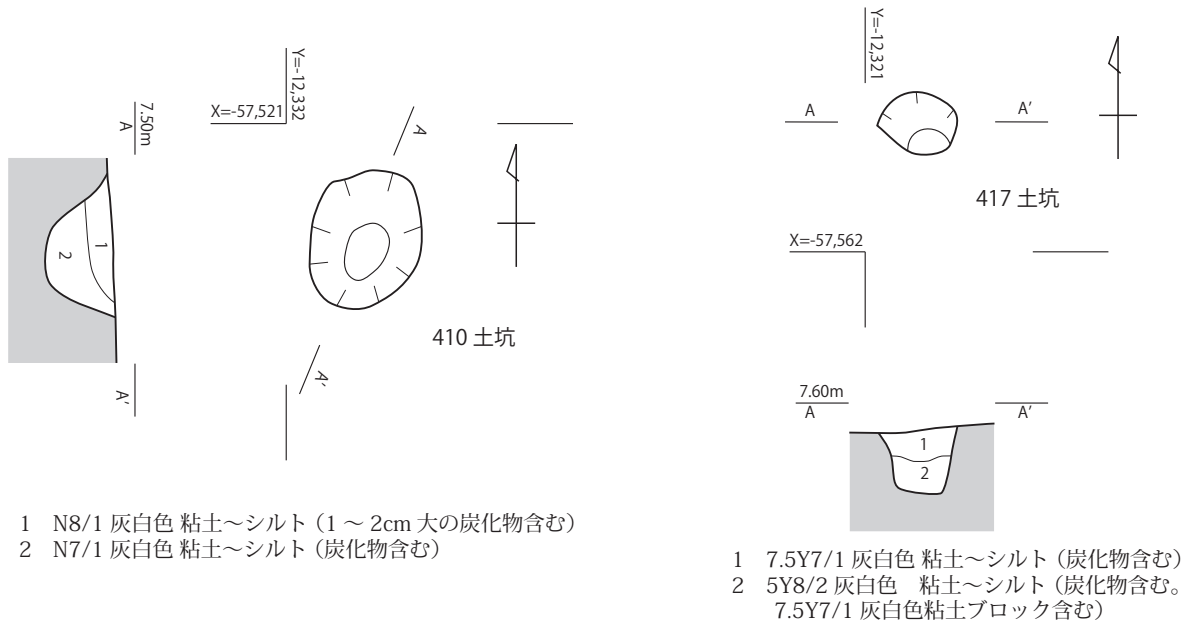
第IV-7-19図 170・174土坑平・断面



第IV-7-20図 180・182・184・185・188・190土坑平・断面

188 土坑 [第IV-7-20 図 第2分冊図版 157-3]

調査区南の6D-2d区の420溝西岸に位置する。185土坑より南へ約4m離れている。径0.35～0.4mの円形の2段堀の土坑であり、北側に半円状の平坦面がある。1段目の深さは8cmで、土坑中央付近からさらに8cm下がる。



第IV-7-21図 410・417・696土坑平・断面

190 土坑〔第IV-7-20 図 第2分冊図版 158-1〕

調査区南の6D-2d区の420溝東岸に位置する。180土坑より約1m東に離れている。径0.3mの円形の土坑である。深さは0.1mであるが、土坑中央付近で平坦面ではなく傾斜の変換がみられる。土層堆積から柱穴の可能性はある。

410 土坑〔第IV-7-21 図〕

調査区南のX=-57,520ラインの土層観察トレンチの南、420溝の西側に位置する。長軸0.37m、短軸0.3m、深さ0.18cmの南北にやや長い円形の土坑である。

417 土坑〔第IV-7-21 図 第2分冊図版 158-2〕

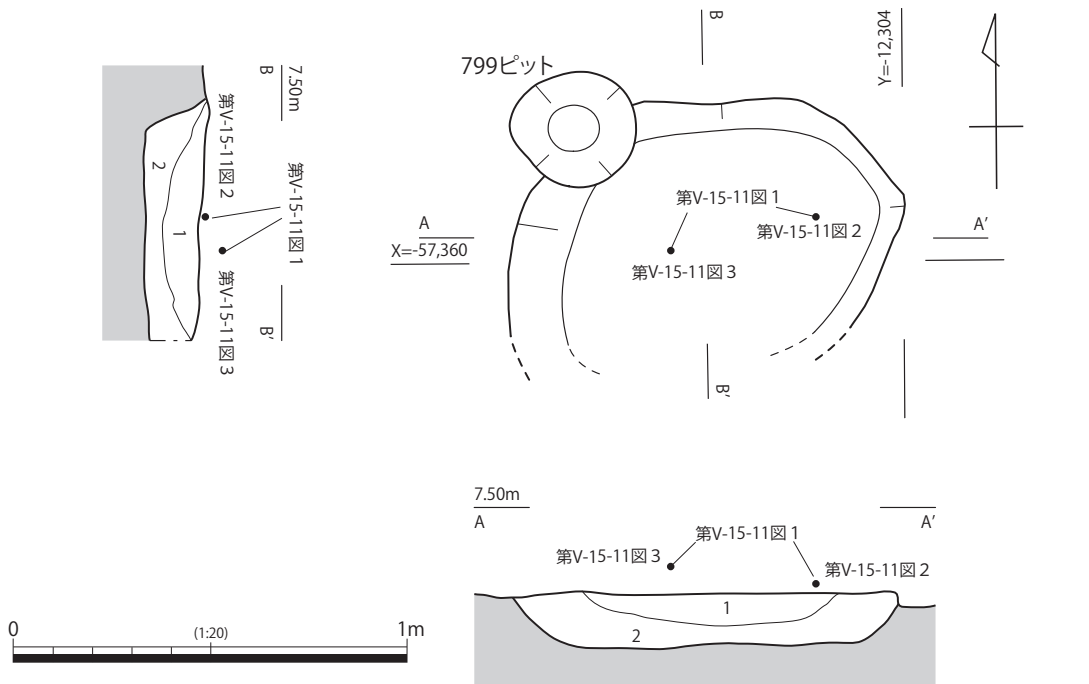
6D-7c区の調査区南東隅に位置する。調査区境沿いの排水用の溝によって一部掘削されている。径0.2m、深さ0.17mの円形の土坑である。

696 土坑〔第IV-7-21 図 第2分冊図版 159〕

4D-7b区に位置する。長軸1.1m、幅0.62m、深さ0.1mの南北に長い楕円形の土坑である。埋土から弥生時代中期中葉〔第V-15-10 図〕の土器と共に粘土ブロックや炭化物が出土しており、土器などを廃棄した土坑と考えられる。

800 土坑〔第IV-7-22 図 第2分冊図版 160・161-1〕

調査地北、4D-6a・7a区に位置し、X=-57,360ライン土層観察用トレンチによって土坑南側は掘削



- 1 7.5Y7/1灰白色シルト～粘土（1.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。0.5～1.0cm大の炭化物を含む）
- 2 7.5Y8/1灰白色粘土～シルト（3.0cm大の灰白色粘土ブロックをわずかに含む）

第IV-7-22図 800土坑平・断面

されている。長軸 1.05 m、短軸 0.7 m、深さ 0.14 m の東西方向に長い楕円形の土坑である。竪穴住居 1 の柱穴と考えられる 799 ピットに切られている。このため、竪穴住居と直接関連する遺構ではないと考えられるが、埋土直上から弥生時代中期中葉の土器〔第 V-15-11 図〕が出土しており、竪穴住居 1 の年代の下限を示している。

813 土坑〔第IV-7-23 図 第 2 分冊図版 162-1〕

調査区中央の X=-57,450 ライン土層観察用ベルト北側に位置する大型の土坑。多くが掘削されているが、現存で長軸 5.6 m、幅 2.3 m、深さ 0.2 m の北西 - 南東方向に長い楕円形の土坑である。また土坑北西隅の底面からは径 0.3 m、深さ 0.15 m の 808 ピットを検出している。埋土からは、弥生時代中



第IV-7-23図 813土坑平・断面

期後葉の土器〔第V-15-12図〕と共に粘土ブロックや1～10cm大の炭化材が出土しており、廃棄用の土坑と考えられる。

818 土坑〔第IV-7-24図 第2分冊図版162-2・3〕

4D-9c区に位置する。暗渠を利用した排水用の溝によって南側が掘削されているが、下端は残っている。現存で東西1.4m、南北1.2m、深さ0.15～0.3mであり、正円もしくは南北に長い円形の土坑と考えられる。

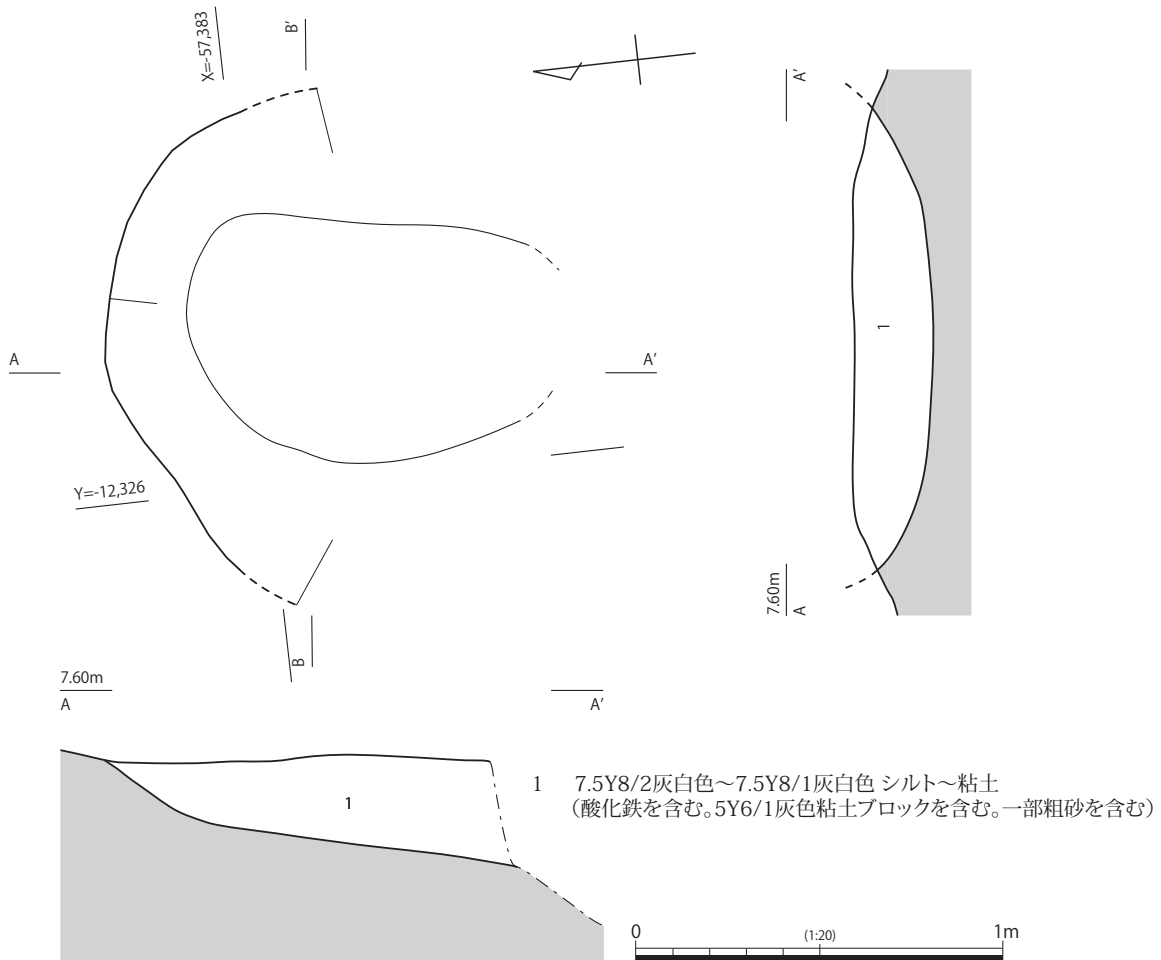
839 ピット〔第IV-7-25図〕

調査区北、4D-6a区に位置する。径0.3～0.35m、深さ0.6mの円形のピットである。周囲の土坑やピットと比較して、かなり深く掘り込まれている。柱穴の可能性はある。

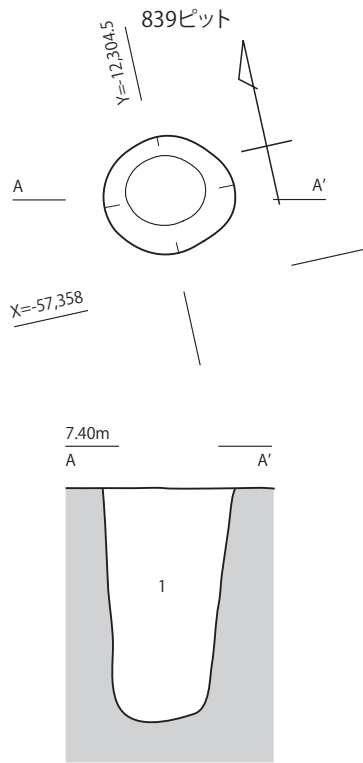
843 土坑・861 ピット〔第IV-7-25図 第2分冊図版163-3〕

調査地北、4D-6a区に位置する。当初、843土坑のみ検出、掘削したが、その後の精査により861ピットを検出した。843土坑の土層観察の際には、861ピットから立ち上がる土層は見えていないので、861ピットを843土坑が切っていると考えられる。

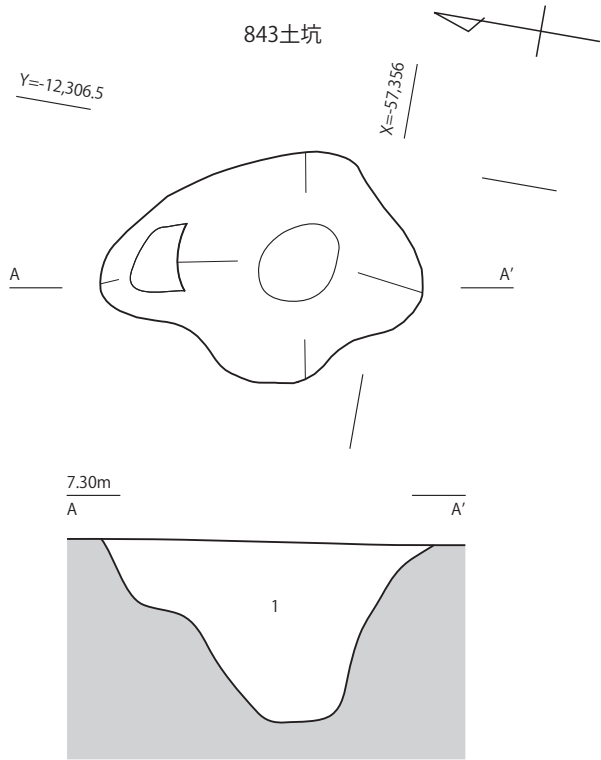
843土坑は南北に長い楕円形の土坑であり、北側に平坦面をもつ2段堀の土坑である。長軸0.85m、



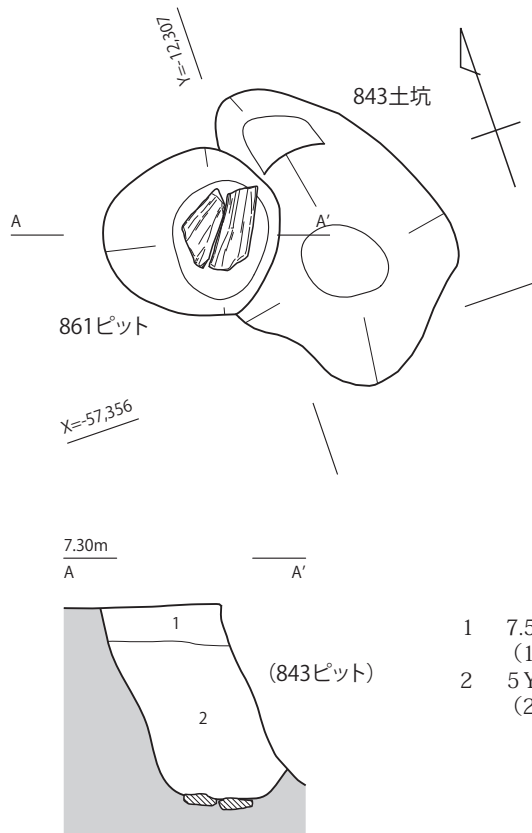
第IV-7-24図 818土坑平・断面



- 1 7.5Y7/1灰白色シルト～粘土
(1.0cm大の7.5Y8/2灰白色粘土ブロックをまばらに含む。0.5cm以下の炭化物をまばらに含む)



- 1 5Y6/1灰色粘土～シルト(1.0～3.0cmの灰白色粘土ブロックを含む。0.5cm以下の炭化物を多く含む)



- 1 7.5Y7/1灰白色シルト～粘土
(1.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む。0.5cm大の炭化物を含む)
2 5Y6/1灰色粘土～シルト
(2.0～3.0cm大の灰白色粘土ブロックを含む)



第IV-7-25図 843土坑 839・861ピット平・断面

短軸 0.62 m、深さは1段目が0.19 m、2段目の深さは0.25 mである。

861 ピットは、843 土坑によって東側が掘削されているが、長軸 0.55 m、短軸 0.45 m、深さ 0.5 m ほどの円形のピットであったと考えられる。底面からは礎板と考えられる長さ 20cm 大の板材 2 枚(ケヤキ、シイノキ属) が重なって出土していることから柱穴と考えられる。843 土坑についても、形態や同じ場所に続けて掘られていることから、柱穴の可能性が高い。

4D-6a 区の中でも、竪穴住居 1 の北側には他にも柱穴と考えられる土坑やピットがあるが、具体的にどういう組み合わせであるかは不明である。ただし、建物があつたことは確実であり、この遺構もそういったものの一つと考えられる。

851 土坑〔第IV-7-26 図 第 2 分冊図版 163-1〕

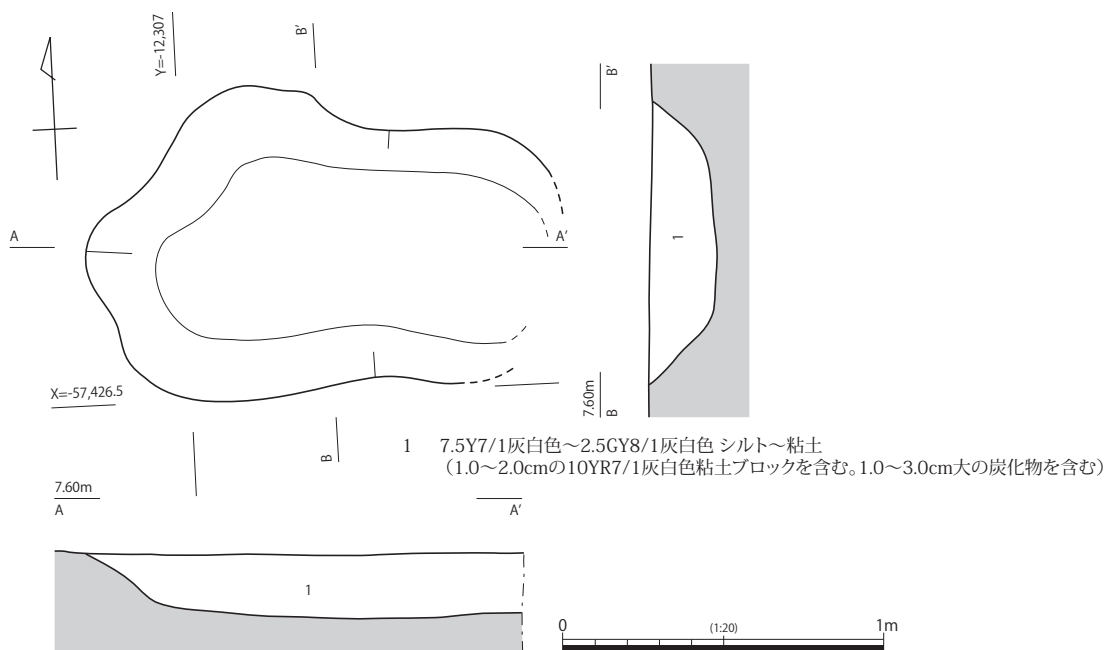
5D-3a 区に位置する。調査区東側に位置し、遺構の希薄な場所である。東側が排水用の溝で切られているが、長軸 1.5 m、短軸 1 m、深さ 0.2 m の東西方向に長い楕円形の土坑である。埋土には炭化物を含むが、遺物は含まれていない。

860 土坑〔第IV-7-27 図 第 2 分冊図版 163-2〕

調査区北、4D-8a 区に位置する。X=-57,380 ライン土層観察用トレンチ沿いで検出しており、南側が掘削されている。現存で東西 2.6 m、南北 0.9 m、深さ 0.1 m をはかり、平面はほぼ半分程度が残っていると考えられる。埋土上面が波打っているのは、第 3-1-1a 層下面で検出した土坑群が上から掘り込まれているためである。埋土からは弥生時代中期中葉～後葉〔第 V-15-13 図〕の土器が出土している。

862 ピット〔第IV-7-28 図 第 2 分冊図版 164-1〕

調査区北、4D-6a 区に位置する。径 0.4 m、深さ 0.45 m の円形のピットである。周辺の土坑やピットと比較して深く大型であり、柱穴の可能性はある。



第IV-7-26図 851土坑平・断面

870・871・879土坑〔第IV-7-28・29図 第2分冊図版164-2・165-2・3〕

4D-9d区の調査区西端に位置する。それぞれが切りあっており、新しい順に871土坑、879土坑、870土坑である。ただし、全ての遺構検出を一度ではできなかったため、直接の切りあい関係は土層断面で示してはいない。埋土が類似している部分もあるので、同一遺構の可能性もある。

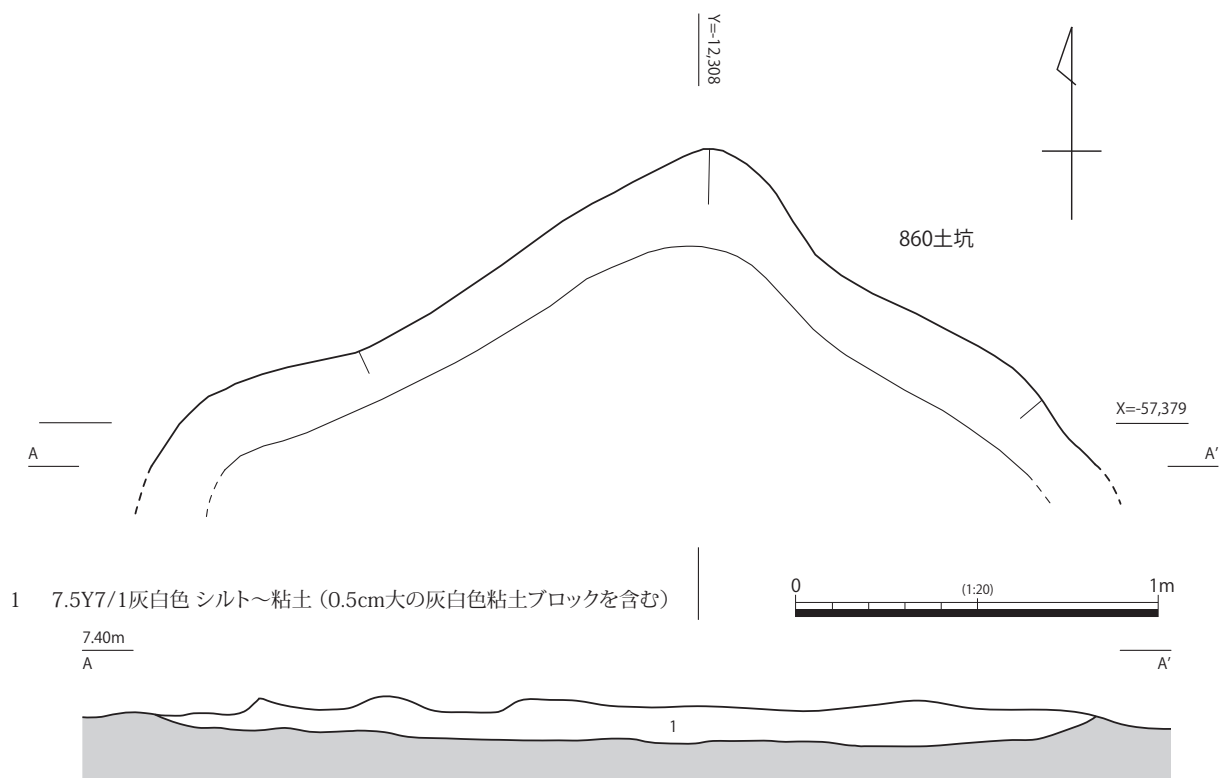
871土坑は径0.5m、深さ0.1mの円形の土坑である。879土坑の南西隅上に掘られている。879土坑は長軸1.32m、短軸1m、深さ0.1mの南北に長い楕円形の土坑である。870土坑は西側が871・879土坑で掘削されている。現存で長軸2.1m、短軸0.97m、深さ6～12cmの東西に長い楕円形の土坑である。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

876土坑〔第IV-7-30図 第2分冊図版164-3〕

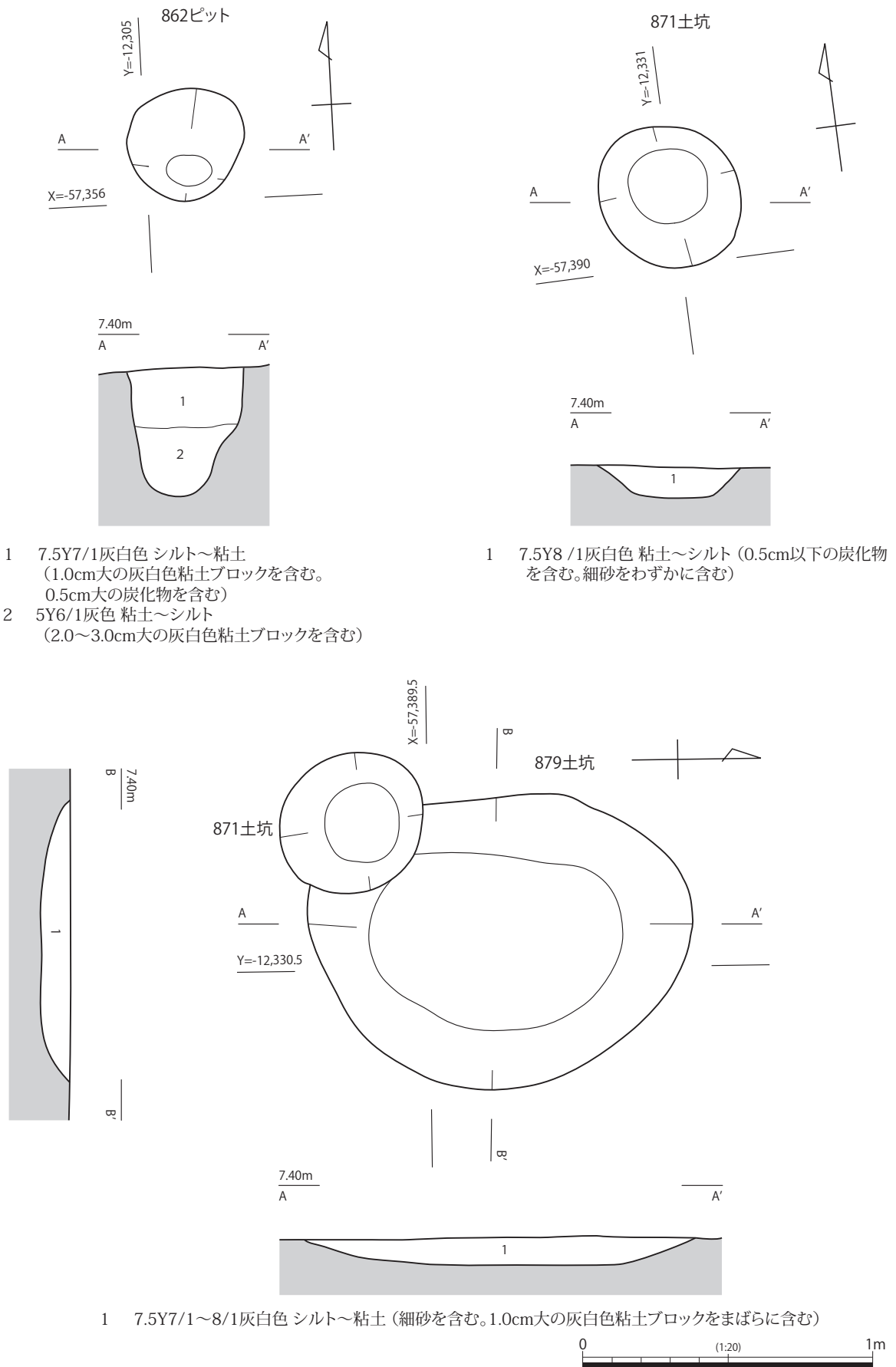
4D-9d区の調査区西端、先述の870・871・879土坑よりも北へ約7mの位置にある。径0.75～0.8m、深さ0.1mの円形の土坑である。先述の879土坑よりも少し小さい土坑であるが、同じような機能をもっていた可能性がある。

878土坑〔第IV-7-30図 第2分冊図版165-1〕

調査区北、4D-9d区の調査区西端、先述の876土坑より西へ1.5mの位置にある。径1.2m、深さ0.1mほどの円形の土坑である。規模は879土坑と同じほどであり、同じような機能をもっていた可能性がある。



第IV-7-27図 860土坑平・断面



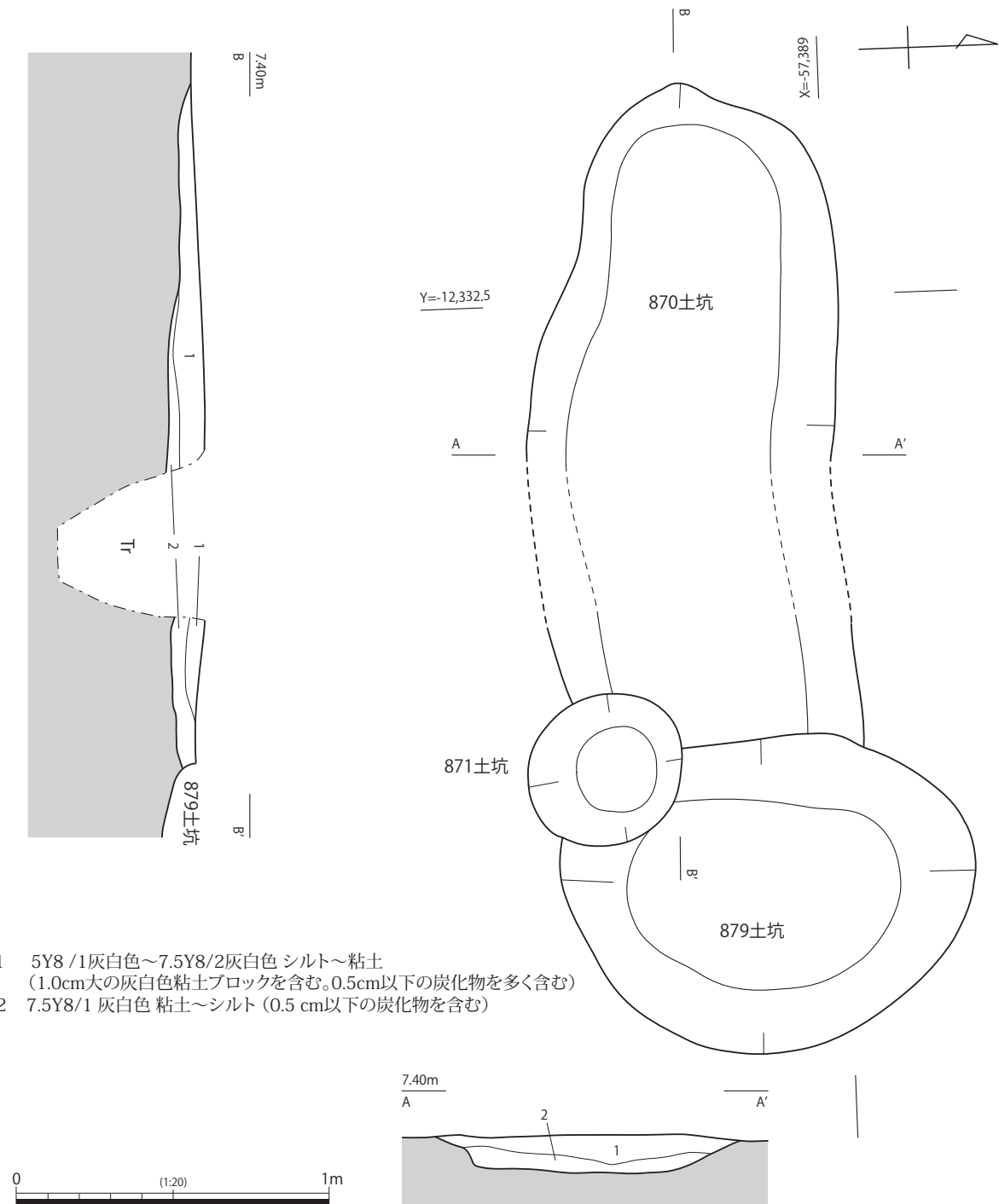
第IV-7-28図 871・879土坑 862ピット平・断面

882 ピット〔第IV-7-31 図〕

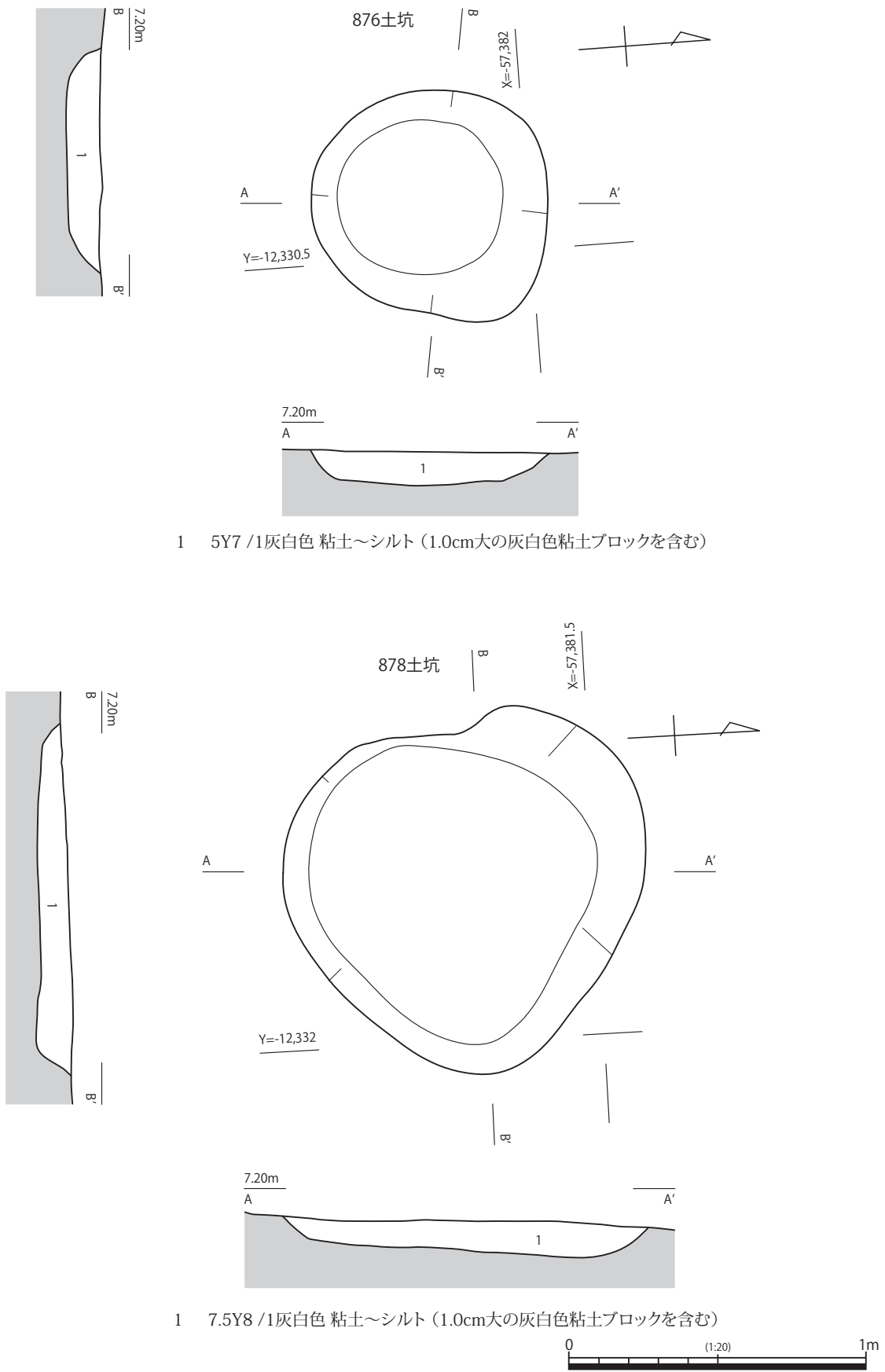
調査区北、4C-9j 地区の 665 溝の東側に位置する。長軸 0.4 m、短軸 0.3 m の東西に長い楕円形のピットである。東側に半円形の平坦面があり、2 段堀となっている。1 段目の深さは 0.35 m、2 段目はそこから 6 cm さがる。柱穴の可能性もあるが、周囲に対応するような遺構は見当たらない。

883 ピット〔第IV-7-31 図〕

調査区北、4C-9j 地区の Y=-12,300 ラインよりも東側に位置する。径 0.2 m、深さ 0.3 m の円形のピット



第IV-7-29図 870土坑平・断面



第IV-7-30図 876・878土坑平・断面

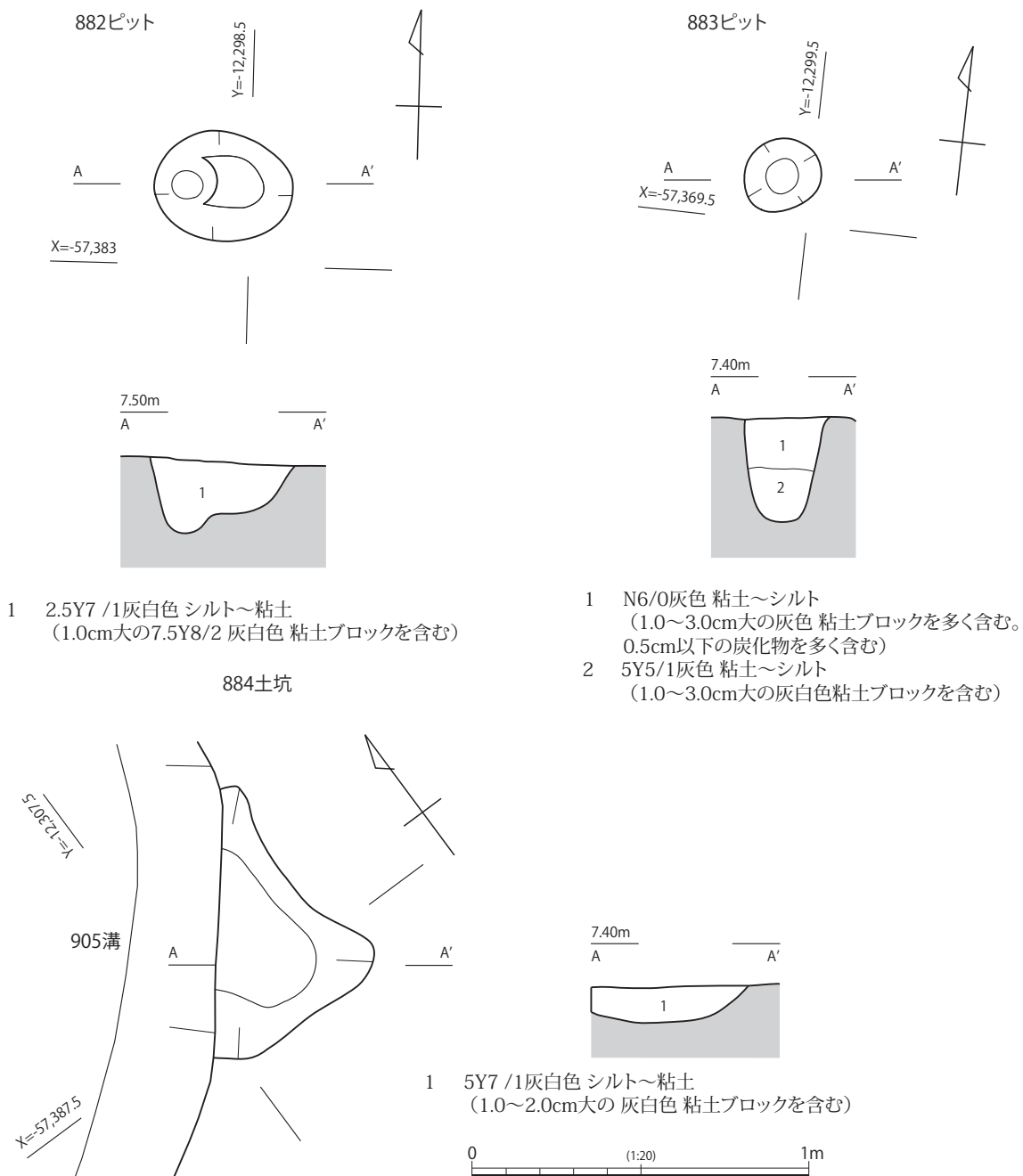
トである。周辺の遺構と比べて深さが深いため、柱穴の可能性はあるが、周囲に対応するような遺構は見当たらない。

884 土坑〔第IV-7-31 図〕

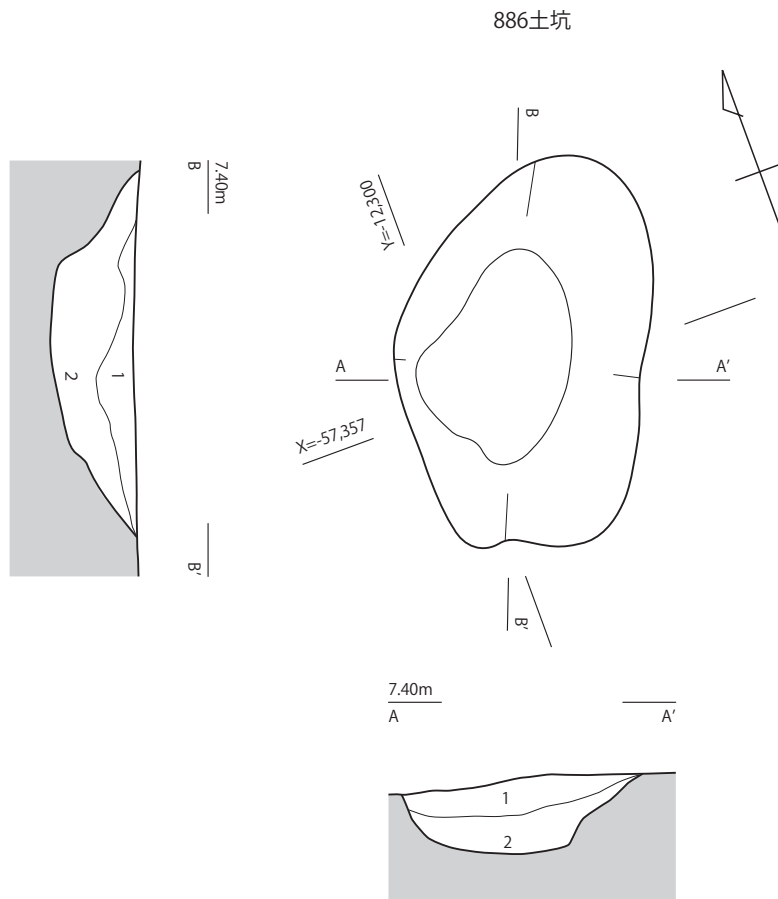
調査区北、4D-9a 区に位置し、905 溝によって西側が掘削されているが、南北にやや長い平面方形の土坑と考えられる。現存で、長軸 0.7 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 mをはかる。埋土から弥生土器の高坏〔第 V-15-14 図〕が出土している。

886 土坑〔第IV-7-32 図〕

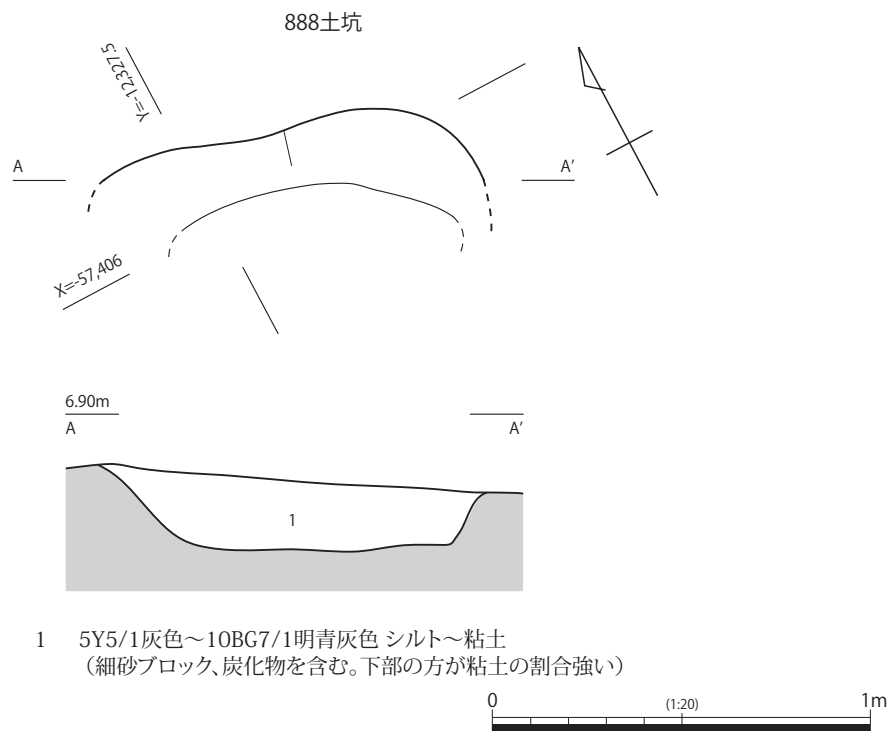
4C-6J 区の調査区北端に位置する。長軸 1.1 m、短軸 0.66 m、深さ 0.15 ~ 0.2 mの北東 - 南西方向



第IV-7-31図 884土坑 882・883ピット平・断面



- 1 N6/O灰色 粘土～シルト (1.0～3.0cm大の灰色粘土ブロックを多く含む。0.5cm大以下の炭化物を含む)



- 1 5Y5/1灰色～10BG7/1明青灰色 シルト～粘土
(細砂ブロック、炭化物を含む。下部の方が粘土の割合強い)

第IV-7-32図 886・888土坑平・断面

に長い楕円形の土坑である。土層断面をみると、底面からの立ち上がりが途中で緩やかに変換しているようであるが、2段堀といえるほどではないようである。埋土には多くの粘土ブロックや炭化物が含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。

888 土坑〔第IV-7-32 図 第2分冊図版 166-1〕

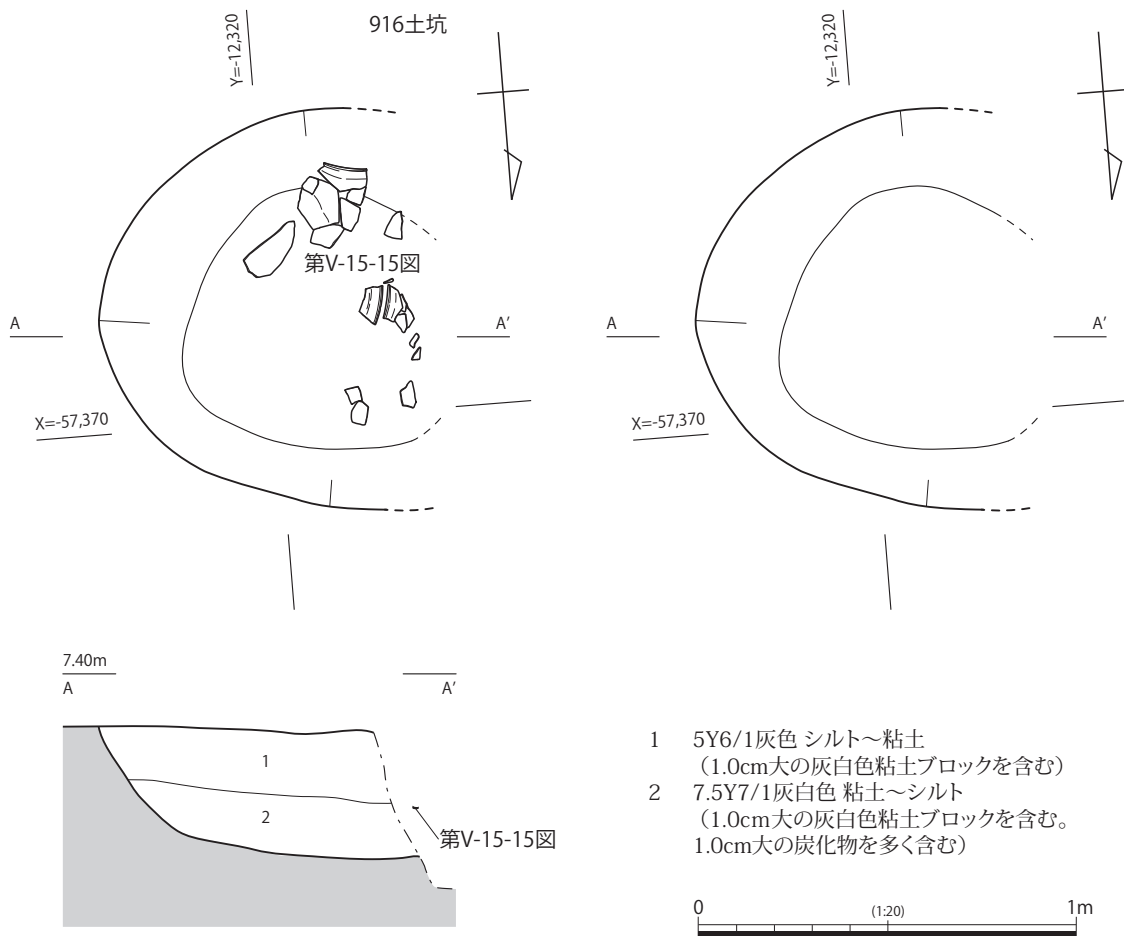
調査区北、5D-1c 区に位置する。弥生時代後期の大型溝群の下で検出している。南側を土層観察用のトレンチで半分ほど掘削されているが、長軸 1.1 m、短軸 0.6 m、深さ 0.15 ~ 0.2 m ほどの南西 - 北東方向に長い楕円形の土坑であると考えられる。遺物は出土していない。

916 土坑〔第IV-7-33 図 第2分冊図版 161-2〕

Y=-12320 ラインと X=-57,370 ラインとの交点付近でみつかった。西側が土層観察用トレンチによって掘削されているが、現存で短軸 1.05 m、深さ 0.3 ~ 0.35 m をはかり、長軸は想定で 1.2 m ほどの東西にやや長い楕円形の土坑である。埋土から、粘土ブロックや炭化物と共に弥生時代中期中葉の甕〔第 V-15-15 図〕が出土しており、廃棄土坑と考えられる。

918 土坑〔第IV-7-34 図 第2分冊図版 167〕

調査区北西隅の 4D-8c 区に位置する。検出時には弥生時代中期中葉の甕〔第 V-15-16 図〕が口を上

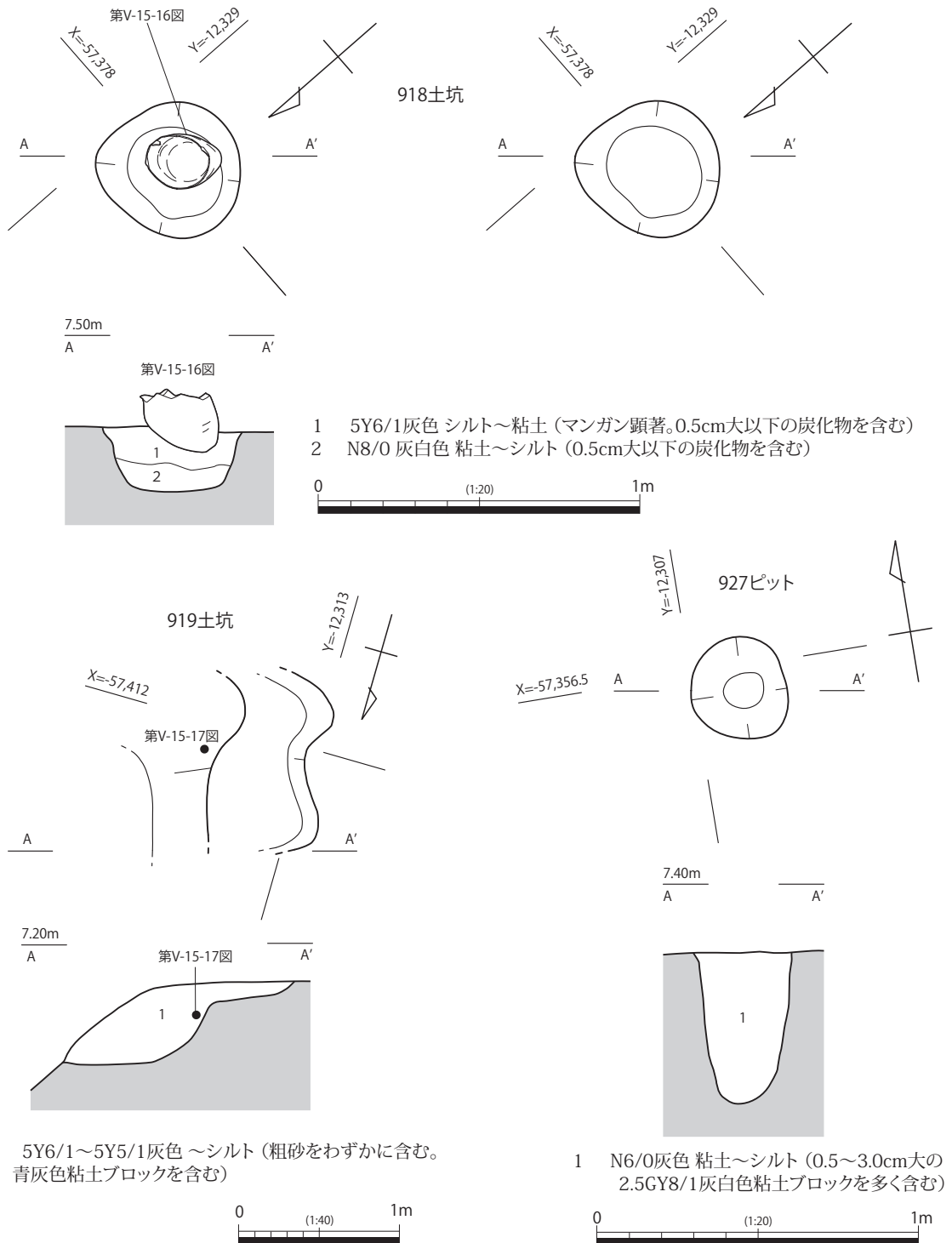


第IV-7-33図 916土坑平・断面

にして、斜めに寝ている状態で出土した。土坑上面から0.1 mほど土器がでていた状況であるが、実際の検出面はもっと上面であったと考えられる。現存で径0.4 m、深さ0.2mの円形の土坑である。埋土内からは炭化物が多く出土しており、近くにある大型土坑と同じように廃棄土坑であった可能性があるが、出土状況から他の機能を持っていた可能性もある。

919土坑〔第IV-7-34図 第2分冊図版166-2〕

5D-2b区の760溝南岸に位置する。土層観察用のトレンチや2溝で掘削されているが、2段堀の遺



第IV-7-34図 918・919土坑 927ピット平・断面

構となっている。現状で東西 1m、南北 1.1 m、西側に平坦面があり、深さは 0.1 m ほどである。そこから 0.4 m ほど東で再度落ちこみ、その深さは 0.35 m である。埋土からは、混入と思われる突帯文土器〔第 V-15-17 図〕が出土している。大型で特異な形態をしており、土坑というよりは、溝の一部の可能性もあるが、詳細は不明である。

927 ピット〔第IV-7-34 図 第 2 分冊図版 166-3〕

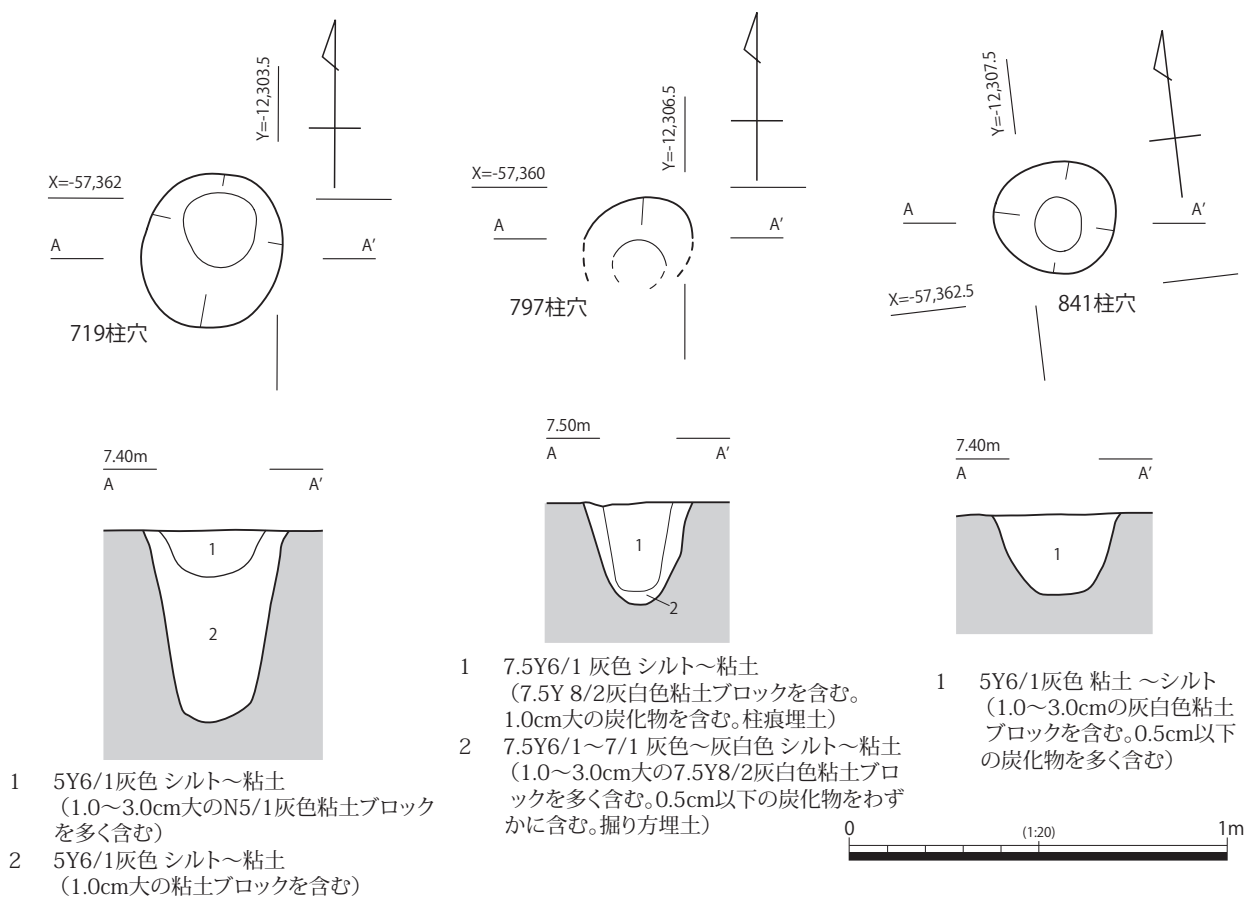
調査区北端の 4D-6a 区に位置する。径 0.3m、深さ 0.45 m の円形のピットである。立ち上がりはほぼ垂直で、柱穴の可能性が高い。先述したように 4D-6a 区では他にも柱穴と考えられる土坑、ピットを検出しており、それらと組み合わせる可能性がある。

第3項 建物跡

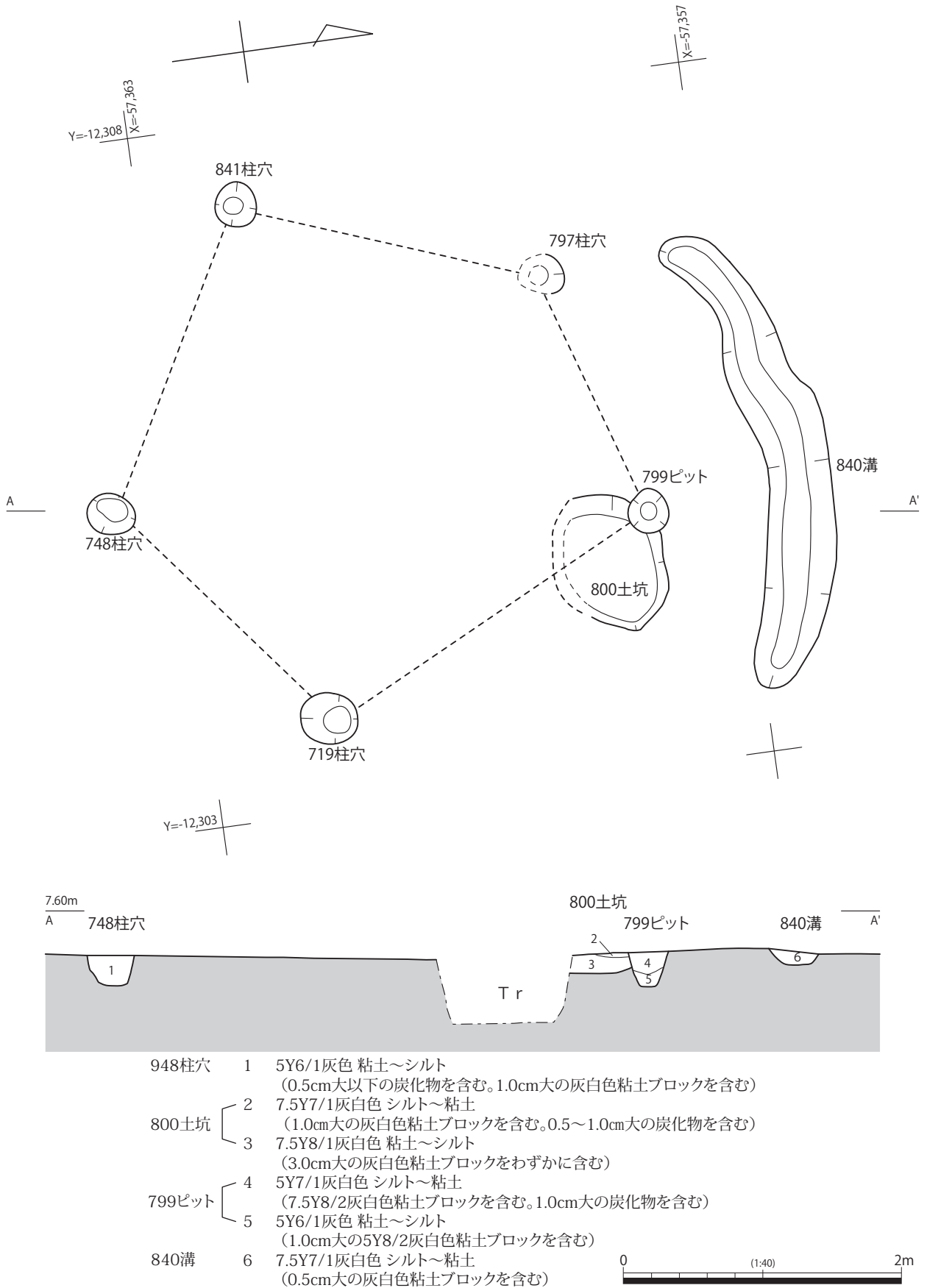
竪穴住居 1〔第IV-7-35・36 図 第 2 分冊図版 168 ~ 170-1〕

調査地北、4 D-6a ~ 4 D-7a 区に位置する。5つの柱穴と周溝と思われる溝で構成される。

柱穴 5 基 (719・748・797・841 柱穴、799 ピット) はいずれも、径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.2 ~ 0.5 m の平面円形の遺構である。797 柱穴では、柱痕と掘方と考えられる埋土がみついているが、その他は明確な柱痕や掘方の跡は残していない。平面で五角形のような配置であり、柱間は 1.9 ~ 2.7 m である。



第IV-7-35図 竪穴住居 1 柱穴平・断面



第IV-7-36図 竪穴住居 1 平・断面

周溝と考えられる溝(840溝)は柱穴群の北側にあり、ほぼ東西方向にのびる。長さ3.3m、幅0.3～0.5m、深さ0.1mの溝である。本来ならば柱穴群を取り囲んでいる状況と思われるが、上部が掘削されているためか北側のみにあり、柱穴との距離は、0.8mほどである。

840土坑から弥生土器が出土している〔第V-15-18図〕。また、799ピットと切りあう800土坑では、弥生時代中期中葉の土器〔第V-15-11図〕が出土しており、これらから、弥生時代中期中葉以降に建っていた建物だと考えられる。

この他、第3-2a層下面で検出した遺構で、小規模で深さも浅く、単一層で性格がよく分からないものがある。これらについては、位置と規模、埋土について記載した以下の一覧表に掲載する。

第IV-7-1表 第3-2a層下面その他の遺構一覧

遺構名	地区名	規模 (cm)			埋 土	備 考	
		長軸	短軸	深さ			
161	土坑	5D-7c	37	30	11	N7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
162	土坑	5D-7c	48	45	18	N7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
164	土坑	5D-7c・7d	30	25	11	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
165	土坑	5D-8c	35	32	28	N7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
166	土坑	5D-8c	50	45	15	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	平面が隅丸方形
167	土坑	5D-8c	33	33	12	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト	
168	土坑	5D-8c	83	80	27	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
169	土坑	5D-8c	20	20	10	N7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
171	土坑	5D-8c	25	25	13	N7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
172	土坑	5D-8c	33	30	10	N7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
177	土坑	5D-9d	45	36	10	5Y7/2 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
189	土坑	6D-2d	10	8	8	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
341	土坑	6D-5d	40	38	10		
342	土坑	6D-5d	20	18	5		
412	土坑	6D-6c	20	20	30	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
413	土坑	6D-6c	26	23	21	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
414	土坑	6D-6d	50	36	20	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
415	土坑	6D-6d	60	34	5	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物含む)	
690	土坑	4C-7j	124	64	10	7.5Y7/1 灰白色～7.5Y6/1 灰色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
692	土坑	4C-7j	102	63	14	7.5Y6/1 灰色 粘土～シルト (粘土ブロック含む)	2段堀
693	ピット	4C-7j	40	30	31	5Y5/1 灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
694	ピット	4C-7j	32	25	16	7.5Y6/1 灰色 粘土～シルト (粘土ブロック含む)	
695	ピット	4C-7j	36	36	31	5Y5/1 灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
711	ピット	4C-7j	28	28	40	2.5Y7/1 黄灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
728	ピット	4C-7j	40	32	12	N7/0 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
749	ピット	4D-7a	22	22	20	5Y6/1 灰色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
784	ピット	5D-6c	(22)	18	40	5G7/1 明緑灰色 粘土～シルト (粘土ブロック含む)	根による攪乱?
785	ピット	5D-6c	37	(35)	45	5G7/1 明緑灰色 粘土～シルト (粘土ブロック含む)	根による攪乱?
798	ピット	4D-7a	26	(13)	10	5Y7/1 灰白色シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
802	ピット	5D-5c	13	13	5	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
803	ピット	5D-5c	34	30	9	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
804	ピット	5D-5c	26	18	10	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
805	ピット	5D-5c	38	38	8	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
806	ピット	5D-5c	22	20	9	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
807	ピット	5D-5c	29	29	10	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	

第IV-7-2表 第3-2a層下面その他の遺構一覧（2）

遺構名		地区名	規模 (cm)			埋 土	備 考
			長軸	短軸	深さ		
808	ピット	5D-5b	36	31	14	2.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
809	ピット	5D-4b	40	36	20	2.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
810	土坑	5D-5c	(60)	(50)	10	2.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
814	ピット	5D-6b	24	24	4	7.5YR8/1 灰白色 粘土～シルト (細砂わずかに含む 粘土ブロック含む)	
815	ピット	5D-6b	30	24	15	10BG7/1 明青灰色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
816	ピット		20	20	4	7.5Y7/1 灰白色 シルト～粘土 (炭化物含む)	
817	ピット	4D-9c	30	26	10	7.5Y7/1 灰白色 シルト～粘土 (炭化物含む)	
819	土坑	4D-9c	70	49	14	7.5Y8/2 灰白色～7.5Y8/1 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック・炭化物含む)	
837	ピット	4D-6a	36	27	18	5Y7/1 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
842	ピット	4D-6a	(52)	47	34	5Y6/1 灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック・炭化物含む)	
844	ピット	4D-6a	30	30	8	5Y6/1 灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック・炭化物含む)	
846	ピット	4D-6a	(18)	13	17	5Y6/1 灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック・炭化物含む)	
847	ピット	4D-7a	18	15	7	5Y6/1 灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック・炭化物含む)	
848	ピット	4D-7a	19	16	7	5Y8/1 灰色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
849	ピット	4D-7a	26	24	27	5Y6/1 灰色 粘土～シルト (粘土ブロック含む 炭化物多く含む)	
850	ピット	4D-7a	55	47	46	5Y6/1 灰色 粘土～シルト (粘土ブロック含む 炭化物多く含む)	
852	ピット	5 D -3a	20	20	12	N6/0 灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む 炭化物多く含む)	
855	ピット	4D-8a	41	29	21	2.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物多く含む)	
856	ピット	4D-8a	20	20	24	5Y6/1 灰色 粘土～シルト (粘土ブロック含む)	
857	ピット	4D-8a	46	23	6	2.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (炭化物多く含む)	
858	ピット	4D-8a	40	37	21	7.5Y8/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
859	ピット	4D-8a	26	23	24	10YR7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
863	ピット	4D-6a	25	22	10	N7/0 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
864	ピット	4D-6a	38	32	24	N7/0 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
865	ピット	4D-6a	28	22	24	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (細砂わずかに含む 炭化物含む)	
872	ピット	4D-10d	23	20	10	7.5Y8/1 灰白色 粘土～シルト (細砂わずかに含む 炭化物含む)	
873	ピット	4D-10c	16	16	8	7.5Y8/1 灰白色 粘土～シルト (細砂わずかに含む 炭化物含む)	
874	ピット	4D-10c	21	16	8	7.5Y8/1 灰白色 粘土～シルト (細砂わずかに含む 炭化物含む)	
875	ピット	4D-9d	36	36	12	7.5Y8/1 灰白色 粘土～シルト (細砂わずかに含む 炭化物含む)	
876	土坑	4D-9d	80	76	11	5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック含む)	
890	ピット	4C-8j	32	30	22	7.5Y8/1 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック・炭化物含む)	
892	ピット	4C-8j	25	25	7	10YR6/1 褐灰色 シルト～粘土 (粘土ブロック・炭化物含む)	
899	土坑	4D-8c	60	(21)	42	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック含む)	
901	ピット	4D-8a	28	28	23	10YR7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
902	土坑	4D-9a	76	58	16	5Y7/1 灰白色 シルト～粘土 (炭化物含む)	
903	ピット	4D-9a	24	24	9	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
904	ピット	4D-9a	25	22	14	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
906	ピット	4D-9a	25	25	10	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
907	ピット	4D-9a	18	18	110	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	
908	ピット	4D-9a	22	(18)	12	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック含む)	
909	土坑	4D-9a	47	40	10	7.5Y7/1 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
913	ピット	4 C -9j	44	(34)	12	2.5Y7/1 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
914	ピット	4D-9a	20	18	12	2.5Y7/1 灰白色 シルト～粘土 (粘土ブロック含む)	
915	土坑	4D-10b	78	52	14	7.5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (粘土ブロック・炭化物含む)	

第8節 第4a層下面の遺構

第4a層下面では、調査区の北側を中心に溝や土坑が分布していた。そのうちの一つ、710溝は調査区中央部の西端から北東隅に延びる大規模な河川で、上層の堆積物には、弥生時代開始期の土器や石器、木器を伴う多量の木材が出土した。この木材の中には、人為により分割されているものが多く含まれており、埋没の過程で浅くなった河川内に木材を集積していた可能性が考えられた。また、同じく710溝内において、堰状の水利施設とみられる949構造物を確認した。

一方、調査区南側では、1個体分の土器が土圧で押しつぶされた状態で出土したり、小規模な土坑などが認められた。他に、炭化物が密に集中する場所が数ヶ所あったが、明確な掘方を確認することはできなかった〔第IV-8-1図〕。

第1項 溝

調査区の北半で、西から北東に向かって延びる710溝をはじめとする溝状の遺構を検出した。710溝は最大で幅20m、深さ3mをこえる大型の河川で、上層に弥生時代開始期の突帯文土器や遠賀川式土器が含まれていた。したがって、弥生時代前期には、かなり埋没が進み、流路としての機能は失われていたとみられる。また、710溝からは粗雑な加工痕が観察できる木材が多量に出土した。その点数は400点におよび、弥生時代開始期に木材が集積されていた可能性がうかがわれる。710溝内には、949構造物として調査を行った堰状の構造物もあり、浅くなった河川跡は、この周囲における活動に利用されていたものと考えうる。この他、710溝を掘り込む947溝、938溝、939溝などを検出した。また、調査区の北側で検出した946溝や948溝からは、縄文時代晩期中葉の土器が出土している。以下、各溝の報告を行う。

(1) 710溝〔第IV-8-2～12図 巻頭図版10-1 第2分冊図版171-2～181〕

①概要

調査区西端、X=57,400～430間から、北東方向に方向を変えながら、釣山沿いを北に向かう。調査区内において確認できた長さは約85mである。幅には広狭があり、最大幅26m、最も狭いところで11.5mである。検出面から最深部までの深さは3.5mであった。

堆積および埋没した年代 710溝内を埋める堆積は、層相の違いによって、上・中・下層に大別できた。いずれも細砂～粗砂を多く含み、ラミナが観察できることから、水の営力により運ばれ、河川内を埋めたものと考えられる〔第IV-8-2～4図〕。このうち、上層からは、弥生時代開始期の突帯文土器と遠賀川式土器〔第V章第17節〕が多量に出土した。土器に付着した炭化物を試料として、放射性炭素による年代測定を行ったところ、炭素14年代値には、2500年台と2400年台を示すものがあった。詳細は第VIII章第7節を参照いただきたいが、突帯文土器に共伴する遠賀川式土器の型式学的特徴からみて、紀元前600年前後あたりの年代が推定される。したがって、この頃、上層が堆積することで、710溝の河川としての機能がほぼ失われたものと考え得る。

なお、710溝内の調査において、下層まで掘り下げ、溝の底面が確認できた場所は、土層断面観察用に設定した畔A-A'とB-B'間に限られる。釣山の裾部に沿う部分では、溝幅が狭くなり、壁面が崩

落する可能性があるため、完掘ができなかった。また、土層観察用畦 A-A' よりも西側についても調査区の壁面に近い場所では、安全上の問題から下層を掘り下げることができなかった。一部、下層を完掘できた場所では、下層には著しく摩滅した土器の小片が数点含まれている程度であった。よって、下層をすべて調査することができなかったが、710 溝の評価において、大きな影響はないものと考えられる。

②堆積状況など

調査区西側、Y=12,310 ラインより西側では、北側の法面の傾斜が他よりも緩やかで、断面形状を観察すると平坦な形状を呈す場所が認められた〔第IV-8-3 図〕。この一帯に堆積していたのが、A-A' 断面で確認した上層〔第IV-8-3 図 7～9 層、22～26 層〕である。北側の法面に認められた平坦な地形の底面ラインは、中層の上面にすりつくことから、中層が堆積によって埋没が進んだことで、この平坦面が710 溝の底となり、Y=-12,310 ラインよりの西側では、幅広で浅い流路となっていたようだ。弥生時代開始期の土器を伴う木材の集積は、こうした段階に行われていたものである。

また、最上部の堆積にはシルト～粘土を主体とする堆積があった。したがって、中層の堆積後、浅くなった710 溝内に集積された木材を埋める砂（上層）が堆積した後は、砂を運ぶほどの流れはない状態にあったと考えられる。その後、710 溝の痕跡は、弥生時代中期中葉頃までは帯状の窪地を形成していたようで、検出面にほど近い高さから、その窪地に堆積した弥生時代中期中葉の甕が出土している〔第V-16-1 図〕

なお、上層最下部の標高は A-A' 断面で 4.8～5m、B-B' 断面で 5.1～5.2 m と北側の方がやや高い。ただし、中層最下部の標高は A-A' 断面で 4.4 m、B-B' 断面で 4 m なので、水の流れは、西から北東方向に向かっていたものと考えられる。上層堆積段階で、標高が逆転しているのは、中層堆積の前後に710 溝内を塞いだケヤキの大木の影響によるものであろう。木材の集積は、そうした環境をうまく利用したものと考えられる。

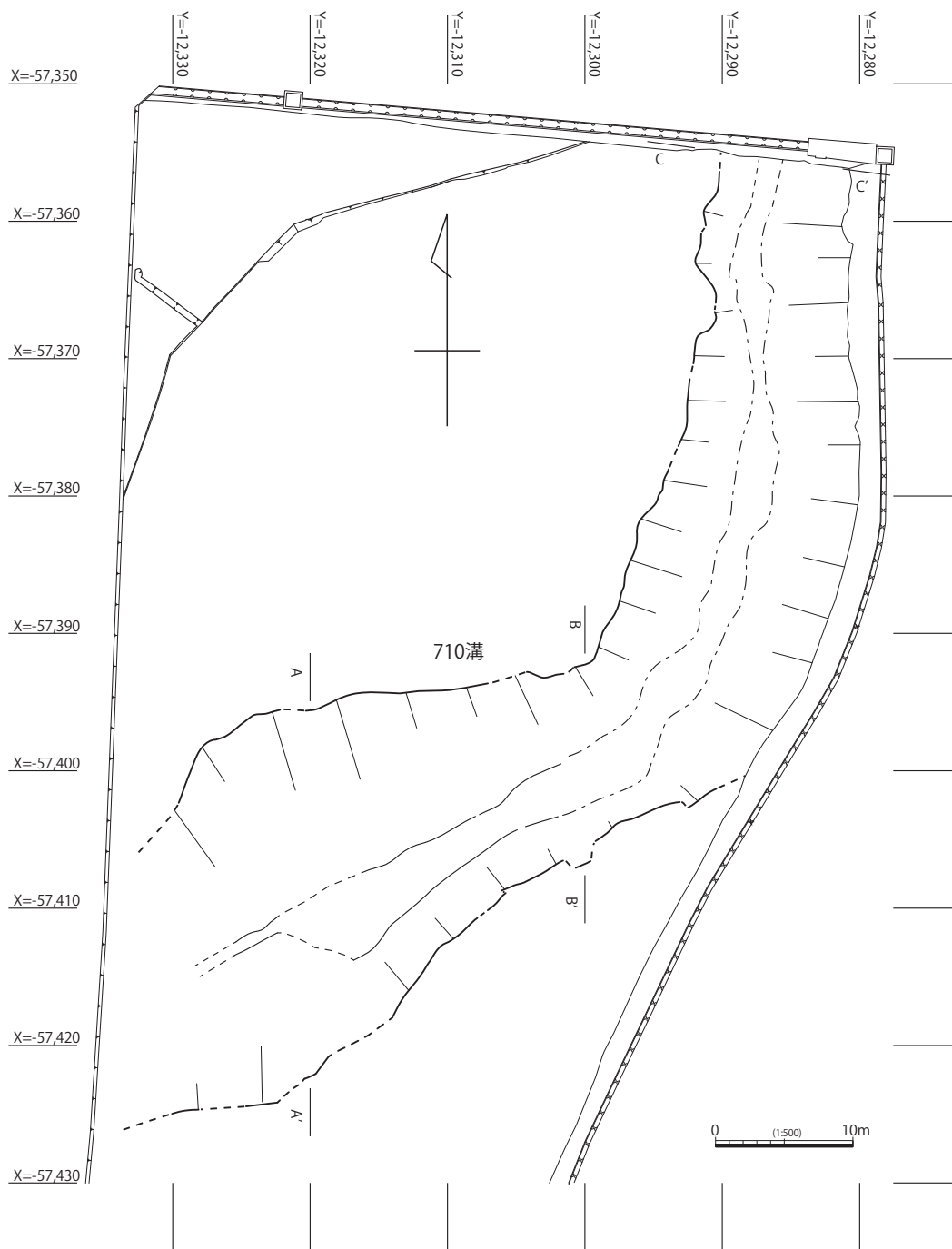
一方、中層にも細砂～粗砂が堆積しているが、上層と比較して、細砂が目立つ。さらに下層は粗砂～細砂を主体に、下部ではシルトを主体とする堆積や第5a' 層以下の基盤層に由来する粘土ブロックを含む堆積が認められ、中層と比較すると粗砂が卓越する状況にあった。

③遺物の出土状況

710 溝内に堆積した上層の下半から中層の上部にかけて、多量の木材が包含されていた〔第IV-8-5 図 巻頭図版 10-1〕。特に、上層の下半部に多量の木材が埋没していた。もちろん、中層からも木材は出土しているが、上層と比べるとわずかであった。同じことは土器の出土量にもうかがわれる。上層からは、木材に伴って多量の土器が出土したが、中層から出土する土器の量はごくわずかであった。下層ではさらに出土遺物の量が少なくなる。また、木製品はごく限られた点数しか出土していないが、それらは全て上層から出土したものである。ただし、上層と中層から出土する土器には、時期差を認識できるほどの型式差はない。したがって、中層から上層にかけては、土器一型式の時間幅の中で、埋没が進行していったものと考えられる。



第IV-8-1図 第4a層下面全体



第IV-8-2 図 710 溝完掘

④木材の分布について

上層～中層上部から出土した木材の点数は約 400 点である。想定される 710 溝内における水の流れに対し、直行する方向に横たわる木材が多くあった。また、樹皮や根、枝葉を欠き、分割されたり、加工痕跡が観察できるものが多数存在した。

710 溝は中層の堆積により、かなり浅い流路となっており、多量の木材が、水の営力によって一時期に他所から運ばれてきたものであれば、かなりの水量と水流が必要である。しかし、木材を埋める砂の堆積には、大型の礫や、水流によって川岸から崩落した偽礫などの混入物が顕著に認められなかつ

た。さらに、木材に伴って出土した土器は、ススやコゲなどの炭化物が良好に付着した状態にあり、水の影響によって器面が摩耗していないものが多い。また、先述したように、出土した木材には、分割されたり、加工の痕跡が観察できるものがあることから、これらは、人為的にこの場所に持ち込まれたものである蓋然性が高いと判断した。ただし、製品類の出土点数は非常に少ないことから、付近の山林などで伐採され、必要な大きさに分割したり、簡単な加工を施した状態の木材が集積されているものとする。

また、別に報告するが、溝内には、杭材が打ち込まれた場所や、さらには調査地東端、X=-57,380～390 ライン間で、山際に礫を積み上げた土堤状の高まりや、木材を組み合わせた 949 構造物を検出している。これらは、浅くなった 710 溝内を木材の集積に利用するために設けられた施設と考えられる。

また、一見、木材は 710 溝の調査範囲内の全域に分布しているように見える。しかし、710 溝内は、Y=-12,320 付近に横たわる 2 本のケヤキの大径木と、X=-57,380、Y=-12,280～290 ライン付近で検出した 949 構造物を境とする 3 つの空間に大別できる。また、詳しくは後述するが、それぞれから出土した木材の大きさや加工の度合いには偏りが認められる。そこで、木材の分布に、次の 3 群が存在することを想定した〔第IV-8-5 図〕。

1 群 710 溝の西側（Y=-12,320 ライン付近）で、流路を塞ぐように横倒しの状態で出土したケヤキの大径木の西側に分布する木材

2 群 ケヤキの大径木の北東側に分布する木材。949 構造物の手前までを 2 群とする。

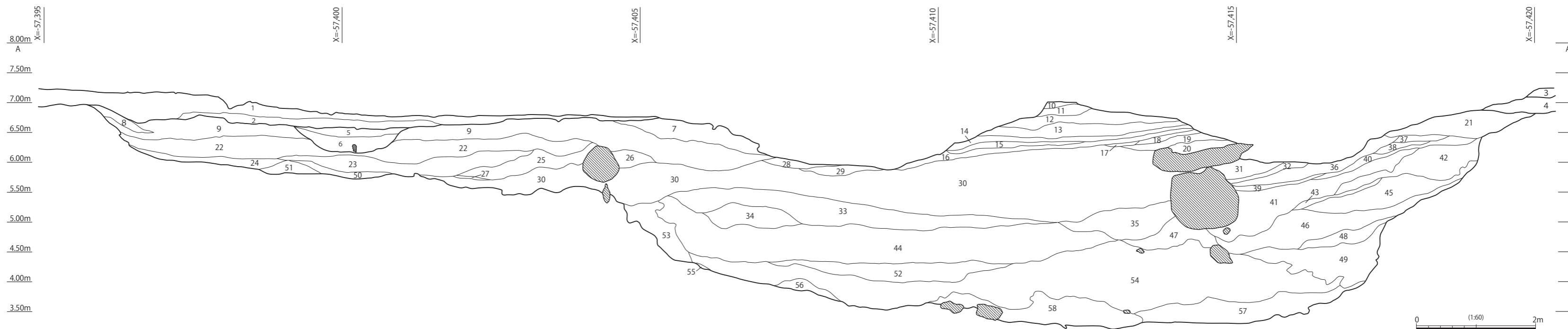
3 群 949 構造物から北側に分布する木材。

各群には、土器の出土量にも大きな偏りがある。710 溝から出土した土器の 9 割強が 1 群からの出土であった。2 群、3 群では、2 群からの出土点数がやや多い。このように 1 群と 2・3 群には、土器の出土量に大きな違いがあるが、出土した土器の型式には大きな差異が認められない。したがって、1～3 群に分布する木材は、一定の時期に集積され、その後、埋没したものと推測する。

⑤ケヤキの大径木について

1 群と 2 群の間には、2 本のケヤキの大径木が流路内を横断するように倒れ込んでいた〔第 2 分冊 図版 177-2～178〕。いずれも長さは 11m 程で、最大径が 1 m こえる箇所もある巨木である。2 本のケヤキは同方向に重なりあっており、710 溝内の水の流れを塞ぐ堰のような役割を果たしていた可能性がある。このケヤキは、他所から運ばれてきたもの、ないしは川岸に生育していたものが人為的に伐採されたものかもしれない。しかし、伐採された痕跡を明確に確認することはできなかった。

なお、調査時の観察によると、2 本のケヤキは、それぞれ壁側に近い側の径が太く、樹木の先端方向が 710 溝の中心に向かってることが確認できた。さらに、北側から倒れ込んでいるケヤキの根元付近に、地山に由来するシルト～粘土のブロック土が観察された場所がある。また、710 溝の壁面に沿うように縦方向のラミナが通る細砂層〔第IV-8-3 図 A-A' 断面 53 層〕が確認されている。これらが倒木の痕跡ならば、このケヤキは自然に転倒したものである可能性がうかがわれる。南側のケヤキの壁際にも、710 溝の壁面が大きく抉れた状態になった場所がある。したがって、川岸に生育していたケヤキが転倒したものである可能性はあるが、この 2 本のケヤキの大径木が河川内に横たわったことで、水の流れが塞がれたことは間違いない。



- 第4a層
 - 1 5B7/1明青灰色シルト～粘土(粘土ブロック・細砂を含む)
 - 2 5Y8/1灰白色～7.5Y8/2灰白色シルト～粘土(細砂・1.0cmの灰白色粘土ブロックを含む)
- 938溝
 - 3 10Y7/1灰白色シルト～粘土(細砂をわずかに含む)
 - 4 10BG7/1明青灰色シルト～粘土(細砂ブロックを含む)
 - 5 7.5Y5/1灰色～7.5Y7/1灰白色細砂まじりシルト～粘土(粘土ブロックをまれに含む)
 - 6 5Y4/1灰色～7.5Y7/1灰白色細砂～粘土(ラミナあり。木質遺物・細砂ブロックを含む)
 - 7 5Y5/1灰色粗砂まじり細砂～シルト(木質遺物を含む)
- 710溝上層
 - 8 10BG6/1青灰色粘土～シルト
 - 9 10Y8/1灰白色～10Y6/1灰色細砂～粗砂(ラミナあり。木質遺物・1.0cm未満の白色礫を含む)
 - 10 10BG7/1明青灰色～10Y7/1灰白色粘土～シルト(細砂わずかに混じる。灰色粘土ブロックを含む)
 - 11 10BG6/1青灰色細砂混じり粘土～シルト(灰色土ブロックを含む)
 - 12 10BG6/1青灰色シルト～粘土(わずかに細砂混じる)
 - 13 N6/0灰色シルト～粘土(わずかに細砂混じる)
 - 14 10BG6/1青灰色シルト～粘土(わずかに細砂を含む)
 - 15 10BG6/1青灰色粘土～シルト(炭化物を含む)
 - 16 10BG6/1青灰色と、5Y4/1灰色シルト～粘土(炭化物をまれに含む)
 - 17 10Y6/1灰色～N6/0灰色細砂混じり粘土～シルト
- 710溝中層
 - 18 N7/0灰白色～5Y6/1灰色細砂混じりシルト～粘土
 - 19 5Y6/1灰色細砂混じり粘土～シルト(炭化物・青灰色粘土ブロックを含む)
 - 20 5Y8/1灰白色細砂と、5Y6/1灰色シルト～粘土(ラミナあり。青灰色粘土ブロックを含む。層下方ほど砂の割合多い)
 - 21 N6/0灰色～10BG6/1青灰色細砂混じり粘土～シルト(粗砂をわずかに含む)
 - 22 5Y8/1灰白色～5Y6/1灰色細砂～粗砂(ラミナあり。0.5cmの白色礫・木質遺物を含む)
 - 23 7.5Y7/1～7.5Y8/1灰白色粗砂～細砂(ラミナあり。0.5cmの白色礫・木質遺物を含む)
 - 24 7.5Y6/1灰色～7.5Y8/1灰白色粗砂～細砂(ラミナあり。層下方ほど砂粒大)
 - 25 5Y8/1灰白色～5Y6/1灰色粗砂～細砂(ラミナあり。0.5cmの白色礫を多く含む。木質遺物を含む)
 - 26 7.5Y6/1灰色～7.5Y8/1灰白色粗砂～シルト(ラミナあり。0.5cmの白色礫・木質遺物を多く含む)
 - 27 10BG6/1青灰色～5Y6/1灰色シルト～細砂(木質遺物を含む)
 - 28 7.5Y6/1灰色～7.5Y7/1灰白色粗砂～粗砂(粗砂ブロック・木質遺物を含む)
 - 29 10BG7/1明青灰色～7.5Y5/1灰色シルト～細砂(細砂ブロックを含む。南側ほど粘土強い)
 - 30 7.5Y6/1灰色～7.5Y7/1灰白色粗砂～細砂(0.5cmの白色礫・木質遺物を多く含む)

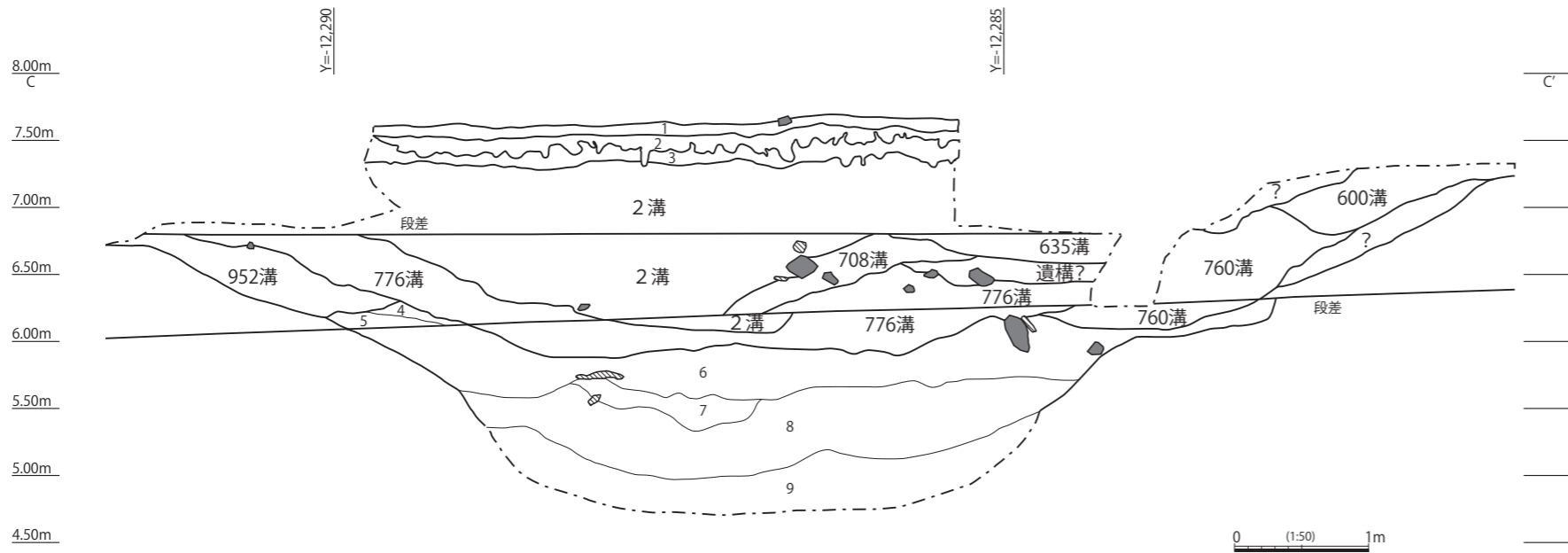
- 710溝上層
 - 31 5BG6/1青灰色～7.5Y6/1灰色細砂～シルト(木質遺物を含む)
 - 32 10BG6/1青灰色～7.5Y5/1灰色シルト(ラミナあり)
 - 33 5Y7/1灰白色～5Y6/1灰色粗砂～細砂(ラミナあり。木質遺物・0.5cmの白色礫を含む。北側に木質遺物多い)
 - 34 5Y7/1灰白色～5Y8/1灰白色細砂～粗砂(ラミナあり。0.5cmの白色礫を含む)
 - 35 5Y7/1灰白色粗砂～細砂(ラミナあり。青灰色粘土ブロックを含む)
 - 36 5BG6/1青灰色～7.5Y6/1灰色シルト～細砂(ラミナあり)
 - 37 N6/0灰色細砂混じりシルト～粘土
 - 38 N6/0灰色～N7/0灰白色粘土～シルト(灰白色粘土ブロックをごくまれに含む)
 - 39 2.5Y7/1灰白色シルト～粘土
 - 40 5Y3/1オリーブ黒色シルト～粘土(わずかに細砂を含む。木質遺物を含む)
 - 41 5Y7/1灰白色～5Y6/1灰色細砂～シルト(ラミナあり。灰白色細砂ブロック・青灰色粘土ブロック・木質遺物を含む。南側ほど粒度が小さく、北側に木質遺物多い)
 - 42 10BG7/1明青灰色～5Y5/1灰色と、5Y7/2灰白色細砂～シルト(北側にラミナあり。細砂ブロックを含む。南側に粘土ブロック含む)
 - 43 10BG7/1明青灰色シルト～粘土と、5Y7/2灰白色細砂～粗砂
- 710溝中層
 - 44 5Y7/1灰白色～5Y8/1灰白色細砂～粗砂(ラミナあり。木質遺物含む)
 - 45 5Y7/1灰白色～5Y5/1灰色細砂～粗砂(ラミナあり。木質遺物含む。南側に青灰色シルト含む)
 - 46 5Y7/1灰白色～5Y6/1灰色細砂～粗砂(ラミナあり。木質遺物・0.5cmの白色礫を含む)
 - 47 5Y5/1灰色細砂～粗砂(木質遺物・青灰色粘土ブロックを含む)
 - 48 5Y7/1灰白色～5Y5/1灰色細砂～シルト(ラミナあり。粗砂・木質遺物を含む)
 - 49 7.5Y5/1灰色～5Y7/1灰白色細砂～シルト(ラミナあり。木質遺物・粗砂を含む)
- 710溝下層
 - 50 10BG6/1青灰色～5Y6/1灰色シルト～粘土(粗砂ブロックを含む。灰色土ブロックをまれに含む)
 - 51 10BG6/1青灰色シルト～粘土(粗砂ブロックをまれに含む)
 - 52 5Y7/1灰白色～8/2灰白色細砂～粗砂(ラミナあり。木質遺物を含む)
 - 53 5Y7/1灰白色～10BG6/1青灰色細砂(710溝の肩に沿うように縦方向にラミナあり。木質遺物を多く含む。粗砂・粘土ブロック含む。風倒木痕?)
 - 54 5Y8/2～7.5Y7/1灰白色粗砂～細砂(ラミナあり。木質遺物を含む)
 - 55 5Y4/1灰色～10Y7/1灰白色シルト～粘土
 - 56 10Y6/1灰色～5Y4/1灰色細砂～シルト(ラミナあり。粗砂・木質遺物を含む)
 - 57 N7/0灰白色～5Y8/2灰白色粗砂～粗砂(ラミナあり。木質遺物・0.2～0.5cmの白色礫を含む)
 - 58 10Y6/1灰色～5Y3/1オリーブ黒色細砂～シルト(ラミナあり。木質遺物・0.2～0.3cmの白色礫・粘土ブロックを含む)

第IV-8-3図 710溝土層断面 (A-A')



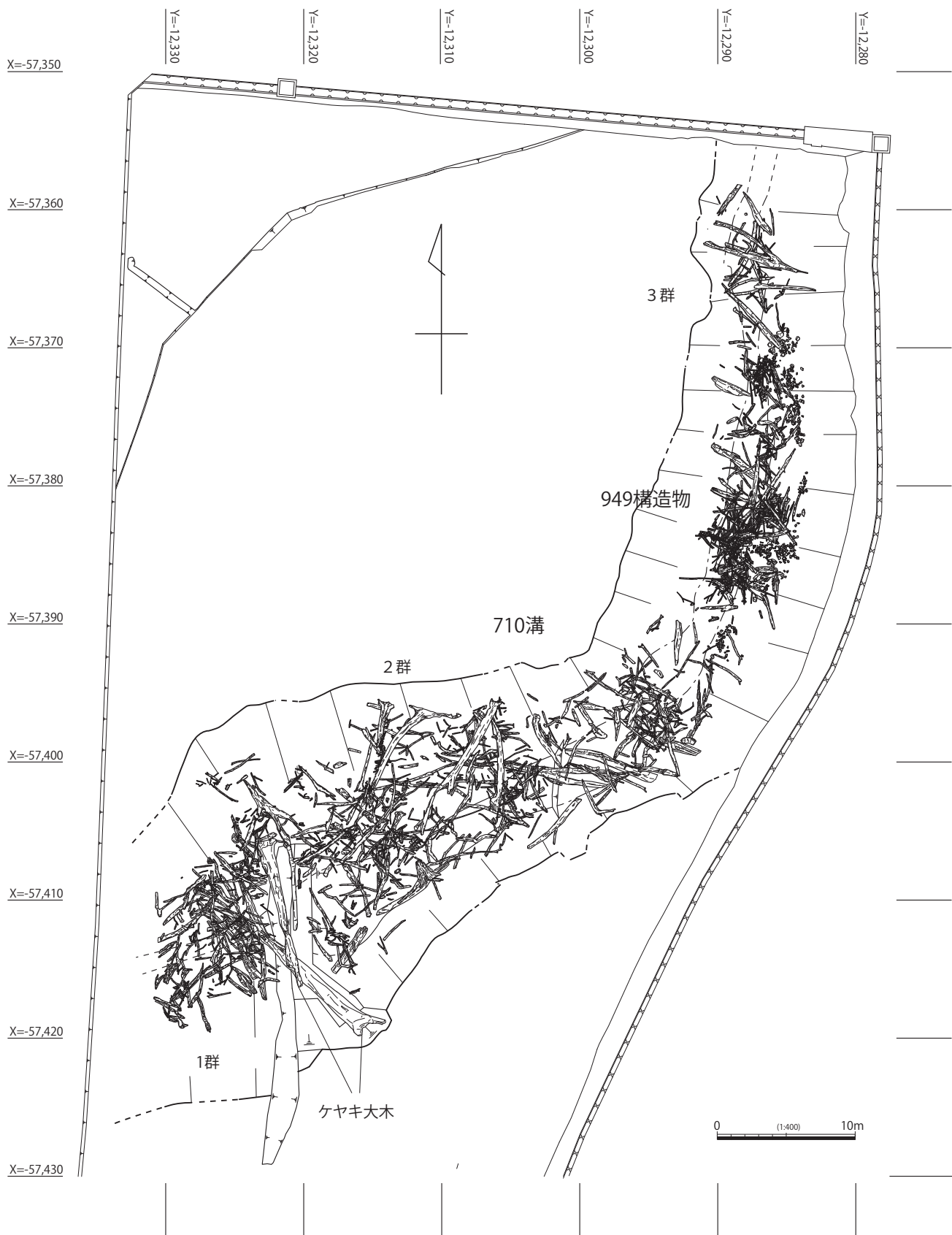
- 第4a層
 - 1 5B6/1青灰色 粘土～シルト (炭化物を含む。1.0~3.0cmの青灰色粘土ブロックを多く含む)
 - 2 5B6/1青灰色 粘土～シルト
 - 3 10BG7/1明青灰色 シルト～細砂 (粘土ブロックをわずかに含む)
 - 4 10YR7/1灰色 粘土～シルト (細砂を含む)
 - 5 10BG6/1青灰色～10BG7/1明青灰色 細砂混じりシルト (粘土ブロック・炭化物をわずかに含む)
- 710溝(上層)
 - 6 5Y6/1灰色 粗砂混じりシルト～粘土 (1.0~2.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを含む。木質遺物わずかに含む)
 - 7 5Y8/3淡黄色～7.5Y8/1灰白色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著。木質遺物・土器を多く含む)
 - 8 5B6/1青灰色～2.5Y5/1黄灰色 シルト～細砂 (ラミナ顕著。層南方で細砂多く、木質遺物を含む)
 - 9 5Y5/1灰色～N6/0灰色 シルト～細砂 (1.0~3.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを多く含む)
 - 10 5B6/1青灰色 粘土～シルト (0.5cm以下の炭化物をわずかに含む)
 - 11 7.5Y8/1灰白色 粗砂～シルト (1.0~5.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを多く含む)
- 710溝(中層)
 - 12 7.5Y8/1灰白色～5Y8/3淡黄色 粗砂～細砂 (7層よりも粗砂少ない。木質遺物を多く含む)
 - 13 10Y7/1灰白色 細砂～粗砂 (ラミナ顕著。木質遺物を含む)
 - 14 5Y5/1灰色～5Y6/1灰色 細砂～シルト (ラミナ顕著。木質遺物・炭化物を含む。粗砂を含む)
 - 15 10YR6/1褐色 細砂～シルト
 - 16 7.5Y6/1灰色 細砂～粗砂 (ラミナ顕著。木質遺物を含む)

- 710溝(中層)
 - 17 N7/0灰白色 粘土～シルト (細砂～粗砂をまばらに含む)
 - 18 7.5Y5/1灰色～7.5Y4/1灰色 細砂～シルト (ラミナあり。木質遺物・1.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを多く含む)
 - 19 5Y6/1灰色 細砂混じりシルト (0.5cm以下の炭化物をわずかに含む)
 - 20 10BG6/1緑灰色 細砂～シルト
 - 21 7.5Y8/1灰白色～7.5Y8/2灰白色 粗砂～細砂 (木質遺物を含む)
 - 22 7.5Y8/2灰白色～5Y5/1灰色 細砂～シルト (木質遺物を多く含む。層最下で5Y8/3淡黄色粗砂～細砂を含む)
 - 23 7.5Y8/1灰白色 細砂 (木質遺物を含む)
 - 24 10Y8/2灰白色 細砂～粗砂と、7.5Y5/1灰色 シルトの互層 (木質遺物を多く含む)
 - 25 5G6/1緑灰色～7.5Y8/2灰白色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著。木質遺物を多く含む。径20cmをこえる大型の木材を含む)
 - 26 5B6/1青灰色 細砂～シルト (ラミナ顕著。木質遺物を含む)
- 710溝(下層)
 - 27 7.5Y7/1灰白色～7.5Y6/1灰色 細砂～シルト (ラミナが乱れており、木質遺物を多く含む)
 - 28 7.5Y8/2灰白色～7.5Y8/1灰白色 細砂～粗砂
 - 29 5Y6/1灰色 シルト～細砂 (ラミナあり。青灰色と淡黄色の細砂を含む)
 - 30 2.5Y5/1黄灰色 シルト～細砂 (青灰色の細砂を含むがラミナが乱れている。層下方に木質遺物を多く含む)
 - 31 7.5Y8/1灰白色 粗砂～細砂 (層上方に木質遺物を多く含む)
 - 32 7.5Y8/1灰白色 細砂 (7.5Y6/1灰色粘土ブロックを帯状に含む)

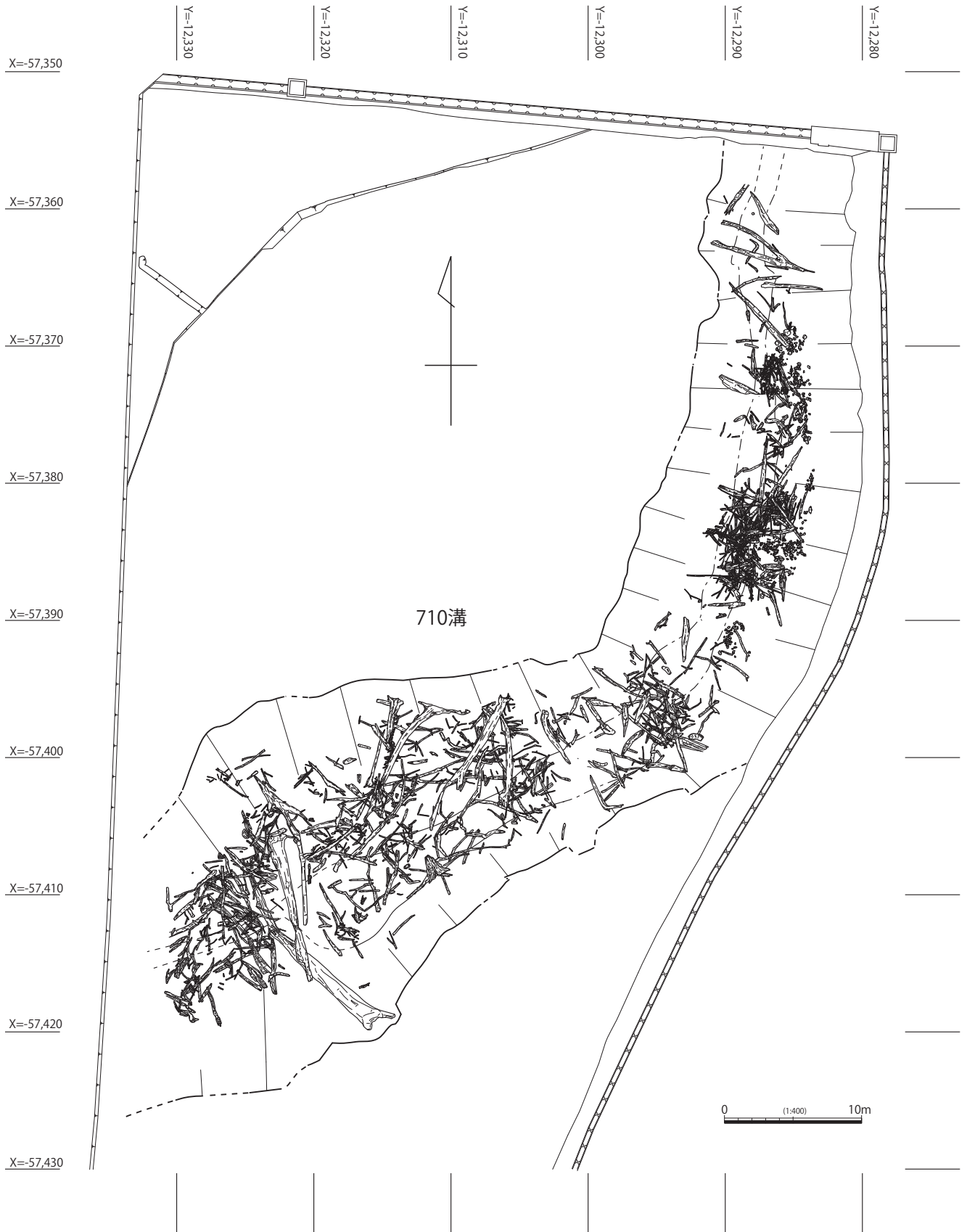


- 第2a層
 - 1 2.5Y8/1灰白色 シルト～粗砂 (0.2~1.0cmの白色礫を含む)
- 第3-1-1a層
 - 2 2.5Y5/1黄灰色 細砂混じりシルト (0.2cmの白色礫をまばらに含む)
- 第3-1-2a層
 - 3 2.5Y4/1黄灰色 細砂混じり粘土～シルト (炭化物をわずかに含む)
- 710溝上層
 - 4 5Y4/1灰色
 - 5 5Y4/1灰色～5Y7/1灰白色
 - 6 5Y7/1灰白色 粗砂～細砂 (ラミナあり。木質遺物・0.5~2.0cmの礫を含む)
 - 7 5Y7/1灰白色～5Y6/1灰色 細砂 (ラミナあり。木質遺物を多く含む)
- 710溝中層
 - 8 5Y7/1～N7/0灰白色 細砂～粗砂 (ラミナあり。木質遺物を含む)
 - 9 7.5Y7/1～5Y7/2灰白色 粗砂～細砂 (ラミナあり。木質遺物・0.5cmの礫を含む)

第IV-8-4図 710溝土層断面 (B-B' C-C')



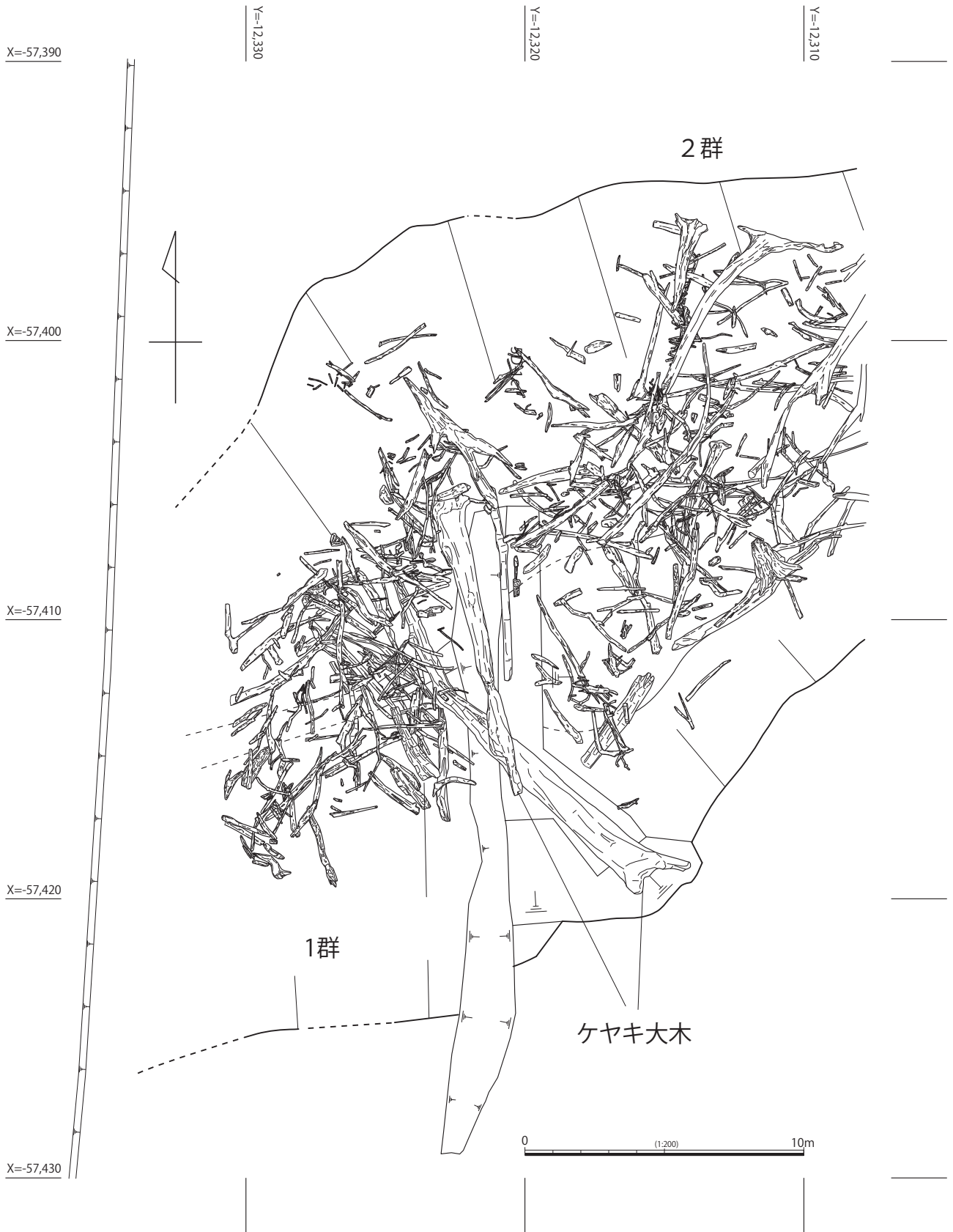
第IV-8-5 図 710 溝木材検出状況



第IV-8-6 図 710 溝上層出土木材検出状況



第IV-8-7 図 710 溝中層出土木材検出状況



第IV-8-8 図 710 溝上層出土木材 1群



第IV-8-9図 710溝上層出土木材 2群

第IV-8-1表 710 溝出土木材数量

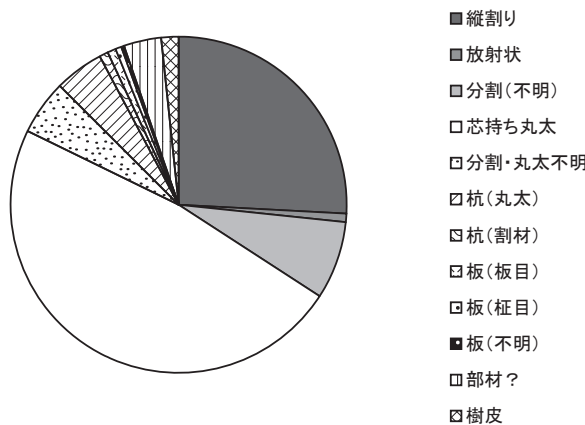
		1群	2群	3群	全体
分割材	縦割り	26	64	10	100
	放射状	1	1	1	3
	分割(不明)	9	14	7	30
	合計	36	79	18	133
芯持ち丸太		62	101	23	186
分割・丸太不明		2	8	11	21
製品	杭(丸太)	2	9	7	18
	杭(割材)	0	3	0	3
	板(板目)	0	2	1	3
	板(柁目)	2	0	0	2
	板(不明)	0	2	0	2
	部材?	4	8	1	13
	合計	8	24	9	41
樹皮		0	7	0	7
合計		108	219	61	388

⑥ 1・2・3群出土の木材

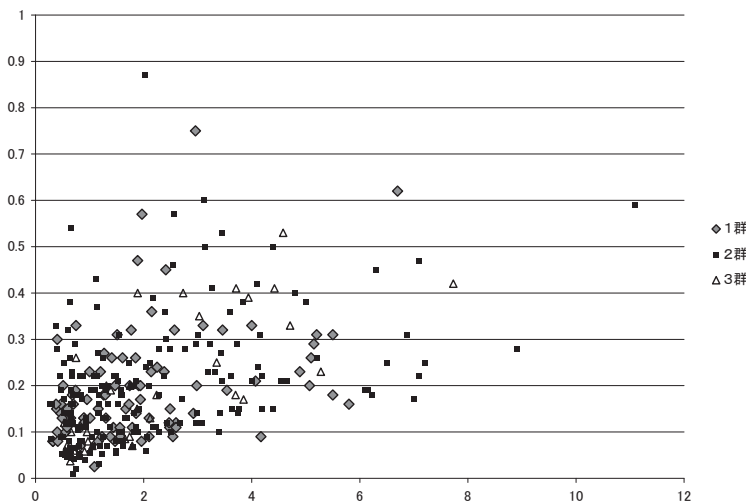
各群から出土した木材を、分割材、芯持ち丸太、板材を含む製品に分類し、法量を比較した〔表IV-8-1表、第IV-8-10・11図〕。以下、分類、分析の結果をもとに、各群における出土木材の傾向について述べる。なお、出土した木材は、調査中に現地で観察、記録を行い、全量を持ち帰ることができない木材については、断面観察と樹種同

定のためのサンプルを切り取り、持ち帰った。また、整理作業において、サンプルの再観察を行い、調査中に作成した記録と所見に修正を加えた。

1群〔第IV-8-8図〕 1群からは、取り上げた木材の約3割に相当する木材が出土している。最大のものには、約7mの長さで伐採された直径約0.6mの丸太材があるが、主体を占めるのは2m以下の



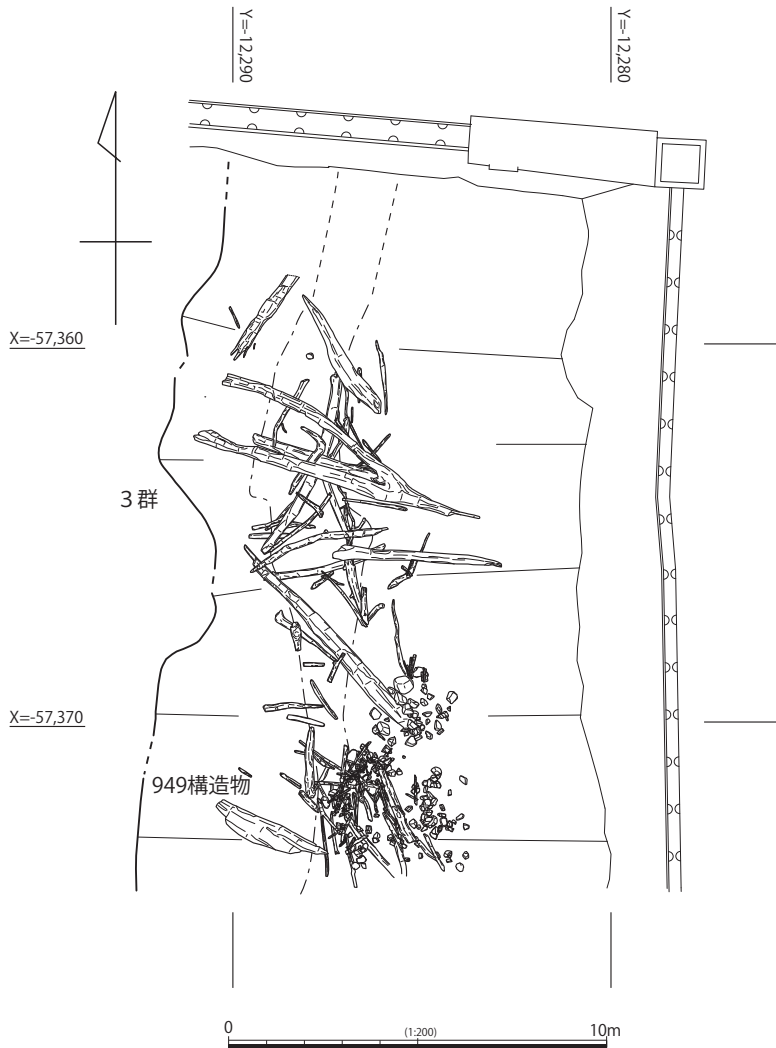
第IV-8-10図 710 溝出土木材加工法内訳



第IV-8-11図 710 溝出土木材法量分布

長さの木材に伐採され、直径ないし分割された幅が0.3m以下の木材である。約半数に加工痕が観察できた。1群からは、器面が摩滅していない土器が多量に出土しており、近隣に居住域の存在がうかがわれる。なお、調査区外にも、まだ、多量の土器や木材が分布しているものと推察される。そのため、この調査で確認した1群出土木材は、1群に分布する総点数ではない。

2群〔第IV-8-9図〕 全体の6割におよぶ多量の木材が出土した。最大のもので、約9mの長さに伐採された、直径約0.3mの丸太材がある。1群同様、主体を占めるのは2m以下の長さの木材に伐採された、直径ないし幅が0.3m以下の木材である。約半数の木材に加工痕が観察できる。1群と比較すると、2群には伐採長が2mを



第IV-8-12 図 710 溝上層出土木材 3群

超える木材が多い。また、1・3群よりも辺材が多く出土している。辺材の類は丸太を分割、加工するさいに生じた木材かもしれない。したがって、2群には、廃棄の対象となった木材が混在している可能性がある。また、丸太材として持ち帰った木材の中に、その後の断面形状の観察により、分割された木材の縁部が水の影響によって磨滅したことで、外見が丸太材のようにみえているものがあることがわかった。2群から出土した木材の中には、長期間、水にさらされていたものが含まれているものと考えられる。

3群〔第IV-8-12 図〕 3群から出土した木材は全体の1割弱である。1群同様、調査区外に続くため、全量は不明である。当群中、最大の木材は、約8m、幅約0.4mに伐採、分割されたものである。1・2群のように直径が0.5mを超えるような木材は出土していない。また、主体

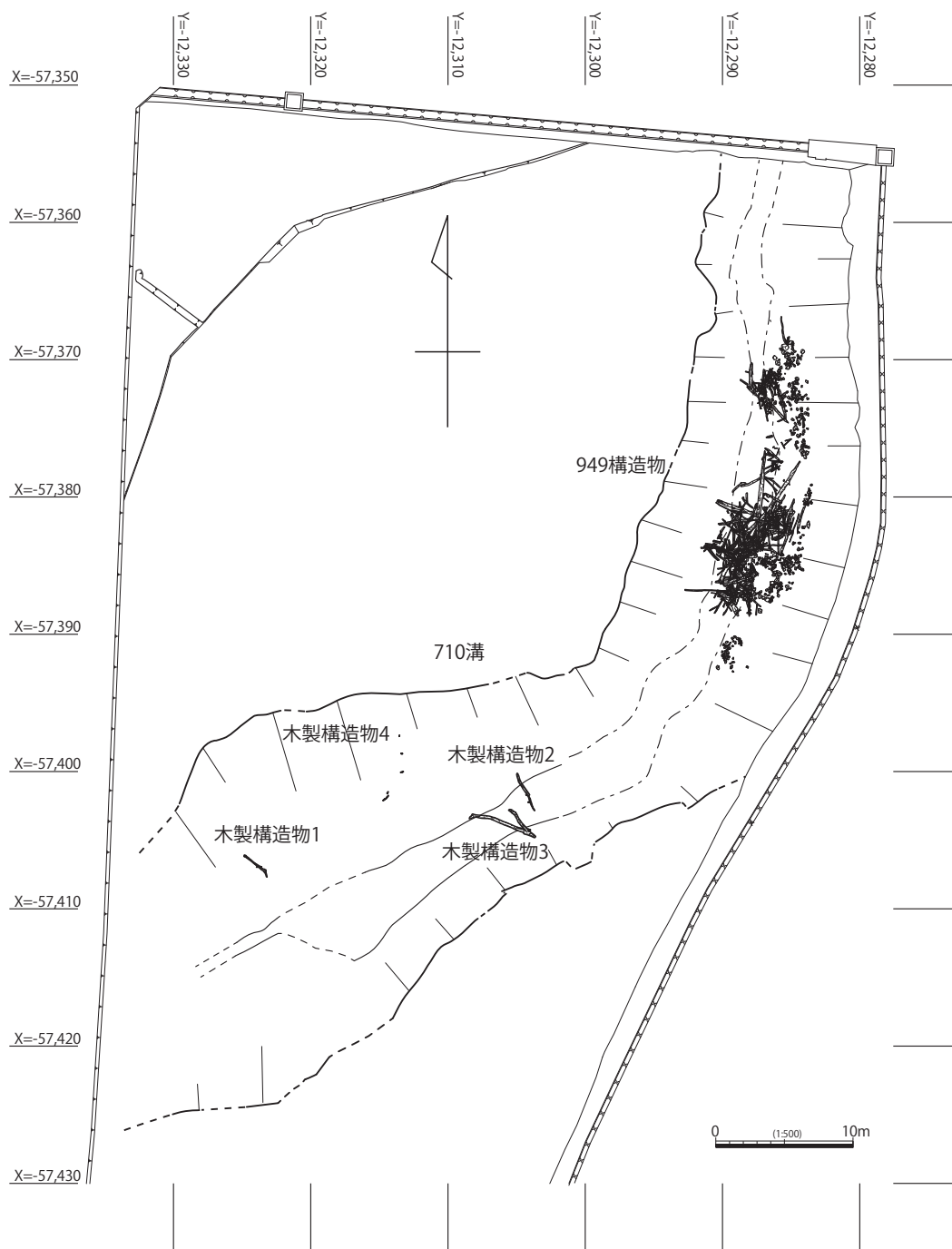
を占めるのは2m以下の長さに伐採された、直径ないし分割された幅が0.2m以下の木材である。直径ないし分割された幅が0.3m前後の木材はとても少なく、0.2m以下と、0.4m前後の木材に2極化する傾向が看取できた。このことから、3群には、直径や幅が選択された木材が集積、貯蔵されていた可能性がある。

また、1群からは斧柄の未製品とカケヤ、2群からは二脚盤と鋤が出土しているが、3群からは製品・未製品は出土していない〔第2分冊図版180-2・3、181-2〕。3群を構成する木材の2極化とあわせて考えるならば、木材の加工を行う場所との関係、または作業段階などによって、木材の集積場所が分けられていた可能性もある。

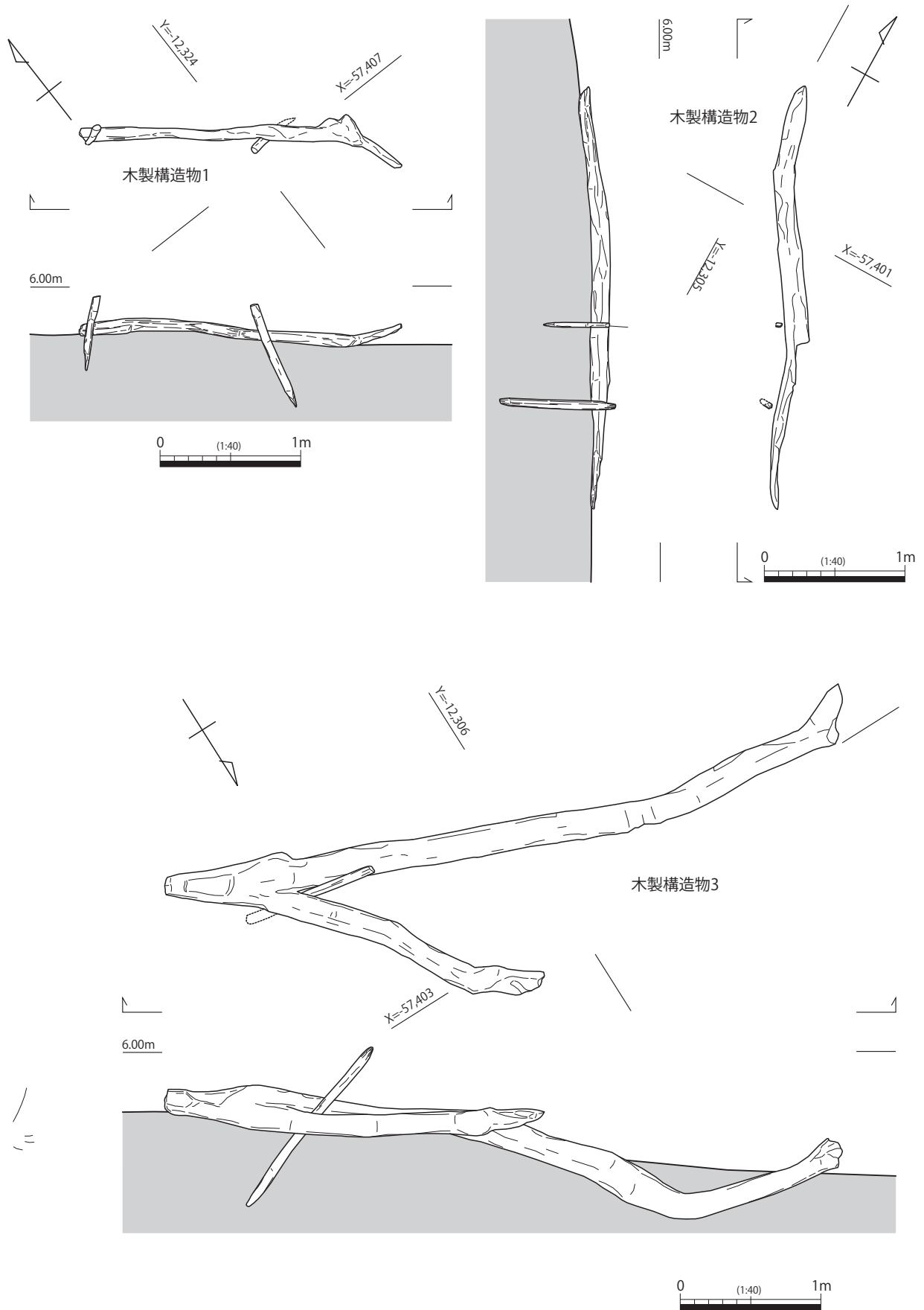
なお、出土した木材のうち、分割された状態で出土したものは、全体の約3割である。分割方法には次のような特徴が認められる。それは、分割された木材の多くが、丸太の外縁部を剥ぎ取るように、縦方向に3ないし2分割されているという特徴である。いわゆるミカン割りされた木材はほとんど確認できない。ただし、板状に加工された木材の中には、柁目板があり、使用目的によって木材の分割方法が選択されていた可能性がある。そして、未成品の出土が限られていることから、木製品を製作する場合は、別の地点に存在するものと考えられる。

(2) 710 溝内の構造物〔第IV-8-13～23 図 図版 182～189-1〕

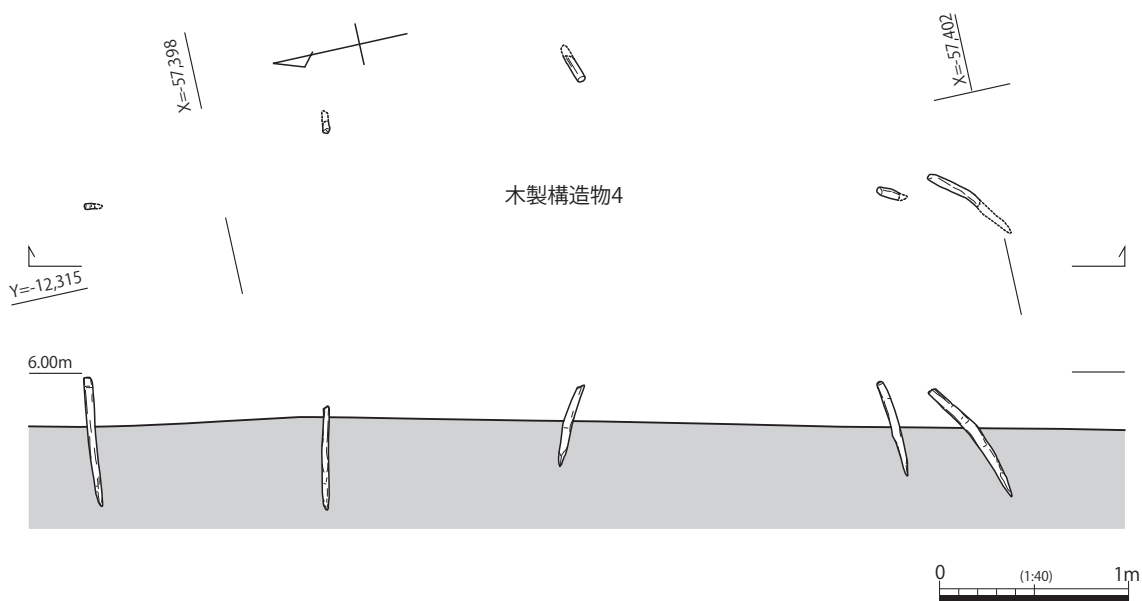
次に710 溝内に設けられていた杭列や木製構造物等について報告する。中でも、出土した木材の2群と3群の境と考えた949 構造物は、人頭大程度の礫を積み上げた土堤状の高まりと杭や横木を組み合わせた堰状の構造物からなるもので、当該期の水利に関わる遺構として注目される。以下、個別の構造物について述べる。なお、調査中に個別に遺構番号を付さなかった木製構造物については、木製構造物1～4として報告を行う。



第IV-8-13 図 710 溝内木製構造物検出状況



第IV-8-14 図 710 溝内木製構造物 1～3 平・立面



第IV-8-15 図 710 溝内木製構造物4 平・立面

木製構造物1〔第IV-8-13・14 図上段左 第2分冊図版182-1〕

710 溝の壁面の中ほど、X=-57,407、Y=-12,324 ライン付近で検出した構造物である〔第IV-8-13 図〕。中層上面、または上層が堆積する過程で設置されたもので、壁面の傾斜は緩く、その中で平坦な場所に2本の杭が打ち込まれ、1本の横木が組み合わされていた〔第IV-8-14 図上段左〕。杭は、長さ0.6～0.8 m、径5 cmほどの芯持ち丸太材で、2本の杭の間隔は1.2 mである。構造物は北西-南東方向に設置されており、長さ2.3 m、径8 cmほどの芯持ち丸太材が横木として組み合う。

木製構造物2〔第IV-8-13・14 図上段右 第2分冊図版182-2〕

X=-57,401、Y=-12,305 ライン付近で検出した構造物である〔第IV-8-13 図〕。710 溝の流芯近くに設置されていた。上層掘り下げ中に検出した。中層上面、または上層が堆積する過程で設置されたものである。長さ0.4～0.8 m、径6 cmの芯持ち丸太材の杭2本が、北西-南東方向に打ち込まれている〔第IV-8-14 図上段右〕。2本の杭の間隔は0.6 mで、長さ3 m、径0.1 mの芯持ち丸太材が組み合わさる。構造は木製構造物1とよく似ている。

木製構造物3〔第IV-8-13・14 図下段 第2分冊図版183-1〕

X=-57,403、Y=-12,306 ライン付近で検出した構造物である〔第IV-8-13 図〕。710 溝の流芯近くに設置された構造物である。上層掘り下げ中に検出した。中層上面、または上層が堆積する過程で設置されたものである。木製構造物2とほぼ同じに検出したもので、設置時期も近似する可能性がある。木製構造物1・2とは構造が異なり、1本の杭で二股に分かれた木材を固定している〔第IV-8-14 図下段〕。杭は長さ1.4 m、径8 cmほどの芯持ち丸太材、又木は、最大径0.3 m、長さ5 mほどの芯持ち丸太材である。股木の、枝分かれ部分に杭があり、木材を組み合わせた構造物ではなく、杭で水中に固定された木材かもしれない。

木製構造物4〔第IV-8-13・15図 第2分冊図版183-2・184-1〕

X=-57,400、Y=-12,315 ライン付近で検出した構造物である〔第IV-8-13図〕。710溝北側法面、木製構造物1より北東へ10mほどの位置にある。木製構造物1と同様、緩く傾斜する壁面のほぼ平坦な場所に設置されている。壁面に対して垂直の方向に5本の杭が打ち込まれている〔第IV-8-15図〕。杭の長さは0.4～0.7mで、いずれも径5cmほどの芯持ち丸太材である。壁の高い側に打ち込まれた3本の杭の間隔は各1.3mほどである。この3本はほぼ南北方向に直線的に並ぶが、壁の低い側にある杭は少し方向が西側にふれており、全体ではやや弧状を呈す並びとなっている。

949 構造物と杭列等〔第IV-8-13・16～23図 巻頭図版10-2 第2分冊図版184-2～189-1〕

調査地東端、X=-57,370～390、Y=-12,280～-12,295 ライン間において、人頭大の礫を積み上げた土堤状の高まりと、木材が組み合う構造物を検出した〔第IV-8-13・16図〕。この構造物に伴う木材は、埋土上層を掘り下げる過程で確認したものである。

土堤状の高まり 礫を積み上げた土堤状の高まりは、2～3mの広がりを持ち、東の壁面側から西に向かって突出する張り出しが3カ所に認められる。

まず、最も規模の大きな張り出しは、X = -57,385 ラインあたりに設けられているもので、東側の壁面から西に向かって舌状に突出している（以下、突出部1）。この高まりは、710溝内に中層〔第IV-8-20図6～10層〕が堆積した後、6・8・9層上部に人頭大の礫を積みあげ、さらに4・5層をその上に盛ったものである〔第IV-8-20図4・5層〕。この高まりを構築することで、中層上面において6m弱あった川幅が、X=-57,380～385ラインにおいては、幅2m程となっている。また、この高まりと、西側の壁面との間には多くの木材があり、この周囲には杭列1・2・4～9が存在していた〔第IV-8-17図〕。この舌状の突出部が、水の流れを遮り、水量、水流を調整するためのものならば、この周囲に点在する杭列も、水利施設として設けられたものと考えられる。

この高まりよりも北側では、再び川幅が広がるが、X=-57,370～374ライン間には、溝の東側から西に向かって人頭大の礫が集積されて、川幅が狭まっている（以下、突出部2）。張り出しはX = -57,385ラインほど明瞭ではないが、ここにも杭列3・10が伴っている。この付近も水の流れを調整し、何かを行うための施設だったものと推測される。

X = -57,390ラインあたりにも、東側に2m程、突出する部分がある（突出部3）。しかし、この付近には木材が散漫で、杭列なども認められなかった。

木材等の出土状況と杭列 上層を掘り下げるさい、木材や木製構築物、杭列などを、3段階に分けて記録した〔以下、上から第1段階、第2段階、第3段階、第IV-8-17～19図〕。

第1段階に記録した木材は〔第IV-8-17図〕、突出部1よりも北側に木材が集中しており、長さ3～7mをはかる比較的大型の木材が南北方向に横たわる状態で出土したものが多し。突出部2の西側には、長さ1～2mほどのやや小ぶりの木材があった。また、杭列1～10はいずれも、第1段階の記録面において検出されたものだが、この全てが同時期に設けられ、機能していたものか否かは判然としない。

このうち杭列1・2・4～9が突出部1に伴う。杭列1は突出部1の突端から710溝の西壁に向かって構築されている。横木と杭が組み合っており、水の流れを塞ぐために設けられた堰として機能して

いた可能性が高い〔第Ⅳ-8-21 図 巻頭図版 10-2〕。突出部 1 により幅を狭め、杭列 1 により水流や水量の調整を行っていたものと考えられる。杭列 8 は板状の木材と杭が並ぶもので、杭列 1 の北側にある〔第Ⅳ-8-23 図左中〕。杭列 1 に対して直行する方向にあるが、どういう機能を果たしていたのかはわからない。杭列 2 は上部に木材が重複しており、第Ⅳ-8-17 図では平面的な並びが確認しにくい。上部の材を取り上げると、北東から南西方向に一列に並ぶ杭列が確認できた〔第Ⅳ-8-22 図左上〕。また、杭列 4～7 は、流芯から東側にあり、特に杭列 4 は突出部 1 の南側裾部、杭列 7 は北側裾部にあることから、突出部 1 の護岸の役割を果たしていたのかもしれない。杭列 4 はほぼ等間隔に杭が一列に並ぶ〔第Ⅳ-8-22 図左下〕。杭列 5 はもとは一列に並んでいたとみられる杭が 4 本確認できた〔第Ⅳ-8-22 図右下〕。杭列 6 は角材を伴うもので、列をなすが杭が密に打ち込まれていた〔第Ⅳ-8-23 図左上〕。杭列 7 は横木を杭で挟み込むもので、杭は横木を介して交互に 3 本打ち込まれていた〔第Ⅳ-8-23 図右上〕。

一方、杭列 3・10 は突出部 2 に伴う。杭列 3 は、杭を列状ではなく、群をなすように打ち込んだもので、礫を用いて根固めをしている〔第Ⅳ-8- 右上〕。これに対し、杭列 10 は突出部 2 の突端から西に向かって延びる横木を杭で留めている。これも堰状の構造物だった可能性がうかがわれる。

なお、杭列に用いられている木材には、710 溝内で検出している他の構造物（木製構造物 1～4）と異なり、芯持ち丸太材だけでなく、大型の割材等が杭、矢板、横木に使用されているものが多い。また、杭列の多くは、杭が一定の範囲に緊密に打設されていたものが多い。こうした点も、杭の間隔が広い木製構造物 1～4 と異なっている。

第 2 段階として記録した木材は、X=57,380 ラインよりも南側に集中しており、突出部 1 の張り出しに沿うように大型の木材が分布していた〔第Ⅳ-8-18 図〕。第 1 段階で検出した杭列のような構造物は確認できなかった。ただし、出土した木材の中には、枝が二股に分かれた木材もあるので、この付近に構造物が設けられていた可能性がある。

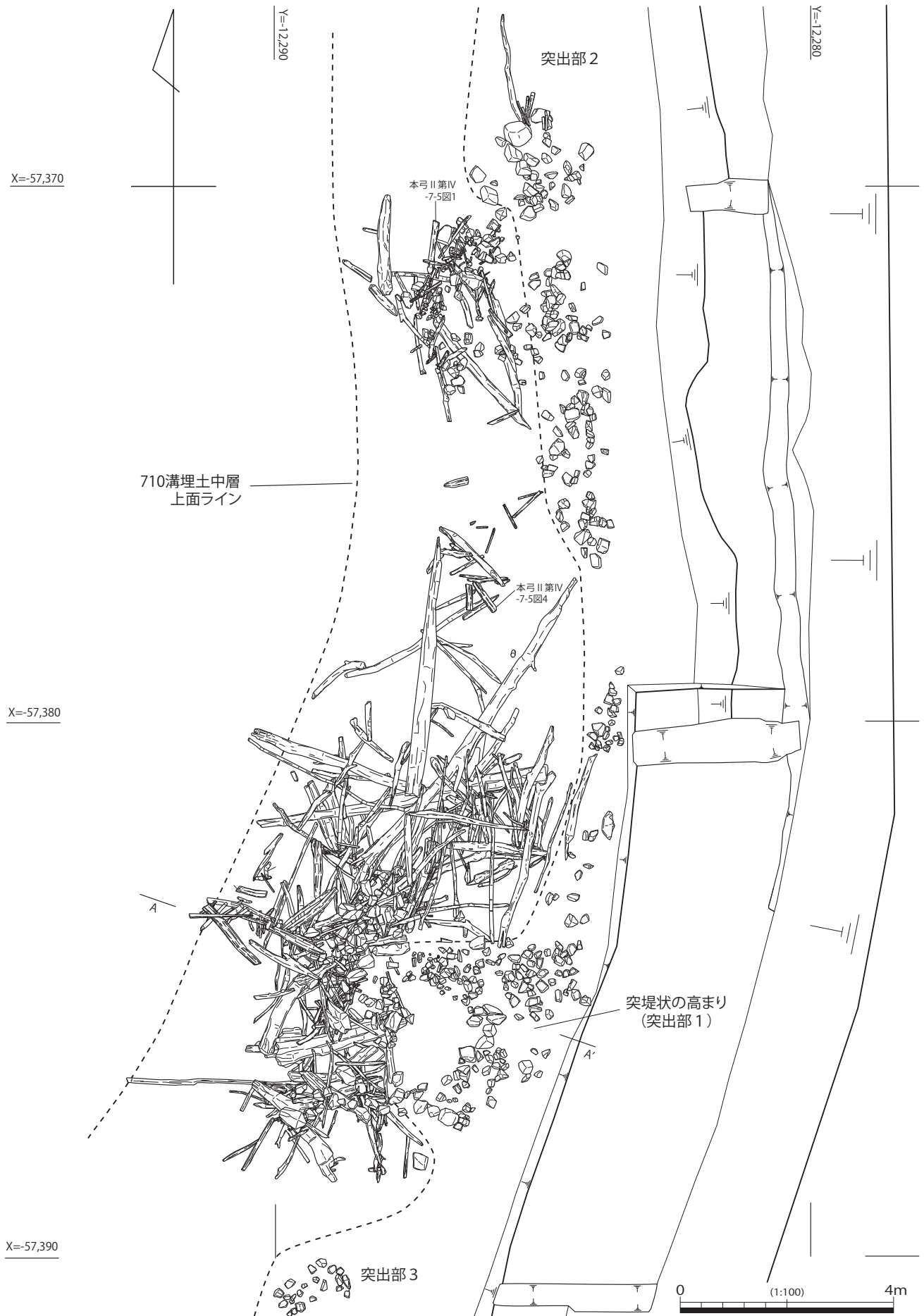
また、第 3 段階として記録した木材は、第 1・2 段階のものに比べて小型で、量も少ない〔第Ⅳ-8-19 図〕。木材の出土範囲は第 2 段階と似ている。突出部 1 の張り出しよりやや南よりに、1 本の細長い木材があり、その付近に短い丸太材が集中していた。全く形状を留めていないが、もともと、堰のような構造物が存在した可能性がある。

第 2 段階、第 3 段階には明確な構造物を確認できなかった。しかし、散在する木材の出土状況には、もともと構造物が存在した可能性を示唆するものがある。これらが構造物の残骸だとすれば、第 1 段階に記録した杭列等が設置される以前にも、突出部 1 に伴う構造物が存在したことが推定できる。第 2 段階、第 3 段階においても、水流や水量の調整などがおこなわれていたのではなかろうか。

以上、土状の高まりとして認識した遺構は、突出部 1 に付帯して設定された堰状の構造物により、水の調整が行われてたものとする。当該期の水田遺構を検出することはできなかったが、この付近に水を供給するための施設だったのかもしれない。また、710 溝が木材の集積場として機能していたことを勘案すると、木材を貯蔵するために必要な水量を調整する役割をはたしていたものとする。なお、949 構造物の付近からは、ほとんど土器が出土してない。唯一、時期のわかる土器片に、4C-8i 区において 710 溝埋土上層から出土した弥生時代前期の壺の胴部片〔第Ⅴ-16-7 図〕がある。

（3）710 溝で検出した溝

710 溝の上層を掘削中に、710 溝の埋土を掘り込む別の溝を確認した。ただし、いずれも断面にお



第IV-8-16 図 949 木製構造物平面



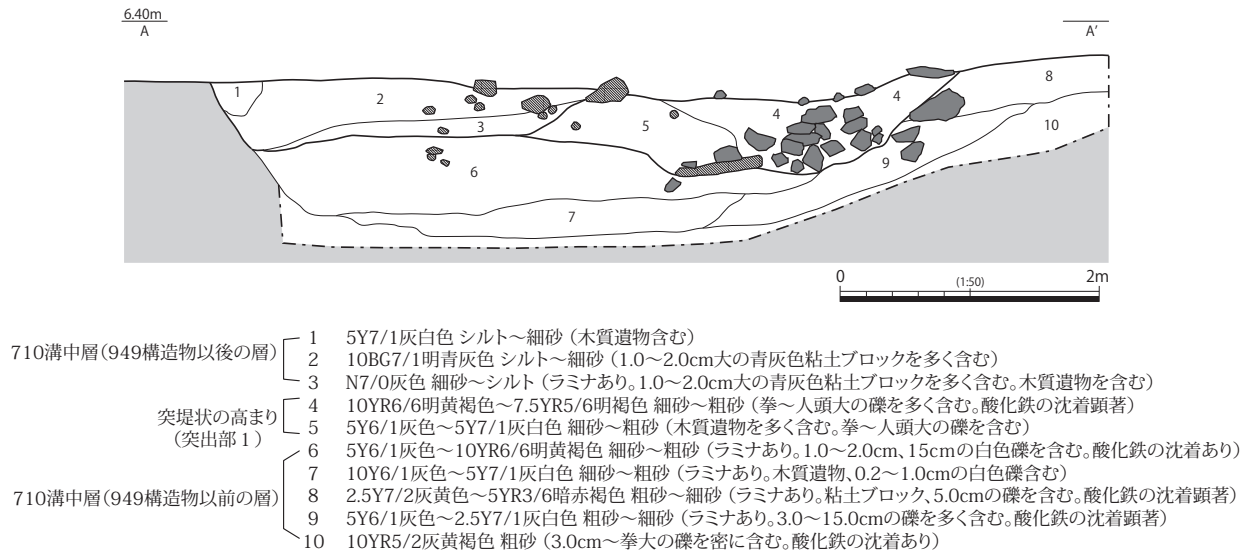
第IV-8-17 図 949 木製構造物第1段階平面



第IV-8-18図 949木製構造物第2段階平面



第IV-8-19図 949木製構造物第3段階平面

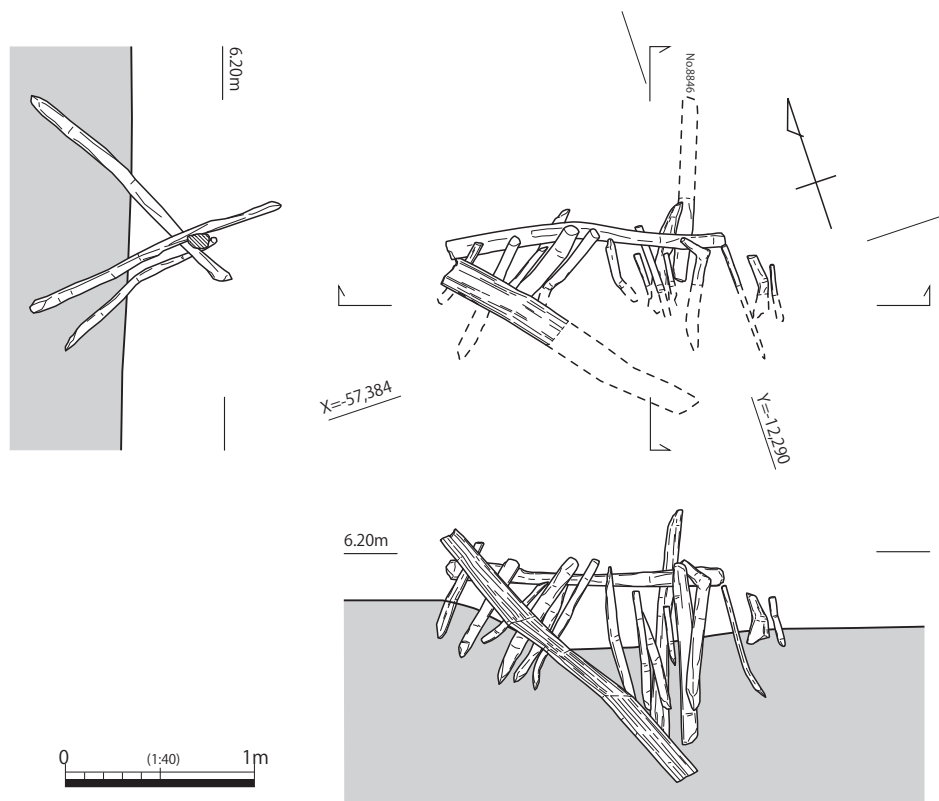


第IV-8-20 図 949 木製構造物土層断面

ける堀方の部分的な確認にとどまり、平面的な検出ができたものはない。710 溝埋没の一過程にある溝もしくは埋没後に掘削された溝と考える。

938 溝

938 溝は、710 溝に設定した土層断面 A-A' (第IV-8-3 図) において確認した。X=57,400 ライン上にある。土層断面により 938 溝の存在を確認した時には、既に 710 溝上層をほぼ掘りきっていたため、全体の様子が判然としませんが、土層断面で

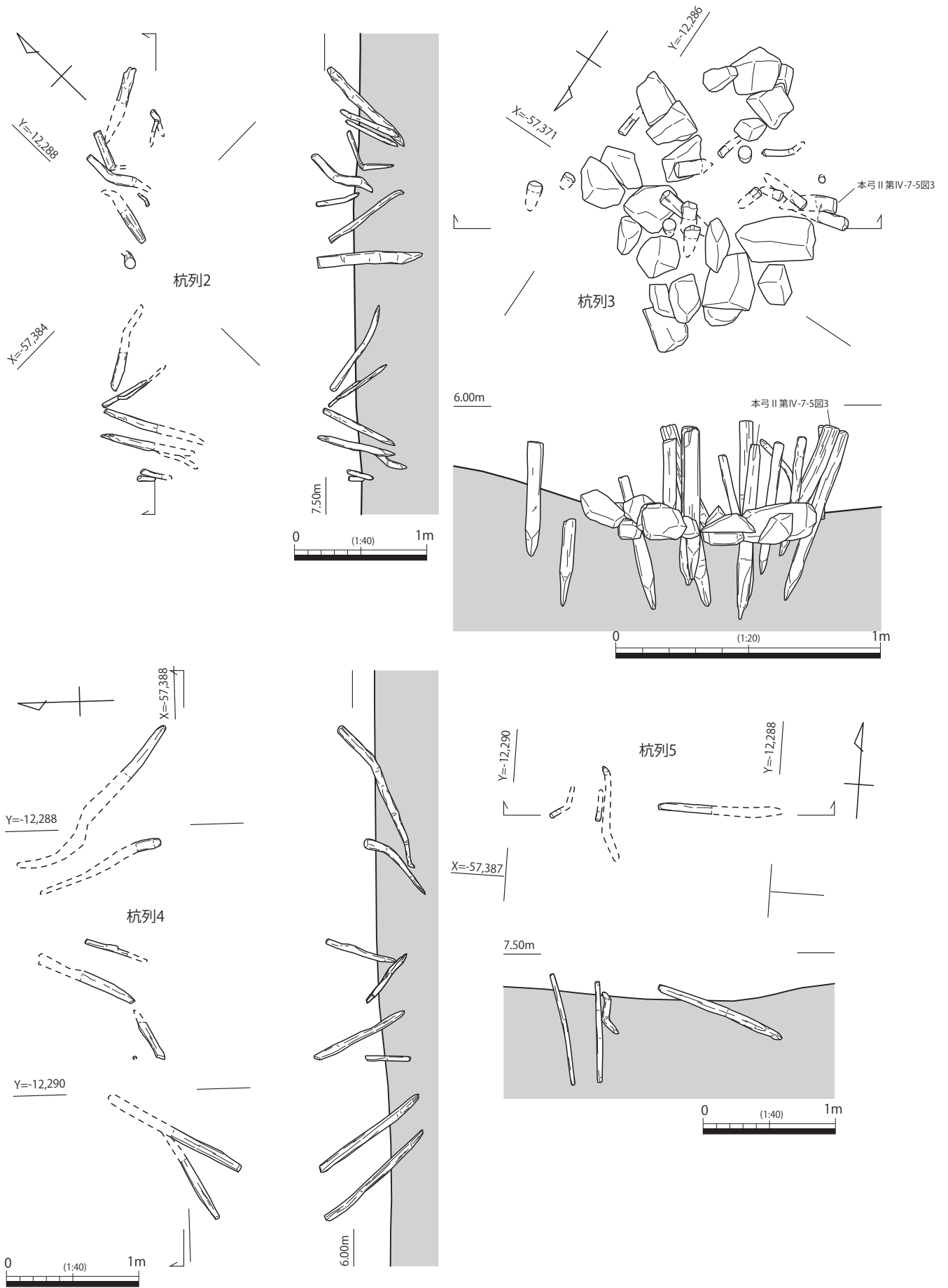


第IV-8-21 図 949 木製構造物杭列1平・立面

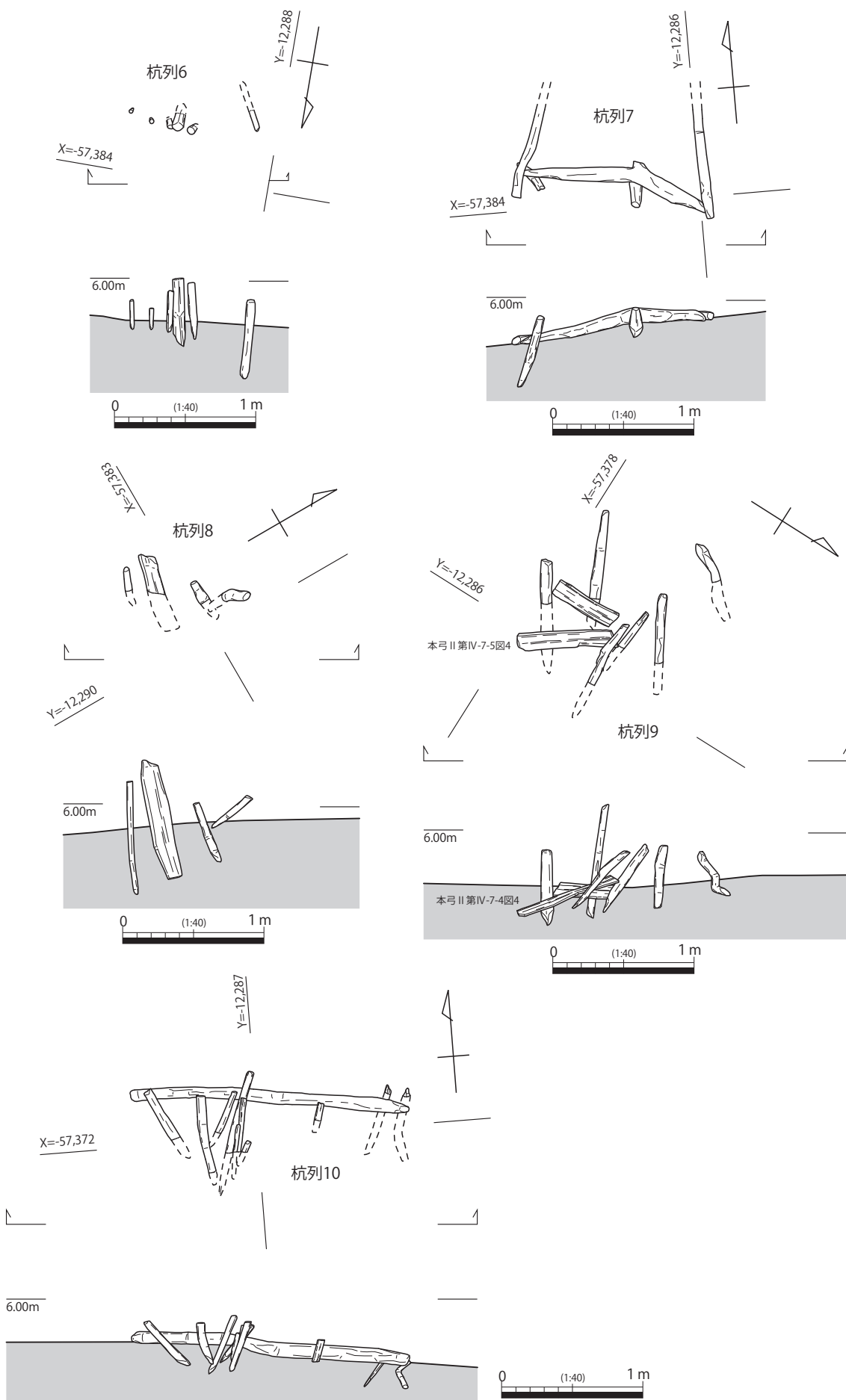
は、第4a層直下であり、710溝を埋める上層を掘り込んでいることが観察された。したがって、第4a層下面検出遺構の中でも新しい時期の遺構と考えられる。最下層にはラミナが認められ、木材等の植物遺体も含まれていた。規模は幅1.9m、深さ0.4m、断面はU字形である。

939 溝 [第IV-8-24 図 第2分冊図版191-1・2]

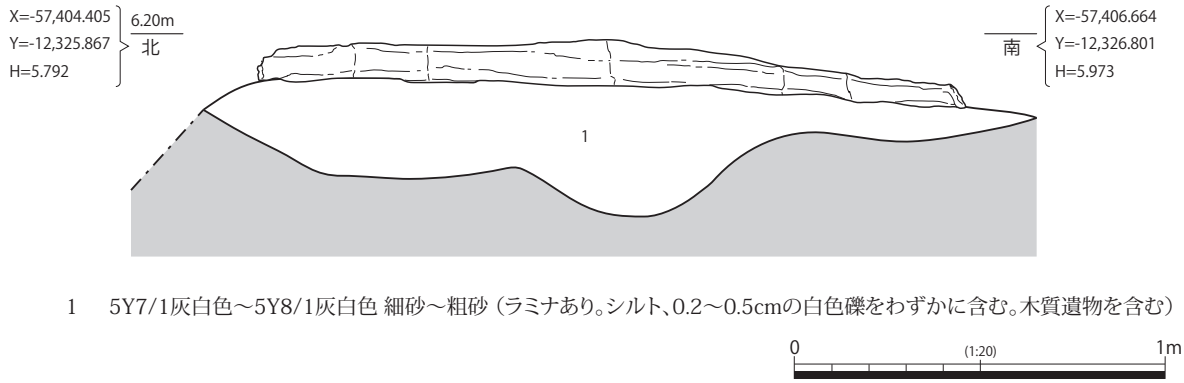
710 溝を埋める上層を掘削中に検出した溝である。5D-1c 区に位置する。土層断面の観察により、710 溝とは別の水の流れを示す単位となる堆積を確認したので、別溝として扱った。幅2.2m、深さ



第IV-8-22 図 949 木製構造物杭列2～5平・立面



第IV-8-23 図 949 木製構造物杭列 6 ~ 10 平・立面



1 5Y7/1灰白色～5Y8/1灰白色 細砂～粗砂 (ラミナあり。シルト、0.2～0.5cmの白色礫をわずかに含む。木質遺物を含む)

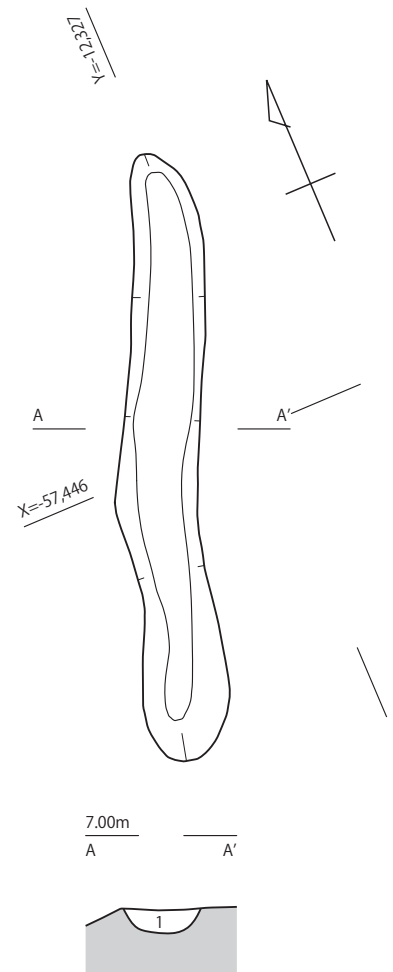
第IV-8-24 図 939 溝土層断面

0.1～0.35 mである。後述する 947 溝と同様に東西方向にのびる溝と考えられる。938 溝よりも、検出した高さ、溝底面の高さは共に低い。710 溝埋土上層を掘り込んでいることは間違いないが、938 溝との新旧関係は不明である。埋土中から弥生時代開始期の土器〔第 V-16-3 図〕が出土した。

(4) その他の溝

934 溝〔第IV-8-25 図 第 2 分冊図版 191-3〕

調査区中央、5D-5c 区に位置する。2 溝底面で検出した。2 溝によって大半を掘削されている。検出できたのは、長さ 1.6 m、幅 0.2 m、深さ 6cm ほどで、北東-南西方向に延びる。断面形状は半円形である。



946 溝〔第IV-8-26・27 図 第 2 分冊図版 192-2・3 : 193-1〕

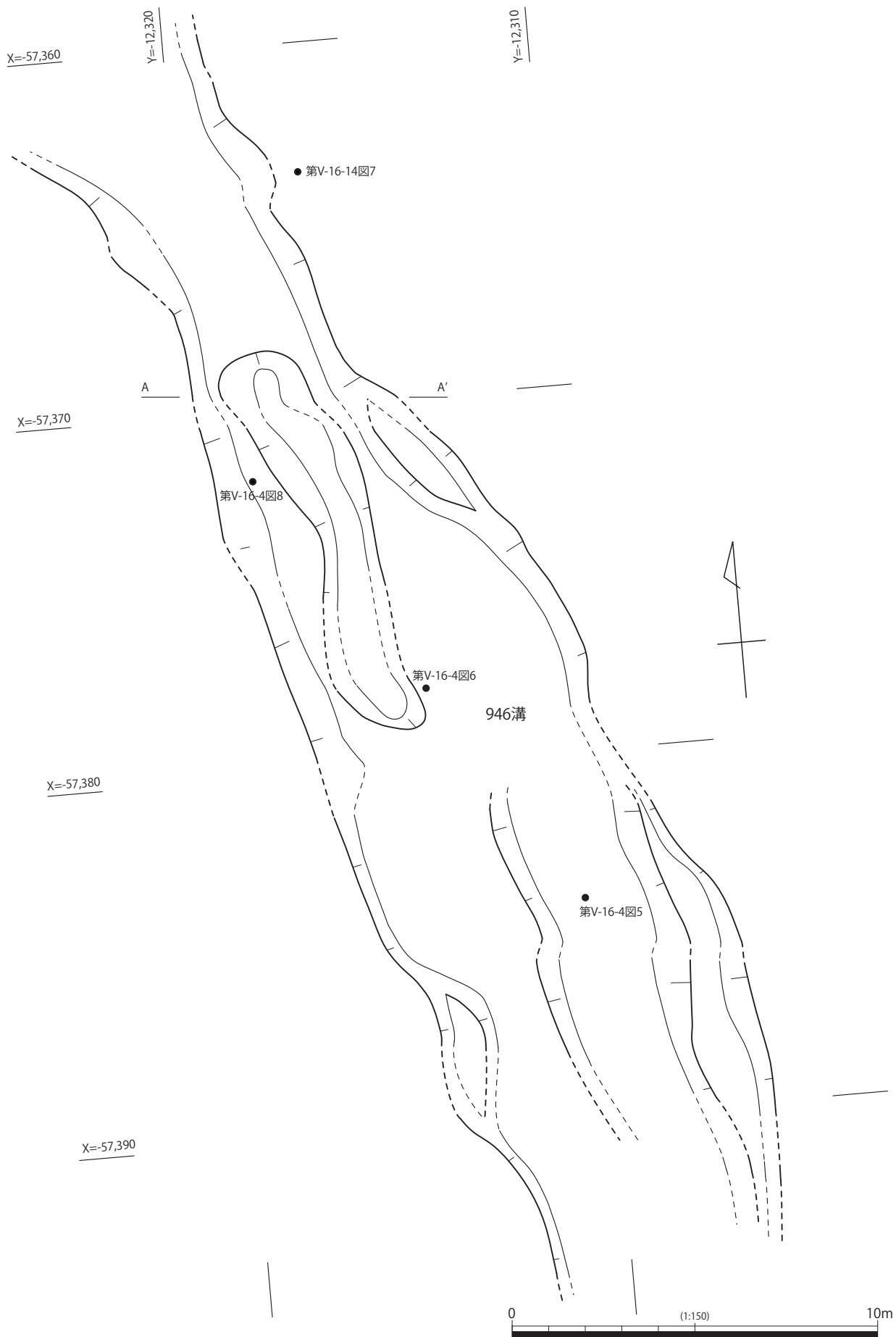
調査地北端、Y=-12,305～324 ライン、X=-57,286～360 ラインにある。南方向へ約 37.5 m 延びる。南側は 710 溝に切られて、失われている。連続はしないが、両岸に平坦な面がある。また、中央部分に一段低くなる部分がある。溝の幅には広狭がある。最大で幅 9 m、狭いところで 3.8 m、深さは 2.5 m ほどである。また、底面中央部にある一段深い部分の深さは 0.35 m である。

溝内を埋める土は、粘性の強い粘土～シルトで、砂の堆積はない。粘土ブロックも含まれているが、埋め戻したような状況ではなかった〔第IV-8-27 図〕。埋土中、特に底面中央部の一段低い部分の周囲や、埋土の最上層から、縄文時代晩期の土器が出土している〔第 V-16-4 図 1～7〕。埋土最上層から出土してる第 V-16-4 図 7 は篠原式中段階の深鉢である。

1 5G6/1緑灰色シルト～粘土 (1.0cm大のN6/O灰色粘土ブロックを含む)



第IV-8-25 図 934 溝平・断面



第IV-8-26 図 946 溝平面



第IV-8-27 図 946 溝土層断面

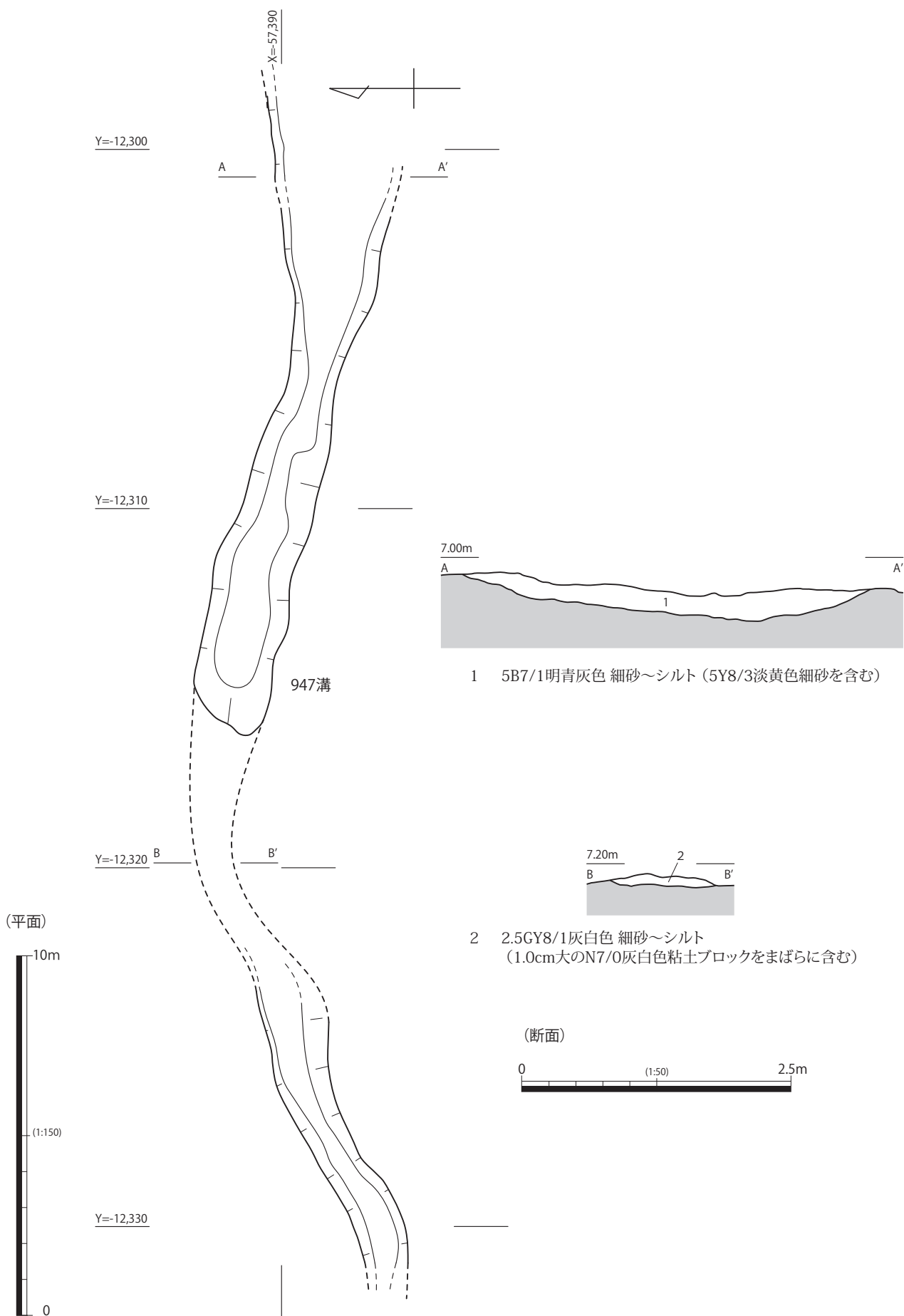
なお、この溝の検出面で、弥生時代中期中葉の土器〔第 V-16-4 図 8〕が出土している。これは、当遺構が第 3-2a 層下面の 900 溝と重なっており、その埋土の一部が掘り残しの状態にあったことによるもので、溝の埋没時期を示す土器片はいずれも、これより深いところから出土している。

947 溝〔第IV-8-28 図 第 2 分冊図版 192-1〕

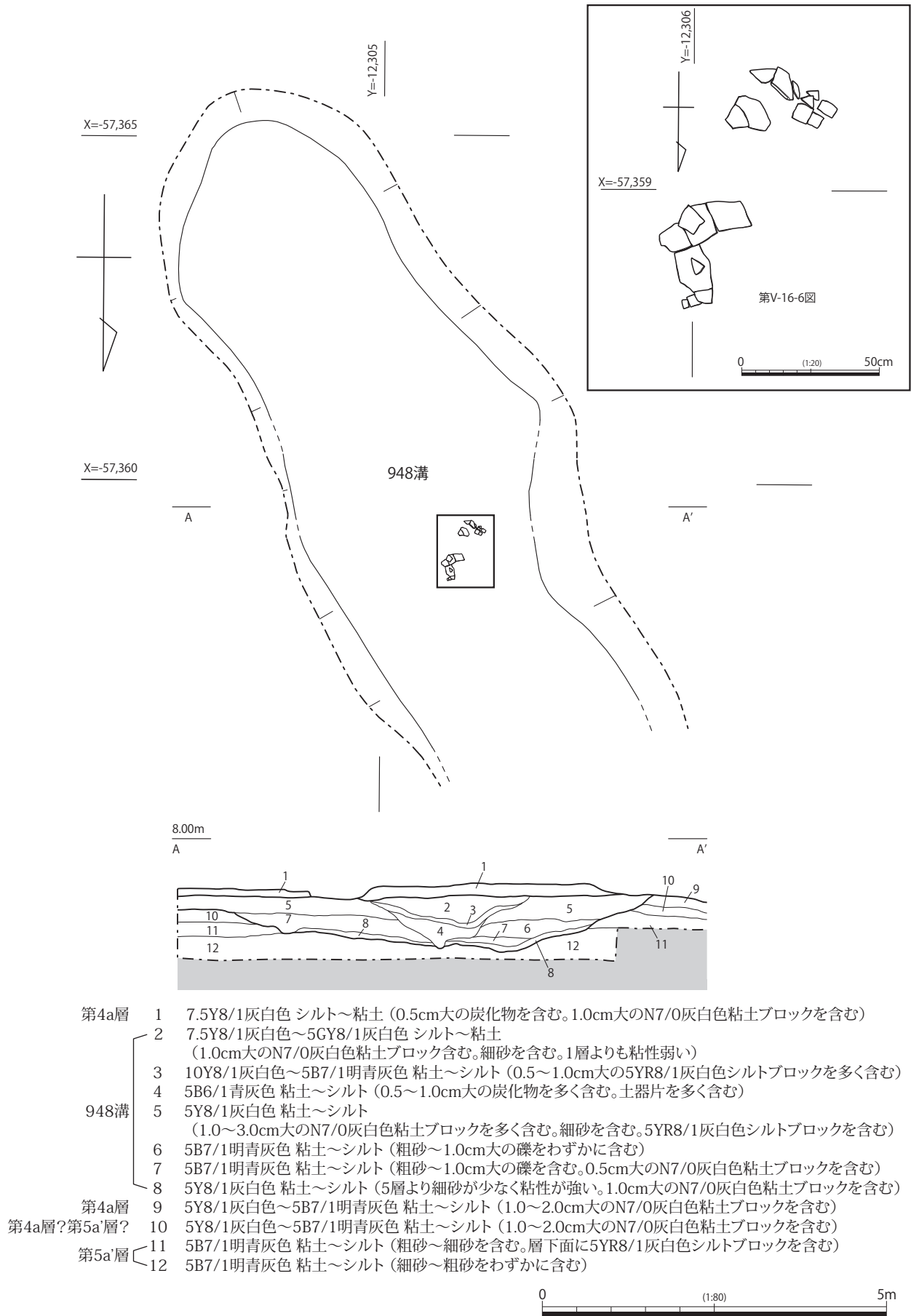
調査区の北側、ほぼ X=-57,390、Y=-12,330 ライン付近にあり、東西方向に細長く伸びる溝である。上部は削られており、全てが一連の溝として連続しない。東端は 710 溝の埋土上層を切っている〔第 IV-8-4 図〕。調査時には、重複する部分で、710 溝と共に掘り下げをしてしまい、平面的に検出を行うことができなかった。検出できたのは、長さ 34 m、幅 1.4～3.8 m、深さ 0.25～0.3 m である。Y=-12,320 ライン以西については、溝が浅く不明瞭な部分もあるが、溝の伸びる方向から同一のものと考えた。また、溝の東側では幅が広く、西側では狭いが、これは、溝の検出が困難だったために、西側ほど深く掘削したことによる。埋土は 1 層で、堆積にラミナは認められなかった。

948 溝〔第IV-8-29 図 第 2 分冊図版 193-2・194-1〕

調査地の北側、X=-57,360、Y=-12,305 ラインにある。南東方向へのびる溝の一部である。調査中には、この場所に設定した土層断面に、何らかの遺構が存在するとみられる堆積を認識していたが、平面的に遺構の堀方を検出することが困難で、上面をかなり削り込んだ状態で、溝の堀方を確定できた。検出した規模は、長さ 9.6 m、幅 3.5～4 m、深さ 0.7 m であるが、本来の幅は 6.8 m、深さ 0.8 m 程度である。土層断面には、溝を再掘削したものとみられる堀方と埋土 2～4 層が観察できるが、これも平面的には検出できなかった。埋土には、砂や粘土ブロックを含む粘土～シルトが堆積していた。埋土 4 層から大型の突帯文土器の深鉢〔第 V-16-6 図〕、1 個体分の破片が出土している。



第IV-8-28図 947 溝平・断面



- | | | |
|------------|----|--|
| 第4a層 | 1 | 7.5Y8/1灰白色シルト～粘土 (0.5cm大の炭化物を含む。1.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを含む) |
| 948溝 | 2 | 7.5Y8/1灰白色～5GY8/1灰白色シルト～粘土 (1.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロック含む。細砂を含む。1層よりも粘性弱い) |
| | 3 | 10Y8/1灰白色～5B7/1明青灰色粘土～シルト (0.5～1.0cm大の5YR8/1灰白色シルトブロックを多く含む) |
| | 4 | 5B6/1青灰色粘土～シルト (0.5～1.0cm大の炭化物を多く含む。土器片を多く含む) |
| | 5 | 5Y8/1灰白色粘土～シルト (1.0～3.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを多く含む。細砂を含む。5YR8/1灰白色シルトブロックを含む) |
| 第4a層 | 6 | 5B7/1明青灰色粘土～シルト (粗砂～1.0cm大の礫をわずかに含む) |
| | 7 | 5B7/1明青灰色粘土～シルト (粗砂～1.0cm大の礫を含む。0.5cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを含む) |
| 第4a層 | 8 | 5Y8/1灰白色粘土～シルト (5層より細砂が少なく粘性が強い。1.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを含む) |
| 第4a層?第5a層? | 9 | 5Y8/1灰白色～5B7/1明青灰色粘土～シルト (1.0～2.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを含む) |
| 第5a層 | 10 | 5Y8/1灰白色～5B7/1明青灰色粘土～シルト (1.0～2.0cm大のN7/0灰白色粘土ブロックを含む) |
| | 11 | 5B7/1明青灰色粘土～シルト (粗砂～細砂を含む。層下面に5YR8/1灰白色シルトブロックを含む) |
| | 12 | 5B7/1明青灰色粘土～シルト (細砂～粗砂をわずかに含む) |

第IV-8-29 図 948 溝平・断面

第2項 土坑など

423 土坑〔第IV-8-30 図 第2分冊図版 194-2〕

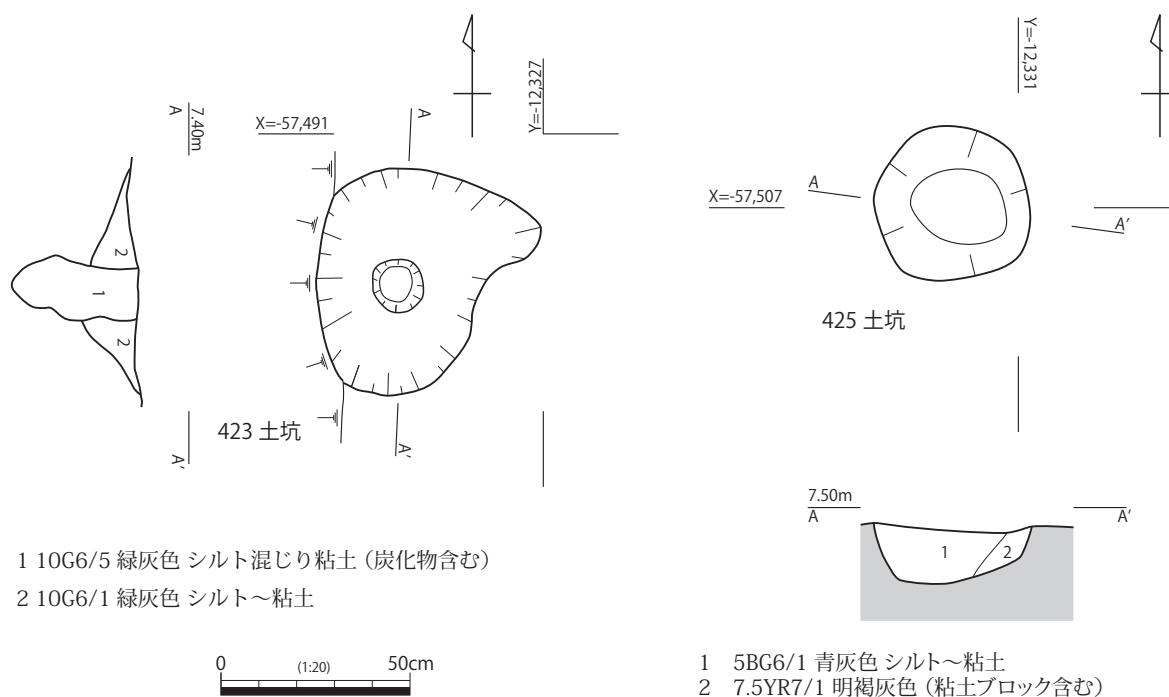
調査区の南側、5D-10d 区、X=-57,491、Y=-12,327 ライン付近にある。楕円形を呈し、長軸 0.6 m、短軸 0.45 m ほどである。断面は 2 段堀になっており、1 段目の深さは 0.15 m、2 段目は土坑のほぼ中央にあり、深さはさらに 0.2 m ほどある。堆積状況を見ると、柱穴のようにも考えられるが、周辺に、これと組み合い、建物跡となりそうな遺構は見当たらない。

425・426・427 土坑〔第IV-8-30・31 図 第2分冊図版 194-3・196-1〕

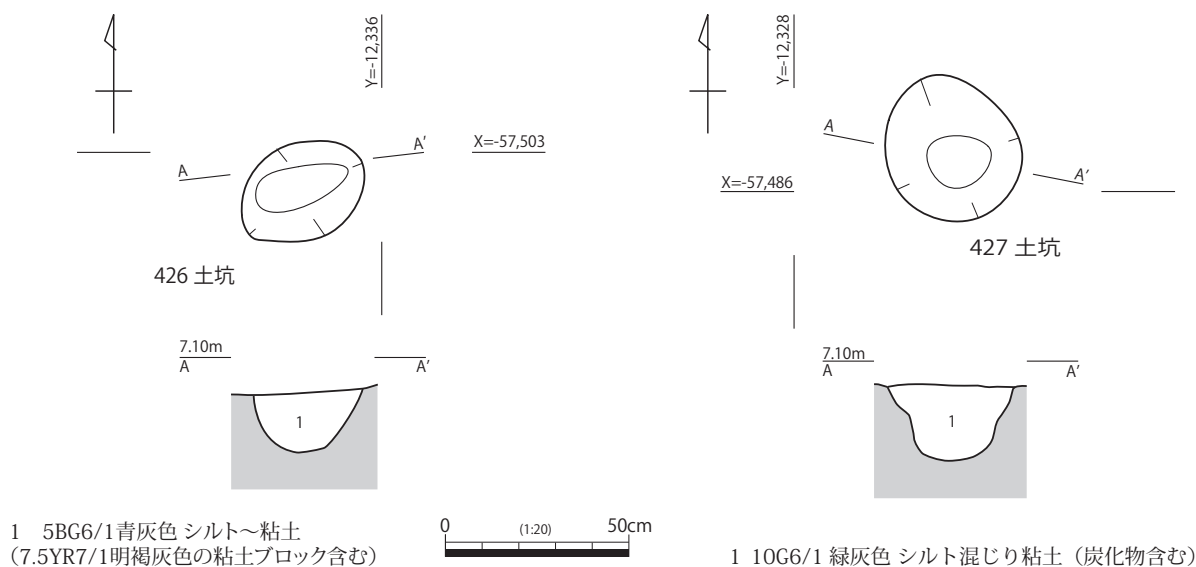
調査区の南側にある。425 土坑は 6D-1e 区、X=-57,507、Y=-12,331 ラインにある。円形の土坑で、規模は 0.4 m、深さは 0.15 m である。426 土坑は 6D-1e 区、X=-57,503、y=-12,336 ラインにある。楕円形を呈し、長軸 0.37 m、短軸 0.27 m である。427 土坑は 5D-9c 区、X=-57,486、Y=-12,328 ラインにある。楕円形を呈し、長軸 0.5 m、短軸 0.45 m である。

433 土器集積・435 土坑〔第IV-8-32 図 第2分冊図版 195・196-2・3〕

調査区の南側、6D-4c 区、X=-57,538.5、Y=-12,329 ラインにある。433 土器集積としたのは、縄文時代晩期のものとみられる深鉢〔第 V-16-8 図〕が、径約 0.3 m の範囲でまとまって出土したもので、435 土坑のすぐ西側に一個体分の土器片が群在していた。435 土坑は不定な円形を呈すとみられる浅い土坑である。433 土器集積よりも、0.1 m ほど掘り下げたところで掘方を確認した。南側がトレンチで掘削されている。円形とするならば、直径 0.85 m、深さ 0.1 m である。433 土器集積と一連のものである可能性が高く、本来の検出面は、土器と同じ高さになるだろう。



第IV-8-30 図 423・425 土坑平・断面



第IV-8-31 図 426・427 土坑平・断面

437 土坑 [第IV-8-33 図]

調査区中央近く、5D-9d 区、X=-57,487、Y=-12,336.5 ラインにある。楕円形を呈し、規模は長軸 0.38 m、短軸 0.3 m、深さ 0.1 m である。

438 土坑 [第IV-8-34 図 第2分冊図版 197-1]

調査区中央近く、5D-8d 区、X=-57,480、Y=-12,338 ライン付近にある。西側と南側が土層観察用トレンチや、排水用の溝により失われており、全形は不明である。東西方向に 2.8 m、南北方向短軸 2.2 m が残存しており、本来は大きな土坑であったとみられる。ただし、深さは 0.5 m と浅い。大型の土坑にもかかわらず、遺物は出土していない。

930 土坑 [第IV-8-33 図 第2分冊図版 197-2・3]

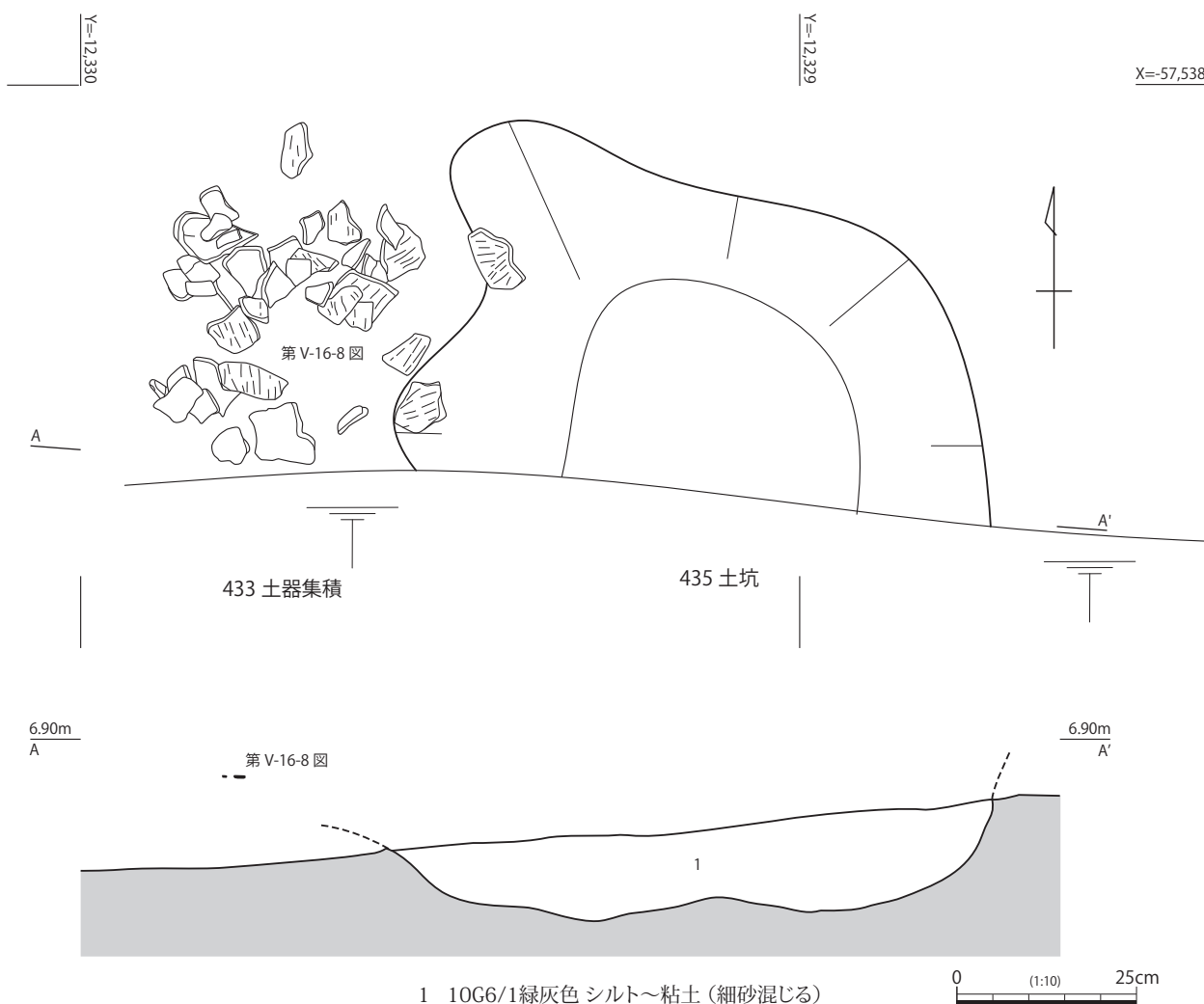
調査区の北側、4D-8b 区、X=-57,377、Y=-12,316 ラインにある。946 溝の埋没後に生じた土坑で、不定な楕円形、ないし隅の丸い三角形を呈す。規模は、長軸 3.6 m、短軸 3.1 m、深さ 0.4 ~ 0.5 m である。埋土にはブロック土や炭化物が含まれており、埋め戻しによるものかもしれない。

935 土坑 [第IV-8-35 図]

調査区中央近く、5D-6c 区、X=-57,455、Y=-12,330.5 ラインにある。楕円形の土坑で、長軸 0.52 m、短軸 0.35 m、深さ 6 cm である。

936・940 土坑 [第IV-8-36 図]

調査区中央、5D-6d 区、X=-57,460、Y=-12,333 ライン付近にある。940 土坑が埋没後、940 土坑の南寄りに 936 土坑が掘削されていた。936 土坑は、長軸 0.6 m、短軸 0.45 m、深さ 5 cm、東西に長い土坑である。940 土坑は長軸 2.5m、短軸 1 m、深さ 5 cm、南北方向に長い楕円形を呈す。



第IV-8-32図 433 土器集積 435 土坑平・断面

943・944 ピット〔第IV-8-35図 第2分冊図版198-1・2〕

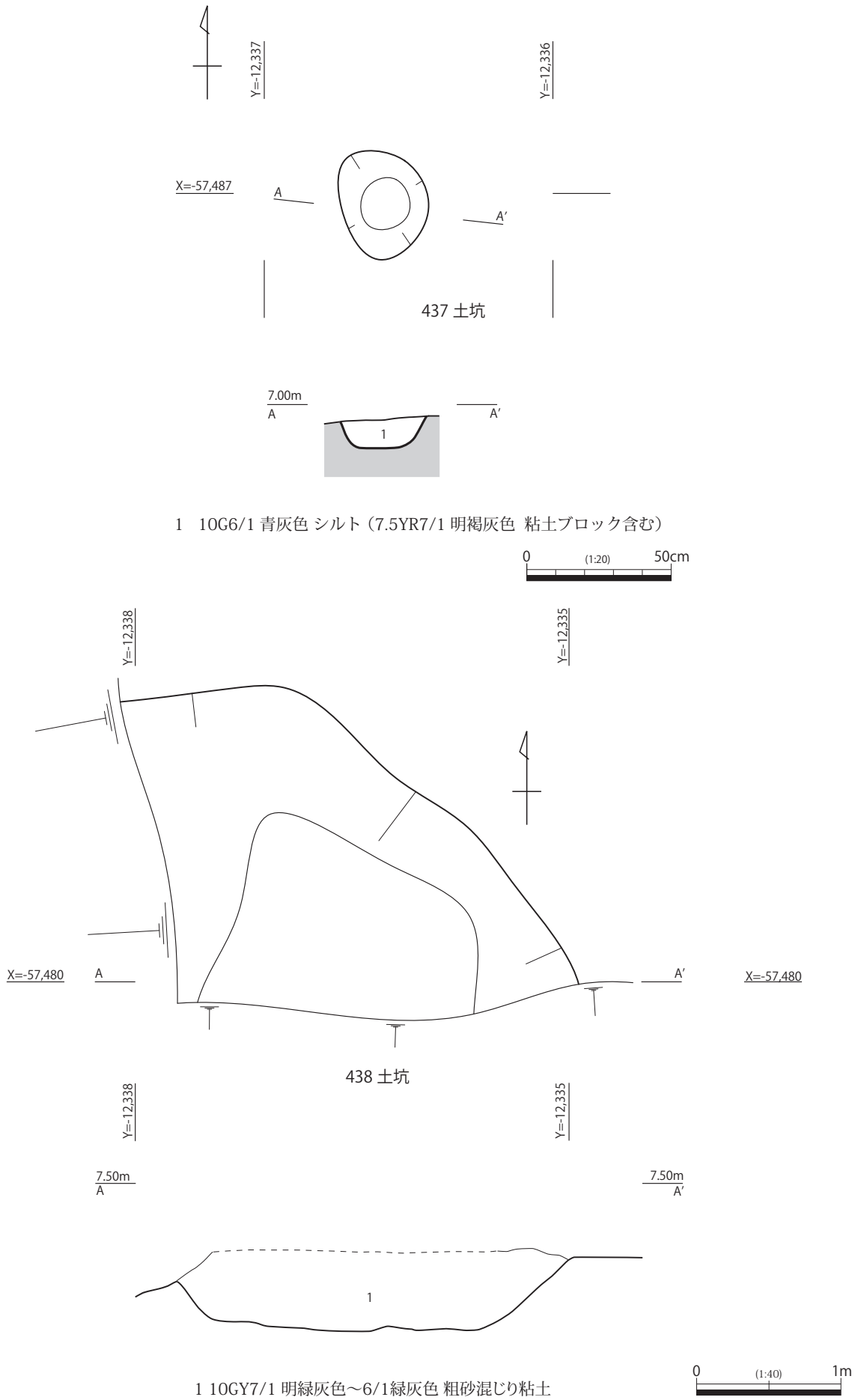
いずれも調査区北、5D-4b区に位置する。径0.3～0.4m、深さ8cmほどの円形のピットである。柱穴などの配置にはならない。

第3項 その他

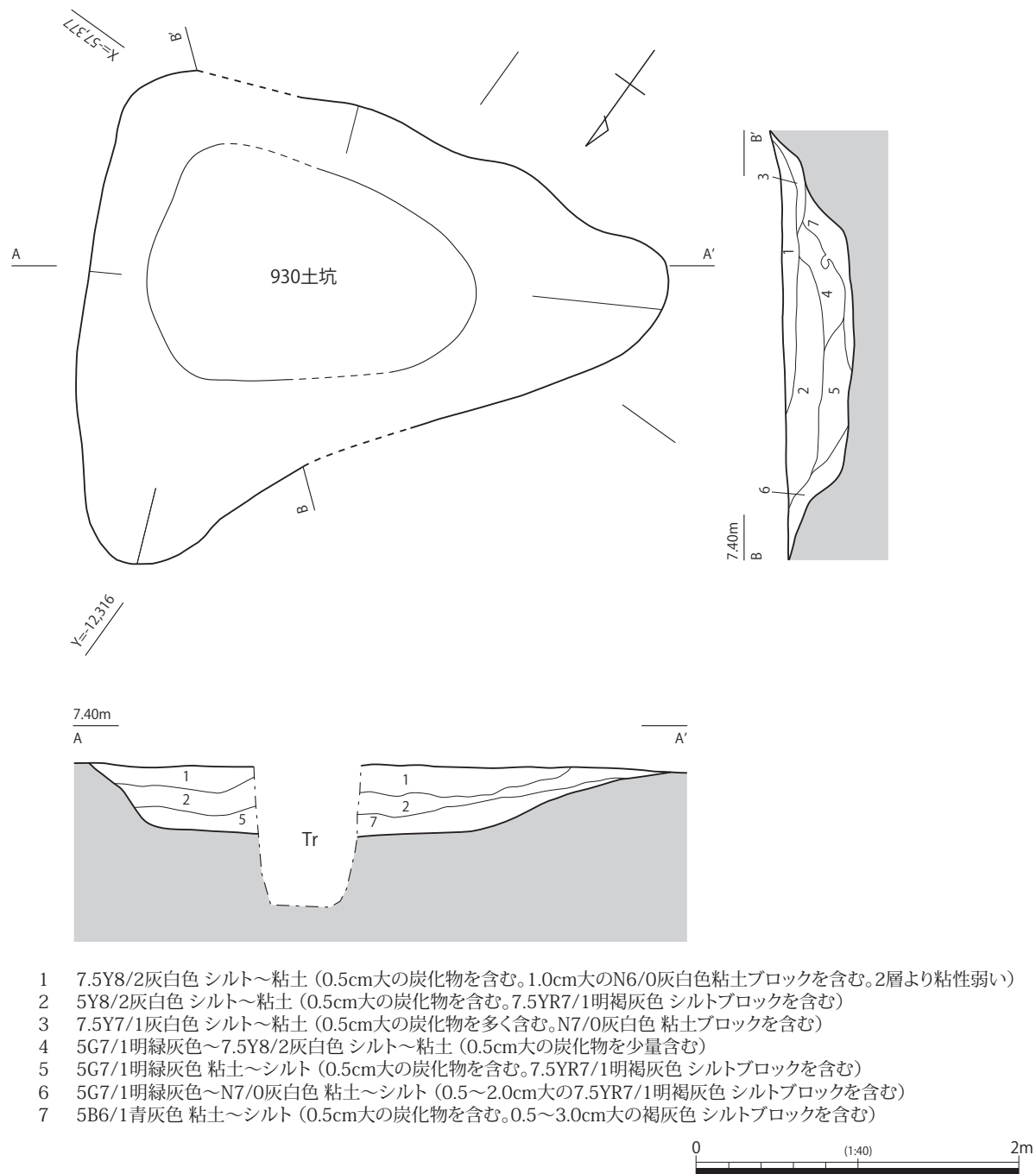
429・430・431・432 炭化物集中〔第IV-8-1図 第2分冊図版198-3・199-1〕

調査区南、6D-1c・1d・2c・2d区に分布している。第4a層下面に、数mmから5cm大の炭化物が集中する箇所があり、それぞれ一定のまとまりに遺構番号を附した。それぞれの炭化物の集中範囲は近接している。

最も広い範囲に広がっているのは432炭化物集中で、東西に4m、南北に2mの不整形な楕円形を呈している。一方、最も範囲が狭いのが、431炭化物集中である。堀方といえるほど、縁部は明瞭ではなかったが、土坑の可能性もあるので、サブトレンチを設定し、断面の観察を行った。しかし、いずれも遺構の埋土といえるものではなく、堀方を断面で確認することはできなかった。



第IV-8-33 図 437・438 土坑平・断面

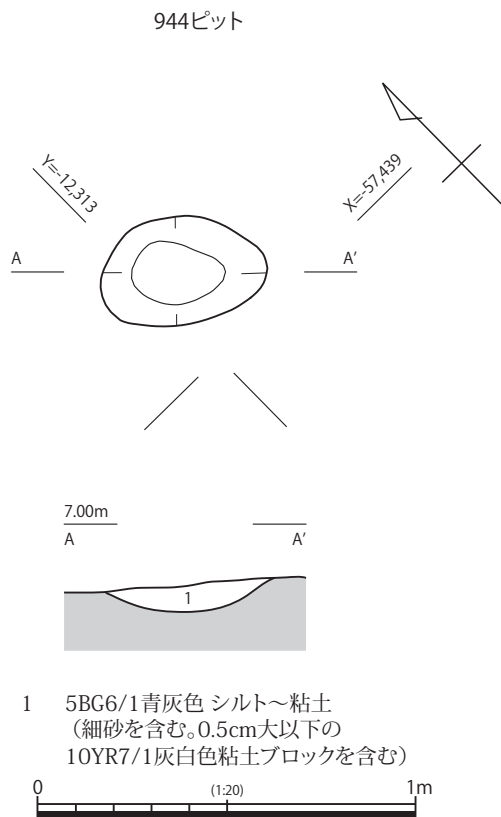
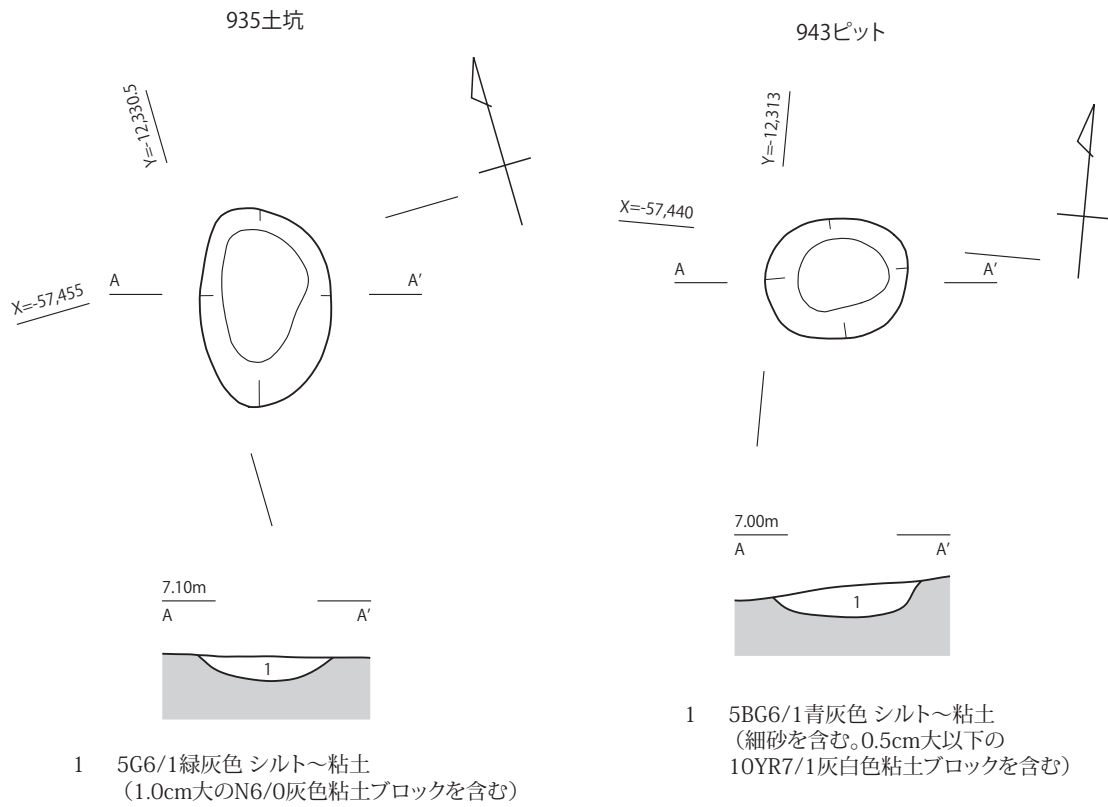


第IV-8-34 図 930 土坑平・断面

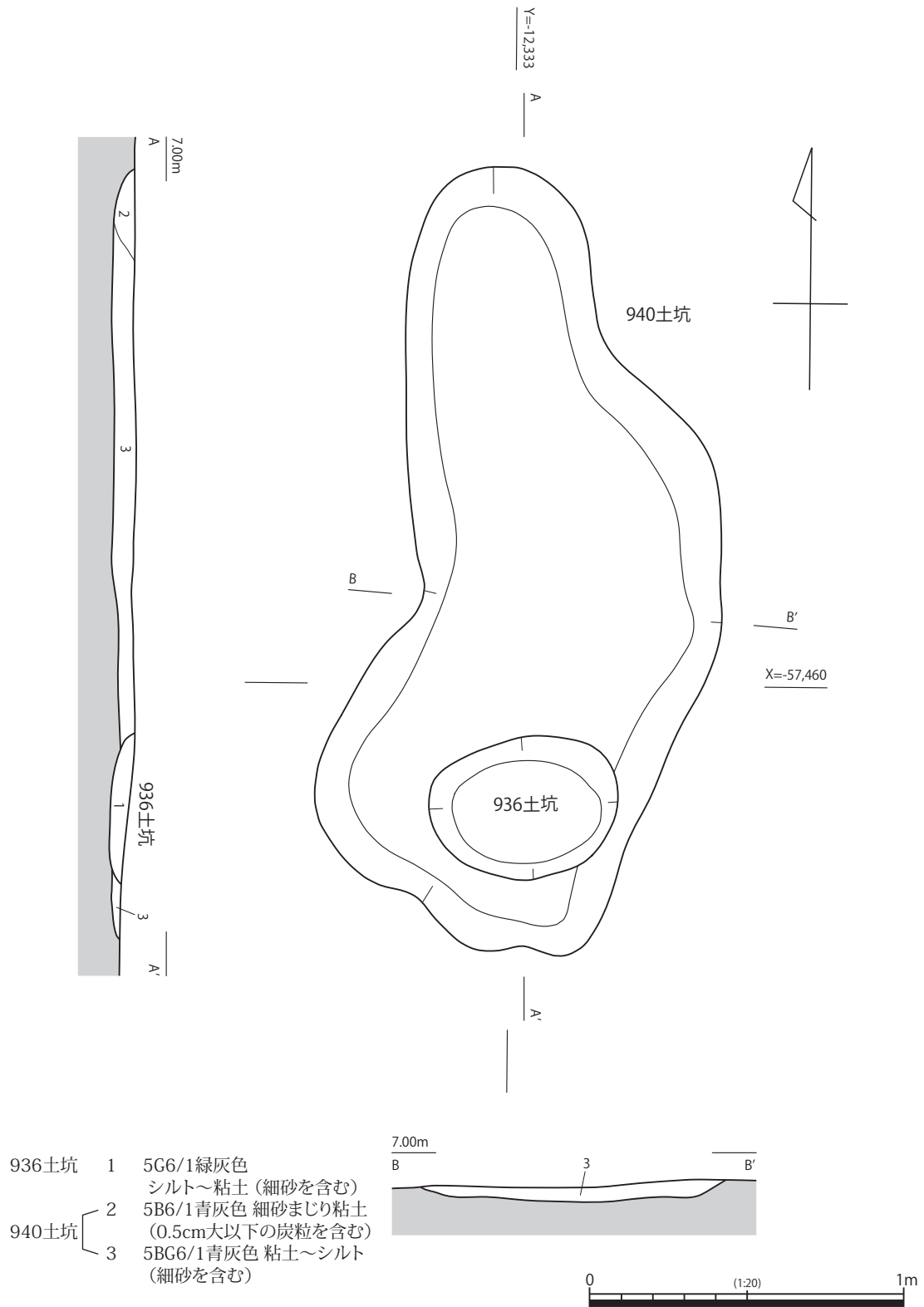
945 炭化物集中〔第IV-8-1 図 第2分冊図版199-2〕

調査地中央、5D-4b・5b区に位置する。429～432炭化物集中が分布する場所よりも約60m北側にある。429～432炭化物集中と同じように数mmから5cm大の炭化物が含まれており、南北2.4m、東西1.2mの範囲に広がりがみられた。ただし、他に炭化物の広がりは認められなかった。

土坑の可能性を考え、サブトレンチをいれて断面形状を観察したが、土坑の堀方といえるものを確認することはできなかった。



第IV-8-35 図 935・943・944 ピット平・断面



第IV-8-36 図 936・940 土坑平・断面

報告書抄録

ふりがな	もとだかゆみのきいせき（ごく）いち							
書名	本高弓ノ木遺跡（5区）I							
副書名	一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	濱田竜彦、下江健太、中尾智行、奥原このみ、高尾浩司、山梨千晶、藤尾慎一郎、坂本稔、佐々木由香、中沢道彦、辻本裕也、三ツ井誠一郎、株式会社パレオ・ラボ（AMS年代測定グループ）、株式会社古環境研究所、株式会社パリオ・サーヴェイ							
発行年月日	西暦2013年（平成25年）3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
もとだかゆみのきいせきごく 本高弓ノ木遺跡（5区）	とっとりしもとだか 鳥取市本高 218-1、218- 2、219-1～3、 220-1・2、221- 1・2、222-1～ 5、224-1・2、 225-1～3	31201	3-0388	35°28'55"	134°11'51"	20210501 ～ 20220305 20220426 ～ 20230224	7,350㎡	国道9号線 （鳥取西道路） 道路改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
本高弓ノ木遺跡（5区）	集落跡、 生産遺跡	縄文時代後・ 晩期、弥生時 代前期～終末 期、古墳時代 前・後期、古 代、中世		河川跡、溝 土坑 水田跡		土器 （縄文土器、弥 生土器、土師器） 木製品		木材の集積（弥生時 代開始期）、四隅突 出型の盛土（弥生時 代後期）水利施設（古 墳時代前期）
要約	<p>本高弓ノ木遺跡（5区）の発掘調査では、縄文時代から弥生時代、弥生時代から古墳時代の移行期の重要な遺構や遺物を多数発見した。弥生時代開始期に調査区内に流れ込んでいた河川（710溝）は埋没の過程で、木材の集積に利用されており、突帯文土器とともに鳥取県東部地域で最古相の遠賀川式土器が出土している。また、突帯文土器の器面には、イネ科栽培植物の種実の圧痕を伴うものが多く認められた。また、古墳時代前期には、調査区を縦走するように大型の溝（2溝）が掘削され、それに伴う池状の落ち込み（4落ち込み）には、木製の構造物が構築されていた。池状の落ち込みと2溝の接続部には、水の流れを遮るように土堤が築かれており、周辺で利用する水を管理、調整するための水利施設と考えられた。水利施設からは、本高弓ノ木遺跡の南側の丘陵上に築かれた古墳時代前期の前方後円墳（本高14号墳）の築造と同時期の土器が出土している。その他、弥生時代中期後葉から終末期の遺構・遺物、古代の水田跡等を検出した。</p>							

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

鳥取県鳥取市

本高弓ノ木遺跡（5区）Ⅰ
第1分冊【遺構調査（本文）編】

発行 平成25年3月29日
編集 財団法人 鳥取県教育文化財団
発行者 鳥取県教育委員会
〒680-8570 鳥取県鳥取市1丁目271番地
電話 (0857) 26-7525
印刷 勝美印刷株式会社
